プラトニクス

coach

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
プラトニクス

【Ｎコード】
Ｎ３３０９Ｆ

【作者名】
ｃｏａｃｈ

【あらすじ】
中学三年生の男の子・怜と、その恋人・環の日常を描いたラブ・ストーリー。ただし、ご注意ください。ラブ・ストーリーではありますが、この物語のヒロイン（ズ）は、難病に侵されたり、記憶を失ったり、身ごもったり、兄に道ならぬ恋心を抱いたり、異世界出身だったりはしません。つまり、非日常的な要素はほぼゼロです。
それでも良いという方だけお読みください。

第1話：桜の蕾の綻ぶころ、曇天の下、家路の二人

「ここではないどこかへ」

夕方の曇り空から降りてきたのは、そんなフレーズだった。

流行（はやり）の歌でもなく、古い詩でもなく、ドラマのセリフでもない。

どこかで聞いたことがあるような、初めて思いついたような。

今のこの気持ちを、このざわめきを、この違和感を、ピタリと表現してくれる言葉。

いや、違う。気持ちを言葉が表現してくれるんじゃない。言葉が気持ちを創造するんだ。言葉が表したものが、そのまま今の気持ちになる。

晦冥（かいめい）の宇宙に光を与えたその言葉は安らぎとともに不安をもたらした。光が差さなければ、宇宙もその暗さを知らなかったのだ。闇に一筋、射したもの。突如現れたその明るさ、その温かさは、どんなにか心惹かれるものであることだろう。しかし、限りない怖れを抱かせるものであった。今は一筋のその光が、いずれは暗黒の全てを真白（ましろ）に染め抜いていくだろう。闇が光に変質するのだ。

創造はなされた。その言葉を消すことは、もうできない。

ここではないどこかへ――

頭の中に浮かんだその句を何度か繰り返していたとき、

「怜（レイ）くん」

と、後ろから軽やかな声がかけられた。怜は、町の公立図書館の自動ドアを抜け、何歩か歩を進めたところだった。振り向いた彼の目に、同じように自動ドアを抜けて歩み寄ってくる一人の少女が映る。怜と同じくらいの年の、十四、五歳の少女。白のシフォンのワンピースをそよ風にふわりと舞わせた、黒髪のショートボブの彼女は、まるで曇り空から舞い降りた天使かと思われた。不覚である。思っているだけではなく、それをつい口に出してしまった。

「ありがとう」

少女は大げさな賛辞に驚くでもなく、しかし嬉しそうな様子でそれを受け入れると、怜の顔を覗き込むようにした。
「なに？」と怜。
「何か良いことがあったのかなってね」
「良いことがなくちゃ、カノジョを褒めちゃいけないって？」
「そんな決まりはないけどね。でも、その通りなんでしょう？」
怜は憮然とした顔で黙って歩き出した。彼女もその横に並ぶ。しばらく無言のまま歩いたあと、少女が沈黙を破った。
「図書館へは本を？」
借りに来たのか、と訊いてきた。怜は首を横に振った。
「春休みの宿題の残り。どうにか終わった」
「どうにかって量だった？」
二人が通う中学校では、長期休暇中の宿題はあまり出されない。
「オレにとってはね。環（タマキ）は？」
「わたしは本を返しに来て、少しゆっくりしてた」
「何か借りたの？」
「漢詩集。美しい詞（ことば）がときどき無性に読みたくなる時があるの。そういう時ってない？」
「あるね。カノジョにいらいらした時とか」
「カレシに冷たくされた時とかね」
そう言うと、環は笑った。怜はその横顔を見ていた。まっすぐに前を見る瞳にさやかな光がある。
綺麗な子だな。
素直にそう思う。
付き合い出したのは、三ヶ月くらい前のことである。中二の一月。冬休み。寒がりな怜は、身を切るような冬の風に震えながら、コンビニから出てきた。そこで偶然出会った彼女から、付き合って欲しいと突然に告白されたのである。
彼女、川名環のことは、もちろん知っていた。同じクラスのクラスメートである。成績優秀、容姿端麗な才媛というのが、怜の評価

だった。そして、それはクラスの男子の、いやクラスばかりでなく当時の二年生の男子の総意でもあった。顔を合わせれば挨拶くらいはするが、親しく話したりなどしたことのない女の子からの突然の告白に、戸惑ったが、怜は告白を受け入れた。

特に断る理由がなかった。好きだというわけではない。が、嫌いではなかった。それでも良ければ、ということははっきりと言っておいた。そういう物言いが、自分勝手なもので彼女の気持ちを考えていない行為であるのは承知の上だった。別に正直を美徳だと考えているわけではない。ただ、彼女に対してはそれがフェアであるような気がしたのだ。環がそれを聞いてどう思ったのかは分からない。気分を害していないことを祈るだけだったが、害していたとしてもどうしようもないことである。

「もうすぐ咲きそうだね」

歩道に沿って整然と並ぶ桜の木の末にある小さな蕾に目を向けた少女が言う。

「わたし、桜は咲く前が一番好きだな。咲いたらあとは散るのを待つだけだもの」

いつ散るか心配しながら花を見ても落ち着かない、と彼女は続けた。

「だからあんまりお花見とか自分からは行かないんだ。誘われたらしぶしぶ行くくらい」

「オレは散り際の方が好きかな。花びらが舞うのを見てると、まるで『来年の再会まで忘れないで』って、別れを惜しんでくれてるように見えるから」

環は微笑んだようだった。怜はその微笑に対して何も訊かなかった。おかしな人だと思われたのか、似合わないロマンチストだと思われたのか。どう思われようとどうでもいい。自分の言葉が人にどう思われるか考えてから言わなければいけないとしたら、窮屈なことである。

「『散るからますます桜は素晴らしい』って歌った歌人がいたけど、

そういう感じ方とも違うね」
　環が静かに言った。
「散るからますます素晴らしい、なんておかしなこと言うよな」
　怜が感想を述べた。
「だって、散らない桜なんて無いんだから、散るからますますなんて話にはならないよ」
　また、環の口元がほころんだ。ほころんだがそれだけで、怜の言葉に対して、同意も反論も示さない。彼女には自己の主張というものが無いように怜には思えた。そのことを悪いとは思わない。むしろ、その逆である。声高に自己主張して人の意見を容れないような人間は醜い。そう思う。環に自己主張がないように思えるのは、彼女の中に芯が無いからではなく、しっかりとした芯があるからではないだろうか。芯があるからこそ、特に自己を主張することなく誰の意見でも受け容れられるだけの強さがあるのではないかと怜は感じていた。
「日向（ヒナタ）にね、レイくんと一緒に歩いているとき、何を話してるのか訊かれて、こういうこと話してるって言ったら変な顔されちゃった」
「じゃあ、倉木は賢（ケン）と何話してるの？」
「さあ、昨日のドラマの話とか、好きなバンドの話とか、次のデートの話とか、定期試験の話とか、友だちの噂話とか、じゃないかな」
　怜は、昨日のバラエティ番組の話を始めた。環はくすっと笑った。
「やっぱり、今日は、レイくん、良いことがあったみたいね」
　怜は歩きながら少しの間だけ目をつぶると、目を開き先ほど思い浮かんだフレーズのことを彼女に話した。別に隠しておくことでもない。環は何度かそのフレーズを口ずさむと、
「ね、レイくん。そのどこかにわたしも連れてってくれる？」
　そう言って立ち止まり、そのほっそりとした手を怜に差し出した。怜も立ち止まると、環の顔をじっと見つめた。彼女は微笑んでいる。その微笑にはどこか挑戦的な光があるように見えた。怜の手は、彼女の手を掴むことはなかった。彼の手は代わりに、持っていた傘を

差した。曇天からはらはらと雨が降り出してきていた。黒い飾り気のない傘が二人の上に広がった。環は差し出した手を引っ込めると、怜の傍に寄った。

「用意がいいね」

「親に持たされたんだよ。いつまで子ども扱いするつもりなのか」

「レイくんのお母さんに感謝するわ」

環は傘を差す怜の腕に、自分の腕を軽くからませた。あまりに自然なその所作に、彼女がそうするのが当たり前のように感じるのが怜には不思議だった。

細かな春雨の下に咲く傘の花の一つになって、二人はまた無言のまま歩いた。

「送ってくれて、ありがとう」

二階建ての瀟洒な家の前で、環が礼を言った。

「ちょっと雨宿りしていく？」

環の誘いを怜は、もう遅いから、と言って断った。

「じゃあ、またね。明日は始業式だね。三年生でもまた同じクラスになれるといいね」

そう言って、環は傘の下から離れた。そのまま、玄関まで縁石を渡って行き、玄関で手を振ってよこした。それに軽く答えた怜は家への帰路を取った。

雨はもうやみそうだった。

第2話：新学年の始まり、不愉快な家族、愉快な友だち

理想の家族像。それは、家族のそれぞれがそれぞれのことを、愛し、敬い、尊重する対等の存在であることだ。しかし、それははかない理想にすぎない。普通は、家族内に厳然とした階層制度（ヒエラルキー）が存在する。

例えば、一位父、二位母、三位兄、四位弟。

例えば、一位母、二位娘、三位イヌ、四位父、など。

怜の家では、一位母、二位父、三位妹、四位怜、という順番だった。近頃、二位と三位が入れ替わりそうな気配があるが。何にしろ、怜自身とは関係ない。これからも、この最下層の位置に甘んじることになるだろう。一発逆転の秘策はある。反抗期を利用することだ。部屋に入られたり、成績のことを言われたり、着るものの指図を受けたり、漫画を捨てられたりしたときに、近所中に聞こえるほどの大声で母と父をののしり、家の壁を蹴りつける。そんなことをすれば、階層秩序も動揺するはずである。一気に一位に浮上できるかもしれない。しかし、怜は家庭内ランキングを引き上げるためにそんなことをする気はなかった。四位でも一向に構わない。この位置のおかげでたまにイラっとする時もあるが、なに、そんないらいらくらい耐えられないでは男がすたるというものである。

「都（ミヤコ）、お兄ちゃんと一緒に登校したら？」

「やめてよ、お母さん。この年でお兄ちゃんなんかと登校してたら、クラスのみんなに笑われちゃう」

それはこちらのセリフだ、と怜は思ったが黙っておいた。何しろ三位である。

「いいじゃない、妹想いの兄と兄を慕う妹が仲良く登校する。理想の兄妹でしょう？」

妹はゲェっと吐く真似をすると、

「お母さん、その話は今日でお終いにしてね。行ってきます」

そう言って、玄関のドアを開け、朝の光の中に妹の都は出て行った。一つ違いの妹は今日から中学二年生になる。妹が可愛かったのはいつ頃までだろうか。お兄ちゃん、お兄ちゃんと後をついて回ってきた記憶がかすかに残っている。あれは、小学校低学年、幼稚園……。そのくらいの時までは可愛かったが、今は可愛さのカケラもない。兄をからかいの対象くらいにしか考えていないのである。別に妹と仲良くしたいわけではない。ただ、確かに可愛いと感じていたものが、今はそう感じなくなっている。変わらないものが滅多にないという卑近な例であった。

　怜は朝食を食べ終わると、ダイニングテーブルを立った。行って来ます、とテーブルについていた父に声をかける。四十代後半――確か、四十六だった――の父は新聞を読みながら、ぞんざいに気をつけてな、と声をかけてきた。父とは近頃、ほとんど言葉を交わさない。この年になれば、父と語り合うことなどないのだ。それはあちらも同じことだろう。怜が目に入るところにいるとどこか様子がぎこちない。家族のために外で気を張り、しかも家で息子に気を遣わせていて申し訳ないくらいであるが、どうにもできることでもない。時が解決してくれるだろうことを期待するだけである。

　玄関で靴を履いているときに母に呼び止められた。今日は昨日と違い晴天である。傘の必要はないはずだ。

「ハンカチ持ったの？」

　怜は、持ったよと我慢強く答えた。一体、いつまで出がけにハンカチの確認をされるのだろうか。

「ティッシュは？」

　そんなに心配なら学校にティッシュを十箱分くらい今日持ってくよ、と言ってやろうかとも思ったが、やめておいた。何しろ、一位である。怜が、うんとうなずくと、

「怜、今日、あなたが学校から帰ってからお話があります」

　と神妙な面持ちで母が言った。

「今じゃダメなの？」

問題を先伸ばしにしたくない。今、聞ける話なら今聞いておきたい。対処はできなくても、気を鎮めたり、それに関して考えたりならできる。

「帰ってからと言ったはずです」

どうも嫌な予感がする。母の口調が丁寧になるときは、ロクな話ではないことは経験上分かっていた。とはいえ、今はどうしようもない。

母の見送りの挨拶を背に受け、怜は外に出た。昨日とは打って変わった青天だった。新学期にふさわしい朝だ。

怜の家から、通っている中学校までに行き着くにはいくつかのルートがあって、その一つのルート上に環の家がある。怜は『カノジョの家経由ルート』を通った。一緒に登校する約束をしているわけではない。そのくらいのこととしても構わないが、環は「一緒に登校しましょう」と誘うことはなかった。こちらから言い出すようなことでもない。もちろん、たまたま一緒になることはあったし、環が待ってくれているときもあった。しかし、基本は、一人一人で登校していた。環の家を経由したルートを取ったのは、彼女に会えるかもしれないという期待ではなく、半ば義務感である。付き合っているのならそのくらいのことはすべきだろう。

環には会わなかった。怜は、他の制服姿の同じくらいの年の子たちに紛れて学校に着いた。足を向けたのは、下足を上履きに変えて校舎に入る玄関のすぐ近くに立っている掲示板である。ここで新しいクラスを確認しなければならない。自分の名前を探した怜の目が、三年六組で留まった。続いて、六組の女子に川名環の名前があるか探してみたが、どうやら中学最後の一年は別々のクラスになってしまったようだ。

「カノジョと離れ離れになって落ち込んでいる少年を発見！」

怜は、自分の名前を確認したあとに、すぐにその場を去らなかったことを後悔した。なに、今からでも間に合うはずだ。怜は聞かなかった振りをすると、玄関に向かおうとした。そこを後ろからガシ

っと首に腕が回される。時、既に遅し。
「おいおい、新学期早々、無視かよ、怜」
でも冷たくされるとますます惹かれるワ、と気色の悪い声を出したのは、中一からの友人である瀬良太一（タイチ）だった。まったく、入学したてというのは気をつけなければならない。新しい環境に対する不安や緊張、気分の高揚から、つい誰とでも握手をしてしまう。そこで握手をしてしまったばかりに、本性を知らないままに付き合いが始まってしまった友人が彼であった。いつの間にか太一の整った顔が怜の顔の前にある。彼のほうが怜よりも頭半分くらい背が高く、少し見下ろされる格好となる。
「怜、オレとお前も別のクラスになっちまった」
真面目な顔つきで悲しげに言う。
「オレは一年間、お前と満足に会えないかと思うと……」
良いことである。しかし、太一の想いは違っていた。自分の想いを伝えようと、太一は怜の目をじっと見つめると、いきなり唇を突き出してきた。
「何をしてんだ。お前は！」
太一の顔を押さえる怜。
「良いではないか、良いではないか」
どこぞの悪代官のような勢いで迫る太一と五分程度揉み合っていると、突然太一の体が何かに引っ張られるように怜から離れた。
「朝っぱらから何を見苦しいことしてんのよ」
と、代官を懲らしめてくれる正義の味方よろしく怜を助けてくれたのは、ショートカットのボーイッシュな女の子であった。顔見知りである。彼女は、持っていた太一の制服の襟首を離すと、その意志の強そうな鋭い目を太一と怜に向け、
「ボーイズラブは綺麗な男の子同士だからこそ萌えるのよ。あんたたちが愛し合うのは勝手だけど、どこか人の目につかないとこでやってくんないかな。気持ち悪いだけだから」
はきはきとした口調で言った。

「何だよ、七海（ナナミ）、怜に嫉妬してるのか？　心配しなくても、オレにはお前だけさ……」

さっと彼女の肩に手を回そうとした太一は一瞬後、ぐほっという苦しげな息を吐き、胸を押さえる格好になった。少女は、肘打ちの体勢から自然体に戻ると、

「新学期からあんたにはうんざりさせられるわ。はっきりさせておくけど、加藤くんにはともかくとして、わたしにさっきみたいな真似したら……」

危険な光を瞳に溜めた。

「オレだったらいいのかよ」

怜がぼやく。加藤くんとは怜のことだ。それを無視して七海は続けた。

「肘打ちなんかじゃすまさないわよ。もちろん、綾（アヤ）にも環にもね」

その言葉に応じるように、七海が名前を上げた少女の一人が、三人のいた舞台に登場した。眉毛の高さで切り揃えられた前髪、顎の高さで水平に切り揃えられた鬢（びん）――左右側面の髪――の姫カットがよく似合っている。一見すると一つ二つ年下のようにも見えるが、瞳には大人びた伶悧な趣がある。少女は怜と太一に挨拶をすると、七海にそっと耳打ちした。

「ウソでしょ」

さっと顔を青ざめさせた七海が掲示板に向かう。掲示板から悲鳴が上がった。

「どうしたんだよ、あれ？」

怜が訊くと、綾はくすっと笑い、

「太一くんと一緒のクラスになってしまった女の子の断末魔じゃないかな」

と静かに答えた。

「断末魔じゃなくて歓声だろ。喜んでんだよ」

太一が自信たっぷりに言うと、

「瀬良くん、多分だけど、七海はあなたのこと本当に嫌いよ。恥ず

かしがってるわけじゃないと思うわ」
と綾はさらりとキツいことを言った。しかし、そんなことにめげる太一ではない。
「相変わらず毒舌だな、綾は。でもそこがいいんだけどな」
と返す。ありがとう、と微笑を送る少女。
「これで学年の主要な美人はオレの五組に集まることになったわけだ。楽しい一年間になりそうだな」
太一が満足そうに言った。
怜は、なおも呆然としている七海とそれを慰める綾、他の女子に声をかけ始めた太一を置き、一足先に校舎に入った。六組の教室に向かう。掲示板をざっと見た限りでは、親しく知った名前はないようであった。まあ良い。あと一年である。いまさら友だち作りもないであろう。みな高校受験で忙しくなることもあって、そうそう人間関係で悩むこともないだろう。そう気楽に考えていた怜の期待は淡くも裏切られることになった。六組の教室に足を踏み入れ、自分の新しい机を探していたとき、くすくすという抑えた笑い声が耳についた。周囲の目が自分に向いているような気がする。感じの良いものではない。
その原因はすぐに分かった。
黒板の隅に相合傘の絵が描かれている。
その傘の下に怜と環の名前が書かれていた。

第3話：川名環と付き合うということ、教室にて

一瞬、怜は小学校にタイムスリップした感覚に襲われた。黒板に開く傘、その下に男女一対の名前。冷やかされる二人、冷やかすクラスメート。どこかしら楽しげな雰囲気。遠い過去の話。その穏やかな過去がまさか中学三年生の時に顔を出し、しかも自分が対象になるなどとは思ってもみなかった。さらには、傘に込められているのはいたずら心などではない。嫉妬である。そのことは理解していた。川名環と付き合うということはそういう悪意を向けられるということを意味していた。怜が付き合うようになるまで、ひそかに環に憧れていた男子が多かったことは想像に難くない。また今でも多いだろう。何しろ、あの容姿と人当たりの良さである。人気がない方がおかしい。環に興味がなかった数少ない男子の一人である怜でも、そのくらいは客観視できる。この傘はおそらく環に思いを寄せる男子の屈折した心理のなせるわざであろう、と怜は推測した。

怜はとりあえず黒板の傘を消すことにした。そろそろ新しい担任が来るであろう。見つかっても面倒である。消す時にもくすくすという笑いが起こった。これが新学年のクラスの第一日目の始まりか、と思うと怜は軽くうんざりした。

四十代前半の男性教師が現れ、簡単に六組の担任であることを自己紹介した後、校長の在り難いお言葉をいただくために、体育館に移動するように命じてきた。体育館で、中学最後の1年を中学生らしく楽しむことや、受験生としての心構えやなんやかや、即効性の睡眠薬のように強力に眠気を誘う退屈な話を一時間ほど聞いたあと、教室に戻る。戻ったとき、怜の眉が顰(ひそ)められた。消したはずの傘がまた出現している。怜は今度は何もせずに席についた。二度目である。消す方が面倒になった。描いた者が消せば良いのだ。教壇に立った担任が、特に気にも留めなかったせいで、傘はずっと残ることになった。

誰が描いたのかはすぐに分かった。新しいクラスになったということで、一人ずつ自己紹介をする段になったとき、一人の男子生徒が名前を告げたあとに、

「趣味は落書きで～す」

と、ちゃらけた声で言ったからである。それに続いて、彼の仲間であろう生徒の笑い声が起こる。怜は彼を一顧だにしなかった。およそ覚えておくべき価値のない顔である。

クラス内で、クラスの委員長や、またそれぞれが所属する委員会などを決めると、昼になった。今日は給食は出ない。怜は机の上に弁当を広げ、食べ始めた。これを食べたあと、新しく決まった委員会に出向し一時間を過ごせば、今日は終わりである。

「レイ」

怜が顔を上げると、少年と少女が一人ずつ、お弁当の包みであろうものを持って、教室の戸から入って怜の机に近づいてきた。知っている顔である。何をしに来たのであろう。

「何しにって、お前と弁当を食べにきたんだよ。一人じゃ寂しいだろうと思ってさ」

少年が人懐っこい笑みを浮かべながら言った。

「そんなことで来たのか、賢（ケン）」

「そんなことってないだろ。お前がこのクラスに誰も知ってる奴がいないんじゃないかと思って、わざわざ来てやったのにさ」

怜は少女の方に目を向けた。

「倉木は？」

「わたしは賢の監視。賢が加藤くんと過ちを犯すのを止める役」

鎖骨にかかるくらいのセミロングの髪を少し内側にカールさせた彼女は不機嫌そうに答えた。

「過ちって何のことだよ、日向（ヒナタ）？」と賢。

「賢って、加藤くんのこと好きみたいだからさ。関係が発展しないようにね」

「何言ってんだよ」

「事実でしょ。今朝から、加藤くん、加藤くんってさ」
「言ってたか？」
「言ってました。『怜と同じクラスになりたい』って」
「別に怜に限定した話じゃないよ」
「どうだか」
「まあ確かに。怜はいい奴だからな。オレが女だったら惚れてるね」
それを訊くと、少女はますます不機嫌になった。怜はその辺にしておいてもらいたかった。賢とは二年の時に同じクラスで、話すようになった。彼は底抜けにいい奴である。開けっぴろげで悪意というものがない。が、少し鈍感なところがあり――もちろん、鈍感さというのは一種の美徳であるが――自分の言動が隣の少女にどういう影響をもたらすかということをあまり考えていなかった。彼女の目が慍色（うんしょく）を含んで、自分に向けられているのに怜は気がついていた。まるで、恋敵（こいがたき）でも見ているかのような目である。
賢と日向の二人は、幼馴染みで、親同士が友だちだということもあり、ほとんど生まれたときから一緒だったらしい。付き合っているかどうかは知らないが、傍から見ていても日向は賢に気がある。賢の方は……。これはよく分からない。あるようなないような。怜としては別にそんなことに興味はないのだが、賢が自分に好意を向けてくれる分だけ、近くの少女から悪意が向けられるのである。これには少々辟易（へきえき）する。
怜は、教室の床よりも一段高くなっている教壇の床に座っている日向を自分の席に座らせ、自分は賢とともに教壇のリノリウムの床に座った。
「あ、ありがとう」
日向が意外な面持ちで礼を言う。
「な、いい奴だろ」
賢が我がことのように言った。
「ケン。もうやめてくれないと、今度は環の代わりにお前の名前があそこに書かれるぞ」

怜の指さす黒板の傘を見た賢は、怜と同じ感想を漏らした。
「小学生のクラスですか、ここは?」
律儀に消そうとしてくれる賢を怜は止めた。嫌がらせにまともに反応すると、その嫌がらせがさらにエスカレートする。嫌がらせには反応しないことだ。そのうち面白くなくなって止めるだろう。…などということを考えていた訳ではない。単にこの程度のことはどうでもいいと思っているだけである。歯牙にかける値打ちもない。
日向が口を出した。
「ま、タマキと付き合うっていうことは、そういうことよ。いちいち気にしても仕方ないよ」
賢は納得の行かないような顔だった。おそらく今すぐにでも犯人を見つけ出して止めさせたいのだろう、と怜は推測した。友人が不当な扱いを受けることに黙っていられない、という今どき珍しい一本気な気質なのである。
「あ、ウワサをすれば……タマキ」
日向の呼ぶ声に導かれて、少女が姿を現した。一階にあるこの教室は屋外と廊下に面しており、怜の席は廊下に近かったのだ。廊下側の窓から、環が通り過ぎるのが日向の目に止まったのである。少しクセのあるふわりとしたショートボブの少女が入ってくると、何人かの男子の目が彼女に向いた。川名だ、という低い囁きが聞こえるような気がした。
「ここ六組よ、ヒナちゃん。あれ、ケンくんも……どうしたの、二人は四組じゃなかった?」
環が訳知り顔で訊く。おおよそ事情は分かったようである。
「聞いてよ、タマキ。ケンがさ、あんたたち二人の間に割って入ろうとしてんのよ」
日向が意地悪い口調で言うと、環は笑った。
「怜くんは、男の子にモテるみたい。今朝も太一くんといい感じだったらしいし」
七海や綾から聞いたのだろう。

「じゃあ、環もライバルが多いってわけだ。苦労するね」
「『も』ってお前もライバルが多くて苦労してるような口ぶりだな」
あっけらかんとした様子で賢が言うと、日向はまともに彼を見て、
「ええ、もちろん、苦労してるわ」
と無理矢理に言葉を押し出すような口調で言った。
「へえ、お前、好きな奴いるのか？」
どうやら賢の方は、彼女の好意が自分だけに向けられていることに気がついていないらしい。
日向は額に手を当てて、大きくため息をついた。環がその肩を軽くとんとんと叩きなぐさめる。
「なあ、誰だよ、お前の好きな奴って」
好奇心を持った賢だったが、日向は取り合わなかった。
「ここでさ、『バカ！』とか言って、お弁当箱をこのバカの頭に打ち付けてやったりすれば目も覚めるのかもしれないけど……」
幼馴染みにそういう激情を持つのも難しい、というようなことを環に言って少女は頭を振った。そのあと、分からない顔をしている賢を放っておいて、彼女は本題に入った。黒板の相合傘に環の注意を引く。
環は、あら、と言ったきり、しばしその絵を検分していると、
「これじゃ寂しいね」
と言って、おもむろに赤のチョークを手に取ると、傘を赤く塗り、さらに傘自体を大きなハートマークで囲んでしまった。怜の席の近くがざわついた。いくつかの視線が黒板を小さく振るわせた少女に集まっていた。相合傘に、頬を染めたりむきになって否定したりするところを期待していた彼らの当ては見事に外れた。彼女の大胆な振る舞いに衆目が集まる中、環は声を大きくして、
「怜くん、今日一緒に帰ろ。いつもの所で待ち合わせね」
と明るい顔で怜に向かった。その声は、まるで周りに聞かせるような調子を帯びていた。環は、怜に向かって微笑むと、くるりと踵（きびす）を返し教室を出た。

怜と付き合っていることを完全に肯定する環の行動に教室内がどよめく中、

「か、川名ってときどき凄いことをさらっとするよな」

と賢が驚いたように言うと、

「カッコいいよね、さすが、タマキ」

と日向が惚れ惚れとした声を出した。

一方、怜はというと、床から立ち上がって、黒板前の席のクラスメートに許可を得てから、黒板の傘を静かに黒板消しで消し始めた。ハートマーク付きの赤の傘はちょっと、素知らぬ顔ができないほど目立っていた。

教室内は面白い見世物の余韻で、しばらくの間、ざわめいていた。

第4話：雷鳴の午後、追加されるルーティン

一日が終わった。

怜は校門を出たところで環に会った。昼休みに、環は「いつもの所で」と約束したが、そんな所は無い。昨年は一緒のクラスだったのである。一緒に帰るならクラスを出るところから一緒になれば良い。待ち合わせ場所を決める必要などない。

「ああいう風に言った方がいいかなって。付き合ってるぽいでしょう」

環はいたずらっぽく笑った。

「でも、よく校門だって分かったね」

分かるも何も教室から出て学校の外に向かう時、必ず通る場所はここしかない。ここだったら、どちらかが待っていれば確実に会える。怜は環が来ていなければ自分がここで待つつもりだった。

二人は歩き出した。

「傘、どうなった？」と環。

「オレが消した」

「やっぱりね」

「だから書き足したんだろ？」

環は微笑むだけでそれには答えずに、話題を変えた。

「委員会、何になった？　わたし図書委員」

「美化委員」

「あら、図書委員じゃないの？」

「なぜか図書委員の倍率が異様に高くて、希望したけど無理だった」

「残念、怜くんと一緒の委員会かと思ったのに。みんな、突然、本に目覚めたのかな」

目覚めたのは本にではないことを怜は知っていた。環を始めとして、図書委員には学年の目立つ女子が集まっていた。委員会などというつまらない雑用をこなすためには、何らかの楽しみが必要であ

る。そう考えた小賢しい男子が怜のクラスには多く、そのため倍率が高くなったのだった。

青天に鳥飛びめぐり、暖かな光にそよ風、歩道に植えられた花が揺れる。春うらら。

二人は無言で歩くことが多い。折角、二人で帰っているのだから、いろいろ話しながらとも思うが、そもそもいろいろとは何をであろうか。怜には特に話したいことなどなかった。それでも無理に話題を探さなければいけないとしたら、面倒なことだ。沈黙。怜はちらと環を見て、ふと、今彼女がおらず一人で歩いていたらどうだろうか、と考えてみた。何も変わることはないだろう。躊躇無くそう思ったとき、何らかの違和感を感じた。

「どうかした？」

環が怜の視線をとらえた。怜は首を横に振った。この違和感が何なのか、怜には分からなかった。ただその感覚に従うなら、怜にとって、環と一緒にいることは一人でいることとは違った意味を持っていることになる。今はそれだけしか分からなかったし、それだけで十分だろう。

「レイ」

環の家の近くまで来た時、幼い声が怜を呼んだ。声とともにぶつかりそうな勢いで走り寄ってくる影がある。怜はその影を軽く受け止めた。六、七歳の女の子が瞳をきらきらとさせて、屈託のない笑顔で怜を見上げていた。

「あ、お姉ちゃん、お帰り」

彼女は、今気がついたように隣にいる環に言った。

「お姉ちゃんは怜くんの後なの？　悲しいな」

瞳を伏せて悲しげな振りをする環に構わず、女の子は、

「レイ、おんぶして」

と両手を上げた。

「旭（アサヒ）、失礼よ」

環よりも先に、横から静かにたしなめたのは、女の子を追って歩

いてきたこちらは十三歳くらいの少女である。肩を覆うくらいまでのストレートの黒髪が清楚な雰囲気を与えている。
「やあだ、おんぶ」
　怜は背負っていたナップサックを地面に降ろそうとした。それを環が受け取る。怜が膝を折ると、小さな体が背に抱きついてきたのが分かる。立ち上がると、背負われてきゃっきゃっと喜ぶ声が上がった。
「どこかに行くの、円(マドカ)？」と環。
「旭を連れて、公園に行くだけよ」
「じゃあ、お姉ちゃんも行こうかな。荷物置いてから」
「だったら、旭とお姉ちゃんだけでどうぞ」
「あら、お姉ちゃんと歩けないお年頃ですか？」
「……旭、行くよ」
　少し強い声で、少女は怜の背にいる旭に言った。妹がしぶしぶながらそれに従うと、怜に一礼し、何度も手を振ってよこす名残惜しそうな旭を連れてその場を離れた。
「妹もあのくらいまでが可愛いな」
　手を振って返す怜がしみじみと言った。
「旭のこと？　あの子、この前怜くんが家に来たときに、遊んでもらったこと凄く喜んでて、それ以来、『レイはいつ来るの』って、それぱっかりなの」
　環の家には、一ヶ月ほど前、二年生のとき当時のクラスメート数人と一度だけ行ったことがあった。その時に、なぜかなつかれてしまった一番下の環の妹の相手をしたことを怜は覚えていた。
「怜くんに会うときだと、全然性格(キャラ)が違うんだから。女の子って怖いね」
　ナップサックを返しながら環が言う。他人(ひと)のことが言えるのか、という意味を込めて怜は環を見た。昼休みのときのような振る舞いは、普段の物静かな様子からは想像するのが難しかった。怜の意図を読み取ったのかどうか、環はわざとらしくあさっての方を向いて

いた。
「対して、円ちゃんには嫌われてるみたいだな」
　怜が歩き出しながら言う。礼儀正しく抑えられてはいたが、かすかに苛立たしいような視線で彼女がこちらを見ていることに怜は気がついていた。
「難しい年頃なの。わたしのこともこの頃、避けてるみたいだし。年の近い姉って何かとうっとうしいのかな」
　うっとうしいのは単なる姉という存在ではないのではないか、と怜はぼんやりと思った。学校内でも有名な才媛を姉に持つ妹の気持ちは怜には計り知れないものがあった。
「怜くんのところは？」
「都（ミヤコ）のことか？　こっちは避けるどころか、いちいちバカにしてくる。一度、環から言ってくれないか、『お兄さんを大切にしなさい』って。あいつ、環のこと崇拝してるから、お前の言うことなら聞くはずだ」
「それは、都ちゃんのことを口実にして、家に誘ってくれてるって考えていいの？」
「只の口実にできないところが悲劇なんだ。今度、是非頼む」
「りょ～かい」
　そこで環の家に着き、怜は彼女と別れ、家に向かった。視線を上に向けると、気持ちの良い青空だった。その青空に雷鳴が轟こうとしていることに怜は気がつかなかった。
「そこに座ってください」
　家に入り、母から改まった口調でリビングのソファに座るように言われるまで、すっかり忘れていた。そう言えば、今朝、話があるとか何とか言っていた気がする。ダイニングテーブルで、都がにやにやしていた。事情を知っているわけでもないだろうが、何か兄に不穏なことが起こることは分かるのだろう。物見高く見物に来たわけだ。
　怜はナップサックを床に置くと制服のままソファに座った。

「話と言うのはあなたの今後のことです」
真正面に座った母が切り出した。
「進路のことよ。どの高校を考えてるの？」
怜は中堅よりやや下の公立高の名を口にした。実際の所、高校のことなど大して考えていなかった。入れればどこでもいい。しかし、母の考えは違っていた。
「確かに今のあなたの成績じゃあ、現実的なところでしょう。でも、そこに行くことによってそれからのあなたに何かプラスがありますか？」
そんなことは行ってみなければ分からない、とは怜は言わなかった。母が言うプラスというのは将来、安定した生活をするためにプラスになるかということであり、それはとりもなおさず、有名大学に入れるかということであった。怜が今、名を挙げた高校からはそれほど有名大学に進学している生徒はいないようである。であれば、母の問いにはＮＯと答える他ない。
「我が子に過剰な期待をするようなことはしませんが、せめて努力する子であることは分からせてください。そのくらいのことは期待してもいいでしょう？」
「川名先輩と同じ高校に行けるようにがんばった方がいいんじゃないの？　まあ、高校までお兄ちゃんが捨てられなかったらだけど」
気楽な声で割って入って来た都を、母はたしなめた。怜は決心したように言った。
「分かったよ、今日から努力して勉強してみるよ」
確かに、母には子に努力を求める権利がある。そして、子はそのくらいのことをしても罰（ばち）は当たらない。他の母親にくらべれば、怜の母は今まで勉強について口を出さなかった分、なおさらであると言える。
話はこれで終わりになるかとも思われたが、母の顔はまだ引き締められたままだった。
「それで、どうやって勉強するの？」

どうって……。机に向かい、教科書を広げ、参考書を調べ、分からないところを教師に聞くのが勉強なのではないだろうか。

「それじゃ足りないわ。この近くにある塾をいくつかピックアップしておいたから、明日から一つ一つ説明を聞きにいきます。説明を聞いた中から一つを選んで、あなたはその塾に通う」

否応のある話ではなかった。今まで勉強らしい勉強をしていない怜が、やる気だけで一年後の受験を乗り切れるはずがない、というのが母の結論だった。そして、それがおそらくは正しいだろうことも怜には理解できた。

怜は母の話に全面的なＯＫを出した。そこでようやく母がほっとしたような顔を見せた。怜は勉強は最低限のことしかしておらず、成績は中の下といった所である。口には出さなくとも、やはり心配だったのだろう。

懸念が一つ片付くと、母は妹を伴って夕食の買い物に出かけた。怜は二階に上がり、自分の部屋に入ると、自室の三分の一を占領しているベッドに横になった。母は幸せなのだろうか。そんなことが頭に浮かんだ。実に十四年間面倒を見てもらっているわけだが、そうやって、子どものことを考えて生きる人生というのはどういうものなのだろう。怜には見当もつかなかった。母にも、妹くらいの年の頃が確かにあり、その時は未来は無限であったのだろうか。しかし、今は？　怜は瞼を閉じた。そんなこと分かるはずもない。子どもが進学校を目指し塾で勉強していることで満足するのなら、そのくらいはしてやるしかない。反抗期は訪れそうもなかった。

怜の瞼が開いた。机の上に置いてある携帯のメール着信音が鳴った。

メールは環からだった。

怜は塾に通うことになりそうだということを返信しておいた。

第5話：千金の夜に回る運命の糸車

塾選びはなかなか体力の必要な作業になった。母の作ったピックアップリストに従い、一つ一つ塾に赴き、その塾の方針や実績、授業内容、費用などの説明を受け、時には授業の様子を覗いたり、模擬授業を受けたりした。怜としてはどこでも良いような気がしたが、スポンサーとしてはそうも行かないのだろう。母は慎重に決めたがった。

「一年通うことになる塾なんだから、一週間くらい使って調べたっていいでしょう」

面倒がって適当に決めたせいで一年間を無駄にするなどというのは馬鹿馬鹿しい、ということだった。確かにそう言われればそんな気もする。

五件目の塾だった。個別指導を売りにしている塾で、生徒一人一人に対してカリキュラムが組めるという。人とペースが違うお子さん――つまり、人より遅れているということだ――にはピッタリだと思います、と担当者の四十代男性がにこやかにアピールした。教室はあまり広くない。二人がけのテーブルが十台ちょっとというところか。各テーブルにはしっかりとした仕切りはないが、適当な位置に衝立（ついたて）が配されており、かなりゆるやかではあるが個別のスペースになっていた。

好きになれそうにない塾だった。まず気に入らないのが講師の服装である。三つテーブルが埋まり講義がなされていたが、講師は皆カジュアルな服装だった。普段着を着て勤まる仕事であるということだろうか。また、授業の様子を聞いていると、講師も生徒もタメ口で品が無い。入塾受付の担当者が熱心に説明する中、怜の気持ちは醒めていた。母次第ではあるが、ここに来れば他の塾よりもストレスを受けるだろうということは分かった。

そんな時である。

「じゃあ、始めましょう」
凛とした声が怜の耳に聞こえてきた。近くのテーブルで新しく授業が始まったらしい。
「まず宿題の確認から始めます」
きびきびとした女性の声である。生徒――おそらくは中学生の女の子――が満足にできなかった旨を述べると、
「なぜですか？」
と女性は詰問した。
「今週は部活で忙しくて……」
「部活動だけですか？　お母さんにお聞きしたところ、テレビや携帯に使う時間がかなりあるようですが」
「それは……」
「テレビを見るなとか、携帯を使うな、とか、そういうことを言う気はありません。ただし、先に宿題を終わらせてから、好きなことに時間を割くように。ここに来ている以上は、まず来年の合格を第一に考えてください。出てしまった結果にだけは、わたしが責任を取ることはできません」
「……分かりました」
「一応、宿題の内容と量について今から見直しをします。優先順位をもう一度確認しましょう」
怜は入塾説明を右から左に聞き流しながら、その授業内容に意識を集中した。生徒も同じ中学三年生のようで、授業内容は理解できた。その授業には美しさがあった。教師の説明、生徒の解答、解答の修正、再度の演習、が整然と淀みなく続いた。他の授業にあるだらだらとした雰囲気はそこにはなかった。怜は小学生のときに通っていた剣道場のことを思い出した。武道やスポーツのトレーニングに近い雰囲気がその授業にはあった。
三十分ほどして入塾に関する説明が終わり、担当者の男性が怜に何か質問がないか訊いてきた。怜が聞きたいことはただ一つだった。担当者は意外な面持ちで、

「講師の指名ですか？　一応、こちらであなたに一番合う先生を選ぼうと思っているのですが、特にご希望があるのなら大丈夫ですよ」
と答えた。
教室を辞すときに、怜はちらりと例のテーブルに目をやった。まだ二十代前半くらいの若い女性講師が流れるような口調で生徒に当たっており、生徒の方も真面目にそれに答えていた。そこだけ空気が違うようであった。怜が安心したことに、彼女はパンツスーツ姿だった。
帰りの車の中で、今の塾にしたい旨と講師を指名したい旨を怜は母に告げた。
「今の塾ね……確かに昨年の実績はそこそこみたいだけど」
母が前を見ながら言う。塾の雰囲気があまり良くないことが気になるらしい。
「それに指名って言ったって、知ってる講師がいるの？」
怜がさきほど教室にいた女性講師のことを話すと、母は何を勘違いしたのか、
「怜、あなたがそういう年頃だっていうのは分かるけど……」
と慎重な切り出しから、
「講師を顔で選んでも仕方ないでしょう」
と思春期の息子を教え諭そうとした。
怜は、顔など体の上に載っていればそれでいいことと、耳をそばだてていた授業内容が分かりやすかったことを、母に分かってもらえるように説明した。
「分かりました。勉強するのはあなたなんだから、あなたの直感に従いましょう」
塾へは、週二コマ、一コマ二時間のコースで通うことになった。
初回だけ、母も同行し、講師と十分程度話をした。母は、
「授業内容や方針については一切口を出しませんので、先生のお好きなようになさってください」
と言ったあと、進捗状況の細かな説明も必要ないことと、家でさ

せるべきことがあれば何でも言ってもらいたいことを講師の女性に告げて帰った。

「なかなか面白いお母さんですね」

山内燈（アカリ）と名乗った講師は感想を漏らした。

「過程も必要ないし全面的な協力もするから結果を出せ、とおっしゃってたことは理解できましたか？」

怜はうなずいた。

「あなたへの信頼の証ですね」

確かに信頼しているからこそ口を出さないようにするとも言えるが、

「無関心なだけじゃないですか？」

と怜は言ってみた。いいえ、と山内女史は静かに首を振った。後ろでまとめられたポニーテールがかすかに揺れる。

「関心がなかったら、そもそも塾に入れようとはしません」

そうとは限らない。子に関心を持っているというよりは、親の自己満足のためということもあり得る。

「だとしても喜ぶべきでしょう。他人の自己満足のために、チャンスがもらえるのは今のうちだけです。そのチャンスを活かすも活かさないもあなた次第」

山内講師はそこで口元に笑みを見せた。

「わたしのテストは終わりましたか？」

怜は、どきり、とした。彼女の人となりを探ろうとしていたことに気がつかれていたのが分かって、驚いたのだった。

「これが人生経験の差です」

と言って、彼女は自分にも同じ経験があることを怜に伝えた。

「さあ、じゃあ、お母様のご期待に沿えるよう、あなたの希望を叶えられるように、第一歩を踏み出しましょうか」

彼女はそう言うと、初回の授業を始めた。

初回は、今後の授業についてのオリエンテーションとなった。怜の苦手教科が英語と社会であることが分かると、まずはその二教科

を重点的に学習していくという方針になった。また、授業時における細かな注意事項を受けた。

一つ。意思表示をはっきりすること。

「わたしは、あなたの母親でも姉でもありませんので、あなたの心理状態は分かりません。学校でいらいらすることがあって塾に来たときでもそれを察することはできません。よって、勉強できないような心理状態だったら口頭ではっきりと申し出てください。できるだけ考慮します」

一つ。敬語を使うこと。

「敬語は社会のルールです。今、崩れつつありますが、それでもなお通用しています。敬意があろうがなかろうが、年長者――すなわち授業中はこの私――には敬語を使うようにしてください。高校の面接試験でも役に立ちます」

一つ。言い訳をしないこと。

「言い訳は時間の無駄です。言い訳しても、できなかったことができるようにはなりません。そんな時間があるなら勉強してください」

……などなど。十点以上ある、勉強自体とは関係なさそうに思えることを綿々と言われた上、確認用のプリントまで渡された。

「勉強は生活の一部です。生活態度が悪ければ成績も上がりません。今言ったことは全て簡単なことですが、これをしっかりと守れた子は私が受け持った生徒の中にはいませんでした。あなたがその最初の一人になってくれることを期待しています」

期待を背に受けて、怜は初回の授業を終えた。もう辺りは暗い。帰りは自転車だった。家までは二十分程度である。行きは母とは別々に来たのだ。怜が望んだことではなかった。むしろ初回くらい車で送り迎えしてくれても良いのではないかと思ったほどであるが、母に初めから一人で行かされたのだった。これも信頼の証であろうか。信頼とは良い言葉である。上り坂で立ちこぎをしながら怜は思った。都合の良い言葉である。

自転車をこぎながら、高校受験に向けて始動したことに半ば信じ

られない思いだった。高校は何となく、入れるところに入るんだろうと、成り行き任せで考えていたからだ。それが、目標を持って取り組むようなものになるとは。人生は時に劇的な変化を見せる。

志望高校は環と同じ高校にしておいた。彼女の志望校は、この辺りでは一番の進学校だった。環と同じ高校に通いたいとかそういうことよりも、スポンサーである母を納得させるためには、その名を挙げるしかなかったのだ。

怜は微笑した。同じ高校を目指すことにしたことを環に言ったら、どういう反応を見せるだろう。喜ぶだろうか。訝(いぶか)るだろうか。四対六で、後者の気がした。明日試してみよう。

自転車をこぐ体をふうわりと夜気が包んでいた。風に艶がある。雲間から差す月光が咲きかけの桜花を照らしていた。大金を払ってでも春の夜のわずかな時間を手に入れたい、と詠(うた)った古人がいたが、その気持ちが分かる気がした。

良い夜だった。

第6話：文化研究部部長、田辺杏子の悲哀

文化研究部。

怜の通う中学校にひっそりと存在する文化系部活動の一つである。部員数三人のマイナー部。活動内容、文化に関わることを研究すること。文化が人間によって作られるものであるなら、結局それは人間に関わることを研究することと等しいことになる。あってなきが如き漠然とした活動内容だった。

三階建ての校舎の三階にある部室――と言っても、視聴覚教室を利用しているだけなのだが――で、部長の田辺杏子（アンコ）は、重苦しいため息をついた。悲しいのは、ため息の原因ではない。誰もこのため息に気がついてくれないという事実である。

もう一度、杏子はため息をついてみた。今度はもっと強く。息というよりは、もう何というか声である。あーあ、という感じのつぶやき。しかし、それでも杏子に心配そうな視線を向けてくれる者はいなかった。仕方ない。彼女は座っていた席から立ち上がると、

「あのさあ、部長がため息を漏らしてるんだから、気づいたらどう？　ていうかさ、心配しようよ。大変なこと悩んでるかもしれないよ。あなたたちの誰か一人でもそれに気がつけばさ、救われるかもしれないよ」

と午後の室内に声を響かせた。

教室にある影の一つがその声にようやく反応した。反応はしたが、視線は向けずに、

「部長、わがままが可愛いのは幼稚園までですよ。『誰か気がついてよ』なんて態度をして本当に誰かが寄ってきてくれるのは。鏡を見てください。もう可愛くもないニキビ面（づら）が映るでしょ」

とぞんざいな声だけかけた。杏子はショックを受けた顔で、さっと手鏡を取り出すと、入念に顔をチェックした。眼鏡をかけた自分の顔が映る。ほっとした息がもれた。

「ちょっと、蒼ちゃん。ニキビなんか無いじゃない。やめてよね、そういう冗談。それにね、その雑誌、どっから持ってきたの。校則違反よ」

注意を受けた少女は、しかし意に介せず、ティーン向けのファッション雑誌を読み続けた。二つ並べた椅子の上に座っており、ときどき伸ばした足の先を組み直している。

「それで、なんなんですか。さっきから、ため息ついて。こんないい日和に気分が悪くなるじゃないですか」

「気づいてたんなら、訊こうよ。『部長、どうしたんですか？　何かあったなら相談してくださいって』さ。もう相手が嫌になるくらい訊きまくろうよ」

「ブチョウ、ドウシタンデスカ？」

「何で合成音みたいになってんのよ！」

杏子はそこで大仰に首を横に振ると、もう一度息を吐き出して、ロボットの少女に向かった。

「ため息をついてるのはね、他でもないあなたのためになのよ」

「はい？　わたしのため？」

少女は、そこでようやく雑誌から目を離した。彼女の大き目の瞳に、スクエア型の眼鏡をかけ、口を閉じていれば知的な雰囲気にさえなりそうな先輩が拳を握り締めて力説している姿が映る。

「どういうことですか？」

「いい、我が文化研究部の二年生はあなた一人なのよ。ということは、今年の新一年生が入部してくれないと、来年はあなた一人になっちゃうのよ」

「なんだ、そんなことですか」

蒼の目は再び雑誌にと戻った。

「今、『そんなこと』って言った？」

聞き間違いだろうか？　呆然とした杏子に、少女はこともなげに言い放った。

「別にいいですよ、一人の方が。せいせいするじゃないですか」

ふらり、と揺れた体を、杏子はどうにか机に手をつき支えた。彼女は力を振り絞って、後輩に向かった。
「でも、一人じゃ何もできないでしょ。部活動っていうのは皆で力を合わせてさ……」
「力を合わせて何かボス的なものを倒すんですか？」
「ゲームの話じゃなーい！　いい、とにかく、部員を入れないことには、文化研究部に明日はないのよ！」
蒼は雑誌を自分の鞄にしまった。
部の未来に興味を持ったわけではなく単に読み終わったからだろうと、杏子は推測した。
「……分かりました。新一年生の勧誘ですね。でも、どうするんですか？」と蒼。
「それを皆で考えようってこと」
「皆でですか」
「そう皆でよ。ね、みんな！」
力強い声でそう言うと、杏子は、辺りの影に呼びかけた。影は全部で四つ、全員男子である。部員数が部長を含めて三人のはずなのに、室内には六人いる。すなわち、三人は部外者だということだ。単に遊びにきているだけのヒマ人たち。だが、文化研究部の部室内にいる限りは、部の利益になるように行動してもらわなければならない。
「はい、西村くん。どうやって、部員を入れればいいですか？」
問われた男子は、紙と鉛筆でできるゲームをやっていたが、目を上げると、
「ポスターとかで募集すればいいんじゃないの？」
軽く言った。杏子は失望の吐息をもらした。そんなことは既にやっているのだ。
「はい、じゃあ、女好きの瀬良くん」
「女好きは余計だろ」
二番目の男子は、少女の声に軽く対抗すると、目の前の対戦相手

に、
「余計だよな。なあ、賢？」
確認するが、彼は、
「いや、女好きだよ」
とあっさりと肯定して、お前の番だと言って、ゲームの続きを促した。杏子は彼らの机に近づき、その紙を取り上げると、
「とりあえず西村くんの勝ちね、コレ。さ、何か、案ないの？」
と一方的なことを言って、迫った。
「じゃあ、オレが適当につれて来てやるよ」
「当てがあるの？」
「まあ、オレの為に入ってくれって言えば、大抵の女の子は入ってくれるさ」
そう言って瀬良太一は自信ありげにうなずいた。彼は、女の子をとっかえひっかえしていることで有名だった。二、三ヶ月周期で付き合っている女の子を換えるのである。確かに、彼が声をかければ、部員は集まってくれるかもしれないが、杏子は首を横に振った。
「却下！」
部室でメロドラマを繰り広げられてはたまらない。
次の男子に向かう。
「はい、ウルフ！」
「誰がウルフだ！」
三番目の男子は、読んでいた本から、嫌そうに目を上げた。トップ部分を狼のたてがみのように立たせ、耳周りや襟足を長めにしている髪型だった。彼は、ふう、と息をついた。
「オレが思うに、この部に人が入らないのはな、お前のせいだ」
「わたしの？」
分からない話である。意外な顔を作る杏子に、ウルフはしみじみと、
「そうだよ。部長に魅力があれば、お近づきになりたい、と思って、寄ってくるもんだ。現に見ろよ、茶華道部を。部長が伊田綾だろ。

あいつを近くで見たいって奴が、どんどん入ってくんだよ。マイナーな茶華道部だぞ。おかしいだろ、部員三十人って」

言った。

杏子は打ちのめされたように顔を俯かせた。そうだったのか。この部に人が入らないのは部長に魅力がないからだったのか。何ということだ。そんなことだったなんて。真実は時に人を傷つけるものである。真実の刃に、杏子の心はずたずたに切り裂かれた。

「あきらめろ。人間、あきらめが肝心だ」

悟りきったような顔でウルフが言う。あきらめる……。それしかないのだろうか。所属する部が近い将来廃部の危機に見舞われることが分かっていながら何もできないとは。ここがわたしの旅路の果てか。

「そんなことないと思いますよ」

杏子の耳に優しい声が聞こえてきた。彼女は、はっと顔を上げた。

「それならまだあきらめる必要はないと思います」

「どういうことだよ？」

ウルフが訝しげに、蒼を見ていた。杏子も怪しげに後輩を見ている。

「実はですね。わたし、一回だけ見たことがあるんですが、杏子先輩って眼鏡を取って髪のおだんごを解くと、メチャメチャ綺麗なんです。伊田先輩にも匹敵すると思います」

「おいおい、ウソだろ。そういう冗談は笑えないぞ」

「いいえ、本当です」

言い切った蒼の言葉が終わった後、四対の目が自分を見ていることに杏子は気がついた。

「え、なに……え？」

「さあ、先輩。今こそ、封印を解くときです」と蒼。

「お前……そんな、おいしい奴だったのか。よし、見せてみろ」とウルフ。

「め・が・ね！　め・が・ね！」と西村・瀬良コンビ。

「ちょ、ちょっと……」
杏子は後ずさった。
「さあ、不細工から美人に変身するときですよ。シンデレラ」と後輩の少女。
「見せてみろ、お前の力を」とクラスメート。
「め・が・ね！　め・が・ね！」とバカコンビ。
徐々に間を詰めてくる四人にどう対処しようか考えていると、がた、と椅子を引く音がして、最後の影が立ち上がった。この暴徒たちを止めてくれるのだろうか。期待を込めた目で見た杏子だったが、その影は机に広げていたプリントをまとめると、我関せずと言った雰囲気で、そのまま部室を出ようとした。
「ちょおっと、待ったあ！」
杏子は開きっぱなしになっている視聴覚教室のドアと、彼の前に立ちはだかると、
「え、なに、どこに行くの？」
と質問した。
「うるさいから、帰ろうかと」
「何で帰っちゃうの？　今、大事なこと、話し合ってんでしょ」
「田辺の眼鏡の話か？」
「ちがーう！　部の存続に関わる話よ。帰るんなら、何か一つ納得させるような案を出してからにしなさい」
そこまで言われて、彼は少し考える様子を見せたあと、
「なら、新一年生に勉強を教えるっていうのはどうだ？」
と案を出した。
「はい？　勉強？」
「そう。田辺は結構、成績いいんだろ？」
「それほどじゃないけど」
だが二百人中二十番前後ではあった。
「オレは全然良くないけど、それでも数学とかだったら教えられるし」

「……勉強ねえ」
確かに勉強を教えてもらえるということであれば、進学熱が高まっている昨今であれば、それ目当てに入ってくる一年生もいるかもしれない。ただ、それは文化研究部のもともとの活動内容ではない。
「一回入ってもらえば、こっちのもんだろ」
「く、くろい、腹黒いよ。大人しそうな顔してさ。そういう人だったの、加藤くん？」
彼は気にせず、
「あとは、ポスターに坂木と岡本の写真でもつけて、こういうカワイイ、カッコイイ先輩が教えてくれますとか書いておけばいいだろ」
続けた。
「わたしより、先輩の方がいいですって。眼鏡無しの」と蒼。
「おい、オレはこの部の人間じゃないぞ」とウルフ。
「田辺と坂木の方の選別は任せるよ。岡本は六月で今の部活、引退だろ。それからここに入ればいいだろ。籍だけ置いておけよ。仮に部に出なくても籍だけ置いておけば、ポスターに載せてもウソとは言えないだろ」
杏子は、信じられない顔で彼を見ていた。そこまで考えているとは、なかなか侮れない奴である。
「じゃあ、そういうことで」
出て行った後ろ姿を、しばし、杏子は眺めていた。変な男子である。普段は無口な癖に時々、はっとするところを衝く。加藤怜。特に目立ったところはない。短めの髪でこざっぱりとした印象を与えるが、顔はそれほどかっこいいというわけでもない。面白いわけでもないし、成績がいいわけでもない。部活動で光るものがあるかというと、これはもう、一年のときからずっと文化研究部だったので、推して知るべしである。では全く平凡なのかと言うと、今のように唐突にキレを見せるときもある。つまりは、変わっているのだ。
そう結論付けて、杏子は歩いて行く怜の姿から視線を外した。まだ話がまとまらないうちに出て行ってしまったが、まあいい。少な

くとも彼は使えそうな案を提示していってくれたのだ。
「あとは、こっちでがんばりましょう！」
意気揚々と振り返った杏子は呆然とした。
その目に映ったのは――
他の部員――プラス部員じゃないやつら――が、話は終わったと思ったのか、もう一つのドアからぞろぞろと出て行くところであった。

第7話：季春の公園、飛び来たり飛び去る花

「オーバーロード効果ってご存知ですか？」

聞いたこともない。

「オーバーロード効果というのは、学習心理学という分野の用語なのですが、自分ができる量よりもより多い量を勉強しようという学生の方がそうでない学生よりも成績が伸びやすいというものです」

ゆうに三センチほどの厚さになるだろうか。大量のプリントでクリアファイルが膨らんでいる。怜は、それを見たあとに、視線を横に向けた。怜の隣でパイプ椅子に腰掛けている一人の女性。彼女の事務的で冷静な顔が、少しだけにやりとしている。まさかとは思うが……。

「一週間でやってきてください」

思った通りだった。怜はもう一度、二人がけのテーブルに乗っているクリアファイルに入ったプリントの束を見つめた。これは何だろうか。小生意気な中学生に最初にガツンとやっておこうという、そのための小道具だろうか？

「いいえ。そんな意図はありません。現在のあなたの学力と志望とする高校が要求する力ではかなりの開きがあります。それを埋めるために、ゆっくりやっている暇がないだけです」

講師の山内燈（アカリ）は平静な調子で続けた。

「もちろん、この量はオーバーロード効果を見込んだものですので、全てできる必要はありません。ただ、全てやろうと努めることはしてください」

一週間が宿題プリントとの格闘で飛ぶように過ぎた。怜は起きている全ての時間を使って、宿題に取り組んだ。プリントは怜の現在のレベルに合わせたものだったので、基本的にできない問題はなかったのだが、とにかくキツい作業となった。何しろこれまで勉強らしい勉強をしていないところにもって、この量である。運動不足の

人間に、毎朝十キロ走らせるようなものだ。もうやりたくない、と脳が悲鳴をあげるのをなだめすかしながら、こなしていく。

一週間後――

「すばらしい！！」

沈着な山内女史から感嘆の言葉が上がった。

「何とか終わりました」

そう言って怜はプリントの束を提出したのだった。ちゃんと答え合わせ済みである。何度、答えを写してやろうかと自棄(やけ)を起こそうとしたかしれない。しかし、それをしても何の意味も無いことはさすがに分かっていた。

「初めからここまでやってきてくれるとは、あなたの志望校合格への気持ちは本物のようですね」

講師の褒め言葉を聞いても、怜は相好を崩すようなことはしなかった。得意な顔になどもちろんならない。思春期特有の照れ隠し、などではない。この後の展開が読めたからである。

二時間の授業のあと、次回の授業日を確認してから、山内講師は鞄から、

「では、今週の宿題がコレです。ここには週二回で来てもらっていますから、次の次の授業の日までの宿題になります」

と言ってプリントの分厚い束を怜の前に置いた。

新たな試練が与えられたのだった。

環から電話があったのは、少しレベルアップした敵に悪戦苦闘している時だった。

「お花見に行かない？」

携帯電話から流れる音楽的な彼女の声を聞きながら、怜は机に広げられた宿題プリントを見た。そこで頭を振る。１週間振りにまともに話をした、あまつさえ自身は好きではないと言っていた花見に誘ってくれるそのカノジョと過ごす時間と、塾の宿題をやる時間を比べるなど、重症である。怜は、翌日の約束をして電話を切った。

待ち合わせた場所は、怜の家から少し離れた公園だった。広い公

園で、園内とまた公園を囲むように桜が植えられていた。このあたりの桜の名所の一つだった。遠方からもわざわざ相当数見に来るようである。その日は休日だったこともあって、園内は花見客で賑わっていた。

桜は満開を過ぎ、はらはらと散り始めていた。空に舞う花びら。ひらりひらり、と落ちながら宙を彩っていく。

不意に起こった旋風（つむじかぜ）がその花びらを集めて青空高く舞い上げた。

風が止み、その場に現れる一人の少女。桜の花のようなピンクの、花紋様の訪問着をまとった彼女は、こちらの姿を認めると、楚々とした調子で歩を進めてきた。周囲を歩く花見客たちが、頭上の花から目を離してまで、しばしその姿に見惚れる。

「こんにちは、加藤くん」

伊田綾は慎ましやかな微笑を浮かべると、怜に声をかけた。怜も挨拶を返す。

「環とデート？」と綾。

「そんなとこ。伊田は？」

「わたしは親とその知り合いの飲み会に付き合わされてるの。着物まで着せられて。まるきり見せ物よ。いい加減面倒になって逃げて来ちゃった」

「大変だな」

「そこ。座ってもいい？」

綾は、怜が座っていたベンチを指差した。少し間を置き怜をちらりと見る。眉のあたりで切り揃えられた前髪の下にある目が何を訴えているのか、怜には理解できた。

怜はジーンズのポケットからハンカチを出すと、それを自分の隣の席に広げた。

「ありがとう」

自分で要求したくせに彼女の目は少し驚いたように怜には見えた。綾は腰を下ろすと、

「この頃、環のことほったらかしにしてるみたいだけど。他に好き

な人でもできたの？」
何気ない調子で訊いてきた。怜は、通い始めた塾のことを話した。
「それが理由になると思ってるなら、つまらない人ね、加藤くん」
怜は静かに先を促した。つまらないと言われても、自分では面白い人間だとは思っていないので腹も立たない。
「環はあなたにほおっておかれても、恨み言一つ言わないような子よ。あなたからメールがなくても、一緒に帰れなくても、顔を合わせなくても。でもだからこそでしょう。あなたから誘ったり、謝ったり、優しい言葉をかけたり、そういうことをしてこその男の子でしょ」
なるほど、と怜は首肯した。それは確かにうなずける話である。
「環はあなたのことがとても好きなの。人から好かれているということはつい忘れがちになる。だから、忘れないように努力しなければいけないわ」
綾が続けた。怜に、というよりは、まるで自らに言い聞かせているような言い方だった。
「この一生で、とても好きな人に出会えるっていうのはどんなに幸せなことでしょう」
「まるで人生を一度やってきたような言い方だな」
怜がそう言うと、綾は口元だけで笑った。その白い手を開き、掌を上に向ける。ひらり、と桜の花びらが綾の手に降りた。
「残酷だと思わない？　こんな艶（あで）やかなものが散るのよ」
怜のジーンズの膝にも春の欠片が落ちてくる。
「桜はいいわ。また来年咲くのだもの。でも人はどうかしら。男の子はあんまり感じないかもしれないけど、女の子はね……散る桜を見て綺麗だとばかり思ってはいられない。少なくともわたしは」
綾の言うことは頭では分かるような気はしたが、実感はできなかった。そんな風に感じたことはなかったし、おそらくこれからも無いのではなかろうか。もちろんそれは分からないことだが。
「好きになったものだったら、どんなになったって綺麗だろ。花が

散り葉桜になっても、冬になり葉を落としても」

　怜が言う。その言葉に、綾は一瞬目を丸くしたが、そのあと袖で口元を隠して笑い出した。顎の高さで切り揃えられた鬢が揺れる。ひとしきり声を立てて笑ったあと、綾は涙目を向けた。

「あー、可笑しい……でも、環が選び放題の男の子の中からどうしてあなたを選んだのか、今少し分かった気がする」

　なら説明してもらいたい。怜にはさっぱり分からなかったからだ。

「それは自分で考えてね。さて……と」

　綾はベンチから立ち上がった。

「帰ります。ありがとう、いい気分転換になったわ。それに、どうやら真打も登場したようだしね」

　綾が視線を向けた方向から、淡い暖色のチェック柄のワンピースを身につけた少女が現れた。プリーツで仕上げられた裾が清楚な雰囲気を与えている。ラウンドネックから見える素肌と、ワンピースの裾から出る素足が日を受けて輝いていた。

「やっぱり環は可愛いわ。でも、それが彼女の全てじゃない」

　怜もそれは分かってるつもりだった。

「ならいいんだけどね」

　そう言うと綾は歩を進めた。

「アヤちゃんも来てたの？」

　黒髪のショートボブが縁取る邪気の無い顔が嬉しそうな表情を作る。

「親の付き合いでね。偶然加藤くんに会えたから、ちょっとお説教しておいたから」

「お説教？」

「そう」

　綾はそこで怜に視線を向けると、さっきの話忘れないでね、と念を押した。

　着物の少女が立ち去ると、怜は敷いていたハンカチをしまい立ち上がり、環にここ最近の非礼を詫びた。ここ一週間ロクに連絡を取

らなかったことを謝る。
「アヤちゃんのお説教って、そういうこと」
環は微笑した。
「そんなこと全然気にしてないよ。だって、怜くんはわたしと同じ高校に行きたくてがんばってくれてるんでしょ？」
怜はじっと彼女を見つめたが、環は表情を崩さない。微笑したまま見返してくる。
「たとえそうでも、メールするし、一緒に帰るし、こうやって顔も合わせるよ」
そう怜が約束すると、少女の花顔（かがん）が晴れやかな笑顔を見せた。
女の子と付き合うということは常にこういう顔をさせておかなければならないということだろう。
怜は差し出された手を取った。
手をつないで歩く二人の上に、桜の花が降る。
来年まで忘れないでねというように、花びらが二人の服や髪を白く色取っていった。

第8話：トラブルには迅速にかつ冷静に対処すべし

クラス内には『グループ』というものが存在する。

『グループ』とは性質の似た者同士が集まって作る集団のことであり、『グループ』の構成員（メンバー）は基本的に同グループのメンバーとしか交際を持たない。また、グループ同士も、あまり関わりを持たない。関わりを持つときは大抵は、敵対する時である。仮に友好的な関係を持っているグループ同士があったとしたら、それらは融合し、一つの大きなグループを作ることになるからだ。

怜のいる六組は、大きく三つのグループに分かれていた。

一つ目は、目立ちたがりグループ。自分たちが目立つことに命をかけるグループである。人の迷惑を省みず休み時間中に大きな声で騒ぎ、授業中はふざけて笑いを取る。校則で禁止されているもの――菓子、雑誌、化粧品など――を持って来て周囲の注意を引こうとする。

二つ目は、大人しいグループ。あまり目立つようなことはせず平穏を好み、そこそこ学校生活を楽しむ。通常授業から特別委員会、清掃に至るまで学校行事をそつなくこなす。

そして、最後の一つは、これはグループというか、上記二つのグループのどちらにも属さない孤高を愛する者たちである。

怜は、最後の一つに属していた。別に孤高を気取る訳ではない。単に友人になりたい人間が見当たらないだけである。一人では所在無いという理由で友人を作る気は怜にはなかった。孤独よりも、付き合いでしなければならないおしゃべりの方が耐え難いものがある。それに、現在の所、手持ち無沙汰ということはありえない。彼の相手は、異国の言葉が書かれているプリントがしてくれることになっていた。これがなかなか律儀な奴で、授業と授業のわずかな時間でさえ、怜が寂しくないように机の上に現れてくれるのだった。

「何ごとより勉強を優先してください。少なくともそういう振りは

してください。できますよね」

宿題プリントという素晴らしい友を紹介してくれた女性の声が耳に聞こえるような気がした。ついで彼女の唇がかすかな笑みの形を作っているのが頭に浮かぶ。その微笑みにどこかサディスティックな雰囲気があるように思えるのは、これまでの自分の勉強不足で大量のプリントが出されているという事実を、山内講師の個人的な趣味に置きかえたいのだろう。そうでない可能性は考えたくない。

「加藤くんって、英語、得意なの？」

横からかけられた声に、怜はシャープペンを動かす手を止めた。すらりとした細身の少女がかがむようにして、こちらを覗き込んでいる。

「得意だったら、こんなに必死になってやってないよ」

と、怜が答えると、

「それもそうだね」

と言って彼女は笑った。

「わたし、英語苦手だから、加藤くんが得意だったら教えてもらおうかなって思ったんだけど」

悪意は無いにしても、彼女が言うと、それは嫌味にしか聞こえない。小谷舞（マイ）。一年のときから常に成績がトップ３以内にある秀才である。一番最近の定期テストではトップだった。

「プリント見せてもらってもいい？」

怜はプリントを一枚渡した。舞はその穏やかな大人らしい性格から、グループの垣根を越えて誰にでも話しかけるという特技を持っていた。怜にも時々話しかけてくる。

「現在完了、か。ここ用法だけはとりあえず覚えたんだけど、はっきりとイメージができないんだよね」

プリントを見ながら舞が首をひねる。怜は英文法の「現在完了」について塾で習ったことをそのまま彼女に教えてやった。親切心や下心ではない。山内講師の指導である。

「人に教えるのは自分の勉強になります。人から質問されたら、答

えてあげるようにしてください」
聴き終わった舞は、はっとした顔をつくると、
「先生より分かりやすい。スゴく良く分かった。ありがとう」
と満足した顔で礼を言って、呼んでいる友人のところに戻った。
肩までのセミロングの髪が下の方でレース風のシュシュで留められているのが見えた。
「休み時間まで勉強してるやつってちょっと考えられないよな」
後ろからせせら笑うような声が聞こえてきた。紹介しよう。彼の名は落書き（グラフィティ）。無論、本名ではない。怜がつけたあだ名である。その由来は、始業の日の自己紹介に由来する。おそらく相合傘を書いた輩であるので、あだ名で十分だった。本名を覚える気は怜にはない。
グラフィティはことあるごとに怜にからかいの言葉をかけてきていた。
曰（いわ）く。「今から必死になって勉強なんておかしいよな」
曰く。「川名と付き合ってるみたいだけど、釣り合いが取れてないって」
曰く。「あいつ、しゃべらないから何考えてるか分かんないんだけど」
などなど。
こういう手合いを相手にしても仕方ないことは十分に分かっていたが、しなければしないでどこまでも増長する。一言釘を刺して反撃し、言われっぱなしにはならないということを示しておいた方がいいのかもしれないと思っていたが、その機会は意外に早くやってきた。
四月下旬から五月上旬にかけての大型連休（ゴールデン・ウィーク）迫るある日の昼休みのこと。
「それで、どうするの？」
珍しく幼馴染みを伴わずやってきた倉木日向（ヒナタ）が机の前に立ち、怜に決断を迫っていた。特にどうする気も起こらない。成り行きに任せても良いのではないかと思っていたが、

「ダメでしょ、そんなの。タマキが可哀想じゃん」
日向が強い声で答えた。
事は以下のようなことだった。一体、どこからそんな話になっているのか分からないが、六組内に、怜と舞の仲が「いい感じ」になっているというウワサが出始めたらしいのである。火のない所には言うが、この場合、何が火になっているのだろうか。舞とは数回しか話したことはない。いずれも教室内で衆目の中である。過去に同じクラスだったこともないし、町で偶然出会ったこともない。「ない」が重なれば、数学のようにひっくり返るのだろうか。大した火がないとしたら、ガソリンを撒いてその火を大きくした者がいることになる。
「そのうち五組にも延焼するわ。今のうちに手を打っておかないと」
日向は六組内にいる友人から聞いたらしい。確かにこの種の、誰と誰が付き合っているとか別れたとか、そういう類のウワサが一番生徒の口に昇るのだった。誰と誰が付き合おうが、それが何だと言うのだろう。怜にはさっぱり理解できない話だった。
「加藤くんに理解できるかどうかは関係ないの。タマキが傷つくことが問題なのよ」
こういう噂で環が傷つくかどうか、正直、意にも介さないような気がしたが、ただ、彼女に対して失礼なことではあるかもしれない。先日、カレシの義務を怠っていたことを詫びたばかりの怜としては、ここで何らかのアクションを取る必要があるとも考えられる。しかし、何をすればいいのか。
「イライラするなぁ。何をって、今からクラス中に向かって、『オレは川名環が好きだぁ〜』とか何とかさ、大きな声で言えばそれで終わりでしょ」
怜は賢に同情した。大して親しいわけでもない自分にこれほどの無茶を要求するということは、十四年来の幼馴染みには日ごろ何を要求しているのか、想像に余りあるものがある。いや、むしろ、親しくないからこそ気軽に言えるのかとも考え直してみたが、日向の

目は本気だった。気軽に言った言葉ではなさそうだ。
「なに話してんの？」
横から声がかかる。口を挟んできたのはグラフィティだった。
「加藤くんと小谷さんが付き合ってるっていうウワサのこと。どうしてそんなことになってるの？」
と日向が訊き返した。
「そう言えば、おれも聞いたよ。そのウワサ。で、どうなんだよ、加藤？　本当のところ、付き合ってるの？」
どうだって良いだろ、と怜はそっけなく答えた。この男と話すことはないし、しかも怜の中では彼は今回のウワサの件に関する重要参考人でもあった。
「良いわけないでしょ。ウワサが本当だったら、加藤くん、二股かけてることになるんだから」
日向の反論に、グラフィティが、いや、これからおそらくグラフィティ・ゴシップという新たな名前がつけられるだろう彼が、
「加藤って結構モテるよな。この前、伊田と一緒にいたみたいだし」
耳障りな声で畳み掛ける。いい加減、怜はその声にうんざりしてきた。今こそ行動を起こすべきときだという気がした。いや、本当はそんな気はしなかったのだが、そういう気になっている振りをすることにした。そうしなければこの場が収まらないのならそうする他ない。
日向とグラがウワサの信憑性について話している中、怜はすっと立ち上がると少し離れた席で友だちと談笑している舞を呼んだ。少女が現れると、怜は、
「オレは五組の川名と付き合ってるから、小谷とは付き合うなんてことにはなるはずない。オレはどうでもいいけど、川名と小谷に失礼だから、そういうウワサをするのは止めてくれないか」
と直截（ちょくせつ）に言った。怜の目は、グラフィティ＝ゴシップに向けられている。
「おい、まるでおれがそのウワサを流したような言い方だな？」

グラフィティが剣呑な目を向けてきた。怜が首を横に振る。
「そんなことは言ってない」
「言ってるだろ！　今、そう言ったよな、こいつ？」
喋りながら興奮してきたグラ少年が、舞と日向に確認する。突然の大きな声に舞はひるんだが、日向はひるまない。平静に、
「いいえ、言ってないわ。ウワサをするのをやめてって言っただけよ」
と答えた。グラは納得いかない顔を作った。
「だとしたら、何で特におれに言うんだよ。クラス中のウワサなんだぞ」
「たまたまいたからでしょ。他の人が来てたら、その人に言ったわよ」
相手の興奮に当てられたように日向もいらいらした口調で答えた。
彼はちっと舌打ちすると、
「おい、じゃあ、他の奴にも言いに行けよ。おれだけじゃなくて。教室内にはまだたくさんいるぞ」
と怜に矛先を変えた。うんざり感は面倒な気持ちに変わってきた。この男といつまでトークを楽しまなくてはいけないのだろうか。ちらりと机の上に視線を走らせると、怜の視界にプリントが入ってくる。
「そっちで皆に言っておいてくれ」
と怜がぞんざいに言うと、
「何でおれが？」
とグラ。答えない怜に業を煮やしたように彼は続けた。
「お前、やっぱりオレがうわさを流した張本人だって言いたいんだろ。証拠はあるのか？」
裁判をする気は怜にはない。
「無いのか。証拠も無いのに決めつけやがって。ふざけんなよ！」
がんと怜の机を蹴るグラフィティ。その拍子にプリントが一枚床に落ちた。それを拾おうとした怜の手が床と上履きに挟まれる格好

となる。グラフィの足が怜の手を踏みつけていた。わりい、という悪意のある声が頭上から振る。手の痛みを感じながら体を起こした怜は、人を殴りたくなったのはいつ以来のことかぼんやりと考えていた。

「あ、あの、もうやめようよ。わたし、ウワサなんか気にしてないから。加藤くんも気にしてないなら、わたしが川名さんの所に行って、ウワサなんかデタラメだっていうことを言ってくればすむでしょ」

険悪なムードに舞がおそるおそると言った調子で割って入って来た。学年一位は、成績だけ良い訳ではないらしい。なるほど、それが一番現実的な解決策である。しかし――

「そういう話じゃないんだよ」とグラ。

「そうよ。どうして小谷さんがそんなことしなきゃいけないの。悪いのはうわさを流した男なのに」と日向。

この二人にとって、そんな解決策は何の足しにもならないようだった。

「今、男って言ったよな？　何で男だって分かるんだよ？」

グラが威圧するような口調で日向の言葉尻を捉えると、

「女の勘。多分、こういうウワサを流すのはひがみ根性丸出しのモテない男なんじゃないかな」

日向も彼を見ながら平然と言い返す。

「おい」

「別にあなたのことを言ってるわけじゃないわ。それとも身に覚えでもあるの？」

にらみ合う一触即発の二人に、

「もうやめましょう、ね」

と舞が割って入ろうとしたが、それは膨れ上がった風船に針を刺すような行為だった。

「うるせえよ！　お前は机で勉強してろ、ブス！」

グラの口から強い声が上がった。

舞の目がショックで大きくなる。
一瞬後――
「……何してんの、加藤くん？」
日向がうさんくさそうな目を怜に向けていた。怜の手が日向の腕の手首の辺りを握っていた。
「賢の代わりだよ」
日向の目が苛立たしげに怜に向けられていたが、怜はそれを真正面から受け止めていた。彼女は深く息をついた。緊張していた少女の腕から力が抜けたのが怜には感じられた。
「とにかく、オレは川名と付き合ってるから、もし他の子と付き合うなら川名と別れてからってことになる。もちろん、小谷とは付き合ってない。ウワサを流した犯人がお前みたいな言い方したことは謝る」
少し大きな声で怜が告げる。騒ぎに気がついた周囲のクラスメートたちが聞こえるように言ったつもりだった。
「……分かったよ」
周囲の目を引く格好になって居心地が悪くなったグラフィティはそれだけ言うと、席に戻っていった。
「いつまで腕を握ってるの？」
と日向。それは目標が彼女の射程距離から逃れるまでである。グラが自分の席に戻ってこちらと十分な距離ができたところで、怜は彼女の腕を放した。
「賢の代わりだって言ったけど、賢だったら、女の子にあんなこと言うヤツあたしよりも先に殴ってるわ」
「それは倉木に殴らせないためだろ。このこと、あいつに言うなよ」
「なんでよ？」
「分かるだろ」
もし賢にこのウワサのことを話せばどうなるか。友人を大切にすることに一途な彼のことだ。友人に対して不名誉なウワサを流した犯人を見つけ、相応の対応をしようとするに違いない。時間と労力

はかかるが成果は見込めない苦役を彼に強いることになる。それは避けたかった。

「悪いけど、賢には何でも話すことにしてるの。そうじゃないと、賢が何か隠してたときに責めにくくなるでしょ」

日向の答えは怜の予想していたものだった。にもかかわらず言ったのは、一言注意しておけば、日向の気持ちが冷め、賢に話すにしても十四年来の経験から上手い話し方をしてくれるだろうと思ったからである。

日向も怜の意図に気がついたらしい。一瞬、いまいましげな目を怜に向けたが、何も言わず、そのまま教室を後にした。

その場を離れるタイミングを逸したような舞が怜の前にいる。

「悪かったな。巻き込んで」と怜。

「もとはと言えば、わたしが軽々しく話しかけるからだよ。ゴメンね」

「クラスメートに話しかけちゃいけないって？」

舞は弱々しく笑った。彼女はどこか悄然としていた。その原因は怜には分かっていた。もともと怜が彼女を呼んだことによって起こったことである。やはり対応すべきだろう。

「あのさ、さっきの気にするなよ。小谷はブスなんかじゃないよ。可愛いよ」

怜は、できるだけ励ますような色を消し、事実を告げるような口調でかつ明るい声で言った。

舞の目が上がった。

誤解される危険を冒しての発言だということを彼女は酌んでくれただろうか。学年一位が伊達ではないことを信じるほかない。

「あ、ありがとう」

まっすぐな褒め言葉に、舞は恥ずかしそうな顔をしてその場を離れた。その様子からは、こちらの発言をどう取ったかは分からなかった。

予鈴が鳴った。

怜は椅子に腰を下ろした。慣れないことをしたせいで少し疲労していたが、グラフィと対決できたのは良いことだろう――途中から日向に選手交代させられたが。問題の解決には至らなかったが、少なくとも嫌がらせをしてくる人間に存在感を示せたのだ。環にはウワサのことを話しておくことにしよう。人づてに聞くよりは、直接カレシから聞くほうが良いだろう。

収穫のあった昼休みだった。怜は無理にでもそう思い込むことにした。そうでもしないと、宿題プリントが白紙のまま残っている虚しさに耐えられそうもなかった。

第9話：秘密会議と白雪姫

円卓を囲む五つの小柄な影。
その影の一つが口火を切った。
「よく集まってくれました、皆さん。まだ、全員揃っていないようですが、始めましょう」
厳かな声で会議の開始を告げる。
秘密会議……
と言えば、夜分に人目につかない所でと相場は決まっている。メンバーの顔も見えないような暗闇の中、声だけがやたらと大きく響き、出入り口は屈強な男たちががっちりと守り、誰も入ることは許されない、そんな場所。
「いらっしゃいませ～」
テーブルから離れた所から明るい声が聞こえてきた。
議長役の少女はそれを聞き流すと、
「では、リコ捜査官から。一組の状況を」
影の一つに声をかけた。呼ばれた少女が答える。
「は、とりあえず、リストにある男子に動きはありません」
「別れたカップルは？」
「ひと組、しかし、問題にするカップルではありませんが」
「それはあなたが決めることではありません」
「失礼しました。今橋・杉本カップルです」
「問題になりませんね。そんなカップルのことはいちいち報告する必要はありません」
捜査官は釈然としない顔をしたが、反論はしなかった。
「よし。では、カスミ捜査官、二組の状況を報告してください」
「は、田中くんが別れました」
「なに？　原因は？」
「性格の不一致らしいです。しかし、その筋の情報によると田中く

んが二股をかけていたようですね」
「相手は？」
「三組の原田美優」
「く、またしても、カップル・ブレイカーですか……人のカレシを横取りし、そして横取りしたあとは捨てる。田中くんが二股をかけたというよりは、あの女にしてやられましたね。田中くんもこれまでの男子と同じように、そのうち飽きられ捨てられるでしょう」
「狙い目ですか？」
「いくらブレイカーにたぶらかされたとはいえ、二股をかけるような男に興味はありません」
「失礼しました」
「他には？」
「いえ、これと言って」
「よし。では――」
言いかけた所に、テーブルの横から声がかけられた。
「お客様、ご注文、お決まりでしょうか？」
テーブルからそれぞれに声が上がる。
「チョコレート・パフェ」
「プリン・ア・ラ・モード」
「ミルフィーユ」
「木の実のエクレア」
「ういろう」
一緒に飲み物も頼む捜査員と議長。
甘いものは脳にエネルギーを与えてくれる。会議に必須のアイテムである。
「よし。では、三組は……アンコ捜査官が来ていませんね。誰か理由が分かる人は？」
「そう言えば、調べたいことがあるとかで、図書館に行くと言っておりました」
そう答えた少女に、議長は疑わしげな視線を向けた。

「男……じゃないでしょうね」
「いえ。彼女はまだ学校で眼鏡を外していないようです。その線は薄いかと」
「彼女にはずっと眼鏡をかけておいてもらうほかないですね。眼鏡をコンタクトに換えたときが、残念ながら我々の別れのときです。……では、ナナミ捜査官」
「は、ういろうが待ち遠しいであります」
「よし。では、四組の情報は……シオリ捜査官も遅れているようですね。先に、六組の情報をユイ捜査官」
「目だった動きはありませんが、学年一位の小谷舞と例の加藤怜が、付き合っているというウワサがでました」
「信頼度は？」
「本人同士は否定しています」
「ふ、それはそうでしょう。肯定してどうします。しかし、加藤怜は、わたしのクラスの川名環と付き合っているから、信頼度は低いでしょう。どちらにしろ、加藤は問題外です。わたしの好みではありません……どうしました、ナナミ捜査官？」
「抹茶をお代わりしたら、はしたないかどうか考えておりました」
「恥を知りなさい。抹茶のお代わりなど聞いたことがありません」
「でも、ういろうを楽しむには、抹茶はおそらく一杯では足りないであります。ういろうは、たっぷりの抹茶と一緒に食べたいであります。そこで、サラサ議長にお願いが」
「何です？」
「議長も抹茶を頼んで欲しいであります。それをわたしにいただきたいであります」
「わたしは、アッサム・ティを頼みました」
「ティを飲んだあとに、もう一杯ということで」
「……紅茶を飲んだあとに抹茶ってどんな人ですか？」
「紅茶を飲んだあとに抹茶が美味しそうに見えてつい頼んでしまった、食いしん坊のお茶目な中学生であります」

「……まあいいでしょう。それでは、皆さん、結論をお願いします」
テーブルにつく捜査官からいくつかの男子の名前が挙がると、議長はじっと下を向き考え込んだ。深い沈黙が訪れる。
メールの着信音が彼女の沈思を破った。
「議長」
メールを見た少女が声をかける。
「何です？」
「た、大変なことが……」
「落ち着いて」
「シ、シオリ捜査官が……」
「シオリに何か？」
「今日は会議に参加できないそうです。その理由が……」
サラサは、はっとした顔を作った。捜査官が言いよどむ理由とは一つしかない。
「そうですか。残念です。シオリはデートですね。友情よりも恋を選んだと言うわけですか……」
その視線を遠いところに向け、
「彼女はいい友人でした。こんな形で別れなければならないとは残念です」
感慨深げなため息をつく。
「非常に残念です」
「……議長」
「何です、ナナミ捜査官」
「ういろうが遅いので、ちょっと催促しに行ってもよろしいでしょうか？」
「よし……って、ちょっと、七海。あんた、さっきから、ういろう、ういろうってお菓子の話ばっかじゃない」
「しかし、議長。お言葉を返すようですが、ここはれっきとした和菓子屋さんであります。お菓子の話をするのは至極当然であります」
彼女たちがいるのは人目のない地下などではなく、こぢんまりと

した明るく綺麗な和菓子店だった―洋菓子も扱っている。およそ密談にはふさわしくないが、中学生が気の置けない友人同士でおしゃべりするには格好の場所である。和風の店内には、販売用のカウンターと、店内お召し上がり用のテーブルがあり、彼女たちがついているのがそのテーブルの一つだった。

「それはそうだけどさ……それ、言わないでよ。雰囲気が壊れるでしょ、捜査官」

「捜査官ごっこは終わりよ。さ、報告をまとめましょう。学年の目だった男子に動きはない、と。今日の会議はこんなもんだね。じゃあ、あたし、ちょっとカウンターに」

「わたしが議長なんだから勝手にまとめないでよね、七海。それに来たわよ、注文したもの」

着物姿の店員が、トレイに洋菓子と和菓子を載せてきた。

「お待たせしました」

テーブルから歓声が上がる。

「それで？　どうするの、更紗（サラサ）。誰かに告白する？」

細長いスプーンでパフェを掬いながら、少女の一人が言う。

「ま、まあ、ちょっと待ってよ。そう結論を急がずにさ」

更紗は自分が頼んだエクレアに向かった。

『更紗にカレシを作ろう』会議。この会議の内容は、学年の主だった男子の動向を把握し、その男子の中から気になる人を選び告白し、見事カレシを手に入れるというものだった。メンバーは七人。もともとは『みんなでカレシを作ろう』会議だったのだが、現在切実にカレシが欲しいと思っているのは、更紗だけであった。他の子は、適当に作っていたり、あるいは興味がなかったりなのである。

「もう誰でもいいから告白してさ、付き合えばいいでしょ、とりあえず」

友情とはありがたい。投げやりに言うパフェの少女に、

「そんな簡単に言うかな。小学校からの付き合いの友だちにさ」

と軽くむっとした表情を彼女に向ける更紗。

「友だちだから、ゴールデンウィークに付き合ってあげてるんでしょ」
「李子（リコ）だってカレシ今はいないんだから、ヒマでしょ？」
「カレシじゃなくたって、遊べるような子はいるの」
「そういうのありなの？」
「ありでしょ。カレシじゃなくてもさ、そういう友だちでもいいんじゃないの？　紹介するよ、いつでも」
「あたし、そういうのはちょっと……やっぱり、こう、いい人じゃないと」
「いい人、いい人って、王子様でも待ってるんですか？」
「そういうわけじゃ……」
と言って押し黙ってしまう更紗。しかし、しばらくしてぼそりと続けた。
「……あるかも」
李子はショックを受けた顔で、隣の友人に向かった。
「今の、聞いた？」
「ええ……な……なんということ。まさか友だちが、白雪姫症候群（スノーホワイトシンドローム）にかかってるなんて……」
「スノー……なに？」と更紗（サラサ）。
プリン・ア・ラ・モードのプリンを最後に残すようにして、周りの果物や生クリームから慎重に食べていた少女は、真剣な顔で答えた。
「スノーホワイト・シンドローム。この病気はね、いつまでも理想の男性を待っているうちについに老い衰えてしまうという恐ろしい病気なのよ」
「ど……どうすればいいの」
青い顔で訊く更紗に、
「適当な男と付き合うこと」
と事もなげに友人は答えた。顔色を直した更紗が、
「適当って言われてもさ……仮にできたとしても、その男の子に失

礼じゃない」
言うが、
「全然失礼なんかじゃないって。男の子の方だって、カノジョが欲しいって思ってるんだから、とりあえず練習みたいに考えて付き合ってみればいいんじゃない？」
気軽な声が返る。
更紗は、ア・ラ・モードの少女を見た。彼女は、小学校の時にすでに一人、中学に入ってからは二人の男の子と付き合っていた。そのどれもが好きな人というわけではなく、友人感覚で付き合っていたようである。
「でも、そんなさ、好きでもない人と付き合ったってさ……」
「付き合うこと自体が面白いと思うけどな、好きかどうかなんて二の次よ」
プリンに取り掛かりながら、少女が言う。
そういうもんだろうか。自分がおかしいのか。
「どう思う、七海？」
問われた少女は、ういろうを食べる手を止め、
「おいしいよ」
と一言。
「いい加減、その羊羹（ようかん）もどきから離れようよ！」
「失礼ね。ういろうは羊羹とは似ても似つかないものよ。ちょっと食べてみ」
竹でできたフォークの先にういろうの一切れを刺して、更紗に向ける。彼女は首を横に振った。
「おいしいのに」
そう言って自分で食べると、何の話だっけ、と訊きかえした。
「庶民を捕まえるか、王子を待つかよ」
更紗が答える前に、ア・ラ・モードの少女が答える。
七海は、少し考える振りを見せると、
「わたしならね、王子を捕まえる」

と力強くいった。
更紗は彼女をつくづくと見た。ボーイッシュなショートカットによって、頬から顎にかけてのシャープなフェイスラインがあらわになっている。きりとした瞳に意志の光が輝いている。彼女なら言葉通りのことができるだろう。傍にいると、彼女の細身の全身からエネルギーが溢れているのを感じることができた。
「確かに七海ならやりそうね」
更紗の言葉にうんうんとうなずく同級生たち。
「でも、わたしは王子には興味ないわ。兵士でも農民でもいいんだ。ただ、カッコいい人じゃないとダメ」
一言付け加える七海。
どれほどのルックスでないといけないと言うのだろうか。
「見た目じゃないよ。ここ」
と言って彼女は膨らみの分かる二つの胸の中央をとんとんと指差した。
「佐竹くんはそうじゃなかったってこと？」
パフェのスプーンから口を離した李子が訊く。佐竹くんとは、バスケットボール部で背も高く女子の間で人気のある男子であり、ゴールデンウィーク前に七海に告白し、見事に撃沈した男子だった。
七海は首を横に振った。
「全然ダメ。クールぶってるんだか何だか知らないけど『付き合ってやってもいい』みたいな態度だったから、いらいらした」
「もったいない。わたしだったら付き合うけどな」と李子。
七海はういろうの残りに向かった。
「じゃあ、瀬良くんとはどうなってるの？」
更紗の質問に、和菓子がまずかったかのような顔になる七海。
「どうして太一が出てくるの？」
「だって、仲良さそうだから」
「太一とは……」
七海は改めて可能性を考えてみるような顔をしたが、

「多分、ないわね」
と首を横に振った。
「なんで？」
「太一にはカッコよさを感じないから。魅力ゼロ」
信じられないような吐息が周囲から漏れる。更紗も同じだった。
確かに女ぐせは悪いが、それでもそのルックスと軽妙な会話能力、女の子に優しいところなどから、瀬良太一と付き合いたいと思う女子はいくらでもいる。例え、それが二、三ヶ月のことだとしても、太一と付き合ったことがあるというのは校内ではそれなりのステータスとなっていた。
「曇りのない心の目で見るのです。そうすれば分かります」
七海が、冒険漫画の主人公の師匠のようなことを言った。
「でもさ、太一くんは七海のこと好きだと思うけど」
更紗は食い下がってみた。自分のことではないが、それゆえに興味がある。
「そう見える？」
「見えるわよ。だって、いつも七海にカラんできてるでしょ」
「そうかな？」
「そうだよ。川名さんとか、伊田さんとかもいるのに、七海ばっかかまってくるじゃない」
「あれはね、そういうんじゃないのよ。タマキには、加藤くんがいるでしょ。アヤには相手にされないことが分かってるから、だからわたしにカラむしかないわけ。消去法ね」
「そういうの？」
「さあ、それ以上だとしても、わたしにはどうしようもない話よ」
涼しい顔で軽やかに言う七海。人気のある男子から好意を向けられているかもしれないのにどうしてこうも平静でいられるのか。彼女といるとたまに自分がひどく子どものように思えるときがある。男子との交際経験の差なのであろうか、とも思ってみるが、他のメンバーはともかく七海にはそちらの方面の話はなかった。この中で

一番モテそうなのに、小学生のときから、彼女が誰かと付き合ったという話は聞いたことがない。

「川名さんってやっぱり可愛いよね。わたし、同じ委員会でこの前間近で見たんだけど、肌なんか凄いんだって、肌理細かくてさ、思わず触りたくなっちゃった。あの宮田くんがカノジョ作らないのも、川名さんのことが好きだからしいよ。川名さん、何で加藤くんと付き合ってるんだろ」

ミルフィーユのパイ生地と死闘を繰り広げている少女が横から言う。他のメンバーからも同意の声が漏れる。もはや「更紗にカレシを作ろう」会議とは全然関係のない方向に話が進んでいるが、更紗も興味があるところだった。どうして学年でも一、二を誇る美少女が、こう言っては失礼だが、とりたてて目立ったところもない男子と付き合っているのか。

「分かる、七海？」

訊くと、問われた七海は首を横に振った。

「さあ。タマキがどうして加藤くんと付き合ってるのかなんて、興味ないし。でも、わたしが知っている範囲で、タマキの性格を考えると、もしかしたら試してるのかもね」

「試す？」

「そう。自分に相応しい男かどうか」

「どういうこと？」

「加藤くんがどういう人なのか、タマキは探ってるんじゃないかな。ま、勝手な想像だけど」

「良く分からないな。どういう人か分かったから付き合ってるんじゃないの？」

「人は人のことを理解したから好きになるんじゃないと思う。そうじゃなくて、理解したいと思うから好きになるんじゃないかな」

更紗は首をひねった。よく分からない。他の皆も同様だった。七海はひとり、満足した顔で、抹茶を啜っている。

一行は和菓子と洋菓子とおしゃべりを十分に堪能したあと、店を

出た。
すがすがしい空気に初夏の光が融けている。爽やかな日だった。
「それで、どうするの、姫？」
横からの友人の言葉に、更紗は厳かに答えた。
「姫はもう少し王子を待つことにします」
周りから嘆息が漏れる。更紗はそれに負けずに、
「みんなみたいに割り切ることができそうにないからね。こうなったらこの純粋な気持ちを持ち続けることにするわ」
夢見るように言うが、
「純粋はいいけどさあ。王女でいられるのも長くないからね」
と厳しい言葉。更紗は妥協した。
「じゃあ、あと一年だけ。一年だけ王女でいることにするから」
「しかし、この時点では彼女は気がつかなかった。この一年が十年になるということに……」
「ちょっと！　勝手なナレーションつけないでよね。友だちでしょ。そうならないように、わたしを助けてよ」
こうして、『更紗にカレシを作ろう』会議は解散され、新たに、『白雪姫がおばさんになる前に、もしキスしてくれる王子様が現れなかったら、頬をひっぱたいて無理矢理に目覚めさせよう』会議が発足したのだった。

第１０話：ガールフレンドの魔法の鑑

たまに、ほんのたまにであるが、親にいらいらすることがある。それは、部屋に勝手に入られ掃除をされたときだろうか？　それとも、一時間勉強をして休憩を取っているときに限って、理不尽にも「勉強しなさい」と注意されたときだろうか？　そうではない。そんなことでいらいらしていたら、毎日がストレスとの飽くなき戦いとなってしまう。良い子ぶるわけではないが、親には素直に感謝の念を捧げている。プライバシーを侵害されようが、軽く精神的ダメージを与えられようが、そのくらい何ということもない。感謝を言葉にはしない。そこは思春期ということで許してもらおう。怜にとって、心乱されるときとは、親が不意の気まぐれを起こすときである。

「あなたがお付き合いさせてもらっているその環さんを今度、家に連れてらっしゃい」

夕餉（ゆうげ）の食卓で真向かいから発せられた声を聞くと、怜は、それには答えず、じろりと横にいる少女を見つめた。彼女は取り澄ました顔で、夕食を楽しんでいる。

「怜、聞いてるの？」

母が続ける。

「どうして、突然？」

そんな話になったのか、一応訊いてみると、

「突然ってこともないでしょう。あなた、もう三、四ヶ月、お付き合いしてるんでしょ」

との答え。母には、環と付き合っているということは、はっきりと伝えた覚えはない。そうすると、なぜそんなことを知っているのか。考えるまでもない。怜に関する情報ソースはこの家には一つしかないからだ。横で、妹が箸を煮物に伸ばしているのが見えた。

「あなたも大事な時期なんだから、どんなお嬢さんとお付き合いし

ているのか心配になるのが親心というものよ」
なるほど、三、四ヶ月前から付き合っているのにも関わらず、これまで全くカノジョのことを訊いてこなかったのに、突然家に連れて来いという。親心とは、突発的に起こるものらしい。怜は一応了承したが、相手にも都合があるということは釘を刺しておいた。
「じゃあ、ゴールデンウィーク中にお邪魔することにします」
携帯電話で事情を伝えると、環はすぐに返答した。今はすでにゴールデンウィークの中盤である。行動が早いのが彼女の魅力の一つだった。軽く目をつぶる怜の耳に、
「いつがいい？」
と環の楽しげな声。
「そっちの都合に合わせるよ」と怜。
「わたしはいつでも大丈夫。お母様にお会いできるなら、たとえ予定があってもキャンセルするわ」
携帯電話の向こうで彼女がどんな顔をしているか、見える気がした。
「あ……でも……ちょっと待っててね。折り返します」
そこで何かに気がついたかのような声で、環は電話を切った。五分後に電話が来た。
「怜くん……一つ問題があるんだけど。実はね……」
問題とは、着て来る服のことであった。外出用のお気に入りの服をクリーニングに出しているというのである。社交パーティに行くわけではない。服など何でもいいだろう、と思わず口にした怜は、電話越しにたっぷり五秒の沈黙をプレゼントされた。
「悪かったよ。じゃあ、その服が戻ってきてからにしてくれ。ゴールデンウィーク中じゃなくてもいつでもいいから」
「そのことなんだけどね。この頃、新しい服を買ってもらってないから、母に頼んで何か買ってもらおうかなって思って。それでね……」
続けられた言葉に、怜はすぐには二の句が継げなかった。が、訊

き返したり逡巡したりしなかったことは評価してもらいたい。
「分かった。じゃあ、明日」
そう言って怜は電話を切った。
翌日の十時頃、怜は環の家の前にいた。柄にも無く少し緊張しているようだ。鼓動が速い。インターホンを押すと答えはなく、代わりに玄関のドアが勢い良く開き、朝の清々しい大気の中に、見知った顔によく似た顔の小さな女の子が現れた。彼女は、たったっと、玄関から駆けてくると、門の横にある通用口を開けてくれた。
「レイ」
少女に抱きつかれた怜は緊張が少し和らぐのを感じた。
「こんにちは、旭(アサヒ)ちゃん」
「レイ、抱っこ」
顔を明るくして両手を伸ばしてくる少女の頭に手を置いて、あとでねと言って軽くかわした怜は、彼女に手を引かれて通用口から門のうちに入っていった。
「アサヒ、怜くんは、環お姉ちゃんのカレシさんで、あなたのじゃないのよ」
玄関から優しい声がした。ストレートの黒髪を肩を隠すくらいまで長くした三十台後半のたおやかな女性がにこやかにこちらを見ている。当然ではあるが、環にそっくりだった。彼女の母である。
旭は軽く口を尖らせながら怜から離れた。怜は一歩前に出ると、
「始めまして、加藤怜です。環さんとお付き合いさせていただいてます」
と、淀みなくはっきりと言って、軽く頭を下げた。環の家には前に来たことがあるが、その時は他にもクラスメートがおり、環と付き合っているということを言う機会がなかった。当然、環は自分のことを話しているはずだが、それは怜には関係ない。
「娘がお世話になっています。環の母です」
と深く頭を下げた環の母は、
「今日はごめんなさいね。急にお呼び立てして。娘の我が侭にはお

互い手を焼かされますね。苦労するでしょう、環と付き合うのは」
と微笑みながら言葉を継いだ。
怜が答えに窮していると、
「お二人で何のお話ですか」
と外から助け舟が入った。
膝丈までの飾り気のないチュニック姿の環は、母親の横に来ると、おはようと怜に言ったきり、口を閉じた。彼女はいつも微笑んでいるが、その微笑が今は少し深い。怜にはその理由が分かっていた。
「ごめんなさい、怜くん。父は今、出張中なの。言わなかったっけ？」
聞いていない。横を向いて礼儀正しく笑みを抑えようとしている少女に、怜は少し目を細めた。環の目に映っている自分は相当滑稽なのだろう。ついさっき、理容店で、綺麗にカットされた髪と制服姿の自分を姿見で見たときの気分を怜は思い出していた。
つまりはこういうことであった。
昨夜、環が告げたことは、新しい服を買うからそれに同行してくれというものだった。どの服がいいか見定めてもらいたいらしい。それだけなら問題はなかったが、スポンサーである母の車で行くというところに難がある。当然、環の家まで行くことになるが、その時に、娘のボーイフレンドを一目見ようと考えるであろう環の父と、またもちろん母にも挨拶する必要が出てこよう。母親とは面識があるが、父親とはまだ会ったことがない。初対面であることを考えると、できるだけ印象のいい外見で行くのがカノジョへの礼儀である。図らずも——ここは怪しいところがあると怜はにらんでいる——環の服よりも前に、怜は自分の服選びをしなければいけなくなった。自分のことになれば、環の気持ちも少しは理解できた。結局、着て行く服は学校指定のワイシャツと制服のズボンにすることにし、それほど伸びてはいない髪を朝一番で軽くカットしてもらったということである。いかにも、という感じになってしまったが、だらしなく見えるよりはマシであろう。

「ねえ、怜くん、怒った？」
　環の母が運転する乗用車の後部座席に座り、窓から外を見ていると、隣から腕をつつかれた。環はおそるおそるといった振りをしていたが、相変わらず面白そうな顔をしている。
「いえ、怒ってません。お父様にご挨拶できなかった上は、環サンに笑ってもらえればむしろ嬉しいくらいです」
　環の母の手前、丁寧な口調で答える。半分は本心である。カノジョの笑顔も見られないのであれば、こんな格好になった甲斐が無い。
「ありがとう」
　と環がうるおいのある声で言った。それは今の怜の言葉に対する感謝ではない。
「順番が変わっただけだよ」
　怜が言うと、
「次はわたしのターンね。心配？」
　と環がいたずらっぽい顔で訊く。
「オレ……ボクが？」
「全然？」
「全然です」
「でも、少しくらいは……」
「少しも」
「本当に？」
「本当の本当に」
「聖人の言葉にこういうのあるの知ってる、怜くん。愛情の反対は……」
　そのあとの言葉を怜は言わせなかった。彼女の言葉を遮って、
「やっぱり少しだけ」
　いう。
「やっぱりね。怜くんのご両親の前で何か失敗したら手を差し伸べてね」
「差し伸べた手をどうするんですか？」

「引っ張るかも」
「だと思った。一緒に穴に落ちるじゃないですか」
「落ちた先に新しい世界がある」
「そんな新世界の開き方は嫌です」
「じゃあ、魔法の絨毯に乗せてくれる？」
「絨毯に乗っても世界は変わらない。変わるのは自分自身です、ジャスミン」
「あら、負けちゃったかな。では、勝利の褒美として汝に姫の荷物持ちの栄誉を与えよう」
「ありがたき幸せ。お召し物は一着だけですよね、姫？」
「そのつもりだけど、女は移り気なもの」
くすくすという抑え切れないような笑い声が、運転席から聞こえてきた。
「娘の新たな一面が見られて今日はいい日だわ」と環の母。
「お母さんにショックを与えちゃったみたい。わたし、家ではいい子で通ってるから」
環が人差し指を頬に当て少し首を傾けて、カワイイ顔を作った。
街の目抜き通りで下ろされた二人に、二時間の猶予が与えられた。
「ちょっと少ないかもしれないけど、家で円がお昼を作ってるから。それに間に合うようにね。加藤くん、お昼ご一緒していただける？」
「はい」
怜の返事を聞くと、満足そうにうなずいた環の母は、オープンカフェで待つので、何を買うか決まったら呼びに来るように告げた。
「環とそっくりだな」
環の母の後ろ姿を見送りながら何気なく言った言葉だったが、それは不注意なものだったらしい。
「……親子だから」
とだけ答えた環の声に珍しく張りがない。怜の言葉に何を思ったのだろう。何にしても失言である。謝った方が良さそうだ。そう思った怜を環が楽しそうに見つめている。

「何だよ?」と怜。
「怜くんでも緊張するんだなと思って」
機先を制された格好になった怜は、謝罪の言葉を引っ込めて、攻める方向を変えた。
「するだろ。今だってしてるよ」
「今? どうして?」
「可愛い女の子が近くにいれば、緊張もするだろ」
「あら、デート中に、他の女の子に目移りですか?」
環はわざとらしく辺りを見回した。怜は、こほんとわざとらしい咳払いをすると、
「オレの目に映るのは君だけだよ」
と大仰に言った。環は声をあげて笑った。機嫌は直ったらしい。
横を歩く環の様子を窺いながら、怜は彼女の新たな面を垣間見たような気がした。それは彼女にとっては不測のことだったのだろうか。分からないが、どちらにしろ、それよりも大事なことがある。彼女の新たな面を見たことによって、怜自身が行動を変えたということだ。それは取るに足らないほどの変化だったが、大事なのはそれが変化だということである。すると、環を見ていたようでいて、実は彼女を通して自分自身を見たということになる。そういう経験は他になかった。環と付き合うということはそういうことの繰り返しなのだろうか。だとしたら、それは良いことなのか。ただ、嫌な気分ではなかった。
「こ、ここに?」
数分後、怜はうろたえた声を上げた。
今度は作ったものではない。本心からのものである。
怜の目の前で、明るく開放的な婦人服店が彼を待ち受けていた。

第11話：今どきの姫は自ら剣を持つ

環が代わる代わる試着している間、彼女のファッションショーのただ一人の観客である怜はいたたまれない思いだった。店内には、もちろんカップルもいたのだが、店は量販店ではない、さすがに中学生はいなかった。居心地の悪そうな怜に対して、行きつけの店なのか、環の方は若い女の店員と親しげに話し、新作や一押しのものを持ってきてもらっていた。

「これにしようかな」

制限時間ギリギリまで使って、最終的に彼女が選び出したのは、爽やかなサックスブルーのワンピースだった。清潔感と共に、ウエストのサテンリボンやスカートのプリーツが女の子らしさを強調していた。怜は頭がくらくらした。それは、店に来て彼女が一番初めに試着したものだったのだ。

「どう思う、怜くん？」

もちろん怜はこれでもかというくらい褒めておいた。半ば自棄（やけ）である。カレシの不自然な態度に環はその整った眉を上げ、

「やっぱり別なやつの方がいいかな」

とひとり言のように言った。うろたえる様子を見せた怜を見て、いたずらっぽく笑う環。店員に、服を包んでもらうように言ったあと、店を出る二人。

環の母を呼びに行くオープンカフェまでの途上で隣の少女の顔が弛んでいるのを、怜は見咎めた。

「何が可笑しいんだよ？」

訊かずとも理由は分かるような気がしたが、一応訊いてみると、

「ごめんなさい。でも、おろおろしてる怜くんって、新鮮だったから」

とやはり予想通りの答え。楽しげな少女に、

「環にはないんだろうな、そんなこと」

と訊いてみると、

「あら、もちろんわたしにもあるわ、おろおろすることくらい」

と心外な振りで答えた。

どうだか、疑わしい。まだ付き合いが短いせいか――ちなみに、三ヶ月強が中学生カップルにとって長い付き合いか短い付き合いか、怜にはよく分からない――彼女が驚いたところや戸惑ったところを今まで見たことがなかった。なすべきことが常に分かっているような、そんな印象がある。

「明日は緊張すると思うから助けてくださいね、我が騎士よ」

環が言う。怜の家に来るのは、昨晩の電話の時に明後日、すなわち今日から考えると明日ということになっていた。

「そんなことにはならないと思いますけど、一応剣を磨き準備をしておきますよ、姫」

軽口をたたきあっているうちに、環の母のいる洒落たカフェについた。

対加藤家攻略のための武装を手に入れたあと、一行は車で環の家に戻った。家では豪勢な昼食が待っていた。環の二人の妹が怜をもてなすために用意してくれていたのだった。二人の少女の態度は好対照をなしていた。下の妹の旭の方は、さっさと怜の横に陣取って、食べるのも忘れ――そして客に食べさせるのも忘れ――小学一年生の日々がどんなに過酷なものかおしゃべりを続けた。母親に再三たしなめられてもどこ吹く風で話し続ける。よほど怜といるのが楽しいらしい。対して、もう一人の妹である円の方はほとんど口を開かなかった。怜から話しかけても、礼儀を通すためだけに言葉を返しているようで、あまり話したがらない。思春期特有の照れであると思いたいが、どの時期であれ自分が女の子から照れられる人間かどうかくらいは分かっているつもりである。仕方ないところである。誰からも好かれることなど、少なくとも怜には、無理な話だった。

ただし、嫌われても構わないなどという態度はいかにも幼い。嫌われていたとしても、好かれる努力をするのが大人というものであ

る。もちろん、そういう努力をするのに値しない人間もいるが、カノジョの妹であればそれに値するかどうかなど考えるまでもない。
食事が終わったあと、旭がちょっと席を外した隙を、怜は見計らった。
「拭く方と洗う方、どっちがいい？」
後片付けをしているところに、突然闖入してきた招かれざる客に、円は無表情を崩し、驚いた声を上げた。
「お客様にそんなことさせられません」
怜はさっさとそでをまくると、
「割と得意なんだ。ウチでいつもやらされてるから」
と自分より少し背の低い少女の横に立つ。その時点で劣勢に立ったことを認めたのか、円は不承不承といった調子で、怜に皿を拭くように指示した。
ここからが本番である。怜は、円が洗った皿を受け取って、布巾で拭きながら、
「円ちゃん。料理得意だね。美味しかった」
と明るい声でいった。円は食器を洗うのに集中している様子を見せ、
「あのくらい普通です」
とそっけない答えを返した。沈黙を作ったらそこで終わりである。怜は何とか話を続けた。
「そのセリフ、ウチの妹に言ってくれないかな？」
「……妹さん？」
「そう。一人いるんだけど、これがヒドいやつで。家のことなんか何もできない上に、がさつだし、嫌なことは全部兄に押し付けるしでさ。もしかして、円ちゃんがオレの役だったりする？　家のこと、お姉さんに押し付けられてたりして」
「好きでやってるだけです。無理にじゃありません」
「今度、オレにも教えてくれないかな。料理って全然できなくて」
「姉に聞いたらどうですか？」

「お姉さんって料理できるの？」
「……わたしができることは姉は何でもできます」
その声の冷ややかさに、怜には円の環に向ける感情の所在が少しだけ分かった気がした。無論、そういう感情だけではないだろうが。ふとそんなことを思っているうちに、怜と円の間に沈黙の帳が降りかけていた。危ないところである。怜は口を開いた。
「ところで、円ちゃん、中学校には慣れた？」
「もう一ヶ月になりますから」
「友だちとかは？」
「まだ一ヶ月ですから」
「部活は？　何に入るか決めた？」
「まだです」
「小学校のときは何やってたの？」
「特には何も」
「好きなこととかは？」
「読書です」
怜にしてはがんばった方だったが、結構な量の皿を拭き終わってもなお、円の心の扉を数ミリでも開くことはできなかった。まあ、いいだろう。結果よりも過程が重要だ。結果重視は、学校の成績だけにしてもらいたいものだ。
「おつとめ、ご苦労様でございます」
やることがなくなって話す種も尽きた怜がリビングに移動すると、環が訳知り顔に微笑を添えて迎えてくれた。
そのあとは、主に旭の相手をさせられて午後が過ぎた。家を辞すとき、まあまあ大過なくできたことに怜は満足した。次は、環の番だが、これは心配には及ばないだろう。姫を守るために剣を研ぐ必要は感じなかった。
明くる日。環の訪問は加藤家にとってはセンセーショナルなものとなった。昨日買ったワンピースをまとい大人しやかな所作をする彼女は確かに美しかった。

「怜さんと親しくお付き合いさせていただいています。川名環と申します。初めまして」

と言って、玄関先で頭を下げる可憐な彼女に、休暇中の父と母の方がうろたえたくらいである。普段、親が動揺するところなど見ることもないので、これは中々面白い見世物である。

あいさつを済ませたあと、車でドライブということになった。父が間が持たないことを心配したのだろう。年の功である。ワゴンタイプの車に、運転席に父、助手席に母、真ん中の列に環と彼女を崇拝する都、最後尾に怜が一人で座ることになった。

車中は和やかな空気だった。普段、無口な父が饒舌になっている。環は聞き上手だった。相手の話にうまくあいづちを打ち、関心と感心を示す。あまり家族に話を聞いてもらえない寂しさを一時環が埋めてくれるだろうと、怜は父のために喜んでおいた。

車は新緑の丘を進んでいく。

車中に朗らかな笑い声が響く穏やかな時間。そんな時こそが、加藤家のトラブルメーカーが本領を発揮する時だった。

「環先輩、一つ訊いてもいいですか？」

環が都のほうを向いた。

「なに、都ちゃん？」

「先輩はどうしてウチのお兄ちゃんなんかと付き合ってるんですか？」

その瞬間、車中は凍りついた。

「ミヤコ、何てこと訊くの」

母がたしなめるが、

「お母さんだって気になるでしょ。こんな綺麗な人がどうしてお兄ちゃんとってさ」

都は気にしない。母が反論しないのをいいことに、

「お兄ちゃんのどこが良かったんですか、先輩？」

と妹は言葉を継いだ。兄は心中で舌打ちした。終始和やかな雰囲気でいくなどと甘い見通しを立てていた自分に腹が立つ。環につい

ては何も心配なことなどなかったが、都がいたのだ。こちらを牽制しておくべきだった。

環の目がちらりと後ろを向いて怜と目が合った。まさか、と思ったが、昨日磨き切らなかった剣で妹と戦わなければいけないのだろうか。環は目をしばたたかせた。助けは要らないらしいことはすぐに分かった。

「優しいから」

環の声が車内に響き、続く言葉を待つ都に、

「とても優しい人だから、好きになりました」

そう言って、環は恥ずかしそうに目を伏せた。都は納得の行かない顔をした。

「優しい？　お兄ちゃんが？　先輩、それ騙されてますよ。お兄ちゃんは全然優しくないですって」

「妹っていうのはありがたいもんだな。必死に兄のフォローをしてくれるんだから」

怜は一太刀浴びせてやろうとしたが、

「お兄ちゃんは黙ってて」

と軽く切り返された。

「お兄さんはとても優しい人よ、都ちゃん」

環が、微笑ましい兄妹の間に、割って入った。

「そうですか？」

うさんくさそうな都に、

「今まで都ちゃんが困ったことがあったときに、お兄さんが助けてくれないことがあった？」

環が続ける。都は視線を宙に浮かせ、思い出すような顔をした。

「うーん、あんまり助けを求めたことないけど……確かに、そう言われれば……」

「今までも助けてくれたと思うし、都ちゃんが困ってるときは、お兄さんはこれからも必ず助けてくれるわ」

環の確信ありげな声は、妹に対して説得力を持っているようだっ

た。都が新たな目でこちらを見ているのを感じながら怜は環に感謝した。義理堅いことである。都の問いに答えるとともに、いつかの約束を果たしてくれたというわけだ。

そう言えば、と怜は思った。環が自分に告白した理由は聞いたことがなかった。はからずも妹のおかげでそこに思い至ることができた。感謝する気はないが。確かに妹の言うとおりである。なぜ彼女が自分と付き合っているのか。まさか今しがた彼女が言った言葉通りを信じるほど、怜は人は好くない。では、どういう理由なのだろうか。しかし、その問いは怜の中ですぐに霧散した。それは環の側の話で怜の側の話ではない。彼女が何を考えて付き合っているのかは分からないが、教えてもらいたいとも思わない。環が話したければ話すだろう。

その後は何ごともなく、車は木漏れ日差す木々の間を抜け、軽快に走っていった。

第12話：ゴールデンウィーク明け、開く少女の心

ゴールデンウィークも終わり、次いで三年生で初めての定期テスト期間となった。結果は、まあまあだった。平均点や順位などの正確な評価は一週間程度待たなければならないが、得点は上がった。何より初めて準備をして向かった試験である。怜は満足した。母は満足とはいかなかったようだ。返された答案を見せると、何ともコメントのしづらい顔をした。おそらく、前よりも点数が上がっているので褒めてやりたいという気持ちと、期待したほどでもないので叱咤したいという気持ちの間で揺れているのだろうと怜は推測した。結局、

「やればできることがこれで分かったんだから、次はもっとがんばりなさい」

という褒め言葉か何だか分からない言葉で終わった。がんばったばかりなのに、次はもっと、などと言われるのは正直げんなりするところであるが、怜は気を取り直した。受験勉強については別に褒められたくてやっていることではないのだ。

塾講師の山内女史の態度は怜の性に合っていた。彼女は一切褒めるということはしなかった。テストの答案を見せると、どこで得点を落としたのか、という失敗の分析だけを促される。

「成功は一人で噛み締めればよろしい。大事なのは失敗したことの方です。自分が失敗したことは普通、人は直視したくないものです。それをさせるのが私の仕事です。失敗は実は優しいんですよ、加藤くん。多くのことを教えてくれますから」

この件に限らないが、彼女の言葉には説教くさい所がない。淡々としたものである。が、教え諭そうとせず単なる事実を述べているだけという口調の言葉であるがため、かえって胸にすっと入るのである。周囲の大人に敬意を持って接する人間はこれまでいなかったが、山内講師がその最初の一人になりそうだった。親には感謝はし

ているが、敬意とまではいかない。
テストも終わり、ほっとした空気が教室内に現れたころのことだった。
三年六組の教室には、一つ、必ず空いている机がある。
その机の主に向かって、クラスメート全員で手紙を書こう、などということが言われたのが、ある日の五時限目のことである。『総合』という何をするのか皆目見当のつかない教科にふさわしいとでも思ったのだろうか。やたらと張り切る教師に、冷めた様子でしぶしぶ従う生徒たち。怜もその一人だった。話したこともない相手に何を書けばいいのか、さっぱり分からない。五十分してどうにか書き上げはしたが、内容を気に入ってもらえる自信はない。「学校に来なよ」的なことを書けば良かったのだろうか。話したこともない相手である。しかも、そもそもそんなことは考えたこともない。むしろ、来ないことに何らかの理由があるのなら、それを尊重してやればいい。学校に来ないことを可哀想だという気は怜にはない。来ないなら来ないで、その来なかったことを活かして今後、生きていくしかない。そうするしかないし、それでいい。あとは、覚悟の問題である。
さて、書いた手紙は届けなければならない。その段になって、問題が起こった。
誰が届けるか。
郵便制度を利用しても良いだろう。しかし、励ましの手紙が郵便で届くというのも興が冷める。さらに担任教師が届けに行くよりは、クラスメートの方が良いだろう、ということになった。では、誰が。議論は紛糾し、六時限目になだれ込んだ。
義侠心というよりは単に面倒くさくなった怜が名乗り出たのが六時限目が半分過ぎたくらいのときだった。クラス中の目がいっぺんに集まり、その中には怜に対して批難の視線を送る者もいた。まだ残り時間もあるのに、なぜこのタイミングでという輩である。
「オレが行きます。そんなに回り道にもならないし」

怜にはそんな輩に気をつかう気などなかった。怜に便乗して、じゃあ俺も一緒に、などという男子も出始めたが、

「オレ一人でいいよ」

とはっきりと言って彼らを鼻白ませた。なんで、ぞろ何人かで一緒になんて話になるのか、意味が分からない。行きたければ、最初から名乗り出ればいい。他人がやったからじゃあ自分も、などという己の意志のない人間は、怜にとっては唾棄すべき者たちだった。そんな人間と肩を並べて歩くのは気分が悪い。

一緒に帰るために校門で待っていた環がそういうことを言い出さなかったのは幸いだった。

「スズちゃんはちょっと変わってるけど、すごくいい子よ」

手紙の受取主は環の友達らしかった。話によると、小学校からの付き合いらしい。二年の夏休み明け頃から学校に来なくなってからも、休日に一緒に遊びに行ったり、メールのやり取りをしているという。

「不登校になったのはね……」

と話し始めた環の言葉を、怜は遮った。興味がなかったということもあったが、その人の行動の理由をその人以外から聞いて理解した気になるのが嫌だったのだ。

環はスズ――橋田鈴音の家の近くまで案内してくれた。

「あとで聞かせてね」

そう言って彼女は帰路を取った。

怜は首を捻った。聞かせるほどのことがあるだろうか。ただ手紙を渡して帰るだけである。インターホンを押すと、鈴音の母親だろう女性が現れて用件を聞いた。怜が、クラスメートであることを告げ、クラスの用事で鈴音さんにお会いしたい、ということを言うと、待つように言われた。しばらくの後、玄関のドアが開き、しかし、出てきたのは母親だけだった。

「ごめんなさい」

申し訳なさそうな顔で、クラスメートには会いたくない、と鈴音

が言っていると伝えてきた。
　じゃあ、ということで手紙を置いて帰って来ても良かったのだが、そこで先ほどの環の言葉を思い出した。
――あとで聞かせてね。
　その言葉は、聞かせるだけのことはしろ、とも取れる。深読みのしすぎであるかもしれないが、怜もせっかく来て子どもの使いで終わる気はなかった。
「鈴音さんに伝えていただきたいことがあるんですが」
　鈴音の母親は、続く怜の言葉を聞くと、意外な面持ちを作ったが、ちょっと待っててね、と言って、もう一度取り次ぐために家の中に入った。少しして現れた彼女が、鈴音が部屋に上げるように言っている旨を伝えてきた。これで環に話せるだけのことにはなりそうである。
「それで？　どういうことなの？」
　飾り気の少ない簡素な部屋の主は、怜を入れると、ベッドに腰を下ろして言った。Tシャツとハーフパンツというラフな格好だったが、ハーフアップにしたロングの黒髪が年よりは大人っぽい印象を与えていた。
「なにが？」
　怜は、素知らぬ顔を作った。少女はいらだった様子を見せると、
「お母さんに言ったことよ。『鈴音さんのことが前から好きで今日は告白に来ました』っていうやつ」
　と値踏みするような目を向けた。
　怜は学生鞄の中にあった手紙の束を取り出して、鈴音の前に出した。彼女はそれには目もくれずに、
「答えて」
　と迫った。
「物を届けにきたんだから、会うのが礼儀だろ」
　それが怜の答えだった。門前払いを食らいそうになったとき、彼女に興味を持ってもらえるようなことを言わないと会えそうにない

と考えて、とっさに思いついたことを言ったのであった。とっさにそんな言葉が出てきたのは、ここ最近のクラス内での経験からであった。同学年の子は異性と付き合うということに格別の興味があるらしいということが知識として身についていた。こうなると嫌な経験も決してマイナスだけではないということになる。

鈴音は細い眉を寄せた。突然の告白は、会わせる方便として言ったことであるということが理解できたのだ。

「普通、そんなこと言うかな」

少女は呆れたような声で、差し出されている手紙の束を受け取ると、小さなテーブルにぞんざいに投げ捨てた。

「座ったら？」

怜は素直にそれに従った。

「で？　学校に来いとか、そんなことが書いてあるんでしょ」

「さあ、他人が何を書いたかは知らないよ」

「あなたは書いてないでしょ」

鈴音は確信を持っているかのように言った。怜は首肯した。少女は、手紙の束の中から一通選び出すと、読み始めた。その手紙に一通り目を通すと、

「なに、コレ。好きな本のことを書いてるだけじゃない」

呆気に取られた声を出した。どうやら手紙は怜のものらしい。

「他に書くことが見つからなかったんだ。それでも苦労した」

「悪かったわね、苦労させて」

鈴音は軽い嫌味を声に乗せてそう言うと、

「変なの。学校に来いって書いてない人が書いた人の手紙を持って来るなんて」

続けたときに、部屋のドアにノックの音がした。

鈴音が応えると、彼女の母が焼き菓子と紅茶をトレイに載せて入って来た。娘と、娘のカレシ候補の少年を交互に見て落ちつかなげである。

「ごゆっくりね、ええと……」

「加藤です。加藤怜」
怜は鈴音の母に、門前でした自己紹介をもう一度繰り返した。
興味ありげな顔の母が出て行ったあと、鈴音が迷惑そうな顔で、
「あの顔、お母さんはあなたが言ったこと信じちゃってるんじゃないの。どうすんの？」
訊くと、
「告白されたけど断ったって言ってくれればいいだろ」
軽い調子で怜が応える。
「もしわたしが信じたらどうすんのよ。ウソの告白で傷つけるかもしれないのよ、女の子を」
「謝る」
臆面もなく言う怜に、初めて鈴音の仏頂面が崩れた。
「タマちゃんの言ってた通りだわ。ほんっとに変な人」
微笑をこぼしながら言う少女。タマちゃん、とは環のことだろう。
彼女からどういう情報を得ているのだろうか。
「それは女の子同士の話よ、加藤くん。でも、いろいろ聞いてるわ」
意味ありげな笑みでそう言うと、冷めないうちに、と紅茶を勧めてきた。怜は無言で紅茶を飲み干すと、しばしの沈黙が訪れた。初対面の子である。話すことも特にない。そのまま沈黙していても仕方ないので、怜はおもむろに学生鞄の中からプリントを取り出した。
「あのさ、お前、英語できる？」
鈴音の眉がくもる。それは突拍子もない問いに対してではない。
「お前ってやめてくれない。鈴音っていう名前があるんだからさ」
「じゃあ、鈴音。英語できる？」
鈴音は額に手を当てて芝居がかった風で頭を振った。
「今日初めて会った女の子を呼び捨てですか？」
「スズちゃん？」
「それは友達にしか許してない」
「鈴音さん？」
少女は諦めたようにため息をついた。

「やめてよ、スズでいいわよ、加藤くん」
「レイでいいよ」
「そういうわけにはいかないわ。あなたのことで、タマちゃんとの友情を壊したくないからね」
　怜を愛称で呼ぶことがどうして女同士の友情の妨げになるのか、怜自身には分からなかったが、それは訊かなかった。訊いても女同士の話である。答えてはくれないだろう。
「それで、何の話だっけ？」と鈴音。
「英語できる？　宿題があるんだけど」
　塾の宿題である。テストが終わったからといって山内講師の手は弛まない。どころか、さらに少し厳しさを増した。
「教えろってこと？」
　それには答えずに怜は、英語のプリントを広げ、さっさと分からないところを訊き始めた。参考書がないと埋められないところなのである。
「あのさ、わたし、不登校なんだけど。勉強なんてしてると思う？」
　そう言う少女の注意を、怜はある方向に向けた。彼が指差した先に本棚があり中学三年生用の参考書が並んでいた。
「女の子の部屋をじろじろ見ないでよ」
　憤懣やるかたない振りをした鈴音だったが、菓子のトレイを机の上にかたすと、怜の横に座り、彼のプリントを手伝ってくれた。しばらくの特別授業により、プリントの空欄はきれいに埋められた。
「頭いいんだな。サンキュー」
　すっかり終わった怜の満足そうな顔を見ていた鈴音は、
「加藤君は聞かないの？」
　唐突に訊いてきた。
「わたしがどうして学校に行かないのかとか、何か学校に嫌なことがあるのかとかさ」
　続く言葉に、プリントを鞄にしまった怜はすぐ横にいる鈴音をちらと見た。少女の顔が皮肉な笑みを作っている。

「前に来た『クラスのお友達』はいろいろ励ましてくれたりしたんだけど」

彼女は助けを求めているのだろうか。あるいはそうだとして、しかし、怜にできることは何もなかった。

「自分の問題は自分で解決するしかない。でもそもそも解決する必要はないのかもしれないし、そもそもその問題は問題じゃないのかもしれない。それを決めるのも自分なんじゃないか」

怜は静かに言った。

少女ははっとした顔を作った。その唇から、加藤くんは強いね、という呟きが漏れた。

「でも、そんなに強くない人はどうすればいいと思う?」

鈴音は目に真剣な光を溜めて訊いてきたが、その問いに答えはなかった。ヒロインを助けるヒーローを気取ることができたらどんなにか素晴らしいことだろう。いや、助けることはできるかもしれない。しかし、助け続けることは……。

部屋が薄闇に溶けてきた。

「電気を点ける時間まで引き止めてたら、タマちゃんに嫌われちゃうわ」

鈴音の婉曲な言葉に怜は席を立った。階段を下りたところで、鈴音の母親が現れ、名残惜しそうな顔で、怜を見た。

靴を履いた怜があいさつの為に振り返ると、鈴音が決然とした顔を作っているのが見て取れた。彼女は、怜を真正面に見つめると、おもむろに切り出した。

「お母さん、わたし、明日から学校に行くわ」

突然の言明に横にいた母親が驚いたように娘を見た。鈴音はそのまま怜を見つめ、

「加藤くん、明日の朝、迎えに来てくれる?」

どこか挑戦的な調子で言葉を継いだ。

「さっきの告白、受けることにするわ。仲良く学校に登校するのは、中高生カップルの基本だよね」

彼女の視線とともにその意志が伝わってきた。怜はためらわなかった。間接的にではあるが自分が招いた事態である。責任を取らなければならない。明日迎えに来ます、ということをいまだ驚きの表情を張りつけたままの鈴音の母に告げ、玄関を出た。

夕暮れの中を歩く怜の胸に気がかりが一つ。環はこの行動をどう評価するだろうか。普通であればいい気分はしないだろう。普通でなかったとしても失礼な行為には変わりない。何にせよ、事の顛末（てんまつ）を報告し、彼女の審判を仰がなければならない。家に帰り部屋に戻った怜は、携帯を手にとって環の番号を呼び出した。

第13話：たまには手を引かれて歩くのも良い

翌朝、約束通り、怜は鈴音の家の前に彼女を迎えに来た。制服を身につけて玄関から外に現れた彼女はどこか居心地が悪そうにしていた。久しぶりの制服に戸惑っているように見える。

「おはよう、加藤くん」

声は平静だったが、顔には不安な色を見せる少女に、

「よく似合ってる」

と怜が言うと、鈴音は瞳を大きくした。

「似合ってる？」

それは褒め言葉などではない。発奮の言葉である。鈴音はその言葉を受け止めた。軽く目を瞑ったあとその目を開くと、意を決したように歩き出した。怜がそのあとに続く。鈴音の母は心配そうな顔で怜に、娘をお願いします、と声をかけた。

初夏の爽快な日だった。

鈴音の気分は爽快とは言えない。決意して歩き出しはしたものの、胸に溜まるもので気持ちが悪く、それにつれてどうしても歩みが遅くなる。止まらないでいられるのは、斜め前を歩く男の子のおかげだった。

通学路にちらほらと他の生徒の影が見え始めたとき、

「笑わないで聞いてくれる？」

鈴音が怜の横に並んだ。

「わたしのことを見てるような気がするんだけど」

ハーフアップにした頭を動かし、落ち着かなげに周囲に視線を走らせる。男女一組で登校してれば何かと目立つものであるが、そういうことを言っているのではない。彼女にナルシシスト的なところがあるわけでもない。怜は鈴音の方を見ないままで、

「その通りだろ。みんな見てるよ、スズを」

平然と言った。少女の細い肩が震えた。

「……何で見てるの？　どっかおかしいのかな、わたし？」
「いや、逆だろ」
「逆？」
鈴音が訝しげに見た少年の横顔が彼女の方を向いた。
「スズが可愛いから見てるんじゃないかな」
鈴音は小さく息をついた。ふっと少し体が軽くなったような気がした。和らいだのが自分でも分かる瞳を怜に向けて言う。
「あなた、タマちゃんに似てる」
「オレが？」
とてもそうは思えないな、と怜は続けた。
「今日だって迎えに来てくれたでしょ」
と鈴音。
「昨日約束したからな」
「その約束をすること自体がね」
「環はオレなんかとは違うだろ、強いし、賢明だし、クールだ」
「そうでもないわ。今日のこと話した？」
「ああ」
「タマちゃん、何て？」
「何も」
「どう思う？」
「どうも思ってないんじゃないかって思ってる」
「本気？　カレシが他の女の子と登校するのに何も思わないって？」
「スズは環の友だちだろ？」
「じゃあ、タマちゃんが加藤くんの友だちと登校しても、加藤くんは何にも感じないの？」
「考えたことないな」
「じゃ、考えてみて」
「……そういうことになってみないと、分からないな、やっぱり」
「鈍感」
「よく言われる。いまだに環がオレのどこがいいのか分からない」

「そんなこと言う男の子って惹かれないな」
「だからますます分からない。今度、スズから訊いておいてもらえないか、環に」
「わたしが？」
「女同士、そういう話で盛り上がるんだろ？」
「まあ、確かにね」
「スズは誰か好きな奴とか？」
「それ聞いてどうするの？」
「興味本位」
「興味？」
「そういうことに興味のある年頃なんだ、いるの？」
「あのね、そういうことを女の子に訊いていいのは、その子に気があるときだけよ」
「昨日告白しただろ」
「ウソのね」
「だとしても、かなり緊張した」
「緊張することあるの、加藤くん？」
「緊張しかしたことない」
「どういう人よ、それ」
思わず笑ってしまった鈴音の足がふと止まった。怜ととりとめのない話をしている間に、調子よく歩は進み、いつの間にか校門が見えるところまできていた。鈴音は、はっと何かに気がついたような顔を作ると、じろりと怜を軽く睨むようにした。
「わざとね？」
怜が答えないことで、鈴音は確信した。怜の軽口は、彼の気質から来る自然なものではなく、しっかりとした目的を持った意図的なものだったのである。ここまで歩いてくるのにさしたる困難を感じなかったのは、彼が注意を目的地から逸らしてくれたおかげだった。
「やっぱり、あなた、タマちゃんに似てるわ」
そう言って鈴音は歩き出したが、校門の前で再び立ち止まった。

少女の整った眉が寄った。視界に映った校舎に胸が締め付けられ、それに耐えるように学生鞄を持つ手に力が込められる。たたずむ鈴音の横を、学生服姿の同年代の少年少女が通り過ぎている。どうしてもそれ以上足が前に進まなかった。まるで地に取られているかのように足が重たく感じる。周囲の生徒たちが不思議そうな目で彼女を見ていた。その視線も鈴音には自分を嘲笑(あざわら)っているように感じられていた。勇気のない自分をバカにしている。恐怖に囚われている自分を蔑(さげす)んでいる。

「スズ」

自分を呼ぶ声がする。どこか遠くから聞こえてくるようなその声の方に目を向けると、少し離れたところに手が差し出されていた。一歩、ほんの一歩だけ歩み出せば、その手を取ることができる。鈴音の足が一歩地を踏みしめ、彼女の手が差し出されていた手を握った。温かい手だった。その手の温かさに心まで温まるような気がした。

「……自分が情けないわ」

下を向いた鈴音の顔を上げさせたのは、平板な調子の声だった。

「一歩目は自分で踏み出したことに変わりないだろ。あとは、たまには手を引かれて歩くのもいいさ」

怜の顔は平静なものだった。そこには慰めも励ましもないように見えた。ないように見せているのがこの少年の優しさだと鈴音は見ていた。彼にはそういう気はないのかもしれないが、それは鈴音とは関係ない。握っている手にぎゅっと力を込めると、

「一つ借りとくわ、加藤くん」

そう言って鈴音は手を離し、生徒用玄関に向かって歩き出した。

鈴音は職員室に向かうと担任教師に挨拶した。担任は大げさな喜びを見せた。鈴音の母から連絡を受けていたが、本当に来られるかどうかは半信半疑だったのだ。職員室を辞すと、怜を横にして鈴音は、三年六組の教室に向かった。

教室の前で立ち止まることはなかった。鈴音はすっとドアをくぐ

ると、ドア近くにいたクラスメートに挨拶した。クラスメートがきょとんとした顔をしているのに構わず、怜に教えてもらった自分の席につく。鈴音を見ながらひそひそとした囁き声が流れてきたが、彼女はそれを聞き流した。朝の授業前の時間に、鈴音に発言の機会が与えられた。鈴音は席から立ち上がると、昨日の励ましの手紙で学校に来たい気持ちになりそれを皆に感謝している旨を述べた。着席すると、拍手の音が聞こえてきた。その音につられるようにして、教室中から拍手が起こった。鈴音には誰が最初に拍手をしてくれたか分かっていた。

一日はまたたくまに終わった。

鈴音が教室を出ると、後ろから彼女を呼び止める声がする。

「帰りはいいわよ、加藤くん。一人で帰るわ」

追いかけてきた影にはっきりと言ったが、

「そういうわけにはいかない。スズのお母さんから頼まれてる」

と答えた怜がさっさと歩き出す。仕方ない振りで、鈴音がその横に並ぶ。

校門で怜はふと立ち止まって、そこにある幾つかの人影を確かめた。もしかしたら環がいるかもしれないと思ったが、彼女の姿はなかった。まだ来ていないのか、それとも一緒に帰る気がなくて先に帰ったか。後者のような気がした。

鈴音の家の前まで来ると、彼女の母親が落ち着かなげにうろうろとしているのが見えた。久しぶりに学校に行った娘のことを心配していたのだ。こちらの姿を認めると、安心したような顔をした。

「どうだった?」

母親の探るような問いに、

「まあまあ」

と鈴音は簡単に答えた。怜は、鈴音の母から、今日の礼を言われ、家に寄って行くように言われた。礼は丁重に受け、家への誘いは丁寧に断った。そのあと、鈴音に、

「明日も同じ時間でいいの?」

と声をかけた。
「加藤くん……」
続けようとした鈴音の言葉を怜は遮った。
「中高生カップルの基本なんだろ、一緒の登下校は」
鈴音は、しばしのためらいを見せたあと、うなずいた。
怜は自分が意外にお節介であるということに新鮮な驚きを覚えていた。いつから、そんな風な気の遣いかたをするようになったのか。頭に一人の少女の顔が思い浮かんだ。多分、彼女のせいだろう。
鈴音との登下校が一週間続いたある日の昼休み時間のことだった。怜は他のクラスからの訪問を受けた。
「倉木だと思ってたんだけどな」
と言った怜の前に、エッジの効いたショートカットの良く似合うボーイッシュな少女が立っていた。

第１４話：初夏の白日の下、中庭の法廷にて

怜（レイ）の机の周りにいた数名の男子が、口を開けたそのままで話を中断し、ぼおっとした顔を作った。教室に突如出現したショートカットの妖精に見惚（みと）れたのである。平井七海。三年生の中でも人気の高い女子の一人。無駄のないボディラインは見る者に繊細かつ優美な印象を与えるが、話し方や立ち居はエネルギッシュであり、そのギャップが彼女の魅力だった。男子に媚びるようなことをせず気取らず明け広げな彼女は、異性のみならず同性にも人気があった。

「加藤くんとしては、ヒナのほうが良かったの？」

七海が、机に両手を置いて、少し顔を近づけるようにして訊く。目前にある端麗な顔に他の男子なら照れて顔をそむけるであろうが、怜は動じない。正面に彼女を見たままで、首を横に振ると、

「いや、予想を言っただけだ。倉木にはもちろん、平井にだって来て欲しくない」

いう。周囲の男子から憎々しげな視線を向けられていることに怜は気がついていない。七海と気安く話している上に何やら拒絶の言葉を吐いているこの男は何様だろう。七海に人気があるのに反比例して、怜の人気は急下降した。

「おあいにくさま。ねえ、加藤くん。本当はヒナが来るって言い張ってたのよ。凄い形相（ぎょうそう）で。それを抑えてわたしが来てあげたの。感謝してもらいたいくらい」

ジュースでも奢るか、と譲歩した怜に、

「よろしく」

と答えた七海の顔が遠ざかる。すっと背を伸ばした彼女は、きょろきょろと辺りを見回すと、立ち上がった怜に口を寄せてひそやかに訊いた。

「それで？　加藤くんの二股の相手はどこなの？」

怜は目を細めた。批難の意を込めて七海を見たわけだが、彼女に

は通じない。形のよい薄桃色の唇に笑みを乗せて先を促している。
玲は自分の視線を追わせた。その視線の先に、何人かの女の子に取り巻かれている一人の少女の姿がある。彼女は、みなの中心になって、楽しそうに会話を捌いていた。ふと玲と目が会うとにこりと微笑んだ。その微笑みは七海の目にも映っていた。
「あの子なんだ」
へえ、と彼女は一声納得したような声を出すと、合図して玲を廊下に連れ出した。そのままずんずんと歩いて行く七海に連行されていくと、最後に到達したのは中庭であった。何人かの生徒たちが初夏の眩しい光を浴びていた。
「さ、ここでいいわ。聞かせてもらいましょうか」
くるりと体を回転させて顔を向けた七海が切り口上で言った。何をしゃべらせたいのか、尋ねると、
「説明する必要あるの？」
と七海は訊き返した。
玲としては一応言ってみただけである。七海が何の用で会いに来たのかということは容易に想像がついている。
六組内にあるウワサが流れていた。玲とこれまで不登校だった女の子が、仲良く登下校しているというウワサである。それは事実であり、それだけであるなら特に問題はないのだが、その事実はさらなる推測を生んでいた。玲が二股をかけているのではないかというものである。現在カノジョがいるはずの者が、別の女の子と登下校していたらそういう嫌疑もかけられて当然である。以前同じようなウワサが流れたことがあるが、今度はそれよりも信憑性が高い。
七海はそれが真実であるかどうかを確かめに来たのだ。二股をかけられているかもしれない友人を心配しての行動であるようにも思えるが、そうではないことは玲には分かっていた。動機はともかくとしても、
「同じクラスなんだ。まず、環に事情を聞けばいいんじゃないのか？」

怜が遁辞を構えた。

「『タマキ、あんた、二股かけられてるんじゃない？』とでも訊けって？」

怜の逃げ口上に怒った風でもなく七海は言うと、その瞳を柔らかな色にして、

「もう訊いてみたわよ」

と続けた。

「それで？」

「どうだったと思う？」

環の微笑が頭に浮かんだ。

「……笑って答えず」

「ご名答。だから、加藤くんのところに来たわけ。断っておくけどね、わたし自身は、加藤くんと環の仲のことなんて別に興味ないわ。ただ、わたしが興味がない分、ヒナが興味ありまくっちゃってね」

この二股疑惑の件に、友だち思いの倉木日向が激昂したであろうことは想像に難くない。七海はその日向の代わりに来たのである。

「日向は環のことになると見境がなくなるからね。加藤くんに何か間違いが起こるといけないと思って、わたしが来たのよ」

それはおそらく環だけのことに限られないだろう。詰まるところ、倉木日向という少女は誠実で友だち思いなのである。怜がそう言うと、

「そうかもね。西村くんとよく似てるわ。さすが幼馴染みだよね」

七海はうなずいた。

「で、どうなの、ウワサの方は。環の他に誰かと付き合うなんて話、わたしはばかげてるとしか思わなかったけど……」

意味ありげに間をおいて、

「もしかして、本当なの？」

と軽く疑っているような色を見せた。先ほど教室で七海の目に映った鈴音の姿は、とても魅力的だった。窓から差し込む昼のゆるやかな光を圧するような清冽な輝きが彼女にはあった。それがクラス

メートたちを惹きつけていたのであろう。
「もしウワサが本当なら早く別れてあげてね、環と」
冗談ぽく言った言葉は、怜の返答を促すためのものである。
「成り行きでこうなったんだ」
「ねえ、加藤くん。わたしはいいのよ、そういう答えでも納得する。でもね、それでヒナタが納得するかな？　明日ヒナタが六組に乗り込んでもいいの？」
強い目でにらみ、所構わず大きな声で責め立てる少女の姿を思い浮かべて、怜は首をすくめた。
「でしょ。さ、思うところを言ってもらえる？」
思うところ、と言われても格別考えていることなどない。が、それでは七海、引いては日向が納得しない。怜の口から出たのは、自分でも意外なものだった。
「環の代わりをしてる」
それが怜の答えだった。自然に喉から滑り出たその言葉が耳に響いたとき、すっと胸に落ちるものがあった。怜はなぜ鈴音の送り迎えをしているのかにようやく気がついた。
「……環の代わり」
七海は、その言葉を何度か舌の上で転がすようにして発音した。謎めいたその言葉を考える素振りは見せなかった。代わりに瞳に面白そうな光を宿した。
「つまり、環ができないことを加藤くんがやってる、そういうこと？」
七海がシャープなのはフェイスラインだけではないようだ。
怜はうなずいた。
「変わってるわ、あなたたち。ちょっとわたしが思ってた関係と違うみたいね」
どういう関係だと思っていたのだろうか。
「それは……加藤くんに悪いから言わないほうがいいみたい」
七海は微笑みながら言うと、怜の更なる追求をかわすかのように、

「ヒナにはわたしから伝えておいてあげるわ」
と話を変えた。
「助かるよ」
「『五郎庵』の抹茶とウイロウね」
「……今度は平井とウワサになる」
怜が渋い顔をしてみせると、七海は破顔した。
「それもそうね……じゃあ、紙パックの抹茶ミルクでいいわ」
それじゃ、と言って立ち去る七海の後姿を見送ったあと、教室に戻る間、怜は考えていた。無意識に言った言葉。環の代わりをしている、というその言葉にはなぜだかしっくりとくるものがあった。環からはここ一週間メールがないし、顔を合わせてもいない。それが今怜がやっていることへの彼女流の励ましのように思われた。
その日の帰り道。怜の横に並んだ鈴音が、
「お昼休みに来たのって平井さんでしょ」
と訊いてきた。七海のことを知っているのだろうか。
「顔くらいはね。二年の夏まで学校来てたから。相変わらず美人だわ」
その美人と何を話していたのか、と彼女は物問いたげな目を向けた。
「もしかしてわたしの話だったりする？」
「何で？」
「わたしの方、見てたじゃない」
怜が二股疑惑のことについて質(ただ)されたことを話した。
「どうして平井さんが？」
「環の友だちだからだろ」
怜はぞんざいに言った。日向のことまで説明するのが面倒だったからだ。容疑は無事に晴れたことを付け足すと、
「ご迷惑をおかけします」
と鈴音は歩きながら軽く頭を下げた。ピンと張ったような声に真剣味がある。別に誰にも迷惑などかけていない、と返した怜の声は

事務的だった。噂など、したい人間に勝手にさせておけば良い。
「環に会ったか？」
怜は話題を変えた。鈴音は首を横に振った。
「廊下ですれ違ったけど、話はしてない」
「どういう関係なんだ、環とは？」
今日は驚くことが多い日である。人と人がどういう関係かなどということは今まで興味を持ったことなどなかったのに、どういう心境の変化であろう。
鈴音も意外そうな顔で、
「嫉妬ですか？」
楽しそうな目を向けると、好奇心だよ、と怜が素直に答えた。
「加藤くんでも好奇心ってあんのね。そういうの無い人かと思った」
ひどい言われ様であるが、自分でもそう思っていたので反論はできない。怜は無言で先を促すと、鈴音は視線を前方に向けて、
「タマちゃんはね、わたしの大事な人、わたしに大事にしたいと思わせる人……」
と詠うように答えたあと、小首をかしげて、
「違うかな、わたしを大事にしてくれる人だな」
と訂正した。
まるで愛の告白である。
少女の花唇がほころんだ。
「ちょっと違うわ。愛なんていう気持ちの問題じゃない。ただの事実だから。タマちゃんはね、わたしの半身なの」
それならば、今鈴音の横にいるのは怜ではなく環でも良かったはずであるが、そうでない所に二人の関係に推し量りがたい不分明なところがある。それはそれで良い。それ以上に詮索するほどの興味は無い。怜は自分の役割を果たすことに専心することにした。
「それで、いつまで送り迎えしてくれんの？」と鈴音。
「さあな。今しばらくは」
「しばらくって？」

「スズの半身が迎えに来るまで」
「……それはいつになるか分からないわよ。明日かもしれないし、一年後かもしれない」
「別に構わないさ」
「タマちゃんを信じてるのね」
「ちょっと違う。信じるなんていう気持ちの問題じゃない。あいつは必ず来る。それはただの事実だよ」
鈴音はやり返されたことに軽く恨みを含んだ目をしたが、怜が冗談で言ったわけではないことが分かると、その目はすぐに笑みを含むものに変わった。
「本当に変な人だよね、加藤くんは」
瞳の笑みが、少女の顔一面に広がる。
その笑みから神経質な色が完全に拭われたときが、自分の役割が終わる時だろうと怜は推測している。それには今しばらく時間がかかりそうだったが、不思議なことに怜には憂いの気持ちがない。その役割が押し付けられたものではなく、自ら申し出たものだからだろうか。それとも鈴音の笑顔に、環の面影を見たからであろうか。後者だとは思いたくないが、今回の件で環の性質の一面に触れたような気が怜にはしていた。人の性質には奥深い複雑なものがある。そういう感慨は怜にはない。そうではなく、その性質を彼女が見せてくれたということの方が怜にとっては意味深いものだった。

第１５話：夕暮れの視聴覚教室、新メンバー登場

「納得が行かないわ、どーしても」

校舎の暮れなずむ一室で、倉木日向は声を大にした。言葉通りである。納得の行かないことがあるのだ。この世にはどうしても納得の行かないことがあり、それへの対応策は二つしかない。受け入れるか、断固戦うか。前者の選択ができるものは大人である。が、幸か不幸か日向は大人ではないし、そういう選択をしなければ大人になれないのだとしたら、そんなものはこちらから願い下げだという気持ちがある。

「絶対に納得行かないっ！」

室内に響かせるような調子で彼女が繰り返すと、隣から、

「まだ言ってんのか？」

と呆れたような声が応えた。日向は声の主をねめつけた。彼女より少し背の高い細く引き締まった体つきに目元に爽やかなものがある彼は、十四年来の幼馴染みである。椅子に座って悪友と何かゲームのようなものに熱中している。日向の目つきがきつくなっているのには気がついていない。いや、たとえ気がついていたとしても、そこは長い付き合いである。動じもしないのだろうが。

「コレ、岡本くんの勝ちでいいよ」

日向は机の上にある二人のゲーム盤になっていた紙をぞんざいに取り上げた。何すんだよ、と頭をウルフカットにした岡本少年の非難の声は、上からのぎらりとした視線で封じられる。その視線をそのまま幼馴染みに向けてみたが、案の定、彼は視線を受け止めたあと、受け流した。

「お前が怒ったってしょうがないだろ」

日向は胡散臭い目を彼に向けた。

「友だちのことよ。しょうがないで済ませられないでしょ、賢（ケン）。やっぱり私が行けば良かったわ。七海も七海よ、加藤くんの口車に乗

せられてさあ……」

日向は腰に手を当てて立ったまま、ひとしきり不甲斐ない友人の文句をいった。彼女が気を高ぶらせているのは、大切な友人のカレシが二股をかけているのではないかという噂についてだった。噂どころの話ではなく、日向自身、彼ら――そのカレシと二股相手の女の子――が仲良さげに話をしながら登校しているのを目撃しているのである。友人代表として、そのカレシのところまで事情を訊きにいき、事と次第によっては友人と別れてもらおうと思っていたところである。その役目を日向の別の友人が買って出たが、彼女は役目に忠実ではなかった。大した事情を聞かず、スゴスゴと引き返してきたのである。

「レイは二股をかける奴なんかじゃない。そのくらいお前だって分かるだろ」

ムカつくのはその二股疑惑の彼だけではない。弁護役を気取るこの幼馴染みもである。とげのある目で彼を見ると、

「わたしはこの目で見てるのよ」

ビシッと自分の目を指差しながらいう。

「オレだって見てるよ。そのとき、お前の横にいたんだから」

「だったら！」

「何か事情があるんだろ」

「事情があったら、カノジョを放っておいて他の女の子と歩いていいって？」

さすがにそう言い切ることには躊躇いがあるのか。賢が黙ったことに力を得た日向は、

「でしょ。そういうとこがイライラするのよ。この前の小谷さんとの噂の時だってそうだけど、環が何も言わないことをいいことに加藤くんは甘えてんのよ。その甘えを叩き直してやるわ」

表情を固くして言った。半ば以上本気である。

「落ち着けよ、日向」

「わたしは落ち着いてるわ、完全にね」

「落ち着いてる奴は拳を握り締めたりしないんだよ」
椅子についたまま賢が手を伸ばす。
ふと自分より大きな手に触れられて日向の拳は緩んだ。その手にそのまま触れられていたい気持ちをすんでのところで抑えて軽く振り払うようにすると、不覚にも赤らんだ頬を隠すために、くるりと賢に背を向けた。
「事情があるってのもさ、どうだか分からないし。事情にかこつけてるんじゃないの。加藤くん、やたらデレデレしてたじゃない。可愛い子だったし」
「まあ、確かに可愛かったけど。でも、だからってさ……」
頬に差した紅がすっと引いた。客観的な意見だということは分かっているつもりだが、幼馴染みが他の女の子を褒める言葉というのはどうにも気に入らない。賢が何か続けようとするのを遮るようにして、
「へーえ、ああいう子が賢の好みなんだ」
振り返った日向の口調がきつくなる。その冷たい響きにウルフカットの友人が後ずさったのに賢は気がつかなかった。
「別に好みとかじゃないだろ。ただ可愛いって言っただけだ」
「やだやだ、男って。ちょっと可愛い子がいるとさ、いやらしい」
「いやらしいって何が？」
なあ、と同意を求めた賢だったが、求められた方はオレに振るなと言わんばかりに手で払うしぐさをした。
「とにかく。わたしは明日にでも加藤くんの所に行って、もう一度事情を訊いてくるからね。邪魔しないでよ、賢」
「レイとその子の迷惑になるだけだ」
「わたしにとってはタマキの方が大事」
「じゃあ、オレはレイの側に立つぞ」
「なに、わたしとやりあおうって言うの？」
「気は進まないけどな」
「十四年来の幼馴染みより、一年ちょっとしか付き合っていない友

人を選ぼうっていうのね。なんて麗しい男同士の友情なんでしょう」
「幼馴染みの間違いを止めたいだけだ」
「わたしは間違ってない」
「そうか？」
賢は立ち上がり日向と睨みあった。幼馴染みのはずが、仇敵同士のような風情。拳銃でも持っていれば今まさに銃口を突きつけている格好になるだろう。そんな勇ましい西部のガンマン二人の間に、割って入る声があった。
「あのー、どっか他の場所でやってもらえません、そういうの」
お互いの瞳の中にお互いを見ている二人は、そんな声に頓着しなかった。
「ここ視聴覚教室で、文化研究部の部室なんで」
この部室の主ともいうべき少女は、そのスクエア型の眼鏡越しに遠慮がちな目を向けた。彼女の言う通り、ここは部室であってけして決闘場ではない。しかも、先ほどから大きな声で我が物顔をしている二人は、部の関係者ではない。全くの部外者である。迷惑な話だ。
「どうぞお帰りはあちらから」
文化研究部の部長である彼女が出口に向かって手を向けると、
「ねえ、杏子（アンコ）。あんたはどう思う？」
穏便ならざる声がかけられた。
「……え、何が？」
「何がって、わたしと賢、どっちが正しいかよ」
日向が視線は相変わらず、少し高い位置にある賢に向けたまま訊く。
「どっちがって言われても……」
二股疑惑の処理の仕方などには何の興味も無い。どっちでも良いから早く出て行ってくれ、というのが杏子の本音だった。
「オレのほうだよな、田辺」と賢。
「わたしのほうだよね、杏子」と日向。

自分たちの世界に入りきっている二人には、杏子の本音など知る由もない。なおも繰り返し執拗に自分の正当性を強要してくる二人にはっきりと彼女は告げた。

「加藤くんの恋愛事情なんかにかかずらっている暇なんかないの。こっちはさ、部員が集まらなくて深刻なんだから」

文化研究部は現在、部長を合わせ部員数三人の超マイナー部である。今年三年生が二人抜けると、来年は一人になる。来年どうなろうと卒業していく身でありどうなっても構わない、などという無責任な考え方をするには、この部には愛着ができすぎていた。

無論、座して滅びを待っていたわけではない。部員集めのために手は尽くした。その甲斐あってか、実際に新一年生が覗きに来てくれるようにもなっていた。しかし、である。そういう時に限って今日のような茶番劇が繰り広げられ、部活動に夢と希望を持っている新一年生たちを幻滅させてくれるのである。

「だから、痴話喧嘩なら他の所でやって、迷惑なの。わたしだって一年生の立場だったら、入る気なくすわよ」

杏子は目に強い光を溜めた。話すうちに遠慮がちな態度はきれいになくなった。大体どうして遠慮などしなければいけないのか。ここは彼女の部である。杏子はきっぱりとした口調で、

「金輪際、ここには立ち入り禁止にします。もう来ないでください」

と幼馴染み同士の二人とウルフに告げた。一様に「え～！？」という不服そうな声を上げる三人に、

「さ、帰ってください」

素っ気無い口調で追撃した。

いつもは穏やかな杏子の怒りが明らかに見え、さすがに自分たちの非を認めた三人がしぶしぶながら帰ろうとしたその時である。

ノックの音がした。開いているドアに礼儀正しく手の甲を軽く打ちつけて室内に入る影があった。

「あれ、円（マドカ）ちゃん？」

ドアに向かおうとしていた日向の怪しむような声に、新来の少女

が顔を上げる。清爽な姿を持つ少女である。強力に衆目を集めるような華やかさはないが、雲間に差す月光のような、雨に濡れた若葉のような、見る者の心を洗う涼やかさを備えている。

「倉木先輩」

知っている人がいることにほっとした様子を見せながら近寄ってくる少女に、

「円ちゃん。わたしのことはヒナタって呼んでって言ってるでしょ」

軽く責めるような振りをして日向が言う。

「はい、ヒナタ先輩」

素直な目を向けてくる少女に、日向はぱっと顔を輝かせると、ぎゅっと後輩の少女を抱き締めた。

「かわいい～」

「……あ、あの、先輩。苦しいです」

「あ、ゴメン」

杏子は息を吸い込んだ。折角、邪魔者が帰るところだったのに、また一人、日向の知り合いらしき者が現れ、愉快な仲間たちが増えようとしている。もううんざりである。もう一度、退去の命令を出さなければいけないと息を吐き出そうとしたとき、

「先輩、ここ文化研究部の部室でいいんですよね？　部長さんはどちらですか？」

少女が訊いていた。さっさと帰れ、というセリフを杏子はとっさに差し替えた。

「わたしです。わたしが部長です」

息せき切っていう杏子の胸が希望で七色に染まる。いや、待て待て待て。望みは持った分だけ、裏切られた時のショックが大きいものだ。ここは精神衛生上、慎重にいった方が良い。杏子は咳払いすると、

「部長の田辺杏子ですが、何かご用ですか？」

という形式ばった挨拶で逸る心を抑えた。

振り向いた少女の、肩をすっと過ぎたストレートの黒髪がかすか

に揺れる。少女はそのまま静かにこちらに歩を進めてきた。
杏子は間近で彼女の明眸を認めて、光に染まった胸が絶望の暗黒に染め変えられるのを感じていた。一瞬でも部の新たなメンバーになってくれるのではないかと希望を持った自分が恥ずかしい。端的に不似合いである。文化研究部のメンバーになれるのは、心に欠けたものを持つ者だけだ。部のことなぞ何にも考えず塾の課題プリントをやり続ける男子や、部長をからかうこととファッションにしか興味の無い女子のような者しか、ここには相応しくないのだ。
「あの、わたし、一年一組の川名円といいます」
少女の自己紹介に、
「川名さんね、何の用スか」
杏子はぞんざいに答えた。
突然やさぐれてしまった先輩女子にちょっとたじろぎながらも、少女は言葉を継いだ。
「入部したいんですが……」
よく聞き取れなかった。部員募集のことを考えすぎて、とうとう妄想をするようになってしまったのか。重症である。
「あの、今なんて？」
「入部したいんです」
夢から醒めたような気がした杏子は念のため、もう一度訊いてみると、
「入部、したいんです」
と自分の発音が悪いと思ったのか、円ははっきりと言葉を切りながら言った。
杏子は強いショックを受けた。
視聴覚教室の外の夕暮れの残照が朝日の眩しい光に変わり、巣に飛び帰るカラスの鳴き声が天上のファンファーレに変わった。
「円ちゃん。ちょっと、本気？　やめときなよ、こんな部」
「西村くん！　今すぐあなたの幼馴染みを何とかしてっ！」
この部を潰す使命を何者かから受けてでもいるかのような同級生

を止めるよう、その隣にいる男子に指示すると、突然の怒鳴り声にちょっとひるんだような顔をしている一年生の少女に向かって、杏子はにこやかな営業用スマイルを見せた。

「ようこそ、文化研究部へ。部はあなたの入部を歓迎します」

差し伸べた手に応えた円の手を、杏子は逃がさないと言わんばかりにぎゅっと握りしめた。

文化研究部に新たなメンバーが加わった瞬間だった。

第１６話：近しいがゆえにできないこともある

仕事を終え、家に戻り、風呂に入り、夕食を取る。健康を考えて焼酎で晩酌しながら、妻と娘から今日の一日についての感想を聞く。至福のひと時。

「どうしたの、にやにやして？」

横からいたずらっぽい笑顔で訊いてきたのは妻である。今年で三十八の彼女だが、どこか幼さを残すその顔立ちから愛らしさが消えることはない。

「いや、俺は幸せだと思っただけさ。美しい妻、美しい娘たち。その夫であり、父であることの幸運を噛み締めてたんだよ」

妻はふと口元に笑みを作ると、

「その幸運が続くのも長くないかもしれないわよ」

いった。剣呑な話である。どういう意味か訊いてみると、

「娘たちはそれぞれ良い人を見つける訳だから。あとには、老いさらばえた妻が残るだけ」

さらりとした答え。君は老いさらばえることなんか無いよ、と彼は言った。

「いつまでも綺麗だ」

「あら、ありがとう」

笑みを深くすると、彼女は酒肴の小皿をテーブルの上に置いたあと、食器を片づけるためにキッチンに立った。

リビングのソファに座っている彼の隣に末の娘が腰を下ろした。まだ小学一年生の彼女は、つぶらな瞳を父に向けると、

「ねえ、お父さん」

と可愛らしい声をかけてきた。それだけで頬が弛むのは親バカというほかない。

「どうした？」

「お父さんにとってはお母さんが一番美人なんでしょ？」

唐突な問いに少し驚くが、彼女は先の夫婦間の会話を聞いていたのだった。キッチンで洗いものをしている妻に聞かれないとも限らない。照れながら、しかし彼ははっきりと、

「そうだよ。世界一の美人だ」

答えておいた。娘はうんうんともっともらしくうなずくと、

「じゃあさ、お姉ちゃんたちとわたしの三人の中では誰が一番可愛い？」

今度は質の違う問いを発してきた。子ども特有の困った問いである。

「それは……お父さんにとってはみんな可愛いよ。みんな大事な子だからね」

正直な気持ちを口にすると、娘の目が冷たい光を帯びた。

「お父さん。わたしは、誰が一番かって聞いたの。みんなが一番なんて駄目でしょ」

「いや、でもね、旭（アサヒ）……みんな同じように可愛いんだから、みんなが一番なんだよ」

少女は納得の行かない顔を作ると、父親では埒が明かないと思ったらしく、

「お姉ちゃん」

とダイニングテーブルに向かって声をかけた。食後のお茶を飲んでいた彼女の姉は、

「アサちゃん。年上の人を遠くから呼びつけたらダメよ。ちゃんとお姉ちゃんの前までいらっしゃい」

柔らかく注意した。旭は素直にそれに従うと、たたっと姉の前まで行って、父とのやりとりを話した。妹の話を聞くと、彼女は妹を連れてリビングに現れた。父の前のソファに腰を下ろすと、この頃さらに若い頃の妻に似てきた顔に微笑を浮かべ、

「お話は聞きました。たしかにおっしゃる通りですけど、でも女は無理なことを望むもの。さ、わたしたちの中で誰が一番可愛いかはっきりと言ってください」

迫ってきた。今まで我関せずといった振りでリビングの隅でパソコンを使っていた次女もふとこちらを向く。三女は長女の横から純真な瞳をじいっと向けてくる。三人の少女の視線に射すくめられた格好で、それでも、

「いやいや、ちょっと待て、環（タマキ）。お父さんにとってはな、お前達の誰もが可愛いんだ。誰か一人なんて選べるわけないだろう」

と反論を試みるが、

「それは分かってます。でも、そこをあえて訊いてるわけですから」

長女は容赦ない。どうも風向きがおかしなことになってきたのを彼は感じた。幸運を噛み締めていた筈が、いつの間にかその幸運の原因に逆に苦境に立たされている。三人の娘を、一人ひとり見回してみる。今父を追い詰めている中学三年生の長女には気品のようなものが漂っている。その隣にちょこんと腰掛けている三女は天真爛漫といった風で周囲を明るくせずにはいられない輝きがある。パソコンデスクにいる次女には初夏の風のような爽やかさを感じる。親の欲目を差し引いても、三者はそれぞれ美しい。さらに三様の美しさであり、そこに甲乙をつけることはできない。もちろん、可能だとしても、そんなことをしたら娘のうち一人は喜ばせるかもしれないが、もう二人との関係には確実に亀裂が入るだろう。

「ハハ、いやあ、実はお父さんにとってはな、お母さんが一番の美人だからさ、他はみんな同じに見えるんだよな」

冗談めかしたその答えが精一杯である。一瞬、しらっとした空気が漂ったが、

「その辺にしておきなさい。娘三人でお父様をからかうとは何ごとですか」

という注意の言葉とともに妻がその場に割って入ってくれ助け舟を出してくれた。彼はほっとした。ことはそれで終わるかと安堵したのだが、

「でも、お母さん。レイはちゃんと答えてくれたよ」

と三女の反発の声が上がり、まだ続行されたのだった。

「あら、そうなの？」
旭は力強く、うん、と答えると、
「この前、レイがうちに来たときに聞いてみたの。あたしと円（マドカ）お姉ちゃんと環お姉ちゃんの中で誰が一番可愛いかって」
いった。大き目の瞳が輝いている。
「さあ、ここで問題です。誰のことを一番可愛いって言ったでしょう？」
クイズの司会者のような口調で訊く旭に、
「それは環お姉ちゃんでしょう。環お姉ちゃんのカレシさんなんだから」
答える母。少女はふるふると首を横に振った。
「ハズレ。一番可愛いのはあたしだって」
自信たっぷりに答える。
横から円が軽蔑するような調子で口を出した。
「お姉ちゃんが気を悪くしないってことを知ってるから、そういう答えになったんだろうけど、あんまりうまい答えじゃないね」
「円、レイくんはね、そういうふうに他人に頼る人じゃないのよ」
そう言うと、環は旭に向かって、
「続きがあるんでしょ、アサちゃん？」
訊く。旭は不思議そうな顔で姉を見た。
「どうして分かるの、お姉ちゃん？」
「好きな人のことはね、大体分かるものなのよ」
家族の前で臆面もなく答える姉に再度促されて、
「一番可愛いのはあたしだけど、一番カレンなのが円お姉ちゃん、一番キレイなのが環お姉ちゃんだって」
と旭は答えた。
「さすが、レイくん」
感心したような長女の言葉に、
「うまいごまかしかたよね」
皮肉っぽい次女の言葉が続く。環の目が疑問の色を含んで円を見

た。
「分からないわ。どうしてそんなにレイくんのこと嫌うのか」
「お姉ちゃんにも分からないことがあるんだね。でも、別に嫌いじゃないわ」
「そお？」
「嫌いだったら同じ部になんか入らないし」
「日向からメールで聞いたわ。あなたに思いとどまるよう説得してくれって」
「倉木先輩には、無理だったってメールしておいて」
リビングに咳払いの音が響く。この間、まったく取り残されていた父が会話に入って来た。
「レイくんというのは、その……誰だったかな？」
「何言ってるの、お父さん。タマキお姉ちゃんのカレシだよ」
旭が軽く責めるような声で答えた。
「そ、そうだったな」
名前はちょくちょく聞いていた。しかし、娘のカレシの名など覚えたくもないというのが父親の本音である。
「今度家に連れてきなさい」
この目で娘に相応しいかどうか見定めてやるという気合は、その娘によって殺がれることになった。
「今はちょっと難しいかな。他の女の子のことで忙しいから」
我が娘ながら分からない子である。
「他の女の子？　お前と付き合ってるんじゃないのか？」
「いろいろと複雑な事情があって」
どんな事情であればそういう事態が許されるのか分からなかったが、それ以上訊くのはやめておいた。無理に問いただしても、答えてくれないことは分かっていた。長女は昔から気持ちを自分の心の中に秘めておくような所があり、さらにその秘めたものを滅多に外に表さない。近頃はそれに拍車がかかっている。
「まあ、何だ……タマキの目に狂いはないと思うが、とにかく今度

ヒマな時に紹介してくれ」
そう言っておくのが、娘に嫌われたくない父としては精一杯のところである。
「分かりました」
素直に言うと、環はソファを立った。父母に断って、リビングをはなれ、階段を登り二階の自分の部屋に入る。机の上にあった携帯電話を手に取ると、まずは日向に妹の説得が失敗に終わったことをメールしておく。妹はなぜ文化研究部に入ることにしたのか。想像することはできるが、話してくれないのではっきりとは分からない。父が長女に向ける気持ちと同じものを、環は円に感じていた。昔は姉を慕う愛らしい妹で何でも屈託なく相談してくれたものだが、いつ頃からか姉妹の間に壁ができ、彼女が何を考えているのかよく分からなくなった。それに一抹の寂しさを覚えるとともに、そういうものだと納得している自分もいる。変わらない関係などないのだ。
続けて、怜にメールしようかと思ったが、すんでのところで思いとどまった。メールすれば、鈴音のことに言及せざるを得ない。それは避けたかった。鈴音とは友人ということばをはるかに超えた関係だった。不登校である彼女の力になるのは環の役割であるとも考えられるが、近しいがゆえにできないこともある。手を差し出す行為は容易いが、それゆえにその行為は環にとって鈴音を侮辱する行為でもあった。環は、鈴音が再び自分で歩き出すことには関与できない。彼女にできることは待つことだけだった。
怜が鈴音の力になってくれたことは、予想外のできごとだった。いや、どこかで期待していた自分はいたが、それは淡い希望程度のもので、現実になるとは思いもしなかった。しかし、現実になった。ベッドに腰をおろした環の唇がほころんだ。本当に面白い男の子である。彼のことを考えると胸が鳴る。ついでその胸が軽く締め付けられた。メールをせず顔も合わせなくなって一週間となっていた。もうしばらくは会えない日が続くだろう。
「怜くん。お願いね、もう一人のわたしを」

座っていた体勢からごろんとベッドに横になった少女から虚空に向かって呟きが漏れる。

仕方なさそうな吐息とともに承諾してくれる無表情な男の子の顔が見えた気がした。

第17話：わざわいは口より出づ

勉強をしようとすると狙いすましたかのように邪魔が入る時がある。塾で出された宿題プリントに取り掛かろうとしたその瞬間に、母から家の風呂掃除を命じられたり、妹が小金をせびりに来たり、父が突然の家族サービスに目覚めドライブに連れ出されたり、と寄ってたかって勉強をさせないようにしているのではないかと疑いたくなるようなタイミング。全くもっていらいらさせられる。通っている塾の講師に、多少の愚痴交じりにこぼすと、

「『勉強しよう』とことさら意識するからそう感じるんです。勉強をしようとする、などというのはあなたの驕りです。勉強以外に何をするんです？　来年の受験までは勉強を第一に考えてください」

と、いつも通りの抑揚のない声でたしなめられた。

「プリント、参考書、問題集、ノート、単語帳など、何でも良いので勉強道具を常に携帯し、時間があれば見るようにしてください。使える時間を全て勉強に使っていれば、多少の邪魔が入ろうと気にならないはずです。邪魔が気になるのは、あなたがまだ受験勉強に本腰を入れていない証拠です」

講師の言葉は峻厳であるが、責めるような調子ではない。かと言って、従わせようとするような調子でもない。あくまでアドバイスとして与え、決定はこちらにさせようとする気持ちが見える。もちろん従うことにした。講師とは目標高校の合格ということで利害が一致しているのだ。そのアドバイスは必ず有益なはずである。講師の忠告を守り、給食を食べた後の昼休み時間、早速プリントを出したその時のことだった。

「助けてくれよ、怜！」

小走りに駆けてくる音と共に、机の前に現れた一つの影。怜は、まだまだ自分に受験勉強に対する気持ちに甘さがあることを確認した。やはり思ってしまったのだった。

何でこうもいいタイミングで邪魔が入るんだ、と。
「確かに勉強も大事だけどな、親友のオレのことも想ってくれ」
プリントの問題に取り掛かろうとしながら、何であれ今は人を助ける余裕がない、とすげなく言った怜に対し、瀬良太一は真剣な顔を向けてきた。キレイに整えられた眉に、おうとつの無い滑らかな肌、つややかな唇。同性であっても魅力が分かるその顔を、怜はちらりと見た。
「いつからお前と親友になったんだよ」
「一年の時からに決まってるだろ。お前と熱い口づけをかわしあってからだよ」
怜はため息をついた。どうもこの昼休みを勉強に使えるかどうか怪しくなってきた。太一をみとめたクラスの女子の数人が、今の太一の発言に対して、嬌声を上げているのが聞こえてきた。
「そんなことはしてない」
うろたえた様子を見せれば相手をつけあがらせるだけである。怜が平然と答えると、
「じゃあ、今しようぜ」
と言って目を軽くつぶった太一はそのままゆっくりと顔を近づけてきた。きゃあ、という女子生徒数名の楽しげな悲鳴が周囲から上がる。怜はその無防備な顔を筆箱で殴りたいという衝動を抑えた。その代わりに穏便な手段を採る。
「あ、平井」
「え、マジで？」
すばやく目を開けた太一は焦った様子できょろきょろと辺りを見回した。見回して、冷たい目でこちらを見ているであろう可憐な少女の姿がどこにもないことが分かると、怜に軽く恨むような目を向けた。
「それで？」と怜。
ウソも方便である。友人を殴りたくなかったという気持ちを酌んでもらいたいものだ。怜は、悪びれずに、太一がなぜ自分の勉強時

間を奪いに来たか、その理由を言うように促した。
「そうだ、追われてるんだよ。かくまってくれ」
気を取り直したように太一が言う。
その言葉が終わらないうちに、三年六組の教室に新たに入って来た少女がいた。彼女は、太一の姿を認めると、すたすたと怜の机まで歩いてきた。彼女を見た太一が、ひぃ、と怯えた声を上げて、怜の影に隠れようとする。椅子に座っている怜は、太一と少女の間に挟まれる格好となった。
「加藤君、瀬良君は連れてくわよ」
細い三つ編みを肩に載せた彼女は、有無を言わさぬ口調で口火を切った。穏やかではない目をしている。彼女と太一の間に何らかのトラブルがあったのだろう。もちろん、怜に異存はなかった。どこにでも好きなところに連れて行ってもらえれば、机の上のプリントに取り組めるのである。
「お前、今、薄情なこと考えてるだろ、レイ」
隣から太一が言う。意外なことだ。太一に読心術の心得があるとは。
「さあ、瀬良君、もういい加減観念して、わたしと一緒に来なさい」
「どこにだよ。佐伯はカレシ持ちだろ。他の男と歩く気か？」
「瀬良君に言えることじゃないし、そういうことでもないのは分かってるでしょ」
「分からないね。他人のことに干渉するのはやめろよな」
「全くの他人だったら干渉なんかしないわ。可愛い後輩のことだからよ」
「恋路を邪魔する先輩ってどんなだよ？」
「変な男から守ってあげようとしてる後輩想いの先輩よ」
「オレは変じゃない。いたって純粋な十五歳さ」
「どこが純粋なのよ！　女の子をとっかえひっかえさ！」
「そーいう言い方、やめて欲しいね。一人一人に対してオレは本気なわけなんだから」

「おかしいでしょ。本気だったら、もっと長く続くんじゃないの？」
「長さなんか関係ないだろ。ドラマでも映画でも何でも一年続くラブストーリーがあるか？　三日とか一週間とか、みんな短い期間で終わるだろ。一瞬が永遠なんだよ」
そろそろ怜は二人の間に割って入ることに決めた。この議論がどこか別のところで行われていれば気にも留めないが、ここは怜の机なのである。聞きながら昼休みを終えるには大して魅力的な議論でもない。
「何があったか聞いてもいいか、佐伯？」
三つ編みの少女が次の言葉を発する前に、怜はすばやく言葉を差し挟んだ。彼女は顔なじみだった。二年の時に同じクラスだったのである。
佐伯澄（スミ）は、一息おくと、太一の罪の糾弾を始めた。
聞き終わると怜は心中でため息をもらした。少女の怒りの矛先を向けられたくないので、外面はいかにも興味ある様子で聞いている振りをしたが、全くもってくだらない話だった。
彼女によると、彼女の部活の後輩に太一が交際を申し込んだということだった。まずそれだけでも彼女の気に入らない。
「二、三ヶ月で終わることが分かってる『お付き合いごっこ』に、わたしの後輩を巻き込まないでよ」
しかも太一には現在付き合っているカノジョがいるらしい。
「ありえないでしょ。別れてからだったらまだしもさ。今付き合ってる子に悪いって思わないの？」
そういうわけで、後輩思いの澄としては太一に後輩の所に行って、交際申し込みの撤回をさせたいということであったらしい。それを太一に告げ、この昼休み中にさせようと思った所を、彼が五組から逃亡を図ったのでこの六組まで追いかけて来たのだった。
「もう今はフリーなんだよ。今朝別れたからな。だから構わないだろ」
太一が何気ない風で言ったその言葉は、澄を激高させた。

「ふざけないでよっ！」
語勢の鋭さに、怜の周囲にいる生徒たちが視線を集めた。何事が始まったのかと興味ありげな目を向けている。
「そんなに簡単に付き合ったり別れたり、ちょっとモテるからって、女の子を馬鹿にしてさっ！」
澄の両手が机に打ち付けられ、小気味のよい音が上がった。どうせなら太一自体を、せめて教卓や黒板あたりを殴ってもらいたいものである。
「付き合ってくれる女の子を馬鹿にするわけないだろ」
太一は幾分真剣な口調で抗弁したが、そのセリフを言うこと自体が相手にとってはふざけたことであるということは分からないらしい。馬鹿にしていなければそんなにあっさりと別れたりしないものだ、というのが澄の主張だということは分かっていないのだろうか。
昼休みは刻々と過ぎていく。この時間を無駄にしないためには、この争いから何かを得て、今後の行動に活かすしかない。澄と太一のやり取りが何かに活きるだろうか。それを考える時間がすでにして無駄であった。
「とにかく、太一、お前が悪い。佐伯の言うとおりだ。さ、佐伯が言うようにするんだ」
この事態をできる限り早く収拾するためには、どちらかの味方をするほかない。どちらの味方をすれば早くこの茶番を終えられるか。考えるまでもないことである。
「お、おい、怜。お前、どっちの味方だよ？」
「今言ったろ、お前が悪い。佐伯の言うことはいちいちもっともだ」
太一は憮然とした顔を作った。
「いや、オレは悪くない。告白を取り消させられるって、中世ですか、身分違いの恋ですか？」
怜は中世には詳しくなかった。現世のことしか分からない。そして、現世には受験勉強というものがあるのである。
「次の恋できっとジュリエットが見つかるさ、太一」

軽口が過ぎたようだった。澄の目が多分に疑わしい色を含んで自分に向けられていることに怜は気がついた。怜は心中で舌打ちした。澄にはある特殊能力があったことを思い出したのである。自分が提供した話題に対して他人が興味を持っているかどうかを見分けるという恐ろしい能力。昨年は、この能力によってどれだけ苦しめられたか知れない。興味のない話題に巻き込んでは、それに興味を持たないと言って責めるのである。ほとんど言いがかりであるが、そう主張する勇気は怜にはなかった。おかげで女の子のおしゃべりに対してはかなりの耐性ができた。

「加藤君、わたしの後輩のことなのよ。あんまりふざけないでよね」

澄が警告するように言った。彼女の後輩のこと『だから』どうして怜がふざけてはいけないのか、そこには論理に飛躍がある気がしたが、それを指摘するスピリッツは怜にはない。

「もしかしてさ、加藤君は、今回のこと、心の中ではどうでもいいと思ってるんじゃないの？」

滅相もないということを手を振って示したが、その所作から澄は自分の疑念に確信を持ったような得心のいった顔をした。

これはまずいことになった。主題が、太一の恋愛姿勢から怜の傾聴態度に移りつつあるのを怜は感じていた。澄にはもう一つの特殊能力がある。自分の納得の行かないことについて、とことん他人と話し合うことができるという、これまた厄介な能力である。この能力を発動されたら最後、怜の今後数日の昼休み時間は、澄の説教で潰れていくであろうことは確実であった。

「加藤君、そういうの良くないと思うわ。わたしは去年のクラスメート、瀬良君は親友でしょ。その二人に関係のある話をいい加減な気持ちで聞くなんて」

完全に話題が怜のことにシフトしてきた。何とか軌道修正をしたいところだが、何か言えばおそらくやぶへびになるであろうことが想像できる。怜はちらりと太一を見たが、彼は素知らぬ風を装っていた。大した親友もあったものである。詰問の対象から外れた僥倖

を噛み締めることに忙しく、怜を助けてくれる気などもちろんない。このまま昼休み時間が過ぎていくのを待つ気であろう。その思惑を破ってやりたいが、澄のマークが厳しくてそれどころではない。

「ちょっと人に無関心な所が加藤君にはあるのよ。そりゃあ、詮索好きよりはいいかもしれないけど。それにしてもね、この社会っていうのは人と人の関わりでできてるわけだからさ、もっと周囲の人と協調性を持ってね……」

澄の目がまっすぐにこちらを捉えている。怜の性根を正してやろうという善意で満ちた瞳であった。怜の胃が重くなる。善意の押し付けほどうっとうしいものはないのだ。かといって、それをはねつける決断はできない。澄の善意をはねつければ、今度はそれが倍になって返ってくるのである。

「クラスメートが困ってれば助けてあげる。親友が間違いをおかそうとすれば止める。それが人としての正しいあり方だと思うわ。そう思うでしょ、加藤君?」

怜は絶望の淵に沈みながら首肯するしかなかった。まだ幾分残っている昼休み時間はもちろんのこと、今後数日間は澄とのランデブーを楽しむことになるだろうと思うと、嬉しくて涙が出そうである。同時に、この状況を引き起こしてくれた自称親友に対し、黒い気持ちが胸の中に湧いてくるのを覚えた。自己の置かれた状況を他人の所為にするのはよろしくないことであるが、怜は聖人になる気はなかった。ちょっと太一を恨んだところでそれが何であろう。

「友人関係っていうのはね、互いを高めあえる関係を指すのよ。お互いがお互いの欠点を指摘し、長所を称え、一緒に成長していく。人の一生のうちで本当に得がたいもの、それが友達よ」

小学生向けの道徳の授業でもあれば、それを立派に務めることができそうな澄の言葉が、怜の精神力を徐々に削り取っていった。澄には現在付き合っているカレシがいて、その彼とも怜は知り合いなのだが、今度、どういう風に澄の話をいなしているのか訊いてみようと心に決めた。澄と付き合えるくらいだ。きっと、コミュニケー

ションの秘奥を教われるに違いない。
友人の価値についてひとしきり話したのち、今度は真の友人を得るためにどのようにすれば良いのかという訓示を澄が話し出そうとした、その時だった。
「興味深い話ね、わたしも混ぜてくれる？」
怜の横に少女の影が現れた。クラスメートの女子と比べると、どこか大人びた雰囲気のある彼女は、目を向けた怜に、微笑を与えた。そのほほ笑みに光が見える。それはルックスが優れているからではない。彼女が援軍に来てくれたことを怜が直感したからだ。
敵であるとは認識していない澄の好ましげな視線と、なぜか不穏な空気を感じた太一の探るような視線が交わるところに、橋田鈴音の佳麗な立ち姿があった。

第18話：いんちきロミオはジュリエットを探さない

窮地のライバルを助けに来た少年漫画の二枚目役よろしく、鈴音は、現れた途端にその場を支配した。

「何を話してたのか、教えて、スミちゃん」

鈴音の登場に話をとぎらせた一瞬の隙をつき、澄の意識を怜から自分に向けさせると、

「今、加藤君にね、友達の大切さについて話してあげてたとこなのよ、スズちゃん」

という澄の説明に対し、

「それはいいことだよ。友達って大事だよね、わたしにとってのスミちゃんみたいに」

にこりと笑って切り返した。澄が瞳に感動の色を表した。

「わたしのこと、友達だと思ってくれてるの？」

「当たり前でしょ。あ……でも、わたしなんかじゃ、スミちゃんが嫌かもしれないけど……」

「そんなわけないよ！」

澄は心持ち強い言葉で否定すると、

「わたしたち、友達よ。まだ、会って三日だけどさ、付き合ってる時間なんか関係ないわ」

熱い視線を鈴音に向けた。

「スミちゃん……」

「スズちゃん……」

手を取り合う女子二人。白々とした顔の男子二人。その男子のうちの一人が、抜き足差し足、澄の意識が離れた隙をつきその場から離脱しようとしたが、

「それで、瀬良君はどうしてここにいるの？」

それを見逃すほど新たに舞台に登場した少女は甘くない。その言葉に、澄が、今まさにこそこそと逃げ出そうとしていた太一を捉え

ると、何かに気がついたような顔を作った。そもそもの目的を思い出したのだ。彼女は厳しい目を太一に向けると、

「もう少しであなたの作戦にはまる所だったわ。まさか、加藤君を使って、わたしの注意を逸らそうとするなんてね」

といって、不敵な笑みを唇にのせた。

「何を言ってるんだよ？」

分からない太一に、

「とぼけても無駄よ。わたしの追及を避けるために加藤君を利用したんでしょう。なんてひどい男なの」

心得顔でいった。太一は困ったように怜を見たが、見られた怜には太一を助けてやる義理はないし、またそもそもそんな能力もない。澄の誤解に口を差し挟めば、それがあらたな誤解を生み、自分が再び巻き込まれることになる。そのような愚を犯さない程度には分別はあるつもりだった。

「さあ、まだお昼休みは残ってるわ。一緒に来てもらうわよ」

断固とした口調で澄が告げた。もう何らの言い訳も許す気はないという調子である。

一瞬であった。鈴音が登場してまさに一瞬で形勢が逆転した。太一は恐ろしいものでも見るような顔で鈴音を見た。見られた鈴音は、相変わらず微笑を浮かべたままだったが、

「スミちゃん、瀬良君と何か問題があるの？」

と、太一を驚かせる言葉を発した。その問いがなければ、太一はすぐに連行され、怜を助けるという鈴音の目的は達せられたことであろう。それが分からないような子ではない。怜は、鈴音に問いかけるような視線を送ったが、鈴音は平然として表情を変えなかった。

澄は怜にした説明を鈴音に向かって繰り返した。

聞き終わった鈴音は考える様子を見せると、

「スミちゃん、そのスミちゃんの後輩の子が、もしかしたら瀬良君にとってのジュリエットかもしれないわよ」

としばらくして言って、澄を戸惑わせた。

「どういうこと？」
「ロミオってジュリエットに出会う前に好きな人がいたの知ってる？　ロミオは自分ではその人に恋をしてると思ってたんだけど、ジュリエットに出会ったことでその人のことをキレイに忘れちゃって、本当の恋に目覚めるの。瀬良君がたくさんの人と付き合ってるのは、そうすることで多分、自分にとってのジュリエットを探してるんだと思うわ」
　怜は呆気に取られた顔で鈴音を見た。強弁もいいところである。単なる女の子好きを、真の愛を求める求道者に仕立てあげようとするとは。どうやら鈴音は怜を助けること以外に、驚くべきことだが、太一をも助けようとしているらしい。まさか、本心から言葉通りのことを言っているとは思われない。しかし、本心はどうあれ、鈴音の声色には不真面目なものはなく、言葉通りを信じているような調子であった。
「ふ、かなわないな、スズには」
　太一はあさっての方に視線を向けて言った。
「あ、わたしのことは『橋田さん』って呼んでね、瀬良君」
　鈴音の注意の言葉を無視して、太一は自分の世界に入り、
「そうなんだよ。オレはオレのジュリエッタを探そうとしているのさ。今まで、たくさんの子と付き合ってきたのも、ジュリエッタを探すためなんだ」
　遠い目をして続けた。太一にも矜持があるらしい。鈴音の言葉に乗って、この場を鎮めることも可能だったかもしれないが、ロミオを演じるのには抵抗があるのだろう。わざとおちゃらけた振りをして、鈴音が言っていることを否定しようとしている、と怜は見た。
「本当にそう思う、スズちゃん？」
　太一の行動に目を醒ますかと思っていた澄は、怜の意に反し、鈴音の言葉を額面通りに受け取ったようだった。
「と思うよ」
　鈴音がはっきりと答える。

「たとえそうだとしても、もしジュリエットじゃないって分かった時に、後輩が可哀想でさ」
「スミちゃんは後輩想いだね。でも、最終的にはその子と瀬良君の問題になると思う。だから、スミちゃんができることはその後輩の子に忠告することくらいじゃないかな。大丈夫、仮に別れることになっても、別れから学ぶことはできると思うわ。それに瀬良君は多分、あんまり女の子を傷つける人じゃないと思うし」
澄は視線を床に落とし思案しているような顔を作ったが、やがて、
「分かったわ」
と決然と言って、太一に目を向けた。
「瀬良君、告白の撤回はしなくていいわ。その代わり、もしあの子を傷つけたら、加藤君とシュンに思いっきり殴ってもらうことにする」
シュンというのは、スミのカレシの名前である。
「いいよね、加藤君」
確認してくる澄に対して、手を痛めたくないので、竹刀でもいいか訊く怜。
「もちろん」
「お、おい、レイ！」
重々しくうなずく澄の声と、うろたえた太一の声がかぶった。
「五組に帰るよ、瀬良君。じゃ、またね、スズちゃん」
笑顔で手を振って六組の出入り口に向かうスミ。そのあとを追うタイチ。
二人が教室を去ったのち、怜は視線を上に向けた。
「助かったよ、スズ」
鈴音は面白そうな顔を作った。
「スミちゃんは加藤君の苦手なタイプみたいだね」
それは彼女の認識違いである。そもそも得意なタイプの女の子などいないのだ。
「どうして太一を助けるようなことを？」

「加藤君の親友なんでしょ？」
それは大いなる誤解であると釘を刺した上で、
「太一のことはどこまで？」
本気で言っていたのかと訊くと、鈴音は取り澄ました顔で、
「もちろん、百パーセント本気よ」
と答えた。これだから女子は苦手なのである。怜は一応納得した振りを見せた。
「加藤君とは違ってジュリエットが見つからないから、男の子はいろんな女の子と付き合うんじゃない？」
「ジュリエットはロミオを探さないのか？」
「探す必要なんかないわ。恋の翼でバルコニーまで飛んできた男の子を一人ずつ吟味すればいいんだから」
「それはフェアじゃないな」
「女の子と男の子が平等だなんて誰が言ったの？」
確か社会の授業で習った気がするが、あれは建前なのだろうか。
「それにしても、いつの間に佐伯と仲良くなってたんだ？」
「この前、初めて出た委員会でイキトーゴーしたのよ」
「とにかく助かった」
怜の再度の礼に、鈴音はウインクした。
「いつも送り迎えしてもらってるからね、その借りを少しは返せたかな」
「何も貸してる覚えはない」
「そっちになくてもこっちにはある。そして、わたしがそれを借りだと感じていること、それ自体が重要なのよ。そうでしょ？」
怜が素直にうなずくと、鈴音は相好を崩した。薄桃色の唇から真白な歯が覗いた。
「そう思ってくれると思ったわ」
自分の席に戻ろうとした鈴音がふと振り返り、怜に向かい、
「そうだ。加藤君。今日は部活に出るの？」
訊いてきた。鈴音の送り迎えを始めたときから部活には出ていな

かった。出ても出なくてもどうということもない部なのである。今日も鈴音を送って行くつもりであり、もちろん部活に出るつもりはなかった。

「わたしを送ってくれることの他に用事が無いなら、今日は出てくれる？」

疑念の色を顔に表した怜に対して、鈴音は、

「部長さんに紹介してもらいたいから。わたし、文化研究部に入るわ」

と続けた。

予鈴が五時限目がまもなく始まることを静かに告げていた。

第１９話：三年五組の品定め

教室の空気が心地よく震えている。その震えが耳に伝わると、三年五組の生徒は誰もがうっとりとした。うっとりとして、その声だけを楽しむために目を閉じたり、逆に目をしっかりと見開いて美声の主に目を向けたりする。水野更紗（サラサ）は、後者だった。彼女の視線の先に、一人の少女の姿がある。しっかりと開いていた更紗の目が眩しげに細められた。初夏の昼下がり、少し強めの光の中にその少女はいた。まるで少女自身からも光が発せられているかのような風情で、外からの光にゆるやかに溶け込んでいるように見えた。

「よし。そこまででいいぞ、川名」

教師の合図で、魔法の時間は終わった。光の少女が席につくと、弛緩したような空気が教室中に漂った。彼女の声の余韻にみな浸っていたのだ。更紗もその一人だった。国語の授業に感謝することがあるとすれば、この瞬間しかあり得ない。クラスメートの綺麗な声で詩文の朗読が聞けるときである。もちろん皆がみな、巧く吟じることができるわけではないが、五組は他のクラスに比べてその確率は高いだろう。美人の偏差値が高い人を特に集めたのではないかと思えるほど、このクラスには佳人がそろっていた。そうして、美しい女の子というのは、声も清澄なのである。

その美少女の一人が、今まさに朗読を終えた川名環（タマキ）だった。その一人、というよりは、そのトップに立つと言った方がより正確であろう。細身でありながらバランスの取れた体つきや、整った顔もさることながら、何よりその所作に輝きがある。彼女が何かの拍子に手を動かすだけで、その手から光が零（こぼ）れる。内面の輝きが外面に溢れているのではないか、などということをふと考えさせるような趣がある。それが、ただ可愛いだけの子と、彼女のような麗人の違いなのではないだろうか、と更紗は感じている。

「水野、どうした、ぼおっとして」

更紗は、はっと夢から覚めたかのように、国語の教師を見た。
「川名の続きを読んでくれって言ったのが聞こえなかったみたいだな。寝てたのか？　まあ、確かに、五時限目っていうのは昼メシ後で眠くなるしな。しかもオレの授業じゃ尚更か」
教師の自嘲気味なセリフが教室中の笑いを取った。どうやら、更紗が当てられていたらしい。全然気がつかなかった。更紗はまだ笑いの波が治まらないうちに、慌てて立ち上がると、教科書の該当部分を読み始めた。
――何も、川名さんの次に当てることないのに。
もちろん悪意を持ってそうしたわけではないだろうが、更紗はまだ年若い国語教師を軽く恨まざるをえなかった。川名環の後に読まされるのは苦行以外のなにものでもない。クラスの皆が彼女と自分の朗読を比較し、皆が更紗に敗北者のレッテルを貼っているような、そんな惨めな気分になるのである。とはいえ、更紗も、傍聴者の立場の時は同じことをしているのだから、責めることもできないのだが。
「よし、ストップ」
更紗は、ほっとして席についた。苦行は終わったが、悟りは得られなかった。全く割りに合わないことだ。また次に誰か当てられるのかと思ったが、教師は腕時計を見て時刻を確認したあと、
「じゃあ、後は自習。オレは楽しい職員会議に出かけてくるから。お前ら、騒がしくするなよ」
告げて、教室を出て行った。天井近くの壁にかかっている時計は五時限目の半ばを指していた。今日は五時限目の半分と六時限目が職員会議で潰れ自習となる予定だった。どうせなら、その分だけ早く帰らせてくれれば良いようなものだが、用意されたプリントで学習する自習時間に設定されていた。早く帰らせてもだからといって勉強などするはずがない、という可愛い生徒への不信の念が窺える。もちろん、単なる中学校カリキュラム上の決まりかもしれないが。
騒がしくするな、と言われて大人しくしている中学生がいたら見

てみたいものである。教師が出て行って五分ほどもすると、皆、休み時間のような風情でおしゃべりを始めた。更紗も、後ろの席の友人の女の子の方に向き直った。

「勉強の邪魔をしないでもらえるかしら、サラサさん」

真面目ぶった顔で更紗に告げた彼女は、しかし、言葉とは裏腹に、あろうことかプリントで折り紙をしていた。

「何折ってんの、七海（ナナミ）？」

「般若の面」

「今、何て？」

「ハンニャ、ほら、これ」

ざら紙で作られた二本の角と裂けた口を持つ鬼女の面が更紗を見ていた。更紗は、彼女の器用さに感心しながらも、

「もっと可愛いの作ろうよ」

軽くひきながら言った。

「でも、うまくできたでしょ」

般若の面を見ながらご満悦の少女に、更紗は呆れたような目を向けながら、内心では微笑している自分に気がついていた。彼女に向かうときはいつもそうだ。その立ち居にはどこか可憐なところがあり心をふっと惹かれてしまうのである。平井七海。五組の誇る美少女の一人。トレードマークはショートカットである。フェイスラインがあらわになるほどのボーイッシュなショートカットだが、それは彼女の魅力をいささかもそこなっていない。普通なら男の子っぽく少なくとも中性的になるはずのその髪型は、彼女のアーモンド型の瞳やふっくらとした唇と不思議と調和し、全体に愛くるしい少女の印象を作っていた。

「さっきはどうしたの、サラサ。また、王子様でも物色してたの？」

七海のからかいの言葉に、更紗は心外な振りを作り、

「そんなにいつも王子のことを考えたりしてないわよ。それにね、王子は、探すんじゃなくて、ある日突然現れるものでしょ」

答えてから、さっきは見惚（みと）れてたのよ、と小声で答えた。

「じゃあ、やっぱり王子様じゃない。それで？　サラサ姫が見惚れてたのは誰なの？」
事柄の性質上、七海も声を低くすると、
「だから王子じゃないって言ってるでしょ」
と更紗は言って、見惚れていたのは環だということを足して言った。
七海は納得した顔になった。うんうん、とうなずくと、
「確かにね。女の子でも思わず見つめちゃうね、タマキは可愛いから」
いう。そんなことを言っている彼女自身も、見つめられる側の人間だということは気がついていないらしい。小学校からの付き合いで、七海が自分の容姿についてはあまり評価していないことは分かっている。気取ってそう見せているのではなく、どうやら心からそう思っているらしいので、全くこの世の中は不思議である。しかも、そういう自分の外見上の美しさに関して無頓着な所が七海の人気の一端を担っていた。自分を可愛く見せようという意識がない彼女は、男子だけでなく女子にも人気が高かった。
「このクラスさあ、やたらと美人が多いよねえ」
更紗はしみじみと言った。「美人」は単に「可愛い女の子」とは違う。「可愛い」というレベルならば、あるいは対抗のしようがあるかもしれないが、「美人」には競争意識が芽生えようもない。淡い諦観のもと逆に、例え同性だとしても綺麗な子を見ることができる幸運を噛み締めるような気持ちになる。
「だね。アヤもいるし」
七海が名前を挙げた少女、伊田綾（アヤ）は、彼らから少し離れた席に座っていた。その席だけ、別な時間が流れているかのような、周囲の喧騒に侵されない静謐（せいひつ）な雰囲気があった。整然とした姿勢でプリントに一心に向かうその姿が凛（りん）としている。前髪が眉の高さで切り揃えられ、左右側面の髪が顎の高さで水平に切り揃えられている髪型が、幼い印象を与えるが、切れ長の瞳には大人びた落ち着いた色が

ある。そのアンバランスが彼女の魅力の一つだった。
「なんか、女の子って感じだよね、伊田さんは」
更紗が惚れ惚れとした声で言う。七海は大きくうなずいて同意を与えたあとに、
「ただね、中身はちょっと違うんだよね。外見はあんな感じで女の子女の子してるけど」
穏やかでないことを言った。思わず、どういう風に違うのか、尋ねると、
「知りたい？」
七海は瞳を不気味に輝かせた。更紗は、小さく首を横に振った。知らなくても良い真実というのはあるものである。ちょっと興味のある所だが、綾のイメージが崩れて欲しくないという気持ちの方が強い。
「残念だな。アヤの本性を教えてあげようと思ったのに」
楽しそうに言う七海のその言葉が終わるか終わらないかのうちに、彼女の体に影が差した。更紗の目が軽く見開かれた。噂をしていた当の本人が七海の横に来ていた。
「ナナミ、シャープペンの芯、ちょうだい」
綾はそのほっそりとした白い手を七海に向かって差し出していた。数本の芯がその手の平に置かれると、綾はシャープペンに補充して、礼を言ったあとに、
「わたしのこと、何か言ってたでしょ、ナナミ？」
いった。
「ね、ちょっと分かったでしょ。この子の本性」
綾の問いには答えず、七海は更紗に笑いかけた。と言われてもどういうことかさっぱりである。さっぱりであったが、本人の手前、七海に説明を求めるわけにもいかない。更紗は曖昧に微笑むしかなかった。
「サラサちゃん。七海の言うことは真に受けないでね。この子は基本はいい子なんだけど、たまにわたしやタマキをからかいのネタに

するっていう悪い癖があってね」
綾はその切れ長の目に叱責の色を表して、七海を見下ろしながら言った。更紗は、名前で呼ばれたことに軽い感動を覚えながら、
「あの……伊田さん。わたしたち、別に何も……ただ、伊田さんが、その、可愛いって言ってただけで……」
誤解を解こうと力を入れすぎて、しどろもどろになりながら言った。
綾は慎ましやかな微笑を浮かべて、更紗を魅了すると、
「ありがとう」
と、可愛いと言われたことに対して素直に謝辞を呈したあとに、
「わたしのことはアヤって呼んでね。水野さんのこと、サラサちゃんって呼びたいから」
と言って、更紗を喜ばせた。綾は、無愛想というのではないが寡黙なタイプで、クラス内で言葉を交わす人は、男女合わせても数名しかいない。そのうちの一人に選ばれたのである。綺麗な女の子と仲良くなれるのは、男子でなくても嬉しいものだ。
「アヤ、タマキにこれ渡して」
七海が綾に、先ほど折った般若の面を手渡した。
「なに、これ？」
「般若よ。今のタマキには必要でしょ」
綾は、聞こえよがしにため息をついて、呆れたように首を振ると、
「悪趣味」
と一言いって、しかし、ざら紙の小さなお面をつき返すことはせずに、席に戻って行った。
「どういうことなの？」
綾が席についたのを見届けたあと、取り残された感のある更紗が、今のやりとりについて解説を求めると、七海は艶のある唇を笑みの形にすると、
「般若っていうのはね、女の憤怒と嫉妬の象徴なの」
と簡単に答えた。へえ、と七海の博識に感心した更紗だったが、

それだけではまだ分からない。その面を環に渡すということが、どうして、綾の言うところの「悪趣味」になるのだろうか。

「タマキは嫉妬心を外に表したりしないだろうから、代わりにお面をあげたのよ」

それ以上の説明をする気はないように七海は口を閉ざした。

おぼろげではあるが七海の言いたいことが理解できた気になった更紗。その理解によると、綾が言った通り、確かに七海の行為は悪趣味なものと言えた。

第２０話：グリーン・アイド・モンスターを駆る少女

のそりと、闇の中から生まれたそれは餌食を求め、辺りを見回した。周囲にあるはずの明るく輝くものをもてあそび、喰い尽くすのが、それの存在意義である。それが現れたが最後、闇を照らす輝きを持つものはことごとく光を失うのだ。それは人の心の深奥に棲む異形の魔物。

緑色（グリーン・アイド・モンスター）の目をした怪物。

いつもと勝手が違ったのは、探せど探せど光が見つからないことである。そこには闇しかなかった。暗黒に浮かび上がる一人の少女の姿。彼女は、その怪物を認めた。普通、それに気がついたら、見なかった振りをして通り過ぎるか、必死に戦うかするものであるが、彼女は違った。じいっと興味深そうにそれを見つめると、嬉しそうに微笑んだ。まるで旧友にでも出会ったかのような心からの笑みだった。少女の向ける愛（いと）しそうな目のその前で、怪物の体がどんどん縮んでいった。ついには、少女の手の上に載るくらいの大きさになった。虜（とりこ）にするはずの少女に逆に捕らえられた怪物は、闇に返ることもできず、少女の言いなりになる他なかった。

「何か良いことでもあったの、タマキ？」

友人の声に、環は夢想から覚めた。放課後の図書室。環が座っているのは図書室出入り口付近の貸し出しカウンターである。図書委員の仕事であった。隣にいるのが、同じ委員で友人の倉木日向（ヒナタ）である。彼女は、しんと静まり返った雰囲気を壊さないように、口元に手を添えて言葉を継いだ。

「さっきから何にやにやしてるの？」

「にやにやなんてしてた？」

環も日向に倣いひそやかに声を出した。日向はうなずいた。

「教えなさいよ」

促されるままに、環はカウンター下に置いてある自分の肩下げタ

イプの鞄から、紙細工を取り出して日向に見せた。
「なに、それ？」
日向はうさんくさそうな顔をした。それもそうであろう。茶色いざら紙で作られた鬼の面を得意げに見せられても、その意味するところなど分かるはずもない。
「ナナちゃんにもらったの」
口元を綻ばせる環を見ながら、日向は首を捻った。この少女には何か秘密の趣味でもあるのだろうか。その前に七海である。何を考えてこんなものを贈ったのだろう。
「お守りとかなんか、そういう感じなの？」
日向は最も可能性のありそうな仮説を出した。
環は首を横に振って、
「これは般若の面なの」
と言ったあと、般若が女性の憤怒と嫉妬を表しているということを、説明した。
「ナナちゃんによるとね、わたしはこのお面をつけた方がいいみたい」
日向は、ざら紙の面を顔の前に持ってくる友人を見ながら、
「つまり、それは加藤くんに対して、怒りを表せっていうことなの？」
と回転の速い所を見せた。
「そういうことらしいね」
般若の面をカウンターテーブルに置きながら、環は微笑んだ。
「何よ、あの子は。タマキと加藤くんのことなんか興味無いみたいなこと言ってたくせに」
「興味がないのに心配してくれるっていうことは、それだけ大切にされてるっていうことだと思うわ。いい友達を持って、わたしは幸せです」
日向は内心で口を尖らせた。彼女にしてみれば、環の恋愛事情に関しては、七海などよりも自分の方がずっと心配しているのだ、と

いう自負がある。
「もちろんヒナちゃんにも感謝してるよ。いつもありがとね」
日向の心中を読み取ったかのように、環が語を継いだ。その一言で日向の機嫌はすっかり直った。
「ヒナちゃんは誰かに嫉妬したことある？」
環には些か唐突な所があるが、それは突然な言動にも対処してくれるであろうという自分への信頼だと日向は理解していた。そうした信頼を得た者だけが、環の友人になれるということも。
「当たり前でしょ」
日向はすばやく答えた。現に今も環から感謝の念を捧げられる七海に嫉妬したところだし、日向からすれば、目の前の少女自身が常にその対象になる。そのきめ細かな肌やふわりとしたショートボブ、綺麗な笑い方、賢明さを包む淑やかさなど、彼女を見るときはいつも、八割の憧憬に二割の嫉視が含まれているのである。
「ナナちゃんとかアヤちゃんもかな？」
「その二人はどうだかしらないけど、普通の人はすると思うよ」と日向。
環には、誰かに嫉妬するという経験がなかった。それは、これまで自分と伍して争える人間が周囲にいなかった、ということではない。自分より頭が良かったり、人当たりが良かったり、可愛かったりする女の子がいなかった、ということではないのである。単にそういう能力に価値を認めたことがなかったのだ。他人と自分が比較できる何か、その何かに価値を認めなければ、嫉妬など起こりようがない。しかし――
「わたしね、ナナちゃんの言うとおり、嫉妬してるみたいなの」
環は晴れやかな顔で言った。日向は眉を顰めた。まるで、「わたし恋をしてるみたい」とでも言っているかのような楽しげな口調だったのであるから、彼女の当惑はもっともである。嫉妬するということが、そんなに愉快なことであろうか。
「嫉妬って、あの橋田さんっていう人に？」

と日向が確認すると環はうなずいた。日向の頭に鈴音の姿が浮かぶ。環と同じ程度に綺麗な子を初めて見た、というのが日向の偽らざる心情だった。二、三度姿を見かけたことしかないが、それで十分に印象に残る子である。思わず声をかけたくなるような人を包み込むような柔らかさがある。一言も話していないのに、その歩く姿だけでそこまで強烈に魅了されたのは、環以来始めての経験だった。

「環の方が可愛いけどね」

どうしても日向はそう言わざるを得ない。例え鈴音がどんなに魅力的であろうと、それを口に出したくない事情がある。彼女が怜と一緒に登下校しているということがどうしても気に入らない。日向にしてみればその神経が信じられない。環と小学校からの付き合いだとすれば、その小学校来の友人のカレシに引っ付いているというのはどういう了見であろう。考え出すと義憤を感じてきた日向はやはり怜に一言言わなければという気になってきた。この前は、七海や幼馴染みに邪魔されたが、今度こそという気持ちになる。

「ヒナちゃんのそういうところが好きだよ」

日向は不服そうな顔を作った。日向の感は悪くない。環が婉曲に止めていることが分かったのだった。

「何で加藤君なんだろうね？」

「素敵な人よ」

「そーお？」

「何だか妹もライバルになりそうだし」

「円（マドカ）ちゃんが？」

「文化研究部に入るっていうことはそういうことかなって」

「ウソでしょ」

「他に理由がないもの。好意じゃないとしても興味はあるんじゃないかな」

「やっぱりとりあえず殴ってくるわ、加藤君のこと、グーで」

「ヒナちゃん」

「だってそうでしょ。わたしの可愛い円ちゃんまでさ、許せないわ

！」

拳を作って高らかに宣言する日向。自分が衆目を引いていることに気がついたのは、その一瞬後のことである。図書係の教師も先ほどからひそひそとおしゃべりばかりしている二人の女子に白い目を向けていた。

「恥ずかしいな、突然大きな声出して」

俯いた日向の上に聞きなじんだ声が降ってきた。

「げ、いたの、賢？」

「あんまり川名に迷惑かけるなよ」

すらりとした体躯の少年は本気でたしなめてるような声でそう言うと、本を差し出した。

「ヒナちゃんを迎えに来たの、ケンくん？」と環。

「本を借りに来たついでだよ」

どこか照れた様子で答える幼馴染みをむっとして見上げた日向は、貸し出しの手続きをしながら、

「ケンが本読むなんてめずらしーこともあるよね。明日辺り、隕石でも落ちてくるんじゃないの？」

と揶揄（やゆ）してから、書名を確かめた。

「『シェイクスピア物語』？　シェイクスピア？　どうしたの、熱でもあるの？　季節外れのインフルエンザ？」

「レイが読んでたからちょっと興味持っただけだよ」

日向はうんざりした目を幼馴染みに向けた。次いで、隣の少女を見ると、

「環、ここにもいたよ、あんたのライバル。この子も嫉妬の対象になるの？」

と言って環を微笑ませた。

「男の子は対象外よ」

分からない顔をしている賢に、しかし日向は説明しなかった。

「女同士の話よ」

そう言われると男子にはどうしようもない。賢は貸し出し処理の

済んだ本を受け取ると、
「終わるまでコレ読んで待ってるから、声かけろよ」
と言って大人数がかけられるテーブルの一つに向かっていった。
「何よ、えらそうに」
少年の背に向かって毒づく日向だが、その口調のきつさと打って変わって少女の瞳には嬉しそうな色がありありと見えた。
隣にいる環は、二人の様子を好ましげに見るとともに、日向に嫉妬している自分に気がついた。好きな人が迎えに来てくれて一緒に帰れるというのは素敵なことである。怜の隣にいられるということが環にとってどういう意味を持つのかということが、彼と会えないここ十日間くらいではっきりとしていた。
環はたなごころの上にある醜悪な緑色の目の怪物を見つめた。たとえ美しくなかったとしても、自分の心から生まれた新しい感情である。貴重なものだった。
そういう感情が彼女にあるということを教えてくれた少年に今はただ会いたかった。

第２１話：世界の果てに至る道

二歳年が離れた姉は、円（マドカ）にとって自慢の姉だった。

姉は、美しく、強く、優しかった。何でもできた。勉強もスポーツも、家事さえも。それでいて、それを誇ることなく見せつけることなく慎ましやかで、一緒にいるときは一歩引くような態度を取る。目立つ自分の影に妹を隠すようなことをせず、妹にライトを当ててくれる。そんな姉が大好きだった。円ちゃん、と自分の名を呼んで手を引いてくれることが彼女にとって一番の幸せだった。

いつのことだろう。伸ばしてくれるその手に固いものを感じたのは。自分の名を呼んでくれるその声に冷えたものを感じたのは。はっきりとは覚えていないが、姉が小学校の高学年の時だったような気がする。ずっと姉のことを見ていた円にはその変化が読み取れた。しかし、原因までは分からなかった。姉のどこかが変わった。自分に向けてくれる眼差しの色が暗くなったような気がする。

初め、円は自分が何かして姉を怒らせたのだと思っていた。知らないうちに何か姉に悪いことをしてしまったんだと。それで姉に嫌われたのだと。しかし、どう考えても何も思いつかなかった。思い切って姉に聞いてみたが、姉はいつものように笑って、怒ってなどいないと円の疑いを一蹴した。その場はほっとしたが、やはり姉の態度は元には戻らなかった。世界の中心に姉がいる円にとってそれ以上の大事はない。それからも必死に考え続けた。

一つ思い当たったことがある。姉はもしかしたら嫉妬しているのかもしれない。姉が持っていないものを一つだけ円は持っていた。それは両親からの愛情である。もちろん、姉にも親の愛は注がれている。しかし、自分の方が母や父からより可愛がられている気がするのである。姉は両親からであっても一目置かれているような存在で、どちらかというと敬して軽く遠ざけられているようなところがあったのだ。それしかない、と思うと、円の小さな胸は張り裂けそ

うに痛んだ。両親から十分に愛されていない姉が可哀想になったのである。また自分とは直接関係のないことで、姉から嫌われたのかと思うとやり切れない気持ちにもなった。両親からよりも、尊敬する姉からの愛情が欲しかった。

　円は両親から可愛がられることを拒否するようになった。そうすることで、姉と同じ側に立ちたかったのだ。幸いにして、と言っていいのかはともかく、円が自分のことはできるだけ何でも自分でするように心がけるようにすると、両親は七つ下の妹に興味を向けることが多くなった。円はほっと胸を撫で下ろした。これで、姉から嫌われる要素はなくなったはずだと少女は思った。しかし、である。意に反して、姉の彼女に向ける態度への違和感はなくならなかった。これ以上どうすれば良いのか。思い余った円は、

「お姉ちゃん、わたしに気に入らない所があったら、はっきり言って」

　と強い言葉で迫った。以前したように本人に訊くほかなかった。誠心で当たれば、きっと応えてくれるはずだ、という期待が円にはあった。しかし、姉はきょとんとした顔をして、

「マドカちゃんに気に入らないところなんてあるわけないでしょう。お姉ちゃんの大事な妹なんだから」

　やさしい声を返すだけだった。それを素直に信じられたらどれだけ良かっただろう。愛しい人にだからこそ騙されることができないのである。分かりたくないことまで分かってしまうのだ。

「お願いだから、お姉ちゃん、言ってくれれば直すから」

　なおも円は食い下がったが、姉は困った顔で同じ言葉を繰り返すのみだった。それは、しかし、虚偽の言葉なのである。そういう態度を取られるくらいなら、あんたのことなんかずっと嫌いだった、と激しく言ってもらえた方がずっとマシだった。

　円は本心を話してくれない姉と距離を置くようになった。もう昔のように姉を一途（いちず）に敬慕できないという事実が、円の心に重くのしかかった。

もう二カ月で小学校の卒業を迎えるという一月の初旬のことだった。

夕食の前に姉が突然に切り出したことが家族を動揺させた。

「今日、前から好きだった人に告白して、ＯＫをいただきました。お付き合いしますので、応援よろしくお願いします」

好きな人がいたということ自体が初耳だった。姉と距離を置くようにしていたので、それも仕方のないことかもしれない。ただ、それは円だけのことではなく、他の家族も同様だった。

「どんな男の子なの？」

驚きで石像と化した父の隣で、いち早くショックから立ち直った母が訊くと、姉は同じクラスのクラスメートで小学校が同じであり、その時から好きだったとまっすぐに言った。こういう堂々としたところにはやはり感心せざるを得ない。

「今まで生きてきた中で一番緊張しました。まだドキドキしてます」

言葉通りなのだろう。沈着な姉が常に無く軽い口調である。

「お姉ちゃんに目の前で告白されたらさ、男の子だったら誰でもＯＫするよ。可愛いから」

姉と距離を取るようになって手に入れたものが、姉への軽口という能力だった。しばしばその軽口には悪意が混ざる。その声音に、その男も単に外見に惹かれただけなのではないか、という意味を込める。それが分からないような姉ではないが、もちろん姉は怒ったりなどしない。彼女は微笑を浮かべると、

「マドカちゃん。お姉ちゃんはね、見つめ合う相手は要らない。同じ方向を見られる人が欲しいの。今日告白した人はそういう人よ」

はっきりと言い切った。その声の何と確信に満ちていたことだろう。姉のことを客観的に見られるようになってきていた円は、改めて彼女の大きさを認めた。言うこと為すことの何もかもが自分とは違いすぎた。姉には強さがある。自分自身を自ら導いていける強さが。対して円にはそんな強さはない。

――だからなの、お姉ちゃん？

姉は、不甲斐ない妹に嫌気が差したのか。あまりに自分と違いすぎる円を軽蔑したのだろうか。考えれば考えるほど、正しい推測のように思えてきた。しかし、その推測が正しかったとしたら、円には絶望しか残らない。自分が姉と対等になどなれるはずがないのだ。というより、姉と対等に付き合える人などいるはずがないという思いがある。では、一体、姉のカレシとはどういう人なのだろうか。姉から告白したということは、対等どころか、どちらかと言えば相手が彼女より上だということになる。

円の疑問が晴れる機会は案外に早くやってきた。二月のある日曜日のことである。姉がクラスメートを数人、家に招待していた。何でも、二年生が終了するに当たり、クラスでお別れ会を催すらしい。その計画を立てるためにクラスの代表に集まってもらうということらしかった。その招待客にカレシが含まれているということを姉の口から円は聞いていた。また、他のクラスメートがいるので今日は正式には紹介しないことも。

「誰だか当てられたら、お姉ちゃんの服の中で好きなのをあげるよ」

姉が上機嫌な様子で言った。カレシを家に呼ぶことが余程嬉しいのだ……で終わるほど円は鈍くない。この頃疎遠になってしまった妹に気を遣っているのである。

「要らない。お姉ちゃんのはわたしに似合わないから」

そういう気遣いが欲しいわけではなかった。円は素っ気無く答えた。ただ賞品は拒否したが、ゲームには参加することに決めた。姉が選んだ男の子がどんな子なのか興味がある。

姉の友人は女の子が二人と男の子が三人だった。三人の男の子のうちの一人がカレシである。さて誰か、と考えるまでもなく、一目を引いた男の子がいた。美少年と言ってよい彼の華やかさに他の二人の男子は完全に引き立て役であった。その二人のどちらかということはあるまい。キッチンで客をもてなすための用意をしながら、円は何だか興ざめしたような気持ちだった。確かに、宮田と名乗った彼は、ルックスも良くまた社交的で、いかにも女の子に人気のあ

りそうな人だったが、それだけに平凡な選択のように思えた。一方でその選択にほっとしている自分もいた。姉もやはり女の子だったということだ。

ところが円の予想は全く間違っていたのだった。

母と一緒に焼きたてのクッキーと紅茶を人数分用意し、リビングで歓声を受け取ったあと、自分の部屋に下がろうと思ったときのことである。五歳になる妹が、午睡から覚めてリビングに闖入した。そうして姉に遊んで欲しいとせがみ始めたのである。妹は、円や母よりも――父は言うまでもない――姉の方が好きらしく、一度姉にひっつくと容易なことでは離れない。この時も、円や母が、お姉ちゃんは忙しいから、となだめても、遊んで欲しいと駄々をこねて、なかなか言うことを聞かなかった。ついにはべそをかく始末である。

子どもの泣き声に寛大である大人は多くない。つい十年前は同じ立場だった少年少女が少しずつ苛立ち始めるのを円は感じていた。例の姉のカレシらしき少年も、うんざりしたような顔をしているのが見えた。完全無欠に見えた姉にも意外な弱点があったものである。人を見る目がない。姉のカレシならば傍観しているのではなくこの事態の打開に対して何らかの対処をすべきではないか、などと考えてしまう自分がふと可笑しかった。身内のことである。まさかそんなことまで求められるわけがない。

それにしても姉がすぐに妹に対処しないことが不思議だった。いつもならすでに妹を上手になだめている頃合である。客がいるのだから尚更であろう。姉の思惑はともかくとして、円は自分の務めを果たさなければいけないことを感じた。距離を置くようになった姉だとしても、姉に嫌がらせをしたいわけではないのだ。このまま妹を泣かせておき、姉主催の会を台無しにするわけにもいかない。泣き止まない妹に対してやむを得ず実力を行使しようと、円が覚悟を決めたときのことだった。妹に近づく影がある。彼は膝を折って妹と視線の高さを合わせると、

「どうして泣いてるの？」

と柔らかな声を出した。
「お姉ちゃんが遊んでくれないの」
その声の響きに誘われるように、今まで激しく泣いていた妹はしゃくり上げながらも答えた。
「お姉ちゃんと遊ぶ約束してたの？」
続いての問いに、うんうんと妹は何度かうなずいた。これはウソである。姉は友達が来るから今日は遊べないということを、妹に言い聞かせていた。もちろん五歳児がそれをちゃんと聞いていたかどうかは別の問題である。
「じゃあ、お姉ちゃんは約束を守ってくれるよ、そうでしょ？」
妹は、その理屈に納得したのか、泣き止むと、
「でも、今は遊んでくれないよ」
と不服そうに言った。
「お姉ちゃんは今キミと……そう言えば、お名前は？」
「かわなあさひ……」
「アサヒちゃんか、いいお名前だね。アサちゃんって呼んでいい？　オレは加藤怜。レイって呼んでよ」
「レイ？」
「そう。お姉ちゃんは今アサちゃんと早く遊べるように頑張ってるんだ。だから、それまではオレで良かったら遊び相手になるよ」
「遊んでくれるの？」
「何する？」
妹はぱっと顔を輝かせると、人形を持ってくる、と元気な声で言ってリビングを出た。
見事な応対だった。またたく間に、妹の機嫌を直し、事態を掌握してしまった。一連の流れるような無駄のない対処に見惚れている自分がいるのに円は気がついていた。目立たない方の二人の男の子のうちの一人だったが、その時の彼は確かに美しかった。母も、また彼の同級生たちも一様に、その行動に感心しているような顔だった。

「加藤は将来さ保育士とかになれるんじゃないか。それとも単に小さな女の子好きとか？」

姉のカレシがつまらないことを言っていた。衆目をさらった少年に不快な気持ちを持っているのだろうと、円は推測した。いくら外見が優れているとはいえ、この程度の男に姉から告白したのかと思うと、恋とは不思議である。その不思議な力によって、姉の目も曇ってしまったのだろうか。

怜は、彼には一瞥もくれず、姉に、

「ということで、オレは妹さんの遊び相手に選ばれたから、話はオレ無しで進めてくれ。オレの票は川名に預けるよ。オレか川名が抜けることを考えたら、オレの方がいいだろうから」

いった。姉がその申し出を受け入れたことが、円を驚かせた。そうしてその驚きは確信に変わった。この人こそが姉のカレシなのである。そうでなければ、妹の相手などという身内のことを姉がさせるはずがない。さらなる推測が円の頭に浮かぶ。これは邪推かもしれないが、旭が泣き始めたときすぐに姉が対処しなかったのは、この人が対処してくれることを信頼していたからではないだろうか。あるいは、

――どう対処するか試してたのかもしれない。

どちらにしろ、姉が自分で行わず人に任せたということは、その人を特別視しているということである。

「おい、ここに何しに来たんだよ」

おそらく妹を通して姉と特別なつながりを持った怜に嫉妬したのだろう、宮田少年が非難するような口調で言ったが、怜は、

「お別れ会の話し合いだろ。でも、お前と川名がアイデアを出して、それを皆で修正していけばうまくいくさ」

素知らぬ顔で彼を持ち上げた。姉が微笑して怜を見ていた。一瞬だけ二人の視線が交錯して離れた。そのコミュニケーションの意味は、円には分からなかったが、二人の間に何らかの意思の疎通があったことは理解できた。

そのとき円は怜に強烈な嫉妬を覚えた。この人は姉を理解して姉と対等の立場に立てるのだ。嫉妬は憎悪に変わる。おそらくこの人が姉の自分への気持ちを逸らした原因なのだということを直感したのである。一方で、彼に対する興味が生まれた。どうすれば姉と対等の立場に立てるのか、この人をつぶさに見れば分かるかもしれない。それから何度か怜に会うことがあったが、憎悪を先行させてしまった。今後は、それらを押さえて興味を先行させようと思って取った行動が彼と同じ部に入るということだった。もしかしたら姉にあらぬ誤解を生むかもしれないが、なに構うことはない。それよりも、姉と同じ地平にどうすれば至れるのか、ということを知る方が重要だった。円は気がついていなかったが、それは姉からの自立を表していた。世界の中心だった彼女の姉は、今や世界の果てにあり、崇拝の対象ではなく、近づき乗り越える目標となっていた。

第２２話：幼馴染みのいる風景

西村賢の一日は、隣家のベルを鳴らすことから始まる。
ベルに応じて現れるにこやかな顔の女性。
「ごめんね、賢くん。まだヒナタ起きてないのよ」
いつものことである。促されるままに、すっかり勝手が分かってしまった家の中をダイニングまで歩いていくと、ダイニングテーブルに自分の席が用意されている。
「コーヒー？　紅茶？　それとも野菜ジュース？」
礼を言って野菜ジュースを頼むと、席に座る前に、新聞を読んでいる男性にあいさつする。女性の夫であり、顔なじみ。座った後に、今度はテレビの朝のニュースを見ている自分と同じ制服姿の少年にもあいさつする。思春期まっさかりの彼は、感情を節約したような挨拶を返す。
「ちょっと待っててね、賢くん。もう一度起こしてくるから」
そう言うと、女性はダイニングから姿を消す。
数分して、けたたましく階段を下りてくる音がする。
少女登場。パジャマ姿の彼女は、寝癖のついた頭のままで、不機嫌そのものである。自分の後ろから現れた母に向かって、剣呑な目を向けて、
「お母さん、どうしてもっと早く起こしてくれなかったの？」
非難めいた口調で言う。
「何度も起こしたわよ」
母は取り合わない。事実その通りなのである。しかし、事実は少女の気持ちを全く慰めない。彼女の怒りは、今度は父に飛び火した。
「お父さん！？」
「どうして仕事前にもう可愛くもない娘の寝顔を見にいかなきゃいけないんだ」
ますます不機嫌になった彼女は、今度は年下の少年に向かって、

「ヒロト、弟は姉に仕えるものでしょ？」
鋭い声を出すが、
「この前、ＣＤ返しに部屋に入ったら、『年頃の乙女の部屋にノックもせずに入るな』って蹴り入れてきたのは誰だよ？」
少年は仏頂面を姉に向け、もう絶対に姉貴の部屋には入らない、と宣言した。
最後に賢の番が回ってくる。
「ケン、幼馴染みでしょ。起こしに来てよね！」
確かに彼女とは十四年来の幼馴染みで、賢が今、十四歳であることを考慮に入れれば、ほとんど生まれたときから彼女と一緒にいたことになる。家族同然であると言えるかもしれないが、さすがにこの年で、眠っている女の子の部屋に入るのは憚(はばか)りがある。だが、そんな抗弁はしない。今の彼女にそんなことを言っても不機嫌の火に油を注ぐだけである。
「明日はもう少し早く来て、そうするよ」
素直にそう言う賢に、少し怒りをおさめた彼女は、賢の為に用意されていた野菜ジュースをぐいと飲み干すと、大急ぎで洗面所へ髪のセットに向かった。
「アレは女じゃないよ」
ヒロトがぼそりと言う。危険な発言である。
「だろ、賢兄(にい)？」
ダイニングから洗面台までの距離はそう遠くない。賢は彼の勇気に感動したが、賢自身は勇者の供を務められるほどの心胆の強さは無い。
「いや、そんなことないよ。お姉さんはもちろん女の子だよ」
「性別の話じゃないよ。女の子ってのはさ、もっとこう何ていうか可愛らしい感じだろ。守ってあげたくなるみたいな。アレ、守る必要ないじゃん」
女の子が、守られるべきか弱い存在であるというのは、男の身勝手な妄想ではなかろうか。事実、賢の周りには、そんな弱々しい女

子は一人もいない。
「それはさ、賢兄の周りに、本当の女の子がいないんだよ。姉貴を含めてさ」
クラス内に余程可憐な女の子でもいるのだろう、哀れむような目でそう言うと、ヒロトは席を立ち上がった。姉と違って、彼は既に学校に行く準備が万端整っているのだ。行ってきます、と挨拶して少年はダイニングを出た。小学生の頃は一緒に学校に通っていたりしたのだが、この頃ではさすがに一緒に登校したりはしない。姉と一緒に登校などしたら、クラスの良い物笑いの種だからだろう。
「ヒナタは学校ではどう、賢くん？」
野菜ジュースの新しいグラスを賢の前に置きながら、日向の母が訊いてくる。
「うまくやってる？」
「クラスでも人気がありますよ。上手くやってると思います」
答える賢。横から新聞が畳まれる音がして、
「とてもそんな風には見えないが、本当か、賢くん？」
と疑いの声がはさまれた。賢は日向の父に向かって、はい、とうなずいた。別に社交辞令ではない。家の中での彼女からは想像が難しいだろうが、日向は学校ではそれなりに人気がある。持ち前のキツい性格は、概ね、親しい友人に対してしか発揮されず、他のクラスメートや教師には物腰柔らかでまた快活でもあるので評判が良い。本人から聞いた――というより聞かされた――話だが、中学生になってから何人かの男子に告白もされているらしい。
日向が寝癖の髪や今日持って行く教科書と格闘している間、賢は幼馴染みの美点について懇々と説いた。信じない様子の日向の父に、あきらめず説明しようとする所に賢の律儀さがある。
「賢くんは本当にいい男だな」
日向の父が落ち着いた結論がそれであった。戸惑う賢。幼馴染みの名誉を回復するつもりが、なぜだが自分の評価が高まってしまった。

「さて、俺も出るか。賢くん、気をつけてな」
いってらっしゃいと幼馴染みの父を見送って、野菜ジュースのお代わりを丁寧に断ったときに、ようやく日向が姿を現した。寝乱れた姿が、すっかりお出かけモードになっている。
「お待たせ、賢」
少しでも何か食べていきなさい、という母の再三の言葉を退けて、日向が家を出ると、賢も玄関から外に出ようとした。出がけに日向の母から、
「今日もあの子をお願いね、賢くん」
と娘の面倒を頼まれる。賢はうなずくと、少し先で自分を待っている少女の元へ向かう。このようにして、賢の一日は始まるのである。すっかり習慣化してしまった朝の風景。
初夏のやや強い日差しのもと、二人は並んで学校までの道を歩いて行く。
家から少し離れた所で、ほらと言って、賢は携帯食の小袋を鞄から取り出して日向に渡した。朝食を食べる時間はないだろうということを予想して、道すがら食べられるように用意しておいたものである。日向は歓声を上げて喜びで顔を明るくした。
「やっぱり腹減ってたのか。もうちょっと早く起きろよな」
と賢は呆れたように言ったが、それだけのことではない。日向にしてみれば、自分のことを思いやってくれたということに対する感動もある。それは賢には分からない。先の日向のセリフではないが、幼馴染みなのであるから当然という意識が賢にはあるのだった。
ブロックタイプの携帯食を食べ終わるのを確かめて、今度は水筒を渡す賢。細く小振りなそれは、キャップを開けると、そのまま飲めるようになっている。水筒の縁に口をつけて飲み終わった少女に、今度は歯磨き用のガムを渡す。
「持つべきものは幼馴染みだよね」
上機嫌で勝手なことを言う日向。
「持つべき、とまでは言えないんじゃないか」

「わたしの立場だと、べきだって言えるのよ」
「オレの立場は？」
「わたしは自分の立場しか考慮しないの」
「そう言うと思ったよ」
　こと日向に関する限り、賢は怒りを越え、さらに諦観を通りこした境地にいる。幼馴染みの少女は、十四年この調子なのである。今更、彼女の言動に怒ったり、自分の立場を諦めたりはしない。むしろ、この立場を受け入れて、できるだけ楽しもうとしていた。そして日向といるのは、賢にとって確かに楽しい一面があった。怒りや喜びの感情を露にして行動する彼女を見ていると飽きないのである。時にいらいらさせられるときがあるが、それをどこかで許してしまう自分がいて、結果、日向には悪感情を持ち得ないのだった。慣れとは怖ろしい、と賢はつくづくと思った。
「昨日の本、どうだった？」
　横に並んでいる少女が、少し下の位置から訊いてきた。賢の方が彼女より背が高い。
「まだちょっとしか読んでない」
「感想を四百字程度でまとめて一週間以内に提出するよーに。それが面白かったら、次、あたしが借りる」
　冗談めかして言った日向の目が、一転、皮肉な笑みを作った。
「それにしてもさ、賢は本当に加藤くんが好きだよね」
「そんな風に見えるか？」
　賢は不思議そうに言った。昨年クラスが一緒だった加藤少年と賢の友情に関してはたびたび日向の口に昇る。口に出す頻度が高いということは、それだけ目立つということだ。賢としては、特別なことをしているつもりは特にないのだが、幼馴染みに言わせるとそうではないらしい。
「見えるわよ。加藤くんの読んでた本を借りて読むなんてさ。加藤くんに気がある証拠でしょ」
　どうしてそういうことになるのか。面白そうな本だったから勧め

られて借りてみたとは思えないのだろうか。
「だって、実際、賢は加藤くんのこと好きなんでしょ」
「それは確かにな」
そのセリフにいつもは不機嫌になる日向だったが、今日はその代わりに不思議そうな顔を作った。
「加藤くんって、どこがいいの？」
「何だよ、お前こそ、怜に気があるのか？」
「そんなわけないでしょ」
日向は底冷えのする声を出した。不用意な一言で、やはりいつも通り不機嫌にしてしまったらしい。しかし、賢は自分の迂闊さを後悔したりはしない。気分屋の日向をコントロールすることは不可能なのである。今朝のように明らかに怒りを買うときは格別、あとは成り行きに任せ、ことがあれば自分が耐えればよいくらいの気持ちでいる。
「怜の良さは一言では言えないな。でも良い奴だってことは分かる。その良さに気がついてるのは別にオレだけじゃない。太一だって、俊だって、レイのことは好きだよ。何より、川名だろ。怜のどこが良いのかなんて川名に訊けよ」
「訊いてもはっきりと答えてくれないのよ。この前なんて、『空の高さが分からなくても空が高いってことは分かるでしょ、それと同じことよ』なんて言うんだから」
「さすが川名だな。上手いこと言う」
よく言うわ、といってどうしようもないという風で首を横に振った日向は、
「加藤くんのことはもういいわ」
と継いで話題を変えた。もともと彼女から始めた話なのだが、指摘するのも面倒なので、次の言葉を待つと、日向は軽く咳払いをしてから、
「賢は好きな人とかいないの、加藤くんの他に。女の子でね」
なぜだか緊張した声で訊いてきた。彼女が何を期待しているのか

は知らないが、賢は、
「いない」
と、簡単に答えて彼女の当てを外れさせた。日向の目が疑り深く細められる。
「本当でしょうね？」
「本当だよ」
「でも、わたしの周りには結構可愛い子っていると思うけど。タマキとかナナミとかアヤとかさ。タマキは加藤くんがいるけど、ナナミとかアヤは特別な人がいるわけじゃないみたい。惹かれたりしないの？」
「まあ、可愛いとは思うけど。オレ、可愛い子って苦手なんだよな、緊張してさ」
その言葉が終わると少し間があった。その間がどうしてできたのか、判明するのに数歩かかった。
「どうせわたしは可愛くないわよ」
日向がふてくされたように言うのが聞こえてきた。賢は側面を衝かれた思いがした。別にそんな意図を含めた気はないし、幼馴染みなら他意がないことを分かりそうなものである。しかし、賢には日向に自分の気持ちを推し量ってもらいたいという欲求はない。誤解されたら、それを解くための努力をすれば良いし、そうして努力しても無駄であったら日向の負の感情を受け止めれば良いだけの話である。
「ヒナタは可愛いけど、幼馴染みだから慣れてるんだよ」
さらりと少女の曲解を否定する。その言葉にもやはり他意はなく、賢としては事実を述べたのみだった。その事実に引っかかるものを感じたのだろう。前を向いていた少女の顔が自分の方にまともに向けられているのに賢は気がついた。
「……今、何て言ったの？」
「何が？」
「だからさ、今、何て言ったのかって。今のセリフ繰り返してくれ

ない」

日向が苛立たしげに訊いてきた。賢が命じられるまま同じセリフを繰り返すと、日向の足がふと止まった。訝しげに賢も足を止めると、日向の顔がすぐ目の前にあった。

「それ、本心でしょうね？」

幼馴染みに詰め寄られた賢は、何が彼女の気を引いているのか分からない。日向については分からないことだらけである。じいっと真剣な目で自分を見つめてくる少女に向かって、何もウソは言ってないことを告げると、彼女は、

「それならいいわ」

と素っ気無い声を出して顔をそむけた後、足早に歩き出した。少しして振り返った彼女は自分が置き去りにしたにも関わらず、何してんの、と急かす声をかけてきた。

よくは分からないがどうやら機嫌を直してくれたことに少しほっとした賢が幼馴染みに追いつくと、朝日を浴びている加減だろうか、彼には少女の顔が輝いているように見えた。

第２３話：彼女の痛みは彼女のもの

人間関係を円滑に維持するもの、それは想像力である。相手の気持ちを想像しその気持ちに合わせた行動を取ることにより、衝突を失くし、お互い気持ちよく付き合えるのである。

「ねえ、お兄ちゃん。川名先輩と別れたの？　ていうか、捨てられた？」

想像力を身につけるためには、行動を起こす前に立ち止まり、頭の中で三つ数えることだ。立ち止まって考える癖をつける。その行動によって相手がどういう気持ちになる可能性があるか。

「まあ、そうなるとは思ってたけどね。でもさあ、先輩に捨てられたからってさ、すぐに次の女の子にいくのはどーかと思うよ」

そして想像力を維持するためには、親しい仲であっても今日初めて会う人であるかのように考えることである。

「でも、お兄ちゃんにそんなカイショーがあったことが驚きだけどね」

想像力が欠けると、信頼関係は、下手な積み木細工のようにがらがらと崩れ落ちるものである。怜は、いまだ奇跡的に残っていた妹への信頼が、今まさに音を立てて崩れて行くのを感じていた。

「あーあ、川名先輩のこと。タマキお姉ちゃんって呼びたかったな」

「あっちはお前のことを妹だとは呼びたくないんじゃないか」

怜は素っ気無く言うと、すばやく朝食の席を立った。妹だけであれば何を言われようが構わないが、朝食の席には母と父がいるのである。面倒なことになる前にこの場を離脱しなければいけない。ご馳走様、と言って鞄を肩にかけ、そのまま玄関に向かおうとしたところを、怜は引き止められた。

「待ちなさい、怜」

怜は立ち止まると軽く目を瞑った。母の静かな、静か過ぎる声。この静けさが嵐を呼ぶのだろうか。

「都（ミヤコ）の話は本当なの？」
振り返った彼にかけられた母の言葉に、怜は多少うんざりした。付き合っている相手として環を紹介した。それで義理は果たしたはずである。この上、進捗状況を逐一報告しなければいけないのだろうか。関係ないだろ、と一言言って、足早にこの場を去りたいという強烈な欲求に駆られたが、怜はどうにか思いとどまった。それをするとこの場の面倒は回避しても、学校から帰ってきた後、親に対する適切な態度に関して延々とレクチャーを受ける面倒が降りかかってくるのは目に見えているからだ。激情に身を任せるには、それに相応しい時というものがある。今はその時ではない。
怜は気持ちを落ち着けて、環と別れてはいないこと、をはっきりと告げた。
「じゃあさ、今、一緒に登下校している人は誰よ？　友達が見たらしいんだけど、やたら美人だったって」
都が興味深そうな顔をしたが、怜には妹の好奇心を満たしてやる気は毛頭なかった。より確実に兄を追い詰めるために、父母の前で話を出した狡猾な妹であれば、尚更のことである。
「言えない女（ひと）だってことなの？　ますます怪しいな～」
妹の追撃に、怜は耐えた。鈴音のプライバシーを家族のゴシップのネタに供する気はない。これ以上は何を言われようが何も話す気はなかった。しばらく続いたダイニングの沈黙を破ったのは、驚いたことに父であった。
「環さんを悲しませるようなことはしてないだろうな」
珍しく父の視線を受けた怜は、はっきりとうなずいた。はっきりとうなずける話かどうか自信はなかったが、この機を逃すことはできない。
「それじゃあ、いい。さ、学校に遅れるぞ。行きなさい」
怜は心中で父に感謝すると、不服そうな妹と母を尻目に、家を出た。開放感が胸に満ちる。安らぎの場であるはずの家から外に出たときになぜそんなものを感じるのか、と怜は思った。

孟夏の日差しは強いが、まだ気温は上がっておらず、空気は爽やかである。木々の緑が光を受けて美しく輝いていた。歩いて行く道は、当然学校へと向かうものであるが、通い慣れた道ではない。二週間ほど前から、使い始めた道なのだ。途上にある一軒の家の前に、人待ち顔で立つ一人の少女。近づく怜に気がついた彼女は、顔を上げると嬉しそうに微笑んだ。

「おはよう、今日も良い天気だね」

黒髪をサイドアップにしていることによって露になった白い首筋に朝日が跳ねていた。

怜は鈴音に挨拶を返すと、門前に立っていた少女の母に会釈した。

「いつもありがとうね、加藤くん。今日もこの子をお願いします」

心配そうな目に見送られて、二人は歩き出した。

「どお？」

少しして、隣からかけられる声に顔を向けると、鈴音が軽く両手を広げていた。

「何が？」

「今日のあたし」

「オシャレに気をつけたほうがいいな。昨日と同じ服だ」

「当たり前でしょ、制服なんだから。そうじゃなくてさあ、『今日も可愛いよ』とか何とかさ」

「それじゃあ……」

「なになに？」

「その服可愛いな」

鈴音は大いに不満そうな振りを見せたが、何も言わず話題を変えた。

「昨日、迷惑だった？」

「昨日？」

「部活のこと」

鈴音が文化研究部への入部を決めたのが昨日のことである。怜はこれを自分への気遣いだと見ていた。鈴音を家まで送り届けるため、

怜はここ二週間ほど部活動に参加していない。娘が無事に帰ってくるのを心配しながら待っているであろう母親のことを考えると、できるだけ早く送り届けたいというのが、怜の気持ちだった。その気持ちが鈴音に知られたのだろう。このままだと、彼女の送り迎えが終わるまで、怜が部活に参加できないと案じた彼女は自分も部に入ることによって、怜が部活動を行うことに支障をなくしたのである。

一緒に部活動に参加したのち、終了後、一緒に帰れば良い。

「迷惑どころか、田辺は狂喜してたよ」と怜。

「加藤くんは？」

「迷惑じゃないけど、気遣いは無用だ」

怜ははっきりと答えた。鈴音の送り迎えは、きっかけはどうあれ、今は自分の意思でしていることである。それに対して、気を遣ってもらう必要はない。鈴音は、ふと微笑むと、

「そうじゃなくて、今も登下校で結構ウワサになってるから、同じ部に入ったりすると尚更かなってね」

いった。それこそどうでも良い話だった。と思った怜は逆に、

「スズこそいいのか？　オレとウワサになって」

訊いた。鈴音はいたずらっぽく瞳をきらめかせると、

「もし嫌だって言ったら、この送り迎えを止めてくれる？」

質問を返した。怜はその気は無いことを告げた。

「じゃあ、どうしようもないじゃない」

「そういうことになるな」

少女は軽やかな笑声を立てた。

「ほんとにあなたといるとタマちゃんと一緒にいる気分になるわ」

「タマキと似ているところなんか全然無いと思うけどな」

「自分では分からないのよ」

鈴音は笑みをおさめると、しばらく無言になった。通学路を背筋を伸ばして歩く彼女の姿は堂々として見えたが、その内心にはまだざわざわと騒ぐものがあるのだろう。それを押さえつけるために口を閉ざしているのではないかと、怜は推測していた。彼女の過去に

何があったのだろう。ふと頭をよぎることもあるが、訊こうと思ったことはない。彼女の過去は彼女のものである。いたずらに触れて良いものではない。

勢いよく肩をたたかれた怜は、足を止めて振り返ると、満面に笑みを湛えた少女の顔があった。

「おはよう、加藤くん」

怜はきょろきょろと辺りを見回した。彼女のお目付け役の姿が見つかると、一安心して、少女に向かう。

「おはよう、倉木」

「どうかしたの？」

挙動に不審な様子を見せた怜を訝しげに見る日向。しかし、それはこっちのセリフであった。不機嫌な顔しか見せたことのない少女の上機嫌な様子に、怜は戸惑う気持ちを抑えられない。彼女の幼馴染みで、顔なじみの少年に、

――何があったんだ？

と目語してみたが、彼にも分からないらしい。賢は軽く首を横に振っただけであった。

「あの、おはよう、倉木さん」

鈴音が、怜の影から姿を現して、おそるおそるといった調子で挨拶した。日向は、鈴音の姿を認めると、

「おはよう」

と挨拶を返したあと、

「どうしてわたしの名前、知ってるの？」

尋ねた。

「タマキに聞いてるの」

鈴音は共通の友人の名を出して、彼女を安心させたあと、

「タマキはわたしのこと何て？」

興味を持った日向に対し、

「一番の親友だって」

答えた。日向の顔が一層輝いた。その輝きは、彼女の隣にいる少

年が、鈴音に挨拶されて、少しどもりながら答えたときに、少しだけ鈍くなった。

　怜は日向の様子を見ながら、やはり何ごとか、おそらく良いことが彼女にあったのだろうと思った。環への友情から、鈴音を敵視――もちろん、それ以上に怜を蔑視しているのだが――しているはずなのに、それが態度に表れていない。上機嫌の様子である。なぜなのかはさっぱり分からなかったが、怜は賢に感謝しておいた。日向の機嫌をこれほど良くできるのは、幼馴染みの彼しかいない。

　そのまま平和裏にことは済み、仲良く四人で登校できるかと思ったが、そういうことにはならなかった。再び歩き出そうとする一行を、日向は止めると、鈴音に向かった。

「橋田さん。あなたに一つ言っておくことがあるわ」

　鈴音が神妙な面持ちで、彼女の言葉を待つと、日向は怜に指を向けて、

「加藤くんは、タマキのだからね。そこんとこ、よろしく」

　強く言った。鈴音は一瞬意表をつかれたような顔をすると、

「川名環だったら、相手にとって不足はないわ」

　不敵な調子で言った。日向がむっとした顔になる。

「勝てると思ってるの？」

「勝負はやってみないと分からない。地の利はわたしにあるし」

「チノリ？」

　日向は賢の顔を見たが、彼が分からない顔をするので、仕方なくもう一人の少年に説明を求めた。

「つまり、同じクラスだってことだよ」

　怜が説明する。日向が確認するように、

「環とは友達なんでしょ」

　訊くと、鈴音はうなずいた。

「そうよ」

「それなのに？」

「友情より優先すべき感情が時にあるものでしょ」

「本気なの？」
「うそよ」
「そう、本気だって言うなら……え？」
「うそ。そんな気ないよ」
呆気に取られた日向に、
「タマキが羨ましいな。あなたみたいな友達がいて」
まっすぐに鈴音が言った。
日向は一つ息をついた。からかわれていたことに気がついたのである。しかし、最後の鈴音の言葉の響きに真実が含まれていたのを聞き分けた彼女は腹を立てなかった。代わりに、
「わたし、倉木日向、よろしくね」
と手を差し出した。今度は、鈴音が呆気に取られる番である。その反応に気を良くしたのか、日向は、目で微笑むと、
「タマキの友達だったら、わたしの友達でしょ」
いった。鈴音は日向の手を取った。
「橋田鈴音です。よろしく」
友情の握手を終えたあと、日向は幼馴染みを伴って一足先に歩き出した。
「いい人だね、倉木さん」
二人の後姿を追って歩き出しながら鈴音が言う。これも驚くべきことであったが、日向はおそらく、怜と鈴音に——主に鈴音に——気を遣ったのだった。
「倉木相手に、ああいう冗談は危険だぞ」
怜が忠告すると、鈴音はくすっと笑って、
「その甲斐あって、友人が増えたわ」
いった。いちいち友人を作るのに斬り結ばないといけないのならば、命がいくつあっても足りない。
「わたしはそうやって友だちを作ってきたのよ」
「タマキとも斬り合ったのか？」
「もちろん。かなりの深傷（ふかで）を負ったわ」

周囲の目が鈴音に集まっているのを怜は感じた。彼女が人目を引く子であるというのがその理由の一。もう一つは、彼女が人通りの多い校門前で立ち止まっていたからである。

「じゃあ、行きましょう」

鈴音は軽く息を吐き出すと、校門の内側に足を踏み入れた。初めの登校のとき以来、怜が手を引くことはなかった。少し歩いてから後ろを振り返る少女。怜の姿を認めると、彼女はほっとした様子を見せ、生徒用玄関に向かって歩き出した。おそらく、彼女にとっては、この校内に入る瞬間が一番緊張する瞬間なのであろう。教室に入ってしまえば、随分リラックスしているように見える。その緊張をやわらげるために自分がいくばくかでも役に立っているのかというと、まさかそんなことはあるまい、と怜は思う。彼女の悩みは彼女のものである。誰にもそれを理解することはできないし、また、鈴音自体、そんなことは望んでいないだろう。しかし、理解できないと認識しているそういう人間が隣にいるということが何がしかの意味を持つこともあるのではないか、と怜は思う。

――タマキならそう言うだろう。

いや、と怜は思い返した。タマキならそんなことは言わないだろう。いつものように微笑しているだけのような気がする。彼女と会わなくなって二週間ほどになるだろうか。彼女から告白される前の状態に戻っただけであるはずだったが、怜は、その状態と今の状態が同じような気がなぜだかしないのだった。

第２４話：言葉にしない想いがある

「ちょっと、男子！　ちゃんと掃除してよ！」

注意の声が飛ぶ。その男子の中に含まれていないことを祈りつつ、怜は、せっせと教室の床を掃いていた。六時限目が終わった掃除の時間。解放的な気分になるこの時間に、しっかりと働ける中学生は多くない。特に男子はそうである。現に、今も三年六組の教室担当の班の男子は、教室の床を掃くべきもので、剣の腕を磨き合っている。

「ねえ、聞いてるの！」

班のリーダー格の女子が叱声を上げるが、それを聞くような素直な武士はいない。どこ吹く風で箒を振り回している。別の子を誘って、二人がかりで遊んでいる男子に向かっていったが、やはり効果はないようだった。あるわけがないのである。男子としては、そうやって女子に構ってもらいたくて、ふざけているところもあるからだ。怜は、掃き集めたゴミをちり取りにおさめながら、軽くうんざりした目を同じ班の男子に向けた。小学生の低学年ならばともかく、中学も三年生になれば、女子に対して別のアピール方法を考えてもらいたいものである。

「そのくらいにしておかないと、先生を呼んでくるわよ」

怒ったように言うリーダーに、からかいの声をかける男子。そのくらいにしておいてもらいたいのは、注意している側のその女子に対しても同じことだった。注意する暇があるなら、掃除をしてもらいたいものである。サボる人間に対して注意するよりも、黙って掃除をしてくれればその分早く済むし、何より怜自身の負担が減る。確かに、掃除をしないで済んでしまう男子は不公平であろう。しかし、注意している女子にしても、不公平を糾弾する前に、教室の掃除くらい黙ってしたらよさそうなものである。

差別を是正するのにそこまで躍起にならなかった女子が一人だけ

おり、怜はどうにか一人で掃除をする羽目にならずに済んだ。床を掃き終わり、教室の一方に寄せていた机を直す段になってようやく、男子の説得を諦めたらしい女子二人も加わり、またさすがに机を運ぶくらいはしないと本気で教師に言いつけられると恐れたのか、遊んでいた男子二人も仲間に入った。

「あの、わたしが行くよ、加藤くん」

教室が元通りの姿を取り返し、あとはゴミ箱のゴミを焼却炉に持っていけば良いというとき、横からかけられる遠慮がちな声。怜は顔を向けると、大人しそうな雰囲気の少女が手を差し出していた。

「いいよ、オレが行くから」

怜は口をしばったゴミ袋を持ちながら答えた。

「でもさ、ずっと加藤くんが行ってるでしょ」

「そんなに小谷がゴミ捨て好きだとは思わなかったな。独占して悪かった」

怜が冗談に言うと、少女は微笑んだ。そのあと、

「好きじゃないけど、いつも加藤くんが行ってるから悪いなって」

生真面目に答える。ゴミを持って行くくらいで彼女の気を引いたのだとしたら、これを先ほど騒いでいた男子に教えてやりたいものである。人の迷惑にもならず、女子の気を引ける。何と素晴らしい行為だろうか。

気にすることなどないことを怜は伝えたが、

「じゃあ、せめて一個ずつにしましょ」

と二つあるゴミ袋を指して彼女は譲らなかった。分け合うようなものでもないと思うが、怜は譲歩した。別にどうしても拒絶しなければいけないことでもない。少女は、班のリーダーの女の子に、ゴミを捨てに行って来ることを告げた。怜が廊下に出ると、彼女はその横に並んだ。

「ごめんなさい」

並んで歩いていると突然にかけられた謝罪の言葉に怜は意表を衝かれた思いで、隣を見た。

「何か、加藤くん一人に掃除を押し付けてるみたいだから」
確かにその通りであるとも言える。何しろ、机を運ぶ段階にならないとまともに動かない手合いばかりなのである。しかし、怜は大して気にしてなかった。自分はできることをするだけである。結果、掃除が終わらなかったとしても、それは自分の責任ではない。幸い今まではどうにか終わって来たのだった。ならば、問題はないはずだ。
恥じ入ったような顔をしている少女に、怜は、
「でも、小谷は途中からやってただろ」
と罪の意識を減じるであろう事実を告げた。
「だけど……」
「気にするなよ。したくないことをしないといけないこともあるし」
怜は遠まわしな言い方をすると、少女がはっとした顔を作った。みんなが男子と戯れているときに、一人だけ知らぬ顔で清掃活動に勤しむわけにはいかないというのが中学社会のルールであり、それに怜は言及したのだった。
彼女は目を伏せると、
「それが誰かの迷惑になるのがいやなの」
いった。嫌ならやめれば良い、とは怜は言わなかった。本当に嫌ならやめているだろうからである。
「本当に気にするなよ、小谷」
怜としてはそう言っておく他ない。教室掃除のことくらいでそこまで思い詰めなくても良いだろうし、仮に彼女にとっては重要事だとして、それを話されても怜にはどうしようもないことであった。
「聞いてもいい、加藤くん？」
少し歩いてから気を取り直したような声で言った少女の問いに、
「できればやめてくれ」
嫌な予感がした怜はそう断ったが、質問内容を話す前から機先を制されたことに、彼女がショックを受けた顔をしているので、前言を取り消すしかなかった。

「聞くだけなら」
「その、川名さんとのことなんだけど……」
思った通りだった。こうなると、彼女がゴミ捨てに付き合ったことの真意が透けて見えそうな気がしてきたが、そこまでは考えすぎであろうか。
「気に障ったならごめんなさい」
謝るくらいなら、先に考えて欲しいものだ。それにしても、どうしてこう他人の恋愛に口を出したがる人間が多いのだろう。怜は不思議だったが、落ち着いて考えて見れば分かることでもあった。川名環という少女にはそれだけの影響力がある。けして怜に対して興味があるわけではないのだ。
「喧嘩したとか？」
少女はわざと朗らかな声を出した。冗談のような軽い調子で、怜に話しやすい雰囲気を作ろうとしているのだろう。小賢しい話である。彼女には好意とまではいかなくとも、少なくとも悪感情は持っていなかった怜としては多少残念な思いだった。
「オレも一つ訊いていいか、小谷？」
「え？　いいよ、何でも聞いて」
少女は顔を希望の色で染めた。質問に答える代わりに怜にも答えてもらう。交換条件にできると思ったのだろう。
「小谷は誰か好きなやつ居る？」
思いがけない怜の問いにびっくりした顔を作る少女。彼女は、少し沈黙を溜めてから、
「ごめんなさい」
と謝った。怜が訊いたのと同じ種類の問いを自分がしていることが理解できたのである。
肩を落とした彼女の姿を横目で見て、怜は、キツい言い方だったかもしれないと反省した。一言、環とは別れていない、と言えば良いだけのことだったのだが、今朝の家族とのいざこざのことがあり、少しいらいらしていたのかもしれない。

「実は小谷の言うとおり、喧嘩したんだ」
少女の顔が上がった。
「待ち合わせに十分遅れただけなのに怒り始めたんだよ。どうすればいい？」
玲が困り果てたような口ぶりで言うと、彼女は顔を明るくして、
「それは加藤くんが悪いわ。約束を守らないっていうのは、その人のことそんなに大切に想ってないって、そう思われても仕方ないってことだから」
と諭すように返してきた。
「なるほど。それでどうすれば？」
「謝ったの？」
「死ぬほど」
「何かプレゼントとか」
「何を贈れば？」
「気持ちのこもってるものだったら何でもいいと思うよ」
「分かった。じゃあ、何か適当にみつくろうよ」
「気持ちね、気持ち」
玲は神妙にうなずいた。適当な話をでっちあげたのは、彼女の機嫌を取ろうとしたわけではない。彼女にメッセンジャーになってもらいたかったのである。そんなに環と玲の――主に環のだろうが――ことが気になる人間がクラスにいるなら、適当な話を信じさせておくのも一計であろう。この話がクラスの皆の知るところになり、多少なりと彼らの好奇心を満たしてくれるだろうことを、玲は祈った。
「でも、川名さんでも怒るんだね。ちょっと想像できないな」
「意外とすぐ怒るんだよ、ああ見えて」
多少納得の行かない顔をしている少女に、玲は平静に答えた。実際は、彼女の言うとおり、環が怒ったところなど見たことがなかった。
二人は外に出ると、焼却炉に向かった。脇に置いてあるカゴにゴ

ミ袋を入れる。
「それで、川名さんずっと怒ってるの？」
横からの問いに、
「小谷から環に言ってくれないか。もう怒りを静めてくれって」
いい加減に答えたその時だった。
「もう怒ってないよ」
そよ風に鳴る風鈴のような妙なる声が響いてきた。
怜の背筋が立つ。聞き覚えのある、ありすぎる声だった。
諦めた怜が振り返ると、にこやかな微笑を浮かべた少女が立っていた。少しクセのある漆黒の髪が、初夏の微風を受けてさらさらと鳴っていた。
「あの、わたし、先に帰るね」
気を利かせたのか、居心地が悪かったのか、クラスメートの少女が立ち去ると、怜は環と二人きりになった。新しい経験である。怜は環といて緊張を感じたことがなかったが、今まさにそれを感じていた。
環は手にしていた袋を焼却炉脇のカゴの中に入れると、怜と向かい合った。
怜のほうから沈黙を破った。
「それで？」
促すような調子でいうと、
「それでって？」
環が分からない顔で問いを返す。怜は覚悟を決めた。彼女に限って分からないはずがないのである。
「怒ってるんだろ？」
「怒ってないって今言ったばかりよ」
環は柔らかく言った。その口調のどこにもとげのようなものはなかった。が、例えウソだとしても自分とのプライベートなことをカレシが他の子に話していて気を悪くしない女の子がいるだろうか。仮に環がそういう子だとしても、謝るべきことだろう。

「悪かったよ」
環は首を横に振った。
「ううん。悪いのはわたしよ」
夜を映したような瞳がじっと怜を見ていた。怜に戸惑いはない。
環が言おうとしていることはよく理解できた。
「何も悪いことはないだろ」
「そう思う？」
「逆の立場だったら、どう？」
「逆にはできない。わたしは彼女じゃないもの」
「それがお前のいいとこだな」
環は微笑をおさめた。
「いいとこ……か。どうかな、分からないわ。ただ、わたしにはできないのよ」
「知ってるよ」
「お願いしても？」
怜はうなずいた。ただし、と彼は続けて、
「交換条件がある」
と切り出した。環はちょっと驚いたような顔をしたが、
「さっきの話、許してほしい」
という怜の言葉を聞くと、微笑んでうなずいた。そのまま、彼女は歩を進めてきた。
「会わないのか？」
横を通り過ぎようとしたその時に、怜は訊いた。言わずもがなだったかもしれないが、それは彼なりの思いやりだった。
「……時が来たら」
環は怜を見なかった。そのまま彼女は校内の人となった。
二週間ぶりの邂逅にしてはあっけないものだったが、それで十分に環の気持ちは伝わった。言葉足らずの秘密めかした言い方は怜なら分かってくれるはずだという信頼もあるだろうが、それ以上に友人のことを口に出したくないという気持ちがあるのだった。口にす

ると、余計なことを言ってしまい、友人を侮辱することになるのではないかと恐れたのだろう。環に限ってそれはないと思うが、逆に言えばそれだけ大事な人なのだ。事に自分で当たれない彼女の苦悩はいくばくか。それを想うと、ふと現れる気持ちが怜にもある。しかし、その気持ちもまた口には出せないものだった。

第２５話：禍福はあざなう

オレンジ色の光が斜めに校舎の中に差し入っていた。一日の終わり。運動部はまだ活動しているが、文化部はもうそろそろ帰る時間である。文化研究部もその例外ではない。

「円（マドカ）ちゃん」

部室から少し離れた所で、怜は、鞄を提げて廊下を歩く小さな背に、後ろから声をかけた。振り返った少女の顔が、窓から入る夕日に暖色に染まった。その穏やかな色とは対照をなすように彼女の瞳の色は鋭い。

「何ですか？」

怜は勇気を奮い起こした。日ごろ眠っているものである。たまには目覚めさせておかねばいざというときに使えなくなる。

「一緒に帰らない？」

少女の頭が下がった。ただし、それは承諾の印にしては下がりすぎていた。円は頭を上げると、

「すみません。今日は寄るところがありますので」

そう謝ると、くるりと背を向けて離れていった。遠ざかる小さな背を見送って立ち尽くしていると、

「あーあ、振られちゃったね」

怜の後ろから楽しそうな少女の声がかかる。怜は振り向くと、声の調子を面白くないものにして、

「なぐさめるとこだろ」

言ってやったが、彼女は、

「一緒に帰る約束をしてる男の子が他の女の子を誘ってるのに、どうしてそんな気になる？」

いたずらっぽく答えた。怜は肩をすくめると、帰るか、と彼女を誘って、廊下を歩き出した。鈴音は怜の横に並ぶと、

「ま、根気よくね。今はほら、わたしがいるから、タイミングも悪

いし」
と元気づけるように言う。
「それにしても、円ちゃん、可愛くなったわ。ついこの前までランドセル背負って、こどもこどもしてたのに」
「親しいんだな」
「自慢だけど、加藤くんよりもタマキとの付き合いは長いし、マドカちゃんとも仲いーよ」
確かにその言葉通り、円は部活動の間、鈴音とは親しげに言葉を交わしあっていた。
「やだな、妬(や)いてるの？」
鈴音がからかいの言葉を投げてくるが、怜は否定しなかった。円の下の妹と仲が良いので欲が出てきたのかもしれない。
「わたし、旭(アサヒ)ちゃんとも仲いいよ」
怜は怖ろしいライバルの出現にうめき声を上げた。
その大仰な反応に顔を明るくしていた鈴音の顔が怪訝な様子を作ったのに怜が気がついたのは、校門でのことだった。人型の影が一つ地面に伸びている。おそらく三年生の男子である。どこかで見た顔だった。が思い出せない。悪いことにあちらは怜のことを知っているらしい。
「加藤」
と話しかけてきた。怜はばつが悪い思いをした。誰だっただろう。脳内にあるデータベースを検索したが、ヒットするものがないので、素知らぬ風で、近づいてきた彼の制服についている名札を見た。そうして、ようやく思い出した。宮田某(なにがし)――下の名前は覚えていない――は、去年のクラスメートだった。
「ちょっと時間あるか？」
特別仲が良かったわけでもない彼の唐突な誘いに、怜は、悪いと言って首を横に振った。
「今は難しい」
「少しでいいんだ。ずっと待ってたんだから、少しくらいいいだろ」

上から物を言うような口調が癇に障る。怜ははっきりと、
「悪いが改めてくれ」
そう言って、鈴音を促すと、校門を抜けようとしたが、その前に宮田少年は立ちはだかった。行かせる気はないらしい。怜は小さく息をつくと、鈴音に少し待つように言った。先導されるがままに、校庭の片隅に来た怜は、宮田から興奮を抑えたような声で、
「お前と川名とのこと、知りたいんだけど」
聞かれた。よくよく今日はこの件に縁がある日である。うんざりしたが、人は間違いから学ぶことができる。掃除のときの二の舞を避けるために、怜は、別れてはいないことを簡潔に告げた。告げたあと、かすかに苛立ちが胸を差す。よく知りもしない人間に何でこんな説明をしなければいけないのか。とかく世の中は渡りにくい。
「じゃあ、さっきの子はなんなんだよ?」
用が終わり歩き出そうとした怜に、宮田はまだ用があるようだった。彼は立て続けに、
「お前、あの子とはどういう関係なんだ?」
訊いて来た。怜は心中で舌打ちした。心中にとどめておけた自分を褒めてやりたい。
「川名と付き合ってるのにおかしいだろ。どういうことだよ。納得のいく説明をしろよ」
自分の自制心をある程度信頼している怜にしても、我慢の限度というものがある。単なる昨年のクラスメートに過ぎない人間に愛想よく何でも答えなければならないのか? 答えはＮＯである。
「お前には関係ないだろ」
強引に話を打ち切ろうとしたが、相手はしつこかった。
「あるんだよ」
怜は先を促した。どういう関係があるのか言ってもらいたい。そうして大した関係でなかったら、さっさと解放してもらいたかった。
「……オレは川名のことが好きなんだ」
怜は自分の察しの悪さを呪いたくなった。それならそれでもう少

し対応の仕方があったかもしれない。
「だから関係ある。お前が別れたんなら、オレが付き合う」
苦手なテンションだった。彼は何か勘違いをしているようである。恋愛ドラマの見すぎなのではなかろうか。ひどい男にはまっているヒロインを陰ながら見守る誠実な主人公気取りか。どこか他所(よそ)でやってもらいたいものだ。怜には三文芝居に出演する気はない。「付き合う」宣言にしても、カッコいいセリフではあったが、宣言すれば良いというものでもない。お前の意志だけの話か、と怜は突っ込んでやりたい気もしたが、とにかくもう面倒であった。
「だから言ってるだろ。別れてないんだよ。悪いけど」
怜はぞんざいに付け加えた。それが余計な一言だったと気がついたのは一瞬後のことだった。頬に衝撃を感じて、怜は思わず体を揺らした。足を踏みしめて体を支えると、今度は、頭をかばうようにして反射的に出した腕に一撃を受ける。
「むかつくんだよ！」
大して聞きたくもない告白が、怜の耳に届いてきた。息を荒くしてこちらを睨みつけている少年の姿が怜の目に映っていた。口の中が切れたのだろう。口内に血の味が広がっていく。
「何でお前なんだよ？　何で川名はお前なんかと……」
憎悪で瞳を燃やした少年がうわ言のように言っていた。
殴られた頬の痛みを感じながら、怜の頭は醒めていた。環が自分ではなく怜を選んだことに納得がいかない。それは良い。世の中、納得の行かないことは多いものである。しかし、だからと言って、力を振るうのか。怜は拳を握り締めた。
「何で……」
再び襲い掛かってくる気なら、ただ殴らせてやる気はなかった。が、彼は、一回殴って気が済んだのか、怜を強い目で睨みつけると、その場を離れて行った。
頭は醒めていたが、その代わりに胸が悪くなった。吐きそうな気分である。憎悪を向けられたことが胸を悪くしていたのではない。

そうではなく、むかつくから殴るという短絡的な行為をする人間が、自分を敵視していたことが不快だった。敵意は自分と同じレベルの人間に向ける。宮田あたりに同等に扱われたことがたまらなく不愉快だった。

　憮然とした表情で校門前に戻ると、怜を認めた鈴音が、目には心配そうな色を浮かべながらも、

「男同士、拳で語り合って来たの？」

　冗談めかして訊いてきた。怜は、思わずかっとして、

「語り合った？　一方的に語られただけだ、面白くもない話をな！」

　吐き捨てるように言った。言って自己嫌悪の沼に落ちた。むき出しの感情を向けるということは、向ける相手への甘えが含まれているということだ。鈴音は甘えても良い相手だろうか。問うまでもない話だった。

　怒声を浴びても少女はひるんだ様子を微塵もみせなかった。彼女は鞄から取り出したハンカチを手早く水筒の水で浸すと、

「ハンカチが汚れる」

と、怜が嫌がるのにも構わず、彼の口元を軽く拭った。

　ひんやりとした布の感触が気持ち良かった。

　数人の生徒が物珍しそうな目を二人に向けながら傍らを通り過ぎた。

「多分わたしの所為なんでしょうけど、謝れないわ」

　すぐ目の前から声が聞こえてくる。謝ってもらう必要などなかった。そもそも鈴音の責任などではない。しかし、自分の責任であると言えるほどには寛大な気持ちになれなかった。

　鈴音の家に着くまで、怜は無言だった。何も話したい気分ではない上に、常なら怜の言葉を引き出す少女が口を閉ざしているので尚更である。門前で、

「じゃあ、また、明日な」

と、情けないことであるが、それだけ言うのが精一杯だった。

「加藤くん」

歩き出した怜の後ろから声がかかる。振り向くと、すぐ目の前に鈴音が立っていた。怪訝な目を彼女に向けると、少女の肩が動いた。その白い手が、怜の頬に触れた。

「何も言わないで」

怜が口を開こうとしたところを、鈴音は止めた。

「今はわたしの時間。わたしがしゃべる、あなたは聞く。いいわね」

怜は仕方なくうなずいた。その素直な対応に気を良くしたような顔をした鈴音は、小さく咳払いをしたあと、

「あなたは何も悪くない。たとえ悪かったとしても、わたしはあなたの味方よ」

いった。まっすぐに怜を見る瞳に澄んだ色があった。

「落ち込まないでとは言わない。でも、あなたを想う人がここにいることを忘れないでね」

一言一言が浸み入って、怜の乾いた心に潤いを与えた。

柔らかな指が怜の口元から離れた。

「さ、いいわよ」

彼女の時間は終わったのだった。発言を促された怜は、

「少し気が楽になった、ありがとう」

素直な気持ちを伝えたが、

「ウソつき」

鈴音は信じない素振りを見せた。

「本当だ」

「どうかな」

「少なくとも感謝の気持ちは」

「本当に？」

怜が重々しくうなずくと、少女は口元を綻ばせた。

「良かった」

ほっとしたように言ってから、

「わたしにはこれしかできない。でも、それでいいよね」

鈴音はそう続けた。彼女の言葉には優しい響きがあり、その優し

さは人を癒すことができるものだった。怜の胸にある暗く澱んだものが澄んだ明るさを取り戻しつつあった。ただし、それは怜の流儀ではなかった。澱みがあるならそれをさらうのではなく、その澱みを引き受けるのが彼の流儀である。しかし――

「たまには頭を撫でてもらうのもいいでしょ」

どこかで聞いたことのあるセリフを言う少女。そう言ってにこりと微笑まれると、そんな気もしてくるから不思議だった。

「たまに、だったらな」

怜が釘を刺すと、何度もこんなことしないわよ、と鈴音が請けあった。

「スズ、ありがとう」

凝り固まった気持ちがほぐれたことが感じられた怜が感謝を伝えると、

「素直なあなたって素敵よ」

とおどけた調子で鈴音が答えた。彼女に背を向けて帰路を取った怜は、先ほどまであった嫌悪感が確かに薄れているのを感じていた。本意ではないとしても、人が自分の為を想って、何かをしてくれたということは、やはり幸せなことである。その幸運を想うと、今日の不運があまり感じられなくなる。怜は現金な自分を笑う余裕ができているのに気がついた。殴られた頬は相変わらずずきずきと痛んだが、心の鈍痛は軽くなっていた。

第２６話：追憶の夜、再生の闇

夕食と入浴を済ませ、学校と通っている塾の宿題を終えると、鈴音はその身をベッドに横たえた。近くにあった目覚まし時計を手に取ると、もう十一時である。ここから一時間は彼女のリラックスタイム。音楽を聞いたり、本を読んだり、携帯でメールしたりして時を過ごす。しかし、今日は違った。それよりも彼女の心を占めるものがある。鈴音は自分の手をじっと見つめた。その手に触れた頬の感触がまだ残っているような気がした。

別れ際に、怜に、どうしてあんなことをしたのか、自分でも分からない。その傷ついた背を見たときに、なぜだか無性に頭を撫でてやりたくなった。あなたは何も悪くない、ということをはっきりと教えてやりたかったのだ。さすがに頭は撫でられなかったので、言葉をかけるプラスアルファにとどめたが。

今日、怜に会いに来た男子には見覚えがあった。実の所、彼のことを知らない女子は学校にいないだろう。宮田翼。校内の有名人リストのトップクラスに位置する男子である。甘いルックスを持ちサッカー部のレギュラーとして活躍している彼はかなりの人気者だった。彼が怜を殴った理由として考えられることは一つしかない。環がらみである。環のことが好きだというのはもっぱらの噂だった。昨年学校に行っていた期間にも聞いたことがあったし、学校に再び行き始めたここ二週間でも聞くことができていた。彼が怜に環の件で会いに来て、そして暴力的な行為に出たとしたら、それはすなわち鈴音の責任であるということだ。

――責任を感じて、あんなことしたのかな？

何かが違う気がした。確かに責任は感じていた。それに対して謝罪できないことにも。謝ることはできなかった。今回の件を自分の責任だとして謝る行為は容易いが、それはこれまで怜がしてくれたことを否定することを意味しているからである。謝罪の気持ちの代

わりに、別れ際の行為に及んだのか。
　鈴音は首を捻った。借りを返したかったのかもしれない。怜には借りがある。不登校期間を終焉に導いたのは紛れもない、怜の力だった。彼は絶対に認めないだろうが、間違い無い。あるいは、あの時彼が来なくても、いつかは行くようになっていたのかもしれない。しかし、そんな「もしも」は存在しないのだ。起こったことが全てであり、鈴音はそれを認められるほどには現実的だった。怜には大きな借りを作ってしまった。その借りを返したかったのだろうか。
　それも違う気がした。確かに借りは返すつもりだが、そういう気持ちがあったわけではない。では、一体なぜだろう。さっぱり分からない。何の目的も打算もなく、純粋に人に何かをしてあげたいという気持ちになったのは初めてだった。この気持ちを何と呼ぼう。鈴音は考えるのをやめた。既存の言葉で、この気持ちに名前をつけたくない。これは彼女だけの気持ち。神聖な何かである。
　鈴音は喉の奥を鳴らした。押さえきれない笑いが少女の口元から漏れる。
　こちらの話はそれでいいが、おそらく怜にとっては余計なお節介だっただろう。強い人である。他人の干渉など、彼には邪魔でしかないのかもしれない。しかし、その邪魔でさえ、彼なら上手に取り扱いそうな気がした。
――でも、タマキに悪かったかな。
　友人のカレシに対して少しなれなれしかったかもしれない、と鈴音は反省した。環はいつものように笑って許してくれるだろうか。他のことならともかく、こと怜のことになれば、それはどうだか怪しい。今日のことは胸に秘めておいた方が良さそうである。思わず鈴音は、にが笑いを浮かべた。これでは本当に隠れて付き合ってるみたいだ。
　鈴音は、自分の手から目を離し、窓外に視線を移した。夜に浮かぶ星が点々と光を発していた。
――何を考えてるの？

友の声が耳にこだました。
その声の響きが消えるまでの間に、鈴音は過去へと誘われていた。
隣に少女がいる。大人びた微笑を浮かべてこちらを見ながら、
「何を考えてるの、スズちゃん？」
その音楽的な声で訊いてきた。
「永遠」
鈴音は短く答えたあと、
「ねえ、タマちゃん。この世に永遠のものってあると思う？」
逆に尋ねた。
満天の星の下だった。鈴音の家の三階にあるバルコニーに二人はいた。
問われた彼女は答えなかった。突拍子もない問いに対して答えに窮したわけではないことは、鈴音には分かっていた。彼女は促していたのだ。
「わたしは無いんじゃないかって思うの。だって、この星々だって、何十億年なんて、そんな人間の作った言葉で滅んじゃうのよ。星でさえそうならさ……」
鈴音が続けたが、彼女はまだ答えなかった。その沈黙は人を不安にさせるものではない。むしろ安心させるものである。言葉を受け止めて、どう答えようか考えを巡らしているのだった。
彼女は静かに口を開いた。
「わたしはね、スズちゃん。あると思う、永遠が」
今度は鈴音が促す番だった。
「だって、そうじゃないと悲しいじゃない。この世界が悲しいとこだなんて考えたくないな。永遠に続くものは確かにあって、でもそれはとても見つかりにくいところにあるって、そう考える方がわたしは好きだな。そうしてね、わたしがあるって思えばそれは確かにあるのよ」
そう言って彼女は微笑んだ。その微笑みは、地上にあってなお星のように輝いていた。

「タマちゃんはさ、現実的なロマンチストだよね」
鈴音が言うと、
「じゃあ、スズちゃんは夢を見たいと願っているリアリストね」
そう彼女は返したあと、静かに付け加えた。
「でもね、スズちゃん。現実と夢は別のものじゃないよ」
「それは同じ一つの二つの面。決して交わらないけど、二つながら在るもの」
鈴音は吟じるように言うと、破顔した。
「わたしさ、タマちゃんとだったら結婚してもいいな。うまくやってける自信がある」
「じゃあ、そうしましょうか?」
「本当?」
「ええ」
「可愛い彼女はウソをつく」
「あら、バレた?」
彼女は舌を出した。
「ごめんね、好きな人がいるから、わたし」
「例の、カレ?」
「うん」
「どんな人なの?」
「変な人よ。スズちゃんと同じくらい」
「タマちゃんと同じくらい?」
そうして二人は顔を見合わせて笑った。ひとしきりの笑いがおさまると、
「スズちゃん、今、幸せ?」
と静かな声がした。鈴音は空を見た。
「そんな気になることもあるかな。星空が優しく瞬いている時、微風が頬をくすぐる時、雨音が心地よく耳に鳴る時……そして……」
「自分の顔を鏡で見る時?」
冗談を言う彼女の方を見ずに、鈴音は穏やかに首を横に振った。

「友が傍にいる時よ」
友人の少女は口を閉じた。しばらく間があって、
「……そろそろ帰るね、スズちゃん」
と彼女は口を開いて、座っていた布張りの簡素な椅子から立ち上がった。鈴音も立ち上がりながら、母親に送らせる旨を告げた。
「ありがとう」
「それはこっちのセリフ。母子ともどもお世話になります」
「それは言わない約束よ」
階下に下る階段で鈴音が前を歩く少女に言う。
「告白しちゃったらいいんじゃない？」
「タイミングの問題なの」
「それと勇気でしょ」
「よく分かってるね。さすが」
「タマちゃんに告られたら誰だってＯＫすると思うけどな」
「世界はスズちゃんが考えているよりずっと広いのよ」
「大丈夫だって、わたしの次くらいに可愛いから」
「あら、小五の時のホワイトデーで私のほうがたくさんお返しもらったこと、もう忘れたの？」
「あれはズルでしょ。タマちゃん、一組から三組までの男子全員にバレンタインチョコ渡すんだもんな」
「戦略と言ってよ。自分のクラスの男子だけにしか渡しちゃいけないってルールなんかなかったでしょ」
リビングにいた母を呼び、友達を家まで送ってもらいたいことを告げる。二人が玄関から消え、鈴音は一人になった。おそらく彼女は、車の中で今度は不登校の娘を持つ母の相手をしてくれるだろう。上手にストレスを和らげてくれるに違いない。
彼女は闇だった。恐怖を誘う闇ではない。全てがそこから生まれる始まりとしての闇である。彼女はいつも鈴音を包んでくれる。優しい子だった。その優しい腕の中に包まれていると、そのままそうしていたいという強烈な欲求にとらわれる。それは不健康なことで

ある。だが、人間、健康でだけいられるわけではない。不健康な状態を知るからこそ、健康の有りがたみが分かるのだ。

鈴音は友人に感謝した。

素直に感謝できる友がいることがただ嬉しかった。

第27話：旅の始まり、旅の終わり

ドアにノックの音が響き、母が入って来た。鈴音はベッドから身を起こすと、フローリングに降りて、小さな丸テーブルに向かった。母の手から、紅茶と切り分けられたりんごが載せられたトレイが、テーブルの上に移動する。夜食だった。もっとも勉強はもう終わっていたので、本来の用は成さないが。

「今日の分はもう終わったのよ、お母さん」

決してサボっていたわけではないことを告げる鈴音だったが、母はそんなことは気にしていないようだった。

「学校はどう？」

鈴音が幾つかのりんごの小片をおいしく食べたあと、母はおそるおそる声をかけてきた。

「楽しいよ」

鈴音は心からの笑みを見せた。年頃の娘を刺激しないようにと気を遣ってくれる母に、そのくらいのサービスはしなければなるまい。さらに、母が空の器を載せたトレイを持って部屋を出ようとしたときに、お母さん、と声をかけ、振り向かせたあと、

「もう大丈夫だから。心配しないで」

と母に安心させるように言った。母は微笑むと、お休み、と言って戸を閉じた。泣き出しそうなのをこらえているような笑みだった。

母には心配をかけた。もちろん父にもだが、家にいて始終娘と対面しなければならない分、母のほうがストレスであったろうと思う。むろん、辛いのは鈴音自身も同じだったが、悲劇のヒロインを気取らないようにする程度の分別はあるつもりだった。この八ヶ月は、母にとって長い、それこそ長すぎる時間であったろう。母の心労に報いるには、親孝行をするほかない。とはいえ、今は何ができるわけでもない身であるので、せめて元気に学校に通っている姿を見せて安心してもらうことくらいはしたい。

そもそも不登校になった理由はつまらないことだった。しかし、それをつまらないと割り切ることができるのは、同じ立場に立ったことがない者だ。そうして、そういう人間とは語り合う必要はないと鈴音は思う。慰めが得られないからではない。端的に、分かり合うことができないからである。

二年の初夏、鈴音は一人の男子から告白された。告白されるのは珍しいことではなかった。それまでにも何度かある。自分に異性に対しての魅力があるということは分かっていた。自惚れではない。十三年そういう扱いをされれば気がつかない方がおかしいというものである。別段、それを誇りに思ったことはないし、それを武器に使った覚えもない。告白は丁重に断った。他に好きな子がいたわけでも、理想が高かったわけでもない。単に男の子と付き合うということに興味がなかったのである。

その男子は男らしく聞き分けてくれたが、おさまらないのは彼のカノジョの方だった。いや、正確には元カノジョである。彼はカノジョと別れてから、鈴音に告白したのだが、カノジョの方はそういう気はなかったらしい。カノジョは、他人のカレシを誘惑した、と鈴音のことを糾弾し始めた。悪いことに彼女はクラスメートであり、もっと悪いことに、クラス内のメジャー・グループのリーダーでもあった。嫉妬から、鈴音に対する、悪口、無視、嘲笑、など嫌がらせが始まった。くだらない、と初めは気にかけていなかったし、気にしないことが無理なほど露骨になると、彼女に直談判に行ったりした。もちろん、彼女は鈴音の言葉を聞いたりしなかった。話がさらにややこしくなったのは、例の鈴音に告白した男子が、どこから聞きつけたのか鈴音の窮状を知り、義心を持ち、元カノジョに抗議したのである。これを鈴音がやらせたと邪推した彼女は、さらなる嫌がらせに労力を使うようになった。

彼女の嫌がらせなど大してこたえなかったが、鈴音がショックを受けたのは、これまで仲が良かったクラスの子が彼女を避け始めたことである。話しかけようとすると、そそくさと鈴音の視界の外に

出ようとするのである。鈴音と一緒にいたら自分もターゲットになると思ったのだろう。今、冷静な頭で考えれば正しい行為であると判断できるが、当時はそれほど寛容にはなれなかった。友達だと思っていた子たちの裏切りとも言いたい行為に、鈴音はショックを受けた。そうして、そういう醜い心性の持ち主と平気で友達付き合いをしていた自分自身にも衝撃を受けていた。

教室は鈴音への悪意で満ちているようだった。その悪意を防ぐ術が鈴音には見つからなかった。鈴音は恐怖した。汚らわしいその悪意に触れているうちに、彼女の精神は徐々に蝕まれた。腐臭を撒き散らす人型の化け物が自分を仲間に引き入れようと手を伸ばしている。教室に入るとそんな想像に身が震えるようになった。鈴音は学校を休みがちになった。どうして、毎朝、好き好んで汚濁の中に向かわなければいけないのか。理由がなかった。それでも一学期はどうにか切り抜けたが、夏休みを終えたときには、学校に行く気は全くなくなっていた。

――しばらく学校を休むわ。

このセリフを告げたときの母と父の落胆振りは見るも哀れであった。娘が、人生の一般的なコースをずれたことが信じられないのだ。レールが敷かれていない所にも道があることは頭では分かっていても、その道を歩くのが我が娘となれば納得が行かないのが親心である。娘をなだめすかせて学校に行かせようと躍起になる父母に気落ちしながらも、彼らに心配をかける自分を省みる余裕を持っていられることだけが、鈴音の慰めだった。

――許さない。

両親に言ったのと同じセリフを告げたとき、眼底にぞっとする光を溜めてそうつぶやいたのは、環（タマキ）だった。

――タマキ、何考えてるの？

鈴音は訝しげな目を小学校来の友人に向けた。環は周囲から常にクールだと思われがちであるし、事実普段はその通りなのだが、それだけではないことを鈴音は知っていた。彼女には内に秘める熱情

がある。いつもはそれをヴェールで隠しているから外には分からないだけなのである。

――わたしが何を考えてるのか、説明しなきゃいけない仲でもないでしょ。

環の静かな声に、鈴音は体の奥にひやりとするものを感じた。彼女の想像した通りだとするとうまくない。鈴音は彼女の手を取ると、瞳を合わせ、ゆっくりと首を横に振った。

――わたしに何もするなって言うの？

搾り出すような悲痛な友の声に、鈴音はうなずいた。

――どうして？

――説明しなきゃいけない仲でもないでしょ。

納得の行かない顔をする環を、鈴音はなだめたが、

――分からない。

と、環は聞き分けのないことを言った。

――環にああいうものに触れて欲しくないのよ。

鈴音は静かに言った。

――スズちゃん、わたしがそんなものを恐れると思ってるの？

――そうは思わない。でも、お願い。わたしのためにね。

環は唇を噛み締めて悲愴な面持ちだった。そういう友の顔を見るのは辛かった。

――今はどうしていいのか分からない。でも、このまま戻れないわ。先がどうなるか……やってみるしかない。

鈴音は覚悟を決めて言った。

――スズちゃんは分かってない。ひとりなのよ。あなたは、ひとりで……

それ以上は言葉にならないようだった。俯く少女のなめらかな頬に手を触れて、鈴音は彼女の顔を上げさせた。

――知ってるよ……そんな顔しないでよ、タマキ。似合わないわ、あなたには。

環は弱々しく微笑んだ。

――……わたしに似合う顔ってどんななの？
――我がままで傲慢で強靭な勝者の顔。
冗談のように軽く言った言葉に、環は真面目に答えた。
――スズちゃん、わたしはもう負けてるのよ。敗者なの。勝者なんかじゃない。
三年付き合っているが初耳だった。驚きに胸を打たれた鈴音は、思わず己の状況も忘れ、何と戦ったのか、環に訊いてみると、
――……世界と。
呆れた答えが返ってきた。そんなものと戦えば負けるに決まっている。
――その時のわたしは勝利を信じてたわ。でも、負けた。だから、ひっそりと生きていくことにしたのよ。
――ひっそりと……ね。
友人の学校内での評判を考えると、とてもそうは思えなかったが、環の言いたいことは分かった。彼女の人生に対する態度が少し分かった瞬間だった。
――負けて何か失った？
――何も。逆に手に入れたものがある。
――じゃあ、悪くないじゃない。
――負け方によるのよ。
――次につながる負け方？
――負けるときに、そんなこと考えられると思う？
環は、彼女が手に入れたものは、たまさかの結果にすぎないということを続けた。そうして、悲しげに目を伏せた。彼女の気持ちは痛いほど分かった。しかし、もう引き返せないところに来ていた。
――もう決めたのね。
環が目を上げた。鈴音がうなずくと、彼女は抑えた声で言った。
――それじゃあ、わたしにできることは、もうないわ、何も。
――ひとつだけあるよ。
鈴音はわざと顔を明るくしてみせた。

――なに？
――わたしを待つこと。待っててくれる、わたしを？
――バカ。同じこと、もう一回言ったら、ひっぱたく。
――出会ったときみたいに？
――あの時は、叩かなかったでしょ。
――そうだっけ？
環は笑顔を作った。花が開くような最高の笑みだった。それが彼女からのはなむけだった。
――あなたを待っています、未来で。
それからも、環とは付き合いを続けたが、彼女からついぞ学校の話が出たことはない――怜の話は別だが。鈴音の戦いに干渉しないようにするためである。それは絶大な信頼の証だった。彼女の信頼を得られる自分が鈴音には誇らしかった。
長い旅だったような気がする。孤独の中で鈴音はのたうちまわっていた。受け入れてしまえば楽になるものがある。少なくとも受け入れる振りをすれば。しかし、それは自分を裏切る行為だった。そうして自分を裏切るということは、自分を信頼してくれる友を裏切る行為でもある。それだけはできなかった。
旅を続けるうちに、自分が求めているものが分からなくなっていた。何を求めて始めた旅だったのだろうか。いや、そもそも求めるものなどあったのか。何も分からなくなったそんな時。彼女は一人の少年に出会った。彼は鈴音の行く道を示してくれた。ただし、行く先に求めるものがあるのではなく、行くことを決心すること自体が求めているものそのものなのだと言って。それを聞いたときに、鈴音の旅は終わりを告げた。始まりの地から一歩も動いていなかったが、そこそがゴールだったのだ。
彼女は勝利した。自分ひとりの力で得た勝利ではなかったが、そも自分以外の人の言葉を認め受け入れることができたということが彼女の勝利の内容の一部であるのなら、誰からも非難はされまい。
今から考えれば、待ちきれなくなった環がよこした援軍が怜なの

だろうか、とも思う。どうもそんな気がしてならない。むろん、環に聞いても、否定するか、あるいは答えないかだろう。また、怜も人の命に諾々と従うような人間でもない。ただ、それが環の指示であるにしても、怜の意志であるにしても、彼がこの上ない援軍であるという事実に変わりはなかった。彼女に勝利をもたらしたあとも、朝夕の送り迎えで学校への鈴音の心理的な障害を軽くし、鈴音の勝利を確固としたものにしてくれている。そうして実のところ、彼の送り迎えに鈴音はそれ以上の価値を認めていた。怜と同じ道を歩き、同じ風景を見て話すのが楽しくてたまらないのである。ここまで短い付き合いで気の置けない状態になった人は初めてだった。しかし、この楽しみもそろそろ終わりに近づいている。

　鈴音の中で何かが確実に変わった。その変わった自分で会いに行かなければならない人がいる。もしかしたらあちらから会いに来てくれるかもしれないが、それは礼に反するだろう。長い間待たせたのだ。こちらから出向かなければなるまい。再会の時。それが確実に近づいていることを鈴音は感じていた。

第２８話：休日は図書館へ行こう

休日の家というのは必ずしも安息の場所ではない。むしろ、その逆であることが多い。この日もそうであった。まず、朝早くにたたき起こされる。町内会の掃除である。なぜだか、この町内ではやたらと地区の掃除がある。それが終わり、家で朝食を取り終わると、今度は風呂の掃除が待っている。ごしごしと浴室の汚れを落とし、水を張ると、やっと起きてきた妹が朝から風呂に入るという。洗い終わったばかりのものを使われて、詮無いことではあれ、ちょっとやりきれない思いでいると、次の指令が待っている。今度は自分の部屋の掃除である。それほど乱雑になっているわけではない。軽く抵抗すると、

「母さんが勝手にやってもいいのよ、怜」

涼やかな顔で脅される。何もやましいことがあるわけでもないが、中学三年生にもなってプライベートを侵されてはたまらない。しぶしぶ自分の部屋で、不要なプリント類と小さな戦闘を繰り広げると、この時点で十時を回る。起床が六時であることを考えると、実に四時間働いているわけである。やれやれと一息つこうと、紅茶でも淹れようかと思い湯を沸かしていると、次なる指令。庭の草むしりをせよ、という平板な声。草をむしる前に、頭をかきむしりたくなったが、むしるだけ無駄であるので、素直にそれに従うことにする。

「あ、紅茶は淹れてってね」

母と父の分のティーカップを琥珀色で満たしたあと、庭に回り、雑草を抜く。地の上に作られた名も知らぬ草の小山をビニール袋の中にまとめ終わり家に戻ると、もう自棄（やけ）である。自分から車を洗うことを申し出てみる。ところが、車は父が洗うらしい。雑用終了。水で喉をうるおしたのち、すっかり汗だくになった体にシャワーを浴びると、時計は十一時を告げるころになる。先ほど飲み損なった紅茶を淹れて、片付けられた自分の部屋に戻り、清々とした気持ち

で机に向かう。まったく勉強とは素晴らしい。問題を解くという作業が、掃除という単純作業に比してこれほど面白いとは。母は偉大である。きっとこれを子に教えたくて、いろいろと働かせたのであろう。しかし、この素晴らしい時間も、一時間半で終わりを告げた。

「今日、友達来るから」

昼食の席につくと、妹が高らかに宣言する。彼女が友達を呼んだということは、家に喧騒が満ちるということだ。それだけではない。家の中をちょっと移動するのにも、彼女の友人と出くわさないか用心しなければならず、気を張らなければいけないということでもある。どうやらこの年頃の少女たちは、兄というものに過大な期待を寄せる傾向があり、しきりに兄を見たがる。用心して避けているが、運悪く出会うと気分の悪いことになる。妹が紹介してくれるわけだが、そこであからさまにがっかりした顔を作られるのである。その礼の無さに、親の顔を見てやりたいと思わないでもないが、見たければ自分の親の顔を見ればよい。類は友を呼ぶとしたら、親同士の顔も同じようなものだろう。

「図書館に行ってくるよ」

家で勉強することは潔く諦めて、勉強用具を手提げタイプのプラスチック製の鞄に入れると、外に出た。

快晴の初夏である。

そよそよと吹く風が頬に触れ、澄んだ空気も心地よい。視線を少し上に向けると、鮮やかな青。思わず吸い込まれそうな色。ふわりと体が浮くような感覚を覚えて、歩く足取りも軽やかである。

心も軽やかになったのだろうか、ふと、この場にいない少女のもとに想いが飛んだ。もしここに彼女がいたらと思うと、それは楽しい想像だった。多分、何も言わず、隣を歩くだけであろうが、言わないことで言えることがある。この頃、当然のように思っていたところがあるが、そういうことを理解してくれる人がすぐ側にいるというのは、実は非常な幸運であるのではなかろうか。

おさまったはずの頬の痛みがうずき出した。付き合っているカノ

ジョを想う男子に殴られたのが二日前のことである。殴られた当日は胸がむかついたが、どうやら心性に粘着質なものがないようで、一晩寝ると気分も治まった。頬は少し張れたが、その張れも引き、二日にしてすっかり忘却の彼方に追いやったことが、今カノジョのことを考えたことをきっかけにして再び戻ってきた。

――何でお前なんだ？

と言ったときの無念な声が耳に蘇る。そんなことはあっちに訊いてくれ、と言って済ませられないものがあることを、二日経て冷静になった今なら多少理解できる。そう言わざるを得ないほど彼女のことを想って来たのだろうか。その彼の気持ちを考えると何とも言いようのない感情を覚えるが、おそらくそう解釈するのは好意的に過ぎよう。しかし、好意的に解釈することによって分かることもあり許せることもあるのなら、そうした方が健全である。

からりとした空の下では、ぐずぐずとした想いもすぐに消える。目に映る青葉が微風に鳴るのも聞こえるほど、行く道は優しい静寂に満ちていた。車道から一本中に入った街路である。ときどきどこからか子どものはしゃぐ声が流れてきて返って静けさを際立たせた。

ゆるやかな時の流れに導かれるままに市民図書館につく。ここまでは二十分くらいの道のりで、自転車を使えば五分程度になるが、歩く方が好きである。青天の下、自転車で風を切るのも楽しいには違いないが、代わりに風景が楽しめない。また、ゆっくりと何かに思いを馳せることもできない。

市民図書館には、勉強に利用できるスペースが少なからずある。怜は、日曜日に熱心に勉強する幾人かに混じって、席を一つ取った。それから数時間は非常に有意義な時間を過ごした。塾や学校の宿題が随分と片付いた。勉強を始めるようになって、もちろん休み休みではあるが、ようやく数時間まとめて勉強できるほどの体力がついてきた。教わっている塾の講師の言葉を借りると、『勉強体力』が身についてきたらしい。

空いていた隣の席に人が座ったのに気がついたのは、四時半を過

ぎた頃だった。そろそろ帰ろうと思っていたときのことである。視線を感じて横を向くと、少女が微笑を浮かべてこちらを見ていた。ジーンズのホットパンツから伸びた足を組んで、組んだ足の上で頬杖をついている。上半身は、ビビッド・オレンジのキャミソールという格好で、黒髪のベリーショートとあいまって、全体にスポーティな雰囲気がある。

「ども」

平井七海（ナナミ）が小さな声を出した。図書館の静寂を崩さないように遠慮したのである。

怜は挨拶を返して、席から立ち上がった。

「帰るの？」

と七海。怜がうなずくと、彼女も立ち上がり、たすきにかけられるタイプのリュックを背負った。何か用があるのだろうか。七海が怜の後ろからついてくる。

「よく来るのか？」

図書館を出たところで、怜は七海に訊いた。

「ときどきね。勉強しに。家だと集中できないから」

「何か用か？」

「用がないと声かけちゃいけないの？」

そういうわけではないが、親交を温めあう仲でもない。図書館内で見かけたとしても、放っておけばよいくらいの仲である。

「こっち来て」

そう言うと、七海はさっさと歩き出した。彼女には少々強引な所がある。いや、と怜は思い直した。強引さは、彼女だけではなく、女の子に共通する基本性質にすぎない。事実、怜は控えめな女の子というのをついぞ見たことがなかった。七海の意図が分からないながら、不承不承、怜が後をついていくと、着いたのは図書館付属の自転車置き場である。ぎゅうぎゅうに詰め込まれている自転車の中から、七海はスポーツタイプの自転車を引っ張り出すと、乗らずに引き出した。

「加藤くんって集中力あるね。よっぽど帰ろうかと思ったわ」
その口ぶりからすると、自分の勉強が終わってから、怜が終わるのを待っていたのだろう。何となくそうしなければいけないような空気だったので、怜は、自転車を引く七海の横に並んだ。
「それで？」
怜は用件を訊いた。まさか、こうやって一緒に歩くために待っていたわけでもあるまい。
「せっかく図書館で見かけたから、借りを返してもらおうかなってね」
七海が思いがけないことを言ってきた。
「借り？」
七海とはあまり接点がない。借りなどあっただろうか。
「覚えてないの？」
軽く非難の目を向けられても、ちょっと思い出せなかった。七海は仕方なさそうな口ぶりで、
「よく聞いてよ」
と前置きしてから、
「ある所に男の子がいました。彼にはカノジョがいました。二人はラブラブでしたが、ある時、男の子にある疑惑が起こります。彼が二股をかけているというのです。彼を信じているカノジョは笑って取り合いませんでしたが、治まらなかったのはカノジョの親友です。『そういう疑惑をかけられること自体がすでに許せない』と、拳を固く握り締めました。彼のところに行って真相を確かめようとしました。このままでは血の雨を見ることは必至でした。それを止めたのがその子の友人です。『お待ちなさい。きっと何かわけがあるのでしょう。わたしが確かめてきましょう。ことはそれからでも遅くはないでしょう』」
そこまで物語を進めてから、怜の顔を確かめるように見た。怜はうなずいた。その喜劇の主人公が自分であることを思い出したのである。そして、主人公に起こるはずだった災厄を防いでくれた少女

にお礼をする約束をしたことも。
「コンビニで売ってる抹茶ミルクだったか？」
七海は立てた人差し指を揺らすと、
「貸したものには利子がつく。そうでしょ？」
と言って、近くに和菓子屋がある、と遠まわしな言い方をした。
「今度はオレと平井が噂になる」
そう言って怜は翻意させようとしたが、
「加藤くんはもう橋田さんと噂になってるんだから、この上もうひとつ増えても同じでしょ。わたしはそーいう色気のある話ってないから、ちょうどいいわ」
七海は取り合わなかった。
「この前と言ってることが違うぞ」
「そうだっけ？　男の子なんだから細かいこと気にしないでよ」
『男の子なんだから』というのは男に対して魔法の力を持つフレーズである。これを言われた男子は、続く命令に従わなければならなくなる。逆はない。『女の子なんだから』と女子に言っても、『差別しないでよ』と逆襲されるのがおちである。
魔法にかけられた怜は、大人しく魔法使いの少女の供を務めることにした。
初夏の日はまだ落ちず、日差しは明るかった。

第２９話：『五郎庵』で軽食を

まだ明るい日差しの中を、自転車を引いて歩く少女。彼女から少し離れる格好であとに続く少年。自転車の車輪が回転を止める。七海は立ち止まると、振り返り、後ろに声をかけた。

「ねえ、何で離れて歩くの？」

問われた怜は、返って困惑した。いかにも不思議そうな顔を作っている少女であるが、彼女にも分かっているはずである。

「小さい町だからだろ」

言わずもがなのことを怜は答えた。七海と一緒に歩いているところに誰か見知った人間と出くわしたら面倒なことになる。特にある少女には万が一にも見られたくない。

「あのさ、自分の隣に並んで歩いてくれないってことが女の子にとってどのくらいショックか分かる？」

分かるかというのは疑問ではなく、分かれという命令である。怜はしぶしぶ、七海が歩くその横に並んだ。努力はした。あとは運を天に任せるのみである。天上にいます幸運の女神は怜を憫笑（びんしょう）してくれたようだ。『五郎庵』と幟（のぼり）が立っている小ぢんまりとした和菓子店につくまで、知り合いには会わなかった。店の脇に自転車を止めてからのれんをくぐる七海。その後に続く怜。店内には数人の客がいたが、みな買い物客で、店内で食べられるようになっているテーブルについている客はいなかった。二人は、ゆるやかな光の入る窓際のテーブルに着いた。顔なじみらしきうら若い店員の女性が、注文を取りに来て、七海に声をかけたあと、ちらりと怜を見て、

「ナナちゃん、カレシ？」

と興味津々な顔で少女に訊いた。七海がいたずらっぽい笑みを浮かべて、ハイ、と適当なことを答える。

「ごゆっくりね」

中学生カップルに人の好い笑みを浮かべながら店員の女性が去る

と、しばらくして、注文した抹茶と串にさした三色団子が二人分運ばれてきた。普段抹茶など飲まない怜はその渋さに顔をしかめた。三色団子はほのかに甘かったが中に餡が入っているわけでもなく抹茶の渋さに対抗できる力はなかった。

「おいしいでしょ？」

テーブルの向かい側から満面に喜色を表して朗らかに訊いてくる七海に、怜は礼儀正しくうなずいておいた。

「図書館はよく行くの？」

七海の問いに、怜は、家から追い出された経緯を話した。七海は笑って、

「大変だね、お兄ちゃんは」

親身な振りで言った。

今まで七海とじっくり相対したことはなかったが、なるほど彼女には人気があるはずである。ちょっと目が合うといつも屈託なく笑いかけてくるのである。その微笑が、あなたとコミュニケーションを取りたい、と言っているようで、ついつまらないことでも何でもいいから話しかけたくなってしまう。七海の場合は、外見がどうこうというよりも、この言外のコミュニケーション能力が人気の秘訣なのだろうと怜は思った。もちろん、この怜の意見に反対する三年生男子はいくらでもいる。

ふと少しだけできた間に、

「宮田って分かる？」

怜の口から滑り出た言葉に、七海は物問いたげな顔で、

「サッカー部の？」

と返してきた。サッカー部かどうかは分からない。去年同じクラスだったことを付け足すと、

「じゃあ、やっぱり、あの宮田くんだね。宮田くんがどうしたの？」

と逆に訊かれて軽くとまどってしまった。つい口にしてしまっただけで、何か意図があったわけではない。意図しない発言というのは怜にしては珍しいことだった。それだけ七海に話しかけやすい雰

囲気があるのだろうか。
――あるいは……
と怜は考えた。すっかり決着がついたと思っていた宮田少年への気持ちにまだ鬱屈したものが残っているのだろうか。
七海は会話に間を作らなかった。怜が答えないので、
「やっと気がついたんだ、加藤くん。宮田くんがタマキのこと好きだったって。ていうか、今でも好きなこと」
と自分から話し出した。七海の口ぶりからすると、それは周知の事実であったのだろうか。
「周知とまでは……もっぱらの噂よ。加藤くんはそういうのに関心なさすぎ」
「いつから？」
「宮田くんがタマキのこと好きだったかってこと？」
怜がうなずくと、一年生のときからかな、と七海は首を傾げながら答えた。
「一年生のときも同じクラスだったから。タマキを見たらさあ、好きになる人は一目で好きになるんじゃない？」
そこで彼女はにんまりと笑みを作ると、
「加藤くんでもやきもち焼いたりすんのね」
と意地の悪い口調で言った。怜は七海の推量の埒外にいた。怜が考えていたのは自分の気持ちではなかった。宮田くんのことである。七海の話通りだとすると、彼は二年間、環に片想いをしていたことになる。もしかしたら、環が怜に告白せずフリーだったら、今頃彼は環に告白していただろうか。仮に環が彼の告白を断ったとしても、少なくとも彼はトライはできたわけだ。そのチャンスがなくなったことに対する苛立ちが爆発したのが、二日前の暴行であったのだろうか。
「ある意味さ、宮田くんと加藤くんって似てるよね」
怜の想念を破ったのは七海の思いがけない一言だった。
「どこが？」

自分でも驚くほど冷えた声が出て、怜は、二日前の件が全然自分の中で片付いてなどいないことを理解した。忘却の彼方に消え去ったのではなく、単に見ようとしていなかっただけなのだ。見ようとしていないというよりは、見たくなかったと言える。わざわざ彼のことを考えるのは自身を貶めるような行為だと思っていたのだろう。

怜の常ならぬ気勢に、七海は眉を顰めたが、それだけだった。怜の問いに、

「どちらも隠しているものがないところ」

簡単に答えると、更なる追求を待たずに、続けて、

「どっちも自身をさらけ出してる。違うのは、一方はそれを誇りに思って見せつけてるのに対して、もう一方はどうでもいいと思ってるから見られてることにも気がついてないことだね」

言った。後者が自分だろうと怜は推測した。何しろ怜には誇りに思っているものなどないからだ。それにしても、自身をさらけ出してると言われるとは意外なことだった。確かに怜には人前で何かを隠している気はないが、といってさらけ出すようなものが特別あるとも思われない。

「だから気がついてないって言ったのよ」

一体何を見せているというのだろうか。

「それはわたしには分からない。でもタマキには分かった。だから、あなたと付き合ってる」

「その見せてるものに価値を認めたってことか？」

分からない話である。誇りに思っているものと、どうでもいいと思っているものだったら、普通は前者の方に価値があるのではなかろうか。

「誇りを持つのはいいけどね、誇っているものがつまらないものだったら滑稽なだけ。子どもがさ、拾ってきた石を得意げに見せてるようなものよ。環は、その子を傷つけないために感心する振りはするかもしれないけど、心から価値があるとは思わない。宮田くんはそういう子どもと何ら変わらないな」

そう七海は一刀の下に切り捨てた。別に彼に同情はしないが、
「なかなか厳しい人物評だな」
怜が言うと、
「わたし一人が厳しいことを言ったって、宮田くんにとってはどうでもいいんじゃないかな。女子には凄く人気あるんだから」
と七海は気楽な声を出した。
「だから安心していいよ。タマキの心の中に彼はいない」
七海が事実を告げるかのような口調で言った。そう言われて、怜にはその類の不安が全くなかったことに気がついた。環が他の男の子に興味を持つということがどうもピンと来ない。それは怜が自分に絶対の自信を持っているというのではなく、そもそも環と付き合っているという事実自体をいまだ飲み込めていないからだった。もし、環が他の子を好きになったとしたら、と想像してみて怜は苦笑せざるをえなかった。その想像上の彼に嫉妬するどころか、彼女が選んだ相手ならきっといいヤツだろう、などと考えてしまったのである。
「どしたの？」
うっすらと笑みを浮かべている怜に、訝しげに七海が訊いていた。
「いや、環と付き合えてるオレはいいヤツだってことだよ」
「いいヤツ……ね。いいヤツかもしれないけど、それだけじゃ環とは付き合えない。あの子も相当変わってるからね。単なるいいヤツじゃあの子にはついてけない」
環が変わっていると感じたことは怜にはなかった。
「だからでしょ。加藤くんも相当変わってるってことよ」
「じゃあ、タマキと友人でいられる人間も変わってるってことにならないか？」
怜がやり返そうとすると、
「そうなのよ。事実、アヤは変な子だしね」
七海は澄ました顔でかわした。
それから三十分ほど、互いの家族や友人、部活のことなどとりと

めないことを話してから、二人は店を出た。
日は傾き、街路は暮色に染まっていた。
「ごちそうさまでした」
店外で、七海が怜に軽く、ショートカットの頭を下げた。
「目的は達成できたか？」
怜はいきなり言った。七海の目が訝しげに細められる。
「目的？　借りは返してもらったけど」
「そっちじゃない」
七海は不審な顔を作った。
「それ以外の目的なんかないけどな」
彼女の否定の言葉を聞いても、怜にはなお確信していることがあった。なぜ、彼女が怜を誘ったのかが、気になっていた。借りがどうこうという話は口実に過ぎまい。自分の貸しのためだけに、友人のカレシとお茶をするような子だとは思われない。とすれば、その目的は別な所にある。何か。早い話、彼女は自分という人間を見定めに来たのではないかと怜は推測した。七海が自分に興味を持ったとは考えられない怜は、おそらく友人が付き合っている人間がどういう者なのか心配したのだろう、と考えた。
「それは誤解。ていうか、買い被り。わたしはそこまで環とあなたの仲に興味はない」
「積極的な興味がなくても、友だちのことを気にかけるくらいの気持ちはある。そういう気持ちを持っているときに、たまたま機会を捉えた。そういうことだろ？」
「さっきの言葉訂正するわ。加藤くんって、嫌なヤツだな」
言葉とは裏腹に気分を害したようでもなく言うと、七海は携帯を取り出して、なにやら操作をし始めた。
「よし、送信完了っと」
機嫌の良い声を出して、メールを何者かに送信したことを誰にともなく告げる。
不穏な空気を感じた怜は、メール先を訊いてみた。プライベート

なことだから、と断ってくれることを内心願っていた怜だったが、
「もちろん、タマキによ」
あっけらかんとした声で予想通りの答えが返ってきた。女の子に対する言葉遣いにはいくら気をつけても気をつけすぎるということはない。先の自分の発言に対する反撃だろうか。そう思った怜だったが、それは目の前の少女を見損なっていたと言える。
七海にはそんな気はないらしい。
「さすがに友だちのカレシにご馳走してもらって、それを友だちに隠せないよ」
堂々と言った。
正論である。では正論に怯える自分は何者だろうか。
「あ、タマキからだ」
すぐに返ってきたメールを、七海は怜に見せてくれた。
おそるおそる携帯の画面を見た怜だったが、
「『般若の面はナナちゃんに向けることにします』って、どういうことだよ？」
打たれた文字を見ても、意味が分からず、七海に訊いてみたが、彼女は笑いながら、さあ、とはぐらかして答えなかった。

第３０話：瀬良太一の人となり

七海と別れ、家に帰る道すがら、怜は環のことを考えていた。今回の七海との件もやはり謝罪を要することである。微笑する彼女に向かって、また謝らなければならない。気のせいだろうか。何だか、この頃彼女には謝ってばかりのような気がする。許しを請わなければならないような悪行を働いた覚えはないのだが、なぜだか謝る結果になるのはどういうことだろう。きっと、それだけ自分が誠実な人間になったということだろう、と怜はやや強引に結論づけた。その他の可能性はあまり考慮したくない。

玄関をくぐるときに、置いてある靴の数を確認して、怜はほっと胸を撫で下ろした。すでに妹の友人たちは帰ったらしい。夕飯どきになる前に帰るくらいの分別はあるようである。妹の友人にしては常識がある。そう意地の悪いことを考えていた怜が、リビングに入って、母に帰宅を告げようとすると、

「あ、お帰り、お兄ちゃん」

と、横から妹の声。ただいま、と何の気なしに彼女に答えようとした声が止まる。怜は心中でため息をついた。言おうか言うまいか、一瞬躊躇したが、言うことに決めた。ことは彼女だけの問題ではないのである。

「お前の辞書にはさ、恥じらい、とかそういうのないのか？」

ソファに座りジュースを飲んでいる一つ違いの妹は、裸に大きめのバスタオルを巻きつけているという格好だった。風呂上りなのであろう。

「何が？」

分からない顔を作る妹に、説明するのも面倒だったが、彼女のはしたなさに言及すると、

「別にいいじゃん。兄妹なんだし」

妹は、平気な顔で言ったあと、何かに気がついたような様子を見

せ、
「もしかして、お兄ちゃん……」
と信じられないような顔を作って、キッチンに向かって声を張り上げた。
「お母さーん、お兄ちゃんが妹を変な目で見てるぅ。ヘンターイ」
オレが変態ならお前は変質者だ、と怜は思ったが、もちろんそんなことは言わなかった。そもそも注意などしなければ良かったと、自分の迂闊さを後悔する。妹には何を言っても無駄であると分かっているはずなのに言ってしまうのは、どういう力学が働いているのだろうか。
「お帰り、怜。あなたもお風呂に入ってきたら」
晩御飯の下ごしらえをしていた母が姿を現した。怜は夕食の後で入ることを告げた。
「ねえ、お母さん。お兄ちゃんがね、わたしのこと変な風に見てるのよ」
「その格好じゃ見られても仕方がないでしょう。早く着替えなさい、都（ミヤコ）」
目の毒になっている妹から離れるためと、荷物を置きに行くために自分の部屋に戻ろうとすると、後ろから妹が追いかけてきた。
「お兄ちゃん、ちょっと聞きたいことがあるんだけど。部屋に行っていい？」
怜は服を着ることを条件に出した。自分の部屋の中でだけは、精神の平穏を保ちたいものである。
部屋に入り、電気を点け、鞄を机の上に置いていると、すぐにTシャツと短パン姿の妹が現れた。ベッドの上に座ってあぐらをかく。
「聞きたいことって何だよ？」
椅子に座って訊いた怜には、あらかじめ断っておきたいことがある。
「環との話だったら、話すことはない」
「それじゃないよ」

妹の聞きたいこととというのは兄とそのカノジョの仲ではなかったらしい。怜が促すと、

「あのさ、お兄ちゃんって瀬良先輩と仲いーんだよね」

都が訊いてきた。瀬良先輩というのが、五組の瀬良太一（タイチ）のことであれば、と確認を取った上で、怜は仕方なく肯定した。一年の時に同じクラスで話すようになり、今も交流があるのであるから、仲が良いと言われても否定できないものがある。

「瀬良先輩ってさ、どういう人なの？」

問いが全体的すぎてどうにも答えようがない。強いて答えるとすれば、悪いヤツじゃない、としか言えなかった。あとは、実際に付き合ってみればよいことである。と、そこまで考えて、怜に思いついたことがある。まさかとは思うが……

「おまえ、太一に気があるのか？」

「あったら？」

都が面白そうな顔で聞き返してきた。怜は小さく息を吸い込んで間を取ったあと、太一はやめておいた方がいいということを静かに告げた。

「どうして？」

と問い返されると、はっきりとは言えない。妹と太一がいかにも不釣合いであるという、直感でしかないからである。

「それをお兄ちゃんに言われるとはね～」

皮肉っぽい口調で都が言う。兄が学校一の才媛と付き合っていることに触れて、

「お兄ちゃんと川名先輩は不釣合いじゃないわけ？」

いった。怜は、はっとした。妹と話すこともたまには役に立つらしい。確かに、人と人の釣り合い云々など考えるだけ馬鹿馬鹿しい。そんなものは当人同士で考えればよく、余人の関与するところではない。

「それで、太一を紹介してもらいたいのか？」

気を取り直した怜が訊くと妹は首を横に振った。

「わたしはどうでもいいの。瀬良先輩のこと何とも思ってないから」
では、全体、どうして太一の話をし始めたのか。怜が尋ねると、
「今日、家に来た友達のね、妹さんが瀬良先輩から告白されたんだって。妹さんは、まだ返事をしてない状態なの。友だちがさ、妹さんのこと心配してるんだ。ほら、瀬良先輩って、確かにかっこいいけど、付き合っている女がすぐ変わるでしょ。妹さんは、まだ誰とも付き合ったことないから、初めての付き合う男として、瀬良先輩が相応しいのかなって。それで、瀬良先輩と仲がいいお兄ちゃんに、先輩のことを詳しく聞いて、友だちに教えてあげようかなってね」
都は事情を説明した。そう言えば、数日前に、太一が誰かに告白したということを聞いた気がする。
「それでさあ、瀬良先輩ってさ、どうしてすぐにカノジョ替えるの？」
都の問いに、怜はふと盲点をつかれた気がした。そんなことは考えたこともなかった。一年生の時から太一はそんな風であったし、それが彼の特質で自然なことであると思いなしていた。改めて問われてみると、確かになぜそう頻繁に付き合う人間を替えるのだろうか。一般的に考えれば、相手に飽きたからであるという答えが得られるが、
「もしかしてさ、瀬良先輩って、誰か本命がいるの？　その人に相手してもらえないからさ、適当な女の子と付き合ってるんじゃないの？」
妹の想像は、怜の思考の幅を大きくはみ出していた。そもそも太一のことをじっくり考えることがなかったので仕方ないところがあるが、都が思い描いているようなことは、怜には全く思いも寄らないことであった。
「……本命か」
「お兄ちゃんの目から見て、いる？」
ぱっと脳裏に閃いた少女の顔があるが、さすがに当て推量でそんなことを言うわけにもいかない。それでなくてもその方面には疎い

のである。全くの誤解である可能性もある。
「さあ、分からないな」
　怜が言葉を濁すと、
「じゃあさ、瀬良先輩って、お兄ちゃんから見てお勧めできる人？」
　と都は続けて訊いてきた。一年生からの誼（よし）みである。もちろん、とうなずいてやりたかったが、それはためらわれた。自信を持っていいヤツだと勧められる人間など、怜にはいない。いや、一人だけいたが、彼は既に彼の幼馴染みのものなので、実質的にはいないことになる。しかも、やはり、二、三ヶ月で付き合う相手を替えるというのは、普通に考えればマイナス要素であろう。
「まあ、悪いヤツじゃない。付き合ってて嫌な気分になったことはない」
　これが怜の精一杯の好意であった。
　その好意を水増ししておいてやれば良かったと悔やんだのは、翌日の学校の始業前の時間のことだった。
　教室でいつものようにプリント学習をしていると、太一が常とは違い、やけに真剣な顔で入ってきた。彼は、周囲をちらりと見て、まだ教室内にあまり人がいないことを確認すると、怜に向かって、
「レイ、お前、宮田に殴られたって本当か？」
　心持ち小さな声で訊いてきた。驚いた怜が、どこでそれを知ったのかを訊くと、ついさっき五組で噂されているのを聞いたばかりだと言う。殴られるのを誰かが見ていたのだろうと、怜は思った。校庭の隅ではあったが、運動部は活動中だったし、また校門で鈴音の介抱を受けた時にそばを数人の生徒が通り過ぎていた。可能性は十分にある。
「本当なのか？」
　太一が苛立ったように重ねて訊いてきた。興奮した口調の友人に対して、仕方なくうなずくと、太一の瞳にまごうことない怒りの色が現れていた。
「ちょっと待て」

思わず太一の制服の裾を取る怜。今すぐその場を離れようとしていた太一は、うっとうしそうに自分を止めた少年を見ると、何だよ、と強めの声を出した。
「どこに行く気だ？」
「宮田のとこに決まってるだろ」
「何でオレが殴られたか、まず理由を訊けよ」
「必要ない。どうせタマキがらみだ」
こういうことに関してだけは、太一の勘はいい。怜は感心するとともに、太一が意外に友人思いだということに心を動かされていた。こんなことなら、昨夜もう少し太一のアピールをしておいてやっても良かった、と思ったりする。
「気持ちだけでいい。オレにも悪いところがあったから」と怜。
「お前に悪いところがあった？」
「多分な」
「殴られるほどか？」
怜はその問いには答えなかった。三日前の一件は怜の中では終わりにしたいことだった。間違っても、これ以上発展させたくない話である。
「胸が悪くなるから、この話はしないでくれ、頼む」
怜が抑えた声でゆっくりと言うと、気持ちは伝わったようだ。太一は渋い顔をしながらもうなずいた。そのあと、
「じゃあ代わりに賢の所に行ってきてやるよ」
と語を継いだ。怜は苦笑するしかなかった。この噂が、太一が名を挙げた友人の元に伝われば、有り難いことに、彼はおそらく太一と同じ行動を取ろうとするだろう。太一はそれを止めに行ってくれるというのである。昨日、もう少し太一の人となりを魅力的に伝えておいてやれば良かった、とますます後悔の念が湧く怜。まあいい。次に機会があれば、そうしてやることにしよう。
さて、宮田少年との一件は、友人からは発展することはなかったが、その代わりに思わぬ所から発展の可能性をみせた。

校内放送で怜の名前が呼ばれたのは、その日の昼休みのことであった。

第３１話：皐月の下旬、職員室までの往復路

校内放送が怜の名前を呼んでいた。職員室まで来いと言う。ちょうど食べ終わったところである。怜は席を立った。なぜ校内全域に渡る放送で自分の名前が呼ばれるという不名誉をこうむらなければならないのか。その理由。それは、愛ゆえに、というヤツである。怜は自分に酔ってみた。クラス中の注意が向けられているのだ。多少酔わなければやっていられない。

「加藤くん」

教室から廊下に出たところで、怜は呼び止められた。すぐ横に少女が現れる。

「わたしも行く」

鈴音は強い口調で言った。

「どこに？」と怜。

「職員室の前まで」

「呼ばれてるのはオレだけだ」

「そうよ。だから、前までって言ったの」

ついてきてどうするつもりなのか。考えられることは幾つもない。

「スズ。この前みたいなことは必要ない」

「あれはめったにしないって言ったでしょ」

「じゃあ、何で？」

「別にいいでしょ。それとも、わたしがついてくの、イヤなの？」

怜は正直にうなずいた。過保護な親ではあるまいし、ちょっとそこまで行くだけで付き添うなどお節介もはなはだしい。

鈴音はあからさまにショックを受けた顔を作った。そのあと、

「ひ、ひどい。加藤くんがそんな人だとは思わなかった」

そう言って、両手で顔を隠すようにした。傍から見れば泣いているように見えるだろう。そして、彼女の目の前にいる少年が泣かしているようにも。怜はため息をついた。教室で集めた分で好奇の視

線は十分だった。この上、廊下でも集めたくない。
「分かったよ、好きにしてくれ」
怜が言うと、やった、とけろりとした表情で鈴音は言った。
並んで歩く少女の横顔を怜は疑わしげに見た。一体、どういうつもりなのか。彼女のことは多少分かっていたつもりだったが、よく分からなくなった。
「どうしたの？　横顔に見惚れてるの？」
いたずらっぽい笑顔を向ける鈴音に、怜は軽くムッとした表情を作った。
「何のつもりか、教えてくれ」
「何だと思う？」
「女の子の気まぐれとしか思えないな」
怜は容赦なく言ってみたが、鈴音の笑顔は崩れなかった。
「それを許すのが男の子の度量でしょ」
「じゃあ、度量が狭いんだよ」
「いま、まさに広がってるよ。そのきっかけをあげたわたしに感謝してね」
いつもの鈴音とどこか違っていた。職員室までついてくるというこの行為自体には好感がもてないが、彼女の言葉にも態度にも柔らかなものがあり、これまで感じていたどこか張り詰めていたものがなくなっていた。
「もし宮田くんに会ったら、今度はわたしがあなたの代わりになるからね」
怜は足を止めた。冗談でも言って良いものと悪いものがある。しかも、今の鈴音の言葉は全く冗談に聞こえなかった。
「誰がそんなこと頼んだ？」
怒気を含んだ怜の声に、
「誰も。わたしが決めたの」
と鈴音は静かに答えた。
「決めた？」

「そうよ」
「じゃあ、今度は撤回を決意してくれ」
「そういうことを加藤くんが言うとは思わなかったな」
　怜は強い目を少女に向けた。彼女がうなずくまでは、この場を一歩たりとも動く気はなかった。
「分かったわ」
　あまりにあっさりとした答えに拍子抜けした怜。再び歩き出すと、隣から鈴音が覗き込むような格好で訊いてきた。
「怒った？」
「そう思うのか？」
「やっぱり怒ってるね。どうしたら許してもらえる？」
「どういうことか聞かせてくれたらだな」
　鈴音の様子は明らかに変わっていた。彼女は今まで怜を振り回すような言葉を使うことはなかった。しかもそれでいて悪意は感じないのだから、一層おかしかった。
「どういうことって、何を？」
「スズの変貌ぶりだよ」
　怜ははっきりと言ってやった。
「変貌？　何のこと？」
「気立ての良かった子が、突然に憎たらしくなることだよ」
　鈴音は大げさに喜んだ顔を見せ、
「気立てが良くて可愛いだなんて、そんな風に思ってくれてたんだ」
　幸せそうな声で言ったあと、
「あ……でも、タマちゃんに悪いな」
　眉の辺りを曇らせた。
「ちゃんと聞いてたのか？　いつ可愛いなんて言った？」
「じゃあ、可愛くないの？」
　女の子からそう問われたときに、仮に可愛くないと思っている時でも、それを言わないだけの礼儀が怜には備わっていた。そうして、怜にとっていまいましいことに、横を歩く少女にはそれが分かって

いるのだった。
「ねえ、どうなの？」
楽しげな口調で迫る鈴音の問いには答えずに済んだ。
二人は職員室についた。
「ちぇ、タイムアップだね」
そういかにも悔しそうに言って歩を止めた鈴音を置いて、一人職員室に入ろうとした怜の足がふと止まる。鈴音の豹変ぶりが気になって、職員室で待ち受けていることに対して全く緊張や不安を感じていないのだった。教室に感じていたときの酔いは醒め、すっきりとした気分だった。怜は自分の鈍感さに呆れた。鈴音がここまでついてきた理由がようやく理解できた。
「いつかの借りを返してくれたのか？」
戻ってきた怜が確認するように訊いてきたのに対して、鈴音は静かに首を横に振った。
「もう借りがどうこうっていう話じゃないわ。自分が納得できることをやりたいだけ」
「礼を言っとく」
どういたしまして、と小さく歯を見せる少女の元から離れ、職員室の戸の前で怜が振り向くと、彼女は手を振ってよこした。ここまでの彼女の言動は理解できたが、それでもやはり三日前までの彼女とは何かが違っていた。それを考える時間は今はなかった。怜は引き戸を開け、職員室の中に入った。
誰のところに行けば良いのかまでは指示されていなかったが、されてないということはおそらくは担任のところに行けば良いということである。どうやら当たりだった。その証拠に担任の机の近くに、一方当事者である少年が立っていたのである。
さて、怜としては、この件については終わりにしたい所であるが、宮田が先に着いていることがどういうことを意味しているのかを考えなければならない。もし、担任が宮田に先に事情を訊いていたとしたら、対応が面倒になる。彼が怜を殴ったことを認めでもしてい

たら、こちらも認めざるを得ない。それに続くのは、詳しい事情聴取、反省文の提出、場合によれば親への連絡であろう。小煩いことこの上ない。

「お前達二人に聞きたいことがある」

この担任のセリフが怜をほっとさせた。彼は公平を期すために、二人に一緒に事情を聞くというわけだ。本当に真実を調べたいのであれば、関係者は個別に調べるべきである。一方がもう一方に脅されているかもしれないからだ。このあたり、担任には事なかれ主義というか、あまりこの件を正視したくないという気持ちがあるのかもしれない。まだ十ヶ月ほど残っている学校生活を預けるにははなはだ心もとないが、こと今回の件に関する限りは、怜にとって都合のいいことであった。

「噂になってることがあるから、それが本当かどうかなんだが」

そう言って、怜が宮田に殴られたという話が伝わってきたことを告げ、事の真偽を確かめたい旨を続けた。

「それは誤解です」

静かだがはっきりとした声がその場に現れた。宮田が驚いた顔をまともに向けてくるのにも構わず、怜は、

「宮田くんが転んだ拍子に、手がぼくの顔に当たっただけです」

平然とした調子で続けた。担任が軽く疑いを含んだ目を向けてくるが、それは形式だけのものだった。教師はもう一度だけ、本当か、と念を押して、怜が、はい、とうなずくのを見ると満足した様子だった。そのあと、彼はもう一人の少年に向かって、事情を訊いた。怜は、彼がつまらない自尊心や、正義感を持っていないことを願った。宮田は、多少どもりながらも、怜と同じ説明をしてくれた。願いはかなったようだった。

当事者が両方とも事件性を否定していれば、それ以上、事件として取り上げるわけにも行かない。解放された怜は職員室を出た。廊下で窓際の壁によっかかりながら所在なげにしている鈴音に声をかける。

「どうだった？」
少女の心配そうな顔に向かって、問題ないことを告げると、
「良かった」
鈴音はほっとしたように小さく息をついた。
教室に帰るため、二人で歩き出したところだった。後ろから声をかけられた怜は、軽く目をつぶり心を落ち着けたあと、目を開けて体を半回転させて、
「何だよ？」
声の主に向かって訊いた。怜から少し離れた所で、
「何でかばったんだよ、俺のこと」
と宮田は力んだ目で訊いてきた。
一瞬、怜は何を言われているのか分からなかった。『かばう』とは、誰が誰を？　少ししてようやく彼が意図するところに思い至った怜は唖然とした。どうにも好きになれそうもない男である。どこまでおめでたいのか。自分が殴った男が、自分をかばうなどと、どうしてそんな解釈ができるのだろう。世界が自分を中心にして回っているとでも思っているのだろうか。
彼の世界と関わりを持たないようにするために、どう答えれば良いだろうか。どうにも思いつかなかった怜は、最後の手段として、一人の少女の顔を頭に思い浮かべた。彼女ならどうするかと考えたときに、ピンと思いついたことがある。
「三日前のことはオレの言い方が悪かったんだ、お前の気持ちも考えないで。だからだよ」
軽いショックを受けたかのように立ち尽くす宮田を、怜は置いて歩き出した。彼の返答を待たなかったのは、対峙していることへの嫌悪感もあるが、これ以上言葉を交わすとボロが出るのではないかとおそれたからである。
「アレで良かったの？」
宮田から十分に離れたところで、鈴音が横から訊いてきた。そう改めて問われると自信はない。心の中に棲むカノジョの力を借りて

適切に対処したつもりなわけだが、それはあくまで想像に過ぎない。
怜の言葉に対して、彼が馬鹿にされたと思い、返って恨みを積もらせる可能性もあった。しかし、そうなったらなったである。また何らかの対応をするだけだ。彼のことで、心を悩ませる気は怜にはもうなかった。
「通じないことが分かってる片想いってどんなんだろうね？」
鈴音が前を見たままで訊いてきた。
「さあな」
怜はぞんざいに答えた。これ以上、彼のことにかかずらいたくない。しかし、
「それはきっと悲しいことだろうね」
そう続けた彼女の声に紛れもない哀愁の調子があって、怜は態度を改めざるを得なかった。そうかもしれない、と鈴音の言葉を肯定してから、
「でも、大事なのは悲しみとどう付き合うかだろ」
と語を継いだ。
「どう付き合うか？」
「ああ。受け入れるか、拒絶するか」
「受け入れれば、いつかは忘れることができる。拒絶すればいつまでも意識しなければいけない。そういうこと？」
怜がうなずくと、鈴音の唇から言葉が漏れた。
「憎しみも同じかな」
「多分な」
鈴音がじぃっと怜を見つめていた。
「オレも努力してるとこだよ」
「何とかなりそう？」
「さあ、どうかな」
宮田くんに対する憎悪――というよりは嫌悪――を受け入れることはなかなかの難事だろう。
鈴音は、あなたなら何とかするわ、と請合ったあと顔色を変えた。

「加藤くん。五組に寄ってこう」
突然なことを言い出した少女に、怜は怪訝な目を向けた。
「何で？」
「タマちゃんがヤバいかも」
「ヤバいって、何が？」
鈴音はもどかしそうな顔で説明した。
「タマちゃんが噂を聞いたら、宮田くんの所に抗議に行くかもしれない」
「いや、無いだろ」
冷静な環がそんなことをして騒ぎを大きくするとはおよそ考えられない。
「タマキは自分がされたことには疎いけど、友だちがされたことには鋭いのよ。それがカレシで、しかも自分に関係があるって知ったら、なおさらだわ」
鈴音の焦りは怜には伝わってこなかった。付き合って四カ月強になるが、彼女が激したところなど見たことがないし、そういうところを隠しているような雰囲気もなかった。風のない湖面のような穏やかさというのが彼女の特徴であると、怜は思っていた。
「それはタマちゃんの半分だな。全部じゃない」
納得が行かないながらも怜は鈴音に従うことにした。何といっても彼女のほうが付き合いが長いのである。
「タマキに会うことになっても平気なのか？」
怜は問いかけたが、それに対する答えはなかった。
足を速める鈴音の背を怜は追いかけた。

第３２話：切り札の切り時は突然にやってくる

それは、怜の名前が校内放送で呼ばれた、少しあとのこと。

三年五組の教室にある机の一つから、一人の少女が立ち上がった。

彼女は、給食を食べ終わり空になった食器を片付けると、そのまま教室を出た。誰もそれを不審に思うことはなかった。お昼休みである。教室に留まっている必要はない。廊下で佇むも良し、図書室で読書するも良し、中庭で光を浴びるも良し。何にせよ、自由時間を満喫するために彼女も教室を出るのであろう。五組のクラスメートで彼女の姿に目を留めた者は誰もがそう思うはずであり、そう思ってもらえるように彼女自身も特に自然な動作を心がけた。

ところが、

「タマキ」

廊下に出てほんの二、三歩あるいただけの所で、後ろから声がかけられた。一瞬、聞こえなかった振りをして歩き続けようかとも思ったが、やめた。そんなことをしても、もう一度声をかけられるだけであるし、逃げるのは彼女の性分ではない。

環は、立ち止まって振り向いた。目前に見知った顔がある。整然とした、という形容がぴったりの顔容である。眉と顎のラインで切り揃えられた黒髪が縁取る白い面（おもて）に、切れ長の瞳とすっと通った鼻筋、薄紅色の小振りな唇が麗しく配置されている。彼女を見ていると、完成された一枚の絵画や一体の彫刻を見ているような気分になる。

「なあに、アヤちゃん？」

いつまでも芸術を鑑賞している時間がない環は用件を訊いた。こちらのほうが少し背が高いので、気持ち見下ろす格好となる。

「どこ行くの？」

伊田綾（アヤ）は静かに尋ねた。

環は、じっと綾の目を見たが、綾は平然とその視線を受け止めた。

「お手洗いよ」と環。
「じゃあ、一緒に行く」
「アヤちゃん、そんなことしてくれなくても、わたしたちの友情は不滅だよ」
　環は心持ち強い口調で言ってみた。綾が自分を呼び止めたのはなぜか。考えるまでもないことだった。この鋭敏な友人の目を引かないようにするために忍んで出たのである。ところが見つかってしまった。こうなった以上、しっかりと意思表示をしておく必要がある。もちろん友人に対してぶしつけなことはしたくないので、婉曲に言ってみたのだった。
　綾は、ふと歩を進めると、環の進路上に回り込んだ。
　婉曲すぎて分からなかったのだろうか。環はもう少しはっきりと自分の気持ちを表すことにした。
「ねえ、アヤちゃん。あなたはわたしの大事なお友達だけど……邪魔はしないでね」
「友達だからよ」
　綾は相手を落ち着かせるために、ことさらにゆっくりと言葉を出した。他のクラスメート同様、綾も五組に流れるある噂を聞いていた。そこに噂になっている当人を職員室へと促す校内放送ときた。噂が真実味を帯びたのである。そうしてもしそれが真実だとしたら、環がどういう対応をする気でいるのか、綾には分かるのだった。それを止めに彼女は来たのである。
　廊下で何やら見つめ合う格好になっている二人の少女に、何人かの生徒が視線を送っていた。
「分からないな」
　環は微笑むと不思議そうな振りで言った。
「分からない？」と綾。
「ええ、全然ね」
　その口調の強さが、分からないというよりは、分かるつもりがないという彼女の意志を明確に表していた。しかし、綾はひるまなか

った。
「間違った行為をしようとしているときに正すのが友だちでしょう」
「間違いを正す？　わたしは友人を、そんな作文の添削者みたいに思ったことはないけど」
「じゃあ、どういうのが友だちなの？」
「アヤちゃん、友人論はまた今度ね。急ぐから」
すり抜けようとした環の腕が取られる。
環は笑みを消した。
「聞かせて。アヤちゃんだったらどうする？　大切な人が自分の所為で傷ついたら」
「傷つかせた相手のところに行って、頬を張って、『どうしてわたしのところに直接来ないの、この卑怯者！』って罵るわ」
「あら、よかった。意見が一致して。じゃあ、そういうことで」
環は、放すようにとの意図を込めて、自分の腕を握っている綾の白い手に触れたが、綾は首を横に振った。
いつも明るく柔らかな光を湛えている環の目に硬質な光が溜まった。
綾はあくまで静かに言葉を継いだ。
「でも、もしわたしがそれをしようとしたら、わたしを止めてくれる人がいる。そうでしょ？」
「とは限らない。一緒に引っ叩きに行くかもしれない」
譲らない環に、綾は少しの思案ののち、
「あなたがこれからしようとしていることは、決して加藤くんを喜ばせないわ」
側面を衝くことにした。そのくらいのことを断言できる程度には、綾は怜のことを分かっているつもりであった。綾が分かっているということは、当然、環にも分かっているはずであるが、おそらく環は怒りで我を失っているのであろう、と綾は推測した。これで正気を取り戻してくれるかもしれない。しかし、
「そんなことは分かってる」

環の苛立ったような言葉が、綾の推測を裏切った。
「でもね、アヤちゃん……」
続く言葉が、環が我を忘れてなどいないことをはっきりと表していた。
「それはわたしには関係ない。これはわたしの話よ。レイ君の話じゃない」
環の声には最後通告のような硬い響きがあった。その響きにはっきりとした意志を感じる。怜が嫌がるということを分かっていて、それでもなお為すべきを為すという強い意志。思わず諦めかけた綾は自身を叱咤した。ここで諦めれば、友人は見世物になるのである。彼女の声望は地に落ち、くだらないゴシップのネタになる。もちろん、タマキ自身はそんなことは歯牙にもかけていないのだろう。考えてさえいないのかもしれない。しかし、綾としては、環をみすみす嘲笑の的にするのに忍びない情がある。タマキ流に言えば、これは綾の話だった。
綾は覚悟を据えた。考えられるうちで最後の手段に訴えることにした。
「どうしても行くっていうなら、わたしとここで絶交していきなさい」
先の環の声と同じくらい断固とした口調だった。
さすがに慮外のことだったのだろう。環の目が大きく見開かれた。
「アヤちゃん。今回のことと、アヤちゃんとの付き合いは関係ないでしょ」
珍しく遁辞を構えようとした環を綾は逃がさなかった。ここで逃げられたらもはや勝機はない。
「関係あるかないかは、わたしが決める。さあ、どうする?」
綾はいたって本気だった。絶交という言葉は文字通りの意味で使うつもりだった。そのくらいでなくては、とても環を止められないという思いがある。
「……手を放して」

環の口元から漏れた言葉で、綾は自身の敗北を悟った。放した手が落ちるのと同時に、綾は軽く抱きしめられているのを感じた。環の黒髪から香る香気を感じながら、綾の心は沈んだ。

「別れの？」

すぐ横にある筈の彼女の耳に向かってつぶやくと、環はふっと体を離して、綾と視線を合わせた。

「違う。感謝の抱擁よ。わたしはいい友達を持って幸せです」

綾の体から力が抜けた。環の目にはいつものような静かな優しい光があった。敗北は綾の早合点だったらしい。この場は彼女の勝ちだった。しかし、勝利の代償に失ったものは大きかった。

「ごめんね、アヤちゃん。でも、もうこんなことさせないから」

環が申し訳なさそうに言った。

本心からそうしてもらいたい、と思った綾の目が、環の肩越しに、足早に近づいてくる二つの影を認めた。見知った顔である。環も二人に視線を送ると、おもむろにその場を離れようとした。

「どこ行くの？」

綾が訊くと、

「安心して、お手洗いよ」

言って、その場を後にした。一緒について行くかどうか、一瞬だけ躊躇した綾だったが、彼女の言葉を信じることにした。誠心で対応したことを裏切るような子ではないし、今は一つするべきことができた。

「遅かったね、加藤くん」

綾は軽く恨みを含んだ目で遅れて現れたヒーローを見た。

綾から軽く事情を説明された怜は耳を疑った。まさか本当に宮田の所に抗議に行こうとしていたとは思っていなかったのである。立ち直った怜は綾に礼を言ったが、彼女はそれを拒否した。綾としては、別に怜のためにやったわけではないという気持ちがある。

「そんなことより、加藤くん。わたしはもう切り札（カード）を使っちゃったから、あとはあなたがどうにかしてね」

これだけは言っておかなければならない。絶交という言葉は、その重みゆえ何度も使える言葉ではない。

神妙な面持ちをしている少年に、綾は続けた。

「そっちの事情は知らないけど……タマキは他の女の子の相手をしながら付き合える子じゃない。今日のことで分かったでしょう」

確認を取るように言ったあと、怜の少し後ろに控えている少女に目を向けて、

「そう思いませんか？　橋田さん」

と明るく作った声をかけた。それは、怜との付き合いを自重するようにとの警告のようにも聞こえたが、それ以上に本人を目の前にした嫌味にならないようにするための配慮の方が大きかった。このあたりに、伊田綾という少女の心性の繊細さが見える。鈴音が、素直に、その通りです、と答えることができたのはそれを感じることができたからだった。

綾は意外な気持ちで鈴音を見た。彼女と怜の関係がどういうものであるのかは知らなかったが、鈴音にはあまり良い印象を持っていなかった。が、実際に会って声を聞くと、声音に澄んだものがある。それが彼女の心底から発せられるものであれば、彼女のイメージを変える必要があるだろう。

綾は怜に顔を向けると、

「環はただ可愛いだけの子じゃない。前に言ったことをもう一度言っておきます。三度目はないようにね」

忠告し、相手から了承の返事を受け取ると、一応満足して教室に帰った。

第３３話：新文化研究部の一場

――ごめんなさい。

そう言って、少女は頭を下げた。放課後の、校舎と校舎をつなぐ渡り廊下だった。夕暮れにはまだ遠く、午後の日がコンクリートの床を白色に照らしていた。

瀬良太一にとって、その言葉は少なからずショックだった。久しく聞いてなかった類の言葉なのである。

顔を上げた少女は、つい二カ月前まで小学生だったこともあり、中学校の中では、まだまだ幼さを多分に残していた。体つきが小柄であること、前髪を左右に分けることによって露になった額も子どもらしさを助長していた。

――お姉ちゃんに聞いたんです。先輩はたくさんの女の子と付き合ってるって……

その声音には責める様な色はない。

――わたし、先輩はステキだと思います。告白してくれたのも嬉しかったです。でも、数ヶ月で終わるお付き合いはやっぱり嫌です。

少女の円らな瞳には一生懸命な光があって、彼女が精一杯自分の力で対処しようとしているのが見て取れた。自分の思いをできるだけ正確に伝えようとするような調子のその言葉に、太一はがっくりと肩を落とした。よくよく考えてのことなのだということが分かったのである。

――よく分かったよ。ありがとう、理奈（リナ）ちゃん。

諦めよくそう言ってとぼとぼと歩き出す太一の横に、理奈は並ぶと、訝しげな顔をして立ち止まる先輩に向かって、

――あの……先輩をずっと好きなままでいさせてくれる人がきっといると思います。

まっすぐな声で言った。

太一の目と見つめ合う格好になって恥ずかしくなった彼女は頬を

染めると、タッタッとその場を足早に離れていった。太一が理奈の小さな背を目で追うと、おそらく彼女の友達だろう、何人かの少女たち、と合流しているようだった。女の子たちの笑い声を聞きながら、太一の耳に、理奈の声が何度もこだましていた。

ずっと好きなままでいさせてくれる人が……

太一はふっと微笑むと、

「それはお前しかいない、怜」

勢い込んで目前の少年に告げた。

怜は、太一のいつもの冗談をいつものように無視しながらも、多少の憐れみを覚えていた。

毎日の習慣として、部室であるこの視聴覚教室に来たのが十五分前のことである。それから五分ほどして、太一が現れ身も世もない振りでフラレた話をし出して、現在に至っている。怜が日頃太一には全く感じない同情の念を今回に限って感じたのは、妹を経由して太一の美点を、彼の告白相手に伝えられなかった罪悪感が一つ、もう一つは太一が宮田事件を聞いたときに今朝取ろうとしてくれた行動に対する感謝である。

「初めてだな。お前が断られたの」

怜の言葉に、太一はその整った顔立ちをくもらせて、

「いや、初めてじゃない、二度目だ」

いった。初耳である。しかし、興味のある話ではない。しばらく怜が無言でいると、

「おい！　突っ込めよ、レイ。今、聞いてもらいたいオーラを出してただろ」

自分勝手なことを言い出す太一。怜は耐えた。今日は太一の良い面を見せてもらった。このくらいは我慢すべきだろう。

「それで？　最初に断られた相手ってのは誰なんだよ？」

怜がしぶしぶ訊くと、

「それは言えねーな。いくらお前でもな、レイ」

遠い目をして美しい過去に思いを馳せるような調子の太一。

義理を果たした怜は、別世界に飛んでいった太一をうちやっておいて、隣の席に着いて勉強している少女の方を向いた。勉強は、現在、文化研究部の活動の一環になっている。そして、下級生の勉強を見ることは上級生の役割だった。

「どう？　円ちゃん。何か分からないところ、ある？」

女の子に話しかけるときに特に緊張したことのない怜だったが――そも女子に話しかける機会もあまりないのだが――彼女に話かけるときは例外である。胸の鼓動が速くなり、かすかに声が震えるような気さえする。傍目から見ている分には、まるきり恋する少年である。マドンナ役の少女は声に応じて、ふと顔を向けた。くせのない綺麗なストレートラインの黒髪、爽やかな目元。涼風が流れてくるような趣のある少女である。

「いや……別に無いならいいんだけど」

怜は先回りするようにして言った。何だか阿るような所作でみっともない、と思うのはいつもあとのことである。彼女に相対しているときは、嫌われないようにコミュニケーションを取ろうとするだけで一杯一杯なのだった。

「これを教えてください」

少女の澄んだ声に、怜は信じられない思いで彼女を見た。見つめすぎたようである。円は怪訝な面持ちを作ると、

「あの、この問題なんですけど」

と言って、怜の注意を自分の顔から、机の上に広げてある数学の教科書に向けさせた。

怜は慌ててうなずくと、椅子を円の机に寄せて、教科書を見た。

「えっと、一次関数だね……この問題は……」

問題を確かめた怜は違和感を感じた。その正体はすぐに分かった。円の勉強が進みすぎているのである。まだ五月下旬であるにも関わらず、円は既に秋口に取り掛かるはずの分野の問題を解いていた。

「塾でやってるんです」

言葉少なに説明する円に、怜は丁寧に問題の解き方を教えた。数

学だけはメジャー教科の中で得意で成績も一定して良かったのである。

「ありがとうございます、レイ先輩」

キレイに問題が解け喜びに少し表情を崩した円のその言葉に、怜ははっとした顔を作った。

「何か？」

喜色を静めた円の疑問の声に、怜は、いや、と首を横に振った。

じいっと、怜の内心を探ろうとするかのように瞳を向けてくる円の横から、

「ご説明しましょう」

と面白そうな口調で割って入ったのは鈴音だった。怜は内心に苦いものを感じたが、円の手前、それを外に表すことはできない。鈴音は、顔を向けてきた円に向かって、

「マドカちゃん。今、加藤くんのこと、名前で呼んだでしょ。だから、照れてんのよ。意外と可愛いとこあるよね」

有り難くも怜の気持ちを説明してくれた。

説明を受けた円は納得した顔を作ると、もう一度、怜の方に向き直り、

「すみません。姉が名前で先輩のことをお呼びしてるのが、うつってしまったみたいです」

と非礼を詫びた。これからは加藤先輩とお呼びします、と続けようとした円の言葉を遮る形で、

「呼びやすいほうで構わないよ」

と怜は慌てて言葉を差し入れた。

傍から見ていた太一は忍耐の限界だった。

「おーい！　人が失恋したその横で、何なんだよ、君タチは？　その甘酸っぱい青春ドラマみたいなことやめろー！」

叫び声を上げると、うっとうしそうな顔をしている怜に、

「お前が羨ましいよ、レイ。お前、本当にモテるよな」

訳の分からないことを言い出した。関わりあいを避けたい怜は、

円に、他に分からないところがないか訊いた。
「今のところ、大丈夫です」
再び教科書に向かう円を見ていた怜の両肩を太一ががっちりととらえた。
「おい、レイ、教えてくれ。どうやったらモテるんだ？」
「オレがいつモテてるんだよ」
煩わしげに太一の手を払う怜に、
「モテてるだろ。まず、タマキだろ。あと、ナナミとアヤも何かお前には優しいし」
指を折りながら言うと、さらに、
「それにスズだって、絶対お前のこと好きだし」
追撃した。
「それ、本人の前で言いますか、瀬良くん」
鈴音は微笑しながら平然として言った。
太一は口を開けたまま唖然とした表情を作った。
「え……本当だったのか、スズ？」
「好きか嫌いかっていったら、好きでしょ」
当然のような口調で言う鈴音を尻目に、太一は怜の机をがたがたと揺らした。
「おい、今の聞いたか、怜？」
その問いには答えず、怜は別のことを尋ねた。
「お前、バドミントン部はいいのか？　最後の大会前だろ」
「失恋したんだぞ。部活なんてやってられるか」
話題を変えようとした怜の努力を徒労にした太一が続ける。
「そんなことより、今のスズのさらりとした告白はどういうことなんだよ？」
答えるのも面倒である。それに答えるには橋田鈴音がどういう少女なのかということを説明するほかなく、彼女の性質ににわかに測りかねる部分が多くなってきたことを感じている怜からすると、一層煩瑣なことになる。無視しようかとも思った怜の気が変わったの

は、横から円がシャープペンを動かす手を止めて、興味深そうにこちらを眺めていたからだった。
「冗談に決まってるだろ」
太一は引き下がらなかった。確かめるように鈴音を見ると、少女はにこりとした。
「そういうことにしといてもいいわ」
「あんなこと言ってるぞ、怜」
怜は、鈴音に、円の前であまりはしゃがないようにしてもらいたい、と目で訴えたが、返ってきたのはにやっとした人の悪い笑みだった。彼女は立ち上がると、
「わたしだけじゃないよ、加藤くんのこと好きなのは」
そう言って円の後ろから、その細い両肩にそっと自分の手をのせた。
「マドカちゃんも加藤君のこと好きだよね」
円が逡巡を見せずに、はい、と素直にうなずいたことで、一瞬、怜の胸がどきりとしたが、さすがにその言葉通りを信じるほど無思慮ではない。鈴音の悪ふざけに円が乗っただけのことである。怜に対する悪ふざけに乗るということは、それだけ円が打ち解けてくれた証拠だとも思えるが、人を惹くような人間ではないことを自覚している怜としては、
――単に鈴音と仲がいいからだな。
と解釈した。
太一が深いため息をついた。まじまじとこちらを見ているので、怜が、
「今度は何だよ?」
一応訊いてみると、太一は、
「お前が女だったらなあ」
としみじみと言った。訊いたことを後悔した怜に、
「ほんと、お前が女だったら、お前のこと本命にしてさ、絶対他の子とは付き合わないね」

続けた。自分の気分が悪くなることは度外視するとしても、せめて円の前であることを考慮して欲しいものである、と怜は心の底から思った。

「怜だったら、オレのことをずっと好きなままでいさせてくれると思うんだよなあ」

黙ったままでいようかと思ったが、怜は一言言っておくことにした。はっきりと釘を刺しておいたほうが良いだろう。これ以上、この調子で続けられたらたまったものではない。怜の口が開きかけた時に、上から別の声が先に降ってきた。

「それは違うと思うな」

太一と怜の視線が集まるところにハーフアップの少女の顔がある。

「加藤くんが本当に女の子だったら、瀬良くんはそんな気にならないんじゃないかな。加藤くんが男の子だっていう揺るがない事実があるから、安心してそういう仮定的なことが言えるのよ」

そうはっきりとした声で続けた鈴音の言葉は、太一のこれまでのふざけ半分の笑みをおさめさせ、表情を真剣なものに改めさせるのに十分な強さを持っていた。

第３４話：プレイボーイは二度フラレる

鈴音の言葉はズバリ核心を衝くものであった。男友達が女の子だったらという有り得ない仮定の下で何を論じても、それは空しい想像に過ぎない。その空想の上で述べることは、ことごとく虚偽である。そう鈴音は断じたのだった。

さて、あることが真実であるという事実から、その真実を述べるべきだという義務は必ずしも導かれない。言わずもがなというものがある。怜は横目で太一の顔をうかがった。常に軽快な笑みを乗せているその顔が引き締められていた。その顔つきからは、彼が真実の刃に傷を負わされたかどうかは分からなかったが、少なくとも鈴音の言葉をまじめに受け止めたようだ。

――それにしても……

と怜は、今度は鈴音に目を向けた。太一には悪いが、怜にしてみれば、彼の傷の具合よりも、鈴音の方が気になった。二週間強の付き合いでしかないが、彼女が他人の心情を察するに鈍でないことは分かっていた。自分の行動がどういう結果を導くかという可能性についてよくよく考えることができる子である。とすると、今の太一に対する言葉には、何らかの意図があると結論づけざるを得ない。太一の気持ちを考えず思ったことをつい口にしたということでないとすれば……

他者に対する行動理由を大きく二つに分けるとする。一つは悪意である。だが、鈴音の言葉には悪意は感じなかった。彼女の声には皮肉の軽みや詰問の鋭さはない。その言葉にはすっきりとした澄みがあり、真夏の冷水のように腑に落ちる響きがある。悪意でないとすれば、それは善意であるということになる。そうしてそれが善意であるならば、やはり鈴音は変わったと考えざるを得ない。短い付き合いであるとはいえ、これまでの所、彼女が積極的に善意を送る人間だとは思っていなかったのである。昼休みに怜の職員室への精

神的負担を軽減してくれたのと同様のことをしようとしている少女を、怜は不思議な目で見つめた。何が彼女を変えたのだろう。
「ていうことは、つまり怜が女の子だったら、オレは好きにならないってことか？」
奇妙なことを真剣な声で問う太一に、鈴音は首を横に振った。
「じゃなくて、そういう仮定自体に意味がないってことだよ」
太一はため息をついた。
「意味が無くたって、したっていいだろ」
「もちろん。でも、それはけっして現実にならないということを理解してればね」
「現実にする必要がなかったとしたら？」
「ずっと夢の中で過ごす気なの？」
太一の真剣さはそこまでしか継続しなかった。彼は、にやりと笑うと、怜を見て、
「オレにとっての怜はそれだけの価値があるヤツなんだよな」
気持ちの悪いことを言った。
鈴音の両手が打ち合わされる。彼女は得心のいったような顔をすると、
「瀬良くんに特定のカノジョがいないのがどうしてか今分かった。加藤くんが原因だったんだ」
と難解なクロスワードを解いたときのような誇らしげな声で言った。
「そう言われればそうかもな」
などと悪ノリする太一。
「でしょ。加藤くんと比較した時にさあ、多分物足りなくなるんじゃない」
「それはある。言っちゃ悪いけど、怜といるより楽しい女の子っていないんだよな」
「どこが魅力なんでしょう？」
「オレのこと、理解してくれるとこだな。あの目に見られると、ま

るでオレの心の全てがさらけ出される感じになるのさ」
「もう男同士でもいいから、告白したらどうですか？」
「ところが悲しいかな、オレには勝ち目がない」
「勝ち目？」
「タマキだよ。川名環。あれには勝てる気がしない」
「なるほど」
鈴音は深く納得したようにうなずいた。
怜は、化学反応を起こして盛り上がっている二人を、冷徹な科学者の目で観察することはできなかった。ここは研究室ではないし、怜は単なる中学生にすぎない。他の時ならまだ我慢もできるが、隣に円がいるときに、このようなノーマルでない話をするとは。太一と鈴音から悪意さえ感じるというものである。太一はもとからそんな風であるので期待はしていないが、鈴音はもう少し考えてくれてもよいのではなかろうか。
先の鈴音に関する評価を取り消そうかどうか迷っていたときに、
「あの、皆さんにとって、姉はどういう人ですか？」
横から静かだがよく通る声がした。
怜に関する思いを述べることをストップした太一が、円に目を向けた。
「学校での姉ってどんななのか、興味がありまして」
補足する彼女の言葉が終わらないうちに、太一は即答した。
「スゴい子」
「スゴい？」
続きを聞きたそうにしている彼女の瞳の光には、適当なことを許さないようなかたい煌きがあった。太一は、
「そんな真面目な顔されると言いにくいな」
とちょっとひるみつつも、
「タマキの……お姉さんのスゴみっていうのは……何ていうかな、とにかく変わってるんだよ。普通の子とは全然共通点がないって感じで。少なくともオレとは全然ない。そうして変わってるのにそう

見せないで済ませてるってとこかな」
慎重な風で言った。
「共通点がない？　それは趣味とか話題とかのことですか？」
「いや、そーいうんでなくて……何て言うんだろうな、考え方かな」
「何について？」
「大げさに言えば、人生……」
そこまで言うと太一は言葉を止めた。照れたような顔で、
「やっぱ今のなしね、マドカちゃん。よく分からないからさ、オレも。その辺のことはカレシくんに訊いてよ。なあ、レイ」
と怜に話を振った。円の視線を感じた怜は、
「オレにはお前の言ってることの方がよく分からないな。タマキは別に変わったところなんかない普通のイイ子だと思う」
言った。太一はあからさまに軽蔑したような振りで、
「おい、いくら何でもロコツだぞ、レイ」
たしなめるように言ったが、怜は知らぬ顔で受け流した。
確かに今の発言は太一の指摘通り多分に円を意識したものではあったが、でなかったとしても答えはそれほどは変わらない。怜には、太一が環のことをどういう意味で変わっていると言ってるのか、よく分からなかった。
「姉とはいつもどんなことを話してるんですか？」
円の問いに、怜は少し考えてから、
「大した話はしてないけど……というか話さないことの方が多いよ」
正直に言った。一緒に帰るときは、環の家を通るルートで帰るのだが、彼女の家に着くまで一言も話さない時さえある。
「それで、よく間が持つよな」
太一が心から感心したような声を出したが、怜としては間を持たせなければいけないということがよく分からない。いや、実は、この頃、円の相手をするようになって分かって来たのだが、少なくとも環との間では間が持たないということを心配したことはなかった。
「じゃあ、話すときはどんなことを？」

再びの円の問いに、怜は首を傾げると、
「うーん。多分、特別大した話はしてないんじゃないかな、覚えてないから。あ……そうだ。家族の愚痴はよく話すよ」
思いついたことを言うと、
「姉は何を？　姉も愚痴ですか？」
「いや、お姉さんはさ、好きな詩歌（しいか）のこととかかな」
怜が慎重に答えると、
「おい、またそれかよ、レイ。お前がそんなにあざとい奴だとは思わなかったぞ」
太一が非難がましく言った。そんな気はない……こともないが、それにしても環から、何であれ何かの愚痴を聞いたことがないのは事実であった。
「加藤先輩は姉のことどう思いますか？」
まっすぐな目で尋ねてくる円の耳に、鈴音がひそやかに何ごとかを囁くと、
「レイ先輩は姉のことどう思いますか？」
と表情を変えずに質問の一部を変えた。怜は鈴音を睨もうかと思ったが、円から視線を外すわけにもいかず、
「お姉さんのこと？」
考える振りを見せた。が、うまいこと思いつかず、
「ステキな子だと思うよ」
可もなく不可もないことを言った。怜の内心の苦慮が分かったのだろう。その面白みの無いコメントに返って吹き出しそうな顔をしている鈴音。
「それだけですか？」
「や……もちろん……好きだよ」
そのセリフに今度は太一が後ろを向いて顔を背けた。ばんばん、と笑いに耐えるために机に手の平を打ちつけている。
「それだけですか？」
これ以上何を言えばいいのだろうか。というより、円が何を聞き

たいと思っているのかということであろう。そう訊きなおすこともできない怜としてはどう答えれば良いのか分からない。これが円でなければ、遠慮する気など起こらない。答えたくないことには答えないし、答えるのが難しいことを考えなどしない。どうも彼女に対しては、なかなか、我を通すというか自分の態度を貫くのが難しいのだった。考えてみれば、家族や親戚を除いて、年下の女の子と親しく話すという経験はなかったのである。そのゆえであろう。

「そこまでにしておいてあげたら、マドカちゃん。加藤くんが可愛そうだからさ」

緊張ばかりしてあまり楽しくない経験をしている少年に、助けの手を差し伸べる鈴音。既に甚大な精神的ダメージを受けている怜は、どうせならもう少し早めに助けて欲しかったものだと思った。とはいえ、素直に鈴音の命に従う円を見て心中で鈴音に小さく感謝をする怜。その前で、

「スズ……」

太一が真剣な光を瞳に溜めてつぶやいていた。

訝しげな顔をした鈴音が次の言葉を待っていると、

「オレと付き合ってくれ」

何の脈絡も無くいきなり太一は告白した。

「オレのこと分かってくれるのはレイだけかと思ってたけど、さっきからのお前の言葉で、スズもオレのこと分かってくれる子だってことが……」

「ごめんなさい」

「速いな、オイ！」

太一の告白が全うされるのを待たずに間髪入れずに頭を下げた鈴音に、太一は悲鳴を上げた。

「もうちょっと考えろよ。ていうか、最後まで言わせろ」

「考えるまでもないな。自分の理解者が欲しいだけの人には魅(ひ)かれないもの」

自分の心情を読み取ったかのような発言をする少女に、太一はあ

とじさった。
「理解者が欲しいだけだって?」
「孤独を和らげるためって言い替えてもいいよ」
太一は視線を鈴音から怜へと向けると、
「お、おい、レイ……なんなんだよ、この子は?」
声を震わせた。太一の気持ちはよく分かった。彼が感じているであろう戸惑いは、鈴音の読心の能力に由るものではなく、鈴音の言葉に反発を感じないことに由るのである。内容は辛辣なものでありながら、彼女の言葉の調子には抗いがたい確信が潜んでいる。
「お前に似てると思ってたら、似てるのはタマキにだったみたいだ」
そうぼそりと怜に言うと、太一はがっくりと椅子に座り込み顔を俯かせた。
「一日に二回フラレるって、今日はなんて日だよ」
記念日だなと軽口を叩いた怜が、ハートブレークの少年に軽く睨まれて少ししたあと、廊下を歩く足音が近づき、この部室の主が舞台へと登場した。

第３５話：降ればどしゃぶり

頭の下の方で作ったお団子とスクエア型の眼鏡によって、落ち着きのある知的な雰囲気をその身に纏わせた少女が視聴覚教室に入って来た。ここ文化研究部の部長、田辺杏子（アンコ）である。その後ろから、もう一人少女が続いた。一本にまとめたちょっと変わった編み目の三つ編みとぱっちりとした瞳が印象的な彼女には、所作にしゃれたところがある。二年生部員の坂木蒼（アオイ）。

杏子が荷物を適当に机に置きながら怜たちに挨拶すると、蒼が、皆さん、と気持ち大きめの声を出して、その場の注意を引いた。怜たちの視線がちゃんと集まったことを確認してから、蒼が語を継ぐ。

「率直にお聞きしたいことがあります」

意味ありげな間のあとで、声を潜めるように手を口元に当てて、

「実は部長のことなんですが……どう思います、部長のこと」

まるで本人がいないような振りで言った。

「アオイちゃん。陰口はその人のいないとこでやろうよ」

杏子の注意の声には本気の色はなかった。蒼とはもう一年の付き合いになる。いい加減、彼女の自分に対するからかいには慣れてきたのである。

「先輩、わたしが陰口なんて卑劣なことをする子だと思うんですか？」

蒼は心外だと言わんばかりの顔をして、杏子を見た。

「だってそういう話になるんでしょ」

「なりません。今先輩のいるここで正々堂々批判をするんです」

「じゃあ、直接わたしに言いなさいよ」

「その前に、わたしの批判が正しいかどうか、皆さんに判定してもらいたいんですよ」

蒼は、どうだ、と言わんばかりに胸を張ってみせた。

杏子は、部の活動に関して連絡事項があるから手短にするように

念を押した後、蒼の好きなようにさせることにした。口惜しいことに蒼に口で勝つ自信は杏子にはない。

蒼は怜たちの方に向き直ると、

「皆さん、部長をよく見てください」

そう言って、彼らの視線を杏子に集めさせた。四人分の視線を受けてちょっとたじろいだ様子を見せる杏子に構わず、蒼は、

「さ、部長の外見を見て何を感じますか？」

と授業中に生徒を当てる教師よろしくまずは太一を指した。

「外見がどう見えるかって？」

「そうです、先輩。心のままにどうぞ」

太一はじっと値踏みするような目を杏子に向けると、

「何か頭よさそーに見えるな」

と答えた。蒼は我が意を得たりとばかりに、大きくうなずくと、

「そーなんですよ。何か秘書っぽいですよね」

太一の解答をかなり拡大解釈した様子で言った。というより、単なる自分の意見の押し付けである。その辺の事情を察した怜は、面倒なこともあって、太一の次に指されたときに、すぐさま、秘書だな、と答えた。

「そーです。さすが、加藤先輩」

次に答えの役が回ってきた鈴音は、蒼のルールに素直には従わず、

「美人秘書ね」

と杏子の顔を朗らかなものに変えさせる言葉を発した。蒼はルールを破られてもびくともせず、

「美人って言葉は橋田先輩に言われるとイヤミにしかなりませんね」

と切り返し、お世辞ですよ、とわざわざ杏子に告げることまでした。改めて鈴音に目を向けて納得せざるを得ないような顔で悄然とする杏子。それを口の端で笑みを作りながら見た蒼は、最後に円に向かった。

「さ、マドカちゃん。これは杏子先輩のためなんだから、フランクに答えてね」

円の黒い瞳が、部長の少女にしっかりと向けられた。少しして、円の形の良い唇から発せられたのは、

「田辺部長は綺麗な人だと思います。もちろん外見もですけど、それ以上に内面が美しい方です。何も分からないわたしに対してのこれまでの親切心、部を率いる責任感、自分への批判を許す寛大さ、どれを取っても人としての品位を感じます」

という淀みのない言葉であった。

その颯爽とした声音は、室内にしばらくの沈黙を導いた。

咄嗟にすらすらと言葉を紡ぐ一年生女子に、蒼は内心、舌を巻いた。しかも、さりげなく自分への批判も混ぜている。蒼だけでなく、円の周りの三年生三人も一様に軽い感動を受けた様子が見えた。もちろん、一番感動しているのは、

「あ、ありがとう。円ちゃん。そんな風に思っててくれたなんて……」

杏子だった。感激に身を震わせているであろう先輩を無視して、蒼は、円に向かった。

「円ちゃん。良いことを教えてあげるわ。校内には、『書かれていない決まり（アンリトゥン・ルール）』っていうのがあってね、これを知ってると学校生活がスムーズに送れるのよ。そのうちの一つがね、『三つ編みの先輩の言うことには素直に従いなさい』っていうものなの」

自分の一本にした三つ編みをこれみよがしに見せる先輩に向かって、円はさも感心したかのような顔でうなずいた。中学校と小学校の違いの一つを垣間見た少女に向かって、蒼は、いいわね、と念を押した。

「はい、先輩」

「じゃあ、アンコ先輩のルックスは？」

「秘書です」

ええーっ、という悲鳴に近い声が視聴覚教室を満たした。泣き声の主に向かって、蒼は、にやりとして、

「さ、先輩。満場一致で、『アンコ先輩は何か秘書っぽい、可愛く

ない』ってことに決まりました」
結論を告げた。
「ちょっと、秘書はまだしも、可愛くないってことまでは言ってないでしょ」
「それはわたしの先輩への思いやりなんですよ。先輩が可愛いかどうか、皆さんに聞いてみます？」
「……いや、いいです」
純粋な一年生が一瞬にして毒されたことで十分にショックを受けた杏子としては、これ以上のストレスは必要なかった。蒼が、
「ということでですね、先輩。まず、そのお団子を頭の上の方で作りましょう」
続けたので、杏子はどういうことか尋ねた。
「お団子なんですけど、頭の上の方で作ったほうが可愛らしくなるんです。あと、小顔に見えるんですって」
蒼は、自分の鞄から取り出した雑誌を開いて見せた。そのページには、お団子ヘアの魅力が高らかにうたわれている。
『可愛い』とか『小顔』などのマジック・ワーズにときめいた杏子は、思わずお団子を作っているピンとゴムに手を伸ばした。しかし、お団子を崩す所まではいかなかった。蒼の、はっきりとした目元に期待の影が漂っているのが見て取れたからである。
「どうしたんです、先輩。さあ、早くそのお団子を解いて」
その口調に不穏なものを感じた杏子は手を髪から離した。
「何が狙いなの？」
「やだなあ、狙いなんて。ただわたしは、親愛なる先輩に可愛くなってもらいたいだけですよ」
そんな殊勝な心がけの子でないことは、杏子には分かっていた。一体、蒼の目的は何か。
警戒している先輩の気持ちを強引に動かすために、蒼は部員プラス部外者の四人に向かって、
「さ、皆さんもご一緒に、『お団子を上に』に清き一票を」

声を張り上げたが、誰も彼女の扇動に乗るものはなかった。先の、杏子イコール秘書、評で義理は果たしたというクールな判断をした振りの集団に向かって、蒼は続けた。

「あのお団子を解いてですね、ついでに眼鏡を外せば、醜いアヒルの子が美しい白鳥になるんですよ。闇のヴェールに包まれたその本性を見てやろうっていう冒険心がある人はいないんですか？」

応、という鬨（とき）の声を期待した蒼だったが、やる気のない船員達からはついに上がらなかった。ちぇ、と悔しそうに口元を尖らせて、

「皆さん、ノリ悪いですよ」

軽く責めるような色を見せると、その後ろから、

「そういう企みだったのね、アオイちゃん」

後輩の計略を見抜いた杏子がはっとした顔を作っていた。

「お団子を解かせて、わたしのこと笑いものにしようなんて、ヒドいわ。アオイちゃんのこと、確かに良い子だとは思ってなかったけど、でもそこまで悪い子だったなんて。腹黒いと思ってたけど、せいぜい薄曇りくらいの暗さだと思ってた。コールタールみたいに真っ黒だったなんて」

「先輩、さりげに残酷なこと言ってますよ」

「残酷なのはどっちよ。もう絶対にわたしはこの髪型をやめないわ。コンタクトにもしない」

かたくなに断言する杏子に、

「誤解ですよ、先輩。ただ、わたしは髪を解いた方が綺麗だって言ってるだけで……」

説得しようとする蒼だが、

「絶対ウソ。髪を解いた所を間髪入れずに笑うんだわ。しかも、皆の前で」

頑固に主張する杏子。その強硬な態度に、蒼は諦めた風にため息をついた。

「分かりました。でも、せめてお団子は上の方で作ってくださいよ。その方が多分カワイイですから。かわいくなかったとしても、たま

には髪型に変化をつけた方が男子受けもいいですしね」
「本当？」
「はい」
自分の言葉よりも説得力のある雑誌を再び見せる蒼。
「男子受けも？」
「いいですよ。今日、実証済みです」
そう言って自分の一本にした三つ編みを見せる蒼に、
「それ、フィッシュボーンでしょ？」
訊く杏子。ちょっと面倒なタイプの三つ編みだった。
「よくやる気になるね」
「慣れると簡単ですよ。それに何よりモテるためです」
言い切る蒼。年頃の女の子である。髪型を変えるとモテるのか気になった杏子が本当かどうか確かめようと、他の部員達に訊こうとしたが、
「無駄ですよ、先輩、この人たちに訊いても」
その前に、蒼が釘を刺した。
「まず橋田先輩と円ちゃんは、髪型がどうこうっていうレベルじゃないですし、加藤先輩には川名先輩以外の女の子は目に入らないだろうし、瀬良先輩なんか女の子だったら何でもいいんですから」
だからわたしに訊くしかないんです、と締めくくる蒼。
「おい。女の子なら何でもいいっていう言い方はないんじゃないのか？」
席から立ち上がって小さく抗議してくる太一に、蒼は動じずに、
「でも、その通りでしょう？」
返すと、そんなことはない、と先輩男子は首を横に振った。
「怖い子には告白しないことにしてる」
「怖い？」
分からない顔をしている蒼の目を、太一は自分の近くにいる同学年の女子に向けさせた。
「こういう子だよ。まあ、スズには告白しちゃったけど」

えっ、と興味を表した蒼が、返事はどうしたのか鈴音に訊くと、
「ごめんなさい」
と彼女は言って、太一を呻かせた。
「二回言うなよ」
頭を抱えた太一だったが、少しして気を取り直したように顔を上げると、何かに閃いたかのような顔で蒼を見た。
「アオ」
「はい？」
その真剣な声音に多少たじろぎ気味に次の言葉を待つ蒼の耳に、オレと付き合ってくれという唐突な告白の言葉が流れてきた。
「いいですよ」
あっさりと答える少女を、自分の性急な告白について棚上げした太一が返って怪しむように見た。
「え、いいの？」
「はい」
「そ、そう」
あまりに淡白なその反応に少し拍子抜けしたような太一だったが、近くにいる三人に向かって、
「どうやら三度目の正直みたいだ」
にやりとして見せた。しかし、どうやら引用する諺が間違っていたことに気がつくのに長くはかからなかった。
「先輩。わたし、明日誕生日なんですよ」と蒼。
付き合いを申し込んだ翌日が交際相手の誕生日であるという奇遇さに驚きながらも、何かプレゼントするよ、とマメさを発揮しようとする太一。その時、彼から少し離れた所から、
「アオイちゃんの誕生日は八月でしょ」
と奇妙な発言がなされた。今はまだ五月なのである。どういうことか確かめようと、蒼を見ると、彼女は、
「アンコ先輩、ばらさないでくださいよ」
と部長の少女を咎めたあと、

「折角明日プレゼントをもらったら速攻で別れようと思ってたのに」
恐ろしいことを平然と口にして、にこーっとした魔性の笑みを太一に向けた。
うわあ、という小さな叫び声を上げると、太一は先の告白を撤回し、いたたまれなくなって足早に部室を出て行った。
一日に三度も失恋の衝撃を味わった哀れな少年がいなくなり、室内に部関係者しかいなくなったところで、部長の少女は業務連絡を始めた。

第３６話：つまらない仕事もやり方次第で

「新聞を作ります」
というのが杏子（アンコ）の連絡内容だった。ここ文化研究部の活動内容は、各国各時代の文化を研究することであり、研究結果をレポートにまとめたりしているわけだが、部の活動を対外的に示すために、たまに手製の新聞を作って、校内の掲示板に貼付しているのである。
「今度はどんなテーマにするんですか？」
椅子に座りながら訊く蒼（アオイ）に、今からそれを決めましょう、と部長。
「どーせ作るなら、なんか受けるのにしましょーよ。この前の何でしたっけ……フランス文化特集？　あれ見向きもされなかったじゃないですか」
その多分に商業主義的な主張に杏子はやれやれと息をつき、
「アオイちゃん、文化っていうのはね、それぞれが全て固有の価値を持ってるのよ。そうしてそれらの間に優劣をつけることはできないの。今、たまたまこの学校の生徒に受けが良かったからって、その文化が他より優れているわけではないし、逆もまた然（しか）りよ。それを文化相対主義と言います」
と今さらのレクチャーをした。蒼にとっては耳にタコである。しかし、初めて部長の講義を聴いた他の二人の部員からはパチパチと拍手が上がった。
「ハイ、ストップ」
蒼は女子二人が叩く手を止めさせると、
「フランス文化が劣ってるなんて言ってませんよ。ただ、新聞をわざわざ作るっていう手間をかけるわけだから、それに見合った報酬を得たいっていう話です。何ごとも、報われないんじゃ意味無いじゃないですか」
とさっきより明確な主張をした上で、
「そして新聞作りにおいて、報われるっていうのは、皆が見てくれ

るってことです。掲示板の前に人だかりができて、みんなが食い入るように記事を見る。それでこそ新聞を作った甲斐があるってものでしょ。見られない新聞にどんな意味があるんです？」

挑戦的な口調で続けた。

「わたしたちの仕事は心ある人に理解してもらえればいいじゃない。大衆に媚びるものなんて、研究の名に値しないわ」

崇高な理念に夢見る風な目をする杏子に、

「先輩はアレですね、ダメダメな男に自分から引っかかるタイプ」

全然別な話を振る蒼。

ぎょっとして夢から覚めた部長は、

「え、なんで？　どっからそんな話になっちゃうの？」

聞き捨てにはできない様子ですぐさま訊き返した。

「『あの人の価値が誰にも分からなくてもいいわ、わたしにだけ分かれば』とか何とか考えて、どーしようもない男に自分からハマるわけですよ」

そう説明した蒼は、他の部員に向かって、

「たまたま自分の近くにいる女の子が評価しないからといって、自分のカレシが他の男の子より劣っているということにはならない。これをカレシ相対主義と言います」

続けた。

今度は拍手は上がらなかった。

その代わりに、

「そ、そんな……」

と愕然とした声が立ち昇る。蒼はショックを受けた顔をしている杏子に向き直った。

「かくして先輩は、つまんない男と付き合ってあたら青春を無駄にし、いつの間にかお肌も曲がる年になって、それでも『この男にはわたしがいないとダメなんだわ』とかアホくさい母性本能からいつまでもダメ男と別れられず、あげくあろうことか浮気なんかされちゃうわけですね。浮気の理由を訊いた先輩に、その男がぼそりとつ

ぶやく答えの一言はこうです。『お前、重いんだよ』」
ぎゃー、という絹……いや木綿を引き裂くような悲鳴が室内に轟いた。
暗黒の未来予想図に精神を崩壊させた少女は、崩れ落ちるように椅子に座り込んだ。がくりと疲労しきったマラソンランナーのごとく頭が上がらない彼女に、降る優しい言葉。
「でも、大丈夫、わたしたちは先輩の味方ですよ。ロクでもない男につまずかないようにする方法をお教えします」
「どうすればいいの？」
すがりつくような目で顔を上げた杏子に蒼が一言。
「ウケる新聞を作りましょう」
「新聞？」
カレシ選びと新聞にどんな関係があるのか、訝しがる部長に対して、
「そーです！　ウケる新聞です！」
強い調子で言うと、蒼は立ち上がって、
「同世代の子が何を求めているのか、それを考えることによって、自分の狭い価値観から解き放たれて、広い物の見方ができるようになるわけです。別の視点を獲得するんですよ。自分の視点と別の視点、複数の視点から見ることができれば、付き合う男の子の評価もそれだけ正確にできるようになるんです」
力説した。
「ア、アオイちゃん……」
杏子は眩しいものでも見つめるかのように後輩を見上げた。
「何ですか？」
にこりと極上の笑みを投げかけてくる少女に、杏子は、
「今ほどあなたが大した子だと思ったときはないわ」
と告げた。
「ありがとうございます。これも先輩のご指導の賜物（たまもの）です」
そう言うと、サギ師の少女は次なるカモたちへと向かった。小芝

居を傍観していた三人の観客。そのうちの二人は、まだ部に入ったばかりの女子であり、部活動の先輩である蒼の思い通りの方向に誘導するのに難しいことはない。問題は彼女らの横にいる先輩男子である。普段は、物静かというか全然しゃべらないくせに、唐突に鋭さを発揮するときがある。その鋭利な刃を当てられて、部長が目を醒ましたりしたら面倒なことになる。

「では、今回のテーマですが、わたしが提案するのは、恋愛かファンタジー特集です。同世代の子が求めるもの、それは現実ならば恋愛、非現実ならばファンタジー。これらに関する特集を組めば、食いついてくることは必至です」

先輩男子からの反撃に身構えていた蒼だったが、全く反応はなかった。どうやら、今回は、『沈黙』モードにスイッチが入ってるらしい。二人の女子と一緒になって、なるほど、とうなずいてさえいるので、蒼は勝利を確信した。

「そういうのって図書委員の作る新聞の類なんじゃないの？」

後ろから疑問を呈した部長に対して、

「もちろんそうです。ただし、図書、すなわち文学というのは、文化の一側面ですから、図書委員の活動が、我々文化研究部の活動とかぶるところがあっても当然ではないですか？　かぶるからといって、やってはいけないことにはならないでしょう」

整然とした答えを与え、杏子を感心させた。

蒼が決を採ると、杏子を含めて全員が蒼の提案に賛成を示したので、彼女は内心ほくそ笑んだ。これで、新聞作りという怖ろしく面白くない作業の苦痛が多少和らぐというものである。

「古代中国文化特集の時は死にそうになりましたからねー」

もう隠す必要もないので蒼は本心を吐露してから、分担を割り振りましょう、と進行役を買って出た。

「とりあえず、皆さんがどのくらい恋愛について、造詣（ぞうけい）が深いかお聞きします。もちろん、フィクションのですよ。リアルな恋愛語られても気持ち悪いだけなんで。そういう話はお友だちの家に泊まり

にいった夜のためにでも残しておいてくださいね」
そう前置きすると、蒼は、一人ずつにこれまで読んだことのある恋愛に関する小説、映画、ドラマ、漫画などについて質問した。その最後に当たったのが、怜だった。
「加藤先輩は、そういうの読むんですか？」
期待の薄い声で訊いた蒼の問いに、怜はうなずいた。え、と意外な顔をした少女に向かって、この前読んだのはこういう話だ、と怜は説明を始めた。
「ある町に仲の悪い二つの家がある。その家のそれぞれの息子と娘が恋に落ち、家からの妨害に遭いながらも、恋を全うし、ただ最後にはお互いを想うがゆえに死んでしまう悲しい恋物語」
どうにも合点の行かずに曇る蒼の表情が、何かに思い当たったかのように晴れた。
「分かりました。川名先輩の影響ですね。加藤先輩がラブ・ストーリーを読むなんておかしいと思いましたよ。男の子らしい努力ですね～、カノジョさんの好きなものに自分も興味を持ってみるなんて」
怜が答える前に、横に来た杏子が口を出した。
「何言ってるの、アオイちゃん？　今、加藤くんが話したのは有名なお話よ。ロミオとジュリエットじゃない」
「え？　ロミオとジュリエットって最後に死んじゃうんですか？」
「そうよ」
へえ、と初めて知った事実に感心した蒼は、そこでやっと、怜にからかわれたことに気がついた。それでは、ラブ・ストーリーというよりは古典である。やはりこの人は侮れないと再確認した蒼が、
「じゃあ、他にはどんなものを？　現代のものにしてくださいよ」
やり返す気で訊いたが、怜は首を横に振った。シェイクスピアの作品以外で心に残るラブ・ストーリーなどない、とはっきりと言う先輩男子に、蒼はなおも、
「でも、例えば、川名先輩と映画を観に行ったりするわけじゃないですか。そういう時、何を見るんですか？」

引きさがらなかった。やられたら、たとえほんの少しでもやり返しておくのが、蒼の流儀である。

怜は春休みに環と観に行った映画のタイトルを挙げた。

「それってラブですか？」

「いや、アクション」

「何でアクションなんですか？　デートで観る映画って言ったら、普通ラブじゃないですか？」

「それはあっちに言ってくれ。選んだのはオレじゃない」

「川名先輩が？」

ああ、とうなずく怜を怪しむような目で見ながらも、蒼は、彼の話を信じた場合に最もありえそうな可能性について言及した。

「多分、川名先輩は、加藤先輩に遠慮したんですよ。泣かせるじゃないですか、カレシが好きそうなものを選ぶという健気な女心」

「オレより余程楽しんでたけどな」

「そう見せてただけで、気がつかなかったんですよ。先輩、鈍いから」

些少ながら、それでとりあえず反撃したことにした蒼は、

「じゃあ、次はファンタジーです」

と、再び一人ずつ質問を回していった。

第３７話：人は運命を選ぶことができる

太陽が一日の勤めを終えようと、地平線に向かってゆるやかに下降していた。ただ、退社時刻にはまだ時間があるようで、彼女の眼下には、夕暮れの色に染まりきらない町が見えた。

「今日はさ、加藤くんの家経由ルートで帰らない？」

新聞作りの役割を決めて、部活動を終え、いつものように帰り道を歩き出した時だった。

横から流れてくる鈴音の声に、怜は即座に、

「だめだ」

と、にべもなく答えた。

「どうしてさ？」

不満混じりの声に、今度は答えなかった。どうしたもこうしたもない。遠回りになるからに決まっている。

「加藤くんの家で別れるからさ」

怜は首を横に振った。話にならない。それでは、怜は自分に課した義務を全うできないことになる。

「お願い」

このとーり、とわざとらしく両手で拝むような振りをする彼女に、怜は、もう一度はっきりとＮＯと答えた。

「たまには別の道を通って帰りたいっていうこの気持ち、分かんないかなあ」

ため息混じりの声に、特にそんな気持ちになったことのない怜は、分からない、と正直に答えた。

「面白くない人」

「それは自覚してる」

「ね、お願い」

少女はなおもしつこさを見せた。普段なら――といっても付き合いはここ最近のことなのだが――ここまで彼女が我を通そうとする

ことはないのだが、と怪訝に思った怜に、思いついたことが一つ。
「じゃあ、交換条件だな」
お、と思わぬ成り行きに軽い戸惑いの表情を表した彼女が先を促すと、
「お前の変身ぶりについて説明してくれたらな」
と怜は条件を出した。昼休みの時といい、部活の時といい、鈴音の変貌振りは気になっていた。他人がどう変わろうが何の関心も無いが、鈴音が、他人と言うには抵抗がある程度には親しい関係にあることは認めなければならないし、また、こちらの方が深刻なのだが、変身した彼女の攻撃対象にどうやら怜が含まれているらしいということに気づき、無視できない事態であったからである。
「変身？」
「ああ」
「何のことを言ってるのか分からないな」
少女は、素知らぬ風を装うと、通学路をそのまま軽やかに歩いた。同学年の女子としては高い背筋が立っている。その上にある繊細な首筋、花のような形になった芸術的なハーフアップの彩る顔容には、落ち着いた色があって、同年代の少女より一つ二つ年上のような印象を与える。
しばらく前を向いていた鈴音の整った顔立ちが怜の方に向けられたのは、あるY字路でのことだった。一方を通れば鈴音の家、もう一方を行けば怜の家へと続いている。決断の場である。鈴音は立ち止まると、つられて足を止める怜に、先の交換条件を呑むことを告げた。ただ、その前に、
「女の子の頼みってのはさ、何でも受け容れてあげるのがイイ男なんじゃないかな」
と最後の一撃を怜に加えることを忘れなかった。
打たれた怜は、しかし何らの痛痒も感じなかった。もし彼女の言う通りだとすれば、イイ男になるということは苦行以外の何ものでもない。そんなことをして得られるものが、鈴音のような少女の歓

心だとすれば全く割りに合わない話である。
「そんな……わたしのこと好きじゃないの？」
両手を胸の前で組み合わせて上目遣いで訊いてくる鈴音に、
「それで？」
と平静に促すと、詰まらなそう顔をした少女は、静かに、
「この前の金曜日にね、あなたの頬に触れたときにわたしの中の何かが変わったの」
とだけ告げて、それで察しろとでもいうかのように口を閉じた。
それだけではさっぱり分からなかった怜だったが、一つだけ分かったことがある。目前の少女が急に小憎たらしくなったことに、自分が一役買っているということである。
「これが今のわたしみたい、どうかな？」
鈴音は両手を広げて、新しい自分をお披露目した。彼女の顔には、晴れ着姿を見せるときのような恥じらいと、初めて着た新品の服を見せるときの怖れの色があった。
「オレがどう思うかとは関係ないだろ」
怜のぞんざいな答えが何を意味しているか、鈴音にはよく理解できた。理解はできたが、彼の想いに従う必要がない、と考えることができるのも今の彼女だった。
「そうでもないよ。いつかみたいに、『可愛い』って言ってもらえると嬉しい」
そんなことをこれまで言ったことがあったかどうか、覚えてないが、何にしても今の鈴音を可愛いと評価するには、そういう言葉を同年代の少女にかける気恥ずかしさ以上の抵抗があった。
「冗談だろ？」
と怜が確認すると、
「前の方が良かったの？」
そう返した彼女の言葉に寂しげな陰影がある。とっさに自分の発言を訂正しようかと思った怜だったが、その必要はなかった。鈴音の顔に、にやにやとした人の悪い笑みが見えた。変わりすぎであっ

た。
「そうかな？」
鈴音は小首を傾げ、そのあと、
「でも、わたしはこれで行こうかなって思ってる。この心のままに」
とまっすぐに言った。
少女の声には清浄なものがあった。
怜は自分の役割が終わりに近づいていることを理解した。だからこそ鈴音はいつもとは違う道を選んだのであろう、ということも。
いつものＹ字路をいつもとは別の道に折れた二人は、仲の良い恋人同士のような風情で、ゆっくりと暮れ行く街路を歩いた。鈴音は、もとからよく話す子だったが、今日は常よりもよくおしゃべりしていた。静寂を好む怜だったが、なぜだか鈴音の声は気に障らない。穏やかに鳴るＢＧＭのような雰囲気で、心を落ち着かせるような作用がある。
「マドカちゃんにはまたフラれちゃいましたね」
前言撤回。鈴音の奏でる音楽には、たまに不協和音が鳴り響く。
部活動が終わったあとに、今日の帰り際にも円に一緒に帰るように誘ったのだが、すげなく断られていたのだった。
「今日は少し話せただけでも良しとするしかない」
怜は自分を納得させるような調子で言うと、
「話せた？　あれで？」
とからかうような口調の鈴音。
「加藤くん、数学教えてただけじゃない」
「それだって進歩だろ」
「そのスローペースだとなかなか進展しませんね。せっかく同じ部で接点があるのに、何にもないまま一年過ぎちゃうんじゃないの」
どうにも不穏な空気を感じ取った怜は、何もするなよ、と強い口調で念を押すように言った。
「何もって、何のこと？」
にたーっと秀麗な面（おもて）を歪める鈴音に、背筋に走る悪寒。自分の頬

にどんな効果があったのかしらないが、三日前と明らかに変わってしまった少女に、怜としては、

「マドカちゃんとの間を取り持とうなんていうインチキなキューピッドは必要ないってことだよ」

とはっきりと言葉にする必要があった。

残念そうな様子で視線を下に向ける鈴音。どこまで本気かは分からないが、怜は再度釘を刺しておいた。

「はいはい、分かりました」

不承不承という調子で少女が答えていた。

それから二十分ほども歩くと、怜の家に着いた。

じゃあね、と別れを告げる鈴音に、怜は少し待つように言い、家に入っていった。一、二分ほどで、鞄を置き身軽になった怜が再び姿を現すと、その手に何かを握っていた。

「ありがとう」

差し出された、片手にできるほどの小さな紙パックのジュースを受け取りながら鈴音。ストローをさして口をつける所で、怜が手を差し出している。何かをよこせと言っているらしいことが分かった鈴音は首を捻った。

「百円でいい？」

少女がからかうような声で言うと、そんなわけないだろ、と怜は好意の対価の受け取りを拒否した。その代わりに、鞄をよこすように言う。鈴音の鞄が、怜の肩にかけられた。

歩き出す少年の行く先に何があるのか、鈴音には考えるまでもなかった。

「まあ、そんな気もしてたんだけど」

家まで送ってくれるつもりの怜の隣に並びながら鈴音はそう言うと、悪いね、と感謝の言葉を口にした。

「こっちの都合だから気にするな」

怜が無愛想に答えるのを聞きながら、鈴音は微笑んだ。彼女を彼女のために家まで送り届けてくれるということが彼の都合になるの

は、彼が自分のルールで動いているからである。そうして、不思議なことに、その彼のためのルールによって、なぜだか鈴音は優しい気持ちになれるのだった。ただ、そういう気持ちに浸り切らないでいられるほどの強さを、どうやら鈴音は獲得したようである。

「本当は明日にしようと思ってたんだけどな」

一つ心を決めた少女が晴れ晴れとした声を出した。

何ごとかと注意を引かれた少年に対して、

「明日の朝からもう迎えに来なくていいよ、加藤くん」

鈴音は穏やかに伝えた。

少しは緊張するかと思っていたその言葉には、震えも淀みも全く無かった。

「分かった」

と簡単に答えた少年の声にも感慨めいたものはなく、全く平板な口調だった。

「今までありがとうね」

「オレは何もしてない」

「だからよ」

「……」

「わたしを信頼してくれた。だからこそ感謝したいの」

鈴音がはっきりとした口調で言うと、怜はそれ以上は何も答えなかった。こちらからちょっと視線を逸らすようにしている。何だか居心地悪いような様子であるが、鈴音はしばらくそのままにして放っておいた。鈴音のためという意識の薄い怜は、彼女の謝辞を受けても、不相応な謝礼を受けているような決まり悪さでも感じているのだろう。だが、この謝意だけは、どうしても受け取ってもらわなければならない。

しばらく無言で歩き、隣の彼が戸惑う様子をちょっと意地悪い気持ちで見守っていた鈴音の頭に閃いたことがあった。

「加藤くん」

やっと気恥ずかしい思いから立ち直った所なのにまた何かショッ

クを与える気でいるらしいと邪推した怜が、鈴音の言葉を待つと、
「ちょっと言いにくいんだけど……」
と、珍しく歯切れの悪い口調で言葉が継がれた。
「一つ頼みたいことがあるんだ」
「頼み？」
「うん。無理だったら、断ってくれて全然構わないんだけど」
怜は先を促した。そこまで言いにくい話だと、返って興味を誘われるというものである。
「あの……お母さんがね、送り迎えしてくれてるお礼に、次の土・日に加藤くんにご馳走したいって言ってるの。もちろん、加藤くんがお暇ならだけど」
考える素振りを見せた怜の心中が、鈴音にはよく理解できた。彼としては、鈴音の登下校に同行することはわざわざ礼をされる筋のことではないという意識があるのだろう。だからこそ言い出しにくかったのである。ただ、それでも言わざるを得なかったのは、母の気持ちをおもんぱかったからであった。不登校で心配をかけた母への孝行のために、できる限り母がしたいことをさせてあげたいという気持ちが鈴音にはある。そして――
「特に今週は予定がないから構わないよ」
その彼女の気持ちを酌んでくれるのが、怜という少年だった。
「ありがとう」
心からの感謝の言葉に、土曜日でいいか、と怜は事務的に尋ね、鈴音を微笑ませた。
いつものように鈴音を彼女の家に送り届け、娘を待っていた母親に少し遅くなったことを詫び、招待の礼を述べて、家に帰ると、夕飯の用意をしていた母から、今週末に彼女の姪、すなわち怜にとっては従妹に当たる少女が来ることを告げられた。
「由希が？　何しに？」
「何って……従兄妹のところに来るのに理由がいるの？　遊びに来るのよ。何か、来週の月曜日が学校の創立記念日ってことで休みら

しいのよ。だから、土・日は泊まってくから」
　怜は、それはそれで構わないが、土曜日は予定が入っていることを告げた。
「デートならいつでもできるでしょ」
　いつも思うことだが、少しでよい、子に何か言う前に、同じセリフを二十数年前の自分自身が聞いたらどう思うかということを考えてもらいたいものである。誰から躾けられたのか知らないが、親にそんな不躾なことを言える無礼さを抑えることができる怜としては、代わりに、大事な用であることを辛抱強く告げるという手段を執った。
　息子の断固とした態度に、母は不満そうな顔を作りながら、それでもしぶしぶ了承してくれた。
「由希ちゃん、来るんだ。会うの、お正月以来だな」
　妹がはしゃいだ声を上げていた。
　従妹が一人来るということは、妹が一人増えるのと同義である。それは、すなわち、そもそもが良くなかった家の居心地が悪化することを意味している。怜は、予定を入れてくれた鈴音に感謝するとともに、他に、ひょっとしたら日曜日に前から約束していた予定がなかったかどうか、注意して記憶をたどってみることにした。

第３８話：最果てへ続く別ルート

学校から家に戻り、夕飯が用意されるまでの時間を、円（マドカ）は勉強に充てていた。リビングに陣取って、足の短いテーブルの上に、参考書の類を広げる。学校帰りで勉強モードになっている脳のスイッチを切らないため、制服姿のまま、フローリングに敷かれた絨毯の上に腰を下ろす。着替えもしないはしたない娘に対して母はあまりいい顔をしないが、中学生の本分を果たそうとしている子に向かってあまり強く言ったりもしない。

穏やかな夕べだった。家の近隣は静かな家族が多く、また円のいるリビングにも静寂を壊す装置はない。テレビは置いてあるのだが、そもそもあまりテレビを観る家族でもない上に、円が勉強しているときは遠慮してくれていた。聞こえてくるのは、シャープペンを動かす音に、母が指揮する包丁とまな板のハーモニーだけ。心地よく仕事に向かえる、最高の環境――

「やあだ！　今日は、お風呂入んない～！」

最高の時間は長続きしないものである。

ダイニングから響く幼児の金切り声に、ノートに軽快なステップを踏んでいたペン先が滑る。円は消しゴムを取ると、シャープペンのした粗相の後始末を始めた。

「やだもん！」

円の手に力が込められる。消しゴムの圧力が強すぎてノートが悲鳴を上げた。

「アサヒ。お風呂は毎日入らないとダメよ。もうちょっとしたらお母さんと入りましょ」

「やーだー、今日は入んない！」

「どうして？」

「どーしても！」

「頭を洗うのが嫌なの？」

「ちーがーうー、今日は入りたくないの！」
「お風呂入らない女の子は嫌われちゃうよ」
「いーもん、嫌われても」
母と六歳の妹の麗しいコミュニケーションに、円の頭はくらくらしてきた。何だって風呂くらいすっと入らないのか、と苛立たしげに思ってしまうが、それはフェアではあるまい。つい数年前までは、円もあのように母を困らせていただろうし、その母にしたって、妹のような年頃には母の母、すなわち祖母を困らせていたのであろうから。歴史は巡るのである。しかし、悠久の歴史に想いを馳せる余裕は今の円にはなかった。彼女の目下にあるのは、社会の問題ではなく、理科なのである。
なおも続く母子の攻防の喧騒に、もともと我慢強い方ではない円の忍耐はすぐに限界に達した。
「あーもう、うるさいな」
立ち上がって、ダイニングテーブルで駄々をこねている妹に向かうと、妹は、くりくりとした円らな瞳に警戒するような色を浮かべていた。
「アサヒ、お姉ちゃんと一緒に今すぐお風呂に入るよ」
切り口上でそう言うと、円は妹の小さな手を取って、軽く引いた。このまま浴室に導いて、手早く妹の体と髪を洗ってやって騒音源を撤去した方が、騒音を聞きながら何度もシャープペンの芯を折るより、よほど精神衛生上、健全というものである。どうせ円も入浴しなくてはならないし、またそもそも妹をお風呂に入れることは、そのとき手が空いている家族の誰かの仕事でもあったのだった。
六歳にもなるとなかなか力がついてくるものだ、と妙なところに円が感心したのは、妹の旭（アサヒ）が、姉の手を振り払ったときだった。
「やだ！　円お姉ちゃんとも、環（タマキ）お姉ちゃんとも、お母さんともお父さんとも誰とも入んない！」
憎々しげに、べーっと舌を出す妹に、感心の気持ちはすぐに苛立ちに取って代わられた。円は奥歯を噛み締めることによって、聞き

分けのない妹の頭をはたきたい欲求にどうにか打ち勝った。川名家のしつけ条項の中で、罰はお尻たたきということに決まっているのである。さらに悪いことに、条項の中に、姉の命に従わないことが罪であるという一文はないのだった。

お尻をたたくこともできない円は、深呼吸して気持ちを落ち着けてから、

「じゃあ、どうするの？　一人で入るの？」

そんなことできないくせに、という悪意を言外に込めて言ってやると、

「だから、ゆってんじゃん。今日は入んないって。お姉ちゃん、もっとアサヒのお話、ちゃんと聞いてよ！」

口応えして、ふん、とそっぽを向いた。

誓って言えることであるが、円には妹と同じくらいの時期に、姉に対してこんな乱暴な口の利き方をしたことはなかった。自分が姉にしたことがないことを、妹からされるとは、理不尽な話である。それは姉と自分の、妹に対する影響力の差なのか、それとも自分と妹の分別（ふんべつ）の差なのか。後者だと思いたい円だったが、彼女の希望はもろくも打ち砕かれることとなった。

とんとん、とリズミカルに階段を降りてくる音がして、静かにダイニングに現れる一人の少女。均整の取れた体つきにしとやかな容貌の彼女は、まるで殺風景な教室に置かれた一輪の花のように、ひとの目を引かずにはいられない清楚な輝きに溢れていた。

「上までアサちゃんの声が聞こえてたけど、どうかした？」

姉がいつもの微笑を浮かべながら、その音楽的な声を出すと、旭は椅子からうんしょと下りて駆け、姉にしがみついた。

「あら、どうしたの、アサちゃん？」

優しく妹の体を放したあと、膝を床につけて妹と視線の高さを合わせた姉が訊くと、

「タマキお姉ちゃん。お母さんと円お姉ちゃんが、あたしに嫌なこと言うの」

同情を誘う哀れな声で、母と二番目の姉の非情を訴えた。
「嫌なこと？」
「うん」
「どんな？」
「お風呂に入れって言うの。入りたくないのに……」
「アサちゃん。お風呂に入りたくないの？」
「うん。入りたくない」
旭はきっぱりと言い切った。
少し離れた所から、円は興味深く姉を見ていた。妹の我がままに対するいらいらは、今度は姉の対応に対する関心へと代わる。この難物をどうやり込めるのだろうか。後生のために道を示してもらいたいものである。そんな円の耳に聞こえてきたのは、
「そっか入りたくないんだ。じゃあ、入るのやめようか」
旭の自分勝手を許すかのような発言だった。まるで幼児を甘やかすような態度であったが、姉の行動を正確に評価できる自信のある円としては、その態度に失望はしなかった。必ず続きがあるはずである。そう期待をかけていると、やはり案の定であった。
「入らなくていいの？」と旭。
「いいよ。アサちゃんが、どうしても、どうしても、どうしても嫌だって言うなら」
「……どうしてもってわけじゃないけど……」
「どうしてもってわけじゃないの？」
「うん」
「そっか。それじゃあ、お姉ちゃんのために入ってくれると、お姉ちゃん嬉しいな」
「お姉ちゃんのため？」
「そう。お姉ちゃん、アサちゃんとお風呂で遊びたいんだ」
「遊ぶ？」
「うん。あとね、すっごくいい匂いの石鹸（せっけん）があるんだよ。ハチミツの匂いがするやつ。それで体を洗いっこしたいの」

旭の大きな瞳がきらきらと光っている。すでに勝敗は決していた。それは、姉と旭の勝負でもあり、姉と円の勝負でもある。意固地になっていた旭の気持ちを瞬く間に解きほぐしてしまった姉に、円の心は軽く打ちのめされていた。改めて、姉との差をひしひしと感じていた。今しがたなされたことは、幼い妹の機嫌を直したというだけのことであるが、姉は、一事が万事、この調子で物事をスムーズに処理していくのである。二歳という人生経験の差が、この年代には絶対的な意味を持っていると信じられれば気も楽であるが、姉は自分と同じ年だったときから現在と同じような様子であった。

「お母さん、頂き物の石鹸、使わせてもらうね」

姉が、上機嫌になってかえって彼女の手を引っ張るようにしている旭とともに、バスルームの方角に消えると、円の口元からため息が漏れた。

「どうかしたの、マドカ？」

耳ざとく娘の憂いを聞き取った母が、エプロンで手を拭きながら訊いてきた。

自分の心中を素直に表現するには少々大人になりすぎた円としては、

「お姉ちゃんって、いつからあんな感じだったの？」

と間接的な質問で母への問いに答えるのが妥当な線であった。

「あんなって、どんな？」

「あんな可愛げない感じってこと。時々、お母さんより大人に見えることがあるわ」

母はくすりと口元を綻ばせると、確かに、と言って首肯した。

「そーなのよね。わたしも、ときどきね、自分のお腹から何が生まれたんだろうって思うことがあるわ」

「お母さんが教育したんでしょ」

母は、うーん、と首を捻ると、

「タマキは昔からあんな感じだったからな。あんまり教育した覚えも無いんだけれど。親が無くとも子は育つっていうからね、親がい

ても子は育つように育つのよ」
　無責任な発言をした。
「それだって生まれたときからあんなんじゃなかったわけでしょ」
「もちろん、タマキにも可愛いときはあったわよ」
「いつ頃からなの、お姉ちゃんがスレちゃったのは」
　姉が非行に走っているかのようなことを言う娘に苦笑する母。いつ頃からかな、と記憶を探るような顔をして、
「小学校の一年生くらいかな」
　と検索結果を発表した。
「その頃は本当に手に負えなくてね、今のアサヒなんか全然比べ物にならないくらい。始終怒ってるし、何かっていうと反抗するしでね。ひどいものだったわ」
　言葉とは裏腹になつかしむ色を見せる母が意外なことを言っていた。しっかりした、しすぎているあの姉にも母を困らせる時期があったとはちょっと想像できなかった。
「でも、そのうち収まってね。ああいう時期のことを分別がつく時期って言うのかな。急に今みたいな感じのいい子になっちゃって」
　少し寂しげな色を見せた母に、円は、
「親から見ると、しっかりした子どもって、あんまり可愛くないの？」
　と、危うい質問をした。
　母は、失言を恥じるように決まり悪い顔を作ったが、すぐに気を取り直すように首を振ると、
「わたしにとってはね、娘っていうのは可愛がるものじゃないんだな」
　と円をちょっと驚かせる発言をした。愛の対象でないとしたら、子とはどういう存在になるのか。
「それはね、感謝の対象よ」
「感謝？」
「そう。あなたたち三人はね、わたしを母親にしてくれるために、

生まれて来てくれた。あなたたちによって、わたしは母親になれたのよ。そういう意味で感謝の対象なの。ありがとうね」

優しい目で、率直な声で、そう語りかけてくる母の、その娘であることをこれほど幸運に感じたことはなかった。子に感謝を示す奇特な母に、こちらこそ、と素直に返礼したい所であるが、照れくさくてとてもそんなことは言えず、代わりに、

「不肖の娘ですが、今後ともよろしくお願いします」

と冗談ぽく答えるのが精一杯だった。

母の顔がにこりと笑みを作っていた。

「マドカ。『不肖』っていう言葉のもともとの意味、知ってる？」

「もともとの意味？」

「そうよ」

愚かであるという意味しか知らない円は、大人しく母の教えを待った。

「それはね、似てないってことなの。親に似てないってことよ。親に似ない子、すなわち愚かな子ということになるわけ。でもね、わたしはあなたたちに、わたしに似て欲しいなんて全然思わない。わたしのお腹を通って出てきたあなたたちは、でもね、わたしとは別の人なんだもの。その意味ではね、どんどん不肖であって構わないわ」

母の言葉は、姉に対して対抗心を持つ円へ一つの道を示すものだった。親子が似ずともよい存在ならば、姉妹は尚更であろう。逆に、似ていないということが個性を表すことであり、個性に価値があるとするなら、似ないほど良いということになる。しかし、そういう方向へ思考を進ませていくのは今の円にとって難しいことであった。円の目には、他へ視線を逸らせないほど、姉が輝いて見えていたのである。

「着替えてくるね」

とはいえ、一つの可能性を与えてくれた母に心中で感謝しつつリビングを出た円の耳に、バスルームの方から、水音ときゃっきゃっ

という楽しげな笑声が聞こえてきた。

第３９話：日常のクール・キューティ

「うーん。今日も可愛いわよ、アオイちゃん。さっすが、ママの娘」
姿見に映る自分の姿を丹念にチェックしていたとき、後ろからかけられる賛嘆の声。鏡の中に映る少女が口角を上げてにっこりと微笑んだ。賛辞に答えたわけではない。単に笑顔を作る練習。とっさに笑って見せるのには弛まぬトレーニングが必要であり、朝の登校前の時間をその訓練に充てているのだ。にこやかな笑顔こそ女の子の最大の武器であり、十三にもなれば、いつ何時、ステキな出会いがあるか知れず、常に研ぎ澄ませておく必要がある。彼女の外見上の魅力は自然な笑顔だけではない。スレンダーな体つきと、二重まぶたが彩るぱっちりとした瞳、つんと尖った勝気そうなあご先といったところが挙げられる。頭の下のほうで二つの房にまとめられてある髪型も忘れてはならない。
「カレシができたら、すぐにママに教えんのよ」
少女の肩に両手を乗せていたずらっぽく注意したのは彼女の母だった。三十後半の年であるが、年よりはかなり若く見える。年の離れた姉といっても通るくらいである。それは天性のベビーフェイスのせいもあるかもしれないが、それ以上に、後天的な努力によるものであることを、蒼（アオイ）は知っていた。フィットネスとメイクアップである。化粧品会社に勤める彼女には、そういう努力が欠かせないのだそうだ。
「今の所、カレシなんてできそうもないな」
「どーして？　こんなに可愛いんだもの。男の子が放っておかないでしょ」
「そうじゃなくて、周りに大した男がいないってこと」
「クラスに一人はいるでしょ？」
「残念ながら」
「まあとにかく、そーいうことになったら、ママに報告すること。

アオイちゃんにふさわしいかどーか、見定めてあげるからね」
「そんなことよく言えるよね、ママ。パパと別れたんだから、ママには男の人を見る目がないってことじゃないの？」
「うっ……それ言っちゃうの？　で、でもさ、お互い合意の上で別れたんだし、今でもいい友達だし、それにどっちかに新しく好きな人ができて別れたってわけでもないんだから、それにね……」
　矢継ぎ早に弁解を繰り広げるちょっと焦った母の前で、蒼は肩掛けタイプの学校指定の鞄を手に取った。
「もう行くね、遅れるから」
　まだ話し足りなそうな顔の母を置いて、蒼は鞄を肩にかけると玄関を出た。彼女が数歩あるかぬうちに、
「行ってらっしゃーい、アオイちゃん。気をつけてね～」
　後ろからかけられる軽やかな声。その声に手を振って答えられたのは、小学校の低学年までである。年頃の娘の気持ちを斟酌しないあたり、見た目ばかりか精神まで幼いのではなかろーか、と少々慎みのないことだが、そう考えざるを得ない。姉のようなと言えば聞こえは良いが、母が年相応に振舞ってくれないと、そのとばっちりを受けるのは娘なのである。三年前に父と別れ、女手一つで育ててくれている母に対して感謝の気持ちはあるが、それにしたって、蒼の母親代行の負担はばかにできないものがある。ほぼ毎日の、掃除、洗濯、食事の用意、母を毎朝起こすことにいたるまで。今すぐにでもどこぞの嫁になる自信があるほど家事に長けてしまったのであった。弱冠十三で、手荒れ防止用のクリームを塗らなければならない身の上が、哀れである。
――まあ、いいわ。そのうち、気になった男の子をたらしこむ……じゃない、魅了する手段に使えないとも限らないし。
　家庭的な子に惹かれる、かっこよく頭も良くスポーツもでき、ちょっと強引な所のある男子に肉じゃがなりクッキーなり作ってやって恋に落とす機会があるかもしれない。蒼は桂剥きにした大根より薄い可能性を慰めとしておいた。

今朝はあいにくの曇り空だったが、天気に関わらず通学路を歩く彼女の足取りは軽い。この道が導いてくれる場所へ行けるのが愉快でたまらないのである。ちょっと大きな声では言えないことなのだが、蒼は学校が好きなのだった。気の置けない友だち、優しい先輩たち、楽しい先生、気になる男の子。学校が好きな理由があるとしたら、普通そんな所だろうが、彼女にはそういう素直な心性はなかった。いろいろな人を観察できること。それが、彼女が学校を気に入っている理由である。学校には実に様々な人がいて、その人たちが繰り広げる舞台を最前列で観ることができる。それがたまらなく面白いのだった。

観察するとはいえ、学校に入れば単なる観客ではいられない。蒼自体も否応なく役者を務めなければならない。彼女に割り振られたキャラは、クール・キューティといったところである。本当はビューティが良かったが、いかんせんルックスがそれを許さず、キューティで妥協するしかなかった。チャーミングな彼女は、異性の関心を引き、しかし引きすぎもしない。同性からは、その洗練された所作で一目置かれ、おしゃべりなどはするものの、トイレに付き合うがごとき、メールの応答で夜を明かすがごときべたべたした付き合いはしない。愛されはしないが敬される存在、というのが蒼のクラス内での立ち位置であり、この位置からクラスを見渡して、クラスメートの観察をするのが彼女の趣味だった。クラスメートの個性は、多種多様であり、その一人ひとりに、バラエティ番組のディレクターにでもなったかのような感覚でキャラを割り振っていくのは実に楽しい作業だった。

「そんな悪趣味なことして。そーゆーの良くないよ、アオイちゃん」

蒼の耳に蘇る声がある。

これは蒼が所属している文化系部活動――クールな女の子は汗水たらしてスポーツなどしないのである――の先輩でマジメキャラの田辺杏子（アンコ）女史の談だった。

「誰がマジメキャラよ！」

「じゃあ、いじられキャラ？」
「ちゃんと聞きなさい！」
かしこまった振りをする蒼の前に、頭の下の方でまとめられたお団子ヘアとスクエア型の眼鏡で何だかインテリ秘書っぽく見える少女の姿がある。彼女は、中学校の中でも知る人ぞ知る超マイナー部『文化研究部』の栄えある部長であった。自分の心情を吐露することが滅多に無いクール・キューティにも、特別な時はあって、これはその時の回想である。
「キャラとか立ち位置なんてさ、本当のその人じゃないわけでしょ。そんなものに、その人を当てはめちゃったら、本当のその人のことが分からなくなるじゃないの」
誠心で迫る熱い先輩に氷れる気持ちが少し溶けるのを感じた蒼だったが、解かしつくすにはまっすぐさだけでは足りない。
「分かってないですね、先輩。本当の自分なんて無いんですよ。それぞれのときに演じている自分が本当のものなんです」
「そんなことないでしょう。例えば、自分は違う意見を持ってるんだけど、友だちに嫌われたくないからその友だちの意見に無理矢理合わせたりする時、それは本当の自分を偽ったってことになるわけじゃない？」
「違います。そうじゃなくて、それは、友だちに嫌われたくないからその友だちの意見に合わせて自分を偽るというのが本当の自分だったってだけです」
「納得行かないわ」
行かなくても結構である。人それぞれが違う意見を持っていて悪いことはないし、蒼には、自己の利益に直結しない限り、自分の意見に他人を従わせたいという欲求などない。ただ、仮に先輩の言う通りだとしても、それでも、クラス内での立ち位置というのは必要であろう、と思う。本当の自分などと称されて、各人が各人の思うがままに振舞ったら、クラス内は地獄と化すだろう。もちろん、各生徒の『本当』が美しく素晴らしいものであるなら格別であるが。

この点については蒼は悲観主義なのだった。

さて、学校に着き、教室に入ると、何人かの仲の良いクラスメート達が彼女に声をかけてくる。取り巻きとまではいかないが、蒼を中心としたグループを形成するメンバーである。彼女は特別、グループなど必要としていないが、頑なに孤高を守るようなことはできない。そんなことをしてクラスから孤立してしまえば、孤独な人間への、周囲からの憐れみ、嘲笑、無視などによって、他人のキャラ付けなどしている余裕などなくなってしまう。観客である一方で役者であることも忘れてはならず、心穏やかに自由に観客の立場に立つためにはそれなりの役であることが必要なのであった。そのための、クール・キューティなのである。

蒼が席に着くと、友人の一人が早速昨日の恋愛ドラマの話を始めた。彼女は、夢見る乙女、といった所か。ドラマや漫画や他人の恋愛話に現を抜かし、自分の恋はいつも片想い止まり。その片想いにしたって、本当に好きというよりは、周囲がちやほやしている男子に、じゃあわたしも、などという軽いノリ。夢が覚めて、現実に返ってきたときに、手遅れの年になっていないことを祈るのみである。蒼は、ドラマに出ている人気若手俳優のCDを買ったことを発表し、今度貸すことを約束して、その俳優のファンである彼女を喜ばせた。

ドラマの話が終わると、次の役者が登場した。彼女はおもむろに先日ドラッグストアで買った化粧品の話を始めた。今年、中二になって化粧デビューした彼女は、自分の顔が綺麗になるのが楽しくて仕方ないらしい。自意識過剰女、というラベルを貼るのはちょっと酷だろうか。化粧くらいなら同学年の女子ならほとんどしているからである。ただ、彼女の場合、制服を少し崩して着たり、様々なワンポイントの可愛いアイテムを用意したり、作った猫なで声で話したりして、男女に関係なく自分の魅力をアピールする度合いが非常に強い。蒼はアイメイクの仕方を伝授することを誓って、彼女から感謝の目で見られた。母にメイクの仕方は一通り習っているのである。ただ、肌の健康を考えて中高生のうちは、できる限りメイクし

ないようにとも言われていた。が、なに構うことはない。何しろ指導する分には自分の肌ではない。

化粧の話のあとは、カレシの自慢話が始まった。続いて舞台へ現れた彼女は、恋に恋する少女。カレシと何の話をしたとか、何をもらったとか、次いつデートするとか、他人が聞いても苦痛しか覚えない話を延々と続けて行く。蒼は熱心に耳を傾ける振りをして、彼女を得意にさせておいた。今度カレシの友人を紹介してくれるという余裕まで持たせるほどにである。ただ、その話は丁重に断っておいた。彼女をカノジョにする男の子のその友人であれば、その高も知れるというものである。

決して彼女たちのことは嫌いなわけではないのだが、しばしばその見方に悪意が混ざるのは、これはもう蒼自体の性格のなせるわざだろう。件（くだん）の部長から、コールタールのように真っ黒な心、と評されたその通りなのかもしれない。しかし、それはそれで仕方のない所である。人それぞれ生まれ持ったものというものがあって、それを引き受けて生きていくのが、潔い生き方というものではなかろうか。たまに自分のことを省みて暗いものを発見したときに、そう考えて蒼は自身を鼓舞していた。

「アオイちゃん、それ、わたしにも見せてくれない？」

クラスの中に蒼の立ち位置に敬意を払わない女子が一人だけいる。昼食後にティーン向けのファッション雑誌を読んでいた時に横からかけられる声。どうぞ、と雑誌を渡そうとする蒼に構わず、声の主はその辺にある椅子を寄せてきた。並んで二人で雑誌を覗き込む格好になる。いきなりエルボーゾーン――互いの肘と肘が接触するラブラブゾーン――に踏み込んできた積極的な彼女の名は、加藤都（ミヤコ）。卵形のつるんとした顔とはっきりとした目鼻立ちで、美人や綺麗という形容ができるほどの品格はないものの、なかなか愛嬌のある顔をしている。一目で運動部であることが分かる小麦色の肌とポニーテールにした髪が活発な雰囲気を与えていた。

この子の評価はなかなか難しい所がある。一言で片付けてしまえ

ば、傍若無人。雑誌を一心に読んでいる振りをして、「気安く近づくなオーラ」を出していたはずの蒼のテリトリーにたやすく侵入したことから、雰囲気を察することができない性格の持ち主であることが分かる。が、その所作には無邪気な色があって、彼女の行動は人の心底に苛立ちを残さない。それが愛されるのか、男女問わず友だちが多かった。どうやら、蒼のことも友だちと考えているようで、遠慮なく交流を温めようとしてくる。

苦手な子であった。彼女は、蒼のキャラを全く無視して、自分が付き合いたいように付き合おうとするのである。他人のキャラを考慮しないということは、想像力が欠如しているということを表している。この子はどういう子なんだろう、と探る意識が無いということだからだ。想像力がコミュニケーション能力を構成する重要な要素であることに鑑(かんが)みれば、それが無いのに人から愛されるというのはこれはもう天性の素質としか言いようがない。親に感謝したが良い。

都としばらく歓談したのち、委員会関連の用事を思い出したと言って、机からクリアファイルを取り出すと、蒼は席を立った。

「もし先生に見つかったら、わたしのものだって言ってね」

そう断って、彼女に預けるファッション雑誌。もちろん、校則違反のブツ。

学校からの処罰など歯牙にもかけないその優雅な所作に、感嘆の色を面(おもて)に表した都を置いて、蒼は教室を出た。委員会云々というのは、ゴーイングマイウェイな少女から離れるための方便である。ただ、本日の放課後、委員会が開かれることが予定されているので、全くの嘘とはいえない。

――ああは言ったけど、本当に平気でわたしのせいにしそうなところが怖いわ。

天衣無縫なクラスメートが取るかもしれない行動に対して、一抹の不安を覚えながら、蒼は廊下を歩いた。いくらもしないうちに階段の踊り場へ至る。

ここまでが彼女の把握できる日常。そして、これから先、目指すべき所に、彼女の非日常が広がっている。

第４０話：潜む非日常

階段を下りた校舎の一階は、三年生の領域である。幾つかの教室の横を素通りした蒼（アオイ）の足が、三年五組、という札の下で止まった。背筋に引き締まるものを感じる。蒼は上級生の教室に来ただけで緊張するような可愛げのある少女ではない。事実、所属する部の三年生部長に用事があって彼女の教室まで会いに行ったときは、全く緊張しなかった。上級生の教室自体ではなく、室内にいる人物が問題なのである。その人物の前では蒼は観客ではいられない。観客でいることが彼女の現実であるとすれば、ここは異空間であると言って良い。

「あの、坂木と言いますが、伊田先輩、お願いします」

戸口付近にいた先輩女子の一人に取次ぎを頼み、室内に視線を走らせると、蒼のお目当ての人物の姿が視界に入った。本を読んでいるようだったが、後輩が来ていることを告げられた彼女は顔をこちらに向けると、軽く手招きして見せた。入って来いということらしい。慎み深い様子でしずしずと教室内に歩を進める蒼。

「どうしたの、坂木さん？」

かけられた澄んだ声に蒼はうっとりとした。彼女の前で席についているのは、蒼が所属する保健委員会の委員長、伊田綾（アヤ）だった。

美貌の人である。夜を集めたような黒髪と、雪のような白い面（おもて）が鮮やかなコントラストをなしている。切れ長の瞳には知性の光、すっと引かれた唇は薄紅の上品な輝きがある。一分の隙も無い完全性が、返って満開の花のような、触れたら落ちそうな儚さを感じさせて、しかしそれさえもが魅力であった。

「坂木さん？」

少し強めにかけられた声に、蒼は正気を取り戻した。

――やば、まともに見惚れてた。

「あの、今日の委員会で発表する内容をレポートにまとめて来たん

です。それで、もしご迷惑でなければ、内容を検めていただければ、と思いまして」

内心の動揺を隠し蒼が用件を告げると、わざわざそんなことで、とちょっと驚いた風ながらも、彼女は気持ちよく蒼の頼みを聞き入れてくれた。

「そこ、座って」

指示された通りに、蒼は綾の前の無人の席に座った。席の主はお昼休みを教室以外の場所で楽しんでいるのだろう。

綾の目がプリントに落とされた。眉の辺りで綺麗に切り揃えられた前髪がかすかに揺れた。

Ａ４サイズのプリントには、校内で起こる怪我とその原因の統計、さらには怪我防止の対応策がまとめられていた。

蒼の気持ちは落ち着かない。ここでは、彼女は否がおうにも舞台に上がり、『恐縮する後輩』を演じなければならない。観客になるために、自分のクラスメートにするように綾にもキャラをつけてみようとするのだが、どうにもうまく行かないのだった。むろん、クラスメートほど彼女のことを知らないということはあるだろう。綾と話す機会は委員会の時間くらいしかない。しかし蒼は初対面の人間でも直感から適当なキャラをつけてしまうので、それは本質的な理由とはならない。綾には、蒼のキャラ付けを拒む何かがある。彼女には、どこか存在感が感じられない。すぐ目の前にいるはずなのに、まるでとても遠くにいるような、一人だけ別の時空間を生きているかのようなそんな雰囲気がある。そんなキャラは、蒼の今までの経験上いないのだった。

「よく書けていて、わたしが言うことは何も無いわ、坂木さん」

目を上げた綾からお褒めの言葉を頂いた蒼は、心の底からほっとしている自分を感じていた。これも例にないことである。蒼は特別誰かに褒められたいと思ったことはないのだが、彼女だけは例外なのだった。保健委員会の発表のために資料を作って来たりしたのは、綾の目に留まりたいという気持ちからである。

「今日の委員会は、このレポート一枚あればこと足りるね。他の人の発表を聞く必要はないくらいよ」

続けられたこれ以上ない賛辞に有頂天になった蒼には、舞台を外から眺める気持ちの余裕などなかった。

プリントを返されるともう留まる理由がなくなった蒼としては名残惜しい気持ちはありながらも、失礼します、と席を立つしかなかった。と、そのとき、

「お話中、しっつれい」

というあまり言葉通りのことを思っていそうもない気楽な声がかけられた。その声の主に、蒼はぎゅっと心臓をつかまれたような気がした。綾の横に立っていたのは、彼女に勝るとも劣らない麗人だった。三年五組は美人揃いだというもっぱらの噂であり、そういう噂は男子だけがするものではない。美人は、男子にとってはロマンティックな恋人候補かもしれないが、女子にとっては現実的なライバルなのである。さて、蒼としては、五組の美女の中でも、綾が一番だと思っているのだが、別の意見もあり、その一つが、いま綾の横にいる彼女、平井七海（ナナミ）を挙げていた。しなやかなボディラインに、胸の辺りの膨らみが蒼としてはちょっと羨ましい。ざっくりとしたかなり思い切ったショートカットがボーイッシュな魅力を、アーモンド型の瞳と少し大きめの薄桃色の唇がガーリーな可憐さを与えていた。

「本当に失礼よ、ナナミ」

容赦なく答えた綾の言葉には、しかし本気でたしなめる色はなく、それが二人の仲の良さを物語っていた。

「ノート、サンキュ」

借りていたらしいノートを綾に返すと蒼に微笑みかけてから、七海は背を向けるとそのまますぐに遠ざかった。

気を遣ってくれた先輩女子のあとを何とはなしに目で追っていると、

「坂木さん、ナナミのこと、苦手でしょう」

と綾が微笑していた。心中を読まれた蒼はまともに驚いて、
「どうしてそう思ったんですか？」
訊いてみると、
「だって、顔が引きつってるもの」
と思ってもない答え。まさか顔に出てしまっていたとは迂闊である。反射的に手で自分の顔を確かめてしまった蒼に、
「ウソよ」
とくすくすと顔を俯かせて笑う綾。
「からかわないで下さい、先輩」
頬が紅潮するのを覚える蒼だったが、綾の言うことは当たっていた。いや、正確に言えば、ちょっと違う。苦手といえるほど、七海のことは知らない。何かの機会に、二言三言話したことがあるだけの関係である。当然、あちらとしては、蒼のことを何とも思っていないだろう。それにも関わらず、彼女からは息苦しいほどの圧迫感を感じるのだった。綾と好対照をなすかのような、濃密な存在感が七海にはある。その細身の体から放たれるエネルギーを確かに蒼の皮膚が感じていて、それが心に障るのである。七海もちょっと類例がない少女で、とても形容ができないのだった。
『憧れの先輩に緊張する後輩』の役を堪能した蒼が、綾の前を辞して教室の出口に向かったとき、肩がとんとんと叩かれた。ふと足を止め振り返った蒼の頬に人差し指の感覚。
「ミッション・コンプリート」
蒼の頬に指先を押し付ける任務を完遂した男エージェントは、見知った顔であった。蒼の気持ちにちょっとほっとした色が現れる。彼には『キザなナンパ男』という称号を贈ることによって、観客の立場に立つことができるからだ。
「何するんですか、瀬良先輩？」
「いや、後ろ姿があんまり可愛かったからさ」
とさっぱり意味の分からない言い訳じみたことを言ったのは瀬良太一。蒼がちょっと見上げる格好になる位置でくっきりとしたハン

サムな顔立ちが屈託なく笑っていた。五組は女子で有名だが、男子にも一人、校内人気ランキングのトップを争う少年がいて、彼がそうなのだった。蒼の部に、蒼目当てというわけではないが、よく遊びに来るので、顔なじみになっている。

「そのお茶目さんを発揮する所を間違えると犯罪になりますよ」

冷たい声で言ってやると、

「そう怒るなよ、アオ。綺麗な顔が台無しだぞ。まあ、そのツンデレぶりも嫌いじゃないけどさ」

気楽な声が返って来た。

――デレになったことなんかないでしょーが。

内心反発した蒼だったが、ここは三年生の教室であって、なかなか思う通りを口にすることもできず、表情を笑みの形にして太一と談笑するしかなかった。気のせいだろうか。周囲の視線を集めているような気がする蒼。

――気のせいじゃないな。

闇に光る猫の目のように、何人かの先輩女子の瞳が、太一と親しげに話している小娘に対する嫉妬で輝いているのを蒼は感じた。

全くの誤解にいたたまれなくなって、一礼して帰ろうとしたときに、

「アオ。これやるよ」

太一の軽やかな言葉。蒼の手の平に小さな包みが一つ。

「何ですか、これ？」

「飴（あめ）」

「あめですか？」

「そうだよ」

「はあ、いただきます」

突然のプレゼントの意図に集中してしまって、一瞬生まれた意識の間隙に、太一の秀麗な顔が蒼の顔の横に寄せられ、頬と頬がもう少しで触れ合いそうになるほど近づいて、

「今日の髪型も可愛いな」

耳元で囁かれる声。蒼の胸がどくん、と一つ大きく鳴った。自分だけに聞かせるような秘密めいたやり取りに、心奥に粟立つものを感じる。この瞬間、再び蒼は舞台へと上げられた。今度の役所は、『かっこいい先輩に翻弄される後輩』と言ったところ。蒼は、彼女の観客という立場を破壊した太一を見直した。只のキザ男という評価は改めなければなるまい。

更なる嫉妬と憎悪の目に送られて、教室を出た蒼は、上気した我を取り戻すための一助に、飴の小袋を握り締めた。飴と一緒に、自分が覚えたざわめきを潰そうとしてみる。平べったい形の飴は、ぎゅうと思い切り力を入れると、袋の中で割れたようであった。

心を落ちつけるのに気を取られすぎたようである。前から来る男子生徒と肩が触れて、その拍子にクリアファイルが床に落ちてしまった。

「すみません」

不注意を詫びる蒼の前で、拾い上げられたファイルから丁寧に埃が払われていた。

「坂木か」

「加藤先輩」

ぶつかったのは、部活動の数少ない先輩の一人だった。中背の彼は、特別人目を引く容姿ではないが、短めに揃えた髪と、キレイに剃られた口周り、きちっと着た制服から、こざっぱりとした印象を受ける。

「委員会の仕事で、五組に伺った所です」

クリアファイルを受け取りながらする説明を、興味なさそうな顔で聞く先輩男子。三年生の教室から出て開放的になった蒼は、部活動で口を利く仲であることもあって、

「『犬も歩けば』ですね～。運命の人と出会ったかと思ったじゃないですか」

と気安い言葉を発した。

「何のことだ？」

「ガール・ミーツ・ボーイの定番ですよ。肩と肩がぶつかって、その瞬間恋に落ちるみたいな。先輩にぶつかっても、二つの意味で、その可能性ゼロですからね。先輩、カノジョいるし、わたしは先輩に興味ないしで。全く、ぶつかり損ですよ。わたしの運命の出会い、返してください」

無茶なことを言う少女に、彼はたじろぎもしなかった。

「違うな」

「え？」

「運命の出会いなんか無い。出会いは全て運命だ」

平明な事実を告げるかのような淡白な口調でそう言うと、彼は蒼の反応を待ちもせずに立ち去った。

取り残された蒼の耳に、先輩男子の言葉が心地よい響きをもって繰り返される。

全くもってここは異次元である。他人の言葉を素直に聞くなどというおよそ蒼には全然似つかわしくないことが、簡単に起こる。

廊下の先にあったもと来た階段を昇りながら、蒼は、異世界からの脱出に心身をリラックスさせながらも、後ろ髪を引かれる思いでもあった。世界を俯瞰して評価する側に立つことも楽しかったが、非日常の世界を探険するうちに、自分が評価ができないものの魅力も分かるようになってきていた。そうして、非日常世界に入り浸るうちに、いつしかそちら側に住みたくなったりするのだろうか。

――まさかね。

向こうにはたまに行くからこそ楽しいのである。基本はクール・キューティで良い。そう結論付けた蒼は、しかし気がついていなかった。日常に潜む異世界を覗けるということ自体が、異世界に住むというまさにそのことだということに。

第４１話：クラスに一人は

『クラスに一人』の法則。

ひとクラスに一人は目立つ子がいる、というこの経験則は、良く人口に膾炙（かいしゃ）した法則であり、説明の要を待たないであろう。

倉木宏人（ヒロト）は、四時限目の英語の授業を右から左に聞き流しながら、この法則が彼のいる二年二組でも正常に働いていることをその目で確認していた。

宏人の視線の先に、一人の少女の姿がある。あらぬところを見ている彼とは違って、真面目にノートを取っている彼女の姿を、宏人は眩しげに見つめた。少女の斜め後ろの宏人の席からは、彼女の細い肩と艶のあるセミロングの黒髪、そしてその愛らしい横顔が見えていた。

「倉木、これ、訳してみろ」

よそ見をしている生徒に対する嫌がらせに、宏人は機敏に対応した。だてに一年、中学校生活を送ってきたわけではないのである。授業中のサボり方は心得ている。心得その一、授業の予習をした上でサボるべし。彼は立ち上がると、男性教諭に向かって、聞かれた英文の日本語訳を淀みなく答えた。

「……正解だ」

授業を聞いていないことをやり込めようと思っていたのだろう、当てが外れ残念そうな顔をする教師。

「ふっ、先生、そんなの昼メシ前ですよ」

おどける宏人に、周囲からどっと歓声が上がる。

ちらりと、近くを見ると、下を向いて慎ましやかに笑う綺麗な口元が見えた。宏人の心がふわりと宙に浮く。二瓶瑛子（エイコ）。学校という砂漠を旅する宏人の心のオアシスだった。小鳥のような華奢な外見にしとやかな所作、気立ての良い性格でもって、クラスの男子の人気が集中する女の子である。宏人にしてみると、好きとか、付き合

いたいとか、そういう浮ついた気持ちもないわけではないが、それよりも癒しという意味合いが強い。女の子とはこうでなくては、という理想モデルなのである。容姿も話し方も、笑い方も可憐という一語に尽きた。

――同じ女でも、アレとは全然違うな。

宏人が座りながら心中で瑛子と比較したのは姉である。クラスの女子との比較対象に姉を出すあたり本来ならばシスコンの誹りを免れない所であるが、これには事情がある。なかなか起きない姉を嫌々ながら起こしに行って、寝ぼけ眼の姉に思い切り殴られたのが、今朝のことである。こちらとしては見たくもないのに、しどけない姿をしている少女からの、痴漢、変態という罵声のおまけ付きだった。姉の起床を促すのは、本来ならば母の役割だったのだが、今朝はなぜか忙しいようで宏人に白羽の矢が立ったのだった。親切に起こしにいってやったお返しが鉄拳という理不尽。その記憶の生々しかったところに、視界に映ったのが瑛子であるので、皮肉げに比べてみたくなったというわけである。

全くもって姉はひどい、ひどすぎる。それが宏人の姉に対する偽らざる真情であった。姉がいると言うと、羨ましがるバカな同級生男子がいるが、彼らは何も分かっていない。姉などいても何も良いことはないのである。粗暴で気分屋で弟をパシリくらいにしか思っていない存在。そんなものがいてもし何らか得をすることがあるとすれば、忍耐力がつくことくらいであろう――発狂しなければだが。兄の方がよほど羨ましいし、でなければ一人の方が清々するというものである。

「おい、倉木」

四時限目が終わり、昼食の時間に入って少しした時、横からかけられたクラスメートの声に、

「なに？」

と宏人が答えると、来客があることを告げられる。普段、他の教室から訪問を受けることがない宏人は訝しげに戸口に目をやった。

――げっ！

人影を認めた宏人はすぐさま椅子から立ち上がると、一陣の旋風のように教室の出入り口へと向かうと、

「何しに来たんだよ？」

と鋭い声を投げて、けわしい顔を作った。険しくもなろうというものである。戸口に立っていたのは、誰あろう、先ほど心に描いていた人物、その人だった。

「お姉ちゃんに向かってそういう言い方ないでしょ、ヒロトくん」

にこやかに切り返したのは、宏人の姉の日向（ヒナタ）である。鎖骨の辺りまで伸びたセミロングの黒髪の中で、長い睫毛が縁取る黒の瞳に穏やかな色があった。

――何が、ヒロトくんだよ。気持ちわりい。

普段は呼び捨ての彼女が、くん付けで弟を呼ぶのは、周囲の目を意識してのことである。驚いたことに、彼女を知る人間に彼女のことを聞いてみると、皆一様に、おとなしやかで優しい良い子、という評価をするのである。彼女は限られた親しい友人や家族以外の人間に対してはおそろしく巧妙に自分を偽る術を身につけているのであった。

「何の用だよ、姉貴」

今朝のこともあるし、物見高いクラスメートに見物されていることもあるしで、つっけんどんな調子で再度、用件を訊くと、

「これよ」

と、少女はハンカチに包まれた平たい箱を差し出してきた。

「ヒロトくん、お弁当持ってくの忘れたでしょ。だから、届けに来たのよ」

宏人の顔からさあっと血の気が引いた。しまった、と思ったが、もう遅かった。これが姉自身の用事だとすればつれない態度を取っても、思春期の少年であるということで理を通せるが、姉が弁当を届けに宏人の為にここまで足を運んだということであれば、感謝の言葉をかけこそすれ、冷たい態度をとっていい理由には到底ならな

い。そうして、いわれない侮辱には力で答えるのが姉のやり方だった。

彼女はまだ微笑んでいた。その微笑にぞっとするものを覚えながら弁当を受け取る宏人。そう言えば母が朝忙しそうにしていたのも、ど忘れしていた弁当を慌てて作っていたからであった。あれもこれも弁当のせいである。引いては今日、弁当の日などにしてくれた学校のせいであろう。いや、給食センターか？

意味の無い責任転嫁をする少年の目がせわしげに周囲を探った。

「どうしたの？」

小首を傾げて優しげに聞こえる声を出すわざとらしい姉を無視して、辺りを懸命に探った宏人だったが、

――何でこういう時にいないんだよ、賢兄（にい）は！

と心中で苛立ちをぶちまけるしかなかった。

姉を止めることができるこの世で唯一の抑止力は、姉の幼馴染みであり、宏人も小さいときから兄と慕ってきた少年である。よく姉と一緒に行動しているようなので、もしかしたら、と期待をかけたわけだが、どうやらいないようであった。

「じゃあね、ヒロトくん」

姉は、教室の廊下側の開いた窓から覗く野次馬の同級生達ににこやかに会釈すると、ターンして廊下を遠ざかっていった。

意気消沈して席に戻ったヒロトの周りに何人かの少年少女の集まりができる。

「おい、今の誰だよ？」

「もしかして、倉木くんのカノジョ？」

宏人が、姉貴だよ、とぼそりと言うと、更なる歓声が上がった。

「姉ちゃん？　お前、姉ちゃんなんていたのかよ、ずるいぞ」

「お姉さん、スゴい可愛いね。それに優しそう」

「カレシいんの？　紹介してくれ」

「あの人、三年の倉木先輩でしょ。同じ苗字だけど、まさか倉木くんのお姉さんだったなんて、いいなあ」

人の気も知らないで勝手なことを言い続ける外野を放っておいて、宏人は弁当箱の蓋を開けた。家に帰ったあとの戦闘を予想すると、食欲も失せるというものだが、空腹では戦はできない。食べながら、宏人は頭を回転させた。起こってしまったことは、もうどうにもならない。ならば対応するだけだ。考えられる対策は……などということに思いを巡らせて、時間を無駄にする必要はない。取るべき行動は決まっている。宏人の姉への嫌悪で濁った心の目に、爽やかな風貌の少年が映っている。小さいときから面倒を見てくれた彼ならば、きっと今回も助けてくれるだろう。

――よし、今日の放課後、賢兄の部活まで行って事情を話して、姉貴の怒りを静めてもらおう。

一応の対策が決まり、ほっとした宏人が幾分、安心して弁当を食べ終えると、

「あの……倉木くん」

と、か細い声を聞いた。

「数学の先生が職員室に来てくれって……」

おどおどした口調で目を伏せる少女の催促の声に宏人は立ち上がった。各教科の教師のパシリをするのは、学習委員である宏人と、今彼に声をかけてきた彼女、藤沢志保（シホ）の務めだった。

志保と並んで廊下を歩く宏人は息苦しい雰囲気の中にいた。委員会が一緒であるものの、彼女とはほとんど口を利いたことがない。志保もまた、瑛子とは別の意味で『クラスに一人』だった。マイナスの意味で目立ってしまう子である。あまり話す友だちを持たず、休み時間も一人で本など読んでいるような、独立の気風と言えば聞こえは良いが、クラス内ではしばしば、暗い、というレッテルを貼られてしまう子である。教室内で浮いてしまい、軽く遠ざけられるような子。クラスの輪の中心とまでは言えないが、確実にその中にいる宏人との接点はほとんどなかった。

――あーあ、きまずいよなあ。

沈黙が重い宏人だったが、かと言ってほとんど話したことのない

子に軽快に話しかけることができるほどの社交性があるわけでもなく、職員室までの道のりは遥かに遠かった。

と――

「倉木くん……」

横の少女から小さな声がして、永久に続くはずだった静寂が破れたので、宏人はどきりとした。

遠慮がちな目を向けている志保の方を向いた宏人が、

「なに？」

と訊き返した声はちょっと冷たい響きを帯びてしまった。彼女に悪感情を持っているわけではなく、驚きの照れ隠しであった。が、彼女はそうは取らなかったようだ。

「ご、ごめん……何でもない」

あらぬ誤解を与えてしまったことを恥じるくらいには誠実であることを自負している宏人としては、

「いや、気になるだろ、それ」

と明るい声を出した。笑みも作りたいところであるが、そこまで愛想良くできるほど世慣れたところはない。ためらいがちな志保に、話せよ、ともう一押しすると、

「大したことじゃないんだけど……」

と前置きして、彼女が宏人の姉と同じ部だということを告げてきた。

――本当に大したことじゃないな。

志保には悪いが、姉の話など聞きたくない。とはいえ、話を切り上げてしまえば、またぞろ死のような沈黙に戻ってしまう。宏人は気を取り直した。よくよく考えれば、姉に関してのことであれば、職員室に行くまでのヒマつぶしくらいにちょうどいい話題である。

「藤沢って、テニス部なんだ」

「うん。それで……先輩にはいつもよくしてもらってるんだ」

「姉貴、後輩の面倒なんか見んの？」

「日向先輩は誰にでも優しいよ」

「外面はいいからな、アイツ」
「え？　倉木くんに対しては違うの？」
「全然な。平気でオレのこと殴るし、蹴るし、暴力女ですよ」
「綺麗で素敵なお姉さんにしか見えないけど」
「だからさ、なんだっけ、そういうの。ほら、虎かぶってんだよ」
「……猫、でしょ？」
「同じようなもんだろ。ネコ科だし」
「全然違うよ。虎なんかかぶってたら、恐い本性を隠してることにならないじゃない」
そう言って少し顔を俯かせておかしそうに笑う志保を見て、宏人は意外な思いだった。こうして話している分には、普通の気の良い子にしか思えない。皆からどうして遠ざけられているのか不思議である。その謎を解明する前に職員室についた。室内で数学教師からプリントを受け取り再び廊下に出た所で、宏人の頭に閃くものが一つ。
――これは、もしかしたら……
それは志保に関することではない。宏人にとっての喫緊の問題は姉についてのことなのである。志保と話していたおかげであろう、姉への対処法が一つ頭に浮かんだのだった。ただし、それには志保の協力が必要だった。
「藤沢」
職員室を辞して歩き出そうとしていた少女に、宏人は、頼みがある、と言って頭を下げた。

第４２話：ある聖女の言葉

運命の夕べ。家で姉の帰りを待っていた宏人は気が気ではなかった。今日の不躾に対する姉の返礼を恐れていたのである。それを止める為できる限りのことはしておいた。姉の幼馴染みの少年にも頼んで置いたし、級友に頭も下げた。ただ、それが奏功するかどうかは、いいとこ五分五分といったところであろう。気分屋の姉の気分を操ろうなど、天気を支配しようとするに等しい愚行である。賭けるしかないのだった。

――くそ、弟ってほんとに損だよな。

リビングのソファで時間つぶしに夕方のテレビニュースを見ながら、宏人はつくづくと思った。一年遅く生まれたばかりにこのように媚びへつらわなければならないとは嘆かわしいことである。確かに小さい頃は良く面倒を見てもらった。遊んでもらったりしていたわけだが、それをいつまでも恩に着せられるのはたまったものではない。中二にもなれば、背丈も追い越すくらいであるし、また精神年齢は上であると思っている宏人としては、いつまでも姉の顔色を窺っているのにはやり切れないところがある。

――て言っても、喧嘩するわけにもいかねーし。

姉の暴虐に対して、力で対抗するのはわけないことである。取っ組み合いになれば、小さい頃ならともかく中学生になった現在、男女の力の差から負けるはずもない。しかし、仮にそれで勝ったとして、誰からも称賛されない勝利である。それどころか、自分自身でさえ自分を恥じることであろう。そんなことになるくらいなら、耐える方がまだマシである。このあたりの心情の置き方には、姉と宏人の幼馴染みで隣家に住む賢少年の影響が大きい。同じように姉の勘気を被る立場にある彼にはしかし、落ち着きがあり、姉の不機嫌に対しても泰然と対処している。あの姉と虚心で付き合っている見事な人である。姉と付き合っているということ以外は、見習いたい

ところの多い人だった。
宏人はテレビを消した。玄関のドアががちゃりと開く音に続いて、ただいま、と高い声が聞えてきていた。
リビングに入って来てこちらに向けた姉の顔からは、計画が上手く行ったかどうかは分からなかった。何だか楽しげな顔をしているが、それを良い方に解釈はできない。ぶすっとした不機嫌な顔をしているときに機嫌が良いことは皆無だが、にこにこと楽しげな顔が突如鬼面に変わることはいくらでもあるからだ。今少女の顔に広がる喜色は、内面を表現したものであるのか、それとも内面を隠蔽するものであるのか。
冷や冷やしながら姉の挙措を見守っていた宏人だったが、
「なに見てんの？」
という開口に、希望の灯が心にともった。宏人の昼の無礼に対して怒りの気持ちを持っているとしたら、帰ってくるなりまずその件を宏人に話すはずだからである。もちろん、拳での語りである。それがないということは、ひとまず安心だった。姉にいい所があるとしたら、根に持つ人間ではない、ということだった。時を置き、以前にされたことをあとから思い出して怒りをぶつけにくるということは滅多にないのだった。
――ありがとう、賢兄（にい）。
宏人はとりあえず、兄と慕う幼馴染みに感謝を捧げた。賢と姉はいつも通り今日も二人で一緒に帰って来たはずであり、帰り道に、賢は、放課後宏人が姉の気を落ち着かせてくれるよう頼んでおいたことを誠実に行ってくれたのであろう。
ほっとした顔をしている弟に対して訝しげに眉を寄せている姉に、
「今日の昼のことだけどさ、サンキュ。昼メシ食べられない所だったもんな、助かったよ」
やぶへびかもしれないと思ったが、宏人は、姉の怒りを封じるためのダメ押しをしておくことにした。自分のために動いてくれた人間のことを考えれば、宏人としても、臆せずに前に一歩踏み出した

いという気持ちがある。
「ま、たまにはね」
宏人の気持ちを落ち着ける無関心さでそう言った姉は、冷蔵庫から取り出した一リットルの紙パックに直接口をつけて、豪快に中身のいちご豆乳を飲んだ。
「行儀悪いわよ、日向」
「別にいーでしょ。これ、あたししか飲まないし」
キッチンにいた母の渋面に、何と言うこともないような調子で答えた姉は、紙パックを冷蔵庫に戻すと、
「あ、それよりさ、ヒロト」
と弟に向き直って、話題を変えた。
「シホちゃんって、あんたと同じクラスだったんだ。今日初めて知ったわ」
その言葉で、宏人は志保にも感謝した。名前が出たということは、宏人が頼んだことを志保も行ってくれたということである。昼休みのときに、宏人が志保に頼んだこととは、姉に対して偽の情報を流して欲しいということだった。宏人が姉に対して好意を持っているというウソをである。宏人の姉への嫌悪は実は表面上のもので、照れ屋の弟は奥底では姉を慕っているのだということを信じるように仕向けてもらいたい、ということを依頼したのだった。我ながら情けない仕業だと思わないでもないが、宏人は、姉と正面から向き合う愚かさは小学生のうちにキレイに捨て去っていた。
「オレも今日、藤沢から聞いたよ」
「シホちゃんとは仲良いの？」
「いや、ほとんど話したことない」
「あ、そう」
志保が姉に対してどういう話し方をしたのか、知りたいところであったが、その藪をつつくのはいくら何でも危険すぎた。危うきに近寄らず、席を立ってシャワーでも浴びて来ようかと思った宏人に、
「シホちゃんって、クラスでいじめられたりしてない？」

唐突なことを言い出す姉。
「いじめ？」
剣呑な語に思わず反応した宏人に、姉はうなずいた。
「そう、いじめ」
「何で？」
そんなことを考えたのか訊いてみると、
「部活でもあんまり友だちがいないみたいだから、クラスではどうなのかってね。友だちいないだけならまだしもさ、そういう子ってしばしばいじめの対象になるから、ちょっと心配してんのよ」
と慈愛の言葉。その心優しさのほんの少しでも弟に向けてもらいたいものだ、と思いながらも、宏人は、改めて志保のクラス内での位置を考えてみた。確かに、人気のある子ではない。むしろ、人気はないだろう。しかし、人気がないことをもって、いじめ、と称するのは抵抗のある話である。別に中傷が囁かれるわけでもなし、嫌がらせがなされているわけでもなし、敬遠されているだけだからだ。
そう主張した宏人に対して、はあ、と大仰なため息をついた姉が、
「無知な弟くんに、一つ良いことを教えてあげる」
と、高慢な口調で語り出した。
「愛情の反対って何か分かる？」
「……憎しみだろ？」
「バカ」
「じゃあ、何だよ？」
ちょっとムッとした宏人が聞き返すと、
「愛情の反対はね、無関心よ」
得意げな顔で答える姉。
「愛情と憎しみはね、人に向ける関心がプラス方向かマイナス方向かっていう違いしかないの。どっちも関心を持ってるっていう点では同じものなのよ。人は、憎まれるよりもね、自分の存在に関心を持たれない方が辛いの。もし、クラス内に、ある子に対して無関心な空気があるとしたら、それは立派ないじめなのよ」

いくら姉を毛嫌いしている宏人としても、その言葉に含まれる見識には素直に感心せざるを得なかった。
後ろで聞いていた母も、娘の言葉に感嘆の表情を作っている。
「近頃の学校は侮れない所ね。そんなことまで教えてくれるなんて」
「学校じゃないわよ、お母さん」
「じゃあ、本？」
「違う、友だちよ」
「へえ、大した子ね。その子とはずっとお友だちでいさせてもらいなさいね」
「そのつもりよ」
姉は母から、再度宏人に目を向けると、
「そーいうわけで、ヒロト、あんたがシホちゃんのこと気にかけてあげなさいね」
と命令口調で言った。
「気にかけるって？」
「だーから、話しかけてあげなってことよ。あんたでも、話し相手がいないよりはマシでしょ」
あんまりな言い草であるが、それを無視するとしても、
「いや、話しかけるってさ……挨拶くらいならするし、委員会の仕事のときとかに話したりはするけど、それ以上は無理だろ」
と答えるしかない宏人。
姉の目がキツくなる。
「何で無理なのよ」
「いきなりなれなれしくできないだろ」
「なれなれしくしろ、なんて言ってないでしょ。できる限り機会を捉えて話しかけなさいってことよ」
姉の難題に宏人は閉口した。仮にそんなことをしたら、すぐに志保に対して気がある、という評判が立ってしまう。
「考えすぎよ」
「そりゃ、姉貴には賢兄がいるから、仮に他の男に気軽に話しかけ

ても、そんな噂は立たないだろうけどさ。オレは姉貴とは違うんだから」

「じゃあ、あんたはいじめに加担するってことね」

姉の口調が熱を帯びてきた。確かに、先の姉の論からするとそういう筋になるが、それは極論だろう。

「人聞き悪いこと言うなよ」

「だって、そーでしょーが！　それに、気があるっていう噂が立つですって？　あんたにカノジョがいるんならともかく、そんな噂がなんだってのよ！　心細い思いをしてる女の子一人助ける気にならないんだとしたら、あんたはどうしようもないクズね」

姉の気分の急変にはついていけない所がある。すっかり怒色に染まった彼女の言葉を平然と聞き流したいところであるが、本当にくだらないことをした場合ならともかくとして、何も恥じることをしていない現時点でのクズ呼ばわりには耐え難いものがあった。これ以上の暴言を聞きたくない宏人は、姉の横を素通りして、リビングを出た。

「どこ行くのよ、話は終わってないわよ」

浴室に向かう宏人の後ろから、なおも声をかけてくる姉を無視して、浴室に続く洗面所に入ると、後ろ手にぴしゃりと戸を閉めて鍵をかけた。

「ヒロト、シホちゃんの気持ちを考えな」

弟の気持ちを考えない姉の鋭い声を最後に聞いたあと、宏人は苛立たしい気持ちのままシャワーを浴び始めた。

全く姉は何も分かっていない。クラスというところは個人の自由を許すところではないのである。昨日まで話していなかった子に突然話しかけることによってクラスの秩序を乱せばどうなるか。考えたくもない。それに、やはり姉の言うことは大げさに過ぎるであろう。クラス全員でわざと志保を無視しているというのならばともかく、そんな雰囲気はないし、どちらかというと志保のほうから人を避けているようにも見える。とすれば、現状のほうが志保のためな

のではなかろうか。余計なお節介をして、現状を崩すというのは、彼女のためになるのだろうか。

そこで、宏人は慄然とするものを覚えた。シャワーで体がさっぱりとすると、どうやら心の汚れが見えてきたようである。志保のため、という論法は、多分に自己防衛的な恐怖心が生み出したものではないかという気がしてきたのである。

――もし本当に藤沢が友だちが要るなら……

交際を申し込むわけではない。大した話ではないはずだ。今日、話した感触では志保は悪い子ではなさそうだ。あらぬ噂が流れたとして、だからそれが何だと言うのか。

――いやいやいや、まずいだろ。

宏人は、感情に流されそうになった自分を押し止めた。一時の感情に従って行動するのはたやすいが、二年生はまだ始まったばかりなのである。クラス内で失敗するには早すぎる時期であった。

宏人は、明日とりあえず今日の礼を言って少し世間話をしてみよう、ということで妥協しておいた。そのくらいなら大した問題にはなるまい。仮にそれが問題になるとすれば、それこそ志保に対してクラスが悪感情を持っているということになるわけだ。

苛立ちも収まり少しすっきりとした気分で浴室から出ると、姉の姿はなかった。母によると隣家にお邪魔したという。出来損ないの弟の文句でも幼馴染みに愚痴りに行ったのだろう、と思った宏人は、今度賢に近所の和菓子店の菓子折りでも持っていくことに決めた。

第４３話：新しい朝は毎日おとずれる

明け方に降った雨が大気の塵を落として、朝の通学路には、爽やかな日が溶けていた。怜（レイ）は清新な空気を吸いながら、一人、学校へと歩いていた。あらゆるものに感謝したいような、そんな朝だった。世界が存在すること、自分が存在すること、世界が美しいということを感じられる自分であること、それらに関係する全てのものに対する素直な謝意が怜の心に満ちていた。ありとある全てのものを肯定したいような感覚。こういう気持ちでずっといられたらそれは素晴らしい人生だろう、と思ってみるが、なかなか難しいものがある。

――いや、逆だな。

怜は思い直した。むしろ、一瞬でもそういう気持ちになれることが、十分に素晴らしいことなのだろう。欲を張るものではない。今は、この瞬間の、この幸福感を大切にできれば、それで良い。舗装された道をあるく足はゆっくりとした動きで歩を刻んだ。せかせかと急ぐ気には到底なれない。街路脇の青葉が玉のような露をのせて一層鮮やか。白の片雲がふわふわと誘うように先へと流れる。

鈴音の迎えに行かなくなってから、ここ数日、一人で歩く朝に戻っている。鈴音と一緒に歩くことはもちろん嫌ではなかったが、一人で歩くことにはやはり違った趣があった。彼女とおしゃべりしながら行くのも愉快には違いないが、ひとりだと自分の内なる声に耳を傾けることがより容易にできる。外の世界に自己の心が感応するのを感じるのは楽しい作業だった。

――だからか……

一つ気がついたことがある。環（タマキ）が朝、怜と一緒に登校しないことの理由である。それは、もしかしたら一人の時間を大事にしたいということなのかもしれなかった。一人になれる時間というのは、一日の中でそう多くはない。家では家族、学校では教師や友人、塾があれば講師やライバルに囲まれて、自分と向き合える時間というの

は限られている。登校時というのは、その限られた時間の貴重な一部なのだろう。そうして、自分の時間を大切にできる者は、他人の時間も尊重することができる。環は一緒に登校しないことによって、怜の時間も大切にしてくれているように思えた。

貴重な二十分を堪能した所で、怜は顔見知りの少年を見つけた。彼の時間も尊重した方が良いか少し迷っていたところで、向こうも怜を見つけたようである。近づいてくる笑顔に、

「おはよう、俊（シュン）」

とあいさつすると、少年も挨拶を返し、怜の横に並んだ。さらさらとした黒髪の坊ちゃん刈りの頭が、怜よりも少し下に見えた。背は怜より低く、男子の中では小柄な部類に入る。五十嵐俊。二年生のときに、同じクラスになって、話すようになった少年である。三年になってからはクラスが違うこともあって一度も会っていなかった怜は、最近の具合を尋ねた。

「特に変わったことはないよ。平穏無事さ」

少し高い彼特有の声でそう答えると、同じ問いを怜に返した。

「細かいトラブルはあるが、ま、こっちも同じだよ」

俊は髭とは無縁のつるりとした頬の辺りをもちあげると、

「そう言えば、レイ。この前、校内放送で呼ばれてたみたいだったけど、あれも『細かい』ものに入るの？」

と笑みを作った。怜は、もちろんだ、と心持ち強い声で答えた。

「事情は聞いたんだろ？」

「太一からね」

「じゃあ、細かいものに入れてくれ。いや、むしろ、つまらないものだな」

「太一は大分怒ってたよ」

「あの時は、二年ちょっと付き合ってる友人のいい所がようやく見つけられて、ほっとしたよ」

怜の非情な言葉に俊は、ひどいな、と、しかし責めるようでもなく答えると、そう言えば、と何かに気がついたような顔を作った。

「太一がフラれたこと聞いた、レイ？」
「聞いたよ。多分、オレが一番初めにな」
「ちゃんと聞いてあげたんだろうな？」
「ちゃんと？　太一の話をちゃんと聞いたことなんか今まで一度もない」
　俊の口元から、はあ、とため息が漏れた。
「そのせいだな。フラれた日のその夜に、ボクに電話をかけて来たんだよ。延々二時間も、今までの恋愛遍歴とか、恋愛哲学とか語られてさ。ずっと太一がしゃべりっぱなし。頭がどうにかなりそうだったよ」
「途中で切ればいいだろ、電話」
「そうしたら次の日学校を休むって脅すんだよ」
「休ませてやれよ」
「受験生だからそういうわけにもいかないだろ」
　付き合いの良さは俊の美点の一つだったが、付き合う相手は選んだ方がいいだろうということを怜は忠告しておいた。
「太一はいい加減、七海に告白すればいいんだよ」
　こちらは美点に入るか微妙な所があるが、俊には、物事をあいまいなペンディングの状態にしておかず、白か黒かをはっきりさせようとする傾向がある。
「それは太一にも平井にも言わない方がいいだろうな」
　踏み込んだ発言をする少年に忠告する怜としては、この世には灰色のものもある、という思いもあるが、何より当人同士の問題に関与するようなお節介はすべきでない、という意識もあった。
　俊は分かっていると言いたげに、うんうんと小さく何度か首をうなずかせると、たださ、と断ってから
「太一は七海のことが好きなことは確かだろ」
　と確信ありげに言った。
　太一が七海のことを好きかどうかは怜には分からなかった。もちろん、嫌いではないとは思うが、付き合いたいという意味で好きな

のかという所までは分からない。第一、仮にそうだとしたら、太一の性格上、既に七海に告白していても良いはずである。

「怜はさ、こういう話になると本当に鈍感だよね」

手厳しい言葉であるが、怜に心痛はない。俊が苦笑交じりにした発言であることもあるが、何より太一や七海の恋愛事情にそれほど興味があるわけではないのである。

「一応どっちも一年からの付き合いなんでしょ？　もう少し興味持ってもいいんじゃないかな」

「それで、恋愛アドバイザーになれって？」

「いや、傷心を癒すカウンセラーになって欲しいんだよ。そうすれば、太一はボクに電話をかけてくることもないし」

制服姿の少年少女の数が増えてきたことが学校が近いことを示していた。が、まだ時間はある。教室までの暇を埋めるために、怜は、なぜ太一が七海に告白しないのか、俊の見解を求めた。

「七海が強すぎるんだよ」

短く答えた俊は、怜を試したようだったが、思い通りの結果は得られなかったようだ。

「もう少し詳しく言ってくれ。七海が強いっていうのは？」

「七海は人を必要としてないってこと」

「人を必要としてない？」

「一人きりでどこにでも行けるような子なんだよ」

そこまで言われてようやく、なるほど、と一応うなずいてはみたものの、七海と一度じっくりと相対したことのある怜としては、彼女に、俊が言っている強靭な部分以外のものもあるように感じていた。友人を想いさりげなくそのカレシの値踏みをしに来るなどは、繊細な心性と言えないだろうか。

「俊の言うとおりだとすると、太一に脈は無いな」

というか誰にも脈がないことになるが、それはともかくとしても、

「太一が告白できない理由はそれで分かったとしても、さっき、お前、『太一はさっさと告白すればいい』って言ったよな。それはど

ういう意味で？」
　という話になってしまう。
「決まってるだろ」
　俊は片目をつぶって見せた。彼の少女的な面差しに妙に似合う仕種である。
「すっぱりとフラれてさ、ちゃんと太一のことを見てくれる人を探せばいいってこと」
　太一の精神的なショックにも平気でいられる冷徹なメンタリティの持ち主である怜としては、それもそうだな、と首肯することができた。
　校門への制服の列のあとについた時に、以前俊に聞いてみようと思っていたことを思い出した怜が、
「佐伯のことなんだけど」
　と切り出してから、彼女のマシンガントークとどう付き合っているのかを尋ねた。佐伯澄（スミ）は、俊のカノジョで、ときどき怜も話すことがあるのだが、その一方的にまくし立てる語り方に当惑させられているのだった。カレシである俊ならばその対処法を知っているはずであると期待を込めた怜だったが、俊は首を捻ると、特別な対応はしてないよ、とはっきりと告げたのち、
「ボクがあんまりしゃべらないから、スミちゃんが一生懸命話してくれてるんだよ」
　と見当外れの答えを返した。ことは俊との間だけの問題に留まっていないのである。だからこそ尋ねたのだ。それに得心の行かないことがもう一つ。
「あんまりしゃべらないって、誰と比較してるんだ？　さっき会った時からだって結構しゃべってるだろ」
「それは相手が怜だからだな。ちょっと饒舌（じょうぜつ）になってるんだ。ボクは本来物静かな男だよ」
　澄のトークに辟易（へきえき）している怜としては、是非ともその言葉の銃弾をカレシ以外に向けないようにしてもらいたいところだったが、さ

すがに、
「お前のカノジョをどうにかしてくれ」
と、澄の語りを全く気にかけていない様子の俊に、そこまで言うのはためらわれ、口を閉ざすしかなかった。
校門をくぐり、生徒用玄関で上履きを履いた怜は、俊と別れて教室に入った。
まだ半分くらいしか席の埋まらない教室に視線を巡らすのは怜の新たな習慣となっていた。自分の机に座る前にざっと周囲を見ると、窓際の席に黒髪をサイドポニーにした少女の姿がある。他の女子と談笑している鈴音（スズネ）の姿を確認し終えた怜は、歩を進め、机で鞄を下ろして中身の教科書を出し始めた。その間に一瞬、鈴音と目が合ったが、彼女はすぐに視線を戻し、クラスメートとおしゃべりを続けた。
怜の役割は終わったのだった。鈴音とは、彼女が迎えを断ってからここ数日、一緒に登校していない。下校時も別々に帰っていた。彼女は新しい一歩を踏み出して、そうしてその一歩に付き添うような無粋な真似をしないくらいのわきまえが怜にはあった。意外なことに彼女との別れをどこかで惜しんでいる自分がいるのに怜は気がついていた。ただ、別れを惜しめるような出会いであったこともまた幸運なことであろう。
快い朝だった。今日という新しい一日に何が起こるとして、また起こらないとしても。

第４４話：君子は豹変す

女の子に話しかけるには勇気を必要とする。それが普段あまり言葉を交わさない子に対してであれば尚更である。臆病者ではないという自負がある宏人（ヒロト）だったが、とはいえ勇気に関しては、振り絞る必要のないほどに、溢れるほどの持ち合わせがあるというわけでもない。

「藤沢、おはよう」

と声をかけ、最前列の席の彼女が本から目を上げてこちらを認識してくれたときには、ほっとしたものを覚えた。もしその一言に反応してくれなかったら、二言目をかけるのはかなり気まずくなっただろう。他に誰もいなければ問題無いが、朝の教室には徐々にクラスメートが集まりつつあった。クラスメートの前で、女の子に無視される恥をかかずに済み安堵する宏人に、

「お、おはよう。倉木くん」

藤沢志保（シホ）は、どこかびくびくとした調子で挨拶を返した。八方に跳ねるまとまらないくせ毛の中で、ややつりあがった形の目が伏せられる。その仕種は、宏人に気があって恥ずかしいというのでなければ、コミュニケーションの拒絶のように見えた。昨日の礼を伝える必要のある宏人としては、閉まりつつある志保の心のシャッターを押し上げるために、大胆にも彼女の机のすぐ横に立った。

「それ、なに読んでんの？」

「え？」

「その本だよ」

宏人は、志保の手の中にある文庫本を指差した。ブックカバーがかけられてあるので、タイトルは分からないのである。もちろん、本に興味があるわけではない。会話の口火を切るネタに使っただけである。

「……うつほ物語」

志保がぼそぼそと答えた。
「聞いたことないな。どんなの？」
「源氏物語より前に作られた日本で初めての長編物語なんだけど…
…源氏物語って知ってる？」
「馬鹿にすんな。歴史の授業でも、国語の授業でもやったろ。清少納言っていう平安時代の女が書いた物語だろ？」
得意げな振りをする宏人に、
「……紫式部だよ」
と目を上げて遠慮がちに修正する志保。
「え、そうだっけ？」
「そうだよ」
「でも、どっちだってさあ――」
「一緒じゃないよ。試験で間違えたら大変だから、ちゃんと覚えないと。昨日の猫と虎はともかくとしてもね」
そこまで言うと、言葉が過ぎたことを恥じるように、再び志保は視線を机に落した。
対して、円滑なコミュニケーションのために、言葉を引き出したい宏人としては、
「了解。じゃあ、今覚えとくよ」
軽やかに答えてから、
「でもさ、それじゃ、古文じゃん。よく読む気になるよな」
感心したような口ぶりで続けると、現代語訳もついてるから、と志保は本を見せてくれた。
「国語の成績、良いわけだよな」
手に取った本のページをぺらぺらとめくって中身を確認した宏人は、納得したような声で本を返すと、本題に入った。一つ話題を作ったおかげで幾分気分が解れていた。
「昨日ありがとな、藤沢。おかげで助かったよ」
別の問題も引き起こされはしたが、それは彼女のせいではない。
自分のために骨を折ってくれたことに素直に感謝する宏人に、

「わたし、別に何もしてないよ」
と語尾を細めて謙遜する志保。
「そんなことないって、お前のおかげで死なずに済んだよ」
大げさな礼を再度述べて志保を苦笑させた後、
「でもさ、昨日、どういう風に姉貴に言ってくれたの？」
と宏人は昨夜気になったことを尋ねた。姉に対して宏人が敬意を抱いているという嘘を、どういう形で姉に伝えてくれたのだろうか。姉に敬意を向けるなど、一歩間違えばシスコン弟という烙印を押されてしまいかねない行為ではある。昨日の姉の様子からすると、そういうことは無いと思いつつ、やはり心配の気持ちもある宏人への志保の答えは、
「倉木くんは普段は日向先輩のこと悪く言ってるんだけど、クラスの友達が日向先輩のことで軽口を言ったときに、倉木くんが本気で怒ったことがあるって、そういう風に言っておいたんだけど」
という見事なものだった。心底では姉を慕っているが、思春期ということでそれを表面に出せない少年の心理をよく掴んでいる。
「すげーな、藤沢」
心から感嘆した宏人に、ますます恐縮したような顔をする志保。
話しているうちに緊張がとけてきた宏人は、昨日の依頼の礼に、
「オレでできることがあったら、何でも言ってくれ」
というセリフを心穏やかに言うことができるほどであった。志保は、びっくりしたように首を横に振ると、そんなのないよ、と小さい声で断った。
「いや、でもさ、何かあるだろ。委員会の仕事とか、日直の代行とか、好きな男への取次ぎとか、何かのパシリとかさ」
宏人は畳み掛けた。好意にはきっちりと好意を返したいという生真面目さから何度も、自分が何かできることがないか、と訊いたが、ことごとく志保は、
「大したことしたわけじゃないから」
というつれない答えを返した。宏人はむきになった振りを作って、

「命の恩人なんだから、絶対に何かさせてもらうからな」
と宣言してから、今日の昼休みまでに考えておくように、と念を押した。
「……考えられなかったら？」
「無理矢理、男友達を紹介する」
ええ、と本気で焦った顔をしている志保に、にやりと人の悪い笑みを作った宏人は再度念を押して自分の席に帰った。
――やっぱり普通の子だよな。
というのが、改めて志保と話してみた宏人の感想だった。うつむき加減で小さめの声で話すことの他は特別に話しにくいこともない。コミュニケーションの間口が狭いが、そこを通り抜けさえすれば、普通に会話ができる子である。皆から敬遠され、なぜ友達がいないのか、不思議だった。
志保に話しかけるという一挙に集中しすぎていたために、すっかり意識の枠から外れていたことがある。それを思い出させられたのが、二時限目のことだった。音楽の授業のため移動した音楽室で、リコーダーの練習をしているとき、クラスメートたちの妙なる笛の音の響く中、隣に座っていた少年から声をかけられた。
「藤沢と仲良さそうだな、倉木」
宏人はぞっとしたものを覚えた。これまで話したことのない女子に話しかければ、そういう評価をされても仕方がないということは理解していたはずだった。しかし、それは上っ面の理解に留まっていたようだ。実際に経験したことがない宏人にとっては、肌で感じたものではなかったと言える。昨夜、雄弁に姉に対して語ったはずのクラス内秩序のことを考慮して、適切な行動を取れなかったことは、未熟の一語につきた。
――藤沢と長く話しすぎたか。
と反省した宏人だったが、内心の動揺を見せずに、
「藤沢って話してみると普通にいいヤツだと思うけど」
となんでもない口調で答えた。失敗をくよくよしないのは常にア

グレッシブな姉の影響かもしれない。また、そもそもここで守勢に立つのは不利である。別に仲良くなんかない、という否定の言葉は、仲良さそうに話をしているという事実の前では何の効力も持たない。それを計算した攻撃の一手であった。さて、今の宏人の一言が、クラスの人気者でリーダーシップを取るような少年のそれであれば、その一言によって新たなクラス秩序が築かれ、その秩序の中に志保も組み込まれることになっただろう。志保に対しての見る目が変わって、彼女はメンバーの一員として受け容れられることになる。だが、不運なことに、宏人にはそこまでの影響力はなかった。

――マズい。

うさんくさい目をしているクラスメートから目を逸らしながら、宏人は、今の一言が不用意なものだったことを認めざるを得なかった。今話しかけてきた彼は、クラスのメジャーグループのリーダー的存在である。宏人も一応そのグループの中にいるわけだが、末席を占めているに過ぎない。加えて言えば、今のクラスには宏人の親しい友人はいなかった。一年の時に仲良くなった子たちとは、残念ながら、きれいに別れ別れのクラスになってしまったのである。こういう厳しい状況の中で、今までうまく世渡りをしてきたつもりだったが、宏人には自分の渡っているものが堅固な石橋であるという過信があった。細い綱渡り用のロープであるという認識を持つべきだったのである。

グループリーダーの少年は、それ以上志保のことには言及せずにリコーダーの練習に戻ったが、宏人には彼の内心の声がはっきりと聞き取れていた。

音楽の時間から昼休みまでの間、宏人は悩んだ。メジャーグループのリーダーに目をつけられた以上、ごまかしは効かない。取るべき道は二つに一つである。昼休みになって志保に話しかけることによって、クラスから敬遠されている志保と同類と見なされ、メジャーグループから追放されるか。それともリーダーの無言の警告を受け容れて志保に話しかけるのをやめ体裁を保つか、である。

――どうする？

四時限目も終わり、昨日とは違って今日は給食タイムとなった。食べ終わるまでに進退を決めなければならない。昨夜姉と言い争ったあと、浴室で考えたことが再び胸に去来した。姉とは違って、宏人には一時の感情に溺れない割り切りの良さがあった。ふと感じた一瞬の感情と、平和に過ごせる一年を秤にかけたとき、後者を取れる良識が。また、そもそも、志保本人が一人でいることについてどう感じているのか分からないのに、孤独な少女を助けるヒーロー気取りをする気はなかった。単に一人でいるのが好きな子だったら、宏人はヒーローどころかただのピエロである。もちろんあちらから話しかけてきたときに無視するつもりなどない。それは人の道を外れた行為であり、到底容認されるものではない。しかし、こちらから積極的に話しかけるのはやめた方がよいだろう。この昼休みに話しかけるのも自制しよう、そう思って自分の気持ちにけりをつけたときのことだった。

宏人の目がおかしな光景を捉えていた。給食時の手順としては、給食当番の班が、廊下に用意されたワゴンから、給食の入った深鍋などの容器を教室内に入れ、配膳台になるテーブルから、列を作るクラスメートたちにそれぞれの惣菜を取り分けてやることになっている。当然、宏人もその列に並んだわけだが、奇妙なことに一人の給食当番の子だけが、己の職務を果たしていないのだった。クラスメートの特に男子が、自分たちでお玉を取って、給食当番に任せずに手ずからスープを自分の器に注いでいる。

無論、純粋な可能性としてはいくつかあった。その当番の子がサボっているとか、そのスープは何らかの理由で生徒達が自分で取り分けたいものであるとか。しかし、深鍋の前に所在なげに立っている志保の姿を見たとき、宏人は瞬時に全てを了解した。

――陰険なことをする。

宏人は体がかっと熱くなったような気がした。志保にスープを盛らせず自分たちで手ずから盛るというのは、彼女への直接的な嫌悪

を表していた。器に触ってもらいたくないという悪意が見える。宏人は、一年間の平和的生活のことを考えて、努めて頭を冷やそうと考えたが、いざ自分がステンレスの深鍋の前に立ってその横で目を伏せている少女を認めたとき、自然と腕が動き椀を差し出している自分がいた。

「椎茸、少なめにしてくれ」

差し出された椀に、え、と驚いたような顔を作る志保に対して、

「入れなくてもいいし」

と宏人は続けた。これが、一年の平和を犠牲にしてでも取るべき行動であるのかどうか、それは定かではなかったが、宏人は、どうやら自分が怒りを感じていることに気がついていた。そうしてその怒りを向けられているのが、不当な人間であるとしたら、そういう者たちの中で平和に過ごせることにどのくらいの価値があるのかという疑問も芽生えていた。

クラスの秩序を乱した宏人に、周囲から怪しみと非難の視線が向けられていたが、頭にきている宏人には何らの痛痒もなかった。平然と椀を突き出し続けると、のろのろと志保はそれを受け取って、遠慮がちに椀にスープを注いだ。

「サンキュ。昨日の礼の一つに、オレの分の椎茸を藤沢にやるよ」

ダメ押しの冗談を言った宏人は、自分の席につくと、食前の挨拶を待った。給食時には、五、六人が机を長方形型に合わせて一つの班になる。宏人は、同じ班の子たちの視線をはっきりと感じていたが、無視した。そうして、無恥なクラスメートに更なる怒りを溜めるとともに、これまで無知だった自分自身を責めた。姉が、志保はいじめられているのではないか、と言った指摘どおりだった。今まで、彼女は遠ざけられているだけで悪意を受けているわけではないと思っていた自分は何も見ていなかったことを認めるほかない。百歩譲って、先の行為をいじめと称さないとしても、少なくともクラスメートにすべき振る舞いではない。

宏人は、クラス内秩序から外れることを決意した。アウトローに

なることへの恐怖は、人でありたいという義心が消してくれた。彼は、給食の時間が終わると、給食当番を終え白衣を脱いだ少女のもとへ、声をかけに行くために席を立った。

第４５話：王子様登場

付き合って欲しい、と交際を申し込まれて嫌な気持ちになることは稀だろう。よっぽどきらいな人間からであればまだしも。好意を伝えられるということは自分の価値を認めてくれたということであり心躍るものがある。

「オレと付き合ってくれ、水野」

という告白の言葉を聞いた時、更紗（サラサ）の心も躍った。踊った上についでに飛んだ。これまで一度も告白されたことのなかった彼女の心は、それこそ二回転半ジャンプ（ダブル・アクセル）を決められるほどたかく高く、宙に舞ったのだった。しかし、空中にいたのはほんの一瞬のことである。見事着地に成功して落ち着きを取り戻した彼女の心が再度飛翔することはなかった。

更紗の答えは、ＮＯ、である。それ以外にない。

「オレのこと嫌いなのか、水野？」

嫌いどころか、どちらかと言えば好きな部類に入るだろう。すらっとした長身の上に載る顔の中には、嫌味になる一歩手前で控えめに整えられた眉やつるつるした肌、二重のぱちっとした瞳、形の良い柔らかそうな唇がある。ルックスは申し分ない。ずっと見ていても飽きそうにない魅力的な顔立ち。更紗のいる三年五組はもちろんのこと、三年生全体の中でも人気のある男子だった。学校の昼休み時間、教室内、という些かムードに欠ける設定ではあるが、皆の前で堂々と告白してくれたことは好感が持てる。周囲の女子から受ける嫉妬の視線も心地よい。

しかし、ＮＯ、である。答えは変わらない。

秀麗な彼に対して、告白を受けた彼女には、取り立てて人目を惹くようなものはない。痩せぎすの中背からにょきにょきと伸びたあまり均整の取れていない手足に、天然パーマ気味のうなじまでのセミショート、高校に入ったら描きまくってやろうと思っている細す

ぎる眉、スナック菓子の食べすぎでちょっと荒れてきた頬。そんな所である。貧相である。唯一、瞳には楽しそうな煌きがあって見るべき点があると言えるが、全体に、容貌だけで男子を引き付けるのはなかなか難しいものがある。

「いや、そんなことない、水野は可愛いよ」

信じるに足る強い響きを持つ言葉である。仮に更紗自身が自分の容姿に自信がなかったとしても、好きだと言ってくれる人の目に彼女が可愛く映っているなら何の問題もない。恋には人の目を不自由にする強烈な光があることであるし。告白した彼も、その光に目を灼かれたのかもしれなかった。

それでも、ＮＯ、だった。答えは同じである。

頑なに拒否するその理由。それは――

「わたし、何人目なの、瀬良くん？」

一段高い位置にある秀麗な面に非難の声を投げつけると、彼は、うっ、と言葉を詰まらせて焦った顔を見せた。

「五人目くらいだっけ？」

更紗が言う。この昼休み時間で彼が告白したのは、更紗にだけではなかったのである。それが、お断りの大きな理由だった。

「き、聞いてたの？」

聞くも聞かないも、広くもない教室内で、しかも秘めやかになすでもなく普通の声で告白なぞしていれば、嫌でも聞こえる。クラス内でその所作に注目が集まる男子であれば尚更である。給食が終わったあとから、数回、同一の声で告白がなされ、それに対する、ごめんなさい、の答えが耳に入ってきていたのだった。

「せめて一人目に告白してくれてればさあ」

ＮＯと答えた相手に対する気安さから、そうため息混じりに伝える更紗。次々と断られて何だか自棄になったかのような風情の彼の告白に、ＹＥＳと答えるのを拒否するくらいには、更紗にも女子としてのプライドがある。プライドとともに、交際というのはそういう軽薄なきっかけでなされるものではないだろう、というロマンテ

ィックなところも彼女にはあった。
「どうしても？」
「ごめんなさい」
すがりつくような視線の瀬良少年にきっぱりと更紗が告げると、彼はがっくりと肩を落した。落したが、それは一瞬だけのことで、すぐにその肩をそびやかし教室を出て行った。傷心にいたたまれなくなった、というのではなく、おそらく別のクラスの子に交際を申し込みに行くのだろう、と更紗は推測した。
「そういうことだからさ、杏子（アンコ）。もしかしたら、あんたのとこにも来るかもよ、瀬良くん」
そう注意した更紗の前に、机があって、そこには頭の上の方でまとめられたお団子ヘアの少女が座っている。瀬良少年が五組の教室を出たのち、更紗は三組に来ていた。そもそも三組の友人のところに遊びに行こうと思っていたところで、告白を受けたのである。話そうと思っていた昨日の恋愛ドラマの話より優先できる話題を伝えた更紗に、友人の少女は、ふーん、とあまり関心のない様子で答えた。更紗は訝しげに目を細めた。彼女とは小学校来の友人であって、苦楽を共にしてきた仲である。友人に為された適当この上ない告白にもう少し憤慨してくれてもいいのではなかろうか。
「どうしたの？」
「え、な、何が？」
先ほどからどこか様子がおかしい友人をじっと見つめた更紗は、スクエアタイプの眼鏡越しに落ち着かなげな視線を受けた。
「さっきからなんかなあ」
首を傾げる更紗に、
「どこかおかしなところでもある？」
杏子の瞳に控えめに現れる期待の色。
更紗はためつすがめつ友人を見ていたが、あ、と大仰な声を上げた。
「アンコ……」

「なになに？」
ちょっと身を乗り出してくる杏子に、
「あんたの目、ちょっと充血してるよ」
そう言ってから、見当はずれの答えを与えてしまったことに気づく更紗。友人の顔が暗く陰っているのである。じいっと彼女を見て再び正答を導こうとする更紗だったが、どうやら難問であって手に負えないようであった。
「降参。答え教えてよ」
解説をねだる更紗に、杏子はまともにショックを受けた顔を作ると、そのまま机に突っ伏してしまった。畳んだ両腕に顔を埋める少女のその肩を、
「ちょ、ちょっと、アンコ？」
と大げさなリアクションに返って驚かされた更紗が揺する。杏子は体を揺らして彼女の手を払うようにした。
腕の中からくぐもった声が立ち昇ってくる。
「もうほっといてよ。親友に気づかれないんじゃ終わりだわ。こーなったら、いっそ丸坊主にでもしてきてやる」
思わず、頭を剃った友人の状態を想像してにやりとしてしまった更紗は自分を戒めた。今は笑う場面ではない。何だか甚大な精神的ダメージを受けている友人の今のセリフから何とはなしに彼女の頭を見る。と、そこでようやく気がついたことがある。お団子である。いつも頭の下のほうで作られているのに、今日は上のほうでまとめられていたのだ。迂闊であった。円滑な付き合いのためにクラスメートの髪型や小物には常に気を配っている更紗だったが、気の置けない関係であることにかまけて杏子の髪型の変化に対して注意を怠ってしまった。
「違うのよ、アンコ。ほら、あたし、さっき一応告白を受けたわけで、ちょっと気が動転してたのよ」
だからお団子がいつもより高い位置にあるということに気がつかなかったという言い訳を急いですると、杏子の顔が上がった。その

目にうっすらと涙が浮かんでいる。
「何も泣かなくても」
それほどのことではなかろうとぎょっとした更紗に対して、杏子は涙目に一瞬キッと強い光を溜めたが、すぐにその光を弱くして、
「だってさ、誰も気がついてくれないんだもん。泣きたくもなるでしょう」
哀れを誘う口調で言った。
――今まで誰にも気づかれなかったんだ。
ぷっ、と吹き出しそうになるのをかろうじて押さえた更紗は、
「やっぱりわたしみたいなのが人の目を意識したのがよくなかったんだわ。こんな屈辱を受けるなんて」
と、どんどんと落ち込んでいく杏子に、そんなことないよ、と励ましの声をかけた。ここが友情の押し売り時である。
「いつもよりそっちの方がいいって、可愛いよ」
杏子の水っぽい目が上がる。
「本当？」
ほんとほんと、と大きくうなずいてやる更紗にぼそりとした声。
「……男子受けも？」
「え、男子？」
「部活の後輩の子が言ってたの。髪型を変えたほうが男の子受けするって」
詰まらないことを言ってくれる、と心中でその子に文句を言った更紗は、それでもきょろきょろと辺りを見回した。ずうん、とそのまま床に沈みこみそうなほどふさぎこんだ友人の気持ちを開いて爽やかな風を入れるためには、男子の力を借りるしかなさそうだ。
「岡本くん」
更紗の呼びかけの声に応じて少し離れた場所にいた男子が振り向いた。髪型こそトップ部分を狼のたてがみのように立たせた軽快なものだったが、纏っている雰囲気にはどこか重厚なものがあって、ただのちゃらちゃらした男子ではないように見える。親しいわけで

はないが、いくらか話したことがある男子だった。
「お団子が上にあるバージョンの杏子はどう？　可愛いでしょ？」
更紗の手招きに応じて素直にこちらにやってきてくれた彼に期待を込めて訊く。
振り返った杏子も上目遣いで探るような視線を向けている。
色よい答えを待ち望む二人に、まず返ってきたのは言葉ではなく、重苦しいため息だった。
続けて、
「まったく、お前たち女子の頭の中には、可愛いか、可愛くないかっていう基準しか無いのかよ。全部それか。可愛いかどうかっていうのは問題の一つではあるが、全部じゃないだろ」
唐突に始まる説教。
「同じように、可愛さっていうのは女子の魅力の一つに過ぎないわけだ。その他にも、性格とか頭脳とか能力とか、そういうところにも魅力はある。そっちの魅力も磨くべきだと思わないのか？　その口から出てくるのが、やれアイドルがどうとか、誰と誰が付き合ってるとかいないとか、新しく買ったアイテムがどうとか、そういうくだらないことばっかなのに、外見だけで男が寄ってくると思ったら大間違いだぞ。眉毛を抜く前にだな、他にやるべきことがあるだろ」
更紗はふらふらする頭の中でそれでも、人選を間違えたことだけははっきりと理解できた。言いたいことを言って満足している岡本少年に反論などして時間を無駄にせず、更紗は、辺りを見回した。
無条件で女の子を褒めてくれそうな男子を改めて探そうとする更紗の耳に、周囲から拍手の音が響いてきた。
「よく言ったぞ、岡本！」
「お前の言う通りだ！」
岡本少年の演説が何人かの男子を感動させていたらしい。
「無理に男に『可愛い』って言わせることに断固反対！」
「女子は男子の内心の自由を侵害するな！」

――な、なに、何なの？

余程踏みつけられているのか、自由を求めるデモ隊の気勢は高い。

たじろぐ更紗のもとへ、速やかに治安維持部隊は到着した。

「何言ってんの。男子は女子を褒めてればいーのよ」

「そうよ。そのくらいしか役に立たないくせに」

「三組の男子に人権はない。女子の奴隷として働きな」

声を上げた男子に倍する女子が、自由の志士たちを取り囲む。

一触即発の雰囲気である。

更紗はさっさとこの場から退却を試みることにした。テンションについていけないこともあるが、このレクリエーションは昼休みが終了するまで続くだろう。他クラスの更紗が付き合っても益は無い。

自分の髪型のことがすっかり棚上げされてしまってがっくりきてる友人に少し同情する気持ちはあるが、それは心からのものではない。というのも、杏子は自分では気がつかないようだが、髪を解き眼鏡を取りさえすれば、華麗な女の子へ変身するのである。ひとたびその封印を破れば、その美の力で、このくらいの争いならば瞬時にやめさせることができる。そう教えてやるのはたやすいが、更紗は黙っていた。物語では、封印に手を出して良いことがあった例はない。

良識めいた想念に一抹の嫉妬を隠し、踵を返して教室の戸口についた、そのときのことだった。

「何かスゴいクラスだな」

少年の呆然とした声がすぐ近くから聞こえてきて、全くその通り、と自分が原因の一端であることを無視して相槌を打とうとした更紗。その口が開きかけたままで、ふとその動きを止めた。

更紗より頭半分くらい高い位置に綺麗な容貌があった。眉と耳に少しかかるくらいの短めの黒髪がさらり、優しげな目鼻立ちとすっと引かれた張りのある唇。背筋を伸ばした立ち姿はリラックスしてはいるが過度のゆるみは見えない。

とくん、と更紗の胸で音が一つ鳴って、その響きが体全体に甘や

かにこだました。
「このクラスっていつもこうなの？」
彼に見惚れてしまった更紗は、戸惑いがちな声音でかけられた問いに、すぐには返答ができなかった。
「これは特別だと思います」
と、それだけ答えるのにしばらくの時間が経っていた。
「あの、あなたは？」
更紗は誰何の声をかけた。知らない男子だったということもあるが、彼の細身を包む黒の制服が学校指定の紺のものではなかったからである。
少年は人懐こい笑みを浮かべると、
「オレ、塩崎輝（ヒカル）。来週の月曜日からここに転校してくるんだ」
と、転校生であることを告げてきた。来週まで待ちきれなくなって、今日下見に来たと続けた彼は、
「よろしく」
と手を差し出してきた。更紗がためらいがちに取ったその手は、滑らかで繊細なものだった。自己紹介を返す少女。
「水野更紗です」
「サラサ？　キレイな名前だね」
微笑を添えたその柔らかな響きの言葉に、更紗の頬が火照る。今まで男の子に面と向かってそんなことを言われたことがない。
なおも騒ぎ続ける教室を窺いながら少年は、
「クラスのみんなに紹介してもらうことできるかな？」
と更紗に訊いてきた。更紗は、実は三組の生徒じゃないことを告げて、彼を少し驚かせたあとに、
「今、友達連れてくるから」
と、蚊帳の外で呆然と言い争いを見守っている杏子に視線を向けた。更紗の口元から、ふう、という軽いため息がもれた。どうやら友人に対して、まだ友情を売りつけることができることに気がついたのである。何しろ友情の量には限りが無い。

更紗は、少年に向き直ると、思いついたことを依頼してみた。もちろん断られる可能性はあったが、この人ならやってくれるという妙な確信が更紗にはあった。それは確信などではなく、やってくれるような人であって欲しいという単なる幻想的な願望であるかもしれない。どちらにしても、彼は目をぱちくりさせて変な顔を作ったものの、更紗の願いどおり、快く首を縦に振ってくれた。

深海まで沈み込んでいる友人の耳元で事情を話して、どうにか彼女を戸口まで引っ張ってきたとき、杏子の顔がぱあっと輝いた。

「そのお団子可愛いね」

という軽やかな声がかけられたからである。杏子は無事水面に浮上した。

更紗は、初対面の少年に向かって、手を合わせた。口元に微苦笑をきらめかせてそれに答えてくれる彼を杏子に預けてから、三組の教室を離れると、すぐに室内の喧騒は嘘のように静かになった。

大分静かになった廊下を五組へと歩く更紗は、その胸の中で心臓が激しく鼓動する音が聞こえるような気がした。

第４６話：友人の条件

昼休みの校庭は活気に満ちていた。昼食の腹ごなしに多くの生徒たちがジャージ地の運動服姿で、思い思いの競技に打ち興じている。中には、衣服というのはいくら汚しても夜のうちに衣服の妖精がやってきて綺麗にしてくれるのだ、というファンタジーを信じている生徒がいるようで、学生服姿で暴れている者もいた。その喧騒から離れた所、校庭の片隅にあるベンチに一組の少年と少女が腰を下ろしている。

「今、なんて？」

少年の整えられた眉がひそめられた。つい今しがた少女が発した言葉の意味を理解できなかったのだ。彼女の方はそれほど難しいことを言った覚えはないのであろう、

「聞いてなかったの？」

と目元に責めるような色を出した。

「女の子を紹介してくれって言われれば聞き返しもするだろ。男に飽きて、そっちに目覚めちゃったのか、美優（みゆう）？」

「変な言い方しないでよ、太一（タイチ）。あんたのいる五組の女の子と友だちになりたいだけだって」

少年、瀬良太一は詳しい説明を求めた。告白を立て続けに断られ、傷心を慰めてもらおうと他クラスに向かっていたのが五分前のこと。そこで出あったのが今隣に座っている少女である。三組の原田美優。旧知の仲である。小学校の高学年で同じクラスだったり、一昨年のクラスメートだったり、部活が同じだったりして、仲の良い女子であると言える。どこか強ばった顔をした彼女に、ヒマだったら付き合って、と無理に引っ張って来られ、太一は彼女の隣にいるわけだった。

「説明って言われても、言葉通りだって」

美優は平板な口調で言ったが、そう言われてもよく分からない。

男子を紹介しろということなら話も分かるが、女子を紹介しろと言われても。友だちになりたいなら、女子同士、太一の仲介など飛び越えて勝手に仲良くなれば良さそうなものである。

「そんなこと言ったっていきなりは無理でしょ。友だちになってくださいって、別のクラスなのにおかしいじゃん」

「そのおかしなことを何でしようとしてるんだよ」

「聞きたい？」

美優はいかにも仕方ない風を装って小さく息をついたりなどしていたが、太一には、

――よく言うよ。

と彼女の心情を見透かす目があった。用件だけを一方的に押し付けたいのであれば、廊下で会ったときにその機会はあった。知らない仲でもない。無理にでも太一を五組に引っ張って行けば済む話だ。それをせずにわざわざ校庭にまで連れ出したということは、用件だけではなく、他に話したいことがあるということだ。ロケーションも抜群である。ここなら周囲の喚声で人に話を聞かれる心配もない。

「な、何すんだよ？」

突然、頬に圧迫感を感じた太一。美優の両手が太一の顔を挟むようにしていた。

「あたしの顔よーく見て、太一」

太一は、小学校の頃から飽きるほど見てきた少女の顔を仕方なくもう一度検分した。ウエーブのかかった黒髪が肩を覆っている。くっきりとした輪郭の円らな瞳、大ぶりの朱唇。全体に彫りの深い顔立ちだった。

「どう？」

「何が？」

「女の子が顔を見せて聞くことっていったら、分かるでしょ？」

「いつも通りメイクがキマったような顔して……う」

少女の両手に力が込められて、太一の口がタコのようになる。

「可愛いでしょ？」

人でありたい太一は仕方なくうんうんと首を縦に振った。
「じゃあさ、わたしはあっち側だよね？」
瞳に熱を込める美優の両の手首を太一は取って自分の頬から引き剥がした。『あっち』というのがどこのことを言っているのか訊くと、
「注目される側よ」
美優は簡単に答えたあと、
「この世には、注目される側と注目する側があって、注目される側になれるのは一握り。わたしは、この美貌でその一握りの方のはず。そうでしょ？」
語勢を強めて尋ねた。太一は素直にうなずいた。美優は確かに注目される側である。ただし、それは残念なことに美貌云々ではない。学校のマドンナ的存在として男子から仰ぎ見られているわけでも、クラスのマスコット的存在として愛されているわけでもない。轟いているのは美名ではなく悪名だった。カノジョ持ちの男子としばしばラブラブになってカップルを破壊することから、つけられた二つ名が――
「カップル・ブレイカー」
ぴしいっと、小気味のよい音が青空に響いた。
「何するんだよ？」
頬に平手打ちを受けた太一が抗議の声を上げると、眼差しを下げた美優の口元からぼそりと一言、ムカつく、という声が漏れた。連続攻撃を予想した太一が、顔の前で腕を十字にしてブロックを作ったが、
「ムカつく、ムカつく、ムカつくのよっ！　何がカップル・ブレイカーよ？　なに、なんなの、ソレ。何のキャラ？　別に人のカレシを横取りする趣味なんかないわ。あっちが勝手に好きになってくんでしょーが。あたしのせいだっての？　ハ、自分に魅力がないのを他人のせいにしないでよ」
一息に怒声を放った美優が暴力の対象に選んだのは座っていたベ

ンチだった。すっと立ち上がった彼女は、哀れなベンチをげしげしと蹴り始めた。このためにここに来たのか、と納得した太一が、彼女が落ち着くのを待って事情を訊くと、おおむね以下のようなことだった。

美優が今付き合っているカレシが前のカノジョとよりを戻したいと言ってきた。もともとあちらから付き合ってくれと告白されたことであるし、そこまで好きなわけでもないので、どうぞご随意に、と美優がしたところ、次の日彼から電話が来た。元カノが許してくれないと言う。そんなこと知ったことではない美優が、それでも最大限親切心を発揮して、がんばって、とエールを送ると、それが気に障ったのかその彼は、元カノと別れる羽目になったのは美優のせいだと電話越しにさんざん詰(なじ)って来たのである。それだけならまだ良かったかもしれないが、続きがある。その彼の元カノが、こうもあっさりと別れるならどうして彼を取ったのか、とこちらは面と向かって言われたのだった。今朝のことである。

「登校中よ、登校中！　大声で喚かれてさあ。まったく、お似合いの二人だわ。自分が告白して二股かけたくせにそれを棚上げする男と、自分に魅力がないのを反省しない女ってね！」

吐き捨てるように言う美優の屈辱も分からないではないが、大した同情ができる話でもない。そもそもカノジョがいる男と付き合うというその行為が間違いの元である。そんなことになれば、当然もめるに決まっているからだ。もめごとが好きなら格別、そうでなければ告白を受けなければいいのである。普段なら感情を露にしている女の子に反論するような愚は決してしない太一だったが、そういう配慮をしなくていい気安さが美優にはあった。

「そんなこと言ったってさあ、かわいそうじゃん。がんばって告白してくれたのに、断るっていうのも。あたし、他に好きな人がいるわけでもなかったし、付き合ってもいいかなってね」

「誰だっけ？」

「二組の田中」

「あんなのと良く付き合う気になるよな」
太一は呆れたように言った。バスケットボール部で活躍している彼は見てくれはそこそこだが中身の底は浅すぎる、というのが太一の評価だった。
「男を見る目が本当に無いよな」
美優は、ふん、と鼻を鳴らすと、ベンチに腰掛けて足を組んだ。愚痴を太一とベンチに吐き出してすっきりした少女を、太一は初めの用件に戻した。昼休みは永遠に続くわけではない。今の話と五組の女子を紹介する話がどうつながるのか尋ねると、美優は、
「あたし考えたんだけどさあ。あたしが告白されるのは無駄に目立つからなのよ――まあ、仕方ないけどね、可愛いから――そしてね、目立つってのは、近くにいる子がぱっとしないからあたしが目を引くってことで、もしそばにいる子が目立つ子だったら、あたしもそんなに注意されなくなるんじゃないかなってね。そこで五組に目をつけたのです。五組は可愛い子が揃ってるから、その子たちと友だちになることで、あんまり目立たなくなるんじゃないかってね」
分かったような分からないような理論を得意げに振り回した。
「つまり、もう告白されたくないってことなのか？」
新理論から導き出される結論が正しいかどうか、太一が確認すると、
「つまらない男子からはね」
と顎をそらす美優。
「今回の件で懲りたのよ。目立つグループの中にいてもなおあたしに告白してくるなら、多少本気だってことでしょ」
「うちのクラスの目立つ子って言うと？　誰が目当てなんだよ？」
「伊田さんに平井さん、佐伯さんとかさ。でもやっぱり川名さんかな」
太一は頬を掻きながら、口笛など吹いてみた。
「え、なんか、マズいの？」
「マズくないといえばウソになる」

美優の腕が振り上げられる。別れ際の女の子にならともかくただ引っ張ったかれたくない太一としては、慌てて、今名前が挙がった女子とは気まずい関係になってることを告げた。

「気まずいって、何で？」

「いやあ……」

ごまかすように笑いながら続けた太一の次の言葉は、美優のあごをあんぐりと落とした。

「実はさ、オレ、ついさっき告白したんだよ。で、見事フラれちゃって。それで、タマキには『しばらく話しかけないで』とか、アヤには『また今度、中学卒業したあとにでも改めて告白して』とか言われるし、ナナミには蹴られるし、佐伯はカレシに訴えに行ったしってことでさ。話しかけられる雰囲気じゃないんだよな」

「あ、あんたはさあ……本当に見境ないよね。しかも、川名さんはカレシいるじゃん」

「まあ、それはさすがにシャレなんだけどさ」

はあ、とため息をつく美優に多少心痛む気持ちはあるが、これも時のめぐり合わせである。すっぱりと諦めてもらうことにして、立ち上がった太一の袖がぐっと取られる。

「どこ行くのよ？」

「帰るんだよ」

「五組じゃなくてもいい」

美優は組んでいた足を直すと立ち上がって、瞳に執念の炎を燃やした。

「じゃあ五組じゃなくてもいいから、あんたが知ってる可愛い子を紹介して」

根負けした太一が、六組のある少女のことを思い浮かべるのに、そうは時間がかからなかった。この頃よく会っているからである。彼女なら、美優の眼鏡にかなうはずだ。それに――

「確か佐伯の友だちみたいだから、その子経由でタマキとは友だちになれるんじゃないか」

というおまけつきでもあった。美優は感激に顔を輝かせた。
校庭を後にして生徒用玄関から校舎に入り、三年六組の前まで来ると、太一は美優を廊下に残し、六組内に足を踏み入れた。きょろきょろと辺りを見回してから、ある女子のグループに近づいていく。小さく起こる歓声を聞き流しながら、グループの中心にいる女の子に声をかけると、彼女はしぶしぶといった調子ながら後ろに従ってくれた。
「悪いな」
「瀬良くんに呼び出されると、あとで面倒なことになるんだけどな」
軽く責めるような声を出す彼女をなだめ、太一は廊下で待っていた美優に紹介した。美優が息を呑む様子が見て取れた。目の前にいる少女の光輝に圧倒されたのだろう。
「じゃあ、あとは女の子同士で」
名前だけ紹介して立ち去ろうとした太一の腕が、がっちりと取られた。美優が必死の形相をしている。無言のメッセージを受け取った太一は、彼と美優の様子を怪訝な顔で見ている少女に、
「スズ、こいつ、オレの友だちなんだけどさ、何か、お前と友だちになりたいんだって。だから、アドレスでも教えてやってくれないか？」
ストレートに用件を伝えた。握られた手首に痛みが走る。少しして、その痛みがさらにひどくなったのは、太一と美優を残して、少女が教室内にふらりと帰ったからだった。
「あんな言い方するから、気持ち悪がられたじゃん」
一瞬で鈴音に心酔したのか、すでに泣きそうな声になっている美優を太一は落ち着かせた。太一の予想通り、すぐに教室から戻ってきた鈴音は、その手に握られていたメモ用紙を美優に差し出した。
「瀬良くんには教えないでね」
ぱあっと顔を明るくした美優が、もちろん、と大きくうなずくのを見ながら、
――ひょっとしたら……

と太一の心に浮かんだことがある。環でなく鈴音を紹介できたことは、美優にとって良いことなのではないかということである。鈴音と環を比較すると、鈴音には温かみを感じるのに対して、環にはどこか冷めたものを感じる。綾にしても七海にしてもそうである。その冷めているところは、男子には魅力的なのだが、女子にとってはそうでもないだろう。対して鈴音には、春の陽のような優しさを感じる。友人になるにしても、薫陶を受けるにしても、鈴音の方が美優には相応しいだろう。

太一は苦笑した。ついそんなことを考えたのは、美優のことを心配している証である。もし美優に対してロマンティックな気持ちがないのだとしたら、それは太一自身が優しくなっていることを表していた。そうして、どうして優しくなったのかと考えたときに思い浮かんだのが、馴染みの男子の顔だったからである。

第47話：アナザー・シスター

「お帰り、お兄ちゃん」

玄関に入って帰宅を告げた怜（レイ）の背筋に寒気が走った。可愛らしい妹の柔らかな声にぞっとしたものを覚えるというのも尋常な話ではないが、しかし、いつものどーでもいいようなぞんざいな調子とは明らかに違う生温かい言い方だったのである。身も震えるというものだ。怜は声の方を見ないようにして、そそくさと玄関を上がって階段へと向かった。

「ちょっと、お兄ちゃんってば、どこ行くの？」

階段下で怜は腕を取られた。ますますもってこれは何かある。考えたくもないが、考えられることの中でもっともありそうなのは、小遣いを貸してくれということだろう。妹は、明日我が身がどうなるか分からない炭鉱夫のごとく、もらった小遣いは一夜で使い果たしてしまうという性癖を持っており、しばしばそのツケを兄に回してくる。もちろん返してくれたことなどない。出世払いという名の踏み倒しを毎回敢行してくるのである。『兄の役割とは耐えることだ』という考え方は怜を随分大人にしてくれたように思う。その点は妹に感謝したいところであるが、感謝の意をお金で表現する、というのはいかがなものか。手元不如意のことでもあるし、

「金はない」

はっきりと言ってやると、

「お金なんか要らない。お兄ちゃんがいてくれればいーよ」

甘えたような声を聞くとともに取られた腕に少女の体温を感じた。ひっついてきたらしいことが分かると、瞬間、怜はこみ上げるものがあった。これが昼食後すぐの教室での出来事であれば、中学校生活に消えない汚点を残したことだろう。怜は己の幸運をしみじみと感じた。天は偉大である。こういう妹を持った不運に釣り合うようにしてくれているわけだ。怜は目を瞑って、ゆっくりと三つ数え、

心を落ち着かせた。要求があるなら聞こう、と立てこもる犯人に向かうネゴシエーターのごとく事務的に言って、目を向けたところに、

「久しぶり、レイ」

いたのは、兄をからかうことしか興味のない小さな怪物、ではなかった。背格好は妹と変わらないが、明らかな別人である。全体がショートカットの中でもみあげの部分だけ少し長くしている髪型に、無邪気そうな色を湛える少し大きめの瞳、ちょっと上を向く小さな鼻、ピンクの弓張り月を二つ合わせたような唇。妹の顔よりは随分と繊細な造りだった。怜は、ほっと息をついた。

「来るのは明日じゃなかったのか、由希（ユキ）？」

「そのつもりだったんだけど、待ちきれなくて来ちゃった。学校終わった後に伯母様に電話したら、今日からでもいいっておっしゃってくださって。それにレイも、美貌の従妹に一刻でも早く会いたいかなって思ってね」

怜が、妹は一人で間に合ってる旨を告げると、少女は大仰なため息をついた。

「つれないなあ。千里の道を急いで来たのにさ」

「都（ミヤコ）と再会を喜び合ってくれ」

「ミヤちゃんとはもうしたよ。だから、レイ、はい」

少女は、そこでようやく怜の腕を放すと、何かを迎えるかのように両手を広げてきた。怜は、彼女を無視すると、階段の一段目を踏んだ。学校から帰ってきたところである。鞄を置いたり、着替えたりする必要がある。

「ちょおっと、レイ！　再会のハグは？」

階下から怒ったような声が聞こえてきたのは、数段昇った時点でのことだった。

従妹の由希は、怜の家の最寄の駅から電車で二時間ほどした所に住んでいる。怜の町と比べると、田舎に属するだろう。そこで彼女は、というか彼女の父母、つまり怜にとって叔父夫婦は、怜の母方の祖父母と同居していた。なので、母が盆や正月に里帰りするとき

それについて行く怜も彼女と友情を育むことができることになる。一歳違いで年が近いこともあって、小さい頃は仲良くやっていけたのだが、夢見る頃が過ぎるともうよろしくない。男はからかうものだという女の子特性を完全に身につけてしまったのである。そもそも女の子は苦手な怜が、苦手女子ワーストワンに妹を挙げるとしたら、その妹と肩と肩を押し合うほどのデッドヒートを繰り広げられるのが彼女なのだった。

「レイ、一緒にお風呂入ろう」

身軽な服装になってリビングに現れた怜に、従妹の軽やかなジャブ。視線が痛い。それを口にした少女ではなく、なぜだか怜に向かって、軽蔑の視線が二組向けられている。一つは母、一つは妹のものだ。もし父が帰っていたら三組になっていたかもしれない。父には姪よりも息子を愛してもらいたいものだが、おそらく無理な話だろう。

「昔は一緒に入ってたじゃん」

口を尖らせる由希の瞳には楽しげな光がある。昔、というのは正確ではなく、幼稚園頃の記憶も定かでないような大昔の話である。怜は努めて平静な口調で、一人で入るように告げると、

「ミヤちゃんの裸は変な目で見られても、わたしのは見られないの？」

重たい右ストレートを受けて、ノックアウト寸前になった。がんがん鳴る頭の中で怜は、現行の日本の法律では妹と縁が切れるのかどうか、あとで調べてみることを決意した。

由希は、残念そうな振りをして、代わりに都を誘って浴室の方へ消えた。

「由希、いつ帰るんだっけ？」

月曜日だと聞いていた気がするが、一応母に確認してみたところ、怜は自分の記憶が確かだったことを告げられただけだった。来週の月曜日は、由希の学校の創立記念日だということで休みになっているそうである。今日はまだ金曜日。とすると、土曜日と日曜日の二

日間は、両手に花……ではなく噴出花火――紙製の筒から火花を噴水のように吹き上げるヤツ――を持たされた状態になるわけである。美しい二日間になるだろう。手に負う火傷を気にしなければだが。

夕方のテレビニュースが七時を告げた頃に父が帰ってきた。日ごろ笑顔を見せない父が由希を見て破顔するのを目にし、一瞬、怜は自分の親不孝に思いを致したが、その必要はなかった。娘に相手にされない父親の寂しさを埋めてやるような妙手を由希が打っていただけで、彼女がやり手だっただけである。家族が揃ったので夕食ということになり、その席で、

「お注ぎします、叔父様」

由希は弾むような声で言うと、ビールを父のコップに注いでやる。なかなか手馴れたような注ぎ方をしている。父が頬を緩めて、こんなにうまいビールは初めてだなどと、らしからぬことを言うと、由希は嬉しそうに笑って見せる。技巧の跡が見えないその笑い方に怜は感心した。同じ年でもこのような業（わざ）は粗雑な都には無理だろう。また、父が学校生活のことなど訊くと、淀みない答えが由希の唇から流れ出す。友だちや部活動、学校で流行っていること、果てはちょっと気になっている男子のことまで、包み隠さない振りでさも楽しそうに話し、時々入れる父の合いの手に熱心にうなずく。父の楽しそうな様子を見ながら怜は父の孤独を思った。実の娘ともそのように話したかろうという同情が心に浮かぶ。

「拓馬くんも来られれば良かったのにね」

従妹を取り返すために、父と由希の会話に割って入る都。どこまでも残酷な娘である。

「二人でお邪魔するのはご迷惑だからって」

「そんな遠慮しなくていいのよ、由希ちゃん」

母が軽くたしなめるような調子で言うと、由希はにこりとして、

「っていう口実でですね、置いてきたんです。こちらに伺ってまで弟の世話するのが面倒くさくて」

と悪びれもせず答えた。まあ、と口元を綻ばせる母。由希の声に

は華やかな色があって、どういう言葉を発しても軽い冗談のように聞こえてしまうという特性がある。

「たまには面倒みてもらう方になろうかなって、ね、お兄ちゃん」

向けられた少女の笑顔に怜は渋面を作った。『お兄ちゃん』という語は怜が最も聞きたくない語だった。なにしろ、この語が発せられる時というのは通常ロクでもないことしか起こらないのである。

「じゃあ、ダーリンって呼んでいい？」

「呼ぶだけなら好きにしてくれ。ただ、オレは答えないけどな」

「照れなくてもいいじゃない。わたしたち婚約してるわけだし」

「フィアンセがいたとは初耳だな。親同士の酒席での戯れか？」

由希は頬に手を当ててショックを受けた振りをすると、

「幼稚園の頃に誓い合ったじゃない。星稀に月明らかな夜、うちの縁側で」

忘れるなんてひどい、と言って隣の都の肩に顔を埋めた。都が険のある目で、ひとでなし、と鋭い声を出して悪ノリすると、母が、

「由希ちゃんがうちに来てくれたら楽できそうね。さっきもお料理の手伝いしてくれたし」

などと輪をかけたことを言う。父まで、うんうん、とうなずく始末。

席を立って自室に引きこもろうかと思った怜が、それを即時実行すべきだったと後悔したのは、ほんの数秒後のことだった。都が由希の頭を撫でながら、

「でも、そのためには強大な障害があるよ」

と意味ありげに声を大きくしたからである。由希の顔が上がる。都のにやにや半笑いを見た怜は舌打ちしたくなった。妹の企みが読めたからである。怜が手を合わせて、ごちそうさまでした、と言い終わる前に、

「お兄ちゃんにはカノジョがいるのです」

妹の朗々とした声が満座を打った。テストで百点取った小学生のような誇らしげな声である。兄を追い詰めるのにそういう声を出す

のだから、彼女にサディスティックな面があることは否めない事実であろう。由希は芝居がかった様子で、都に詰め寄った。がくがくと都の肩を揺らして、どんな人なの、と訊くと、

「お兄ちゃんにはもったいないくらいの綺麗な人。優しそうで品があって、あといい匂いがする」

都が陶然とした顔で答えた。兄のカノジョのことを思い出しているのではなく、兄の恋の進展具合を知る絶好の機が訪れたことにうっとりとしているのであろう、と怜は推測した。いつぞや、父の鶴の一声のおかげで恋の定期報告の義務から免れることができたのだが、どっこい都は諦めていなかったということだ。蛇のようなしつこさ、とは彼女のためにある言葉であろう。

「ひどいよ、レイ。わたしというものがありながら他の人と付き合うなんて……」

唇を噛みながら無念そうな振りをしてこちらを見る由希の瞳にいたずらっぽい色がある。怜は彼女も共犯であることを確信した。都は由希とメールで連絡を取っており、兄にカノジョができたという面白い話を従妹にするであろうことは想像に難くない。とすれば由希は既に怜にカノジョがいるということは知っているはずであり、にも関わらずそれを父と母のいる場で話題に出すとは妹の悪計に加担したとしか思えない。

怜は腹を決めた。狡猾な蛇が一匹ならまだしも二匹もいると、鶴の援軍は期待できない。であれば、自分で事に当たるしかない。

「それで、川名先輩とはどうなってるの、お兄ちゃん?」

「何の問題もないほどうまくいってる。現に明日もデートなんだ」

怜は整然とした答えを与え、四組の好奇の瞳を傲然とはねのけると、あまりにまっすぐな回答に虚を衝かれた様子の妹の隙をついた。すばやく食後の挨拶をして席を立ち、自室へと引き上げる。口にしたことは事実ではなく多少良心は痛んだが、怜はすぐに気を取り直した。正攻法で勝つことはできなかった相手であることだし、また、ついたウソを事実に近づけることで心痛も和らぐことだろう。怜は

おもむろに携帯電話を取り出すと、しばらくしていなかった相手にメールを打ち始めた。

第４８話：旅立ちの宴

目が覚めたら床だった。冷たいフローリングに横になっている自分の体を確認した怜（レイ）は、もぞもぞとベッドへと戻ろうとした。カーテン越しの光で夜が白々と明けているのが分かったが、今日は休日である。思う存分寝ていても誰にも文句は言われないはずだ。ベッドに戻ろうとした怜は、寝ぼけ眼をこすった。自分専用のはずのシングルベッドの上に、何だか別の物体がある。それは、怜よりも小柄な人型をしており、寝息も聞こえないほどすやすやと休んでいた。

「起きろ、由希（ユキ）」

怜は自分を押しのけて床に叩き落としたであろう容疑者に向かって静かに声をかけた。一体いつの間にもぐりこんで来たのか。全く覚えがないということは、怜の名誉は守られているということだ。昨夜は確かに一人で寝たのである。とはいえ、この状況はうまくない。早いところ、彼女を起こして妹の部屋に戻さないと悪名を千載の後に残すことになる。薄明の中で平和な夢を見ている少女の肩を揺すると、彼女はうるさそうに手を払ってきた。あと十分寝かせて、などと寝言混じりに言う。その十分で都が起きて自分の部屋に従妹がいないことを発見するやも知れず、怜はもう少し強く彼女の肩を揺すって声をかけた。

「うーん、うるさいなあ。あと十分でいいって言ってるのに。起きるから、着替え用意してよ、拓馬」

怜は朝から苦行を強いられている小学四年生の従弟に同情した。妹にして慈しむにしても姉にして敬うにしても苦労させられそうな少女は、ぐったりと横たえていた体を強靭な意志の力で無理矢理起こしているようなぎこちない動きでようやく体を起こした。彼女は、あくびをしつつ半眼を怜に向けたあと、周囲の状況を検分した。そのあと、伸ばした手で怜の頬をぺしぺしと軽く叩き始めた。

「気が済んだか？」

理不尽な暴力に耐え切った怜が尋ねると、うん、と由希は首を縦に振った。組んだ両手を上にあげて伸びをすると、

「おはよ、レイ」

と実に清々しい声で言ってきた。

「今、何時？」

問われた怜が携帯を調べてみると六時であった。

「じゃあ、まだいいじゃん」

ぽてんと再び横になりそうになった少女の体を支えると、怜は、ここが誰の部屋か分かっているのか確認を取った。

「レイの部屋でしょ。だから、あなたがいる」

「幼稚園の時に何か約束したことがあったんなら、悪いけど破棄させてくれ。そうして、オレに少しでも好意を持ってくれてるなら、今すぐにここを出てってくれ」

「ミヤちゃんのいびきが凄くてさ、それで眠れなくてこっちに来たのよ、昨日」

そんなことは聞いていなかった。きゃっという小さな叫び声が上がるのを無視して、ぐいと腕を引っ張って怜は彼女を立たせると、部屋の外に追い立てた。

「一夜を共にしちゃったね、レイ」

楽しそうに言う少女の前で、戸が閉められる。怜はついでに鍵をかけた。普段かけるものでもないし、まさか夜中に従妹に侵入されるとは思ってもみなかったので昨夜もかけていなかったのだ。今夜はかけておいた方が良さそうである。今の小競り合いで目が冴えてしまったようなので、怜はベッドに戻るのはやめにした。南側と西側に面した窓のカーテンを開き、朝の光をふんだんに入れる。まだ弱い光だが、室内は十分な明るさとなった。

それから母が朝食の準備を整えるまでの一時間半ほど、怜は学生の本分を果たした。さすがにこんな時間から勉強したことなどなかったが、師とは有り難いものである。できた時間を何に使おうかと思ったときに、どこからともなく、「余った時間は全て勉強に使い

なさい」という声が降ってきたのだった。
朝食を取り終わると、怜は家に一人残された。由希を歓待するために、加藤家は今日はドライブに行ってどこぞで楽しんで来たり、美味しいものを食べたりしてくるのである。
「レイが来られなくて残念だな」
少し顔を俯かせる由希に、怜も同じ気持ちだということを伝えておいた。何と言っても、彼女より一学年上なのである。そのくらいのリップサービスができるほどの如才なさは持ち合わせているつもりだった。しん、と静けさの染み入る家の中で、怜は開放感を味わっていた。一人とは何と素晴らしい状態だろう。妹のからかいの声も、母の注意の声も何も無い。柄にも無く鼻歌でも歌いたくなる気分である。コーヒーメーカーに酸味の強い飲料を入れてもらい、それを楽しみつつリビングのテーブルに教科書の類を広げる。塾の講師からは止められているが、テレビの朝のワイドショーでもつけて、『ながら勉強』などしてみる。
浮かれた時間をしばらく過ごすと、時計は十一時を指していた。そろそろ鈴音の家に行く用意をしなければいけない時刻である。怜はシャワーを浴びると、見苦しくない程度にラフな服装を身につけた。デニムのパンツと、グリーンのアメカジ風Tシャツの上に半そでの黄色のチェックシャツ。いつぞや、太一と遊んだ時に、彼が選んでくれたものだった。目を凝らしてみれば太一にもいい所が結構あるのかもしれない、などと上機嫌で怜は考えた。出だしこそ悪かったものの、今日は良い日になりそうだ。
玄関に鍵をかけて外に出ると、頭上は見渡す限り優しい青だった。心がその色に浸ると、孟夏の清々とした空気が胸に満ちた。アスファルトからゆっくりと立ち昇り始めた熱の上を、怜は静かに歩いた。もうこの道を通るのも最後だと思うと多少なり感慨深いものがある。踏みしめた一歩が次の一歩を産んで、また次の一歩へと続く。その一歩一歩の感触を怜は大事にした。
道の果てに少女が一人。紫のシャーリングワンピースと黒の七分

丈レギンスが彼女にいつもよりガーリーな魅力を与えていた。怜が、スズ、と声をかけると、

「ようこそ」

彼女は微笑して頭を下げ、後ろに控えている家に怜を招いた。

「何か緊張するな」

「全然そんな風に見えないよ。多分、父の方が緊張してると思うから、よろしくね」

先導する少女の髪はいつもとは違って下ろされて肩にかかっていた。

通された広いダイニングで、怜は自己紹介とお招きの礼を述べると、鈴音の母の方からは何度も面識があることもあって温かい笑みと歓迎の言葉を送られたが、父の方からはどうにも機械的でぎこちない笑みと棒読みのような迎えの言葉を受けた。おそらく、妹がカレシを連れてきたとき怜の父もこんな風になるだろうと思うと微笑ましいものがあり、かすかにあった緊張は解けた。

ダイニングテーブルの上に並べられた豪華な昼食を楽しみながら、怜は精一杯、鈴音の父母に愛想よく振舞った。質問にはできるだけはきはきと答え、答えたあとに直接訊かれていないことにも追加情報を与えたりする。遠慮してくれているのだろう、あまり学業のことは聞かれないので、部活動のことを多めに話しておいた。文化研究部がいかに素晴らしい部であるかということを、部長の顔を思い出し彼女になった気になって話してみたりする。また、昨日の由希の様子を真似してみたりした。招かれている方が気を遣うというのもおかしな話だが、いつものテンションで大人との会食に向かうのには無理がある。それでもなお限界があって、会話が止まりそうになると、鈴音がフォローしてくれた。

「加藤くん、これ食べて」

鈴音の勧めに従って、オードブルに手を伸ばすと、

「そのズッキーニのオードブルは鈴音が自分で作ったんですよ」

鈴音の母が娘の発言に重ねて言った。

「やだ、お母さん。言わないでよ。美味しかったらわたしが作ったってこと言って、いまいちだったらお母さんの失敗にしようと思ってたのに」

鈴音は睨む振りを作った。ベーコンとトマトが乗った輪切りにされたズッキーニを食べて、大仰に美味しい旨を伝えると、

「美味しくなくても美味しいって言いそうだよね、加藤くんはさ」

と軽い疑いの声が返ってくる。答えようのないことを言われ戸惑う怜の前で、

「美味しくても美味しいって言ってくれない人よりはいいんじゃない？」

鈴音の母が自分の隣を見ていた。どこの家でも父というのはやり込められるだけの存在なのだろうか、と怜は鈴音の父に同情した。その同情の気持ちが通ったわけでもなかろうが、宴半ばのとき、鈴音の父親は急に怜の視線をとらえると、

「加藤くん、本当にありがとう。鈴音が学校に行けるようになったのは、君のおかげだと聞きました。感謝の言葉もない」

そういって頭を下げた。座がしみじみとした空気を帯びた。怜は素直に感謝の言葉を受けておいた。怜の心情としては、鈴音が学校に行くようになったのは彼女の意志の力だという確信があるのだが、それを論じるような場ではない。

「これからも娘のことをよろしくお願いします」

「おとーさん！　プロポーズに来てもらったわけじゃないんだからさあ」

鈴音は父をたしなめたが、横から母が、

「いいじゃない。お父さんも子離れできるし」

茶目っ気のある声で言う。

「それはお母さんの都合でしょう？」

「だあって、実際、娘と取り合ったら勝てるわけないもの。あなたには早くラブラブな感じになってもらわないと」

「子どもじゃないんだから、いい大人が『だあって』とか『ラブラ

ブ』とか言うのやめてください」
「いーじゃん。お母さんだってまだ若いんだし」
「今年で四十でしょ」
「ノン、ノン。永遠に二十二よ」
「わたし生まれてないじゃん！」
笑声とともに場がからりと晴れる。
会食中、鈴音は終始はしゃいで見せていた。もちろん、招いた客のために気まずい沈黙を作らないためという目的もあるだろうが、それ以上のものもあるのではないだろうか。新しい旅立ちの日にはそれに相応しい態度がある。旅に立てるほど強い己であることを示す必要がある。そうして己に対する強さとは、詰まる所、他者に対する優しさであるのではないかと怜は感じていた。
二時間ほど経っただろうか。リビングで食後のお茶を楽しんだあとに、車を用意しようとした父を鈴音が止めた。怪訝な様子で振り返る父に、
「これからボーリングとカラオケで加藤くんをもてなすっていうことだったけど、それはキャンセルね」
そう鈴音は告げると、座っていたソファから立って姿勢を正しくした。驚く父母に向かって彼女は柔らかな声で言った。
「一つ嘘をついてました、ごめんなさい。加藤くんは、わたしのカレシじゃありません。だから、これ以上お付き合いしてもらう訳にはいきません。加藤くんがお母さんに、『わたしに告白しに来た』って言ったこと。あれは加藤くんの優しさです。その優しさに手を引かれて、わたしはまた学校に行くことができるようになりました。もう手を引かれなくても一人で歩けます。今日は加藤くんへのお礼もありますが、本当はお別れのためにお呼びしたんです」
すっかり怜のことを娘のカレシと認知していたであろう二人は、予想外のことに呆然とした顔を作っていた。
「これまでご心配おかけしました。鈴音はもう大丈夫です」
はっきりとした口調でそう言って父母に頭を下げると、鈴音は近

くのソファに視線を向けた。鈴音の合図を受けて、怜はソファから立ち上がった。招待の礼を短く述べて帰ろうとする怜に、いち早く驚きから覚めた鈴音の母が、玄関先で大きな菓子折りの入った紙袋を渡してくれた。

「ご家族の皆さんで召し上がってね。娘のカレシじゃなくて少し残念ですが、本当にありがとう」

遅れた父からも同様の謝辞を受けて、怜は外に出た。門の影で少し待っていると、忙しない靴音が聞こえてきて、焦った顔をした鈴音が現れた。彼女は、自分を待っていてくれた様子の少年に驚いた目を向けたが、驚きの表情はすぐに微笑に沈められた。

第４９話：また再び会う日があれば

「お待たせしました」
　怜が自分を待っていたことを特に問いもせず歩き出そうとする鈴音。差し出されたハンカチが、彼女の歩みを止めた。鈴音は、怜に向かって小首を傾げて見せたが、念のため指を目元にもっていくと、はっとした顔を作ってハンカチを受け取った。
「今出てくるときにお母さん感極まっちゃったみたいで。貰い泣きね」
　鈴音は湿った瞳を拭うと、ありがと、と言ってハンカチを怜に返した。改めて歩き出した少女の横に、菓子の袋を手に提げて怜が並ぶ。どこに行く気なのか、とは問わなかった。目的地を知っているわけではない。どこに行くつもりでも、今日は従うつもりだった。
「今日は来てくれて本当にありがとうございました」
　鈴音は軽く頭を下げると、
「本当はね」
　と言って、父母が計画していたことを語った。昼食後、怜を伴ってボーリングとカラオケに行き、夜も外でご馳走するということだったらしい。
「そうして、めでたく親公認のカップルが生まれるわけだったのです」
「そうならなかったことを親父さんのために喜んでおくよ」
「わたしのためには悲しんでくれる？」
「スズなら引く手あまただろ。バルコニー下から声をかけてくる不法侵入者を一人ずつ吟味しろよ」
「わたしのロミオを変質者みたく言わないでよね」
　じろりと見る鈴音の視線を受け止めながら、怜はいつもより口が軽い自分を感じていた。まるで別れの重さを振り払おうとでもしているかのような態度に、怜は心中で苦笑した。今日は別れの日であ

るかもしれないが、それは悲しむべき類のものではない。にもかかわらず、多少の感傷を感じるのはなぜだろうか。

隣からくすくすという笑い声が聞こえてきた。

「ごめん。思い出してたの。加藤くんと初めて会ったときのこと……」

「今日は素晴らしい日だな。自分が失笑とともに思い出される男だってことが分かって」

「だってさ、どう考えても可笑しくて。親友のカレシが面識のないわたしに告白してくるんだもん。ちょっと会ってやろうかって気にもなるわ」

歩きながら笑う鈴音の足取りはゆるやかだった。玲もそれに倣い歩をゆるめていた。日は高くどこに向かうにしろ急ぐ必要はない。

鈴音は目元から笑みを消すと、玲の方は見ずにいった。

「でも、あの時に全てが終わったんだな。長かったわ、すっごく」

吹いていた微風が止まって、再び吹き出すまでのしばらくのあいだ、鈴音は口をつぐんでいた。過去に想いを馳せている少女の邪魔にならないよう、玲も口を閉じていた。

「あの時間に意味があったと思う?」

沈黙を打った鈴音の声に力みはなかった。純粋に答えを知りたいというだけの気持ちしかないようだった。ある時間に意味があるかどうか。それはその後の時間が決めることである。今後、どう生きていくかによって、その時の価値というのは変わってくるのではないか、と玲は思う。

「やっぱり加藤くんは厳しいな」

思ったままを口にした玲に、鈴音は、少しだけ口を尖らせたがすぐに口元を和らげて、

「初めて会ったときとおんなじ」

いった。

「スズは随分変わったな」

初めから大人らしいたたずまいはあったが、その姿勢に強ばった

ものがあった。今はそれがない。彼女から自然な柔らかさを感じて、その柔らかさの中に冬の陽だまりのような暖かさを感じる。ほとんど別人と言っても差し支えない。

「それは加藤くんのおかげだな」

鈴音はうるおいのある声で言ったが、怜にはそのような傲慢さはない。人が人を変えることが確かにあるとしても、それは変えられた人の方に意志と素質があってこそのことである。雌伏の八ヶ月間を破るきっかけが怜だっただけのことである。

「単なるきっかけじゃないと思うな。深淵に棲む竜は雲雨を待って飛翔する。わたしの雲雨があなただったのよ」

「もうちょっと女の子っぽい比喩にしてみたらどうだ?」

「じゃあ、眠れる森の……」

「やっぱりいい」

王子に例えられそうになった少年は慌てた振りをすると、鈴音は綺麗な白い歯を覗かせて笑った。

どうやらこの遊歩に目的地があることが分かったのは、周囲が見覚えのある風景になったからであった。住宅街である。立ち止まった怜は、先に立ち止まっていた鈴音の顔を正面に見た。彼女の背は怜とほとんど変わらない。鈴音は、今日何度目かの礼を口にして、いい加減怜を呆れさせた。呆れ顔に微苦笑を浮かべた彼女は、

「ねえ、加藤くん」

と言ったきり口を閉ざした。きゅっと引き結ばれた唇が開かれるのに少し時間がかかった。

「今日でさよならだけど、もし……もし再び出会う日があれば、またわたしの手を引いてくれる?」

その言葉をどうとらえてよいか、怜には判断がつきかねた。瞳には、いたずらな色と真剣な色が半ばしている。じっと鈴音を見つめたが彼女は表情を変えなかった。怜はおもむろに口を開いた。相手の意図が読めないなら、誠心でことに当たるのみである。

「もし再び出会う日があれば、今度はオレが頭を撫でてもらうよ」

その言葉の意味するところは、鈴音へのエールと信頼だった。
くっくっという乾いた笑い声が怜の耳を打った。鈴音は手で顔を隠して肩を震わせていた。意図が伝わらなかったのだろうかと疑いを持った怜だったが、それは要らぬ心配だったようである。顔を上げた鈴音の表情は晴れやかなものだった。笑貌を改めた彼女は姿勢を正すと、まっすぐな声を出した。
「さよなら、加藤くん」
怜もしっかりと彼女を見据えた。
「さよなら、スズ」
鈴音は、にこりと微笑んでみせると、先に立って歩き出した。その後に従う怜。鈴音は、一軒の家の前で足を止め、インターホンに姓名を告げた。ちょっとして玄関が開き、一人の少女が現れた。Tシャツにジーンズというラフな格好の彼女は縁石を渡って、門の脇にある通用口を開けた。
鈴音は、門から現れた少女に抱きついた。抱きつかれた彼女の方は、鈴音を抱きしめ返してその頭を慈しむように撫でた。
「おかえり。おかえりなさい、スズちゃん」
「ただいま。ただいま、タマちゃん。ありがとう、待っててくれて。タマちゃんが待っててくれたから、わたし……わたし……」
「わたしが待ってたからなんかじゃないよ。スズちゃん自身の力だよ」
「それを素直に信じることをしないくらいには大人になれたみたい」
しばらく重なり合っていた影が離れて、その一つが怜のガールフレンドになった。
環（タマキ）は、怜の前に立つと、ぺこりと頭を下げた。何度礼を言われる日なのだろう。怜が辟易した顔を見せると環は微笑んだ。
「ありがとう、レイくん」
「オレは何も――」
「『してない』でしょ？」
怜のセリフを奪った環の澄んだ声が響いた。その声音に少し上ず

ったような色が混ざっている。友人の帰還に震えるものがあるのだろう。怜は、待ち人を自ら迎えにいけないもどかしさを味わっていた少女の苦しみを思った。その苦しみが今日終わったのである。良い日だった。

「タマちゃん、わたし帰るね」

環は驚いたように鈴音の方を向くと、

「旧交を温めようと思ってたのに」

少し残念そうな声を出した。

「親孝行の時間が来たんです。それに、タマちゃんにはもういつでも会えるから」

そう答えると鈴音は歩いてきた道を逆に取った。彼女はその場を離れるとき怜を見なかった。既に別れは済ませて、それを引きずらない潔さが少女にはあった。怜は、紫のワンピースの背をなんとはなしに見つめて、少し、ほんの少しだけ惜別の情に浸った。ただ、それはすぐに門出の祝福へと変わった。彼女の行く道に幸いが……などという祝福の言葉が浮かんで、しかし、怜は苦笑してやめた。鈴音なら自分の力で歩いてゆけるに違いない。

「好きになった？」

隣に立って一緒に鈴音を見送っていた環がきわどいことを訊いてきた。環は怜の方を見ていない。怜はどう答えようか迷ったが、どうにも首肯せざるを得ない自分がいるようだった。女の子が苦手な怜にしては珍しいことだったが、別れの感傷を差し引いても、鈴音には好感を感じるのだった。

「タマキの半身だからかな」

環は黒髪をかすかに揺らして首を横に振った。

「半身じゃないわ。もう一人のわたしよ。明るさと強さと優しさを合わせ持ったわたし」

だから、と彼女はいたずらっぽい笑みを瞳に灯して続けた。

「もし勝負したら勝てないな」

「勝負って？」

「勝負は勝負です」
「友だちなんだろ。仲良くしろよ」
「それはレイくん次第です」
分からない顔を作る怜に、環はいつものように微笑してみせた。
中天にある日はますます強く照り付けてきていたが、怜は不思議に暑さを感じなかった。胸に涼風が流れていて爽やかな心地さえする。それが自分のすぐ隣にいる少女の存在によるものだということは、認めざるを得ない事実だった。以前は感じなかったことである。それを感じるようになったということは何を意味しているのか。彼女が変わったのか。あるいは……
「どうかした？」
声をかけられてはっとした。じっと見つめすぎていたようである。怜は、帰ることを告げて、おもむろに帰路を取り出した。友との再会という神聖な日を自分とのおしゃべりなどによって汚す気は怜にはなかった。数歩あるいた所で菓子袋を持っていない方の手が優しく包まれて、振り返ると眼差しを下げた少女が立っていた。
「あの……レイくん」
言い出しにくそうな顔をしているカノジョにはこちらから促すのが礼儀だろう。怜が何事か訊くと、月曜日に一緒に登校してくれるかどうか、という声が恥じらいを含んで上がって来た。怜はきょとんとしたが、もちろん、とうなずいておいた。大仰に喜びの色を作った環は続いて、もう一つお願いがある、と言い出して、
「わたしのこと、これから『タマ』か『タマちゃん』って呼んでくれる？」
と真剣な目を向けてきた。
怜はもちろんそれは断っておいた。

第５０話：さよならの後

これほど心穏やかに過ごせた午後はいつ以来のことだろうか。怜は誰もいない家の中で紅茶なぞ飲みながらしみじみと考えてみたが、残念なことに答えはでなかった。おそらく母のお腹の中にいたときまで遡らなければなるまい。その時は、妹もいなかったし、さすがの母も生まれて来る前の子には小言を言わなかったに違いない。

環と別れ、そのまま帰宅してから三時間が経っている。辺りはだんだんと暗くなってきており、先ほど既にリビングに電気を点けておいた。小腹が空いたので、冷蔵庫をあさり、ラップに包まれた冷や飯と卵、ベーコンをゲットすると、チャーハンを作って食べた。インスタントでできるオニオンスープもつけてみる。粗末な夕飯ではあったが、一人で食べる食事はおそろしく美味だった。成績のことやカノジョとの仲をあれこれと尋問されることもない。シンプルに食物に感謝して食べることができる。

この素晴らしい時があとどのくらい続くのだろうか、と惜しむ気持ちになったとき携帯電話が鳴った。

「お兄ちゃん。あたしだけど」

「悪いが、それじゃ分からないな。今、うちには二人妹がいるんだ。可愛くない方か、それともう一方か？」

「もちろん、もう一方のほうよ」

「なるほど。もっと可愛くない方ってことだな。じゃあ、都（ミヤコ）か」

電話は切れた。もう一度着信メロディが鳴ったのは一瞬後のこと。

「レイ？　由希（ユキ）です」

「愛しい妹よ。どうした？」

「それはこっちのセリフ。本当にレイなの？」

「何を疑ってる？」

「口調が酔っ払ったときのパパそっくり」

「叔父さんのことは尊敬してる」

「飲んでないときの、でしょ。お酒の飲みすぎでママに怒られてるところを見て敬意を持ったんだとしたら、あなたとの付き合いを考えるわ」
「それで？」
「今どこ？　今から伯父様がご馳走してくださるっていうから、レイを拾いたいんだけど」
「必要ない。父さんには、もう夕飯は済ませたから息子のことは気にしないようにと伝えてくれ。一人で夕食を済ませることができる息子を誇りに思うようにとも」
「本当に大丈夫なの？　お夕飯はできるだけ引き伸ばしてみるけど、その間に酔いって醒めるのかな」
「もし無理だったら、親子の間を取りなしてくれ。息子を殴ろうとする父の腕に取りすがり、さめざめと泣く母の肩に手を置いてやってくれ」
「何かくれる？」
「愛を」
ピッと電話の切れる音を聴いた怜は、多少テンションが高くなっている自分を認めた。原因が、家族と離れ一人でいるからだとすると、そう遠くない未来、一人暮らしをするようになったときには人格そのものが変わる可能性がある。
紅茶のお代わりを淹れて、鈴音の母から貰った菓子をお茶請けにした。円形のカステラ菓子で抹茶クリームがサンドされている。片手にした菓子を頬張りながら、リビングの低いテーブルに広げていた英語の問題集に取りかかる。目に留まったのは英作文の問題である。『わたしは東京ディズニーランドに三回行ったことがある』を英語で書け。書けと言われれば書くが一体こんな表現をいつ使うんだ、と怜は首を捻った。友だちに、「ディズニーランドに何回行ったことある？」と訊かれたときか、それとも、「わたし三回も行ったことあるんだよ」と自慢したいときか。どちらも現実的でないように思われる。英語の勉強というのは実生活で使わない表現を覚え

るということなのだろうか。道理で好きになれないはずだった。
実際に使いそうもない文だとしても確実に英文で書けるようになってきている自分に少し満足していると、幸福な時はするすると過ぎ、玄関の扉が開く音が聞こえてきた。壁にかかっている時計を見ると八時を少し過ぎたところである。怜が家族を迎えに出ると、
「良かった。アルコールの臭いは消えてるわ」
近づいてきた由希が鼻をくんくんとさせて言った。
「人聞きの悪いことを言うな。それでなくても、オレの信頼度は高くない」
怜が嫌な顔をすると、玄関を上がって来たもう一人の妹が、
「お母さん、冷蔵庫を調べてビールの類がなくなってないか調べた方がいいよ」
と母に指示を飛ばした。いくら捜査をしても、なくなったのはチャーハンの具材だけである。無駄骨に終わるのみだ。母は真に受けなかったようである。そこは、年の功ということだろう。怜が、父の唯一の楽しみを奪う子かどうかくらいの判断はつくのだ。代わりに、リビングに腰を下ろすと、
「レイ、みんなにお茶淹れて」
とウエイター役を命じてきた。みな緑茶で良いか確認すると、一人だけ紅茶がいいと和を乱す少女の声がした。
「砂糖も入れてね」
都が機嫌悪そうな調子で続けた。彼女はなぜむっつりとした顔をしているのか。先の電話の一件でもあるまい、と思った怜だったが、原因を探る気はなかった。なにしろ、仮に原因が分かったとしても、慰めてやる気など毛頭ない上に、大抵は、
「あーあ、最悪。急に明日部活になるんだもんな。折角、明日も由希ちゃんと遊ぼうと思ってたのにさ。今夜も遅くまで話してようと思ってたのに」
という感じで腹に収めておけない性質だからである。休みだったはずなのに、先ほど突然メールが回って来たそうである。

「お兄ちゃん、砂糖入れすぎ！　甘い！」
苛立たしげな目で勝手なことを言ってくる妹を怜は無視した。臨時雇いのしかも無報酬のウエイターである。文句があるならいつでも解雇してくれて構わない。都は、ふん、と鼻息を荒くすると、仕方なくティーカップに唇をつけて、一口紅茶を啜ってから、
「ごめんね、由希ちゃん」
と、隣に座っている少女にすまなさそうに言った。由希は笑って手を振った。
「部活だったら仕方ないよ。ちょっと残念だけど。代わりにお兄さんを借りてもいい？」
「借りるっていうか、あげてもいいよ。紅茶一つ満足に淹れられないような兄で良ければだけど」
「やったね。わたし、お兄ちゃんが欲しかったんだ」
「わたしはカッコイイお兄ちゃんが欲しかった」
初めて怜は都と兄妹のつながりを感じた。怜も同様のことを考えていたのである。ただ、口に出すのは控えておいた。魔法の十二時は過ぎたのである。再び家の中で最下層の位置に戻らないといけない時が来たのだ。そんなことよりも――
「ということで明日はデートしてね、レイ……って、どこ行く気？」
勉強用具をまとめ、そそくさとリビングから出ようとしていたところを呼び止められた怜。ぎくりとして立ち止まって、
「もう寝ようかと」
撤退理由を説明すると、
「まだ八時半だよ」
と由希。確かに就寝時間には少し早い。では、ということで、怜は受験生特権を利用することにした。受験生特権とは、勉強する、と一言言いさえすれば、大抵のことは許されるというすばらしい権利のことである。
「そういうわけだ。オレの将来のことを考えて、邪魔はしないでくれ」

「何時まで勉強してるの？」
「寝るまでだ」
「明日は付き合ってくれるの？」
「そうだな。今はやりの図書館デートにしよう」
「図書館デート？　なにそれ？」
「カップルで図書館で勉強するんだ」
「それ、デートなの？」
「もちろん。ひとつところに二人でいるんだ。デートでなくて何だ？　安心しろ。二年生の教科書は取ってあるから貸してやるよ」
「こっちではそんなのが流行ってるの？」
「ああ」
「ウソでしょ」
「ああ」
「じゃあ、明日は街を案内してね」
従妹の面倒など、よほど断りたかったが、両親と妹の無言のプレッシャーを受けて断念せざるを得なかった。彼らは今日従妹をもてなしたのである。とすれば明日は怜の番だった。怜は仕方なくうなずいてみせると、廊下に出て階段を昇った。明日の分も今日できるだけ勉強しておかなくてはならない。部屋の電気を点け、机の上にノートを広げた。
鈴音のことが頭に浮かんだのは小一時間ほどしてのことだった。ちょっと疲れたので五分ほど休憩を取ろうとしたとき、ふと今日の一日を振り返ってみたのである。「さよなら」と言った彼女の最後の言葉が耳の奥で響いた。それは、今日までの関係を清算する言葉だった。その響きの中で、彼女と出会ってから今日までに起こったことが鮮やかに蘇るような気がした。その所作を一つ一つ思い返してみると、鈴音はやはり得がたい子であると思う。素直な気持ちで良い子であると思える数少ない女の子だった。
「さよなら、スズ」
室内に静かに響いた言葉は、しかし軽やかに耳に届き、そこに陰

鬱な色はなかった。おそらくはそれが鈴音に対する自分の気持ちなのだろう、と怜は思った。では、もし環だったら……と考えてみて、怜は首を傾げた。彼女と別れる、ということが全く現実味を帯びた想像にならないのである。不思議だった。たった四ヶ月前に付き合い始めただけなのに、ずっと昔から知っている子であるようで、別れるという状態がどういう状態を意味するのかよく分からない気がする。環とも別れる日が来るのであろうか。もちろんそうだろう、と理性の声は言うのだが、それはどうしても心奥には響いてこないのだった。

第５１話：お出かけ日和の薄曇り

ベッドを占拠されることなくゆっくりと休むことができた朝、カーテンを開けてみると、世界は薄暗かった。曇りである。

――もしかしたら……

と希望を持って階下に降りた怜だったが、

「大丈夫だよ。雨は降らないってさ」

もみ上げの部分だけを肩の所まで伸ばした可愛らしいショートカットの少女が、実に可愛らしい笑顔でそう言った。エプロン姿の彼女は、一家の主婦役を務めているらしい。ダイニングテーブルに、いつもの洋風な――朝食の代わりに、雑穀米で握られたもちもちしたおにぎり、玉ねぎとおくらと豚肉の入った甘みのある味噌汁、半熟状になったふわっとした卵焼き、など目にも鮮やかな和風の料理が載っていた。

「ユキちゃんは本当にお料理上手ね」

給仕される側でテーブルに座っている母がご満悦の様子でそう言うと、

「母が、伯母様と違って、何にも作らない人なので、何か食べたかったら自分で作るしかないんです」と由希。

母はうなずいた。

「そうなのよ。あの子はね、昔からそうだったわ。わたしと母さん――あなたにとってはおばあちゃんね――の作るものをもっぱら食べる役だったから。今は娘に食べさせてもらってるわけね。ま、でも、その不精ゆえにお料理ができる男性と結婚したわけだから、良かったのかもしれないけど」

あてつけがましいことを言われた父は咳き込んだが、

「あたしは叔母さんに賛成だな。料理ができる人と結婚すればいいのよ」

従妹と比較される嫌味を言われる前に都は抜かりなく先手を取った。怜は自分の席につきながら、敢えて困難な道を選ぶ妹に心中でエールを送った。そんな男を待つくらいならば、今から料理を始めた方がよほど話が早い気がするが、チャレンジ精神旺盛な彼女に言っても無駄であろう。

「お味はいかが？」

エプロンを外して自分も席についた由希が隣から覗き込んできた。

「あとでレシピを書いておいてくれ。お前に倣うことにするよ。食べたいものは自分で作る」

「美味しいの？　美味しくないの？」

「おいしいです」

「よろしい」

食べ終わるとすぐに外出するのかと思ったら、由希はまず食事の片づけを始めた。手伝う怜に、

「お風呂掃除とお庭の草取り、どっちがいい？」

魅力的な択一を迫る少女。どういうことか尋ねると、

「三宿のご恩返しの一環です。家事をさせていただいて、それが終わってからデートということで」

食器を手早く洗いながら答える由希。怜は急に自分の頭が悪くなったのか、と疑った。もちろん、大して上等な頭でないことは承知であるが、それにしても彼女の恩返しに自分が付き合わなければならないとはどういう理屈なのであろうか。

「どうせ手伝ってくれるんでしょ。わたしが一人で作業をしている。そこに現れるあなた。ぶっきらぼうに手伝うことを申し出る。わたしは可愛らしく遠慮する。でも、あなたはそれを無視して黙々と作業を始める。頬を染めるわたし……っていう感じのやり取りを節約しようと思って」

妄想を話している間も彼女は手を休めず、次々と皿を綺麗にしていく。隣でそれを拭く怜は、他に何をやる気なのか尋ねて、

「トイレ掃除、廊下と階段の床磨き、お布団干し、エアコンのフィ

ルター掃除、リビングの掃除機がけ、玄関の箒がけ」
後悔した。
「大丈夫。二人でやればすぐに終わるわ」
由希は元気付けるようにそう言うと、水を止めて、手をエプロンの端で拭った。そのあと、部活に出ようとしていた都に声をかけると、
「ユキちゃん。あんまり張り切らないでよ。わたしがユキちゃん家に泊まっても、同じことできないから」
渋い声が返って来た。怜は最後の皿を拭きながら密かに妹を応援したが、
「大丈夫よ、ミヤちゃん。妹を助けるために兄がいる。そうでしょ？」
軽やかな声がして、応援は無駄に終わった。あっさりと懐柔された妹が、
「いいことを教えてくれてありがとう、ユキちゃん。兄妹愛って素晴らしいね」
いう。愛というのは双方向のものではないのか、と怜は思ったが、その疑問をぶつけるまえに、
「いってきまーす」
と都は打って変わった晴れやかな声で家を出てしまっていた。
ミッション・スタート。
家事労働を金銭に換算すると結構な額になるということを確か社会の授業時の余談で聞いたような気がするが、なるほど、うなずける話である。怜は汗だくになりながら、これほどの重労働を毎日一人で行っている母に尊敬の念を持った。家は整っているのが普通だと思っていたが、とんでもない。トイレを綺麗にしてくれる妖精はいないし、リビングの埃を払ってくれる聖霊もいない。全て人の手が行っていることである。しかも、この上、二人の可愛くない子どもの面倒も見なければならない労苦ときたら、想像に余りあるものがある。ただもう感謝である。

一通り仕事を終えて、シャワーを浴びると、先にさっぱりしていた由希が台所に立って早めの昼食の準備をしていた。十一時少し前。食事はさっき取ったばかりのような気がしたが、お腹は空いていた。

「すぐできるから、座っててていいよ」

何か手伝おうとした怜がうろうろしていると、今度は追い払われた。父母と一緒にダイニングテーブルについていると、言葉通り間もなく昼食が現れた。長ネギとしらすがトッピングされた和風のパスタである。

「ウチの子になって、毎日お料理してくれないかな、ユキちゃん」

母が舌鼓を打ちながら言った。

「ありがとうございます、伯母様」

「お母様って呼んでもいいのよ」

家事労働の礼だろうか、珍しいこともあるものである。母は息子と息子の嫁候補に小遣いをよこした。

軍資金を得た二人が家を出たのが正午頃のことである。外はうす曇りで歩くのにはちょうどいい気温だった。目覚めたときは雨を期待した怜だったが、家の中でずっと従妹の相手をさせられるよりは外の方が気が紛れて良いかもしれない、と気を取り直した。隣を歩く少女に、どこか行きたいところがあるか、訊くと、

「街を案内してくれればいーよ。レイと二人きりで歩きたいだけだから」

にこにこした顔で答える由希。怜は目を細めた。艶っぽいことを女の子がいう時は大抵ロクでもないことが起こる、という哀れな経験則をここ数ヶ月で習い覚えていたのである。

歩道に揺れる緑は、日が差している時よりも濃く見えて返って鮮やかだった。微風がさわさわと葉ずれの音を奏で、初夏の爽やかな香りを運んでいる。

怜の足は駅前へと向いた。中心部から離れても仕方ない。由希はきょろきょろと辺りを見回しながら、楽しそうにしていた。別段、愉快なものがあるわけでもない。どこにでもありそうな街の風景で

あるが、
「そうは言っても、うちの駅前とは随分違うからさ」
ということらしい。それに、と言葉を足した彼女は、
「隣にあなたがいるから普通の景色も特別に見える」
上目遣いでそんなことを言った。少し彼女から離れた怜に、何で離れるのよ、と責めるように由希は言って、
「レイ、手つなごうよ」
朗らかな声で恐ろしいことを言い出した。そんなことはできないということをはっきりと告げると、
「何でよ？　カノジョに悪いって？」
口を尖らせる由希。
「カノジョはともかく……お前と手をつないでる所を万が一にも見られたくない子がいるんだ」
「カノジョの他にそんな子がいるの？」
「もし見られたら、ほとぼりが冷めるまで一週間くらい学校を休まないといけなくなる」
「じゃあ、仕方ないわね」
やけに物分りがいいことを怪しむ暇もなく、怜は自分の長袖のシャツに包まれた腕に、少女のパーカーの腕がからまってきたのを感じた。
「手をつなぎたくないって言ったの、そっちだからね」
「由希、頼む」
怜の真剣な声に、しぶしぶながら由希は体を離した。
「代わりにあとでハンバーガー奢ってよね」
怜はシェイクもつけることを約束した。
二人の行く手に大型の店舗が現れた。ビデオのレンタルと本屋を兼ねたチェーン店である。休日の本屋。全く気は進まなかったが、連れが本を見ていきたいというので入らないわけにはいかなくなった。今日は彼女が主役であり、怜はしがない付き人に過ぎない。そのうち誰かに付き添われる身分になることもあるのだろうか、と考

えて怜は首を横に振った。どうもありそうにもない。
「レイ、あれ買ってよ」
分厚い専門書のコーナーに連れて行かれた怜は、少女の指差す本に目を瞠った。『初期ギリシア哲学者断片集』。書名のいかめしさもさることながら、価格のほうが問題である。税込み一万二千円。怜は、文庫コーナーから選べ、と言おうと思ったところで、はた、と気がついた。
「ユキ」
「なあに？」
「何で、オレがお前に本を買ってやることになってる？」
「何言ってんの、今さら。男の子はプレゼントする。女の子はそれを受け取る。古来からのしきたりでしょ。本屋にカップルで入ったら、つべこべ言わず、女の子に本を買ってあげること」
そう言うと由希は文庫の棚の方に歩いていった。怜の懐具合は言わずとも正確に理解しているようである。知りたくもない古からの慣例を知ってしまった怜は、本屋を出たらできるだけ余計な店に入らないことに決めた。由希が文庫本を選んでいる間、怜は少し離れたところで新書を検分していた。漢詩についての本などを手にとってみる。付き合ってるカノジョの影響でこの頃読むようになってきたのである。唐の天才詩人、李白の詩を読んで壮大な気分に浸っていると肩を叩かれた。怜は本を元の場所に返し横に目を向けた。
これだから休日は嫌なのである。人ゴミに出かければ必ず知人と会う。両の細い肩に細い三つ編みを載せた少女は、目元に涼やかなものを漂わせていた。おうとつのあるしなやかな体を、パフスリーブになった半そでのTシャツとカットソーのスカート、膝下までのレギンスに包んでいた。
「奇遇だな、佐伯」
仕方なく怜は声をかけた。彼女とは去年同じクラスだっただけで、他に大した付き合いをしているわけでもない。わざわざ声をかけてくることもないのに、などと思っていると、どうやらそれが表情に

現れてしまったらしい。佐伯澄（スミ）は瞳に鋭い色を映した。
「休日に元クラスメートに会ったにしてはあんまり嬉しそうじゃない理由を訊いてもいい、加藤くん？」
「いや、もちろん、嬉しいよ、ホント」
「ふーん。今、ひとり？」
「え……いや。一人……じゃない。佐伯と同じだよ」
「わたしは一人だけど」
――何をやってるんだ、俊は！
怜は、休日にカノジョをほったらかしにしている友人を責めた。
自分のことを棚に上げていることまで気がつく余裕は今の怜にはない。何も悪いことをしているわけではないので、悠然と相手をすれば良いようなものだが、なぜか澄は苦手である。おそらくは昨年のトラウマであろう。彼女の特殊技能であるマシンガントークに撃たれすぎて、まだ傷が癒えていないせいである。
「こんなところで会ったのも何かの縁だから、ちょっと聞いてもらいたい話があるんだけど」
突然に銃口を向けられた怜は必死に抵抗した。
「悪いけど、今一人じゃないんだ」
澄は小首を傾げると、
「それはさっき聞いたわよ。だからよ。休日に加藤くんと一対一でお茶できないでしょ。加藤くんが一緒にいるってことはさ、タマキかスズちゃんか、それとも瀬良くんか西村くんでしょ。一対二だったら問題ないもんね」
分からない顔で言った。どうやら彼女の頭には自分の外聞のことしかないらしく、怜とその連れの迷惑になるということは全く考慮の外にある。こういう身勝手な所も苦手なのである。とはいえ、身勝手ではない女の子というのは見たことがないのだが。
「今日はちょっと忙しくて」
怜は少しはっきりと言ってみることにしたが、
「ねえ、加藤くん。二時間も三時間もかかる話じゃないわ。友だち

が相談したいって言ってるのにそれを無下にするの？　そういう人だったんだ、加藤くん。よくないと思うわ、そーいうの。うん、絶対良くない。良いはずない。世界の誰が許しても、わたしは許さない」

諦めた。

「……相談っていうのは？」

「俊に何かプレゼントしたいと思ってるんだけど、何が良いかなって思って。やっぱりこういうのって男の子に聞いたほうがいいでしょ。自分で選んで、全然つまらないものあげちゃったらやだし」

「俊なら何をプレゼントしても喜ぶさ。佐伯が自分で考えたものならな」

怜が精一杯した努力を澄は意にも介しなかった。

「最終的には自分で考えるからさ、いくつか候補を挙げて欲しいのよ。いいでしょ。さ、タマキか誰か知らないけど、お連れを呼んでよ。ここの隣にあるコーヒーショップで、お茶しながら、あなたたちの意見を……」

「レイ！」

弾んだ声が背を打って、怜は思わず首をすくめた。隣に現れた少女が、

「見てよ、コレ！　ハードカバーは高くて手が出なくて諦めてたんだけど、とうとう文庫になってたのよ。今日寄ってみて本当に良かった。この本にしてもいい？」

文庫にしては厚めの本を怜に見せながらはしゃいだ顔で言った。

怜が、横を向いてぎこちない動きでうなずくと、やった、と喜びの声を上げて由希がひっついてくるのを腕に感じた。

おそるおそる視線を戻した怜の前に、上からねめつけるような軽蔑しきったような目があった。

第５２話：大好きな人へ本を贈ろう

言い訳をしようという気は起こらなかった。それは、言い訳など男らしくない、などという男気からではない。端的に無駄だからである。たとえ、

「こいつはオレの従妹で由希っていうんだぜ。よろぴく」

などということを言ったとしても、澄からすれば確認の取りようのない話であり、信じるかどうかは彼女にかかっている。では、どのくらい彼女が自分に信頼を寄せてくれているか、と考えると、どうにも覚束ないものがある。なにせ澄は昨年のクラスメートに過ぎず、友人のカノジョであるという間接的な知り合いに過ぎない。特別仲が良いわけではない。

さらに、である。言い訳などしたら返ってウソっぽく聞こえる。いい年をした従妹が、大型の書店という公共の場所で抱きついてくるなどという話を誰が信じるだろうか。仮に信じたとしても別の疑惑が生まれることだろう。

人が行きかう足音と軽快に流れる店内ＢＧＭのざわめきの中で、怜たち三人のいる小さな空間だけが痛々しいほどの静けさに包まれていた。佐伯女史の目が怖い。古代中国には目で敵兵を呪殺する業（わざ）があったという話だが、今の澄がその業を習えば、一人で一国を落とすことができるであろう。

さて――

明らかに澄はある種の誤解をして、それに対する説明を怜に求めていたが、怜は口を開かなかった。何か一言でも言えばどうなるか。目に見えた話である。それが引き金となって、マシンガンの掃射が始まる。言葉尻をとらえられて、公衆の面前で散々詰られるのである。擬似修羅場に集まる好奇の視線。エセ三角関係に起こる失笑の渦。澄の性格上、場から逃げれば追いかけられるだろうし、とはいえ真っ向から抵抗する術はなし。進退窮まる、とはこのことである。

この状況を打開するには、
――ユキに賭けるしかない。
　怜はほんの少しだけ横に目を向けた。その合図が隣の少女に届く前に、
「目を逸らしたわね、加藤くん」
　ふ、と唇を笑みの形にした澄は、かっと目を見開いた。
「それは何かやましいことがある証拠。さあ、そのキュートなお嬢さんとどういう関係なのか言いなさい。場合によっては……」
　話し出すきっかけを掴んで、滔滔と続けようとしたところを、
「ねえ、レイ。この人が川名さんなの？」
　はっきりとした声が遮った。話を中断されて軽くムッとした顔をしている澄に、由希はちょこちょこと近づくとじいっと彼女を見てからくるりと怜の方に向き直り、
「すっごい美人じゃん。ウチの学校にはこんなに綺麗な人いないわ。スタイルもいいしさ。どうやってこんな人と付き合えるようになったの？」
　快活な声で言った。その声には作為の曇りは一点もないように聞こえた。心から言葉通りのことを思っているような調子である。ちらり、と澄の顔を見ると、小さな驚きの表情がどこか照れたものに変わるのが見て取れた。怜は作戦を理解した。無邪気な顔を作っている由希に対して、咳払いしてから、
「違うんだ、ユキ。この美人が、オレのカノジョだなんて、そんなことあるわけないだろ。オレの友人のカノジョだよ」
　ある単語を特にゆっくりと強調して発音してから、横目で澄を窺うと、彼女の表情からまた固さが解れたように見えた。由希は、ええ、と疑わしい顔をすると、
「恥ずかしがらなくてもいいじゃない。この人が学校一の美少女なんでしょ。紹介してよ」
　いった。あまりやり過ぎてもわざとらしくなると思った怜は、それ以上の阿諛（あゆ）は控え、澄のことを由希に紹介した。

「初めまして。佐伯さん。わたし、怜の従妹で由希って言います。いつも怜がお世話になってまーす」
予想が外れたショックの影が澄の顔をかすめるのを怜は見逃さなかった。
「面倒を見させられてるんだ。参ったよ」
精一杯明るい声でそう言って、由希の髪をくしゃくしゃと撫でてみたりする。
「そ、そうだったんだ。わたし、てっきり……」
「いや、別に構わない。ちょっと子供っぽいところがあるから誤解を招くんだよ。それよりも、シュンのプレゼントだったよな」
「え？　う、うん。何か案がある？」
「そう言えば、シュンってミステリーが好きだろ。それで、欲しい本があるんだけどハードカバーだから文庫になるまで待つって、言ってたんだよ。そのハードカバーのミステリーとかどうかな。自分のために買うとしたらちょっと高いけど、プレゼントにするには高すぎはしないと思うんだけど」
ちょっと考える様子を見せる澄を、怜はミステリーの棚まで案内して、
「この本だよ」
と言って指差したのち、また学校で、と言って、由希を伴いさっさと出口に向かおうとした。
「レイ、この本、まだお会計してない」
怜は忌々しげに文庫本を由希から取り上げると、レジカウンターに向かっていき、会計を済ませた。文庫にカバーをかけている店員の動きがやけにスローに思えた。丁寧に差し出される文庫本をひったくるようにして受け取ると、由希に手渡したのち、出口の自動ドアに向かった。その間、ミステリの棚に立っているであろう元クラスメートの方は一顧だにしなかった。
本屋を出て少し歩いたところで、虎口を脱したことを確認した怜は、ようやく一息ついた。相変わらず外気は涼しいし、本屋の中は

空調が整っていたはずなのだが、背にじっとりと嫌な汗をかいていた。

「レイがそんなに焦るところ、初めて見たわ」

興味津々といった表情で言う由希に、この頃焦ってることばっかだ、と怜はため息をつきつつ答えた。

「何に対しても飄々(ひょうひょう)としてた、わたしが知ってるレイはどこに行っちゃったの？」

そんな自分がかつていたのかどうか疑わしいが、心乱されることが多くなってきたその原因には心当たりがあった。一人の少女である。彼女と出会ってから坦々とした日常が確かに崩れたような気がする。しかし、崩れた先に新しい現在の日常があって、それも嫌いではないのでどうしようもない所ではある。

「とりあえず、さっきは助かったよ、ユキ」

怜が従妹の機転に感謝すると、由希は、よいよい、と鷹揚に構えてみせたのち、

「次は、あそこ入ろうよ」

と少し離れたところにある背の高いコンプレックスビルを指差した。

怜はくらっとする頭を押さえて静かに尋ねた。

「どうしても入りたいのか？」

「面白くないの？」

「多分この辺の一番のヒマ潰しスポットだ。各階にいろんな店舗が入ってる」

「じゃあ、いいじゃない」

だから良くないのである。そんな所に入ったら誰と出会うか分かったものではない。友人は受験を控えた身であるので家にこもっているものと信じたいところであるが、当の怜自身が出歩いているのだからそんな信頼を寄せる資格はない。

「でも、さっきの美人が、会いたくなかった人なんでしょ？」

「確かにそうなんだけど、一番に、じゃない。もっと会いたくない

子がいるんだ」
「またうまくごまかしたげるよ。行こ」
「気乗りしないな。折角死地から生還したのに、また自ら危地に入るなんて」
「大丈夫よ。わたしがいるじゃない」
まさにその所為でびくびくしなければならないのであるが、公平に考えてみれば、それは由希自身には関係のない話であり、あくまで怜の側の話である。明日帰る従妹にこちらの都合を押し付けることの是非は、問うまでもないことだった。怜は心を決めると、由希とともに、ビルの一階入り口に向かう人の群れに混ざった。ただし、本屋で聞いたプレゼントルールの適用は除外するように念を押しておいた。
断じて敢行すれば鬼神もこれを避く、という。知り合いは鬼神以上の存在ではなかったようである。およそ三時間弱、ビル内の雑貨屋や衣料品店、ＣＤショップなどを見て回ったが、知っている人間には誰とも会わなかった。一階から外に出るために下りのエスカレーターに乗っていると、
「つまんないなあ。レイの友だちに会えなくて」
不満そうな口ぶりで隣の少女が言う。彼女の長くしたもみ上げをひっぱってやりたい気持ちを怜はすんでのところで抑えた。代わりに、
「世の中、上には上がいるんだ。佐伯はうまくいったけど、お前の手に負えそうもない子が数人オレの知り合いの中にはいる」
と警告めいた口調で言うと、なら一層会いたいわ、と不敵な答えが返ってきた。
「わたしまだ『上』っていうのに会ったことないから」
自信たっぷりに言う由希。その自信を若輩の虚勢、と斬って捨てられないところが彼女の凄味だった。怜も由希には一目置いている。時々、子どもっぽい真似さえしなければ、一歳年下であるにも関わらず敬意を払うことさえできるかもしれない。博覧強記、という言

葉は彼女の為にあるようなもので、本当に様々なことをよく知っていた。怜が尋ねたことで、即妙の答えが返ってこなかったことは無いと言って良い。しかも、頭でっかちに自分の知っていることをひけらかして他人を白けさせたりすることもない。知は現実に応用できてこそ意味がある、ということを知っているのである。その応用の一つが先の澄への対応である。

「レイこそさ、そういう人に出会ったの？」

「そう言っただろ」

「それは女の子の話でしょ。女の子が男の子より優れてるのは当たり前じゃない。そうじゃなくて、男の子の知り合いで自分より上の人間に会ったことは？」

「オレ以外の人間は大抵オレよりは上だよ」

「謙虚だねー。でも、そんなことないと思うな」

ビルの外に出て人ごみから少し解放されたときに、由希は、怜に寄り添うとその腕を取って笑顔を向けた。

「だってさ、わたしがこうして腕を組みたくなる男の子って今の所レイしかいないもん」

ありがたい話であるが、もっとありがたいのは今すぐ腕を離して、一歩離れてもらうことである。

「ちぇ……傷つくなあ。仕方ない。傷ついた乙女心はシェイクに癒してもらおうかな」

「ボーイフレンドか？」

「そうよ。あそこにいるの」

由希の向ける目の先に、ハンバーガーのファーストフード店がある。癒したいのは傷心ではなく空腹であろう。

怜は、自分の傍らを離れ先に立って歩き出す少女の背を追った。これで本日の運試しが最後になることを信じて。

第５３話：千里を越えたわけ（前書き）

いつも読んでくださってる方、並びに今日初めて読んでくださった方、本当にありがとうございます。読んでくださる方がいるので、書き続けることができます。ただもう感謝です。折角読んでいただいたその時間にできるだけ見合う作品を書いていきたいと思います。

では、第５３話になります。お楽しみください。

第５３話：千里を越えたわけ

食糧を調達するのにしばらくの時間を要した。まるで街の飲食店がこの店一軒しかないかのような繁盛ぶりである。折角の休日であれば少し豪華なものでも食べれば良かろう、と思うのは、自分で稼がない中学生の浅慮であろうか。結構な数の親子連れがいた。いざという時すぐに出られるように一階に席を見つけようとしたが、満席だったため仕方なく怜はトレイに軽食を乗せて、由希を二階へと案内した。窓際のテーブルに差し向かいで腰を落ち着ける。

同年代の子が結構いるようだったが、ざっと店内を見回したところでは、見知った顔はいないようだった。

「いただきまーす」

由希は軽く手を合わせると、ハンバーガーの包みに取りかかった。怜は大してお腹が空いておらず、由希につられてセットメニューを頼んでしまったことを軽く後悔していた。ハンバーガーとポテトとオレンジジュースを見て、ジュースに手を伸ばしてみる。刺したストローでちびちび飲んでいると、正面の少女は対照的にぱくぱくと豪快に食べていた。みるみるうちにハンバーガーの円が半円となりついには一片も残らず消える。一個完食。口周りにソースがついているのを見咎めた怜が、紙ナプキンを差し出すと、小さなテーブル越しに由希は顔を突き出してきた。

一秒、二秒。三秒の間、じっと由希の目を見つめてやったが、彼女は全く怯まないので、面倒になった怜は、由希の口を拭いてやった。視線を移してよくよく見れば、少女の手には二個目の包みが握られている。彼女はセットメニューの他に、単品でもう一つハンバーガーを頼んでいたのだった。旺盛な食欲である。

「ウチで食べてる時は遠慮してたのか？」

折角綺麗になった口周りを早速汚し始めた少女に尋ねてみると、彼女はもぐもぐしながら首を横に振った。口のものを飲み込んでか

ら、

「そういうわけじゃないわ。ハンバーガーってあんまり食べないから、食べるときは思いっきり食べておきたいだけ。まあ、でも、人様の家にお邪魔してるわけだから、もちろん遠慮はしてるよ。従兄妹の家とは言ってもね。親しき仲にも礼儀あり」

そう言って、手をテーブル越しに伸ばした。怜のポテトを数本つまんで自分の口に放り投げる。店内に流れる流行の曲が一曲終わる前に、二つ目のハンバーガーは跡形も無く姿を消した。それだけではない。いつのまにか少女の側にあるポテトも容器だけになっていて中身がない。目の前で起こった不思議な出来事に唖然としていると、小さな猛獣が物欲しげな目で、怜の手つかずの包みを見ているのが分かった。まさかとは思ったが、

「食べるか？」

念のため訊いてみると、少女の顔が喜色に輝いた。

「愛してるわ、レイ」

「そんな安っぽい愛は要らん」

怜が三つ目のハンバーガーを差し出すと、即座に包みが破れる音がして、パンに白い歯が食い込んだ。

「もし四つ目が要るなら追加で頼んでくるけど、どうする？」

九割九分がた冗談だったのだが、その怜の言葉に、由希は人生の大事を考えているかのような真剣な目をした。ただし、そうしている間も口は動いているので、全体の表情としては間の抜けたものになっている。食べている分をごくんと飲み下すのを見ながら、まさか一分の奇跡を目の当たりにすることになるのかと腰を浮かしかけた怜だったが、彼女はゆっくりと首を振った。

「やめとく。体重が気になるお年頃だし」

そう言って、怜のポテトに手を伸ばそうとする。怜は容器ごとポテトを由希のトレイに載せてやった。いかにも意外そうな表情を作る由希に、

「オレの気持ちだ、受け取ってくれ」

言うと、彼女は満面の笑みを浮かべた。
「愛されてるっていい気分だわ」
玲が唯一残されたオレンジジュースで喉を潤していると、それにまで視線が張り付いているのを感じて、思わずむせてしまった。これから、由希とファーストフード店に入ることがあったら彼女には二人分頼んでやった方がてっとり早い。
「ああ、食べた、食べた」
紙ナプキンで口を拭きながら満足そうな、いや満腹そうな顔をした少女は、
「手、洗ってくるね」
と言って席を立った。由希が帰ってくる間に、玲はテーブルを片付けておいた。包み紙を捨てトレイを返す。相変わらず激しい人の流れの中で、ふと玲はクラスメートの顔を見つけたような気がした。名前は覚えてないが。ただ、どうやらこちらには気がつかなかったらしい。トレイを持って席に移動していくクラスメートを尻目にしながら、玲は、帰ってきた由希を店外へと引っ張っていった。
時間を確認すると四時半を回った所だった。雲間から少し光が差しており、初夏の夕べはまだまだ明るい。
「いい気分だな。お腹はいっぱいだし、美しい光、隣には愛しいあなた」
玲は腕をからめようとしてくる由希をかわした。
「何でよけるのよ?」
「ハンバーガーは奢っただろ。これ以上、何を望むんだ?」
「思い出。次にあなたに会うときまで、あなたのことを想えるように」
「確か学校に好きな男がいるって言ってたよな。そういう色気のある役はそいつに譲るよ」
「え? そんなこと言ったっけ?」
「こっちに来た日のその晩に親父に言ってただろ」
「ああ、あれね。あれは冗談よ。健全な女子中学生たる者、学校に

一人や二人気になる男子がいて当然、っていう世の常識に従ってる振りをしてみただけ。常識人の方が伯父様は安心するでしょ。わたしが好きなのは、あ・な・た」

「ハンバーガーを食べてなくて良かったよ。それで？」

「それでって？」

不思議そうな顔を作る由希に、怜は、何かしてもらいたいことがあるならはっきりと言うように促した。由希はちょっと遠回りして帰ってもらいたい旨を伝えてきた。怜が、来た道とは別の道を取ると、横に由希が並んだ。

「してもらいたいことがあるって、何で分かったの？」

「都（ミヤコ）と同じだよ。いつもは普通なのに、何か頼みごとがあるときだけ気持ち悪くなる」

「ひっど～い」

わざとらしく頬を膨らます由希に、怜は冷ややかな視線を送った。由希はおちゃらけていた表情を改めた。

「澪（ミオ）のことなんだけどね」

唐突な出だしに、怜は面食らった。澪というのが、由希の友人の少女の名であることを思い出すのに少しかかった。怜もお盆や年始に由希の家に行ったときに何度か面識がある。

「澪って……お前の友だちの？」

一応確認しておくと、由希はうなずいた。

「で、彼女がどうかしたのか？」

「去年、お父さんが再婚したんだけどね。新しいお母さんとあんまり上手く行ってないんだよね。新しいお母さんっていうのも別に悪い人じゃないんだけど、まだ亡くなったお母さんのことを澪は想ってるみたい。まあ、当たり前かもしれないけど」

どうして突然に友人の話が始まるのかはさっぱり分からないので、怜は口を差し挟まずに聞くことにした。

「それで、新しいお母さんのいる家にあんまり帰りたくないってことでね、この頃、友だちの家に泊まったりして、自分の家に寄り付

かなくなってるんだよね。ちょっとした家出状態。ウチにも結構来たりしてる。まあ、ウチは誰もそんなこと気にしないからいいんだけど。澪のお父さんは心配してて、それでこの前喧嘩しちゃったみたいで、お父さんとも仲悪くなってきたりしてるんだよね」

全く話が見えてこなかったが、怜はまだ待った。

「このままだとさ、勢いで悪い子たちと付き合ったりして、無断外泊、無断欠席、飲酒、喫煙、万引きって感じで悪の道に入っちゃうんじゃないかって心配してるんだ、わたし」

それはさすがに安直な流れのような気がするが、心配とはそういうものかもしれない。麗しい友情。澪ちゃんがそんなことにならないように友だちとしてできるだけのことをしてやれよ、と由希を励まそうかと思った怜だったが、そこで違和感を感じた。おそらく由希ならばなすべきことは為しているはずである。従兄妹としての付き合いから、彼女がどういう子であるかは分かっているつもりだった。にもかかわらず、なぜこんな話をするのか。怜の無言の疑念を、由希は笑顔で受け止めたのち、

「ここでレイの登場なんだな」

そう言ってもったいぶって言葉を切った。怜がなお沈黙を守っていると、

「レイにね、澪を説得してもらいたいのよ。家に帰るように」

とんでもないことを言い出した。

「澪はレイの言うことだったら聞くと思うんだ」

怜は立ち止まると、つられて歩を休めた由希の額に手を載せた。ふっくらとした少女の瞳がすっと細まって危険な光を湛えるのが見えたが、怜はその視線を受け止めた。熱を確かめたのは半ば以上本気である。由希がとても正気であるとは思えない。

道は駅前から少し離れた歩道で、行きかう人の数も少なくなってきてはいたが、とはいえ立ち止まっていると邪魔になるほどの通行人の数ではある。怜は歩き出した。隣に並ぶ少女に静かに尋ねてみる。

「不良っぽくなってるお前の友だちにオレから改心を促してくれっていうことでいいのか？」
　由希はうなずいた。怜は遠慮なくため息をついた。
「オレの言いたいことは大体分かると思うが」
　由希は無言で首を横に振った。黒髪のショートカットが軽く揺れた。
　怜は仕方なく言わずもがなのことを口にした。
「まず、それは家の中の話だろ。子どもには親がいる。父親とその新しい母親が対処すべきで、他人がそれに口を差し挟むべきじゃない。第二に、オレに何を期待してるのか分からないけど、オレは澪とはそんなに親しくない。お前の家に行ったときに、ちょっと話すことがあるくらいだ。オレの言葉に大した効果があるとは思われない。最後に、人は他人の気持ちに簡単に干渉すべきじゃない」
「レイ……」
「何だよ？」
「わたしを信じないの？」
　由希は進行方向を見ていたが、その横顔が固いものを帯びているのは見て取れた。
「わたしはあなたを信じてる。あなたを信じてるわたしのことを信じてくれるでしょ？　今の澪にはあなたが必要なのよ。わたしでは手に負えない」
　最も言いたかったことを言い終えたからか、由希は表情を柔らかくした。そのあと、怜の方を向いて、さっきのあなたの意見だけど、と言って指を一本立てた。
「まず第一に、子どものことに親が対処できるのは子どもが小さいときだけの話よ。今、あなたが抱えてる問題があったとして、それに伯父様と伯母様が対処できる？」
　二本目の指が立つ。
「次に、澪はレイのことを特別な人だと思ってるから、あなたの言葉は特別に響く」

三本目を立てて、
「第三に、人は他人の気持ちに本当の所では干渉なんかできない。自分の気持ちは自分だけのものだから」
　怜の意見を一つずつ論駁していった。それに対してはもう反論しなかった。従妹が望んでいるのは議論ではない。彼女が求めることをやるかやらないか、という話である。他人のお節介を焼きたがる人間は大抵自分のことがしっかりできていないものだ、という考えのある怜としては、よほど断りたかったが、
「何をすればいいんだ？」
　先に依頼内容の詳細を聞くことにした。面倒なことだったら突っぱねるつもりでいたが、
「夏休みにウチに泊まりに来て、その時に澪と会って欲しいだけよ。あとは任せるわ」
　あまりにアバウトなことを言われて、返って呆然とした。
「ここは可愛い従妹の顔に免じて快く頼まれてくれないかな」
　会って話をするくらいなら泊まりにいくついでである。大した手間でもない。そう思わせるのが由希の手だと考えるのは邪推だろうか。
「何を期待されても、できることしかできないぞ」
　それだけ釘を刺しておいて、怜は依頼を承諾した。気がついたことが二つある。一つは、ゴールデンウィークでも夏休みでもないこの中途半端な時期に従兄妹の家に由希が泊まりに来たその理由。もう一つは、わざわざ遠路を越えて頼ってきた従妹を無下にしないだけの良識を怜が持ち合わせてしまっていることだった。
「わたしを信じてね、レイ」
「自分自身よりは信じてるよ。ただ、夏休みで間に合うのか？」
　それまではわたしが何とかするわ、と言って由希が口を噤んだ。
　しばらく無言であった二人の沈黙を破ったのは、怜の名を呼ぶ高い声だった。
　歩道上で小さな腕をぶんぶんと思い切り振っている六歳くらいの

女の子の姿が、怜の視界に映っていた。
「あれは？」
面白そうな顔で尋ねる由希に、怜は手を振り返しながら、
「今の所、オレが知る中で、可愛いって思えるただ一人の女の子だよ」
心底からの声を出した。

第５４話：覚えず君に出会う夕べ（前書き）

前に自分で書いたものを読み直してみると、粗ばかりが目立ち……書き直したいと思いつつも、お話を先に進めたいという気持ちもあり。ああ、上手く書ける人が羨ましいと思う今日この頃。

では、第５４話です。

第５４話：覚えず君に出会う夕べ

水玉模様のワンピースを着た女の子は、タッタッタッと軽やかなステップを踏んで走り寄り、怜の目の前でその小さな足にブレーキをかけた。

「レイ！」

円らな瞳を輝かせて屈託の無い笑みで見上げてくれているのは、怜の付き合ってるカノジョの幼い妹だった。こういう可愛らしい子が、いつしか今隣にいる可愛げのない子に変わってしまうのかと思うと、時間とは残酷である。

「こんにちは、アサちゃん」

クラスの女子が気になってる男の子に対する時に声を作ったものにするその気持ちが少し理解できる怜。腰をかがめて、少女に何をしてたのか、訊くと、

「そこの公園で遊んでたの」

と言って、旭は近くを指差した。

「ひとりで？」

「お姉ちゃんと」

少し離れたところにすらりとした少女の影が現れて、ゆっくりと近づいてくるのが見えた。怜が彼女に向かって手を挙げたのと、

「なに、この子。かわいい～」

隣から嬌声が上がったのはほぼ同時であった。

由希はしゃがみ込むと、旭と目線の高さを合わせ、指でつんつんと旭の白い頬を触った。

「やわらかい！　ぷにぷにしてる。かわいい～」

由希はしゃがんだ体勢から怜を見上げて、

「ねえ、レイ。この子、持って帰っていい？」

アホなことを言い出した。良いわけないだろ、と旭の手前大きな声を出すこともできず、軽くたしなめると、

「でも、可愛いじゃん。絶対将来美人になるよ」
脈絡のないことを言って、一人で納得してうんうんとうなずいた。
両の目にきらきらかな光を灯す由希に怪しいものを感じたのか、旭は眉根を寄せた。
「お姉ちゃん、誰？」
「誰だと思う？」
そこで、旭はちらりと怜と由希を見比べると、
「レイの『もとかの』なの？」
うがったことを言った。由希は、おお、と小さく喚声を上げ、ぱちぱちと拍手をすると、旭の頭を撫でた。
「良くそんな言葉知ってるね、姫ちゃん」
「わたしの名前、アサヒだよ」
「うーん。でも、何か、姫ちゃんって感じだな。それとも、小姫（こひめ）ちゃんの方がいいかな。ね、どっちがいい？　小姫ちゃんの方がいっか」
困ったような顔を向けてくる旭を助けるため、従妹の暴走を止めようとしたところで、影が差して、花のような香りが漂ってきた。
デニムのパンツとラウンドネックのTシャツというラフな出で立ちをした少女が、旭の後ろに立っていた。毛先に動きがあって思わず触りたくなるようなショートボブの彼女は、優美な瞳に温かな光を湛えていた。中腰の状態から姿勢を直す怜に、
「外に誘ってくれたアサヒに感謝しないとね」
環は、偶然の出会いに対する喜びの声を上げた。その顔が怜の隣を向く。
立ち上がっていた由希は、怜が口を開く前に、
「ども。レイの元カノで～す。あなたが今のカノジョの川名さん？」
と軽薄な声を出した。
環は自分の口元を両手で隠すようにしてびっくりした顔を作ると、恨みを含んだ目で怜を見た。合わせた両手を胸元へと下げて、
「ひどいわ、レイくん。女の子と付き合うのはわたしが始めてだっ

て言ってたのに。わたしにウソついたのね」
哀愁を帯びた声でカレシの不実を詰る。
怜がカノジョから視線を移すと、由希が楽しそうな顔をしているのが見えた。いい見世物だとでも思っているのだろう。しかし、事実は逆であった。
怜は咳払いをすると、
「タマキ、気を遣わなくていい。こいつは従妹だから」
演技をやめるように言った。環は、あら、と一言いうと表情を元に戻した上に微笑を添えた。
「初めまして。わたし、森口由希です」
反応を見られていたのは自分の方だったことに気づいたはずであろうが、由希に動じた様子はなかった。彼女が手を差し出して握手を求めると、
「川名環です。よろしく」
環はその手を取った。
由希は少し長く環の手を握っていたが、やがて手を離すとかすかに身を震わせるようにした。
「ちょっと寒くなってきましたね」
環は、そうですね、と同意を示すと、妹に向かって、
「そろそろ帰ろっか、アサちゃん？　まだ遊んでく？」
訊いた。旭は、うーん、と考え込む色を見せてから、
「レイはこれからどこ行くの？」
と訊いてきた。家に帰る途中だったことを告げると、旭は、
「じゃあ、あたしも帰る」
と言って、両手を挙げるポーズを取った。期待に輝いている少女の目を見て、怜は微苦笑を漏らすと、しゃがんで旭に背を向けた。
「ごめんね、レイくん」
申し訳なさそうな環の言葉を聞きながら、怜は少女を背負いあげた。六歳児の体は見た目より重い。ただ、歩くのに支障はなさそうだった。

二人の少女を先導役にして、怜はそのあとに従った。耳の近くで、旭のリズミカルな声が上がる。

「聞いてよ、レイ。マドカお姉ちゃんってひどいんだよ。すぐ怒るし、全然優しくないの。この前もお風呂入りたくないのに無理に入れようとしてさ。だから、カレシできないんだよね」

それは円には絶対に言わない方がいいと思うということを告げると、旭は素直にうなずいた。

「レイが言うなら、そうする。クラスにね、すっごくいやな男の子がいるんだよ。いっつもわたしの髪引っぱってくるの。この前なんかリボン取られたんだ。レイはそういうことされたことある？」

「リボンを使ったことはまだ無いんだ」

「そお？　もっと長くなったらアサヒが結んであげるね。給食で椎茸食べられない子がいて、代わりに食べてあげたの。そうしたら先生に怒られちゃった。好き嫌いは良くないけど、どーしても食べられないものってあるよ。グリーンピースが苦手。レイは嫌いなものある？」

「牛乳かな」

「あたしも苦手。同じだね。でも、知ってる、レイ？　生クリームって牛乳からできてるんだよ。生クリームはあんなに美味しいのに、どうして牛乳はあんまり美味しくないんだろ。この前見たテレビでね……」

うんうん、といちいちうなずいていると、前を歩く二人の少女が、こちらを見て可笑しそうな表情をしているのが見えた。怜は、

「アサちゃん、ちょっと待ってね」

といったん旭のトークを途切れさせたのち、険のある目で環と由希を見て、

「何か言ったら、絶交だぞ。二人とも」

と忠告しておいた。由希は、もちろん、と言って片胸に手を置いて誓いを立てる振りをした。一方、環は、

「わたしが？」

そんなまさか、と涼しい顔で答えてから、
「アサヒ。そろそろ降りなさい。レイくんが重いでしょ」
と妹に命じた。
玲は背に揺れを感じた。姉の言葉に対しての抵抗の動きである。
「いいよ。アサちゃんは全然重くないし。タマキの家まで大丈夫だよ」
「レイ、大好きっ！」
びたっと体をひっつける感触がして、小さな腕が首の辺りに軽くからまった。
「何も言うなよ」
玲は再度、笑みを浮かべる二人の女の子に注意しておいた。
ゆっくりと精彩に乏しくなる歩道を、小鳥のさえずりのような旭の声を聞きながら、玲は歩いた。ちょっと歩が重くなってきたが、そんなことはおくびにも出さなかった。そのはずであるが、時々ちらりとこちらを振り向く環が訳知り顔を見せてくる。玲がじっと見つめ返すと、彼女は目だけで笑ってまた前を向いた。
初対面でもまったく物怖じしない大胆さ、いや図太さを持っている由希は、従兄のカノジョと快活に会話を楽しんでいた。時に笑声を立てて、まるで数年来の友人に対するような気安さだった。どちらかというと人見知りする玲としては、由希の朗らかさが羨ましいような気もするが、すぐに思いなおした。中一の始めに、朗らかにしようと努めた結果、ある少年と付き合うことになったことを思い出したのである。人はそれぞれ持って生まれたものを精一杯磨いていけばよく、性質に合わないことを無理矢理取り入れるべきではない。
玲は腰を下ろして、旭を地に降ろした。四人の前に、洋風二階建ての瀟洒な家が見えていた。
「お茶でも淹れますから休んでってください」
環の勧めに、わーい、とお気楽な歓声を上げる由希。門の中に入って行きそうな少女のパーカーのフードを玲は掴んだ。そのままの

体勢で、怜は、もう遅いからこのまま失礼する旨を告げた。えー、と残念がる声が由希と旭から上がった。

「アサちゃん、ペットボトルのお茶、二本持ってきてくれる？」

環が代案を示すと、旭は元気良く玄関に向かって走っていった。

「ありがとね、レイくん。これで当分機嫌がいいわ、アサヒは。うるさかったでしょ？」

「全然。佐伯のしゃべりに比べたらかわいいもんだよ。佐伯のがマシンガントークだったら、アサちゃんのはシャワートークって感じだな。爽やかでさえある」

「あら、それを聞いたらスミちゃん喜ぶでしょうね」

「喜びすぎてその礼にありがたい説教をしてくれるだろうな。絶対に言わないでくれ」

環が微笑してうなずくと、由希が携帯電話を出して二人の間に入った。

「タマキさん。メアド交換しません？」

環が快く応じると、二人で携帯の操作を始めた。

特急で戻ってきた旭が、門の脇の通用口から現れ、怜と由希にそれぞれお茶のペットボトルを手渡した。

「ねえ、タマキさん。小姫ちゃん、もらってってもいい？」

由希が不気味に伸ばした手を避けるようにして旭は家に戻って行った。いい加減にしろ、と少し強い声を出す怜に、

「レイくん。じゃあ、明日ね」

と環の柔らかい声がかかる。

わざわざ見送ってくれている少女の視線が届かない所まで離れると、はあ、と息をついて、由希は肩から力を抜いたような振りを作った。

「どうした？　一日中動いて、疲れたのか？」

どこか弱々しげな様子を見せる由希を気遣うと、彼女は、

「ああ、緊張した」

と言って二、三回深呼吸をした。全くリラックスしていた様子に

見えた由希の意外な言葉に怜が不審そうな顔を作ると、少女の顔がくるっと横を向いて、
「よくあんな人と付き合えるよね。尊敬するわ、怜のこと」
真面目な口調で言ってきたので、ますます意外だった。
「握手した時にね。背に電気が走ったみたいになって、それから体温が二度くらい下がったみたいにぞっとしたわ」
まるで人外のものとでも遭遇したかのような言い草である。怜は首を捻った。由希が何に衝撃を受けているのか、さっぱり分からなかった。
「だから付き合えるのかもね」
「よく分からないが、タマキはお前の『上』だったか？」
由希は歩きながら視線を下に向けてしばらく考えていたが、
「『上』っていうよりは、『奥』って感じかな」
顔を上げて答えた。
「見上げるっていうんじゃなくて、覗き込むような感覚。でも覗いた先には何もなくて、ただ……そう、あれは……闇、だな」
人が人をどう評価しようがそれにケチをつける気などないが、せいぜい公園前から川名宅まで二十分程度世間話をしたに過ぎない人間の評にしてはあまりに激烈である。カノジョに対するものでもあるので、怜は一応、由希に非難の目を向けてみたが、効果は無かった。
「言っとくけど、コレ、褒め言葉だからね」
由希は平気な顔でそんなことを言うと、そうだ、と声を大きくした。何かに閃いたかのような様子の従妹に、怜は何も突っ込まなかった。どうせロクでもないことに決まっている。
「夏休みにウチに遊びに来る時にさ、タマキさんも連れて来なよ」
家につくまでに、由希の提案に対していく通りかの反対意見を捻り出してみたが、全て整然と退けられた。仕方なく怜は、最後の手段、すなわち最も安直な手段を取った。
「さっき、アドレス交換してたよな。メールで直接タマキに訊いて

くれ」
　怜は玄関のドアを開けると、ちょっと気後れしたような顔を見せる従妹を先に家の中に入れた。

第５５話：退屈と戦うたった一つの方法（前書き）

たまに、考えていたお話と全然関係のないお話ができることがあります。今回はそんな感じです。

では、第５５話です。

第５５話：退屈と戦うたった一つの方法

夕食と入浴を済ませ、机に向かう夜が来る。朝は家事、昼間は一日中遊びまわったので、さすがに疲れていたが、とはいえそれは勉強をサボってよい口実にはならない。階下からは楽しげな笑い声が響いてきている。食後のお茶を楽しみながら、従妹を交えた家族がテレビのバラエティー番組でも見ているのであろう。たまに従妹が来た時くらいその輪の中に入っても良いのではないか、という常識めいた想念に浸るには、怜には余裕が足りなかった。二年間勉強をサボってきたツケである。

とはいえ、「サボる」という意識を持つには、「勉強しなければいけない」という義務感が先になくてはならず、勉強はしなくてはいけないものだ、という意識がなかった怜としては当然、サボっているという意識もなかったわけで、「ツケ」と言われても釈然としないものはある。

中学生に勉強を強制することになる、成績評価というシステム。これもよくよく考えてみれば理不尽なものである。こちらから頼んだわけでもないのに、一方的に「学力」なるものを評価され、評価が悪いともっと頑張るようにとの叱責を受ける。エントリーもしていないレースに無理矢理出され、順位が遅かったからと言って責められるようなもの。皆、よく正気でいられるものだ。

ただし――

そも人生そのものがそういう面を持っているのかもしれない、と怜は思い直した。いつの間にかこの世に生まれて、いつの間にか人生を歩んでいる――歩まされている。こんなことを言ったら母に引っぱたかれるだろうから言ったことはないが、頼んで生んでもらったわけではない。自分の人生でありながら、始まりから自分のものではないのである。何だかな、という気にもなる。

昔、小学生の頃は、よくそんなことを考えていたような気がする。

生きている、ということは一体どういうことなのか。答えは出なかったし、今でもよく分からない。一つだけ分かったのは、生きているということがどういうことか分からなくてもそのとき現に生きている、というそのことである。人生を生きるのに、「いかに生きるべきか」という類の人生論は必要ない。

　怜は頭を振って、テキストに集中しようとした。答えの出ない問いよりも、今は答えのある問いに取り組む時間である。頭が勉強モードに切り替わって、一時間ほどした所で、ノックの音がしてドアが開いた。

「お夜食をお持ちしました」

　時計を見ると十時だった。回転する造りになっている椅子を回すと、盆を持った従妹の姿が映る。怜は彼女に、夜食は塾講師から禁じられている旨を告げた。

「知ってるよ。ちゃんと消化されてない食物がお腹の中にあると、眠りが浅くなるんでしょ。大丈夫だよ、バナナだから」

　薄手のパジャマ姿の由希は盆を机の脇に置いて、果物は消化が速いから食べても問題ない旨を付け足した。小さなガラスの容器に切り分けられたバナナが入れられてある。由希は陶器のポットから杏色の液体をカップに注いだ。

「ジャスミンティです。召し上がれ」

　甘く芳ばしい香りが漂ってくる。そんな洒落たものがうちにあったのか、と怜が驚くと、案の定今日一緒に入った雑貨屋で由希が買ったものだった。

「付き合ってくれたお礼です。今日はありがとね」

　そう言うと由希はベッドの上にごろりと仰向けに横になった。

「久しぶりに楽しかったな」

「お前はいつだって楽しんでるだろ」

　怜はジャスミンティを一口飲んで告げると、天井に向いていた少女の顔が、怜の方を向いた。

「そう見える？」

「見えるかどうかじゃなくて、実際そうだろ」
「それは当たりであり外れでもある」
　怜はフォークをバナナの一片に突き刺して、口に運んだ。
「レイといるときは楽しいからね。でも、レイが見てないときのわたしはそれほど楽しんでないと思う」
　退屈なんだよね、と由希は続けた。結構なご身分である。こちらはいくら時間があっても足りないというのに。
「やることがあったほうがいいと思うけどな」と由希。
「あと一年後には、退屈な人生とはさよならできる」
「それまでは？」
「本を読み、友人を作り、部活に精を出し、親には孝行、弟には慈愛を」
「全部やってる。それでもなおピンと来るものがないんだ。どうすればいい？」
　由希は真剣な目を向けてきた。退屈をどうにかしたい、などということを真剣に訊くということはつまりふざけているということである。自分で考えろ、と素っ気無く言おうとした所で閃いたことが一つ。
「由希、お前、まさかとは思うが……」
「なあに？」
　怜は失言の危険を回避するため、思いついたことを言う前に一つ確認を取ることにした。
「……澪（ミオ）が、オレの言うことなら聞くって言ったよな。どこからそういう話になるんだ？」
　由希は、言いかけたことと別のことを話し出した怜に疑いの色を見せずに、
「恩人だからよ」
　と簡単に言って体を起こした。そのまま、ベッドの上で胡坐を組む。何のことを言っているのかさっぱり分からない怜が説明を促すと、由希は、澪が小学三年生の時のことよ、と静かに言った。全く

思い当たる節がない怜が重ねて尋ねると、
「五年前にさ、澪のお母さんが亡くなったでしょ。その時、澪がさ、いなくなっちゃった事件があったじゃない。一人になりたくて近くの原っぱにいたわけだけどさ。皆で澪を探して、わたしたちも探したわけだけど、それで見つけたのがあなただったじゃない」
と説明する由希。言われてみれば、そんなこともあったような気もするが、記憶に靄がかかっていてはっきりしない。しかも、疑問が湧いて、
「オレに見つけられたことを恩に感じてるっていうのはどういう話なんだよ。怪我でもしてて身動きが取れなかったとか、そういうことか？」
それを訊くと、由希は探るような目つきをして、本当に覚えてないの、と逆に訊いてきた。怜が正直に首を横に振ると、由希は軽くショックを受けた振りをして、これは澪には言わない方がいいな、と苦く笑ったあと、
「ま、いろいろあったわけよ。あなたが覚えてないなら、それはそれでいいかもね」
適当なことを言って、
「とにかくね」
と強引に話をまとめた。
「その時から澪はレイのこと好きなのよ」
怜はうさんくさそうな目で由希のことを見つめた。ロマンティックな話をするにしては、やけににやにやしているのが気にかかる。さきほど疑念を持っていたことは、もはや確信に変わっていた。
「ユキ」
「はい？」
「この件はお前の暇つぶしじゃないだろうな」
由希はちょっと気分を害したような顔を見せて、
「レイはわたしのこと理解してくれてると思ったんだけどなあ」
と言ったが、はっきりとした否定をするまでには至らない。百歩

譲って夏休みに怜を呼ぶことが純粋に友人のためだとしても、では、環を呼ぶことはどうなのか。

「あ、それはわたしの為だな。タマキさんともっと話したいと思って」

「緊張するって言ってたろ」

「だからよ。わたし、緊張することって全然無いからさ。新しい経験。わたし、新しいことが好きなんだ。『まことに日に新たに、日々に新たに、また日に新たなり』ってね」

「闇を怖れないのか？」

怜が皮肉げに言ってやると、由希は一瞬呆気にとられた表情をしたが、家に帰る途中に自分で言ったことを思い出したのか、両手を打ち合わせた。

「怖いもの見たさってことかな。それにさ、よくよく考えてみれば万物は闇から生まれた。闇は母のようなものでしょ。なら、そこまで怖れることはないのかもね」

その意見には大いに反対したい所があるが、そんなことよりも、深刻な状態の友人を自分の楽しみの一環にするとは不謹慎なことではないか、と怜が注意すると、由希は、

「深刻なものの中にも楽しみはあり、楽しみのなかにも深刻なものがある。そういうことなんじゃないかな」

と平然とした顔で言った。そういうことが言えるのは、本当に深刻な事態を味わったことのない者ではないだろうか、という疑いが怜の中に萌した。ただし、疑いの芽が育つことはなかった。怜自身も、これまでの人生で深刻な事態に遭遇したことなどなかったからだ。

怜は飲みやすい温度になったジャスミンティーをぐい、と飲み干した。由希は静かに立って、二杯目をカップに注ぐと、またベッドに腰かけた。

「何にしろ、わたしではダメなんだよね。澪の力にはなれない。それだけは分かるの。だから、よろしくね」

そう言って頭を下げたあとに、
「わたし、こっちに転校して来ようかな」
と突拍子もないことを言い出した。怜は驚いた色を見せずに、退屈しのぎをしたいだけならやめるように、言った。
「もうすでに兄を兄とも思わないヤツが一人いるんだ。そんなのが二人になったら、ストレスで死ぬかもしれない」
「じゃあ、兄として一つ、可愛い妹にお教えを。日常の退屈感をどうすればいいか」
「戦え」
「武器が無い」
「そんなものは必要ない。その敵とは勇気さえあれば戦えるからな」
「勇者になれって？　わたしは王女の方がいいなあ。カッコイイ男の子にかしづかれ、守られる方が」
「王女になるには資格がある」
「どんな？」
「か弱く儚く可憐でなくてはいけないんだ。が、残念なことに、そういう女子は遠い昔に滅んだ。今はもう物語の中にしか存在しない珍獣の類だ」
「可哀想に。相当ひどい女の子にしか会ったことがないのね」
「その一人が今まさに目の前にいるけどな」
由希は陰の無い笑声を立てた。
怜は残りのバナナを食べ、ソーサーの上にあるティカップを再び空にした。
由希はベッドからぴょんと立ち上がると、カップとポッド、空になったガラス製の容器が載った盆を手にした。休憩時間の終了。怜が再び机に向かおうとしたときに、後ろから少女の声がした。
「レイ」
怜が椅子を回転させると、数歩離れたドアの所で由希は少し恥ずかしそうな顔で、
「あのさ、ここに来たのは澪の件も確かにあるけどさ、あなたに会

いたかったっていうのもあるからね」
　とわざわざそんなことを言った。全く如才ないことである。女の子は全体どこでこういうことを習うのだろうか。あるいは、何か他に吹っかけたい難題でもあるのだろうか。にわかに、怜は、環に一緒に来てもらいたい気分になってきた。アウェイでこの力であれば、ホームだったらどのくらいの力になるのか測り知れないものがある。今の由希に彼女の故郷で、自分一人で対応するのは相当に困難だろう。
「環にメールしたのか？」
「これから。もし断られたら、レイから勧めてくれる？」
　怜はあいまいにうなずいておいた。受験生の夏休みである。そんなときに誘えば、確実に環の迷惑になる。とはいえ、一人で行くことも気が進まない。カノジョの損害と自分の利益を衡量したときに前者を重んじることのできる怜は、明日の朝には気分が変わっていることを祈りつつ、机に向かった。

第５６話：小雨から始まる水無月（前書き）

いつも読んでくださってる方、ありがとうございまーす。
久しぶりに、主人公とヒロインの絡みとなります。
怜と環メインのお話を待ち望んでくださった方々に、この回を捧げます。
では、第５６話です。お楽しみ下さい。

第５６話：小雨から始まる水無月

六月の始まりは小雨（こさめ）だった。さらさらとした微細な雨で、ともすれば傘を差す必要もないくらいではあるが、学校までは三十分かかる。私服であればともかく、制服で雨に当たっていく真似はできない。

「わたしの悲しみの気持ちが通じてしまったのね。天も泣いているわ」

玄関先で由希（ユキ）がさかしらなことを言うのを聞きながら、怜は、泣くのは何も悲しいときだけではなかろうと思ったが、言うのはやめておいた。由希は今日帰るのである。気持ちよく送り出してやるのが従兄としての最善の務めだろう。怜が気をつけて帰るように告げると、夏の再会を約束させられたあと、

「いってらっしゃい、お兄ちゃん。今度会うときまでユキのこと忘れないでね」

と精緻に作られた最高に気色の悪い声で送り出された。

怜は、しっかりとドアを閉めて小さなモンスターを封じ込めた後、傘を差して歩き出した。今日から衣替えで、上は半そでのワイシャツという格好である。衣替えの前後一週間は、移行期間ということで上着である学ランを着てきても良かったが、雨の割りに肌寒いわけでもないので、きっちりと今日から半そでシャツにしたというわけだった。

六月の異名は水無月（みなづき）である。水の無い月と書くわけだが、これは決して字面通りの意味ではない。「無」というのは、ここでは「の」という意味であり、水無月とはすなわち水の月ということである。

つい先週の塾講師の解説を思い出しながら雨中をしばらく歩くと、白の傘が咲いているのが見えて、その下に夏服姿の少女の姿があった。姿勢の佳い立ち姿であるが、ピンと張り詰めたものはなく、たおやかな雰囲気がある。環（タマキ）である。彼女は、綺麗な瞳に喜色を灯す

と、あいさつしたのち、怜の隣で足並みを揃えた。怜は挨拶を返したあと、少し歩いてから、

「そこまで臆病じゃないつもりなんだけど」

唐突に言った。小首を傾げる環に、怜は、家の外で待っていたのはお父さんに会わせないためだろ、と続けた。気遣いに感謝する旨を告げると、環はその細い肩を震わせて笑った。

「違います。単に、そろそろレイくんが来る頃かなと思って外に出てただけです。父に会います？」

「いや、今日はやめとくよ」

もう家を過ぎちゃったし、と続けると、

「あら、『今日は』っていうことは、いつかは会ってくれるんですか？」

と面白そうな顔で環。

「お父様の都合のいいときにいつでも。そのときは、例え予定があってもキャンセルするよ」

「じゃあ、服を選ぶのを手伝うわ」

そう言うと、環は、ふふ、と小さく笑って、

「約束して朝一緒に登校するのって初めてだから。何だか、変な……嬉しくて」

怪訝な顔をする怜に説明した。

「ありがとう、レイくん」

付き合っているわけだからそんな程度のことで礼を言われる筋はない。怜は、通り道でもあることだし、望むなら毎日でも迎えに来る、ということを告げて環の微笑を深くさせた。

「本心からそうしてもらいたいのだけれど、父の目があるから毎日はやめた方がいいみたい。あまり父に尽くす娘でもありませんから、そういう配慮くらいはしておかないとね」

「溺愛してるんだろうな、タマキのこと」

「それは大丈夫。持つべきものは可愛い妹です。下に二人もいると、長女への関心は薄れるみたい……あ、でも、別の問題があるわ」

「生活するってことは問題を処理するってことだよ。どんなの？」
「父のお気に入りは末の妹の旭（アサヒ）なんだけれど、実は彼女に好きな人がいるようで、そのせいで父は気が気でないみたいなの」
「同じクラスの子か？　環のお父さんには気の毒だけど、それは仕方ない。乙女は恋をする」
「それが同学年の子じゃないのよね。もっとお兄さんなんだ。それで、つい昨日もね、その人におんぶとかしてもらったりして。その話をずっと父の前でしてるのよ、すごーく嬉しそうな顔で」
　怜は手で目を覆う振りをした。娘二人を奪われた父親の悲しみを想ったのである。そうして、娘を奪った男に対する憎しみも想像してみた。やはり学ランを着てきた方が良かっただろうか。身が震える。
「さっきの話なんだけどさ、タマキ」
「何でしょう？」
「思ったんだけど、少し時を置いた方がいいんじゃないかな。お父様に会うのは」
「ええ。お好きなだけ置いてください。そのうちに、円（マドカ）がカレシを連れて来たりして、『一体長女のカレシは何をやっているんだ』なんてことになったりしても、大丈夫、わたしはレイくんの味方です」
　怜は、できるだけ早く会う機会をセッティングしてくれるよう、環に頼んだ。
　環は笑みを押さえた神妙な面持ちでうなずいたあとに、
「部活でのマドカはどうですか？」
　と話題を変えた。怜は、ただ一人の一年生ながら先輩のイビリにも耐えてよくやってる旨、答えた。
「レイくんがいるから安心してます。妹と仲良くしてくれてるみたいで」
「仲良くね……マドカちゃんとはまだ最長で五分くらいしか話したことない。しかも、それは数学の問題の解説だぞ。もし、十分間、勉強以外の話ができるなら王国をやってもいいよ」

「じゃあ、その国の女王になろうかしら」
「どうやって？」
「簡単です。姉の御名に於いて命じれば良いのです」
「マドカちゃんが従うとは思えないけど」
「命じるのはアサヒによ。アサヒにマドカを説得してもらうの。ずっと、アサヒに怜くんと話すようにって言われ続けたら、マドカも観念すると思うわ」
「仮にそれがうまくいってマドカちゃんが話をする気になったとしても、多分楽しい話をする気分にはならないだろうからやめてくれ」
円に対しては地道な努力を続けることを宣言した怜は、由希からメールが来たか環に尋ねた。由希は、今朝になっても、環にメールをしたともしないとも言ってこないのだった。それも退屈を紛らわせるゲームだと理解した怜は、従妹を楽しませて無駄な体力を使うことを避けて、環に訊くことにしたのである。
「夏休みのこと？」と環。
メールは来たようだった。怜は既に昨夜の迷妄から覚めている。環に夏休みに田舎へと同行してもらうつもりなど毛頭なくなっていた。
「ご一緒します」
危うく水たまりに足を突っ込みそうになった怜が、え、とまともに驚いた顔を作ると、環は長い睫毛を伏せた。怜くんが嫌ならもちろんやめますけれど、と消え入りそうな声を作る環を、
「そんなわけないだろ」
と強い声で励ましてから、念のため受験の障りにならないかどうか確認を取ると、
「普段多めに勉強しているのはこういう時の為です」
と頼もしい言葉が返ってきた。
しとしとという雨音を聞きながら、怜の心は晴れ渡った。
「今ならあの星に手が届くかもしれない」
差し上げた手の先は無論、雲である。というか、そもそも朝であ

る。しかし、それは今の怜には何の障害にもならない。心眼は暗雲を貫き、時間さえ超越していた。

「もし手が届いたら一つくれる？　ブローチにするから」

「構わないけど、君を飾るには星でさえ役不足さ」

怜の興奮は喜びの裏返しである。

「それは、わたしと一緒に旅行することに対する喜びだって自惚れてもいいですか？」

もちろん、とうなずいた怜だったが、どうやら一拍遅れてしまったらしい。環の疑いの視線がちくちくと突き刺さってくるのを感じながら、怜は、カノジョからついと目を逸らし、進行方向を向いた。環の口ぶりからすると、由希は余計なことを言わなかったらしい。従兄のカノジョを心配させないため、という善意と解釈するのは無理がある。単に、その方が面白そうだからという悪意からだろう。

「ユキをどう思う？」

「明るくて可愛らしい子だと」

突然に変えられた話題にすばやく対応して環が答えると、怜はもう少し突っ込んだ評価をするよう頼んだ。

「でも、昨日、ちょこっとお話しただけよ」

それは理由にはならない。なにせ、その同じ短時間で由希の方は環を「原初の闇」と評したわけだから。直感でとらえたことを話すように言うと、環は少し考えたあとに、

「理知の人」

と短い言葉を発した。

「理性と知恵で割るとあとに何も残らない人間ってことか。言い得て妙だな」

環はびっくりしたような声を上げた。

「褒め言葉として言ったつもりなんですけれど」

「でも、おんなじことだろ」

「ユキちゃんに対しての悪意を感じるのは気のせいですよね？」

「いや、ところがその通りだ。女の子っていうのは人をいらいらさ

せる存在だからな」
「『君を除いてね』っていう言葉を期待しても？」
　怜はわざとらしい咳払いをして、カノジョの期待には応えられない旨を暗に示すと、
「とにかく、ユキは苦手なんだ。タマキが一緒に来てくれれば助かるよ。百万の味方を得た気がする」
　話をまとめた。
「とっても素敵なお誘いの言葉ありがとうございます。どこか攻め滅ぼしにいきますか？」
「夏に」
　怜は、由希からの依頼の件は黙っておいた。いまいちはっきりとしない話であるし、こちらは環とは関係ない。
　実に三週間ぶりに環と一緒に歩いているわけだが、そんなに話していないような気はしなかった。ごく自然に話ができるし、また話さないこともできる。不思議な子だった。他人に対して普通感じる緊張や遠慮というものを環に対しては、ほとんど感じなかった。感情を整える必要のない気の置けなさがあって、とはいえそれが狎れには発展しない。
　ここ三週間で盛りだくさんのことが起こっていたが、怜はそれらを口にするのは控えておいた。一つには話しても面白くないことであるし、また一つには繊細なことだからである。
　静かな雨の中を二人はゆっくりと歩いた。濡れた緑の葉が濃やかで、
「客舎青々柳色新たなり」
　と、この前覚えたばかりの漢詩の一句を怜が引用すると、環は微笑して、あの木は柳じゃないよ、とダメ出ししたのちに、
「しかもそれ、別れの詩なんですけれど」
　となまなかな知識をひけらかしたカレシを追撃した。
「カノジョの趣味に合わせようとしてる涙ぐましい努力を酌んでくれないのか？」

「でも、間違いは間違いですから」
「いいか、タマキ。自分がしたことっていうのは、めぐりめぐって自分に返ってくるんだ」
「よく分かったわ、おばあちゃん」
「おばあちゃんだって？」
「それ祖母から教わったことがあるの。でも、めぐりめぐってきても、わたしは全然平気だわ。間違いを正してもらえるならむしろ喜ばしいことでしょ」
「あ、きったねえ」
カノジョの優等生じみた発言にムッとした振りを作った怜は、学校前の上り坂を登り始めた。前後に夏服姿の中学生の姿があって、冬服もちらほらと目についた。
「レイくん」
校門の内側に入ったところで顔を向けてきた環に、怜は仏頂面で答えた。
「また何か間違えたか？」
「あら、そんなに根に持つ人だったかしら」
「人は変わるんだよ」
「わたしたちは年を重ねるとともに美しくなりましょうよ」
「それで？」
環は頬に含羞の色を浮かべると、帰りも一緒に帰りませんか、と誘ってきた。怜は眉根を寄せた。
「おかしいな。タマキさんはそんなに繊細な子でしたか」
「人は変わるんです」
「オレたちは月日を重ねても今のままでいよう」
環は、はっとした顔を作ると、片手で口を隠すようにした。
「それは、わたしたちの間に重ねられる月日があるっていうことですよね？」
環が照れたようにして視線を地に落とすのを見ながら、渋い顔をした怜は、しかし面倒なので失言を訂正することをしなかった。生

徒用玄関で、
「雨が降ってたらここで」
と少女に待ち合わせ場所を指示したのち、自分の下駄箱から上靴を引き出した。

第５７話：初陣のサラサ（前書き）

いつも読んでくださってる方、ありがとうございます。今回の主人公は、更紗ちゃんです。恋する少女のそれはもう切ないお話です。お楽しみください。

第57話：初陣のサラサ

日頃の不摂生のつけは二日では是正できない。

水野更紗（サラサ）が得た悲しい真理である。

がさがさの肌、ところどころに小さなぶつぶつ、髪の生え際のにきび。手鏡に映る自分の顔を見ながら、更紗は後悔の念でむせ返りそうになった。なにゆえ、あんなに馬鹿みたくスナック菓子をばくついていたのか。愚かとしかいいようのない所業。望んで毒を飲んでいたようなものである。

その毒素を出すために、いっさいスナック菓子を食べなくなって二日。焼け石に水。とはいえ二日前よりは確かに良くなっているので自分的には喜んでも良いのだろうが、評価するのは自分ではないのである。まったくもって情けない。王子を待つ身であれば、最低限の準備くらいしておくべきだった。

更紗は席を立った。楽しげな話し声で満ちる昼休みの教室をあとにして向かわなければならない場所があるのだ。歩き出す前に最後にもう一度手鏡で目やにがついていないかどうかだけチェックして、いざゆかん、と一歩を踏み出そうとしたとき、

「どっか行くの、サラサ？」

と横から弾んだ声がかけられた。

更紗は軽く奥歯を噛み締めた。声の主は今もっとも見たくなかった顔だったのである。同じクラスの平井七海（ナナミ）。嫌いな訳ではない。むしろ好きである。というか、小学校来の親友である。しかし、自分の顔を確認したあとに彼女を見ると、もともとない自信がそれこそ粉々に砕け散るのだった。

エッジの効いたボーイッシュなショートカット、なめらかな頬、あどけない中にどこか鋭さを秘めた瞳。それらが憎たらしいほどのバランスを取って、花顔を作っている。今日から夏服なので、よりはっきりと分かる胸の膨らみが、男子の視線を集めていることだろ

う。
　更紗は精神的ダメージの回復に必死に努めた。ゆっくりと深呼吸をすると、
「王子様に会いに行くの？」
　身を寄せてきた七海が、声を潜めて訊いてきた。
「どうしてそれを？」
　などと更紗は訊き返しはしなかった。なにしろ、とうとう待ち望んでいた王子が現れたということを、更紗は自ら各クラスに散らばる友人にメールしておいたのである。三日前のことである。当然、七海にもメールしておいた。これは初恋に有頂天になったがゆえの行動ではない。もっと現実的な意味がある。それは、
――友だちと取り合うことになんかなったら冗談じゃない。
　ということであった。更紗にマニアックな趣味があるのでなければ、彼女の前に現れた王子様には一般的にみてかなりの魅力がある。その魅力に惹かれる不逞の輩がいたとして、それがもし友人だということになると、面倒なことになる。そんな話になる前に、いち早く「恋をした」と告げておき自分の恋の応援をするように頼んでおいたのである。
「わたしも一緒に行こうかな」
　七海は無邪気な顔で恐ろしいことを言い出した。顔同様、本当に邪な気持ちはないのだろう。長年の付き合いでそれは分かるが、返って厄介な話である。七海なんかに一緒に来られた日には、完璧に自分が引き立て役になってしまう。それでなくても、ルックスに大した自信があるわけでもない更紗は、静かに首を横に振った。
「ナナミ、いい？　よく聞いてよ。わたしはこれから戦いに行くのよ。遊び気分で来られたら迷惑だわ」
　七海は驚いた顔を作って、王子のところに戦いに行く姫なんか聞いたことない、と甘っちょろいことを言い出した。更紗はやれやれと息をつくと、
「確かに昔はそうだったわ。姫は王子を待ってれば良かった。みす

ぼらしい家で眠ってたり、魔王に捕まってれば、そのうち王子が来てくれたわけ。でも、今は違う。時代は変わったのよ。女性は力を持ち、待つ存在ではなくなった。王子が欲しければ、自らその足で向かい、戦って勝ち取るしかない」

と噛んで含めるように説明してやった。

「サラサ、なんか前言ってたことと違うよ」

「子どもだったのよ。それは恋に恋してたときの話」

「従者に志願します」

「今はいい。ここは一人で行くべきところだから」

「わたしにもお手伝いさせてください、姫」

「ならぬ。そなたはここで待て」

「しかし……」

「くどい」

「……分かりました、姫。どうかご無事で」

悲愴な目を向ける七海。

小芝居を終え、友人を教室に残すことに成功した更紗はほっとした気持ちで教室を出た。大またで勢い良く廊下を数歩。ふとそこで歩を楚々としたものにした。恋する乙女に闊歩はふさわしくない。

三組の外から内を窺った更紗の目が、ある一点を捉えた。数人の男女が集まって自分たちの中心に向かってあれこれと話しかけているのが見える。はっきりとは見えないが、おそらく中心にいるのが更紗のターゲットである。高鳴る鼓動を感じながら、更紗は三組の中に足を踏み入れた。

瞬間、舌打ちをしたい気持ちをすんでのところで抑えた。恋する乙女に……以下省略。

友人のもとへ行きたかったのだが、彼女に先客がいたのである。しかもそれは男の子だった。何やら楽しそうに話をしている。

――む、杏子（アンコ）め、いつの間に……

男に興味がなかったはずの友人が男子と談笑していることに、軽く裏切られた気持ちを抱えていると、向こうが更紗に気がついたよ

うだった。手を振って来ている。笑顔に努めて近づいていくと、更紗の傷心はすぐに癒された。

――なんだ、加藤くんか。

杏子の隣にいた少年は、彼女と部活を同じくしている子だったのである。おそらく部活の話をしていたのだろう。ほっと胸を撫で下ろす更紗の前で、

「それでいいか？」

加藤少年が杏子に確認口調で言った。杏子は手にしていたプリントに赤ペンでマークしたあと、

「ここととここの文意が不明確だね。この書き方だと何通りかの解釈ができる」

難しい顔をして書かれている文章の訂正を始めた。

「分かった。書き直してくる」

「あ、いいよ。こっちでやっとく、言いたいことは分かるから」

「助かる」

「いえいえ。それにしても、今回に限ってどうしたの、加藤くん？やたら仕事が速いじゃない」

「いつもだって遅くやってるつもりはない。坂木の分を手伝ってるから、結果的に自分の分が遅れるんだ。部長として一言あってもいいんじゃないか？」

「ありがとうございます」

「違うだろ。坂木に注意しろってことだよ」

「蒼ちゃんには口では勝てないの知ってるでしょ」

「じゃあ、心で向かえよ」

「よっぽど勝てないって。加藤くんだって先輩なんだから、蒼ちゃんに注意する資格はあるよ」

「悪いが、妹と同じ年の女子には何を言う気もない」

二人のやり取りを聞くとはなしに聞きながら、更紗はお目当ての少年の方にちらちらと目を向けていた。塩崎輝。三日前に突如現れた更紗の王子様である。周囲に人がいるので、ちらっとしか顔が見

えないが、心の目には彼の爽やかな風貌がはっきりと映っていた。
もしかしたら話す機会があるかもしれないと勇んで出てきた更紗だったが、どうやらその可能性は薄いようだった。今日は彼の転校初日ということで、クラスメートが質問攻めにしているのである。女子のきゃぴきゃぴした声が気に入らない。こっちは別のクラスということで、友だちに会いに来た振りをして遠目に窺うのが精一杯だというのに。
と――
更紗は目を瞠った。
輝を取り囲んでいた輪の一部が割れて、輝自身が席を立ってこちらに歩いてくるではないか。
――まさか、わたしを見つけて……
直接目を合わせようなはしたないことをするわけにもいかず、少し目を逸らすようにする更紗が期待を込めて待っていると、
「よろしく、オレ今日転校してきたんだ。塩崎輝」
清々とした声が聞こえてきた。一瞬、更紗の胸が沈んだ。先週会ったはずの更紗のことを忘れてもう一度自己紹介してきたのかと思ったのだ。が、そうではなかった。
「加藤怜(レイ)。よろしく。ただ、オレ、六組だけど」
先のセリフは更紗に向けられたものではなかったらしい。二人の少年が握手を交わしている。想い人の手を取る怜にちょっと嫉妬する更紗のすぐ近くで、
「とりあえず誰とでも握手することにしてるんだ」
輝が快活に言った。
「誰とでもっていうのはやめた方がいい。それでオレは一年のとき失敗した」と怜。
「まずいヤツと知り合ったってこと?」
「まさに。その付き合いが今もなお続いている」
「羨ましいよ。二年付き合える友だちがいるなんて」
「今度紹介する。オレとそいつの仲に割って入ってくれ。そうして、

そいつと君が一緒に遊ぶようになってオレをのけ者にしてくれたら最高の展開だ」

軽い口調で輝を微笑させた怜は、杏子に、

「今日は部活を休むから、よろしく」

と告げて三組を後にした。

「なんか面白い人だね」

「変わってるんです、加藤くんは」

輝に顔を向けられた更紗は緊張した声で答えた。

握った手に汗をかいているのが分かる。

間近に整った顔があってどうにも照れてしまう。とはいえ、そうして照れていても仕方がない。図らずも折角話す機会がやって来たのだから何か話さなければいけない。と思うのだが、とっさのことで何も出てこない。

輝が席に戻ろうという振りを見せたその時だった。

「あ、そうだ、塩崎くん」

持つべきものは友人である。杏子が口を開いたことで、輝はその場に留まった。更紗は杏子に感謝の念を向けた。きっと彼女は気が利いたことを言ってこの場を盛り上げてくれるのだろう。当てにした目で友人を見ていると、その口から出たのはとんでもない言葉だった。

「もし良かったら、更紗が図書室まで案内するよ。校内のこと早く覚えた方がいいでしょ。ちょうどこれから更紗、図書室に行くみたいだから」

血の気が引くのが分かった。信じられない子である。これでは、更紗が輝に気があるということをほのめかしているようなものではないか。少し離れたところから輝を呼ぶクラスメートの声が聞こえてきた。ちょっと考える素振りを見せている輝の様子を見ながら、更紗の指先は震え始めた。もし断られたら、昼休み中に立ち直れそうにない。五、六時限目を使って、存分に保健室のベッドのシーツを涙と鼻水で汚してやるしかない。半ば自暴自棄になりかけていた

更紗に、じゃあお願いするよ、という軽やかな天の声が降ってきた。
緊張を緩めた更紗が杏子に強い目を向けると、何を勘違いしたのか彼女は誇らしげな笑みを作り、なおかつウインクなぞしてきた。
更紗は輝を外に導きながら、今後杏子にだけは恋愛相談をしないと固く誓ったのだった。

第５８話：勇者誕生（前書き）

前回の続きになります。好きな男の子を前にして恥らう初々しい女の子のお話です。お楽しみ下さい。

第５８話：勇者誕生

廊下に出て少し歩いたら気分ががらりと変わった。グッジョブ、アンコ。自分より少し背の高い少年を横にして歩く更紗（サラサ）は、友人に感謝の念を捧げた。アドリブはいただけなかったが、彼女のおかげで、まるで……そう、まるで「仲の良い友だち同士」のような風情で――さすがに恋人同士という表現を選ぶほど更紗は傲慢ではない――綺麗な男の子と歩くことができているのだ。結果オーライである。

「サラサちゃんは、どんな本読むの？」

隣からかけられた声に更紗の意識は飛びかけた。

輝（ヒカル）の揃えられた眉のあたりにちょっと怪しむような色が現れる。

更紗が輝の問いに答えられる状態に復帰するまでたっぷり五秒を要していた。

――マズイ。

輝は無視されたと感じたかもしれない。心配になった更紗は、名前で呼ばれて驚いたことを正直に告げた。

輝は柔らかな口元を微笑で染めると、

「ごめん、ごめん。できるだけ早く仲良くなれるように、知り合った人のことを下の名前で呼ぶ癖があるんだ」

いった。とするとクラスメートのことは当然名前で呼ぶのだろう。特別扱いされたわけじゃないことが分かりちょっと残念に思った更紗だったが、

「じゃあ、わたしもヒカルくんって呼んでいい？」

抜かりなく訊いてみた。恥ずかしいという気持ちは無論あったが、更紗は自分が恥じらいを見せて男子の気を引ける女子なのかどうかは理解しているつもりである。二人きりのこの時間は友好を深める絶好の機なのであって、攻められるだけ攻めておかなければならない。恥ずかしいとか何とか乙女チックなことを言っているときでは

ないのである。
　輝は、もちろんいいよ、と言ってうなずいてくれた。心中でガッツポーズを取る更紗。が、外見（そとみ）はあくまでしおらしい様子で女の子らしく見せるよう努めた。
「で、ヒカルくん」
　早速お言葉に甘えた更紗は、何の話をしていたのかしら、と尋ねた。
「本だよ。何かお勧めの面白い本ある？」
「本？　わたしこの頃何にも読んでなくて……」
　と言ったところで、思い出した。今向かっている先は図書室であり、そして図書室に用がある少女が、学校に不案内な転校生を先導するというシチュエーションだったということを。図書室に用があるのであれば、普通は本好きの子ということになるだろう。
「あの……つまり、わたしも久しぶりに読みたくなったんだ」
　本など、ティーン向けの雑誌と少女コミックくらいしか読まない更紗が誤魔化そうとすると、輝はどんな本を読むのかと食いついてきた。振り出しに戻る。読まないなりにジャンルくらいは答えなければならないだろう。
――こういうとき何を読むって言えば、男の子の印象がいいんだろう？
　気の回しすぎかもしれないが、何ごとも初めの印象が肝心である。ファンタジーでは子どもっぽいと思われるかもしれないし、ラブ・ストーリーではそればっかり考えている子だと思われるかもしれない。かと言って純文学は全く知らず、最近のベストセラーも全然読んでいない。古典は頭が痛くなるし、マンガと答える無謀さは持ち合わせていない。
「……ミステリーかな」
　無難な所を選んだ更紗は、何の作品が好きか聞かれる前に、すかさず輝に同じ質問を返した。輝はこの頃よくテレビに出演している評論家の名を挙げると、その著書について熱く語り出した。更紗は

うっとりと彼の熱弁に耳を傾けた。きらきらと瞳をかがやかせながら好きなものについて語る男の子というのは魅力的である。もっとも、他の男子がそれをやっていたらうっとうしい思うだけだろうが。

「ここが図書室だよ」

輝の話を聞いているうちに、上のほうに「図書室」とプレートがかかった戸が見えた。輝はどこかバツの悪い顔をして、

「本の話をし始めたら止めてくれる？　いつまでも話し続けるからさ、オレ」

いった。いつまで話してもらっても構わない、と思った更紗だったが、重々しくうなずいておいた。

おそらく学校一静かな場所であろう。図書室は昼休みの喧騒とは隔絶された世界だった。広々としたスペースに、入って手前に大きなテーブルが数台あり、奥に書架が並んでいる。寸暇を惜しんで知を求める、更紗からすれば奇怪極まりない者たちが、テーブルに腰掛けて本を読んだりノートを広げたりしている姿がちらほらと見えた。

「せっかくだから何か借りようかな」

そう声を潜めた輝が書架に向かうとき、ふと貸し出しカウンターを見た更紗の喉に苦い味が広がった。

カウンターに図書委員の少女が座っている。小顔を彩る軽やかなショートカットに見覚えがあった。クラスメートである。

――まったくカップル揃って……

先ほど三組で会った男子、加藤のカノジョだった。川名環。悪感情があるわけではない。憧れてさえいる子である。だが、よりによってなぜこのタイミングで現れるのか、ということである。

何も卑屈になることはないが、この校内で彼女と張り合える者はいない。更紗の中では、これは厳然たる事実である。折角親交を深めようという男子といるときに、近くにいてもらいたい子ではない。

――ナナミがいるよりはマシか。

更紗は考え直した。

一応環にはカレシがいるので、仮に輝が彼女に一目で心惹かれたとしても安全ではある。カレシがいない美人でないだけ良いと考えるべきだろう。

立ち尽くしていた時間が長かったようである。どうやら環に気がつかれたらしい。彼女は読んでいた文庫本に栞を挟むと小さく手を振ってきた。友好を示されていつもなら嬉しいのだが、今日はそんな気になれない。しぶしぶ彼女のもとへ向かうと、

「何かお探しですか？」

美貌の図書委員がささやいて来た。更紗はお勧めのミステリーなど訊いてみた。輝にミステリー好きと言ってしまった手前、何か借りていった方が良いだろう。

環はカウンターを立つと、文庫本を置いてある書架に更紗を導いた。

「アガサ・クリスティをお勧めします。別名、ミステリーの女王」

ぺらぺらとめくって読んでみてもあまり興味を引かれなかったが、せっかく勧めてくれたものを無下にするのも悪いので、一冊借りることにした。面白いか面白くないかはともかく校内一の才媛が読んだものであれば、書名でバカにされることはないだろう。

カウンターに戻る二人。ちらりと輝の位置を確認したとき、環の視線もそちらを向いたように見えた更紗は、

「さ、三組の転校生で、ここまで案内してきたの」

聞かれもしないことをどもりながら言った。

「転校って今日の話？」

更紗がうなずくと、環は、更紗に少し待つように言い、カウンターの後ろにある事務室に入っていった。事務室と図書室との仕切りはガラス張りで、こちら側から中がよく見えた。環は図書室担当の教師に向かって何か言っているようだった。しばらくして帰ってきた彼女から、転校生でも今日から本を借りることができるという情報を伝えられた。

「教えてあげた方がいいんじゃないかな」

環が、貸し出し処理の済んだ本を差し出しながら言ってきた。本を受け取った更紗は、彼女の如才なさに感心しながら、輝のもとへと歩いていった。

「わざわざ聞いてきてくれたんだ。ありがとう、サラサちゃん」

感謝の目を向けられて、身が軽くなるような心持ちになる更紗。

輝は本を一冊手にすると、貸し出しカウンターへと向かった。更紗もそれに続く。

「男子は誰でも美人好き」という更紗の定説を少し覆すかのように、輝は環を見ても明らかな感動を表したりはしなかった。

図書室を再び出て歩き出したときには、更紗はすっかり環に感謝していた。更紗の輝への気持ちを知っているわけでもない彼女のフォローに少し空恐ろしいものも覚えるが、輝に、よく気のつく子だという印象を与えることができた。よくよく考えてみれば、さっきの三組でも加藤少年のおかげで、輝が更紗のほうに来てくれたともいえる。なかなか息の合ったカップルである。

「幸先がいいな」

更紗はどきりとした。自分が思っていたことを輝に言われたからである。

「いじめられるかもしれないって覚悟してきたら、そんなこともなさそうだし。サラサちゃんみたいに話せる子もできたし」

屈託のない笑顔でそんなことを言われた更紗は首の辺りが熱くなったような気がした。

――ほっぺたが赤くなってなければいいけど。

と思いながら、照れ隠しに、

「寂しかったらいつでも声かけてね。わたし、結構三組に来るから」

冗談めかして言った。

「ありがとう。仲が良い友だちと別れてちょっと心細いんだ。前の学校のことを思い出して泣き出したら、肩を貸してくれる？」

輝も冗談を返してくれたが、その冗談にも心拍数が上がる更紗。

「それはヒカルくんのカノジョに悪いよ」

緊張しすぎたための失言ではない。輝にはいろいろと訊きたいことはあるが、中でもこれが最も優先順位の高いことである。カノジョ持ちにアタックする自分を想像するのはなかなか難しい。いつどういうタイミングで訊くかじっくりと機を窺うつもりでいたが、今なら流れで訊くことができる、と更紗は覚悟を決めたのだった。輝は苦笑すると、カノジョはいないということをちょっと決まり悪げに言った。

有頂天になった更紗は思わず、

「ほんとに？」

と真顔で訊きそうになったが、それをどうにか抑え、軽いノリで質した。

「でも、転校するときに告白されちゃったりしたんじゃない？　『ずっと好きでした。離れてもメールしてね』とか何とかさ」

笑って否定してくれる様子を期待した更紗だったが、輝は真面目な顔で、うん、と答えていた。

「え、どうしたの、それ？」

動揺した更紗は、そう思わず訊いてしまったあとにさすがにぶしつけだと思って口をつぐんだ。気にした様子もない輝は、断ったよ、と簡単に答えた。ほっとした更紗は、

「好きなタイプじゃなかった？」

と続けて尋ねた。どうせだから好きな女の子のタイプも訊いておこうという野心を持ったのである。

「いや、いい子だったよ。オレも少し好きだった、すごくってわけじゃないけど」

「じゃあ、どうして？」

と訊くのは野暮な話だろうか。おそらくその彼女のことを想った輝の思いやりの気持ちからである。転校していく男に告白して遠距離恋愛になっても結局彼女が苦しい思いをするだけだということを考えて、輝は涙を飲んだのである。何という男らしい行動だろう。

勝手な想像の中で一層輝のことが好きになった更紗だったが――

「好きだったんだけど、その告白をされて嫌いになったんだよ」
実相は、更紗の少女趣味的な空想世界の全くの外にあった。
「だってさ、転校するときに告白するくらいなら、どうしてもっと早く告白しなかったのかってことにならないかな。聞くとさ、二年の時から好きだったって言うんだよ。ずっと告白したかったって」
「それは……きっと勇気が出なかったんじゃないかな。もうお別れだって思って勇気を出したのよ」
更紗がごく一般的な解釈を示すと、輝は落ち着いた声で答えた。
「それは勇気じゃないよ」
「……え？」
「何かに強制されないと出せないものって勇気じゃないと思う。オレの転校を聞いてこのままだと自分の気持ちを伝えられなくなるっていう恐怖心が彼女にできて、それで告白に踏み切っただけだよ。それは卑怯な行為だと思う。他人の気持ちを考えないただの自己満足だよ」
輝の言葉には何ら感傷的なところはなかった。その口調から、告白したその彼女には未練を持ってないことが分かる。その点では安心した更紗だったが……
――男子ってこんなに冷めてるの？
ということに軽くショックを覚えていた。更紗から見れば美しい別れの告白も、輝から見れば醜い自己主張の押し付けということになるようである。それが、男子一般に共通する傾向なのか、それとも輝一個の特徴なのかは、男の子と付き合ったことのない更紗には分からなかった。
そのリサーチはこれからするとして、問題は輝自身がそういう厳しい人間だということである。そして、その厳しさを見ても些かも彼から引いていない自分がいるということもであろう。
「ヒカルくん」
更紗は彼の名を呼んで、顔を向けさせると、
「メ、メアドと電話番号を交換してくれますか？」

震えはしたが、はっきりと相手に伝えられる声で言った。
本来はもっと自然な流れの中で切り出したかったのだが、今の話を聞いて気が変わった。小賢しく機を窺うよりも直截(ちょくせつ)に言った方がいいような気がしたのである。二人で歩いているときに急にこんなことを言い出したら気があると思われるかもしれないが、思われたって構わない。現にあるわけであることだし。それよりも、例の彼女のように卑怯者と認識されてしまう方が事態としては重い。
どきどきしながら答えを待つ時間が永久のように感じられたが、実際は数歩あるく間のことである。輝は快くうなずいてくれた。
天にも昇りそうな気持ちになった更紗は、どうやら勇気を出すというのは輝との関係では割の良いことらしい、ということを理解した。
この世界から姫が一人消えて、非常に打算的な勇者が一人誕生した瞬間だった。

第５９話：急襲、グラフィティ（前書き）

いつも読んでくださってる方ありがとうございます。今回のお話でとうとうあの男が帰って来ます。怜の強敵である彼の名は――。
では、第５９話をお楽しみ下さい。

第59話：急襲、グラフィティ

「お、加藤くんじゃん。いつも太一の馬鹿がお世話になってます。馬鹿だけど割といいところあるんで仲良くしてやってね」

もう少しで昼休みも終わるという頃、用を済ませ自分のクラスに帰ってきた怜は、教室の外で声をかけられた。波打つ黒髪にはっきりとした顔立ちの少女である。怜はあいまいにうなずいておいた。彼女の依頼には応えがたいものを感じたが、それよりも何よりも、

――誰だっけ？

にこやかに話しかけてくる少女に見覚えがなかったからである。くもり無い笑みを向けてくる感じの良い彼女に名を問うぶしつけをする訳にもいかず、怜は内心冷や冷やしていたが、少女は気に留めもしないように上機嫌で廊下を去っていった。

後姿を追って首を捻ってみたが、やはり誰だか思い出せなかった。人の顔や名前を覚えるのは大の不得手である。今度突然話しかけられてもまずいと思った怜はちょうど良い機会を得た。おそらく今の彼女を見送りに来ていたのだろう、教室の出入り口にクラスメートが佇んでいた。

「え？　知らないの？　加藤くんと一年の時、同じクラスだったって言ってたけど」

怜の問いにちょっと驚いた顔で答えたのは鈴音だった。真白の夏服の肩にはらりと黒髪が落ちている。

「三組の原田美優ちゃん。瀬良くんと仲が良いらしいけど」

と言われてもやはり思い出せない怜としては、

「きっと綺麗になったんだな。それで思い出せないってことだ」

責任転嫁してみた。

「美優ちゃん、感動するだろうなあ。昔は綺麗じゃなかったって、そう加藤くんが言ってたってこと聞いたらさ」

「スズ、一つ解き明かしてもらいたい謎がある」

「どうぞ」
「善良で平凡な少年がなぜ多くの女の子に悪意を持ってからまれるのか。これには何か陰謀めいたものを感じるんだが」
「その首謀者は五組にいる。あなたもよく知っている子よ」
「そしてその工作員の一人が今まさにオレの目の前にいるってことか」
「まさか、わたしはあなたの味方よ」
「じゃあ、今の話は黙っててくれ。原田のことは今覚えたから」
鈴音がちらりと笑みを見せたのを怜は見咎めた。何も面白いことを言った覚えはない。
「だってさ、もう話してくれないのかと思ってたら普通に話してくれるから」
笑みを収めた鈴音が不思議な言い訳をした。怜が何のことか尋ねると、
「別れた二人だから」
鈴音が冗談めかした口調で説明した。一緒に登下校しなくなったからと言って話していけないこともないだろう。怜がそう言うと、鈴音はいたずらっぽい光を瞳に灯した。
「それはそうなんだけど、もう少し話さなくても良かったかな。惜別の土曜日からまだ二日目だし。せめて一学期いっぱいとかさ。夏祭りの日とかにばったりと会ってさ、そのとき二カ月ぶりに言葉を交わし合うとかね。星降る夜に巡り会う二人……」
「なかなか詩的な表現だな」
「恋をすると人は詩人になる」
その筋で行くと、今付き合っているカノジョは自分に恋をしていないということになる。いまだ彼女から酔っ払いの戯れ言めいたことを聞いたことがないからだ。そうして、最も信頼していると言っても過言ではない少女からそんなことを聞くくらいなら、恋心など得なくても良いと怜は思った。
「どこ行ってたの？　タマちゃんとこ？」

怜は三組に行って部長にレポートを提出してきたことを告げた。今度部で作る新聞用のものである。何箇所かダメ出しされたが、それほどひどいものではなく、あちらで修正しておいてくれるという。

「環と言えば、あいつと話したのか？」

怜は鈴音に訊いた。鈴音と環は先週の土曜日に怜の前で再会したが、それは一瞬のことだったので、あれからのことが少し気になっていたのである。既に怜の手を離れたことであるし、かつ二人とも自分よりは大人であるのでお節介を焼く必要はないことは分かっていたが。

「日曜日に会いました。久しぶりにゆっくりとね」

つい尋ねてしまった怜に、鈴音は優しい声で答えると、その温かみが怜の居心地を悪くするのを嫌うかのように、

「授業始まるよ」

そう淡白な口調で続けて、教室内を歩いた。

自分の席に向かう鈴音に倣って怜も席につくと、ちょうど五時限目のチャイムが鳴った。生徒には時間厳守を要求するくせに教師が遅れてくるとはどういうことだろう。五分ほど遅れて室内に入ってきた担任は自分の遅刻を詫びるでもなく、平然と授業を始めた。とはいえ、実はこの時間の授業は「総合」なのである。「総合」とは、怜の定義によればクラスの雑事を行う時間であった。

怜は時間を無駄にしないように抜かりなく英単語カードで単語の記憶を始めた。クラスのことをするときにあまり感じのいい態度ではないが、周囲はがやがやと話を始めたりと大して変わりはない。めくるめく英単語の世界に没入していると、黒板の前に立っていた委員長の女子が、他に差し迫った問題も無いのだろう、席替えをすることを提案していた。

たまには有意義な発言も為されるものである。怜の今の席は一番前の席で教卓のすぐ近くという特等席。何をするにしても教師の目につく所であり非常に具合が悪い。つまらない授業の時に他の授業の学習をすることなどもちろんできない。周りから歓迎の声が上が

っている。皆何かしら自分の席に不満があるのだろう。

クラス委員長の女子と書記の男子は、手早くくじを作ると、クラスの全員に一人ずつくじを取らせ始めた。取ったくじに書いてあったナンバーと、黒板に描かれた席一覧の位置を照らし合わせてみた怜は、今の席の不運を帳消しにする席に当たったのが分かった。窓際から一列離れた列、後ろから二番目の席である。教卓からあまり目立たない席だった。

教室のおちこちで歓声が上がり、また逆に嘆声が落ちていた。

それから新しい席に移るまでのほんの数分――

それが怜の幸せが続いた時間だった。

例えば、家を建てるときのことを考えてみたい。快適な家に住むためには、土地の広さや地盤の固さ、日当たりなどの条件もあるだろう。しかし、もっと大切なことがある。それは、良い隣人に当たるかどうかということである。

怜は面(おもて)にこそ出さないよう努めたが、心は灰色に塗りつぶされた。相変わらず小雨の降る外の天気よりもなお暗い。

「よお、加藤。同じ班だな」

顔の片面にちょんちょんと思春期特有の印をつけて、にやにやした笑みを浮かべている素敵な彼。その夏服の名札には、長谷川とあった。名前に覚えはないが、その顔と声には覚えがある。落書き(グラフィティ)の二つ名を持つ男である。怜の中では、ずうっと昔に舞台から退場した男だった。それが再び舞台へと上がって来た。怜に向ける顔から敵役だということが分かる。一応いったんは退けた相手である。それがしつこくまた現れた。観客であればブーイングものだろう。ただ残念なことに、怜は観客ではない。同じ舞台にいる役者なのである。

怜は、よろしく、と簡単に声をかけると、彼の後ろの席についた。早くも次の席替えが待ち遠しかったが、少なくとも夏休みまではこの席だろう。是非もない。おそらく日ごろの行いがよろしくないのだろう。もう少し従妹に優しくしてやれば良かったか、と悔やんで

いると、机をくっつけて班になるようにと委員長の号令が下った。
一班は五人から六人の構成となる。怜の班は六人だった。班内で一応自己紹介を済ませたあと、再び委員長の声がかかった。班長を決めろという。
「俺さ、加藤がいいと思うんだけど」
長谷川が実に嫌らしい顔でそんなことを言っていた。苛立ちを通り越して、怜は感心した。いかにもという行動。期待を裏切らない男である。
班長とは、長とは名ばかりの何らの権限も持たない雑用係である。望んでそんなものになりたいと思うのは、ボランティア精神溢れる好青年か、自意識過剰のロクデナシだけである。そのどちらでもない怜が断ろうとすると、班内から、まるでワールドカップ出場を決めた日本代表を迎えるかのような大きな拍手が沸きあがった。
隣で長谷川が醜悪な笑みを湛えている。取り乱して一層長谷川を喜ばせてやるようなサービス精神は怜にはない。
「オレで良ければ」
と平然とした声で班長就任を受け入れてやると、長谷川が落胆した様子が見えた。落胆したのは怜も同様であったがグラフィティを喜ばせてやるくらいなら、雑用をやった方がまだマシである。
席替えを行ったがまだ五時限目は残っていた。その残り時間を自習に使う気の無い受験生失格の男子が、開催までまだ日がある文化祭の話を始めた。修学旅行を二年のうちに済ませてしまう怜の学校では、十月に行われる文化祭が三年生のイベントとしては最大のものとなる。その実行委員を決めようと言うのである。
――まさか……
と思ったが、そのまさかであった。すっとキレイに手を挙げた長谷川が、なんと怜のことを文化祭の実行委員に推薦したのである。さすがに怜は辞退した。六人の一班ならばともかく文化祭を取り仕切るような器はない。雑用の量も班長の比ではないだろう。長谷川とその郎党は強力に怜をプッシュしたが、彼らの勢力は六組内でそ

れほどメジャーなものではなく、押し切ることはできなかった。他のグループから別の候補も数名出たのである。怜が選ばれる可能性も残しながら、話し合いは時間切れとなり、次回に持ち越しとなった。

にやりと胸が悪くなるような笑みを怜に見せてから長谷川は前を向いた。怜は心中でため息をついた。こんなことで傷つくような繊細な心性は持ち合わせていないが、少々げんなりするものを覚えるのは事実である。いわれの無い悪意。これに比べれば、妹のからかいや太一の冗談、日向の敵意、澄の押し売りの友情の方がまだ清々しい。

怜は六時限目と掃除の時間で心を落ち着けることにした。今日は環と一緒に帰ることになっている。ささくれだった状態では環に会いたくなかった。

第６０話：導きの光（前書き）

読んでくださってる方に心からの感謝を。
今回は怜と環のお話です。お楽しみください。

第６０話：導きの光

努めて落ち着こうとしたのだが、胸のうちにざわざわと騒ぐものをうまく治めることができなかった。

腑に落ちない。なぜよく知りもしない男から悪意を受けなければならないのか。それもあるのだが、そもそも彼は悪意を持つことで何かしら得るものがあるのか、ということである。他人に悪意を向けて得られるものがあるとして、それはうす汚れたものに違いない。そんなものを手に入れてどうするつもりなのか。あるいはそういう損得の感情を超えたところにあるのが悪意なのだろうか。

悪意の塊が人の形を取ってすぐ目の前にあるのを見ると、どうにも穏やかならぬ気持ちになる。他人に害意を向けてはしゃぐような下等な人間に心乱されるとはまだまだ修行不足である。それを思い知らせてくれるために彼のような者がいるのだ、と考えて多少心が落ち着いたものの、その思考の進め方には多分に自分への慰めが含まれており、なお心底には澱むものが残った。

帰りのホームルームが終わり教室を出た怜は解放感を感じた。「心は世界よりも広い」と言った古人がいたが、どうやら今の怜の心は教室よりも狭かったらしい。その小さな心で誰とも向かい合いたくはなかったのだが、約束がある。

廊下を歩いて生徒用玄関に着いた怜が下足を履いて、辺りを見回すと、少し離れたところで空を窺う少女の姿が目に入った。人を待っているのか、いつでも下駄箱の方を見やることができるように斜に構えた立ち姿だった。顔が上を向いていることによってあらわになる顎先から胸のラインが綺麗に見えていた。

怜はすっと息を吸い込むと心を決めて彼女に近づいていった。

初夏の空からは朝と同じようにしとしととした雨がゆるやかに落ち、地を潤していた。

「巷（ちまた）に雨の降るごとく……」

ショートボブの黒髪の中でつぶやきを落とした少女の横顔に、怜が静かに、
「フランス詩に浮気か？」
と声をかけると、環は軽い驚きに染まった顔で、
「いつかレイくんが全然知らないことを言って、それについて得意満面に説明してあげたいっていう野望をわたしが持ってること、知ってた？」
口元を笑みの形にして怜を見た。
「初めて知ったよ。でも、その野望はすぐに叶えられるさ。オレは何も知らない」
「そうかな。その割りにレイくんが返答に詰まったところを一度も見たことがない」
「それは環がそういう問いをしないからだろ。カレシを想ってくれる気遣いだとずっと思ってた」
「あら、やぶ蛇だったかな。ヴェルレーヌを読んだことが？」
「そういや、そんな名前だったな。祖父から昔、暗誦させられた詩の一つなんだ。詳しくは知らない」
怜は傘を広げて玄関を出た。環もそれに続く。やわらかな雨の中を二人は歩き出した。
「おじい様ってどんな方？」
「高校の国語の教師だったんだ。いろいろなことを教えてくれて尊敬してる」
「お会いしてみたいな」
「会えるさ。夏休みに本当にオレと同行してくれるなら」
「問題があるとすれば父だな」
「お会いできるように取り計らってくれ」
「今週の土日でも？」
怜が重々しくうなずくと、環はわざとらしく咳払いをした。
「お忘れですか？　今週の土日はデートのお約束だということを」
もちろん忘れてなどいなかった。何しろ怜の方からメールして約

束したことである。従妹が来たその日の夜に環にメールしておいたことだった。しかし、事の大小を問えば、どちらを優先すべきかは考えるまでもないだろう。

「まさか父にカレシを取られるなんて思いもしませんでした」

「この一週間で円ちゃんにカレシができて、次の週末にお父様にご挨拶したらどうすんだよ？」

「都合がいいじゃありませんか。妹のカップルが終わってから、なし崩し的に姉のカップルということで」

「朝と言ってることが違うぞ」

「カレシさんと一緒に登校した嬉しさで頭がぼおっとして朝のことは良く覚えてません……あ、でもレイくんが『ずっと一緒にいたい』って言ってくれた言葉は耳に残ってます」

そう言うと試すような目で環は怜を見た。どうにもそんなことを言った覚えはなかったが、環がそう言うならそういう類のことを言ったのだろう。そういうことにしておいた。

「デートはどこに行く、レイくん？」

「映画は？」

「ちょうど観たいと思ってたものがあるの」

「いや、今回はオレに選ばせてくれ。ラブ・ストーリーを観たいんだ」

環は意外そうな面持ちを作った。

「ごめんなさい、レイくん。まさかラブ・ストーリーが好きだったとは知らなくて、今までわたしの趣味に合わせてくれてたのね」

「逆だろ。タマキがオレが退屈するだろうと思って、わざとアクションにしてくれてたんだろ」

「え、わたしは別に……」

「いや、何も言うな。部活の後輩が言うんだよ。『川名先輩みたいに可愛い女の子がアクションなんか見たいわけがない。それに気づかない加藤先輩は鈍感すぎます』って。オレは反論したんだけど、まあ、何と言ってもあっちは女子だからな。女心は男には分からな

いって言われるとそれ以上はどうしようもない」
「……」
「オレの配慮が足りなかった。反省してる。だから今回はラブ・ストーリーを観よう」
環はふと足を止めると、つられて止まった怜に身を寄せて、怜の傘に入りながら自分の傘を畳んだ。
雨の匂いにふわりと清らかな香りが漂った。
「それで？」
環の目がその長い睫毛を数えられそうなほど近くにあった。
怜は観念して真実を話した。部で新聞を作る資料に今人気の恋愛映画を見ておきたいのだと正直に告げた。環は、まあ、と呆れたように口を開くと、傘を持つ怜の腕に自分の手を添えた。
「罰ゲームか？」
相合傘の状態で歩かされることになった怜が訊くと、環はつんととげのある顔で前を向いてそれには答えなかった。
制服がしっとりと濡れて少し重くなったように感じた。二人で歩を合わせて歩いているのでゆっくりとした足取りである。
自分の傘があるにも関わらずカレシの傘に入る愛らしい少女と、それに戸惑ったような様子を見せている少年。歩道をゆく微笑ましい中学生カップルを冷やかすような視線が時折りすれ違い様にかけられた。
デートに部活動の事情を持ち込んだカレシに対して、環は怒っているのだろうか。環を怒らせることができたのなら快挙である。なにせ、彼女が怒ったところを怜は見たことがない。とはいえ別段褒められるようなことでもない。気遣わしげに環の横顔を見ていると、怒りモードに入って五分ほどした頃か、ふふっという小さな笑い声が怜の耳を軽やかに打った。
「ごめんなさい、やっぱりわたしには無理みたい。スミちゃんがね、ちょっと拗ねてみせると男の子って優しくしてくれるっていうから。つい魔が差して」

環はぺろっと舌を出した。
全くロクでもない話である。とはいえ、そもそもは自分が悪いので、怜は環を責めることもできなかった。
いつの間にか、怜の心から角が取れていた。環と歩いているうちに水に洗われた石のごとく心が丸みを帯びてまた同時に爽やかな心持ちになっていた。
「何かあったんでしょう？」
唐突に環が言った。
穏やかではあるが確信を秘めた声で、怜はうなずかざるを得なかった。
「頼むから、『悩み事をしてるときレイくんは頬を掻く癖があるのよ』とか何とか言ってくれないか」
怜は藁をもつかむ気持ちで言ったが、環は、
「普段どおりにしようって思ってるんだろうけど、レイくんのことはわたしには何となく分かるの。諦めてください」
さらりと言ってのけて、カレシを絶望の淵に突き落とした。
不公平である。怜には環のことはさっぱり分からない。
「生きるとはその不公平に耐えることです」
「分かったよ、叔母さん」
「今、何て？」
「尊敬する叔母がいるんだ。口調がそっくりだったんでつい」
「もう一度言ったら、今度は晴れた日に日傘で相合傘してもらうから」
怜は口を閉ざした。何があったか説明する気はなかった。
霧のような雨が路面を、草木を、家々を打って優しい音を奏でていた。
傘の中には二人だけしかいなかった。
わたしね、とおもむろに口を開いた環の言葉は、雨音に吸い込まれるほどかすかだった。
「もし叶うなら、レイくんの世界の光になりたい。あなたを導く光

に」

さわさわという雨の音を縫って聞こえてきたのは透明な声だった。

環はまっすぐに前を見ていた。横目で窺うようなことさえしていない。

怜ははっとするものを覚えた。環は自分の言葉を受け止めて欲しいとは思っていない。彼女はその言葉でもって相手を全力でたたき斬ろうとする。そうして、もし相手が易々と斬られるような間抜けであれば、もはや一顧だにしないに違いない。その厳しさは同時に環の覚悟を示していた。もし相手を斬ってしまったら、次には刃先を己の体に向けるに違いない。そういう覚悟をもった言葉だからこそ、どこまでも鋭く胸に響くのだった。

その響きが綺麗にこだまする中で、怜は自分を認めてくれる存在が確かにここにいるということをはっきりと認めた。そして、それは環だけでなく、例えば鈴音もそうだろう。賢も太一も俊もそうだと思う。自分以外に自分のことを認めてくれる人間がいるということはこの上なく幸福なことである。それに比べれば、些かの不運などどうということもない。

「ありがとう」

怜が真情からの声を出すと、そこでようやく環の顔がこちらを向いた。

その瞳はまるで怜だけを見ているかのようだった。

第６１話：無法者を待つリアル（前書き）

いつもありがとうございまーす。
今回は宏人くんのお話です。一人の少女を守るためにクラスを敵に回すことを選んだ少年。彼の運命や、いかに。第４１、４２、４４話の続きになります。

第６１話：無法者を待つリアル

何かを間違えたことに気がつくのに学校に行く日で数えて三日かかった。何かがおかしい。途中の計算を間違えてとうとう合わなくなった数学の答えのごとく、どこかでミスをしてしまった自分を宏人は感じていた。しかも、数学であれば模範解答と己の答えを照合できるのだが、宏人が直面している問題には解説はなかった。

クラスメートの藤沢志保のことである。

様子がおかしい。いや、彼女自体には変わりはないのである。もともと目立たない子で、行動を変えたわけでもなく、やはりひっそりと学校生活を送っている。変わったのは、宏人に対する態度だった。話しかけてもどこかよそよそしい。もちろん、彼女とはそれほど仲が良かったわけではなく、話すようになって数日という付き合いに過ぎないのだが。

――それにしても……

と、はっきりと怪しむ気持ちが出てきたのはつい先ほどのこと。朝の教室に入って、いつものように本を読んでいる志保に挨拶したのだが、彼女はちらりとだけ本から目を上げて挨拶しただけで、すぐに本に戻ってしまった。まるで、話しかけないで欲しい、という拒絶の意思表示のように見えた。

――え、もしかして避けられてるのか、オレ。

ということを直感した宏人はそれ以上話しかけるわけにもいかず、自分の席につくしかなかったのである。そうして、席について、志保の態度が変わった理由について考えていたというわけだ。

今になってよくよく考えてみれば、先週の「給食時仲間外れ事件」の直後から、彼女の態度が少し変わっていたようである。宏人が冗談を言っても笑みを見せなくなった。ただ、それはそれ。女の子の気持ちなど分からない健全な男子中学生としては、その態度をもって嫌われてると断定するわけにもいかず、めげずに話しかけていた

というわけである。
ただ、それも三日目になると、いくら鈍感な宏人としても気がつくというものである。
では、なぜ嫌われたか。原因に心当たりはない。会話の中で何か不適切な発言をしてしまったのだろうか。女子に対しても大した遠慮をするわけではないので、そういうこともあるかもしれないが、男女問わず、人に接する時は最低限の礼儀は通しているつもりである。
さっぱり分からない。
「頭でも痛いの？　倉木くん？」
宏人が首を捻っていると、斜め前から心配げな声がかかった。二瓶瑛子である。いつもは肩に流しているセミロングの黒髪が今日は低い位置で軽くまとめられていて、たったそれだけのことで人の目を引くような愛らしさが彼女にはある。
「さっきからうんうん唸ってるから、大丈夫かなって」
宏人はドキドキしながら、何でもない旨を伝えた。むしろ、クラスのマドンナ的存在に話しかけられてる今の方が大丈夫ではない。
「なら良かった。今日の英語の予習やってきた？」
「もちろん」
「真面目だね、倉木くんって」
「それって褒め言葉？」
「もちろん。そして感謝の言葉でもあるよ」
「感謝？」
瑛子は物欲しげな様子で手を差し伸べてきた。
「わたし、今日当てられるかもしれないんだ」
「二瓶が予習してきてないなんてことあり得ないだろ」
「倉木くんは、わたし自身よりわたしのことよく知ってるんだね～」
からかうように言う瑛子に、宏人は英語のノートを手渡した。瑛子はにこりと微笑んで、今すぐ返すから、と言って自分の机に向かい横顔を見せた。

宏人は、好意を持っている女の子と話をして、ほんわかした気分になったが、すぐにそれは冷めた。周囲からひややかな視線を送られていることに気がついたからである。宏人にではない。瑛子にである。宏人はすでにそういうひややかな視線さえ送られない位置にいた。

志保の味方になることを婉曲に示した例の事件以来、宏人はクラスから孤立した。ほとんど誰からも話しかけられなくなり、またこちらから話しかけても一言、二言が返って来るだけで、何だか事務的に対応しているだけのような反応だった。メジャーグループのリーダー男子、松本の意向である。

宏人は晴れて追放者になった。クラス内秩序から外れた人間になったわけである。こうなると秩序内の恩恵は全て受けられなくなる。普段の会話から、班になったときの班行動、行事への参加権など、クラス生活を楽しむありとあるものが奪われる。

そして、追放者と話す人間は連累と見なされ新たな標的となる。それが瑛子だった。宏人の周囲の人間で彼女だけは態度を変えていなかった。女子であることもあり、さらにはそもそも誰にでも愛想よく振舞っていたこともあって、さすがの松本にも瑛子を仲間外れにするだけの力はない。ただし、松本は女子のメジャーグループのリーダーとも仲が良く、実は瑛子はそのグループに属している。とすれば、そのリーダーを通して松本から瑛子に、

「倉木には話しかけるな」

という警告が伝えられていることは十分に考えられる。にも関わらず、瑛子の態度は変わらない。宏人の好感はますます高まった。

とはいえ、そうして好意を抱いている子が、自分のせいでクラス内の立場を悪くするのではやり切れない。

「ありがと」

作業を終えた瑛子が差し出したノートを手に取りながら、宏人は、できるだけ早いうちに折りをみて、自分には話しかけないほうがいいということを伝えるよう決意した。

瑛子のことも問題だが、志保のほうがもっと差し迫っている。少し離れたところから彼女の癖毛の頭を見ながら、たっぷりと四コマ分の授業時間を使って思い悩んだ宏人だったが、答えは出なかった。また、仮に出たとしてもそれが正解なのかどうか分かるはずもないということに気がつき、思い切って行動に移ることにした。

昼食後に志保が席を立って廊下に出たのを、宏人は追いかけた。後ろから声をかけて、彼女を立ち止まらせると、どこに行くのか尋ねた。

「……男子には言いたくない所です」

伏し目がちにいう志保。

ごめん、とぶしつけを詫びた宏人は、ちょっと話があるということを告げた。

「どんなお話ですか？」

「ちょっと微妙な話。二人きりで話したいから、教室以外の所で話したいんだけど」

「……分かりました」

「オレ、女子トイレの前で待っててもいい？」

「や、やめてください！」

志保は生徒用玄関の所で待つように言ってきた。

「校庭の隅だったら誰にも聞かれませんから」

言われた通りにして、下駄箱のある生徒用玄関で彼女を待っていると程なくして、志保は現れた。二人して下足に履き替えて外に出る。眩しい昼の光の中を少し歩いて、二人は校庭の隅にたどり着いた。校庭では、さまざまなスポーツに打ち興じる生徒たちが喚声を上げていた。

「この辺でいいですよね」

緑の葉を茂らせる桜の木陰に入った志保が言った。

「それでどういうお話ですか？」

宏人は単刀直入に切り出した。なんで嫌われてるのか。なにか悪いことをしたか、訊くと、志保はふるふる、と頭を横に振った。

「嫌ってなんかいませんし……倉木くんはなにも悪いことなんかしてません」
「え？　じゃあ、やっぱ、オレの勘違いか。じゃあ、いいんだけどさ」
ほっとしたように息をつく宏人に、
「いいえ」
と少し下の位置から視線を上げる志保。
「倉木くんを避けてたのは本当です」
何も悪いことをしてないのになぜ避けられなければならないのか。怪訝な目をする宏人に、志保は、
「わたしと話していると、倉木くんに迷惑がかかると思って」
と静かに告げた。
すっと腑に落ちるものがあった。詰まる所、志保は宏人と同じことを考えていたというわけである。宏人が瑛子に忠告しようとしていたことを、志保が宏人にしていたということなのである。宏人は自分の鈍さに呆れた。
志保の話は続いている。
「先週の金曜日に倉木くんがわたしに給食のお椀を出してくれたことはとても嬉しかったんですけど……あれで、松本くんたちから倉木くんが無視されるようになったみたいで、それが申し訳なくて。わたしと話さえしなければ、少し経てば、また松本くんたちのグループに戻れると思うから。だから……」
しめやかな調子の言葉を聞いているうちに、宏人は怒りを覚えてきた。なぜこんな風に志保や自分が遠慮しなければならないのか。理不尽である。クラスのメジャーグループに属さないからといって、どうして肩身を狭くしなければいけないのだろうか。
「……倉木くん？」
怖い顔をしていたのだろう。どこか怯えが混じった声で志保がこちらを見ているのに、宏人は気がついた。
「わたしのことは、気にしないでください。一年のときもこういう

感じだったし、慣れてるから。これは強がりとかじゃなくてね。本当に大丈夫。だから、もうわたしには話しかけないで」

それだけ言うと、志保はぺこりと頭を下げて、宏人が止める間もなく、早足でその場を立ち去った。

宏人が視線を向けた志保の背には同情を拒むような風があった。

宏人は、志保の言った言葉を胸のうちで反芻していたが、彼女の優しい要求の諾否を考えるのにほとんど時間を要さなかった。

第６２話：騎士の称号を得た少年（前書き）

いつも読んでくださってありがとうございます。
今回も宏人くんの話で前回の続きです。志保に助力を断られた宏人が取った行動とは――。
では、お楽しみください。

第６２話：騎士の称号を得た少年

「どうしたの、ヒロトくん。こんな所で」
軽やかな声が耳を打ち、いや耳を打ちつけて耳鳴りを覚えた。部活動が終わった夕刻。校舎の裏門前で佇んでいた宏人（ヒロト）は、おそるおそる声がかけられたほうを向いた。会うかもしれないことに対して一応覚悟はしていたのだが、それは半端なものだったようである。胃が重たくなるのを感じながら視線を向けた先に、予想通りの一人の少女の姿。
肩掛けタイプの鞄を提げたジャージ地の運動服姿の姉が、いかにも弟が可愛くてしかたがないという風を装った笑顔でそこにいた。家の中では鬼面しか向けたことのない姉が、そんな顔をする原因が彼女の横に二人立っている。同じテニス部の部員の少女たちである。
「もしかしてお姉ちゃんを待っててくれたの？」
姉が気持ちの悪い甘やかな声で続けた。まさか自分の弟に自らシスコンの烙印を押してやろうとは恐れ入ったことである。ノーマルでいたい宏人は仕方なく、志保を待っている旨、正直に答えた。
「シホちゃんに何の用なの？」
「藤沢、どこにいるの？」
「もう来ると思うけど……」
姉の目が鋭く光り、質問に答えろと促している。宏人は、
「これから藤沢に告白しようと思ってるんだ」
とぞんざいに答えた。え、と意表を衝かれた顔を作る姉。その近くで聞いていた二人の三年生女子が、わあ、と小さく歓声を上げた。その二人に向かって、
「だから、すみませんけど、ブラコンの姉を連れてってください。嫉妬して、告白の邪魔するかもしれないんで」
宏人は軽く頭を下げた。とてもとても姉の方は怖くて見られなかったが、二人の先輩女子が気を利かせて、姉を連れ去ってくれたの

で見なくて済んだ。家に帰ったあとが恐ろしいが、それよりもどうしても今日処理したい問題があるのである。微妙な問題なので、なんらの形であれ、姉に関わってもらいたくない。

友人に引きずられるようにして姉が立ち去ったのち、何人かのテニス部員たちをやり過ごし、待つと、こちらを認めたくせにそそくさとその場を離れていった一人の少女に宏人は目をつけた。小走りして癖毛の彼女の隣に並ぶと、宏人が話しかけるより先に、

「ど、どうしたの、倉木くん？」

と、さも意外そうな調子の声がかけられた。宏人が、

「それはこっちのセリフだ。何で逃げるんだよ、藤沢？　オレはストーカーか？　フラれたけどお前を諦めきれない元カレか？」

と、軽く責める色を含ませて尋ねると、すみません、と志保は悄然と肩を落とした。

「藤沢、家どっち？　歩きながらでいいよ、話したいことがある」

「わたしと歩いてたりしたら――」

宏人は志保の言葉を手を出して遮った。彼女の言いたいことは分かっている。一緒に歩いてる所を誰かに見られたらクラスでの宏人の立場がさらに悪くなるということだろう。

「さっき逃げたのもそういう理由？」

宏人が確認すると、志保はこくんと小さくうなずいた。

「藤沢って弟いる？」

宏人は志保にそのまま歩くよう促しながら尋ねた。話題の急変に戸惑う素振りを見せながらも志保が、います、と答えると、

「同級生にこれだけ気を遣えるってことは、メチャメチャ面倒見てるんだろうな？」

と宏人。半分嫌味である。心遣いは嬉しいが、遣われ過ぎというのも男の子としてのプライドが傷つく。

「そんなに繊細に見えるか？」

下を見て押し黙ってしまった志保と宏人はしばらく無言で歩いた。空にはあかあかと燃える夕日があって、その一方で地には薄闇が広

がりつつある。昼と夜が出会う時間帯だった。宏人は気分を切り替えた。こんな嫌味を言うために、姉を無理に退けるという危険を冒したわけではない。藤沢、と声をかけたが、彼女が答えないので、宏人は勝手にしゃべり出した。

「昼間のことなんだけどさ。お前、オレにもう話しかけるなって言っただろ……まあ、早速話しかけてるわけだけど。オレさ、これからも普通に話しかけるよ、お前に。別にいいだろ？」

宏人は答えを待ったが、志保は何も言わず俯いたままだった。

「だって、おかしいだろ。クラスメートに話しかけちゃいけないってさ。お前の気遣いはありがたいけどさ、オレ、松本のグループに戻りたいとか思わないし。この前の給食の時のことだって後悔なんてしてない。……っていうか、今思えば、あのスープを、松本たちにひっかけてやれば面白かったな」

うんうん、と冗談めかして一人納得した振りをした宏人はふと立ち止まった。志保が歩みを止めたからである。

「倉木くん……」

志保は真剣な光を湛えた目で宏人を見つめた。宏人は、はっとした。彼女の真剣さもそうだが、思いもよらず綺麗な瞳だったのでびっくりしたのである。いつも伏し目がちな志保としっかりと目を合わせるのは初めてのことだった。二重まぶたが彩るやや吊り上がった目の中には一点の曇りも無いように見えた。

「倉木くんは何も分かってないよ」

志保が、いつもと違ったはっきりとした口調で言った。それも宏人を驚かせた。

「どういうことだよ？」

動揺を極力鎮めようとしながら宏人が訊くと、志保は真情をぶつけるような言い方をした。

「松本くんたちのグループに戻らないってことは、毎日話す人もいなくなるし、これからクラスで行事があるたびに仲間外れになるってことだよ。十月には修学旅行もあるし。もし、わたしに同情して

くれてるなら、そういうのはやめてもらいたいの。お昼のときに言った通り、わたしは慣れてるから、大丈夫。倉木くんはそういう目に遭ったことがないから、多分イメージがちゃんとできてないんだよ。だから、今の事態を軽く見てる」

志保の口調はしっかりとしたものだった。気のせいだと思いたいが、何だか姉にものを言われているような気分だった。宏人は拳を作って手の平に爪を食い込ませ、幻想を振り払うと、今志保が言ったことは既に考慮済みであることを告げた。

「頭の中でちょっと考えたことね、実際のことは全然違うよ。だから、もう本当に……ね、倉木くん」

志保は瞳に苦悩を滲ませた。

――オレはしなくても良いお節介をしてるのか？

と一瞬疑いの気持ちが生まれたが、宏人はそれをすぐに消した。というのも、仮にお節介であったとしても、先週の金曜日に起こった『お前には給仕してもらいたくねーよ』事件のようなものを、見過ごす気持ちになどなれないからだ。志保が余計なお世話だと感じていたとしても、究極的には宏人の行動に影響を与えない。

「どうしてもなの？」

確認をするような志保の問いに、宏人は力強くうなずいた。

「クラスの子と話せなくなるよ」

「藤沢がいるだろ」

「行事では仲間はずれにされるよ。雑用ばっかやらされるかも」

「雑用も立派な仕事だろ」

「修学旅行で誰からも班を組んでもらえなくなるよ」

「上等。そうなる前に、担任に『オレは一人の班になる』って宣言してやるよ」

高らかに言い切った宏人の前で、志保はその顔を両手に埋めるようにすると、何かに耐えるように肩をふるわせ始めた。

こんなときどういう対応をすれば良いのだろうか。これまで深刻な状況に陥った女の子に対したことなどない宏人には、対処の仕方

がまるで分からなかった。慰めれば良いのか、それとも励ませば良いのだろうか。ただ、分からないのは幸いだった。かっこつけて、

「泣くなよ、藤沢」

なんていう声をかけたり、彼女の肩をぽんぽんと優しく叩いたり、もしそういう類のことをしていたら、恥の上塗りになっただろう。

というのも――

「ふ、ふふ……あはははははは」

慰めも励ましも必要なかったからだ。志保は、宏人から体をそむけると、どうにも抑えられない様子で笑い出した。

宏人は呆然とした様子でそれを見ていた。てっきり泣いているものとばかり思っていた少女が、薄暗くなってきた空に向かって呵呵大笑しているのだから、当然の反応であるといえる。

「あ……あの、藤沢……さん？」

ケタケタと笑い続ける少女に、宏人はこわごわと声をかけた。もしかしたらあまりの緊張のためにおかしくなってしまったのか、と心配したがそれは杞憂であった。ひとしきり笑ったのち宏人を見た志保のその瞳に狂気の色はなかった。

「自分がお姫様になるとは思いもしなかったわ」

澄んだ目を向けてくる志保に、宏人は首を傾げた。何のことを言っているのかさっぱりである。訝しげに次の言葉を待っていると、

「倉木くんは、アレでしょ。騎士（ナイト）になりたいんでしょ。か弱い女の子の盾になる役。人選を間違えたみたいね。わたしは、悪いけどさ、そういうガラじゃないんだよね」

さらに混乱させる言葉がかけられた。話が全く見えない。

志保は、宏人の理解力のなさに呆れ顔を作った。

「分からない人だなあ。だからさ、クラスの中で無視されてることとか、この前の給食の時のこととか、そんなのわたしはこれっぽっちも気にしてないってことよ。でも、平然としてると嫌がらせがエスカレートするかもしれないから、適当に傷ついてる振りをしてるってこと」

「振り……だって？」
　ようやく少し分かってきた宏人だったが、さらに踏み込んだ理解をとどめようとする何ものかがでんと横たわっていた。これ以上は考えない方がいいよ、と頭の中で声がする。持ち前の誠実さでもってそのメンタルブロックを破壊した先にあったのは、
「つまり、オレは勘違いしてたってことなのか？」
　という救われない答えだった。志保の頼りなげな仕種や儚げな気配は全て演技だったということである。それを彼女の実態だという風に勝手に思い込み奮闘していた哀れな役者が宏人だったという訳である。
　志保は答えない代わりに、その唇に不敵な笑みを浮かべていた。彼女はこれまでとがらりと雰囲気を変えていた。その瞳に繊細な色はもはやなく、強く自信に満ち溢れた光が差していた。
「う……嘘だろ」
　と思いたかったが、志保から感じる確かな威というものがあって、それが彼女が言葉だけで強がっているわけではないことを明確に示していた。
「お前、今までオレを……」
「オレを何？」
　騙してたのかと続けそうになった宏人は慌てて口をつぐんだ。そういう責め方はお門違いである。別に志保が助けを求めてきたわけではない。宏人が勝手にしたことである。
　宏人はぶんぶんと首を横に振ると、セリフを差し替えた。
「これまでのクラスでのお前はネコかぶってたってことか？」
　はっきりと確認したい宏人が言わずもがなのことを訊くと、何が面白いのか、いや事実面白いのだろうが、志保がにやにやしながらゆっくりとうなずいた。
　宏人は、ふらふらする体を、歩道に沿って植えられてある立ち木の一本に寄りかからせた。とても自力で立っていられそうにない。この数日間いろいろと悩んだことや、良かれと思って取った行動が

全て無駄……というより志保の迷惑になっていたのである。しかも、ナイト気取りとまで言われ、それにはっきりと反論できない自分がいるのを認めざるを得なかった。女の子を助ける役の自分に酔っていなかったかと言われると……。

「まあまあ、誰しも、そーいうこともありますよ。あまりお気になさらずに」

「藤沢……」

「なあに？」

「オレってピエロか？」

「うん。一流のね」

宏人は、木に寄りかからせていた肩をがっくりと落としてその場に座り込んだ。穴があれば、ためらわず入っていただろう。周囲を見回すと、少し離れたところにマンホールがあった。あそこでもいいか、と沈みきっていると、

「でさ、さっきの話、どうする？」

上から軽やかな声が降ってきた。こちらのショックをまるで意に介さないようなそのお気楽な声の主に、宏人は最後の力を振り絞って強い目を向けてやったが、志保は宏人の凶相をものともしなかった。志保は静かに宏人に手を差し伸べると、

「この手を取る？　それとも松本くんたちのグループに戻る？」

挑戦的な声で言った。

彼女の手を取る魅力は激減したが、それでも宏人はためらわずその手を取った。もうこうなったら自棄（やけ）である。志保としては、おそらく宏人に松本グループに戻ることを期待しているのであろうが、彼女の期待通りのことをしてやる気は今の宏人にはない。それに、松本たちがしていることにはどんな形であれ加担したくない、という気持ちは本当だった。

志保が軽く手を引くようにするのに従って、宏人は立ち上がった。

「もの好きな人だな。わたしを選ぶなんて」

「迷惑じゃないのか？」

精一杯の皮肉を言ってやると、志保は平然と、別に、と答えた。
「さっきはあなたのことを想っただけよ。何にしても助けてくれたわけだからさ。それより、三十分くらい時間ある？　ちょっと付き合ってもらいたいんだけど」
唐突な誘いにも、宏人は二の足を踏まなかった。ショックを受けすぎて、重ねて何が起きても驚きそうにもない。
志保は手を放すと先に立って歩き出した。宏人は制服のズボンの尻を叩いて土を払うと、志保の背を追った。

第６３話：ハイドアウトの密談

通学路から少し裏に入ったところに連れて行かれた宏人は、一軒の喫茶店を見た。駐車スペースが二三台ほどしかない、小ぢんまりとした店である。喫茶『シルビア』。どこかで聞いたような気がする名だった。確か母が何かの集まりでコーヒーを飲んだと言っていたような気がする。

「美味しかったけど、高かったのよね」

どうやら主婦が気軽にお茶をするには敷居が高いらしい。とすれば、中学生はなおさらということになり、校則で喫茶店入店が禁じられていることもあるので、志保がずんずんと臆せずに店構えに向かっているのを見て、宏人はどきっとした。

「おい、どうするんだよ？」

「立ち話もなんだから、お茶でもしながらと思ったんだけど」

何ということも無い口調でいう。もはや志保は全くの別人であった。せめて彼女が二重人格ででもあってくれれば面目も多少は保てるというものである。宏人が助力したのは、多分人見知りの激しい優しい人格の方だったのだ。そうに違いない。

「クラスで仲間はずれになる勇気はあっても、喫茶店に入る勇気はないの？」

人の目など全く意に介さない厚かましい人格の方が、からかうような目を向けてきた。そんな安い挑発に乗るような宏人ではない。勇気と無謀とは違うのである。立ち止まった宏人に志保は、

「大丈夫よ。実はここ叔母が経営してるの」

と、自信の種明かしをしたあと、宏人を手招きした。安心した宏人を後ろにして、志保が喫茶店にしては重厚な造りの扉を開けた。からんからん、というきれいな鈴の音が鳴る。入り口は二重扉になっていて、もう一枚軽いドアを開けた先が店内だった。

ウエイトレスの制服を着た女性が、いらっしゃいませ、と淑やか

な声で言って頭を下げた。その下げられた頭が上がったとき、営業用スマイルが和らいで心からの笑みになった。
「シホちゃんじゃないの」
「こんばんは、叔母さん」
女性はきっちりと整えられた眉を顰めた。
「おばさんっていう言葉がさ、血縁関係を表す意味じゃない他の意味に聞こえてしまう微妙な年なのよ。できれば名前で呼んでくれる？」
「三十三だっけ、菫（スミレ）さん？」
「失礼ね、まだ三十二よ」
「一歳の年の差を気にする所がおばさんなんじゃない？」
「何て嫌な子なのかしら」
「年なんてどうでもいいじゃない。その制服、この店の誰よりも似合ってるよ」
「何て良い子なの」
感激する女性を、志保は自分の叔母だと言って、宏人に紹介した。
「経営者なのに制服を着る無類の制服好き」
「変な言い方しないでよ、志保ちゃん。店長みずから着ないとどーいうもんなのか分からんでしょ。従業員のことを考えて仕方なく着てるのよ。それよりさ、もしかしてこの子が？」
志保はちらりと宏人を見ると、片手で顔を隠すようにして恥ずかしげな様子を作った。
「はい、カレシです」
何度も驚かされるのもしゃくであった宏人は、志保の突然の告白にも動じずに、
「初めまして。志保さんとは十分前からお付き合いさせていただいてます。もう別れようかとひそかに思ってます」
言ってやった。その瞬間、宏人は鈍い痛みを両肩に感じた。間をつめた志保の叔母が、がしっと宏人の両肩を掴んでいたのだ。
「ええっと、君名前は……そう、ヒロトくんね。ねえ、ヒロトくん、

シホちゃんは確かに一見性格悪いけど、一見可愛げがないけど、一見付き合いにくいけど、でも、とってもいい子よ。それにね、まあ今はこんな程度ですけど、ゆくゆくはわたしみたいな美人になるからさ。これは買いですよ、お客さん」

妙齢の女性に間近に来られて恥ずかしいこともあるが、それよりも爛々と燃える目が怖い。

「別れないであげてね」

言葉と手に力がこもっている。

宏人は、ぶんぶん、と首を縦に振った。

「じゃあ、二名様ご案内」

店内は薄暗かった。外から光をほとんど取り入れていないようである。灯りはもっぱらランプの緩やかなものである。いい具合に観葉植物が配されているので、それぞれのテーブルが別のテーブルからあまり窺えないようになっている。隠れ家みたいだな、と宏人は思った。

テーブルに着くと、

「お勧めの紅茶とケーキを持ってくるから」

と言って、志保の叔母は去った。

鞄を下ろして席に着いた宏人は、

「いつカレシになったんだよ？」

先の冗談の理由を訊くと、

「じゃあ、千二百円払う？」

真剣な声音で過激な答えが返ってきた。

「初めてカレシができて、そのカレシとのデートでここに来るときはいつでも無料にしてくれるっていう約束なのよ。わたしお小遣いは月三千円しかもらってないんだけどさ、倉木くんは？」

「同じく」

「それじゃ、お互いのために恋人同士でいましょうよ。そうすれば、美味しい紅茶とケーキが無料で食べられる。ね、ヒロト」

カレシの件は了承したとしても、

「何でいきなり呼び捨てなんだよ？」
訊くと、知らないの、と大げさに驚いた風を作って志保。
「古来からのしきたり。恋人同士は名前で呼び合うのよ。わたしのこともシホって呼んでね」
「分かったよ。シホちゃん」
「何でちゃん付けなの？」
「知らないのか？　男は、名前で呼んでくれってカノジョに言われても、初めのうちは恥ずかしくてできなくて、ちゃん付けで妥協するんだよ」
一体何の話があってここに連れてきたのか。まさか無料でケーキを食べるための口実にしたわけでもないだろう。宏人が口を開こうとしたときに、紅茶とショートケーキが現れた。
「ごゆっくりねと言いたいところだけど、もう遅いから、また次の機会にゆっくりと来てね。それを食べたら速やかにお帰りなさい」
志保の叔母が再び去ったのち、宏人はフォークに手を伸ばした。甘みが抑えられた上品な味のケーキである。隣に置かれたアッサムティとの相性は抜群だった。今日あった嫌なことも忘れ、しばし幸せな気分に浸っていると、正面に座っている少女が心持ち居ずまいを正した。
「わたしたちで二年二組を支配しよう」
口をつけていたティカップをソーサーに戻した宏人にかけられた言葉は、非常に抽象的で何だかよく分からなかった。
「支配？」
「そう」
店内に静かに流れるゆるやかなクラシック音楽を聞きながら、しばらく考えてみたが、分かったのは自分の馬鹿さ加減だった。つまり何も分からなかった。
「オレはこれまで普通だと思ってきたけど、どうやら普通以下だったらしい」
「そんなに落ち込むことないよ。これから努力すればどうとでもな

るからさ。前向きに生きてください」
　励ましの言葉をかけられてどうにか立ち直った宏人は、不出来な聞き手のために、もう少し噛み砕いて説明してくれるように頼んだ。
「二組をわたしたちの意のままに操るってことよ。今、松本がやってることをわたしたちがする。差別したい人間を差別したり、クラス行事の分担に裏から手を回したりする」
　志保の声は穏やかで力みがない。そういう調子で語られると、こっちの方がおかしいのかという気になるが、やはり変なことを言っているのは向こうのほうである。
　宏人の困惑を気にせず、志保は説明を続けた。
「このままだと、今年の一年間はロクなことにならない。それはさっき言った通りよ。それが嫌なら戦うしかない。わたしたちでメジャーグループを組織して、松本グループと対決する。そして勝つ」
　志保の言いたいことは、さっぱり宏人の心に響いてこなかった。表面的には分かる。つまりは、今孤立している志保と宏人を中心にしたグループを作って、大きくして、一年間松本グループに嫌がらせを受けずに楽しくクラス生活を送るようにするということだろう。
「それだけじゃない。逆に、松本とその取り巻きにわたしたちと同じ思いをさせる」
　志保の声が冷たさを帯びた。
「やっぱ、お前。あいつのこと恨んでる……よな」
　聞かずもがなのことである。自分を仲間はずれにしているグループのリーダーである。恨まないほうがおかしい。しかし、志保は意表をつかれた顔をしたあとに、恨んではいないわよ、と平気な声で答えた。
「無理するなよ。自分に嫌がらせをするヤツだぞ。恨まないわけないだろ」
「松本はクズよ」
「何だって？」
　聞き間違いだろうか。女の子の口から出るはずのない言葉が出た

ような気がする。
「人間のクズだって言ったの。他人に嫌がらせしてそれを楽しんでる。わたしは、そういうクズに多少のことをされたって何も感じない。恨む？　道にある石に転んだからっていってその石を恨んだりする？　わたしにとっては、松本はその程度の人間よ。気にかけてやる価値なんかないわ……どうしたの？」
「オレ、今日から女子恐怖症になるかもしんない」
幻聴ではなかったことが分かった宏人は頭を抱えたくなった。姉のように表と裏の顔を使い分ける女の子というのはあくまで例外だと思っていたのだが、あまりに身近に二人目が現れたのである。これを皮切りに三人目、四人目という感じでどしどしと登場してきたら正気を保てる自信はない。
「あのさあ、一つ忠告しておいてあげるけど、『女の子』なんていう子はいない。一人一人の子がいてそれがたまたま、男の子だったり女の子だったりするだけでしょ。性別じゃなくて、その子自身を見ないとね」
「女の子は可愛いはずだって思うのがいけないのかよ？」
「いけなくはない。でもその考えはあなたを傷つけると思って。カレシが傷つくのを見てられないのよ、ヒロト」
「シホちゃんに質問があるんですけど」
「好きな男の子のタイプは――」
宏人は無視した。
「松本のこと気にしないっていうなら、どうして松本にやり返そうって話になるんですか？　理屈が合わないじゃないスか」
「気が変わったのよ。繊細な美少年を守ってみたくなった」
宏人はだらりと椅子の背もたれにもたれかかった。騎士の称号を返上する代わりに王女の位を得たのだ。何という名誉なことであろう。降って湧いた名誉に力が抜ける宏人に、
「ちょっと、しゃきっとしてよ」
と志保が無茶なことを言う。冷めたアッサムティの力を借りて、

どうにかこうにか座り直した宏人に、志保は『二年二組支配下計画』のさわりを話し始めた。

第６４話：盟約の時（前書き）

いつもありがとうございます。
今回も宏人くんのお話です。
志保が語る「二組支配下計画」とは？
では、お楽しみ下さい。

第６４話：盟約の時

シーリングランプの投げる薄明かりの下で、
「まだ、ほとんど具体的なことは考えてないんだけどさ。何しろ、決心したのがついさっきだからね」
と志保は前置きしてから続けた。
「まず現在の二組の状況を確認しておきましょう。わたしの観察に不備があったら指摘してね。さて、二組には今大きく二グループある。一つは男子のグループで、もう一つは女子のグループ。男子グループにしても、女子グループにしても、男子、女子それぞれの三分の二くらいずつが属している」
男子も女子も十八人ずついるので、それぞれ十二人ずつくらいがそれらのグループに属していることになる。これまでの宏人の経験だと、一グループは大体六人くらいであったので、これほどの大所帯は少々異常だった。
「しかも、その男子グループと女子グループは仲が良くて、実質一つのグループと言ってもいい。そうすると、この二グループで二十四人くらいになる。クラスの過半数を占めてるから、クラスの議題はほとんどこのグループの意のままになる」
民主主義の美名を盾にして、多数決で我意を押し通すことができる。そういう説明をされると何だか深刻な状態のような気がしてくる宏人。
「男子グループのリーダー格は松本。典型的なお山の大将タイプで、世界が自分の為に回っていると思ってるバカ。女子グループのリーダー格は吉川。自分のことをファッションモデルか何かだと思ってる、派手な化粧好きのアホ。この二人付き合えば面白いのにね。ここまでいい？」
中々辛らつな人物評である……が、当たっていないわけではない。むしろ概ね当たっている。松本氏にしても吉川氏にしても、自分を

見て認めて欲しいという情熱で満ち満ちていた。自分のグループを作ってそのリーダーになることもその一環であろう。

宏人がうなずくと志保はいよいよ本題に入った。

「さ、この状況から、どうやってわたしたちがグループを大きくしていけばいいか」

「そのグループに属してないやつらと仲良くなる？」

「もちろん、それも一つ。でも、簡単な引き算をしてもらいたいんだけど、クラス全員の三十六から、メジャーグループに属している二十四を引くとどうなる？」

「十二」

「良くできました。飴あげようか？　つまりね、仮に残りの全員をグループに入れたとしても到底対抗できないってこと。しかも、その残りの子たちにしても、メジャーには属したいと思うかもしれないけど、マイナーに属したいとは思わないだろうから、全員をグループに入れることは難しい」

「じゃあ、どうすんだよ？」

「それをこれから考えてくのよ。ただ、一つ考えてることはね、メジャーグループを分裂させること」

「分裂って？」

「メジャーに属してかつ人気のある子をこっちに引き抜く。そうすれば、その子に引きずられて、その子と一緒に何人かの子がこっちに来る」

さも簡単なことのように話しているが、今のグループを抜けて、こっちのグループに来てもらうなど至難の業ではなかろうか。顎に手を当てて、むう、と黙考する宏人。そんなことが可能なのだろうか？　どうやって？　という疑問にあらん限りの知恵をぶつけようとしたまさにその時。

「いや、ちょっと待てよ。本当にやるのか、そんなこと？」

宏人は、志保に流されていた自分を救出した。

「そんなことってどんなこと？」

「オレたちでグループを作ってそれを大きくするってことだよ」
「あれ？　もしかして怖気づいたの？」
宏人は訳が分からなかった。なにゆえまだそれほど話したことのない女の子から嘲るような口ぶりで物を言われなければならないのか。
「お前の辞書には、『遠慮』っていう文字がないのか？」
「そんなの持ってるほうが少数派でしょ。話に乗るの？　乗らないの？」
宏人は腕組みした。何だか剣呑な話である。そもそも宏人は争いを好む性質ではない。平穏無事に生きていくことを善しとする常識人である。騎士や王女のようなドラマチックな人生など全く望んでいないのだった。にも関わらず先週志保を助ける格好になったのは、これはもうその時の気分としか言いようがない。クラスの悪漢どもからか弱い女の子を守るのだ！　認めよう。そういう英雄的な幻想にちょっぴり浸っていたことを。しかし、事態は宏人の幻想を打ち砕いたのである。女の子は守られる必要などなかったのだ。事ここに至っては、高揚した気分も冷め、戦う気力にも乏しく、ただひっそりと一年過ごせれば良いような気もする宏人だった。
「煮え切らない人だなあ。女の子がどうとか言ってるから、逆に言わせてもらうけど、男の子だったらはっきりしなさいよ」
宏人は譲歩した。
「仮にその計画に乗るとしても、できるのか、そんなこと？」
たった二人のグループに人を入れ、かつメジャーグループから引き抜きを行い、自分たちがメジャーになる。遠大すぎる計画で全く先の見えない話だった。
「できるかできないかじゃないわ。やるかやらないかでしょ」
「オレは別にお前と二人だけでも構わないけど」
何気なく宙に放った言葉が思いがけず沈黙を招いたので、訝しげに志保を窺うと、少女の頬がほんのりと染まっているように見えた。まさかとは思うが……

「照れてるのか？」
「何のこと？」
「だって、ほっぺたが赤いし、急に黙るから」
ここで彼女が慌てて否定したりすれば、宏人の志保を見る目が多少変わったかもしれないが、そんな可愛らしいことは起こらなかった。
志保は平静な声で言った。
「赤いのはランプのせいでしょ。あなただって赤く見えるわよ。黙ったのはね、呆れてたのよ。あなたがわたしに加わって一人が二人になれば、松本側の楽しみが倍になったってこと。嫌がらせはエスカレートする。そんなことも分からないの？」
「担任にでも話せばいいんじゃないか？」
志保はどうしようもないといった風に首を横に振った。
「教師なんか当てにならないわ。何を話すのよ？　いじめられてるからどうにかしてくださいって？　言ってどうなる？　松本たちは否定する。あるいは肯定して反省したと見せかけて嫌がらせを続ける。いっそう陰湿なやり方でね」
「お前の言い方だと、やるしかないっていう風に聞こえるんだけど」
「やっと分かったの？」
高慢極まりない口調でそう言うと、志保はテーブル越しに手を伸ばした。宏人がうさんくさそうにそれを見ていると、
「誓いの握手よ」
物騒なことを言ってきた。
「ま、まだオレはやるとは言ってないぞ」
「じゃあ今すぐそう言って」
「オレは平穏に暮らしたいんだ」
「わたしだってそうよ。でも状況がそれを許さない。戦うしかない」
ジャージ地の長袖から出るその手は宏人を戦場へと誘っていた。
松本たちメジャーグループと袂を分かち、再び彼らの元へ帰る気はないにしても、それがすぐに松本グループと戦うことを意味するわ

けではない。宏人としては、四面楚歌の中で己を――そして志保を――守るつもりだった。いわれのない嫌がらせをうまくやり過ごしつつ時には多少の抵抗もして、一年を過ごすつもりだったのである。

しかし、志保はそれを善しとしない。彼女は立ち向かうことを要求している。そして勝つ気でいた。もしこの手を取らなければどうなるのだろう。二人はここで別れ、志保は一人になるのだろうか。そんなことをふと考えてしまったのが宏人の運の尽きであった。

「一つ約束してくれ」

「なに？」

宏人は咳払いした。

「さっき松本に同じ思いをさせるって言ってただろ。あれは取り下げてくれ」

「呆れた。気が早いにも程があるんじゃない？　あれは計画の最終目標よ」

冗談めかした言い方がこの問題から逃げているように宏人には思えた。なおも宏人が同じことを続けると、志保は、分かったわ、と声音に渋い色を混ぜて答えた。

宏人は志保の手を取って軽く握った。志保は強く握り返すと、

「よろしくね、相棒」

その声が心から楽しそうなものだったので、宏人は驚いた。驚きを静めたのち、

「具体的に誰かいるのか？　オレたちのグループに入ってくれそうなやつ」

訊いてみると、

「二瓶瑛子」

という答えが返って来て、宏人を一層驚かせた。まさかその名前が出てくるとは思ってもいなかったのである。

「いや、無理だろ」

宏人はあっさりと言った。瑛子のクラス内での立場にちょっと思いを致せばすぐに分かる。彼女は女子のメジャーグループに属し、

リーダーの吉田に極めて近い位置にいる。でありながら、グループに固執することもなく、誰にでも分け隔てなく接する。その天衣無縫な性格から同性に人気が高く、性格プラス容姿で異性の人気はそれ以上に高い。

「そんなヤツがオレたちのグループに入るわけないだろ」

分かりきった話である、と落ち着こうとした宏人の目が、志保の訳知り顔をとらえていた。にこぉとした笑みを作る唇の端に、嘲るような色が淡く漂っている。

「言わせてもらうけどな、やっぱり女の子はそういう顔すべきじゃないと思うぞ」

「いつも笑顔でって？　二瓶さんみたいに」

「どういうことだよ？」

「あのさ、倉木くんって二瓶さんのこと好きでしょ」

そんなことを言われても、宏人はびくともしなかった。声を大にしてもいい。瑛子に好感を持たない男子はおかしい、と。当然、宏人も好きである。どういう脈絡か分からないが、からかわれてもカケラも動揺することなどない宏人が、

「だったら何だよ」

と開き直ると、志保は軽く両手を広げた。

「わたしが言いたいのはね、好きだから二瓶さんをこの件に巻き込みたくないと思ってるんでしょっていうことよ」

胸中に隠しておいたものをズバリと言葉にされて、宏人は戸惑った。確かに、その通りである。今、クラスで微妙な立場にいる宏人や志保に関わらせれば、瑛子にどういう影響が及ぶか分からない。それはつい今朝も考えていたことだった。さすがに瑛子まで仲間外れになるとは思われないが、少しでも可能性があるなら軽挙は避けたい。

「さっきも言ったけどね。引き抜きは不可欠なのよ。とはいっても、ロクでもない人間をわたしたちのグループに入れる気はない。影響力があって人間的にマシなのは二瓶さんしかいないわ」

「オレは反対だ」
「おっと、いきなり意見の衝突ですね。これを繰り返していけば、そのうちに友情が芽生えるのかしら」
「喧嘩別れしなければな」
「悪いけど、この件だけは従ってもらう。二瓶さんは二組のキーパーソンだから。彼女を手にすれば手っ取り早く二組を牛耳ることができる。わたしが見るところ、二瓶さんは二組の誰よりも人気がある。男子にも女子にもね。もちろん失敗するかもしれない。でも、それはそれでいい。全てはやってからの話よ」
それにね、と続けたあとの言葉は、宏人を愕然とさせた。
「倉木くんが思ってるほど、二瓶さんって繊細じゃないわ。多分だけど……同じものを感じる」
「ど、どういうことだよ？」
思わず声が震え、
「二瓶さんもいろいろかぶってるものがあるってことよ。見た目どおりの子じゃない」
次に身が震え始めた。

第６５話：愛の大きさ

「愛の大きさを表現してくださいっ！」

叩かれた机がバンと悲鳴を上げて、机に置かれていた筆記用具が数ミリ宙に浮いた。

怜は、嫌な顔を見せないように細心の注意を払うと、プリントから顔を上げた。

目の前に少女が立って、必死さを漂わせた瞳でこちらを見下ろしている。細い三つ編みを両肩に垂らした純朴そうな子である。彼女は、怜の隣の空いている席に無断で腰を下ろすと、じぃっと怜を見つめてきた。

嫌なものである。年頃の女の子に見つめられれば、年頃の男の子としては照れくさい気持ちになるのが普通だろう。顔立ちも整った子であるので尚更である。ところが、彼女に見られたときに感じるのは、恥ずかしさなどではなく圧迫感だった。蛇に睨まれた蛙もこういう心持ちになるのだろうか。

「佐伯、非常に申し訳ないと思ってるんだが、実はこれからタマキと約束があるんだ」

そう言って片づけようとしたプリントの一枚に、佐伯澄（スミ）は自分の手を乗せた。

「タマキは今週は図書委員の仕事があるのよ。何を約束してたのかしら？」

逃亡する機会は永遠に失われ、怜はまた、いや、またまた貴重な昼休みが消えてなくなることを覚悟した。

「それで、何だって？」

「愛の大きさよ。それを表現してもらいたいの。わたしのこと、どのくらい好きか」

「佐伯、悪いけど」

「何も悪くない」

「お前にはシュンがいるだろ」
「だからここに来たのよ」
安息の昼休みに唐突に乱入し、付き合ってもいない男に自分のことがどのくらい好きか訊くという。まったく奇抜な行為である。詳しく説明するように促すと、彼女は苛立ちを交えた口調で話し始めた。
澄は、怜の友人の一人である五十嵐俊と付き合っている。周囲が羨むほどのラブラブぶりだという。ついこの前も俊に本をプレゼントしたらしい。これには怜も多少関わりがある。さて、前々から欲しかった本を送られて俊は非常に喜んだらしい。ひとしきり彼の感謝とそれに対する彼女の謙遜が繰り返されたあと、澄は、ふと俊に自分のことが好きかどうか聞いた。俊はもちろん、と答えた。俊は、怜とは違ってはっきりとした男である。それはもう男らしく答えてくれたそうだ。問題はその後である。
「じゃあ、どのくらいわたしのこと好き?」
こう問われたときの俊の固まった様子が見える気がした。これほど答えにくい問いもないだろう。好意を量って示せなどと要求するのはおよそ品のない行為である。もし俊が適当な男であれば、適当な答えをしたことだろう。しかし、彼は誠実な男であるので、誠実に答えたそうだ。すなわち、分からない、と。
澄はへそを曲げた。どのくらいか分からないということは、大して好きではないということではないか。さすがにそこまでダイレクトには言わなかったようだが、何度も答えを修正するよう求めたらしい。何度も無茶な問いを押し付けられて、俊が、
「じゃあ、スミちゃんはボクのことどのくらい好きなんだよ?」
訊き返したとしても、責めることはできないだろう。
澄はいっそうふくれた。
「質問を質問で返さないでください」
「スミちゃんだって答えられないじゃないか。どのくらいって言われても、東京ドーム三個分です、とか答えられるわけないだろ」

「東京ドーム三個分しかわたしのこと好きじゃないのね」
「そんなこと言ってないって」
「言った！」
「例えだよ。言えないっていう例え。大体さ、そんなこと答えられるヤツなんていないよ」
「そんなことない。シュンが考えようとしないだけよ」
「じゃあ、賭ける？　今週中にスミちゃんが知ってる男子でその問いにちゃんとスミちゃんが納得できるような答えをしてくれるヤツがいたら、ボクはスミちゃんに謝るよ。それから自分で考えてみることにする。でも、もしいなかったら、スミちゃんがボクに謝る。そして、その問いは二度としない。どう？」
「望む所です」
　プレゼントの本を仲立ちにして夏の太陽にも負けないほどアツアツな状態になれたはずの二人は、決然と別れた。そうしてその片割れが今ここにいるのである。
「何人かに訊いてみたけどつまらないことしか答えてくれないんだ。もうこうなったら加藤くんにでも訊くしかないと思って」
　迷惑なことこの上ない。三年生に男子は百人いるのである。せめて他の九十九人に訊いたあとにここに来たのであれば諦めもつくというものだが。内心を外に表さないように慎重を期しながら、怜は自分も気の利いたことは思いつかないと答えた。
「そんなわけない。タマキと付き合ってるんだから」
　とはいえ、環にそんなことを訊かれたことなどなかった。そう言っても澄は納得しないだろう。彼女は自分の聞きたいことしか聞かないのである。その唯一の例外が俊なのであって、その俊が発端になっているのだからこれはもうどうしようもない。
「佐伯、タイチに訊いてみたか？」
「この前告白されてから話してない」
「告白って、タイチがお前に？」
「そう。ふざけてるでしょ」

――シュンがいるのに何やってんだ、あいつは。
呆れ返った男であるが、もしかしたら今は救世主になってくれるかもしれない。
「タイチに訊いてみた方がいいな。そういうことは、オレなんかよりずっと詳しいだろ」
そう言うと、怜はすっと手を挙げてその手で手招きをしてみせた。その手に応じてのこのことやって来てくれたのが、太一だった。実は彼は少し離れたところで、女子のグループに混ざり歓談していたのである。話し相手としては、澄だって彼女たちに何ら劣る所はない。
「何だよ、レイ？」
近くにいる澄を見てちょっとぎょっとしたような顔をした太一だったが、事情を聞くと、何だそんなことか、と余裕の笑みを浮かべた。
「簡単なことだろ、そんなの。シュンもどうしてそんなことくらい言えないんだろうな」
大言を吐く太一に、澄は胡乱（うろん）な目を向けた。俊を悩ませたことがこの男にできるのだろうか、という色が見える。怜も全く同意であったが、人には得手不得手がある。俊の不得手が太一の得手であるかもしれず、またそれによって運よく澄の無体（むたい）な要求から逃れられるかもしれず。
「宇宙を一つの単位とすると、百万宇宙くらいだよ」
期待した自分を怜は深く恥じた。澄も冷たい目をしている。
自信満々な顔をしている太一に、澄はため息をついた。
「じゃあ、一千万宇宙より小さいんだ。その愛を受けられる人はどんな人なんでしょうね？　わたしよりよっぽど愛されてるんだわ」
うっ、と唸った太一は、
「この命と同じくらいさ」
再度チャレンジしたが、
「じゃあ、今すぐ死んでみせてください」

澄は容赦ない。ショックを受けた太一の顔を見て、怜は気の毒になってきた。彼をいけにえの羊にして心に軽い痛みを覚えた。絆創膏を張れば良いくらいのかすり傷ではあるが。

太一はまだめげなかった。こと恋愛問題に関する限り、不屈の男である。

「君がぼくのことを好きな気持ちの倍は好きだよ」

これは中々良い答えのように思われた。プレイボーイの面目躍如になるか、と思いきや、澄はやれやれと首を振ると、

「それはわたしがあなたのことをどのくらい好きか分かってないんだわ。気楽に倍なんて言えないほど好きなのに。あなたはわたしのことを何も分かってない」

しみじみと言ったのち、別れましょ、と呟いた。

太一は、近くにあった椅子にがっくりと座り込んだ。怜は心中で太一をねぎらった。一矢も報いられずに敗北したにせよ、怜の為に戦ってくれたのである。

「じゃあ、加藤君の番よ」

澄の目が、燃え尽きた太一から、怜に向けられた。

番とは何の？　か弱い男心を燃やし尽くされる番ということか？

「さ、答えて」

怜は少し時間を取り、考えをまとめた。ゆるるかな昼の光で満ちた気だるい空気の中で、この周囲だけが緊張を帯びていた。昼『休み』にどうして緊張を強いられなければならないのかと思うが、友人の為である。怜は軽く息を吸い込んだ。

「オレが君の事をどのくらい愛してるかって？　それを表現するためには新しい言葉を一つ創造しなければいけない。その言葉は今まであったどんな言葉よりも美しく、今後この世界が終わるまで、億万の恋人達が愛を語るために一番に使う言葉になるだろう。その言葉を探すため、オレはオレの一生を捧げるよ、君の隣で」

怜には悔いはなかった。微力ながら、今の所、これが全力である。跳ね返されたら次の手は無い。太一と一緒になって燃え尽きるのを

覚悟した怜だったが、澄の口から地獄の業火は吐かれなかった。代わりに彼女の口元には笑みが漂っていた。それは顔全体に広がって会心の笑みとなった。

「賭けはわたしの勝ちのようね。ありがとう、加藤くん。これで、シュンに考えてもらうことができるわ」

どうやら納得してくれたらしい。怜は、女の子の心無い一言によって傷つけられる心配がなくなってほっとしたが、澄の言葉にひっかかりを覚えた。

「今、何て？」

「だから、ありがとうって」

「じゃなくてその次だよ」

「シュンにわたしのことどのくらい好きか考えてもらえるって」

状況に流されてつい忘れていた。うまい答えを返すことは俊のためになるのではなく、逆に俊を追い詰めることになるのだった。怜は心の中で俊に頭を下げたが、すぐに思い直した。もとはと言えば自業自得である。事柄の性質も犬も喰わない類のことであって、俊が自分で何とかするだろう。何とかならなくても何ともならないに違いない。

席を立った澄が、去り際に、

「加藤くんはさ、タマキにいつもそんなこと言ってんの？」

とんでもないことを訊いてきた。

「そんなわけないだろ」

「どうして？」

「タマキにこんなこと言ってみろ。呆れられるだけだ」

「訊かれたことないの？」

「ないよ」

「女の子だったら誰でも訊きたいことだと思うけどな」

「オレは女の子じゃない。その辺のことが不思議だったら、タマキに直接訊いてくれ」

時間があればここから女心に関するレクチャーが始まる所であっ

たが、幸いなことに昼休みは残りわずかだった。澄は不承不承六組を後にした。無駄に傷心を抱えることになった太一は、

「今度から師匠と呼ばせてくれ」

と怜に救いを求めたが、怜は弟子を取る気はないことをつれなく告げて引き取ってもらった。

のちほど澄から聞いた話であるが、彼女はその後五組に戻ると、居合わせた環に訊いたそうである。

「加藤くんがタマキのことどのくらい好きか訊きたいよね、もちろん」

それに対して環は、

「わたしなら、わたしのことをどのくらい好きかなんてこと訊かないし……レイくんに言って欲しくもないわ」

言い切ったらしい。どうして、と続けて訊く澄に、

「どんなものも言葉にしてしまったら形のある限りあるものになる。でも、ここにあれば……」

そう言って自分の胸に手を置いたあと、

「それは無限の広がりを持つ」

環は微笑しながら言ったということだ。

もちろん、澄は納得しなかったそうである。

第６６話：父と娘の駆け引き

学校であった今日一日の出来事を嬉々として語っていたのはいつ頃までのことだろうか。円は、近くで上がるキャッキャとした楽しげな声を聞きながら、そんなことをふと考えた。夕食時、家族がうち揃ったダイニングテーブルを、小学一年生の妹の声が席巻している。

「セイジ君ってすっごくエッチなんだよ。女の子のスカートめくりばっかりしてる。そのことをイブちゃんが先生に言いつけたら、自分が悪いのにセイジ君すごく怒ってね、イブちゃんにブスって。それでイブちゃん泣いちゃったから、あたしが仕返ししてあげた。あんたなんかブサイクじゃんって。そしたら、今度はあたしにブスって言ってきたから、あたしはブスじゃないってゆってやったの」

父と母はにこにこしながらその話を聞いていた。その笑顔もあと数年のことだろう。自分の経験に照らし合わせて見れば、そうして隠し立てすることなく親に何でも話すのは、小学三四年生くらいまでのことである。妹がその年になったら、賑やかな夕食時も相当静かになるだろう。

妹の話が続いている。

「だって、お姉ちゃんが美人なんだから、あたしがブスなわけないじゃんってゆったら、今度はね、『お前がブスなんだから姉ちゃんだってブスに決まってる』って言ってきてさ。じゃあ、今度のじゅぎょうさんかんの日にお姉ちゃんに来てもらうから、ブスかどうかみんなで決めようってことになったの」

そこで、妹はつぶらな瞳に甘えた色を映して、こちらを見た。

「ねえ、タマキお姉ちゃん、マドカお姉ちゃん。今度のじゅぎょうさんかんの日に教室に来て。いいでしょ？」

お子様の開く美人コンテストにエントリーして得られるものなど何も無い。時間の無駄である。円は、いやよ、とそっけなく答えた。

旭はふくれっつらを作った。
「何でさ?」
「わたしは美人じゃないから。旭の友だちをがっかりさせたくない。そういうのは、もう一人のお姉ちゃんに頼んで」
「でも、この前遊びに来たミホちゃんとユカリちゃんは、マドカお姉ちゃんのことキレイだって言ってたよ」
「焼いてあげたクッキーがおいしかったんでしょ。クッキーが美味しいと、クッキーを焼く人も可愛く見える」
隣に座っている姉がクスクスと笑っていた。ちょっと細めた目で見てやると、
「ごめん、ごめん。その話し方、文化研究部で相当鍛えられてるなと思って」
姉が面白そうな顔で答えた。姉の指摘は図星だった。部の先輩同士のやり取りを聞いていて、別に真似ているつもりはないのだが、その口ぶりが近頃ちょっとうつってきているようである。
「じゃあ、タマキお姉ちゃん。来てくれるでしょ」
姉はその問いには答えずに、すっと手を伸ばすと、
「アサちゃん、お箸の持ち方、また良くない癖が出てるよ」
妹の箸の持ち方を正した。広めの長方形のダイニングテーブルを挟んで姉と円、父と母が対面で座り、背が足りない旭だけが子ども用の足の長い椅子に皆を一望する位置を取って腰かけている。
「さ、それで食べてみて」
姉も円も小学校に上がる前に基本的なテーブルマナーについては両親から厳しく指導を受けていたのだが、末の妹だけがそれを免れていた。彼女に甘い両親が義務を怠ったのである。その補足をするのが姉の役目だった。というよりは、姉がよく妹の面倒を見るので、その分親が安心して甘やかすことができる、というのが真相かもしれない。
旭は持ち直した箸でぎこちなく豚バラ肉の一切れを取ると、口に入れてそして噛みながら話し出そうとした。

「アサちゃん。お口の中に食べ物が入ってるときはしゃべらないようにね。かみかみかみかみ、よく噛んでください。そうしてかみかみしてる時に、ありがとうって思うんだよ。豚さん、豚さんを育ててくれた人、お料理してくれたお母さん、お仕事してくれたお父さんにね」

こういうセリフをさらりと、妹を感化しようという気もなく、父母に媚びようという気もなく、自分に酔うでもなく言ってのけるのだから大した人である。父母の言うことに楯突くことがある旭も、姉の言うことには逆らわない。もぐもぐもぐもぐ、と随分長い間、様々なものに感謝したあと飲み込んだ。

「ごめんなさい、アサちゃん。アサちゃんの授業参観の日って、今度の土曜日でしょ。お姉ちゃん、今度の土曜日は用事があって、アサちゃんの学校には行けないわ」

旭はがっかりした顔をした。

「用ってなあに？　だいじなこと？」

「レイくんとデートなのです」

常に一定の穏やかな温度で話す姉の口調が、カレシの名を出す時だけかすかに熱を帯びる

えー、と旭は大きく口を開けた。それから怒涛のラッシュが始まった。曰く、お姉ちゃんはズルい。あたしが学校行ってるときに。曰く、羨ましい、あたしも学校休んで一緒についてく。曰く、レイと一緒に学校に来てよ、参観の時間が終わったら一緒に遊ぶ、などなどなど。

わがまま機関を全開にする妹に、姉は一言も返さなかった。ひとしきり喚きたてた妹の頭に姉はそっと手をのせると、

「きっとその日いいことがあると思うよ、アサちゃんに」

と秘密めかしたことを告げた。いい子にしてたらね、という含みを持たせたその言葉に妹はあっさりと翻意した。姉があると言えばあるのである。妹は瞳を輝かせていたが、ふと口を難しく引き結んで何かに気がついた様子だった。もちろん、参観日の問題である。

「じゃあ、やっぱりマドカお姉ちゃん来てよ」
じいっと強い目を向けてくる妹に、
「わたしからもお願い。マドカちゃん」
姉までが加わって、円は嫌々ながらうなずかざるを得なかった。
姉と違って特に予定があるわけでもない。しぶしぶ、分かったわよ、とコンテストへの参加を承諾したあと、
「行くのはいいけど、わたしに恥かかせないでよ、アサヒ」
面倒を押し付けられてちょっと意地悪いことを言ってやったが、旭は、はーい、と元気良く答え、
「可愛くみえる服着てきてね、円お姉ちゃん」
失礼なことを言ってきた。
夕食が済んでお茶の時間になった。川名家ではあまりテレビは見られない。教育上の問題もあるかもしれないが、母によると、折角の娘たちとのひとときをドラマの人気俳優に取られることは耐え難い、という父の意向が大きいらしい。おかげで流行の番組をリアルタイムで見ることができずしばしばクラスメートとの話題に乗り遅れたりするが、それで縁遠くなるような子と大して友だちになりたいとも思わないので特に問題はなかった。
「お父さん、来週の週末ですが、お時間ありますか？」
リビングにある足の短いテーブルで妹の宿題を見てやっていると、ダイニングテーブルから丁寧な声が流れてきた。姉は父母に対しても基本的にですます調で話をする。口調を改めたのは確か中学に入った頃からだった。一度、どうして他人行儀な口の利き方をするようになったのか訊いてみたことがある。
「お父さんとお母さんから一人の人間として扱って欲しいからよ。そのためには、まず、わたしがお父さんとお母さんのことを一人の人として尊重したいの」
その尊重の気持ちを言葉遣いにこめているのだそうである。
――もしかしたら、お姉ちゃんはお父さんとお母さんの本当の子じゃないんじゃ……

姉の言葉を額面どおりに受け取ることができず、そんな変な想像をしてしまった円だったが、それを聞いた母が真面目な顔で、わたしもそう思う、などと答えたので、儚くも少女の空想は霧消したのだった。

「どこか行きたいところでもあるのか？　タマキとどこか出かけるのは久しぶりだなあ。何か買って欲しいものでもあるのか。よし、お父さんにどんと任せろ」

普段ほとんどねだることなどない長女の頼みごとに、父は機嫌よく答えた。

「レイくんに会って欲しいんです」

「む……」

父は言葉を詰まらせたようだった。以前からときどき、カレシに会わせるようにと自分から催促していたくせに、いざその機会を提供されると、二の足を踏むらしい。年頃の娘を持つ父の心など円には量りようもないが、家族の輪を見知らぬ少年に崩されるような気がして恐れているのだろうか。

「お願いできますか？」

否も応もない。父としては受け入れざるを得ないだろう。父だけがまだ姉のボーイフレンドと会っていないのである。

「来週と言わず今週でもいいぞ。旭の参観が終わったあととか、日曜日とか」

父は心を決めたような口調で言ったが、それは多分に嫌なことを早く済ませたいという色を含んでいた。

「いいえ、来週でお願いします」

一週間遅らせるのはカレシ側の事情かと円は思ったが、

「そうすると、今週に続いて来週も会う口実ができるものね」

という朗らかな母の声が聞こえてきた。さすが年の功である。姉は何も答えないようだったが、答えないということはその通りなのだろう。

妹の宿題も終わり、姉の話も終わったと思い、円がダイニングテ

ーブルに戻って、もう一杯紅茶を飲もうとすると、意に反して、
「もう一つ、お父さんにお願いがあるんですけれど」
と姉が居ずまいを崩さずに父に向かっていた。今度こそ甘えてくれるのかと期待した父が機嫌よく促すと返ってきたのは、
「夏休みに二、三日、レイくんのご実家にお招きを受けてるんです。行ってきてもいいですか？」
さすが娘に弱い父でもＹＥＳと答えるのは難しい問いであった。
「そ、それはダメだ」
「ダメですか？」
「そんな、男の家に泊まるなんていうことはだな……お前には、まだ早い」
父は姉から視線を逸らしてもごもごと言った。キッチンに立っている母が肩を震わせているのが見えた。母は既に聞いていたのかもしれない。お父さんにお願いしてみなさい、とでも言ったのだろう。
「レイくんの家に泊まるわけじゃなくて、ご実家にお邪魔するんですが」
「同じことだ」
珍しく父が強気に出ていた。それもそうだろう。実家にとはいえ我が娘がボーイフレンドと小旅行しようというのである。別に父の肩を持つ気はないが、事柄の性質上、今回は姉の分が悪い。とはいえ、姉にとっては障害というのは単に取り除くだけのものであって、それによって四苦八苦させられるようなものではない。どういう手で父を攻略するつもりなのか、とテーブルの椅子についた円が興味を持って見守っていると、
「チャンスをください」
姉は静かに言った。
「チャンス？」
「はい。来週、お父さんがレイくんに会ったときに、彼がどういう人かお父さんに見定めてもらいます。そうして、もし信頼に値する人だと思ったら、夏休みの件を許してください。もし軽薄な人だと

思ったり、信頼できるかどうか分からなかったら、夏休みのことは潔く諦めます」

そう言うと、姉は座っていた木製の長椅子を立ち、テーブルから一歩離れると、父に向かって頭を下げた。姉の所作にはすべからく優美さが宿る。我を通すためであっても声を荒げたりなどはしない。もっとも、姉が我を通すことなどほとんど無かったが。

娘から頭を下げられて何だか決まり悪い様子の父だったが、それでも、よし分かった、と言おうとしない所に父親の意地が見える。これを許したら長女を完全に取られたことになるとでも思っているのかもしれない。

こういうとき助け舟を出すのが母の役割だろう。

「あなた。タマキが何かを頼むなんていうことほとんど無いんですから。かなえてあげたらいかがですか。どうせ、いずれ誰かに取られちゃうんですし。加藤くんはいい子ですし」

父がショックを受けた顔を作った。もっとも近しい所から裏切り者が現れたのであるから当然ではある。

「キミまでそんなことを。そういう問題じゃない」

「でも、そのうちタマキが誰か素敵な人と結婚したいって言ってきたらどうするんですか？　そのときもまだ早いって反対するんですか？」

「話が飛躍しすぎだろ」

「そんなことありません。同じことです。それに、いざとなれば女友達の家に泊まるっていうウソをついて――タマキがウソをつくなんていうことは万に一つもありませんけど――男の子の所に泊まることもできるわけですから、こうやって親にちゃんと事前に了解を取るっていうことはそれだけでも信頼に値するでしょう」

父は重苦しいため息をついた。

「キミはどっちの味方なんだ」

母はいまだ頭を下げたままの姉の肩をぽんと叩くと、

「この子はわたしの自慢の娘です」

そう言って、頭を上げるように言った。
「まだお父さんの答えを頂いてません」
姉はなお頭を上げようとせずにそう言うと、父は、ふうと息をついてから、まさか娘が十四のときに嫁に送り出す気持ちを味わうとは思わなかったと、ぶつぶつと言うと、
「会ってみてからだぞ」
と念を押してから、姉の頭を上げさせた。
姉は、特別喜色を表したりはせずいつも通りの涼やかな表情で、
「レイくんがお父さんのお眼鏡にかなわないときには諦めますので、よろしくお願いします」
言うと、父はもったいぶって腕を組んだ。
「父親が娘のボーイフレンドを見る目は厳しいぞ」
「はい。うんと厳しく見て下さい」
姉の口調はどこか楽しげで、しかも余裕さえ漂っていた。父が許してくれるに違いないと高をくくっているのだろうか。
「加藤先輩に入念に準備するように言っておかないとね」
姉とそのカレシの件に対してちょっと皮肉げになってしまうのは、円の癖になってしまっていた。我ながら可愛くないことだとは思うが、ひと時に比べれば、これでも直って来たほうである。
姉は微笑を含むと、よく通る声で宣言した。
「このことをレイくんに知らせる気はありません。フェアじゃないからね」
どうやら姉の余裕はカレシへの信頼に基づいているらしかった。

第６７話：悲劇めいた喜劇（前書き）

読者様に心からの感謝を。
サブキャラに押されてちょっと影が薄くなっちゃってるような気がする主人公とヒロインですが、今回はその二人のお話です。
お楽しみ下さい。

第67話：悲劇めいた喜劇

怜は自分自身というものを大して信頼していなかった。信頼の置けるような能力、学識、人品を備えていないからである。なので、できるだけ他人の意見を尊重するようにしていた。己以外の者を師として謙虚な態度であれ。数ある座右の銘の一つである。

「雑誌とかインターネットで筋や感想を調べて、それを元に記事を書くこともできるんじゃないかな。わざわざ見ることは無いと思うよ」

この珠玉のような忠言に従わなかったのは、怜の不覚だった。名言も座右に置いて眺めるだけでは意味が無いということである。

忠告が為されたのは、ちぎれ雲が浮く空から眩しい朝の光が降る街中でのことである。今日は先日カノジョと約束していたデートの日であり、怜の隣には環がおり、彼らの前には映画館に向かって長くくねる列が延びていた。

「今ならまだ間に合うよ、レイくん。この列から一歩離れるだけでいい」

環はいたずらな笑みを浮かべたが、怜は首を横に振ってきっぱりと言った。

「いや、この映画を観る」

環はカレシの毅然とした態度に打たれた振りをしつつ、なお、同じ時間に上映しているアクション映画に未練ありげであった。麻薬取締り官の男女のコンビが、人生観の違いから初めは対立しつつも次第に信頼を深めてゆき、最終的には二人で悪の麻薬組織を壊滅させるという、恐ろしく内容の無い、しかし痛快この上ないストーリーである。銃撃戦あり、派手なカーアクションあり、隠し味にちょっぴりのロマンス。

本音を言えばそっちの方がよほど観たかったのだが、一度口にしたことは通さねばならぬ、というのちのち考えると無駄な男気を発

揮して、予定通り今話題のラブストーリーを観ることを再度宣言した。
「時代は純愛だよ、タマキ」
「知りませんでした。愛に純粋なものと不純なものがあるなんて」
諦めきれない振りをする環に、怜は、そうじゃない、と言ったあと、
「純粋な人の愛がすなわち純愛なんだ」
そう続けて、環の批判を封じた。
「この映画を見て一緒に純粋になろう。今はもう失ってしまった美しい気持ちを取り戻すんだよ」
「わたしは昔も今も純粋です」
「じゃあ、オレに付き合ってくれ。邪なものを心から洗い流す。それは滝のような涙となって現れるだろう。自分のハンカチで足りなかったら、タマキのも貸してくれないか？」
「それは困ります。純愛映画で男の子が泣いてるのに、女の子が泣いてないんじゃ格好がつかないわ」
「分かった。じゃあ、袖で拭うことにするよ」
怜は意気揚々と映画館に入った。たまに妹と母が純愛モノの映画やドラマをビデオで見ているのを脇から窺ったことはあるが、初めから終わりまで一本まるまると観るのは今回が初めてである。初めての経験にちょっと浮かれていたことは否めない事実だった。
その浮かれ気分が地に着くのに、それほど時間はかからなかった。満席に近い映画館の中、スクリーンを隅から隅まで一望できるちょうど良い位置に、環を隣にして座った怜。空調が効いた室内、クッションの良いシート、子どもの叫び声もポップコーンを食べる音もない厳粛な雰囲気。映画に集中するのには最適な状態だった。
が、それゆえに最悪である。大して集中せずとも良い映画だったからである。それどころか、席を中座したいような代物だった。
難病を患ううら若いヒロインに宣告される余命。限られた命の中で彼女は人生の意味を見つけ出す。当然にそれは愛である。恋人の

男性はヒロインが余命いくばくも無いことを知っても別れようとはしない。残りの期間を静かにヒロインと過ごす。そうして最後に彼はヒロインを看取る。死に際の安らかな笑顔。生の何たるかを知り、満足して逝くヒロイン。

筋自体は良い。分かりやすい流れであるし、純愛映画を観たことがない怜としては物珍しい気持ちもある。しかし、どうにも感動はできなかった。余命を宣告されるヒロインのシーンからしてもういけない。

医師に余命三ヶ月であると宣告を受けたヒロインがショックを受ける場面が、スタートからいくらもしないうちにある。自分が死ぬということに愕然とするヒロイン。百歩譲ってヒロインが小学生くらいだとしたらまだしも、彼女は二十五という設定なのである。いい年のくせに、余命を宣告されるその時まで、自分が死ぬ、という単純な事実に気づいていなかったとは、無知もここに極まれりという感がある。

その後のお話は、その阿呆なヒロインと、そのヒロインに同情したり、彼女を励ましたりするさらに愚かしい脇役による、まるで喜劇めいたお話だった。しかも笑えない喜劇である。「あと三ヶ月であなたは死にますよ」と誰かから言ってもらわないと、生の意味について考えられないのならば、一体何のための二十五年間だったのかということである。同情しようもない。人間のそういう鈍感さにこそ悲しみがあるのだ、と言われれば、そんな気もしないでもないが、それはこの映画の趣旨ではないだろう。

よよ、と周囲がさめざめとしている中で、一人白けていた怜はどうにも居心地が悪かった。赤の他人の葬儀に混ざってしまったみたいな、場違いな所に来た感がある。ふと隣に目を向けると、スクリーンからの光しかない薄闇の中で環はまっすぐに前を向いているようだった。映画に見入っているのだろうか。怜はいつでもハンカチを取りだせるよう準備をしておいた。こうなったらもう環の涙を拭う役に徹するしかない。しかし、その役さえ全うできなかった。環

は映画に集中しているようだったが、ついに目を拭う仕種をすることはなかった。

エンドロールが流れても映画の余韻に浸ってなかなか観客が立ち上がらない中で、怜は手を取られた。滑らかな手にそのまま手を引かれ、感動に打たれた薄暗がりを抜けて映画館の外へと出る。いつの間にか空には雲が全体にかかり、正午過ぎにも関わらず、涼しげな空気が漂っていた。

怜のすぐそばに環の顔があった。彼女は、瞳に力を込めるとじいっと何かを調べるかのような視線を向けてきた。

「一度の過ちを許してくれるくらいには寛大なんだろ？」

涙の痕がないことを見咎められた怜が決まり悪い振りでそっぽを向いた。

環は慎ましやかに小さく驚いた顔を作って見せた。

「何か悪いことしたの？」

「デートの時間を実に二時間無駄にした」

「そんなことはありません。なかなか興味深い映画でした」

そう言うと環は、ワンピースの裾を翻し、映画館前の歩行者専用になっている道路を歩きだした。ようやく感動から醒めた観客が映画館からぞろぞろと這い出てきていた。怜は環の隣に並ぶと、

「お茶餡とクリーム餡とつぶ餡のどれがいい？」

いきなり訊いた。環は口元に柔らかな微笑を灯した。

「何のこと？」

「決まってるだろ。昼メシを食べたあとにオレがお前に奢るたい焼きの種類だよ。本当は昼メシを奢りたいくらいなんだけど、それは断られるだろうから、せめてたい焼きをご馳走させてくれ」

「今日は何か特別な日でしたっけ？」

「詫びの気持ちだよ」

あら、と環はバツの悪い風を装うと、

「そんなつまらなそうな顔してましたか？」

と言って、頬の辺りに手を添えた。

「十分に感動的な映画でしたけど」
「その割には泣いてないじゃないか。オレのハンカチは君の涙を拭うためにあったのに」
「じゃあ、それは今後の為に取っておいてください。確かに泣きはしませんでしたけど、面白かったわ」
「オレは幸せだよ。思いやり深い人がカノジョで」
　怜は、映画を観ているときに考えていたことを、つらつらと環に話した。
「何か隣でもぞもぞしてるなと思ったら、そういうことですか」
　環は納得したように笑みを見せると、
「それはいかにもレイくんらしい清潔な考え方だね」
　と言ってから、自分の感想を話し始めた。
「わたしが考えたのは、ヒロインはまるで蝶みたいだなっていうことです。蝶って、幼虫から蛹を経て、最後にあの綺麗な成虫になってその姿で死ぬわけだけど、ヒロインの心の有り様もそうだったんじゃないかなって。残り三ヶ月の命だっていうことが分かって、そこでそれまで幼虫だった彼女の心は蛹になって、ついには最も大事なものを悟ることによって蝶になる。そして、その大事なものを抱えたまま死んでいく。真実を知った彼女の精神は死の間際に最も輝いたのじゃないかしら」
　同じものを見ていても、批判的に見るか、好意的に見るかによって、得られるものはまるで違う。批判的に見て何も得られなかった怜よりも、好意的に見て何かを得た環の方が、得たものがあるという点で優れていると言える。
　怜が心の底から感心していると、
「でも、本当のことを言うと、ラブストーリーはあまり好きじゃないの」
　環が率直な口調で言った。
「どうしてだか分かる？」
　怜は考える振りをした。

「ヒロインの恋人と自分のカレシを比較するからだろ。そうして、自分のカレシにあまりにロマンチックな所がないことに気がついて幻滅するからだ」

環はショートボブを軽く揺らして、

「違います。観終わったあとに、『お腹空いた。ごはん何食べようかな』って考えてしまう自分がいて、そういう自分に幻滅するからです」

と軽やかに答えた。

怜は足を止めると、環の向きを変えさせた。

二人の前に中学生でも入りやすいカジュアルな雰囲気のレストランがあった。

第６８話：恋人たちのメインストリート（前書き）

今回も怜と環のお話です。前回のデートの続きになります。お楽しみ下さい。

第６８話：恋人たちのメインストリート

レストランは、以前家族で入ったことがある所で、パンの専門店だった。焼きたてのパンを食べ放題出してくれる上に、スープとサラダがついて、しかも土日にも安価なランチがあるというサービスの鬼のような店である。それゆえ人気も高く、席に通されるまでしばらく待たされることになった。

「いい香りね」

環がうっとりとした顔をした。待合席にまで、香ばしいパンの香りがふわふわと漂っていた。

十分ほど経って、ちょうどお腹が空いてきた頃合に、店の中に案内された。店内は、外の光が眩しいほどに取り入れてあるやや広めの空間だった。四人がけの丸テーブルが十個ほどある。窓際にしつらえられたテーブルからは、外の街路が一望できた。

店内の中央に席を用意された怜は環の向かい側に座ると、ランチを頼んだ。速やかに運ばれてきたスープに舌鼓を打ち、前菜のサラダを食べていると、三角巾にエプロンを身につけたウエイトレスが手に平たい籠を持って現れた。籠の中には様々な種類のパンが入っており、食べやすい二口サイズだった。

怜がまずカノジョのために適当に選んでやると、レディファーストに気を良くしたのか淑やかな笑顔を浮かべていた環だったが、パン皿に五個、六個、七個、八個、とパンが置かれていき、ついに十個を数えたときに、

「もう十分だよ、レイくん」

と堪えきれないようにして口を出した。環のパン皿には、部活が終わったあとの腹ペコの中学生が食べるのであれば大したことはないが、デート中に恋人の前で食べるには明らかに不釣合いな量のパンが載っていた。

「彼の分は結構ですから」

環が怜の分のパンを断ると、女性同士通じ合うものがあったのか、ウエイトレスの女性は手で口を隠しながらくすくすと笑って、すぐにまた焼きたてのパンが釜から生まれてくるということだけ告げて、別のテーブルに回っていった。

「そのくらい食べられると思うけどな。うまいから」

怜はしれっとした顔で言った。

「そういう問題じゃないわ。これはなに？　何かの仕返し？」

「まさか。復讐は何も産まない。空しいだけさ」

怜はまじめくさった顔で言ったが、無論、環の皿をこんもりとさせる行為にちょっとした茶目っ気があったことは否定できない。いつもやられっぱなしでは男の沽券に関わるというものである。

怜は環の皿に手を伸ばすと、パンの山から三個ほど取って自分の皿に移した。じっと見てくる少女の目に促されて、更に二個取った。まだ見てきていたので、怜は、カノジョが自分と同じくらい食べてもそんなことで嫌いになることはない、と告げたが、環は自らもう二つパンを怜の皿に載せた。そのくせ、一口大にちぎりながらぱくぱくぱくぱく小気味よく自分の分を食べると、怜の皿に手を伸ばしてきた。

「行儀悪いぞ、タマキ」

「でもここにはわたしを叱る人はいないわ」

そう言うと、胡桃パンを手に取って、幸せそうな顔で食べ始めた。そのうちに、先ほどのウエイトレスの女性が現れて、また新たなパンが振る舞われた。

焼きたてのパンには人を沈黙させる効果がある。もくもくと食べてお腹が満足してくると、徐々に心持ちが落ち着いて、ツマラナイ映画を見たアンド見せたことによる精神的ダメージも回復してきたようだった。自分の心のあまりに単純な構造にちょっとがっかりしている怜に、

「来週の土曜日って時間ある、レイくん？」

環が訊いてきた。

「いつも暇だよ」
「良かった。じゃあ、その日に父に会ってもらえる？」
　怜の背に張り詰めたものが宿った。
「とうとうこの時が来たか」
「父も楽しみにしてるみたいです」
　にこにこっとしたいかにも怪しい顔で環が言う。年頃の娘を持つ父親の気持ちなど怜には想像するべくもないが、十四年間愛情を注いできた愛娘に言い寄るウマノホネ、そんなものと会うのを楽しみにする人間がいるだろうか。仮にいたとして何を楽しみにしているのかが問題である。
「レイくんならうまくやるわ」
「これまで人の期待に応えることには無縁の人生を送ってきた」
「余人は知らず、でもわたしの期待には応えてくれる、そうでしょ？」
「ベストを尽くすよ」
「尽くすのは死力にしてもらってもいい？」
　いつもは穏やかな環の語気にわずかに力がこもっているような気がして、怜は眉を顰めた。かなり難しい人なのだろうか、と怜は環の父親について想像してみた。明るい雰囲気のある環の母と好対照をなすかのような冷たい厳粛な父親。手塩にかけた娘の恋人として相応しい男なのかどうか精査する視線。娘のことを本当に大切に思っているのかという詰問。将来何で身を立てていく気なのかという尋問。
　怜は軽く首を振ると正気を取り戻した。それは全て先ほどの映画の中で、ヒロインの父がヒロインの恋人に対して行っていたことだった。しかし、これは天啓というべきだろう。その時に、恋人がヒロインの父に対してしていた態度を真似しておけば問題ないのではなかろうか。怜が膝を打って、閃いたことを吐露すると、
「いつも通りでいいよ」
　と環のつれない答え。

「カッコつけさせてくれないのか？」
「今のあなたのままで十分です」
「分かった。でもせめて、『タマキさんをぼくにください』っていうセリフは言ってもいいだろ？」
「そういう類のことをこれ以上言ったら、ここのお勘定払ってもらうから」
食後の紅茶とミルクティ用のミルクが運ばれてきた。怜が、ミルクティは、ミルクを先に淹れて紅茶を後にした方がよいか、それとも逆の順番の方がよいか、訊くと、環は真剣に悩む振りを見せたので、さっさとアフターミルク――ミルク先、ティ後――でミルクティを作ってやった。
パンで一杯になったお腹にミルクティを注いでから店を後にすると、外は歩くのにほど良い気温である。日はやはり雲に隠れていて空気は涼やかだった。
「付き合って欲しいところがあるの」
映画を見たあとの予定を特に決めていなかった怜は、煉瓦敷きの街路を歩き出す環の横に並んだ。
計画的に植えられた緑が彩る街路を、休日の人ごみを縫って歩くと、少し大きな通りに出た。駅から伸びるメインストリートである。車道に溢れる車を横目にしながら、歩道を歩いて行く二人。環は歩きながら色々とこまごましたことを話した。それは、二人が会っていなかった空白の三週間に起こったことである。怜はちょっと意外な思いがした。環は時間を埋めるために他愛ないことを話し続けるような子ではない。
十分くらい歩いたあとのこと、唐突に歩みを止めた環は、微苦笑を浮かべた。
「新しい自分に気がついて、びっくりする時ってない？」
怜はそういうこともたまにあることを認めた。
「それで、一体どんな自分がいたんだ？」
「良くは分かりません」

「いいヤツ？」
「どうかしら。でもヨイにしろワルイにしろ、わたしにとっては愛しいわ」
「そいつが現れたおかげで、これ以上厄介な女の子にならなきゃいいけどな」
　怜は環の手を引いて、背後から来ていた自転車をかわさせた。それから手を離そうとしたが、ぎゅっと握られて離すことができなかった。環は素知らぬ風で前を向いているので、怜は仕方なく手に軽く力を込めるとつないだまま歩き出した。
　こうして手をつないで歩くことに決まり悪さは感じるものの、そんなに気恥ずかしい思いが無いのだから妙なものである。妙だと思うことも少なくなってきた今日この頃で、それも一層妙な心持ちがした。
「わたしには分かる気がします」と環。
「キミは何でも知ってる。教えてくれ」
「教えません。自分で考えてください」
「ちゃんと答えがあるんだろうな？」
「答えが用意されているものは本当の問いじゃないわ」
　総二階の飾り気のないコンクリート建てが見えてきて、怜はそれを指差すと、そこが学校と家以外で偽りの問いと戯れている場所だということを教えた。通っている塾である。土曜日であるので昼間から来ているのだろう、駐輪スペースに何台かの自転車が見えて、二階のガラスを通して窓際に座る学生と講師の姿があった。
「そう言えばあと二週間くらいで定期試験だね」
　通り過ぎながら、何の気のなしの様子で環が言う。勉強が進んでるかどうか訊いてきた彼女に、怜は渋い顔を作ってみせた。
「休み時間に珍客の訪問がなければもっと捗るんだけどな」
「みんな、レイくんを頼りにしてるってことだね」
「オレを？」
「そう。たまにはわたしもお邪魔していいかな？　最近意地の悪い

カレシのことで悩んでるんです」
「それはオレには相談しない方がいい。恋愛問題には疎い上にオレは完全に男子の味方だ」
「一応聞いてください。ときどきカレシが意地悪くなるのはどうしてだと思います？　カノジョがカワイイからついついいじめたくなるっていう、そういう愛らしい心理でしょうか」
「そのくらいならオレにも分かるから答えよう。君のカレシがたまに茶目っ気――『意地悪』とはとんでもない言葉だ――を出すのはだな、カノジョから受けるストレスを解消しようとしているからだ。ただ、実際の所は解消なんかされなくて、ストレスはますます積もる。それでも言わずにいられないのは、男の意地ってヤツだ」
「そういうときどうすればいいんです？」
「ストレスを与えていた己を反省し、カレシに優しくすることを心に誓い、そうして即時実行に移すことだ」
分かりました、と綺麗な声で言うと、環はパッと手を離して、滑らかな動きで自分の腕を怜の腕にからませてきた。怜はすかさず言い過ぎを謝ったが許されず、しばらくの間腕を組んでゆっくり歩かされる破目になった。
メインストリートの歩道から裏道に外れて少し進むと、一軒の小さな店が見えてきて、そこでようやく怜は少女の腕から解放された。店は、周囲の殺風景をひとり跳ね返さんとしているような可愛らしい外観を持つ雑貨屋だった。店先の植え込みに色とりどりの花が咲いていた。
「妹への賄賂を買っていきます」
白いバラの巻きついたアーチをくぐりながら、環がいった。

第６８話：恋人たちのメインストリート（後書き）

肥大化する欲望をいかんせん。初めは書いているだけで満足していたのが、次にできるだけ多くの方に読んで欲しくなり、この頃は読んでもらった方にできるだけ感想を頂きたくなりました。厚かましいお願いをお許しください。ご感想ください。

第６９話：三時のおやつは『知りタイ』で（前書き）

前回の続きです。怜と環のデート風景になります。ちょっとだらだらと書きすぎてるかな、と危惧しつつ。

第69話：三時のおやつは『知りタイ』で

両脇に野草が植えられた縁石を渡って木の扉を開けると、中には雑然とした世界が広がっていた。あちらにはポット苗やサボテンなどのグリーンの森、こちらには椅子や棚などのウッド製品の山、一方にはブリキやアイアン製品がずらり、もう一方にはマスコットの一軍。さながらおもちゃ箱をひっくり返したかのような有様である。幼稚園児を三十人くらい集めて、各自の自慢のおもちゃ箱をいっぺんにひっくり返したら、ちょうどこういう状況になるのではなかろうか。

やや薄暗くなっている店内には他の客の姿も見えず、静穏な雰囲気だった。

休日に学校で勉強という苦行を強いられている妹に、慰めとしてお土産を約束した、と事情を告げてきた環に、

「アサちゃんにプレゼントするんだったら、オレが買おうかな」

怜は、小さなクマのマスコットなどを手にとってしげしげと眺めながら、言った。

「そんなに楽しそうな顔でプレゼントを選んでもらえるなら、わたしもおんぶをせがんだりしてみようかしら」

怜はわざとらしく咳払いをすると、慌ててクマを森の仲間たちの元へと戻してやった。マスコットクマは恨めしげに怜を見ていたが、やむを得まい。路上でカノジョにはしたない真似をされてはたまらない。

店内を回って、様々な小物を見ていると、

「これどう思う？」

環が口元を綻ばせて怜を見ていた。怜は首を傾げた。彼女が手にしていたのは、手の平サイズの木製の箱である。箱にはにっと白い歯をむき出しにしている口だけの絵が描かれていた。

「なにそれ？」

「乳歯入れ」
　怜は首を横に振った。
「どうして？」
「想像してみろ。アサちゃんがお前くらいの年になって美しく成長したとする。美しい乙女の机には、恋人の写真とか将来への夢とか、そういう綺麗なものが載っているべきだ。家に来たカレシが偶然その乳歯が詰め込まれた小箱を発見したらどうする？　百年の恋も醒めるだろ」
「それを乗り越えた者だけが、アサヒと付き合う権利を持つ。大事な妹だからね、お付き合いの相手は厳選してあげたいわ」
「泣かせる妹思いだな。でも、当のお前が付き合ってる相手は誰が厳選してくれたんだ？」
「決まってるでしょ」
　環は指を立てて上に向けた。
「天上にいます運命の神です」
　怜は、旭のことも神の御業に任せるように環を説得して、小さな木箱を元の場所へ戻させた。
「じゃあ、これは？」
　続いて環が手に取ったのは、小瓶だった。香水かと思った怜が、しげしげと瓶のラベルを見てみると、大きく『モスキート・バスターズ』と書いてある。用途。ティッシュやコットンに数滴垂らして、枕元に置いてください。
「そうすれば、一晩、蚊は寄って来ません……ってことはつまり、蚊取り線香じゃないか。いくら崇拝する姉からもらう物だっていっても限度があるだろ」
「これから夏になるから必要でしょう？」
「生活に必要なものを買うのは親の役目だ」
　環は名残惜しげな様子で偽香水瓶を棚に戻した。
「これはどうかな？」
　怜は両手を挙げた。銃口がピタリと怜の胸元を狙っている。天然

素材でできたゴム鉄砲である。
「アサヒ、喜びそう。値段も安いし」
　怜は銃口を下げるように言った。デート中に凶行に及ばれたらたまったものではない。その上で、六歳にもなれば一人前の女の子として扱われたがってるだろうから、そういう子どもっぽいものをプレゼントするのはどうか、と苦言を呈した。
「万が一気に入ったとして、家の中で惨事が起こるぞ。軽はずみはよせ」
　環はしゅんとした振りをした。三度もダメ出しされて落ち込んだ様子を見せる彼女をちょっと怪しみつつも、怜は、他にかわいいものはいくらでもあることを教えてやるために、目についたものを手に取った。
「こういうのは？」
　コサージュのついたヘアバンドである。清楚な純白のもので派手さはない。学校に身につけていっても、ワンポイントにはなるだけで嫌味にはならなそうな品である。
　環はぱっと瞳を輝かせたが、それは妹に買っていく品が決まったことに対する喜びからではなかった。
「レイくんってプレゼントを選ぶセンスがあるね、安心したわ」
　怜は記憶を探って、これまでカノジョに何かプレゼントしたことがあったかどうか思い出そうとした。そうして、それに失敗したのち、今度は懐具合を確かめ始めた。確かめて意気消沈した怜の頭に、『誠心でカノジョと付き合うことこそ一番のプレゼントだ』という言葉が浮かんだ。この前部活動の一環として読んだ恋愛小説に書いてあった言葉である。人間、純粋さが大切である。怜は素直な気持ちになって、その言葉に従うことにした。
　じゃれあう中学生カップルが微笑ましかったのか、まだうら若い店長の女性は、ヘアバンドを少し値引きしてくれた。二人は店を出た。一日のうちで最も暑い時間帯となっていたが、空は薄い灰色で空気はひんやりとしていた。

環が紙袋を掲げた。
「これでアサヒに、来週の土曜日のときにレイくんに味方してくれるように頼んでおくわ」
怜は、それは逆効果であるからやめるようにと、言った。長女が自分から離れようとしているタイミングで三女まで長女側についたら、父にとって悲しすぎる。そうして悲劇をもたらした少年はいっそうの憎悪を受けることになるだろう。
怜の目は疑問の色を含んで、環を見た。そんなことが分からないような子だっただろうか、という一抹の疑いが胸をよぎる。環は無邪気そうな笑みを見せていた。
「タマキ、お前はオレの味方だよな?」
「もちろん。世界中があなたの敵になっても、ひとりわたしだけはレイくんの味方です」
環が感動的なことを言った。怜はあやうく泣きそうになった。もし環が言った言葉でなかったら、きっとほろりとしていただろう。
仮に敵ではないにしても、環の父に会うときに、環が怜の味方を積極的にすることはないことは明らかな話だった。娘がカレシ側に立てば父親の立つ瀬がない、ということが分からないような子ではない。来週の土曜日は孤独な戦いを強いられるであろう。とはいえ、他を頼むような人間は本当の戦士ではないこともまた怜には分かりきった話だった。自分で何とかする外ない。
真の戦士になる決意を固めてメインストリートに戻った怜は立ち止まると、隣の少女にどこか行きたいところがあるか尋ねた。
「駅を越えて、川沿いのサイクリングロードを一緒に歩いていただけます? それから家まで送ってってください」
「随分歩くな」
「好きなんです、歩くの」
そんな話は初耳だったが、怜はそれ以上は突っ込まず、環の持っていた紙袋を彼女の代わりに持つと駅前に向かって歩き出した。
二人は元来た歩道を戻り出した。人通りはやはり多い。

駅前まで数百メートルの所から歩道が広くなり、歩道沿いに小さな店が軒を連ねていた。反対側の歩道も同様であって、つまりは旧商店街なのである。駅前にデパートができたり、郊外にショッピングモールができたことで往時の賑わいはなくなったそうだが、空いている店舗はないようで適度に客が入っているようだった。

「レイくん、意地汚い女の子だって思われたくないんだけれど」

そう遠慮がちに言った環が、しかし言葉とは裏腹にピシッと人差し指を屋台に向けていた。ワゴン車を改造した移動屋台である。怜はたい焼きをご馳走する約束を思い出した。

「何にする？」

「黒豆餡」

怜は環を試すように見た。移動たい焼き屋『知りタイ』の誇るラインナップの中で、最も値が張るメニューが、黒豆餡たい焼きなのである。怜は川名家との格の違いを思い知らされた気がした。

「黒豆餡を普通に食べるようなご令嬢と付き合う自信がない」

「そんな自信は要りません。わたしが好きなのはクリーム餡です」

「さっぱり分からない話だ」

「今日は黒豆餡にしたい気分なんです。冒険したい気分」

自分の冒険に人を巻き込むなと言ってやりたかったが、雑貨屋でちょっとした罪の意識を感じていた怜は、強いてそれ以上は反対しなかった。数人の客の後ろにつき、ちょっと待ってから、黒豆餡とクリーム餡のたい焼きを一つずつ買う。

近くに据えつけられてあるベンチに並んで腰を下ろすと、怜はクリーム鯛を一口食べた。パリパリの皮と滑らかなカスタードクリームの織り成す芸術的なハーモニー。でありながら、安価である。

「まさに、たい焼きの王だな」

王に拝謁する至福の時間はすぐに終わりを告げることになった。もう一口食べようと、口を開きかけたところで、隣から熱っぽい視線を受けていることに気がついたのである。恋する少女の熱い眼差しが注がれているのは、しかし自分にではなかった。怜は口を閉じ

ると、クリーム鯛を差し出した。
「陛下にお目にかかれるとは光栄至極に存じます」
恭しい声でそういった環は、怜からクリーム鯛を受け取ると、代わりに黒豆鯛を差し出した。怜は、お頭の部分に口の形がついている鯛を手にした。中から黒々とした餡が覗いている。
「誤解しないでね、レイくん。美味しいものをカレシに食べさせてあげたいっていう、本当にそういう気持ちしかないんだから」
「じゃあ、一口食べたらまた交換しようぜ。オレは一口で十分だ」
「遠慮しないで、わたしのことは気にしなくていいから」
環は非常に女の子らしい、しかしこの場合は全く無用な謙譲の美徳を見せると、クリーム鯛を美味しそうに食べ始めた。さらにあろうことか、
「やっぱりたい焼きはクリームに限りますね」
などとまで言い出した。
怜は、冒険の後始末を始めた。高価なだけあってまずくはなかったが、黒豆の粒粒感は苦手である。環がゆっくりと味わって食べるのにかかった時間と、怜が最大限の努力をして食べるのに要した時間はほぼ同じくらいであった。

第７０話：あの空の向こうまで（前書き）

今回で怜と環のデートは終了です。

第７０話：あの空の向こうまで

駅を越えて、駅前の喧騒から離れ小一時間ほど歩き、坂道を登ると土手の上に出た。眼下には幅の広い川が見えて、薄灰色の空の下、暗色の水を湛えていた。

たい焼きを食べてからこれまで二人は無言だった。怜はしゃべらないことは苦にならないし、隣を歩く少女も同様らしい。二人でいても交わす言葉が無いのであれば一人でいるのと変わりないような気もするが、そういうことでもないようだった。一人でいるときと、ショートカットと性格に癖のある少女といるときとでは、確かに何かが違うのである。

何が違うのかと問われると、はっきりとは答えられない。ただ、隣に環がいるということがごく自然なことになっていて、一人でいるときの方が返って不自然なような心持ちになることがあるということは言える。

川沿いのサイクリングロードには、しかし自転車の若者の姿はなかった。ジョギングしている老人も、飼い犬に引きずられる子どもも見えなかった。どこまでも真っ直ぐに延びているように見える道は、怜と環だけのために用意されているような趣だった。

「もし不治の病にかかったらどうする？」

音楽的な声が何らの前置きなく訊いてきた。

「別にどうもしない。それまで通り生きていくだけだ」

唐突なカノジョの問いにすぐに反応できてしまう自分が、怜は少し情けなくなった。カレシのテンションを低くさせた当の少女の方は、しかし、楽しげな顔をしている。怜は声音に苛立ちの色を乗せた。

「死体に鞭打つのがお前のやり方か、タマキ？」

「何のこと？」

「とぼけるな。つまらない映画を見せてしまって反省しきりのカレ

シに、またその映画の話。嫌がらせ以外の何ものでもないだろ」
「ふと思い浮かんだものだから」
「カレシの男心をどうやって傷つけてやろうかって、そんなことばっかり考えてるからだ」
ありったけの非難を込めて言ってやると、環は目をしばたたかせた。
「一つ教えて欲しいことがあるんだけど、レイくん」
「何だよ？」
「今日の映画見たいって言ったのは、わたし？　それとも、あなた？」
玲は言葉に詰まった。わたしとあなた、この二人の世界ではどうにも分が悪い。玲は、パワーバランスを考える必要がなかった、過去の一人だった頃の世界を努めて思い出そうとしたが、残念なことにうまくいかなかった。
「レイくんならもし余命を宣告されてもじたばたしそうにないね」
どうしても映画の話を続けたい様子の環に、玲は一瞬、答えずに歩き続けてやろうかと思ったがやめた。自業自得である。もう二度と純愛モノは見ないことを固く心に誓ってから、玲は、生まれたものは死ぬのが当たり前で、生きている人間には等しく余命があるという単純な事実をレクチャーしてやった。
環はうんうんと素直にうなずいたが、
「わたしは時々ね、そういう生まれて死ぬってこととか、この世界にいるってこととかが、ひどく他人事のように思えるときがあるんだけれど、そういうことってない？」
やわらかく訊いた。
「不思議になることはある」
と玲は答えた。
「そういう時、どうしてるの？」
「考えてる」
「答えは？」

「簡単に答えの出るような問いは、そもそも問うに値しない」
諭すように静かに言ってやると、環は片目を細めた。先ほどメインストリートを歩いたときに彼女自身が言った言葉を返されてちょっとイラッとしたのであれば、怜の目的は達成されたことになる。カレシよりは慎みがある環は、その件については何も言い返さずに、曇り空を見上げた。
涼気を含んだ風がさやかに少女の黒髪を揺らした。
「あの空の向こうまで行ってみたいって思ったことは？」
立ち止まってほっそりとした両手を天に向けた環は、羽衣なり翼なりあれば、そのままふわりと宙に浮いていけそうな趣があった。
足を止めた怜は背筋を正した。環の軽やかな声の中にどこか真剣な色があるのが聞き取れたからである。誠心で答える必要があった。
「無いよ」
「どうして？」
両手を下げた環の目が微笑を含んでいる。問いながら、しかし、既にこちらの答えを予測しているような目である。
「向こうにも同じ世界が在るってことを知ってるから。だったらここにいても同じことだろ」
怜が言うと、環は肩の辺りから力みを抜いて、ゆるやかに一つうなずいた。
「だからこそ、『ここではないどこかへ』ですね」
再び歩き出した彼女が唐突に分からないことを言い出した。怜は環に並びながら、世に公平を司る神がいるのであればこのカップルの不均衡をどうにかしてもらいたいものだ、とつくづく思った。こちらが考えていることはあちらに分かるのに、逆が無いのはなぜなのか。しかし、たとえそんな神がいたとしても、今回は助力してくれなかっただろう。なにしろ、
「レイくん自身の言葉だよ。春休みの最後の日に教えてくれたでしょ」
ということだったからだ。そう言われて怜は思い出した。春風の

中で感じていたざわめきを固定した言葉だった。その時は新鮮な言葉だったが、いつしかそれは怜の中で当たり前のものになり、思い出すこともなくなっていた。

あの時に切り裂かれた暗闇は光へと変質し、そうしてより一層強い光を待つ。そうやって人は成長していくのだろう。怜は環をしげしげと見つめた。一瞬、彼女が発光しているように見えたが、おそらく勘違いだろう。今でさえ既にバランスの悪いカップルである。これ以上、カノジョ側を有利にするような条件など断固否定しなければならない。

「子どもの頃ね、別の世界にすごく憧れたことがあったんだ」

環はなつかしそうな顔で頬を少し緩めた。

「でもどうしてもその世界が見つからなくてね、この世界にいなくちゃいけないことを悟ったんだけど、あの時はショックだったな」

「タマキにも可愛いときがあったんだな」

「遠い遠い昔のお話です」

てっきり環が言い返してくると思っていた怜は、反撃がなかったことについ調子に乗って、

「教えてくれないか。可愛い女の子がどうして可愛くなくなるのか」

問うと、環は桜唇（おうしん）に微笑を含み、

「それは男の子に出会うからではないでしょうか」

と答えて、怜を唖然とさせた。怜は、環に豊富な男性遍歴があることを祈ったが、

「あ、断っておきますけれど、お付き合いするのはレイくんが初めてですから」

天上に祈り届かず、しかしそれでも怜は諦めなかった。たとえ付き合うのが初めてだとしても、好意を抱いた男の子くらいはいるはずである。現に妹などは小さな頃からしょっちゅう、クラスの誰それがカッコイイとか、部活の後輩がカワイイとか言っているのである。妹と環を同列に論じることなどできないが、少なくとも同性である。共通点がある可能性もあるはずだ。

重ねて訊いたところ、環は頬に手を当てると真剣な面持ちで考え始めた。
「……いたかしら。何か思い出せないんだけど」
「幸いに道はどこまでも続いてる。ゆっくり考えてくれ」
冗談ではない話である。仮に環が今までに怜にしか出会ってないとして、かつ女の子が可愛くなくなるのが男の所為だとすると、すなわち環の可愛くない行為は全て怜の責任ということになる。そんな恐ろしい事態を避けたい怜は口を閉じて、環の沈思を邪魔しないようにした。
「レイくん、やっぱりいないみたい」
「よく考えてくれ」
「別にいなくてもいいんじゃないかな」
「いや、よくない。ことはお前の問題じゃないんだ」
環はふう、と息をつくと、何かに気がついた振りで両手を打ちならした。
「そう言えば、いたわ、小学四年生のとき。あれがわたしの初恋だったなあ」
「名前は？」
「え？」
「いや、名前だよ。初恋の男の名前くらい覚えてるだろ」
「えーと、名前ね、そうそう、ヤマダくんだったわ。ヤマダタロウくん。なつかしいなあ、今どうしてるかしら」
「どうしてるも何も同じ小学校だったら、同じ中学のはずだろ。何組にいるんだよ？」
怜はじいっと疑問の視線を突き刺してやったが、環は何らの痛痒も見せなかった。
「もういいでしょ、この話は終わりにしましょ、レイくん。心の宝石箱の中にしまっておきたい思い出なんです」
急に乙女チックになった少女に、もう少し突っ込もうとしたが、怜は妥協した。とりあえず、環がこんな風になってしまったのは、

そのヤマダ少年の所為にしておいた方が怜としても心の平衡が保てるというものである。
土手をくだりサイクリングロードを外れて歩き、住宅街に入ってから少ししたところで、環は静かに立ち止まった。
「ここでいいよ」
そう言ってアサヒへのお土産を渡してもらおうと手を差し出したが、怜は返さなかった。
「家の前まで送る。ここから家までの途上で、車に轢かれたり、自転車に追突されたり、三輪車に跳ね飛ばされたりしたら大変だからな」
環はいたずらっぽい笑みを見せた。
「家には父がいるのよ。もしかしたら家のすぐ外でアサヒと遊んでるかもしれない」
「その時はその時だろ。その場でご挨拶するさ」
そう言って先に立つ怜の隣から環は覗き込んできた。黒い真珠のような瞳に明るい色が見えた。
「何だよ?」
「ううん、何でもない」
環は満面に笑みを湛えると、少し身を寄せてきた。少女の細い肩が、スリーブ越しに怜の肩に触れた。

第７１話：脳内彼氏に別れを告げて（前書き）

今回は、更紗ちゃんのお話です。
片想いに苦しむ繊細な女の子の心情に涙すること請け合いです。

第７１話：脳内彼氏に別れを告げて

巷間（こうかん）で取りざたされる噂によれば、片想い、中でも初恋の時というのは、頭が働かなくなるらしい。相手への思いで頭の中が一杯になり、何にも考えられず、何にも手につかず。四六時中、彼もしくは彼女の顔が目の前にちらついて、もし想いが叶ったら、一緒にコレをしたい、ドコソコに行きたいという夢想に耽る。そうして一日が過ぎていくそうである。

噂とはまことに当てにならないものである。更紗（サラサ）には、全くそのようなことは起こらなかった。正真正銘の初恋、かつ百パーセントの片想い。であるにも関わらず、頭は回った。普段よりも回るくらいである。一体、どうやったら、片想いの相手に振り向いてもらえるか、ということをずっと考えていたのである。

「わたしって人よりクールだったんだわ」

ニヤリ、と不敵な笑みを見せた更紗に、

「単に脳内カレシとシミュレーションしすぎて、現実の男の子の前であんまり緊張しなくなっただけなんじゃないの？」

小学校来の友人が実に適確に嫌な事を言った。

二人がいるのは、老舗の和菓子店、『吾郎庵』だった。日曜日の午後である。小ぢんまりとした落ち着いた和装の雰囲気の店の一角に二人は席を取っていた。窓際の席で往来がよく見える。街路を歩く恋人同士の姿を見て、絶対にああなってやる、と更紗は意を固めた。

「で、いつ告白するの？」

梅の実のゼリーをスプーンでひとすくいする友人に、更紗は恨めしげな視線を向けた。友人は中々整った小作りな顔立ちである。ちょっと化粧までしているようで、それもまたよく似合っている。

「そんなにすぐ告白できたら苦労はないわ」

「と言っても、あのルックスなんだから、ライバルは多いんじゃな

いかなあ。早めに告白しないと、先越されちゃうんじゃない」
「出会って一週間しか経ってないんだから、いくら何でも無理でしょ。今は少しでも好感をもってもらえるようにしたいのよ。それを相談したくて、みんなをここに呼んだのに……」
更紗は、出入り口のほうを睨んだ。
「何で誰も来ないのよ？」
「当たり前でしょ。美術部のわたしや、部活辞めちゃったあんたと違って、みんな、最後の大会前で忙しいんだから」
「部活と親友、どっちが大事なの？」
「部活なんじゃない」
ひとくさり心無い友人たちの文句を言ったのち、更紗は栞（シオリ）に向かった。
「それで、どうすればいいと思う？　あんたはどうやって今のカレシたらし込んだの？」
栞は嫌な顔をした。
「『たらし込む』って言葉は人聞きが悪い上に、恋する女の子が使っていい言葉じゃないよ。それ使っていいのは、恋に疲れたオバサンだけだから」
そう断ってから、栞は今のカレシとの馴れ初めを話し始めたが、更紗はすぐにそれを止めた。何の参考にもならない単なるのろけ話である。
「人の恋話聞いてもどうしようもないわ」
「昔はそれで盛り上がってたのに。何か人が変わったよ、サラサ」
「かもね。あの頃は単に恋に恋してただけだから」
「とりあえず情報収集だよね。相手の趣味とか考え方とかさ」
恋の先輩のやっとまともな提案に、更紗は重々しくうなずいて、
「敵を知り己を知れば百戦して危うからず」
と突然学をひけらかしたので、友人は狐につままれたような顔になった。
「アンコがそんなこと言ってたわ」と更紗。

「アンコね。なんか変なこと知ってるんだよね、あの子は」
「そういえばさ、アンコは何で今日来ないの？　部活関係ないでしょ」
　三組にいる彼女は、『文化研究部』という何の活動をしているか皆目見当がつかない部の部長を務めていた。何をしているにしても超マイナー部である。まさか大会はあるまい。
「部活で新聞作るから、その取材に図書館に行くってさ」
「また、図書館？　司書にカッコイイ人でもいるんじゃないの？」
　密かに抜け駆けしようとしているのではないかと友人の背信を疑いつつ、気になったことが一つ。
「来られないにしても、何でアンコはわたしに直接メールしないわけ？」
「サラサが怖いからでしょ」
「恋する女の子が怖いってどういうことよ？」
「あんたの今の顔を鏡で見れば分かるわよ」
「顔のことは言わない方向でお願いできますか」
　更紗の気持ちがちょっと暗くなる。顔が良い子は得である。それだけで男子にちやほやされるし、いざこちらから告白、ということになってもある程度の自信を持ってぶつかっていける。公平に考えてみれば、可愛い子には可愛い子なりの悩みがあるのかもしれない。現に、友人の一人は学年の中でトップクラスの美少女だが、告白されることが、嫌味ではなく本当に心からうっとうしいらしい。とはいえ、一度もちゃんとした告白をされたことのない更紗とすれば、そういう悩み自体に羨ましさを感じるのである。
「でも、サラサの顔のぶつぶつ消えてきたじゃん」
「もう少しなぐさめるような気持ちを込めて言ってよ」
　ゼリーを食べながら平板な声で言う友人の言葉に非難の色を見せながら、それでもちょっと嬉しい更紗。この頃、全くスナック菓子やチョコレート、清涼飲料水を摂取していないおかげで、肌がキレイになってきているのが見て取れた。今、食べているのもおからを

使ったマフィン、という徹底ぶりである。
「あんなにお菓子ホリックだったのにね、エライ、エライ。でも、いつまで耐えられるかな」
からかいの色を浮かべる栞に、更紗は、お菓子断ちを高らかに宣言した。
「お菓子は女の子の敵よ。お菓子なんか必要ないわ」
「ちょ、ちょっとサラサ、声大きいって」
近くのテーブルにいた女性客と、顔なじみのエプロン姿の女性店員の視線が更紗に突き刺さった。和菓子店で過激なことを口走ってしまった更紗はいたたまれなくなって顔を下げた。
「アンコ来るってさ」
栞が携帯を操作しながら言った。メールが入ったようである。更紗はサービスのコーヒーを淹れに来てくれた女性店員に、おからのマフィンが非常に美味しいということを伝えて、先の罪ほろぼしをしておいた。
十五分ほどして店の戸が開くと、大きな手提げ鞄を二つ抱えた少女が入って来た。まさか、とは思ったが、
「遅れてごめんね」
見覚えのあるお団子頭が軽く会釈してきた。
「アンコ、なに、その荷物」
「なにって本だよ。図書館で借りたりとか、あと古本屋でいいのがあったから買ってきたの」
ずっしりと重たげな鞄を椅子の脇に置いて、少女は座ると、眼鏡の奥の瞳を輝かせながら、幸福そうな顔で続けた。
「今日はすごい収穫だったわ」
横から栞が呆れたように口を挟んだ。
「収穫はいいけどさ、その格好でよく外歩く気になるよね。ちょっと考えた方がいいよ、アンコ」
おしゃれに関しては自分もまだ勉強中である更紗でさえ、そう思った。ジーンズと無地のトレーナーにスニーカーというあまりに飾

り気のない格好である。ステキな男の子との偶然の出会いはまず期待できない。ただ、当の杏子はどこ吹く風で気にした様子も無い。

「それだから、アンコはカレシできないんだよ」

栞がダメ押しをしたが、杏子は、

「この集まりはわたしについてのことが目的じゃないでしょ」

とさらりとかわして、速やかに現れた店員に和菓子のういろうを頼むと、

「それで、どういうことになってるの？」

会議の進捗状況を訊いてきた。

更紗が敵を知りたいということを依頼すると、杏子は神妙な面持ちでうなずいた。

「がんばって話しかけて色々訊いてみる」

「訊かなくていい」

「え？」

分からない顔をする杏子に、更紗は、片想い相手に気があることをできるだけ悟られたくないから、質問はしなくていい、と釘を刺した。

「でもわたしが話しかけるわけだから、そんなことにならないと思うけど」

普通はそうだろうが、杏子には不用意な所がある。無邪気な所と言ってもよいかもしれない。その無邪気さが恋の工作員に向かないということは既に証明済みであった。よほど解雇しようと思ったのだが、あいにく三組に親しい子は他にはいない。引き続き任命する他なかったのである。

また別の危惧もある。

――もしかしたら、アンコが自分に気があるって、ヒカルくんが思うかもしれない。

という恐れだった。栞や他の友人によると、男子というのは、女子から少し話しかけられたくらいで、『こいつ、オレに気があるんじゃないか』的な誤解をすることがよくあるらしい。そもそも輝が

そういう軽薄な男子かどうかという所は議論の余地があるし、また、気がある、と誤解した男子がどういう心理状態になるか、という所もはっきりとは分からない。その女の子のことを意識するようになるのか、逆に興味を失うのか。後者の可能性を恐れて更紗はできるだけ悟られたくないわけだが、前者の可能性も捨てきれない。

「とにかく聞き耳を立てるだけにして。もし話しかける時でも、一人では話しかけないこと。必ず二人以上で話しかける、いいわね？」

「何かめんどくさいな」

「恋ってそういうもんなのよ」

「ふーん、大変なんだなあ」

そう言うと、杏子は現れたういろうの一切れに黒文字を刺した。

もう一つ更紗には、杏子に聞いておきたいことがあった。

「原田美優の動きはどうなの、アンコ？」

「どうって……ヒカルくんを狙ってるかどうかってことなら心配ないみたいだよ。原田さんはヒカルくんに興味ないみたい。原田さんからは全然話しかけたりしないし。この頃お昼休みになると教室出ていくんだけど、他のクラスに好きな人でもいるんじゃないの？」

更紗は腕を組んだ。杏子と輝と同じ三組の原田美優はカノジョがいる男子と付き合っては、愛する二人を別れさせるという悪名をほしいままにしていた。別名『カップル壊し』。そんな別名を持っているからと言って、カップルになっている男子にしか関心が無いと速断もできないところが更に恐ろしいところである。更紗は引き続き監視の目を緩めないよう杏子に厳命した。用心を重ねておくに如くはなし。

「そう言えばね、ヒカルくん、部活に入りたいって言ってたよ」

思い出したように言って、美味しそうに羊羹もどきをほお張る杏子。

「部活？」

もぐもぐを終えてから杏子はうなずいた。

「友だち作りたいんだって。運動部は今から入れないから、文化系

の部に入りたいって話してたわ」
　更紗としては複雑な気持ちである。輝には楽しい学校生活を送って欲しいと思う一方で、そんなに積極的に友だちを作って欲しくはないという気持ちもある。何しろあの容貌である。単なる友情を履き違える不届きな女子が出てくる確率はかなり高い。
――できるだけそういう子のいなさそうな部に入ってくれるといいけど……。
　あっ、と一声大きな声を上げてしまった更紗は、再び周囲の視線を一身に浴びた。
「いいこと思いついたっ！」
　二人の友人のたしなめるような視線にも構わず、更紗は電光のように脳中に閃いたアイデアを語り始めた。

第７２話：オペレーション始動（前書き）

読んでくださってる方に心からの感謝を。
今回は、宏人と志保のお話です。
「二年二組支配下計画」のスタート。
第６４話の続きになります。

第72話：オペレーション始動

闇をわずかに押しのけるアンティークランプの灯りの下で、ケーキと紅茶の犠牲を天に捧げ血の盟約を交わしてから、一週間が経とうとしていた。宏人は我が身と心に特段の変化が認められないことを喜んだ。どうやら契約を交わした相手は人であったようである。

「わたしは色々と調べたいことがある。あなたはできるだけ二瓶さんと仲良くして、二瓶さんのことを知るようにして」

それが血を啜(すす)りあった少女からのとりあえずの依頼だった。

『二組支配計画』を聞いた直後は、それが現実離れしたものであったにせよ、まだやる気があった。しかし、あれから特に何もせず一週間が過ぎようとしている現在となっては、だんだんやる気も殺がれて来た。そもそも具体的に何をするのかという行動計画が不明である。

とはいえ、盟を結んだ限りは協力して事に向かわなければならず、相棒の言葉に従い、クラスメートの二瓶瑛子にはできるだけ愛想よくしておいた。つまりは普段どおりにしていただけであるが。また、瑛子のことをよりよく知るために彼女のことを改めて調べてみたりもした。

学年で十番以内の成績、卓球部で汗を流していること、二年生の中で五指に入る人気、ピアノが弾けること、字が綺麗なこと、塾に通っていること、などなど。調べた結果分かったことは、調べる前から分かっていたことだけであった。

「付き合ってるヤツとか、好きなヤツとかいるのかなあ」

これは調査の一環であって別にやましい気持ちではない、と自分に言い訳しながら、宏人はつぶやいてみた。宏人のクラスでではない。お隣の三組である。昼休みを利用して、友人の所に遊びに来ていたのである。

「直接本人に訊いてみたらいいだろ」

友人がにやにやしながら言った。
「そんなこと訊けるかよ。気があるって言ってるようなもんだろ」
「あるんだろ？」
「ないヤツなんかいるか？」
と答えた宏人ではあるが、瑛子と付き合いたいという気持ちがはっきりとあるわけではない。宏人にとって瑛子は淡い憧れの中にある存在である。高嶺の花であって、しかも、それを下から仰ぎ見ているだけで満足してしまうところが宏人にはあるのだった。
「二瓶はまだ誰とも付き合ってない。そして、二瓶が気があるのはこの五人のうちの誰かだ。オレの調査によるとな」
唐突に友人との会話の中に入ってきたひょろりとした男に宏人は面食らった。伸ばした前髪の下から宏人を見下ろしていた彼は、声をかけると同時にルーズリーフを一枚差し出してきた。宏人と友人が座って挟み込むようにしていた机に一葉の紙が置かれると、現れたときと同様に不気味な少年は去っていった。
「お、おい、誰だよ、あれ？」
あからさまに怪しい少年の正体を訊くと、友人の方は大して驚いた様子もなく、二年生の目立つ女子の情報を集めている男だということを教えてくれた。
「え？　なに？　何でそんなことしてんだよ？」
「さあ。趣味らしいけど」
「趣味？　おかしいだろ、ソレ」
「お前だって大して人のこと言えないだろ」
宏人は言葉に詰まった。言われてみれば、この一週間あれこれ瑛子のことを探っていたりしたのでやっていることは同じだった。
「何かお前が二瓶のこと気になってるみたいだから、オレが池田――さっきのヤツな――に聞いておいてやったんだよ。要らなかったか？」
宏人は一応友人の心遣いに礼を言って立ち上がった。廊下に出て、しげしげとルーズリーフを見てみると、驚いたことに知っている名

前があった。昨年同じクラスで今も付き合いのある友人である。他の男子も知り合いではなかったが、各クラスで人気のある男子ばかりだった。どの男子と付き合ったとしてもお似合いのカップルになりそうである。面白いことに、宏人のいる二組の男子の名前はなかった。よほどツマラン男しかいないということだろう。

「……倉木くん」

二組に帰ろうとしているところで、宏人は静かに呼び止められた。プリントを手にした癖毛頭の少女がこちらを見ている。

「何を見てるの？」

志保が宏人の手にある『瑛子が好きそうな男子リスト』を覗き込んできた。彼女は自分が持っていたプリントを小脇に挟むと、秘密情報の書かれたルーズリーフを宏人の手から抜き取り、やおら音高く破り始めた。

「くだらない」

呆然とする宏人に一言志保は小さく吐き捨てると、ゴミになったルーズリーフを押し付けてきた。

「わたしは仲良くするようにって言ったはずよ」

「それもやってる」

宏人は憮然と答えた。この居丈高な所がどうにも鼻につく。それでも今はまだ校内であるからマシである。校外では一層ひどいことになる。本性を隠す必要がなくなって傍若無人の限りを尽くすことになるのである。

廊下で人の目があるので、志保はそれ以上は詰らず、

「わたし今日部活休むから」

と話題を変えた。そんなことは勝手にしろ、という話だがところがそうでもない。裏人格の志保に出会った先週の水曜日、その翌日から、宏人は、別れ道までではあるが志保と一緒に下校しているのである。姉の命だった。

先週の水曜日に志保と別れたあと、ブラコン呼ばわりされた姉が悪鬼の形相で家で待ち受けていたが、おみやげに持たされた喫茶『

シルビア』のケーキを捧げると、機嫌が直ったようで、しかし、今度は話題が告白の顛末にシフトした。
「友だちからお願いしますって言われたよ」
と宏人は無難な所を選択した。ＯＫしてくれたと言えばこれから姉にからかわれ続ける事態となり、断られたと言えば志保と会うのを見られたときに未練たらしく言い寄っていると見られる可能性がある。
「仲良くしてあげなとは言ったけど、告白しろとまでは言ってないわよ……まあ、いいけどさ、朝夕の荷物持ちぐらいしてあげなさいよ。あんたなんかの告白を保留してくれたんだからさ」
反論したい部分はあったが面倒だったのでぞんざいにうなずいておいた。翌日から、部活動後に志保を待つことにしたのである。偽装告白の件について志保に話すと、志保は一瞬迷惑そうな顔をしたが、
「いや、その方が都合がいいかもしれないわ」
と何を思いついたのか、人の悪い笑みを作って、偽装カノジョになることを承諾してくれたのだった。ただし朝は迎えに来なくていいということは念を押された。言われるまでもなくそんなことをする気まではなかった。
「部活休むって何でだよ？」
「用事があるから」
志保は簡単に答えると、やや吊り上がった目に鋭い光を溜めた。
「そろそろ行動を起こすわ。あなたにもやってもらいたいことがある」
「どんな？」
「あとでメールする」
「あとでするくらいなら今言えよ」
「こっちにも事情があるのよ」
そう素っ気無く言って志保は教室へ戻った。宏人はため息をついてその後に続いた。二人が教室に戻ると、室内の温度が五度くらい

下がったように感じた。二人に向けられる視線が冷ややかである。この状態になって、十日くらいになるが、慣れるものでもない。そのうち、学校に行きたくなくなるのではないか、と宏人は危ぶんでいた。この空気の中をよく志保は一年耐えたものである。とても真似できそうにない。

午後の授業をやり過ごし、部活を終え、家に帰り、

「志保ちゃんと関係進んだの？」

という姉の無意味な冷やかしをかわして、自分の部屋でゆっくりしている時のことだった。

「二瓶さんをデートに誘ってください」

メールの着信音に応えて、開いたメールにはその一文だけ書かれていた。志保からである。

即、宏人が抗議の電話をしたことは言うまでもない。既に九時だったが、メールの送受信ではらちが明かない。

「メールしたのに、どうして電話してくるの？　二度手間でしょ」

志保は疲れたような声で電話に出た。

「それどころかお前の家まで行って直接訊きたいくらいだ。どういうことだよ？」

「メール通りよ。二瓶さんをデートに誘って。仲良くなってもらいたいの」

「何で？」

「もしもーし、目は覚めてる？　一週間前に言ったこともう忘れたの？　二瓶さんはキーパーソンなの。グループに入ってもらう必要がある。いきなりグループにっていうのが無理なら、まずは仲良くなってからでしょ」

「別にデートまでする必要ないだろ」

「必要があるかないかはわたしが決める。議論はなしよ」

宏人は目を瞑って歯を食いしばってみた。

「お前は自分が女の子であることに感謝した方がいいぞ」

「もしわたしが男の子だったら、つべこべ言わずにすべきことをす

るけどね」
「……で、どうやればいいんだよ？」
「そんなの自分で考えてよ。あなたの首から上にあるものは何かの飾りなの？　帽子を載せるための台？」
「……例え申し込んでも断られるに決まってる。二瓶は、好きなヤツがいるのに他の男とデートするようなヤツじゃない」
「ねえ、お願いだから、ぐずぐず言うのは実際に行動を起こしてからにしてよ。やる前から自分の頭の中だけで答えを出して自己完結するのはやめて」
　切れた携帯電話をじっと見つめながら、宏人は世界の広さを知った。まさか、姉以上にいらいらさせられる女の子がいるとは思ってもみなかった。ちゃんと話すようになって一週間しか経っていないのにこの物言いだとすれば、今後付き合いを重ねるとどこまでエスカレートするのか考えると冷や汗が出る。とはいえ、彼女の側に立とうと決心したことに未だ後悔はないようであって、それはそれで救われない話である。
　宏人は寝苦しい夜を過ごした。瑛子をどうやってデートに誘えばよいか。どういうタイミングで、どういう言葉で、どこに？　女の子をデートに誘った経験がない宏人としては皆目見当もつかなかった。よほど、やっぱりやめた、とメールしてやろうかと思ったが、一方であの高慢な女の子に事の成就を報告して、感心させてやりたいという気持ちもある。
　さて、人は自分に分からない問題を抱えたとき、どうするのか。他人に訊くのである。
「賢兄（にい）。今日はオレと登校してくれ」
　翌朝、姉を迎えにダイニングに現れた一歳年上の少年に、登校準備を万端整えた宏人は切り口上でそう言った。

第７３話：スマートなデートの誘い方（前書き）

今回も、宏人と志保の話になります。前回の続きです。

第73話：スマートなデートの誘い方

賢はその優しげな瞳に少し戸惑ったような色を浮かべた。
「でも、ヒロト。ヒナタを待たないと」
「ケン兄。たまにはオレと登校してくれてもいいだろ？　姉貴ばっか、えこひいきするなよ」
「熱でもあるのか？」
「あるのは相談。ちょっと教えてもらいたいことがあるんだ。頼むよ」
差し迫ったものを見せる宏人に、賢は事態を重く見たのか快くうなずいてくれた。
「姉貴には、恋の相談をしたいからケン兄を借りてくって言っといてくれ」
宏人は適当なことを母に言うと、賢を家の外へと急きたてた。今にも姉が起きてこないとも限らない。寝起きの娘の勘気をダイレクトに浴びることになりそうな母が長く息を吐くのが後ろで聞こえた気がした。
「デートの誘い方か……」
朝の明るい通学路を歩きながら、宏人が相談事を話すと、賢は考える素振りを見せた。
「オレも経験ないから、えらそうなこと言えないけど、別にそう改まる必要はないんじゃないかな。例えば、遊園地に行きたいんだったら、今度一緒に行かない、って感じで。もしあっちが行きたければ日時を訊いてくるだろうし、行きたくなければ無理強いするのは良くないだろ」
宏人はため息をついた。確かに賢に誘われたら宏人でさえ断りにくいものがある。清新な水のような爽やかさが彼にはあって、その魅力に自分で気がついていないようなところがまた魅力的だった。大抵の女子だったら頬を染めてうなずくのではなかろうか。

「賢兄……オレは賢兄みたいにカッコよくないし、相手は姉貴みたいにガサツな子じゃないんだよ。そんなことがさらっと言えれば苦労はないよ」

「うーん。じゃあ、グループデートみたいな感じにするのは？　男子何人かと女子何人かで遊びに行くって感じで。二人きりにはなりにくいけど、接点は持てるだろ」

持つべき者は兄である。志保の意図するところは一対一のデートかもしれないが、仲良くなるということが目的であれば一対一である必要性は必ずしもない。それに、彼女の思惑通りにするのが癪であることでもあるし、宏人はありがたく賢の提案を容れることにした。

「ヒナタから聞いたけど、そのテニス部の子って可愛い子なのか？」

微妙な誤解、というか当たり前の解釈だが、宏人が志保を誘いたがっていると思い込んでいる賢に、

「可愛すぎてまともに向き合えないほどだよ」

と宏人は皮肉げに答えた。へえ、と温かい目を向けてくれる幼馴染みに、一瞬宏人は何もかも話したくなった。志保の正体から始まって、現在のクラスでの状況など洗いざらい全部である。そうして、賢の意見を聞きたかった。賢だったら人として為すべき行動を明確に示してくれるだろう。しかし、それはできない相談だった。彼には姉がついている。賢に話すということは、姉に筒抜けになるということである。そうして姉はおよそ何かを相談できる人間ではない。

学校に着くまで宏人はずっと考えていた。賢の策を実行するためには、メンバーを集める必要がある。

――去年仲が良かったヤツラを適当に集めるか。

思えば昨年はいい一年だった、と宏人はなつかしげに過去を振り返った。男女問わず気の合う子が多くて、普段のクラス生活にしろ行事にしろ、愉快に行うことができていた。それが、二年になってまさかこんなことになるとは。運命とは残酷である。

教室に入ると、まだ人の影はまばらだった。志保も来ていないよ

うである。宏人は鞄をロッカーに押し込むと、教室を出た。最初に誘うべき人物が決まったのだった。宏人は、二年四組に入ると、教室のちょうど真ん中ほどにある席に腰を下ろした。

席の主が現れたのはそれから十分くらいした頃だった。友人と談笑しながら教室に入って来た彼は、自分の席に先客がいることに驚いた風を見せたが、誰だか認めると、にやっとして話しかけてきた。

「何だよ、宏人。オレの机に落書きか？　油性はやめてくれよ」

「話がある、雅紀」

それだけ言うと、宏人は席を立ち、雅紀の肩にかかっている鞄を下ろさせて机にぞんざいに置いたのち、彼を引っ張って廊下に連れて行った。

「日曜日、暇か？」

「突然、何だよ？」

「暇だと言ってくれ」

宏人はがしっと少年の肩をつかんで強い声で言った。宏人の目前に、目元に愛敬のある顔があって、軽い驚きの表情を浮かべている。大村雅紀。昨年同じクラスで、仲良くなったクラスメートの中でも一番気の合った子である。

「もし暇だったら？」

「オレと遊園地に行ってくれ。水族館でも、動物園でもいい」

雅紀は、ぽんぽん、と宏人の肩を叩くと、

「ヒロト……お前のことはいい友達だと思ってるけど、それ以上の関係にはなれない」

そう真剣な声で言うと、ごめん、と軽く頭を下げた。艶のある黒髪がさらりと揺れる。宏人は掴んでいた雅紀の肩を揺らした。

「そんなわけないだろ」

宏人が、グループデートの幹事を務めてもらいたい旨、説明すると、

「楽しそうだな、ソレ」

と乗り気を見せた雅紀だったが、

「ただ問題がある」
そう言って難しい顔をした。
「日曜日、部活なんだよな」
「オレを助けると思ってくれ、マサキ」
そう言うと宏人は、両手を友人の肩から外し、拝むように手と手を合わせた。
「このとーり」
一瞬後、宏人は友情の有り難さを知った。雅紀は、分かったよ、とうなずいてくれた。
「日曜日に具合が悪くなって部活に行けなくなるっていうのはよくある話だ」
「恩に着る」
「そんなことより、お前が好きなのは誰なんだよ?」
宏人が小声で瑛子の名を出すと、雅紀は目を瞠った。それから、宏人の手を取り、その手を熱く握って来た。
「がんばれよ、宏人。そして、もしうまく行ったら、お前の恋に協力した男がいたことを忘れないでくれ。エーコちゃんの可愛い友達、オレにも紹介してくれ」
宏人は、手を握り返しながら、男と男の熱い、暑苦しい約束を交わした。
「適当にメンバーは集めてやるからさ、お前はがんばってエーコちゃんに申し込めよ」
雅紀の全面的なバックアップに心からの感謝の念を捧げつつ、一方で宏人は申し訳ない気持ちにもなった。何しろ瑛子のことが好きで協力して欲しい、というのは嘘であり、その上、
――悪いな、マサキ。実はお前は二瓶を釣るためのエサなんだ。
ということだったからである。昨日怪しげな情報屋からもらった『エーコが気があるかも男子リスト』に載っていた名前の一つが、大村雅紀だったのである。それを思い出したこともあって、彼を誘うことにしたのだった。確率五分の一であるが、見事当たったらお

慰みである。
――それにしても……。
今さらなことではあったが、なぜ五名も名前が上がるのだろうか。一つ仕事が片付いたので、そんなことを考える心の余裕ができた。A君のことが好きらしい、という噂なら分かるが、A～E君の誰かが好きらしい、という噂というのは一体どういう経路で形成されるのか。
首を捻りながら自分の教室に戻った宏人は、瑛子が自分の席についているのが見えた。が、残念なことに、他の女子と話している。さすがに、その会話の中に割って入って、デートの申し込みをする勇気はない。また、クラスメートの前でそんなことをされては、彼女の迷惑になるだろう。
席に座り斜め前にいる少女の笑顔を見ながら、宏人はひそかに機会を待った。ようやく機会を得たのは放課後のことだった。自分を褒めてやりたい気分である。よく耐えた。待つことにもであるが、もう一つは、休み時間ごとにかけられる、少女の突き刺すような視線にである。
「いつ申し込むの？　早くしなさいよ！」
志保の目は如実に叱咤の色を帯びていた。宏人はちょっとムッとした。命じる方は簡単であるが、実際に行動する人間の気持ちを少しは考えてもらいたいものである。
「今から行く」
という意味を込めて、志保を見たあと、宏人は瑛子を追ってホームルームが終わった教室を出た。
「二瓶、ちょっと話があるんだけど」
おそらく卓球部に行くため体育館に向かって廊下を歩く少女の横に立つと、宏人は口早に言った。突然声をかけられて少し戸惑った顔を見せた瑛子だったが、宏人が素早く用件を伝えると、口元を綻ばせた。
「楽しそうだね。この頃どこにも行ってないし、是非参加させてく

ださい」
　宏人は内心でほっと息をついた。さして緊張もせずに申し込むことができたのは、人に見られないようにということに意識が向かったからだった。皮肉というほかない。二人で歩いているところを見られたら瑛子の迷惑になるだろうと、宏人が速やかにその場を離脱しようとすると、
「倉木くん」
　と、瑛子は宏人を呼び止めて、鞄から手帳を取り出して、シャープペンで何やら書き付け始めた。小気味よい音がして手帳の一ページが破られて、宏人に手渡される。
「それ、わたしのメアド。詳しいことが決まったらメールして。決まってなくてもメールしてもらえると嬉しい」
　瑛子は、はにかんだような笑みを見せて、宏人を魅了すると、心持ち早足でその場を離れて行った。宏人は再確認した。あれこそが女の子である。言っては悪いが、いや別に悪くもないだろうが、姉や志保などは比較にもならない。
　胸の動悸を抑えるのに苦労しながら教室に戻った宏人は、女の子にあらざる子に、首尾を説明しようと思ったが、当の志保は既に教室にはいなかった。拍子抜けした宏人が、志保がその日も部活を休んだことを知ったのは、自分の部活を終えて校外に出てから携帯電話のメールチェックをしたときのことだった。

第７４話：眠れぬ夜は誰のせい（前書き）

前回の続きになります。
いつも読んでくださってる方、たまに読んでくださってる方、今日初めて読んでくださった方、本当にありがとうございます。

第７４話：眠れぬ夜は誰のせい

「今日も部活を休みますので待たなくていいです。二瓶さんの件は首尾を報告してください」

全く飾り気の無いメールを確認して、宏人は気が滅入った。良い立場である。こちらは眠れぬ夜を過ごし、幼馴染みと友人の力を借りてどうにかこうにか目的を達成したというのに、一方あちらは、部活を休み悠々と使いパシリからの報告を待てば良い。

それでも電話をかける自分の律儀さにはもはや笑うしかない。対姉との関係で培われてしまった悲しい下僕根性。せめて鞭を振るい自分を使役するのが美しい少女でもあれば救いもあるが、現実はそう甘くない。

何回かけてみても志保は電話に出なかった。電話に出るべき相手が出ないというのはイライラするものである。事実の報告だけであれば、留守電に入れても良いし、メールで知らせても良いが、ちょっとくらいはこちらの苦労を伝えたいという気持ちがある。宏人はまたあとからかけ直すことにした。

家までの夕暮れの途上、雅紀からメールが来た。日曜日のグループデートの件である。宏人は大きく目を見開いた。一緒に行くメンバーの名が記載されていたのだが、何と男子が雅紀を含めて五人、女子が三人、という随分な大所帯であった。

――二瓶と話す機会なんかできるのか？

数に阻まれて近づくこともできなそうである。とはいえ、こちらから頼んだ手前、まさか雅紀に人数を減らしてくれとも言えない。

瑛子のことに思い至ると、

――でも、どうして二瓶はＯＫしてくれたんだろう？

という疑問が頭に浮かんできた。一番簡単な解釈は、瑛子が雅紀のことを好きで、宏人の誘いが渡りに船だったというものだが、それにしては、先ほど誘ったときに、雅紀の名前を出しても全く反応

がなかったのが気にかかる。他に好きな男がいるのに、デートの誘いを受けるとは思われないし。

――皆で遊びに行くって感じだから、デートでもないのか。

だから気軽に受けてくれたということで納得しておいた。どんな理由にせよ、邪心の無い瑛子のことである。それは適切なものに違いない。別れ際の瑛子の恥ずかしそうな素振りを思い出した宏人は心洗われる気分だった。

「二瓶さんは見た目どおりの子じゃない」

不意に耳の奥で鳴った声に宏人ははっとした。全く忌々しい。目の前にいてもいなくても他人の心をかき乱そうとするとは大した子である。

「いろいろかぶってるわ」

一週間前の盟約の日に志保が瑛子に関して言った言葉である。上等である。瑛子ならば仮に何かをかぶっていたとしても、その仮面を脱いだときに下から現れる素顔はもっと魅力的なものだろう。そういうことにしておいた。まさか、瑛子まで女の子の皮をかぶったモンスターなどという想像をするには、宏人には想像力が、いや心の耐性が不足していた。

家に帰ると、今朝置き去りにされた姉がいつものように言葉の暴力を浴びせてくるかと構えていたが、予期に反し姉は平静な様子だった。宏人は賢に感謝した。彼がうまく取りはからってくれたに違いない。

夕食を取っているときに隣から、

「そう言えばさ、二日連続でシホちゃん部活休んでんだけど、あんた何か知らない？」

と姉が心配するような声をかけてきた。

「ただのサボりだろ」

宏人は冷淡に答えた。夕食を取る前に再度かけた電話に出ないこと、及び着信履歴が残ってるはずなのにあちらから電話をかけてこないことがどうにも気に入らなかった。姉が、賢が電話に出ない、

と言って激高している様を何度も目撃したことがあるが、その気持ちが少し分かった気がする。

「シホちゃん、部活をサボったことなんかないのよ。具合悪いのかな？」

「オレはあいつのマネージャーじゃない」

志保の体の具合など分かるはずもない。分かっているのは今日の放課後まではぴんぴんしていたということである。

「あれで具合悪いんだったら、調子良いときを見てみたいよ」

宏人はそっけなく言うと、

「ヒロト、あんた、シホちゃんと喧嘩でもしたんでしょ」

姉は、からかうような笑みを向けてきた。宏人は夕食の席を立った。喧嘩などという色気のあることはしていなかった。ただ単に一方的にムカついているだけのことである。

部屋に入ってベッドに腰掛けると、宏人は極力いらいらを静めて携帯に向かった。制服のポケットからメモ用紙を取り出して、メールアドレスを入力する。

「メールありがとう、倉木くん。日曜日楽しみにしてるね。場所が決まったらまた教えてください」

瑛子にグループデートの件を報告すると、すぐさまメールが返ってきた。瑛子への好感はますます高まった。少し幸せな気分になった宏人は、大きく息を吸い込んで、数秒息を止めたのち、それを細く長く吐き出した。心を落ち着ける呼吸法である。

そのあと、携帯電話の番号を呼び出した宏人は、これで出なかったら、今夜はもうかけないことに決めた。報告なら明日でもできる。期待しなかった宏人だったが、意に反して、何度目かの正直になった。

「それで、結果は？」

愛想のかけらもないその言い方に、何で電話に出なかったのかと、憮然と色をなして宏人は尋ねた。

「こっちもいろいろ忙しかったのよ。なにを怒ってるの？」

「怒ってる？　オレが？　違うな。正確には、メチャメチャ怒ってる。壁を殴りたい気分だ」
「あなたの部屋よ。ただ、壁を殴るのは報告の後にして。今それをすると、一階からあなたのお父さんだかお母さんだかが上がってきて親子喧嘩になるでしょ。携帯電話越しにそんなのを聞きたくない」
「先に答えろよ。何で電話かけてこなかったんだよ。着信履歴にオレの番号が残ってたはずだろ」
電話越しに志保の聞こえよがしなため息が聞こえてきた。
「お前、感じ悪いぞ」
「付き合い始めて一週間でそれを察してくれて良かったわ。いい子の振りは疲れるからね。以後そのつもりで」
「答えになってない」
「男のクセにうだうだ、うだうだ。うっとうしいなあ」
瞬間、宏人は携帯電話をどこかに投げつけたい衝動に駆られた。が、意志の力を総動員して、どうにか思いとどまった。そんなことをしても宏人が一方的に損をするだけである。
「ふざけんなっ！　こっちは唐突に昨日の夜言われたことをこなしたってのに。お前は何だよ？　報告、報告って。お前は女王様で、オレはその家来か？」
「こなした？　こなしたってことはうまく――」
宏人は電話を切ると、強ばった手から机の上に携帯を解放してやった。
――なんてヤツだ。
やり切れない思いに胸が悪くなった。別に褒められたかったわけではない。志保は姉ではないし、姉に対してだってそんな感情を持っていたのははるか昔のことである。ただ、同じ目的を持った――半ば無理矢理持たされた感はあるが――仲間であるなら、もう少し和気藹々（あいあい）とした空気があっても良いではないかと思う。
一縷（いちる）の期待を込めていた宏人だったが、それから眠りにつくまでの間、志保から電話はかかってこなかった。二夜連続で宏人は寝苦

しい夜を過ごした。今度眠れぬ夜を過ごすときは、せめて恋の悩みにとらわれたいものだ、と祈りつつ何とか眠りにつくと、すぐに朝がやってきたようだった。

いつもより少し遅く起きた宏人は、朝の光が満ちるダイニングに異様な光景を見た。

「おはよう、ヒロト」

朝日に負けぬほど輝くような笑顔を向けてきたのは姉だった。一瞬、宏人はパラレルワールドにでも来てしまったのだろうか、と本気で考えた。昨夜あまりにストレスを受けすぎたせいで、別世界に迷い込んでしまったのである。ここは、元の世界と違って優しい姉のいる世界……。

何だかそれもそれで気持ちが悪いような気がする宏人は、自分の席につきながら、自分よりも早く起きている姉を怪しむように見た。

「何で今日は早いの、姉貴？」

「あんたが遅いんでしょ」

「それにしたって早いじゃん。いつもギリギリなのに」

「失礼ね。起きようと思えば起きられるのよ、わたしは」

「じゃあ、いつも何で寝坊するんだよ？」

「受験生の本分を果たして、夜遅くまで勉強してるからでしょ」

受験生になったのは、二カ月前のことである。対して、寝坊しているのはそれ以前からなのであるから理屈に合わない。やけに笑顔でいるのも不気味である。賢がいればその不思議を解いてくれるのだろうが、あいにくまだ彼は迎えに来ていなかった。

宏人は疑問に思いつつも、それ以上は問わず、朝食を取り始めた。

一晩寝ることで昨夜志保に感じた不快についてはおおかた拭われていたが、これからどうすべきか、それが不分明である。一時の不快はこうして我慢できても、この先、それが積み重なるのに耐えられるだろうか。女の子にキツイ言葉を浴びせられてそれを喜ぶなどという倒錯した性癖がない宏人には、そんな自信はなかった。

もともと、宏人としてはクラスの実権を握りたいという気持ちは

希薄である。志保と手を握ったのは、宏人の意志というよりはその場の雰囲気に流されたという方が正確である。瑛子を仲間にするという一事を取っても、本当のところではあまり納得していなかった。宏人や志保が接触すれば彼女の迷惑になるのではないか、という思いが今もやはりあるのである。

流れ流され一体自分はどこに向かっているのだろうかと、宏人は暗澹(あんたん)たる気持ちになった。行く先は見えず、かと言って後戻りもできない。こういう時、人は休みを取りたくなるのであろう。休みを取ってじっくりと考えるのである。

ハムとレタスのサンドイッチをついばみながら、宏人は母に休ませてもらうよう言おうか半ば本気で考えた。学校に行ったところでクラスからは無視され、唯一口を利く少女からは罵声を浴びせられるだけのことである。そんなところに好んで行く人間がいれば見てみたい。人生を達観した者か、でなければよほどのマゾヒストであろう。

頭が重くなってきた宏人だったが、やはり学校には行くことに決めた。自分が行かないことによってひとりぼっちになる子がいると思うと、多少は奮い立つものがある。そこで、宏人は、自分が底抜けのお人よしだということに気がついた。まさにその子のせいでストレスを受けているのに、その子のために学校に行こうとは！

始まりも終わりもないメビウスの輪にはまってしまった宏人は、適当に食事を切り上げた。制服に着替え、朝のニュースで天気予報だけ確認して家を出ようとしていたときに、呼び鈴が来客を告げた。

「いいよ、オレ出てくる」

玄関に出ようとする母を、宏人は止めた。朝一で一体誰だ、と怪しみながら玄関を開けると、宏人は驚きに思わず立ちすくんだ。

朝の光の下に少女がいた。たよりなげな体つきの上に、元気のよいくせ毛の髪。その中のややつりあがり気味の目が静かに宏人を見つめていた。

第７５話：仲違いの利点（前書き）

いつもありがとうございます。今回でいったん宏人と志保の話は終わります。と言っても、すぐにまた再登場の予定ですが。では、第７５話、お楽しみください。

第７５話：仲違いの利点

「……おはよう、倉木くん」
そう言って志保は眼差しを下げた。
「な、何してんだよ、ここで？」
意外すぎてそれしか言葉がない宏人の後ろから、
「あれえ、どうしたの、シホちゃん。もしかして、ヒロトを迎えに来てくれたの？」
姉のおそろしくわざとらしい声が上がる。やけに笑顔だったはずである。気のある女の子に迎えに来られてウレシハズカシうろたえる弟。そういう茶番が見られると思えば、笑みもこぼれるというものである。どうやら志保が今ここにいる件に姉が関与していることが理解できた宏人は、とりあえず持ってきていた鞄を肩にかけると、
「出るぞ」
と志保を促して、玄関から外に出た。志保が姉や、あろうことか姉に遅れて現れた母と父にまで頭を下げているのが分かったのは、数秒後のことである。
「藤沢っ！」
開きっぱなしになっている家の小さな門から、宏人は志保の背に鋭く声をかけた。後ろからついて来る気配がなく振り返ってみたら、ロクでもないことをしている。志保はもう一度ぺこりと頭を下げてから、宏人のほうにしずしずと歩を進めてきた。
「……何でオレの家を知ってるんだよ？」
眩しい朝日の降る通学路を歩きながら、宏人はぶっきらぼうな声を出した。
「日向（ヒナタ）先輩にね……教えてもらったの。昨日の夜……メールで。倉木くんに電話切られたあとに……」
志保はぼそぼそと答えた。
「で、わざわざ朝から何しに来たんだよ。昨日電話切った仕返しか

？」

「そんなんじゃないよ」

「いや、そーだろ。お前のおかげで、今日の夕食のおかずはオレの恋話になるんだぞ。『シホちゃんって言ったっけ、今度改めて家に連れてきなさい』的なことを言ってオフクロはにやにやし、『いい子そうじゃないか、大事にしろよ』的なことを言ってオヤジはにたにたする。姉貴にいたっては……考えたくもない。そんな気持ち悪い空気の中でオレはどーすればいいんだよ、教えてくれ」

「……ごめんなさい。迷惑だったよね」

志保は細い肩を悄然と落とした。宏人は、志保の沈んだ横顔に、苛立たしげな声をかけた。

「藤沢、それ、やめろよ」

「それって？」

ちらりとこちらを見た志保に目を合わせて、

「そのしゃべり方だよ。今さらそっちに戻ったって仕方ないだろ。お前の本性を知らないヤツの前でやれよ」

非難すると、志保は上目遣いで少し抵抗するような声を出した。

「でも、こっちの方が優しかったなあと思って、こういう感じの方が倉木くん好きなのかなって」

「やめてくれ、何か体がかゆくなる」

志保はふう、と一つ息をつくと、首をまっすぐに立てて、口角に自信に満ちた笑みを載せた。

「せっかく可愛い女の子を演じてあげたのに、ひどいこと言うなあ。ま、いーや。わたしもこっちの方が楽だし」

がらりと雰囲気を変えた少女から目を離して、

「で、何しに来たんだよ？　昨日の二瓶の件について聞きにきたのか？」

宏人が訊くと、

「違うわ」

そう答えて志保は立ち止まった。何ごとかと思って足を止めた宏

人の目に、少女のモジャ頭のつむじが見えた。志保は深々と頭を下げていた。戸惑う宏人に、そのままの姿勢で志保は昨夜の無礼を詫びた。

「ちょっと疲れてたの。それで電話を返せなかったこと、あと電話でひどいこと言ったことも謝るわ」

宏人は頭を上げるように言った。ランドセルを背負った小学生の一行から、好奇心たっぷりの視線を送られている。

「許してくれる？」

くしゃくしゃの前髪の下にある両の瞳が真剣な光を湛えていた。その時、小さな音が胸で鳴ったような気がするが、

「お前さ、真面目な顔するとちょっと可愛いよな」

宏人は冗談に紛らわせて、その音の吟味はしないことにした。

志保は無言で宏人をまっすぐに見つめ続けている。宏人はがっかりした。自分がもう少し複雑な精神構造を持っていると思っていたのである。真正面から謝られたことで、志保に対する悪感情は綺麗に消えて、代わりに好感まで芽生えた。わざわざ、家まで来て朝一番に謝ってくれたことは誠実であると言わざるを得ない。

宏人が、もう気にしていない、と正直に告げると、志保は瞳を輝かせて、

「夢がかなったわ」

と不思議なことを口にした。

「何だよ、夢って？」

「男の子と喧嘩して、そのあとに謝って許されるっていうシチュエーションに憧れてたの」

好感はちょっと減った。

気を取り直して、再び歩き出し、昨日の首尾を報告したあとに、

「グループにする必要なんかなかったのに。一対一でいいじゃん。しかもそんな大人数でさ」

という容赦のないダメ出しを聞いて、さらに志保への好感度は下がり、結局先の誠実な謝罪で上がった好感度の分はチャラになった。

「ま、いーわ。上出来、上出来。さすが、わたしの相棒」
急に気分を変えたように嬉しそうな声を出す志保を怪しみながらも、宏人は、まだ何とか彼女とやっていけそうだということを確認した。きっかけはともかく、一度始めたことである。できれば最後までやり通したいという気持ちがある。
志保は歩を止めると、訝しがる宏人に向かって、
「先に行って。二瓶さんを遊びに誘ったのに、わたしと登校してるところなんか見られたら、おかしなことになる」
指示を出した。中々細かいところに気がつく子である。そう素直な気持ちを表明した宏人は、
「倉木くんが鈍感なんでしょ」
と一蹴された。言われた通り、志保と距離を取るために足を速めた宏人は、敵は外にもいるが、内にもいるということを認めざるを得なかった。敵ばかりの人生である。いつかこの哀れな少年に安息が訪れることはあるのだろうか。
教室は相変わらずの冷ややかさであった。初夏のはずなのに初冬のような風情である。みな、宏人にちょっと視線を向けたあとに、汚れたものでも見たかのようにさっと視線をそむける。宏人は、作り物めいた雰囲気の中を自分の机まで歩いていき、それでもその間に、何人かに向かって声をかけたが、返ってきたのは機械的な反応だけだった。
「倉木くん」
冬の終わりを告げる春風が吹いたのは、昼休みのことである。誰も話す人がいない上に、志保も席を外しているので、全くの一人だった宏人。廊下で所在なくたたずむロンリーボーイに声をかけてくれたのは、無論、可憐なヒロインである。
「日曜日のことなんだけど。一人、友だちを誘ってもいいかな？昨日その子と話してるときに、日曜日のことを話に出しちゃったら、その子も行きたいって言ってきて」
もちろん、と宏人はうなずいた。これ以上人数が増えていいこと

は無いだろうが、瑛子の柔らかな声に逆らえるわけもない。瑛子は顔をパッと明るくして、新たなメンバーの名を口にした。

「へー、あの坂木さんか」

「知ってるの、倉木くん？」

三組の坂木蒼（アオイ）と言えば、二年生の男子だったら大方知っている名である。愛くるしい外見だがどこか人を寄せ付けない冷たい雰囲気があって、そのギャップが魅力的な少女である。

「美少女ランキングの上位だよ」

宏人が冗談混じりに言った。

「やーね、男子って。誰が可愛いとか、可愛くないとか。そういうことで女の子をさあ……まあ、ちなみに、参考までにお聞きしておきますけれど、わたしたちの二組の中だったら誰かそのランキングの上位にいる人がいるのかしら？」

宏人は大げさに首を横に振った。

「残念ながら、このクラスには……」

「倉木くん。深海にある真珠のようにひっそりと光を放つ子が、よおく目を凝らしてみればいるんじゃないかな。案外近くに」

瑛子は無邪気そうな顔で瞳をぱちぱちさせた。

「ここは透明度が低い海だから、そう言われてもよく分からないな」

瑛子はあからさまにがっかりした様子を作った。しかし、すぐに気分を変えたようにして、じっと宏人を見ると、

「その言葉、後悔することになるよ。日曜日のわたしの私服姿を見たらね」

明るい瞳に挑戦的な笑みを湛えた。クラスに戻る瑛子の後ろ姿を見ながら、宏人は感嘆の吐息をもらした。瑛子は制服姿でも十分に美しい。ただ、容姿よりも宏人を魅了するのは、その所作である。言葉遣いや振る舞いにいちいち愛嬌があって、心が温かく包まれるような気持ちになる。

――あんな子がカノジョだったらなあ……。

とは二年になって初めて瑛子と言葉を交わしたときからの、春の

夜の夢よりも淡い希望である。その淡さに浸り切ってしかも満足している宏人に、

「オレに任せろ」

と力強いことを言ってくれる友がいる。

この上なくありがた迷惑である。

「いや、そんな張り切ってくれなくてもいいから、マサキ」

宏人は携帯電話に向かって、友人を落ち着かせようと努めて静かな声を出した。昨日と同じ部活後の家路、またまた志保は部活を休み、一人で宏人が歩いていたときに、雅紀から電話がかかってきたのである。雅紀は、二駅離れた遊園地にデート場所を設定したことを告げてきて、宏人の了承を求めたのだった。宏人としては否も応もない。

「遠慮するなよ、ヒロト。オレとお前の仲だろ。必ず、お前とエーコちゃんを二人っきりにしてやるから、安心しろ」

全く安心できない。恋の応援団長に就任する気満々の友人に、宏人は、気遣いは無用である旨、辛抱強く告げた。

「でも、おまえ、エーコちゃんのこと好きなんだろ？　告白のためには、二人きりになる必要がある。コレ社会の常識」

「いや、何ていうかな。オレは二瓶と一緒に遊園地に行けるだけで満足なんだよ。今回は、それ以上は望んでないんだ」

二組支配計画のことを話せない宏人としては、そう言っておくしかない。それに、そもそも瑛子は雅紀のことが好きかもしれないのである。好きな男が、自分を他の男とくっつけようとしていたら、相当なショックだろう。宏人が重ねて、

「お前の友情は分かったけど、オレは気が小さいんだ。二瓶に気があるなんて思われたら、学校に来られなくなるかもしれない」

雅紀に念を押すと、電話の向こう側で、うーん、と軽く唸る声が聞こえた。友人の純情に打たれたのだろう、と宏人は解釈しておいた。でなければ、臆病さに呆れたのだろうが、そちらの可能性はあまり考えたくない。

「話変わるけどさ、ヒロト。もう一人、女子誘おうぜ」
既に女子は五人いるのである。これ以上は必要ないだろう、と宏人が言うと、
「男子は六人なんだぞ。数が合わないだろ」
と訳の分からない反論をされた。
「数なんか合わなくてもいいだろ」
「良くない。スピードデートの時に、一人男が余る。その余るヤツがオレになったら、どーしてくれる？」
「スピードデートって……何だよ、そのイベント？」
「短時間、男女が一対一になってお互いを知り合うんだよ。うまくいけばメアド交換なり、次のデートの約束なりができる素晴らしいイベントだ」
そんなことまで考えているとは侮れない男である。感心した宏人の頭に閃いたことが一つ。
「マサキ、最後の女子、オレが声かけてもいいか？」
「誰かいるのか？」
興味深そうな声を出した雅紀に、ああ、と自信たっぷりに言って宏人は電話を切った。

第７５話：仲違いの利点（後書き）

筆に任せて書いているどーしようもない作品ですが、ご感想など頂けると嬉しいです。

第７６話：プロポーズ大作戦（前書き）

読者様に心よりの感謝を。
今回は怜のお話です。

第７６話：プロポーズ大作戦

梅の実を濡らす雨が世界に優しい音を響かせた朝、目を覚ました玲は、もう一度眠ろうかどうか考えた。習慣とは恐ろしい。休日の土曜日であるにも関わらず、枕元の時計は六時を指している。いつもの起床時刻だった。

「土日でも平日と同じように起きてください。土日にリズムを崩すと、月曜日がきつくなります。憂鬱な月曜日（ブルー・マンデー）を送って、一週間のうちの一日を無駄にしたくないでしょう？」

不意に学習トレーナーの冷静な声がどこからともなく聞こえて、玲はため息をついた。二度寝もままならぬ身の上に、しかし同情を寄せてくれる者はいない。玲はベッドから出ると、机の上にあった英単語カードを手にして、階下に降りた。洗面を済ませ、薄暗いダイニングでトーストを焼き始める。父母も妹もいまだ夢の中である。

焼きあがったトーストにバナナ、オレンジジュースという優雅な朝食を取りながら、玲は単語カードをぺらぺらと繰った。時々何でこんなことをやっているのだろうか、と不思議に思うことがある。やりたくない、ということではなくて、やっていること自体に違和感を感じるのである。無論、高校入試合格のためにやっているわけだが、では、高校に入ること自体は何のため？

突き詰めて行けば人生自体が何なのか、という壮大な話になってしまって、こうなると単語の記憶などというちょこちょことした作業などできなくなってしまうので、あんまり考えないようにしているのであるが、今朝のような静かな時間には知らず思い浮かんでしまうのだった。

「この世界にいることがひどく他人事のように思えるときがあるの」

とは付き合っているカノジョの言だが、分かるような気がした。ただし、彼女ほど世界から距離を取っていない自分を玲は感じてもいた。

例えば、その彼女。彼女に心魅かれる自分がいることは否定できない事実だが、一体、彼女のどこにそんなに魅かれるのかと問われると答えるのは難しい。相対していると彼女の中に美しさを感じて、そしてその美は確かにかつて見たものなのである。でも、いつ、どこで？　その記憶は無窮の過去の彼方にある。

そういう不思議がこの世にあるということを自分はそのまま認めているのに対して、彼女はおそらくそういう不思議を『無いこと』にしているのではないか、と怜は感じていた。日常に不思議が在ることを認めてはいても、それを見ないようにして生きているのではなかろうか。無論、それは単にその人の気質の問題であって、どちらが良いというものでもないが。

「あたしにもパン焼いて、お兄ちゃん」

パジャマ姿の妹があくび混じりに現れて、怜はもの思いから醒めた。反射的に席を立つ自分が哀れである。

「パンくらい自分で焼け。オレはお前の小間使いじゃない」

「ちっちゃいなあ」

「何？」

「器がちっちゃいって言ったのよ。そんなことじゃ、川名先輩に嫌われるよ。もともと先輩とは不釣合いなんだからさ、せめて心くらい広くないとね」

都は冷蔵庫に手を伸ばすと、中からペットボトルの水を取り出して、ごくごくと喉を鳴らした。妹とは天が課した試練である、と自分に言い聞かせる怜。この試練を乗り越えればきっと強い己が得られるはずだと期待しつつ、食パンを二切れトースターに入れる。

「あと、紅茶ね」

更に兄の尊厳を踏みにじった妹は、さっさとリビングに行って、テレビをつけた。妹がいて良かったと思える唯一のことは、彼女に比べれば他の女の子がカワイク見えるということである。

「ブルーベリージャムとピーナッツバターでおねがーい」

怜は焼きあがった食パンにバターナイフでぺたぺたとジャムを塗

ってやった。休日の朝に、妹の給仕をする兄。しかも自分の食事の途中にである。こういう兄がいるから、ああいう妹ができてしまうのだろうか、とちょっと自分の責任を感じてみたりした怜だったが、頭を振ってその不届きな考え方を追い払った。彼女の行為に責任を取る権利を持つのは、当の彼女自身だけである。

「あ、そーだ」

「今度は何だ？　肩でも揉むか？」

「今日アレでしょ。プロポーズの日。頑張ってね、お兄ちゃん」

誰にも結婚を申し込みに行く予定などなかったが、確かにその気分を味わうことはできるだろう。付き合っているカノジョの父親に会う日である。以前、カノジョの母には挨拶をしたことがあるが、母と父ではまた別物だろう。蝶よ花よと育ててきた愛娘に言い寄ったロクでもないガキに、果たして男親はどういう態度を取るのだろうか。

「父さんは初めからお母さんのお父さん――つまり、お前達のお祖父ちゃん――には好意を持たれていたみたいで、終始和やかな雰囲気だったな」

とは、息子の大事を知った父が昨夜かけてくれた、ちょっと役に立ちそうにない参考意見だった。環の父に挨拶しに行くということを公にしたのは当の怜自身だった。勿論そんなことは言いたくはなかったのだが、手土産のための軍資金が必要だったのである。

「子どもの癖に変な気を遣うのはやめなさい。可愛くないと思われるわよ」

母がたしなめるように言ったが、怜は自身が可愛いと思われるような人間かどうかは知っているつもりである。十四年生きていればそのくらいのことは分かる。可愛らしさで勝負ができないのであれば、他の点で魅力をアピールする必要があるだろう。力説した怜は、渋る母に出資してもらい、川名家攻略の一助になるアイテムを手に入れた。

さて、父がしてくれた話であるが、男親が娘の連れてきた男に対

して好意を持つとしたら、その男親が余程の人格者であるか、娘に執着がない場合かのどちらかだろう。怜は、おそらくその両方が理由だったのだろうと思ったが、母の前である、さすがにそんなことは言わなかった。そもそも、プロポーズの時のことなど聞いても仕方がないのだが、父としても母の手前、自分が初めて付き合った女の子のその父親に紹介された時のことを話す訳にも行かなかったのだろう。

「じゃあさ、わたしがカレシ連れてきたらどーする、お父さん？」

ほんのたまにだが、妹も役に立つことがあるものである。興味を持った怜の前で、父が難しい顔をして唸っていた。

「どういう人だったら好意を持つ？」

何とも答えようがなく考え続ける父を見ながら、怜は覚悟を新たにした。都でさえ父から愛されているとすると、環がどのくらい彼女の父から愛されているかは推して知るべしである。彼女のボーイフレンドはおそらく、ひとかけらの好意を持たれることもあるまい。

「お兄ちゃんがこの世に存在する意味が今日こそ分かった気がする」

ティーカップを空にして朝食を取り終えた都がテレビを消して兄の方を向いた。

「わたしに美しい姉をもたらす為にお兄ちゃんは生まれてきたのよ」

彼女は、天から啓示を得た預言者のように自信たっぷりに言うと、自分の言葉にうんうんと満足しながら、リビングを出た。

忽然と人生の意味を、いやむしろ無意味を悟らされた十四歳の少年は、重苦しいため息をつきつつ、リビングのテーブルに置き去りにされたパン皿とティカップを片付け始めた。父はともかくとして、妹にカレシができたら、きっと自分は諸手（もろて）を上げて歓迎するだろうと怜は思った。深い同情の念を添えて。

昼前までは普段通り塾講師から課された課題をこなして時を過ごした。環の家には昼頃に行くことになっていた。整えた服装は以前彼女の家に行った時と同じく、制服のズボンと学校指定のＹシャツだった。違うのは、Ｙシャツが半そでになっている所だけである。

「お兄ちゃん、だっさ〜い」
ファッション評論家の妹にお墨付きをもらった怜は、外見と同様に中身も格好をつけたり繕ったりすることはやめようと思った。小細工はやめ誠心でことに当たるのみである。人事を尽くし天命を待て。
息子の成功を祈る生温かい父母の目に見送られて、菓子袋と傘を提げて怜は家を出た。雨は止んでいたが、空は暗くいつまた降るともしれない気配である。アスファルトから生ずる湿気が肌にまとわりついてくるようだった。
天気が悪いためか休日でありながら人通りの少ない街路を歩いていくと、道の果てに、瀟洒な洋風の二階建てが見えてきた。落ち着いた外装にバルコニー。門前から玄関までに庭が広がっており、植えられた樹木や芝には玉のような滴が落ちていた。
怜は少し緊張してきた自分を感じていた。ここから先は、悪意が轟々と渦を巻く空間である。しかも、教室でたまに受けるような謂われない悪意ではなく、正当な悪意。正義は彼にあり、抵抗はできず、ただ耐えるしかない。
怜は深呼吸すると、呼び鈴に指を伸ばした。

第７７話：試練の間へ（前書き）

前回の続きになります。
怜に次々と襲い掛かる恋の試練。
ご堪能ください。

第７７話：試練の間へ

玄関が開くまでがやけに長く感じられた。怜は、開いたドアからいつかのように旭が駆け寄って来てくれることを密かに期待した。あのときは、彼女のおかげで良い具合に緊張がほぐれ、うまく挨拶ができた。きらきらした瞳に慕色を浮かべて見上げてもらえれば今回も勇気付けられるだろう。

玄関が開いた。少しして、

「こんにちは」

門の向こう側からかけられた声は、期待していたものよりかなりおとなしやかなものだった。紫陽花色のワンピースを身に纏った少女は、肩まで真っ直ぐに流れる黒髪をかすかに揺らして頭を下げた。

「こんにちは、マドカちゃん」

当てが外れた怜だったが、あまり好かれていないと思っていた少女が迎えに来てくれてそれはそれで少し胸が温かくなるのを感じた。門内に入った怜は、今日の先行きを占うつもりで、

「お父さんってどんな方？」

と尋ねてみた。今しがた怜がくぐりぬけた通用口を閉めた円は、基本的に優しい人だと思います、と抑揚の無い声で言って先に立った。

「でも、例外はある？」と彼女に続きながら怜。

「多分。見たことはありませんけど」

「じゃあ、今日はマドカちゃんにとって記念すべき日になるかもしれない」

「父を怒らせるつもりですか？」

「まさか。オレにはそんな気はないよ」

ただし、こちらの気持ちはあちらには関係がない。

「がんばってください、先輩」

え、と驚いて怜が立ち止まると、円が怪訝そうに見てきた。

「マドカちゃん、今何て？」
「ですから、がんばってください、と。それしか言ってませんけど……何か？」
目を細める円に、怜は慌てて首を横に振った。まさか応援の一言をもらえたことが嬉しかったとは言えない。怜は幸先の良さを感じた。
ゆったりとした玄関で、今度は環の母が出迎えてくれた。怜は、招待の礼を述べて、手土産を渡した。
「あらあら、ご丁寧に」
と微笑む環の母。その柔和な笑顔に更に緊張がほぐれた怜だったが、母の後ろに控えた少女の姿を認めると眉をひそめた。屋外の薄暗さが染み入った玄関を明るくするような光を纏った彼女はいつものように微笑を浮かべながら立っていた。特別おかしな所はないが、怜が気になったのは、
――何で制服なんだ？
ということである。環は白いブラウスと学校指定のスカートを身につけていた。まるで怜の正装に合わせるように。この時点で、怜の緊張はきれいさっぱりと雲散した。彼女は、道化を演じるカレシの舞台を整えるために、自分自身も舞台衣装に身を包んだのである。明らかにこの状況を楽しんでいる。怜は、その不真面目さに非難の目を向けてやったが、環は真面目な顔を崩さなかった。
通されたのは和室だった。十畳ほどの広さで庭が一望できるようになっている。厳粛な顔をした四十代後半の男性が端然とあぐらをかき、卓についていた。環の父である。広い部屋を狭くするような圧迫感を醸し出していたが、その横にちょこんと少女が座っていて、彼女の愛らしさが父のプレッシャーをかなり削減していた。旭は、怜を見て一瞬嬉しそうな顔をしたが、すぐに常に無いような難しい顔になった。
環の母が紹介してくれるのに合わせて、怜は和室に入ると、入り口近くの畳の上で膝をついて名を告げた。

「やあ、よく来てくれました」
第一声は温かみもあって悪いものではなかったが、
「そんなところではなんだから涼しい方にいらっしゃい」
その言葉で、彼の意図が読み取れたような気がした。「涼しい方」といっても、空いている座はいくつかあって、そのどれを指してくれるわけでもない。怜は、失礼して立ち上がると、畳の縁を踏まないようにして壁際を進み、床の間を背にした座へと向かった。いきなり座布団に座らないようにして、その前の畳で膝をつくと、招待の礼を述べたのち、
「環さんとは今年の一月からお付き合いさせていただいてます。ご挨拶が遅れ、申し訳ありません」
と言って頭を下げた。ちょっとやりすぎたかと思ったが、あっちがその気なのだから是非もない。付き合うしかないだろう。座布団を勧められた怜が座について、姿勢を正すと、環の父の何とも微妙な顔が見えた。
「娘から君のお話をよく聞いてます。お世話になっているようだね」
怜は恐縮した様子を見せた。言葉の端に陰影がある。今の座を勧めて怜を試した件といい、この対面が単なる娘のボーイフレンドとの会見以上の意味があることを、怜は理解した。できるだけ中学生らしく――世間が中学生に求める「らしさ」を演出して――振舞おうと思ったが、どうやらそれで済ませてくれる気はないらしい。怜は、折角ほぐれた緊張を自ら固め直した。
円がテーブルに和食の膳を運んできて、会食ということになった。怜の隣には、環が腰を下ろしている。
「天ぷら以外はほとんど円が用意したんですよ」
と娘を褒める環の母の言葉に、感心の声を上げた怜は、全員で食前の挨拶を済ませたのち、箸を手に取った。一口、二口食べてから、怜は円の手際を褒めた。円は、ありがとうございます、と静かに答えた。言い含まれているのか、にぎやか担当の旭がもくもくと膳に向かっているので、座はしんとしていた。こちらから何かを話すよ

うな雰囲気でもないので、怜も料理を楽しんでいると、どうも自分の手元に視線が注がれているのを感じた。

――この膳はさっきの続きか。

試験その二である。怜は知っている限りの作法で箸を進めた。焼き魚は表側を食べてから中骨を外し裏側に向かうようにし、盛り付けられてある天ぷらは手前から取って食べ、刺身を食べるときはしょうゆの小皿を手に取った。怜は祖母に感謝した。食卓の作法は祖母に習ったのである。

「加藤くんはどういうことに興味を持ってますか？」

試験その三。いよいよ面接試験じみてきた。地球環境問題に今一番の関心がある、とでも答えてやろうかと思ったが、突っ込まれてもまずいので、怜は自分の領域にあることを素直に答えることにした。

「ほお、シェイクスピア？」

環の父がちょっと意表を衝かれたような顔をした。

「『ロミオとジュリエット』くらいしか分からないが、実を言うとそれすらはっきり読んだことがないんです。どういうお話か一つ講釈をお願いできませんか？」

怜は、家の反対に遭い想いを遂げられない一組の男女が、ちょっとしたすれ違いから最後には死という結末に至る悲しいラブストーリーの筋を話した。環の父は、ふむふむとうなずいていたが、聞き終わったあと、

「結局、シェイクスピアはその話で何が言いたかったんだろうか？」

と訊いてきたので、今度は怜が驚かされる番だった。驚きが嫌悪へと変わるのにそう時間はかからなかった。普通に読む分には、『ロミオとジュリエット』は単なる美しい悲恋である。もし今日初めて話の筋を聞いたのならば、それで納得するはずである。にもかかわらず、その話を作った意図まで訊くということは、よほど物事を突き詰めて考える人であるか、もしくは……この話をよくよく知っている人であるということだ。

少し相好を崩している環の父の顔を見ながら、怜は覚悟を決めた。空とぼけて分からない振りをするのも一つの手だったが、それをした場合、あとからどう環に言い訳しようかと考えてしまったのである。

「『ロミオとジュリエット』には、前近代の『家』制度から個人を解放したい、というシェイクスピアの願いが込められているのだと思います」

怜は、はっきりとした声で答えた。

「シェイクスピアの時代、個人は『家』に隷属していて結婚相手を自由に選ぶことはできませんでした。『家』に反抗するロミオとジュリエットという若者たちを描くことによって、そのような『家』制度に一石を投じたかったのではないでしょうか」

説明を追加すると、環の父の顔に淡い影がよぎったように見えたが、それは一瞬だけのことで、さっと笑顔になった。

「なるほど、よく分かりました」

いっそシェイクスピアの他作品について滔々と講義を始めてやろうかと思ったが、さすがにそれは控えておいた。自分ひとりならともかく、むきになって子どもっぽい真似をして隣の少女に恥をかかせられない。

その当の彼女は今日はまだ一言も発していなかった。さすがの環も父の前では大人しく振舞うんだな、で終わらないほどには怜は環のことを理解しているつもりだった。彼女が沈黙を守っていることには何らかの意図があるような気がした。

「他にはどんな本を読むんですか？」

怜はあまり本は読まない旨、正直に答えた。適当なことを答えて、先のように突っ込まれても面倒である。

「受験生でもあって中々忙しいから本を読む時間もあまり無いでしょうね」

なかなか会話の誘導が巧みな人である。怜は皮肉な気持ちで感心しながら、当然続くはずの質問を待った。

「加藤くんはどこの高校を考えているんですか？」
　怜は、環さんと同じ高校です、と答えてからちょっと後悔した。まるで環が行くからそれにくっついて行くというように聞こえたかもしれない、と思ったのである。とはいえ、わざわざそうではないことを断るのも格好の良いものでもないので、言い切ったままにしておいた。
「とすると、加藤くんもかなり成績がいい？」
　怜が半分より下の順位であることを告げると、環の父はちょっと考え込むような顔になって、
「じゃあ、これからが頑張り時だね。一心不乱にやれば何ごともうまく行くでしょう」
　励ましのような言葉をかけてきたが、怜にはその裏の意味が読めたような気がした。
「女の子と付き合ってる場合じゃないんじゃないのか」
　という内心の声が聞こえてくるようであった。怜は挑発には耐えたが、いい加減、気持ちが冷えてくるのを感じてもいた。娘のボーイフレンドがどういう人間か見定めたいという気持ちは分からないでもない。しかし、このような小細工を弄する必要があるのだろうか。服装を整えて、手土産を持参して、怜としては礼儀を尽くしたつもりである。礼を尽くした者に対して、三十も年が上の人間がする対応がこの程度なのだろうか。
　会食が終わったあとに、お茶の時間になったのだが、試験はなおしつこく続いたようだった。日本茶が蓋付きの茶碗で出された。怜は、さすがに馬鹿馬鹿しくなってきたが、もし同じことを隣の少女がされたら、と考えて心を落ち着けた。環だったら為すべきを平然と為すだろう。怜は、作法通り、左手を茶たくに添えて、右手で蓋のつまみを持った。蓋の裏側についたしずくが茶碗の中に入るようにゆっくりと蓋をかたむけて、蓋の裏を上向きにして手前に引いてから、茶たくの右奥に置いた。飲み終わってから、逆の順で蓋を元に戻す。

こんなことで満足してもらえるならお安い御用である。そう思い切れない所に、まだまだ自分には子どもっぽいところがあることを怜は認めた。とはいえ、客を気まずくさせるような所作が大人のそれであるとも思えないが。

お茶も済んだわけであるし、会話が途切れたところを見計らって失礼しようか、と思っていたところ、不意にがたっという音がして長方形の卓が揺れた。

「もうご飯食べたからいいんだよね、お母さん？」

明るく高い声が沈鬱な空気を一打ちして、ついで畳が軽やかに踏まれる音が聞こえたかと思うと、怜は横から衝撃を感じて危うく倒れそうになった。女の子特有の甘い匂いが鼻先を掠めた。怜は旭のくりくりとした瞳と向かい合っていた。

第７８話：埋伏する意志（前書き）

前回の続きでーす。

第７８話：埋伏する意志

ムードメーカー。それは場の雰囲気を盛り上げる人間のことを指す。その人がいるだけで、その場にいることが幸せになるようなそんな人。加藤家ではその役回りにはもう何年も誰も就任していなかったが、川名家にはいたようである。

「レイっ！」

一声上げて小さな腕を怜の首に回し横から抱きつくようにする旭。彼女の声音と一挙手でもって、空気が華やかな色を帯びたようだった。

「アサヒ、はしたない真似はよしなさい」

環の母がすかさず注意をしたが、逆効果であったようで、旭は一層腕を強く怜の首にからませた。さらさらとした髪が怜の頬に触れた。

「ごめんなさいね、加藤くん。食事中だけは大人しくさせていたんだけど」

環の母が申し訳無さそうに言葉を継いだが、怜としては、もてなしの気持ちの無い中年男性の相手をするよりは、好意をあらわにしてくれるぬばたまの髪の乙女の相手の方がどんなにいいか知れない。とはいえ、抱きつかれているままであるのも格好の良いものではないので、旭の肩を軽くタップした。

旭は未練ありげな顔で体を離すと、

「本当はね、レイの隣に座りたかったんだよ。でも、ご飯食べてるときはお父さんとお母さんのそばにいなさいって言われてさ」

そう言って口を尖らせた。

「レイに、あーん、てして食べさせてあげたかったのにぃ」

声に悔しさを滲ませる旭。小学校でそんなことをするのが流行っているらしい。それはともかくとして、怜は、旭がこの場を連れ出してくれることを心から期待した。非礼の風雪には十分に耐えた。

そろそろ歓迎のお日様の時間であろう。旭がお人形遊びなり、カードゲームなり、美少女が活躍するアニメを見ることなりに誘ってくれるのを待っていると、

「聞いて、レイ」

玲の希望に反し、旭はまずトークを楽しむことを選択したようだった。

「この前のじゅぎょうさんかんの日にね、マドカお姉ちゃんが来てくれたんだけど、来た人の中でね、一番かわいかったんだよ。みんなからね、『アサちゃんのお姉ちゃんが一番可愛いね』って言われたの」

「アサヒ、先輩に恥ずかしいこと言わないでよ」

卓を挟んで斜向かいの位置に座っていた円が声を大きくして、学校での物静かな雰囲気と異なる面があることを示した。

「なんで恥ずかしいの？」

「当たり前でしょ。周りはみんなオバサンだったんだから。その中で可愛いって言われても微妙でしょ」

旭は、うーん、と小首を傾げた。理屈が良く分からないらしい。

「アサちゃんは、何の勉強が好きなの？」

玲が話題を変えて、思考の沼から少女を掬い上げてやると、旭は、国語、と元気良く答えた。

「学校のべんきょうも好きだけど、お家で教わるのも好き」

「お家で？」

「うん。お母さんが教えてくれるんだよ。この前教わったのはね……」

旭は視線を虚空に泳がせ、思い出す様子を作ると、おもむろに、

「おもいつつ、ぬればやひとの、みえつらむ……」

と和歌を詠み出した。小学一年生の時から和歌を暗誦させるとは典雅な家である。玲がちょっと気おされていると、旭は下の句を思い出せないようで、部屋の入り口近くに座る母に助けを求めた。

「夢と知りせば覚めざらましを」

すぐ近くから聞こえてきた声に、旭はびっくりしたように怜を見た。
「レイ、すごい。どうして分かるの？」
「アサちゃんより年上だからです」
素直な感嘆が心地よく、怜は気取って答えた。旭は自尊心を傷つけられたかのように、むう、と口をすぼませるようにした。
「じゃあ、これ知ってる？　うたたねに――」
「恋しき人を見てしより夢てふ（チョウ）ものは頼みそめてき」
「じゃあさ……」
「いとせめて恋しき時はむばたまの夜の衣をかへしてぞ着る？」
旭は可愛らしい口元をぽかんとさせてまじまじと怜を見つめた。
怜は、今の三首の和歌が、小野小町という人の有名な作であることを、旭に説明した。
「加藤くんは和歌にお詳しいの？」
環の母が目を輝かせているのを見て、怜は慌てて手を振った。高校の教師をしていた祖父に昔暗誦させられたのを覚えていただけである。詳しい解釈などができるわけではなく、話題が和歌などにシフトしたらついていけるほどの知識はない。
「タマキがいつも言ってるんですよ。加藤くんはとても博識で遍（あまね）く万象に通じているって」
にこやかな環の母に怜はぎこちなく笑い返すしかなかった。隣に整然とした姿勢で座っている少女は、カレシの美点を嬉々として語るような乙女チックな子ではない。にわかに、怜の胸に嫌な想像がよぎった。この会見に何らかの形で環の意志が働いているような気がしてきたのである。まさか味方の中に敵がいるなどということがあるだろうか。
――そんなバカなことがあるか。
と一笑に伏してカノジョを信じきる……そういうことができない所に怜の不運がある。怜は、環の父に向けていた嫌悪感を一部、環に振り分けた。この会見のハードルを無駄に上げてくれただろう彼

女にはその資格がある。
　怜がこの場で安心して好意を寄せることができるのは、目前にいる六歳の少女のみだった。満面に笑みを湛えた旭は、ユカイな小学校生活について、立て板に水で話し始めた。
　外はいまだ薄暗かったが、室内の雰囲気は旭のおかげですっかりと晴れた。座には笑い声が溢れた。怜は、旭が鈴を転がすような声で一生懸命話をするのにしばし聞き入っていた。
「本当にアサヒは加藤君のことが好きなんだな」
　旭の話が途切れたときに、不意に環の父が会話に入って来たので、怜はどきりとした。ゆるやかに胡坐をかいた状態から発せられたその声は朗らかなものであるが、一番可愛がっている末娘が自分以外の人間にじゃれついていたら、内心穏やかではいられまい。今度は何を言い出すのかと怜はちょっと身構えたが、特に続く言葉はなかった。
　旭は、うん、と大きな声を上げると、
「レイのことは大好きっ！」
　と言って今度は背から抱きついてきた。
「レイは？　レイはわたしのこと好き？」
　怜の肩に顎を乗せるようにして顔を出して訊いてくる旭に、もちろん、と答えてやりたかったが、満座、特に彼女の父の前で愛の告白もできず、曖昧にうなずくにとどめた。
「どのくらい？」
　無邪気な声で続ける少女に、怜は、え、と間の抜けた声を出した。
「どのくらい好き？」
　まさかこのタイミングでこの難問を突きつけられることになるとは思いもしなかった怜は、言葉に詰まった。この前同級生から問われた問いであるので、その時の答えは覚えていたが、まさかそれを小学一年生に答えるわけにはいかない。
「『すごく』とか、『とても』とかは無しね」
　旭は、月並みな表現を使わないように釘を刺してきた。なかなか

侮れない。怜が苦慮していると、空気が心地よく揺れた。
「アサちゃん。人に訊く前に、自分が先に言ってあげたほうがいいんじゃないかな」
今日初めて聞いたカノジョの声はカレシをサポートするためのものだった。
怜の体が軽くなった。身を離した旭は、ちょっと考える素振りを見せたあとに、
「お父さんとお母さんとタマキお姉ちゃんとマドカお姉ちゃんとおんなじくらいすき」
そう答えてにこっとした。
怜は心底から感心した。これ以上の模範解答は無いのではなかろうか。家族と同程度の愛とはすなわち無限の愛である——無論、家族にもよるが。また、そう答えることによって、自分が家族愛を持つ人間であることも暗に示すことができる。
「へんな顔してどうしたの、レイ?」
まともに驚いて固まってしまった怜を、旭は怪しげに見ていた。
怜が、感動した旨を伝えると、旭は瞳をぱちくりさせた。
「アサちゃんは凄いよ。かなわないな」
と怜が真面目に続けると、何で褒められているのか分からないながらも、旭は喜びで頬を上気させた。さて、今度は怜の番である。模範解答の後にどう答えれば良いのかと、怜が頭を悩ませていると、
「アサヒ、あれをレイくんに見せるんじゃなかったの?」
驚いたことに再び環が援助の手を伸ばしてきた。先ほどよぎった疑念が濃くなった。どうやら、環のことをカレシの危地を救う殊勝な心がけの女の子、という評価をするには彼女と少々長く付き合いすぎたようである。旭がタッタッと和室を出て行くときに、怜は環と目を合わせたが、彼女は澄ました瞳でこちらを見返しただけだった。
ちょっとして帰って来た旭の黒髪にコサージュのついた純白のヘアバンドが飾られていた。先週、妹の土産にと、環が買ったもので

ある。
「すごく良く似合ってるよ、アサちゃん」
言ってやると、旭は溢れんばかりの笑みを見せた。そのあと、
「レイのこと好きになった理由知りたい？　お父さん？」
くるっと体の向きを変えると、父に向かって危険な質問をした。
「レイはね、タマキお姉ちゃんと同じ感じがするのっ」
父が面白そうな顔でうなずくのに合わせて、旭は高らかに宣言した。彼女の純粋無垢な目が何を捉えたのかしれないが、見間違いということもある。とても納得が行かない怜の真向かいから、
「どんな所が？」
環の父が突っ込んだ。うーん、と小さな腕を組んで考え込む旭。しばらく、うんうんと唸っていたが、答えは出なかったようである。分かんない、と潔く諦めてから、また怜に身を寄せると、
「でも、同じ感じがする。レイといると、タマキお姉ちゃんと一緒にいるような感じになるんだもん」
そう言って歯を見せた。まあ、感じ方は人それぞれである。怜は、旭の感性を尊重した。
「そう言われると確かにキミたちは似てるな」
環の父が、幼い娘と意を同じくした。母親の方も、何かに納得したような顔をしている。姉の円は、どこか真剣な硬い表情でじっとこちらを窺っていた。小学一年生の直感に大人の判断まで加えられて、怜は戸惑いを覚えた。彼女と似ている所などないことを一々数え上げて抗弁してやろうかどうか思案していたら、半袖がくいっと引かれた。
「レイはタマキお姉ちゃんと結婚するの？」
現れたときと同様、全く唐突に、旭はその場の雰囲気を変えた。ほぐれて柔らかくなった空気に張り詰めた息苦しいものが宿った。

第７９話：才女の誤算（前書き）

前回の続きになります。
アウェーでの怜の奮闘振りをご笑覧ください。

第７９話：才女の誤算

古代ローマの偉大なる独裁官に倣って、

「アサヒ、お前もか」

と言ってやりたい気持ちになった怜だったが、よくよく考えれば、いや大して考える必要もなく、旭には怜に対する悪意などない。その小柄な総身は怜への善意ではち切れんばかりであり、彼女は単に疑問に思ったことを、その持ち前の天真爛漫さで表現したまでのことである。しかし実は、地獄への道は悪意ではなく善意で舗装されているのである。

国道並みに整備された道をどんづまりに向かって走らされる怜。無論、止めてくれる者などなく。奇妙に緊張した空気が怜を包んでいた。幼き者の邪気の無い、しかしだからこそ、困った問いに、どう応じるか。その期待が半ば。くだらない答えをしたら許さん、という威圧が半ばである。

「昨日の夜、みんなで言ってたんだよ。レイはプロポーズに来るんだって」

情景が目に浮かぶようである。からかう母、仏頂面をする父、きゃあきゃあと歓声を上げる妹たち、そして、頬を赤らめるでもなく何食わぬ顔で受け流す本人。にわかに、怜は全身に力が宿るのを感じた。夕食時の雑談のネタとして嘲笑され、それで黙ったままでは男がすたるというものである。

「結婚って大人にならないとできないんだよ」

といういかにも大人ぶったセリフでお茶を濁すことはやめにした。つぶらな瞳を好奇心でもってキラキラさせている旭を見ながら怜は、

「アサちゃん。タマキお姉ちゃんは、いつかきっと結婚するだろうね。そうして、お姉ちゃんと結婚できる人は凄く幸せだと思う。オレが結婚できたとしたら、オレも幸せだと思うよ。お姉ちゃんは素晴らしい人だから」

真剣な声を出した。嘘は言っていない。問いへの直接の答えではなかったが、これで納得してもらうほかないぎりぎりの所である。神妙に審判を待っていると、

「その時はよろしくお願いしますね、加藤くん」

優しい声が聞こえてきてほっとした。環の母は微笑むと、

「持参させられるものは多くはありませんが、ただ良い日本語だけは教えてありますので」

年の功と言うべきか、冗談のようでいて、全くの冗談にも聞こえない口調で続けた。

「レイとお姉ちゃんが結婚したらすごいなー。だって、レイがお兄ちゃんになるんだもん」

と怜の目の前ではしゃいだ声を上げる旭。怜にとっても凄いことである。なにせそうなれば、『お兄ちゃん』という言葉がこれまでとは全く異なった価値を持つことになるからだ。

「もし、タマキお姉ちゃんと結婚しなくても、マドカお姉ちゃんと結婚してね」

この不用意な発言には、すぐさま異議が飛んだ。

「ちょっと、アサヒ。どうしてわたしが出てくるの？」

テーブルの向こう側から怒ったような声がかけられたが、旭はきょとんとした顔で、

「マドカお姉ちゃん、レイのこと好きじゃないの？」

純真百パーセントの声を返した。ぐっと言葉に詰まる円。好きと言う言葉を軽く使えるほど大人ではなく、さりとて、嫌いと言って失礼を為すほど子どもでもない。常に静穏な雰囲気のある円が口を引き結んで心乱れた様子であるのを見て、怜は、案外こちらの方が円の本来の性質なのかもしれないと思った。

「もしタマキお姉ちゃんと結婚しなくても、マドカお姉ちゃんが結婚してくれたら、やっぱりアサヒのお兄ちゃんになってもらえるでしょ」

独自の論理を披露する妹に、円は反論した。

「どうしてあんたにお兄ちゃんを作るために、わたしが結婚しなくちゃいけないの？」
「いーじゃん」
「いいわけない」
「どーしてさ？　どうせ誰かとはけっこんするんでしょ。だったら、レイでいいよ」
「加藤先輩はタマキお姉ちゃんと結婚するんでしょ？」
「そうならなかったときの話だもん」
　円は少し肩を震わせていた。無茶なことを言い続ける妹に苛立ったのだろう。とはいえ、客の手前、力を行使するわけにもいかず、すっと立ち上がると、
「コーヒーでも淹れてきます」
　と近くにいる母に告げて、和室を後にした。
「マドカお姉ちゃん、恥ずかしがってるんだね」
　旭はうむうむと一人うなずいていた。確かに恥ずかしがってはいたかもしれないが、恥をかかされたという意識の方が強いだろう。後ほど開かれるであろう姉妹会談が無事に済むことを怜は旭のために祈っておいた。
「タマキお姉ちゃんは嬉しい？　レイと結婚できたら」
　旭は矛先をもう一人の姉に変えた。怜の背をまわって環と怜の座っている間に割り込んでそう訊くと、
「とっても嬉しいわ。でも、お姉ちゃんと結婚して、レイくんが幸せになれるかどうかそれが心配です」
　いつものことながら全くの動揺なく平静な調子で答える環。
――自分の親の前でそういうことが良く言えるな。
　とても真似できそうにない。
「レイはなれるって言ったよ」
「レイくんは優しい人ですから。お姉ちゃんを傷つけないようにしてくれたのかも」
「お姉ちゃんなら大丈夫だよ。だって、アサヒ、お姉ちゃんと一緒

にいると楽しいもん」
「ありがとう、アサちゃん」
そう言って環は旭の頭を撫でたあと、怜に向かって微笑みかけた。
怜もやけになって口角を上げた。うまく笑えていればお慰みである。
微笑ましい中学生カップルから少し離れた、卓を挟んだ位置から、
「やれやれ、どうやら父抜きで話がぐいぐいと決まってしまったみたいだな」
沈黙を守っていた環の父が呆れたような声を出した。ファーストコンタクトですっかり警戒心を持ってしまった怜は、またぞろ何ごとか試すようなことを振ってくるのかと構えていたが、環の父は、
「加藤くん」
と改まった声を出すと、
「キミを信頼して娘を預けます」
柔らかな口調にして続けた。怜は姿勢を正した。さも娘の恋人であることを認めてくれたかのような発言だったが、それで有頂天になるほど、怜は単純ではないようだった。信頼とは、一方的にするものではなく、相互の間で自然と形作られるものである。それが分からないような人が、環の父親だとは到底思えなかった。とすれば発言の意図は別にあると見るべきである。
これが最後の試験になることを願いつつ、怜は、温和な表情をした環の父に向かった。
「今日を限りに、高校入試が終わるまではタマキさんとお会いしないようにします」
中学生の勢いだけの賢しらな発言だと取られないように力みは消したつもりである。
満座が水を打ったように静まり返った。ちょうどコーヒーを淹れて現れた円が、盆を持ったままぎくりとして立ち止まった。
環の父は何とはなしに顎をかいた。
「今、わたしは娘を預けると言ったんだが」
「その前に、『信頼して』とおっしゃいました」

「分からないな」
「ご信頼に応える唯一の方法だと思います」
冗談だと思われないように、怜は腹から声をだした。
環の父は少し身を乗り出すようにした。
「本気ですか？」
「はい」
「キミ自身は娘と会わなくても平気なのか？」
「会うことよりも大切なことがあります」
環の父は苦い顔になると、怜からふと視線を外して、その隣に目を向けた。
「タマキ、お前はそれでいいのか？」
「はい」
環の声は透明で感傷の色はついていなかった。
「高校入試まであと何ヶ月もあるんだぞ？」
「たとえそれが何ヶ月ではなく何十年であっても、怜さんが言うならその通りにします」
娘の全く澱みない声を聞いて、父は痛みに耐えるように目を瞑ると、ふうと大きく息をついた。やがて目を開いた彼は、ぺちりと頬を叩き、
「まったく……本当に似た者同士だな」
呆れたようにそう言ったあと、
「加藤くん、どうやら娘は君のことが心から好きなようです。娘に恨まれたくない、会ってやってください。高校入試については、お付き合いにかまけたくらいで失敗するようであれば、所詮はそこまでの娘ですので、キミが心配することはない。むしろ、キミの受験の妨げになるようであれば、いつでもお見限りください」
そう続けて笑みを見せた。からりと晴れたような人好きのする笑みで、おそらくそれが本来の顔なのだろう、と怜は思った。どうやら試験にはパスしたようである。怜は頭を下げた。
「本当にプロポーズみたいね。自分の時のことを思い出すなあ」

その場の緊張を解すように、環の母が冗談めかした声を出した。あまりいい思い出ではないのだろう、彼女の夫が慌てた振りで妻を見た。ふざけあう両親の間を縫って、円がコーヒーを給仕した。

それから一時間ほど、ようやくリラックスした雰囲気で歓談したり、未来の妹の相手をしたりして過ごしたあと、怜は環の家を辞した。別れ際に玄関で、ちょくちょく来てください、と環の父から懇ろな言葉をかけられた。多少認められたとしても、男親が娘のカレシに向かって持つ鬱屈した想いがさっぱりとなくなるわけではない。怜は、内心今回の件で間違いなく足が遠のくだろうと思いながらも、ありがとうございます、と表面だけは繕っておいた。

「本気だったでしょ」

門から外に出たところで、見送りに来ていた環が唐突に尋ねてきた。

「何が？」

「タマキさんと会わなくします云々のくだりです」

「冗談で言っていいことじゃないだろ。それに、逆の立場だったら、お前も同じことを言っただろ」

「どうかしら」

「言ったさ」

曇り空が切れて降ってきた光の下で、環は少し笑っただけで答えなかった。代わりに、

「父のことは謝ります」

と言って軽く頭を下げた。父の行為をその子が評価するのは僭越というものである。そんなことが分からないような彼女ではないとすれば、今の謝罪がどういう意味を持つのか、あまり深く考えたくなかったが、

「実は今日の父の振る舞いにはわたしの責任もあるんです」

会見中にちょっと思ったことを環は追認してくれた。

「……怒った？」

おそるおそるといった調子の声だったが、半月を少し膨らませた

ような涼やかな瞳には悪びれた色はない。
　怜は首を横に振った。環がしようと思ったことであれば、おそらく何らかの必要性があったのである。父にカレシを試させることに、茶番を見る楽しみにする以外にどんな必要性があったかは定かではないが。
「で？　あんなんで良かったのか？」
「レイくん、父に気に入られたみたい」
「あれで？　終始プレッシャーを感じたんだけど」
「父は父親を演じられる人ですから」
「演技だけでもないだろ」
「ですけど、演技の割合は高いと思います。円や旭のときはもう少しそれは低くなるでしょうね。父にとっても良かったわ。今回の件で、妹のときの予行演習ができたでしょうから。レイくんより難しい人もそうはいないでしょうし」
「タマキ」
「はい？」
　怜は、夏休みの祖父母宅への招待を取り下げる旨、環に告げた。
「え？　どうして？」
　怜は眉を顰めた。環がまともに困惑したような顔をするのを初めて見た。
「タマキの親父さんに信頼してもらえるような行動を取りたい。それに、そもそもがオレが軽率だった。お前を親戚の家に連れて行くなんていうのは、お前の親の立場に立てば気持ちの良い話じゃない」
「多分許可は得られると思うんだけれど」
「それは関係ない。今日の件で事情が変わった」
　怜は断固とした声を出した。厄介事の待つところへ環が一緒に来てくれればどのくらい心強いか知れないが、逆に言えば心一つのことである。彼女に来てもらわなくても何とかなるだろう。今日のことより難しいこともそうそうはないだろうし。
「……タマキ？」

全く簡単な筋の話だったが、それを拒むかのように環が長い睫毛を伏せているので、怜は驚いていた。彼女はしばらくそうしていたが、やがて、分かりました、と澄んだ声で答えた。

「レイくんの言うとおりでしょうね」

意を決したかのような顔で言う環に、ますます分からない怜。そんなに力む話でもない。

「こっちから誘った話なのに悪いけど」

怜が一応謝っておくと、環は首を横に振って黒髪を揺らした。そのあと、

「今日は本当にありがとう、レイくん」

それだけ言うと、スカートの裾を翻して体を反転させ、門内の人となった。常に無いどこか慌しい所作である。環は少し縁石を渡ったのち振り返って手を振ってきた。

怜はそれに応えると、環の機嫌の急激な推移に首を捻りつつ、川名邸をあとにした。

第８０話：カップリングパーティ（前書き）

いつも読んでくださってる方、ありがとうございます。今回は、宏人と志保の話です。第７５話の続きになります。お楽しみください。

第８０話：カップリングパーティ

ヘアワックスで少し立たせた黒髪、赤と黄を基調とした明るめのブロックチェックの半そでシャツ、ネイビーのデニムパンツ、というのが、グループデートという戦場に向かう宏人の装備だった。大した装備ではないが、別にお見合いに行くわけではない。一対一の初デートというわけでもない。問題ないだろうと思っていたが――

集合場所の駅前広場に集まったときに、宏人は、げ、と軽く身をのけぞらせた。

デニムパンツ一つにしても、ウォッシュ加工にダメージ加工、すねの見えるショート。その上には、ネクタイ付きの半そでシャツ、一面に大きなロゴが入ったプリントＴシャツ、長袖のシャツにベストの重ね着など。アクセサリーに、クロストップのチェーンネックレス、中折れのハット、革のブレスレットなどなどなど。恐ろしく気合が入ったハデな装いの一団がたむろしていたのである。

――ウソだろ……。

と思いたいが、どうやら今日のツアーの同行者のようである。親しくはないが、見たことがある顔がある。視線をちょっと横にずらすと、女子のグループがあり、こちらもこちらで、もうすぐ下着が見えそうなギリギリの丈のシフォンのチュニックとか、肩と腕、背の半分が見えるホルターのワンピースとか、白いシャツに黒のミニフリルスカートとか。化粧もばっちりとしているようである。

宏人は朝の明るい日を仰いだ。明らかに場違いなところに来たことを感じていた。何だか、切羽詰った妙齢の男女が市主催のイベントでカップリングを目的に集まってでもいるかのような風情である。

「よお、ヒロト」

後ろからかけられた馴染みの声に、宏人はぎくりとした。おそるおそる振り返ってみると、友人の顔があって、そのにこやかな顔の下に目を向けて、ほっとしたものを覚えた。雅紀は、普通のＴシャ

ツとジーンズのパンツという格好だった。とはいえ、それで洒落っ気を目いっぱい出している男子以上に魅力があるのだから、少し彼らがかわいそうにもなる。

雅紀は、先に到着していた集団を驚きもせず受け入れると、談笑し始めた。雅紀が選んだメンバーには馴染みの顔がいないので、所在無く佇んでいると、

「おっはよー、倉木くん」

弾んだ声がかけられた。宏人が眩しげに見た先に、二人の少女の姿がある。グレーのパーカーワンピースとギンガムチェックのペチコートを身につけているのが瑛子だった。宏人の胸で綺麗な音が響いた。

「どうスか？　惚れた？」

近づいていたずらっぽく歯を見せる瑛子に、半ば以上本気でうなずいてしまう宏人。その所作を冗談だと思ったのか、笑みを深くした彼女は、そのあと、

「紹介するね。坂木蒼（アオイ）ちゃん」

と言って隣の少女に手の平を向けた。膝丈の裾がふわりと揺れる水玉のワンピースを細身にまとい、髪を一本の太い三つ編みにしている。はっきりとした目元に少し冷えたものを感じさせる少女だった。

「はじめまして」

声にはそこまでの固さはない。宏人が挨拶を返すと、

「この倉木くんはね、アオイちゃんのこと好きらしーよ」

瑛子が凄まじいことを言った。

「に、二瓶、何言ってんだよ！」

「だって、そう言ってたじゃない。二年の美少女ランキングの上位だから、お付き合いしたいなあって」

後半部はデタラメである。慌てた宏人だったが、蒼は眉一つ動かさず、

「カレシいないのでいつでも告白してください」

と冗談なのか本気なのか分からないような声を出した。変わった子だな、と思っていると、雅紀が点呼を取る声が聞こえてきた。

「待ってくれ、まだ藤沢が来てない」

宏人が、出発を促そうとしていた雅紀を止めた。遊園地メンバーのラストに宏人は、志保を指定しておいたのである。

――あいつ、まさか来ない気じゃないだろうな。

二日前に電話で今日の件を伝えて参加を促した時の会話を宏人は思い出した。

「悪いけど、わたし、そーいうの苦手。他を当たって」

「ふざけろ。オレが得意だとでも思ってるのか？」

「倉木くんなら大丈夫。信じてるわ」

「テキトーなこと言うな」

「実はその日、忙しいの」

「何するんだよ？　部屋の掃除か？　それとも、全五十巻くらいある少女マンガを一巻から読み直していくっていう壮大な計画をとうとう実行する気になったのか？」

「……時間は？」

「十時。駅前広場に」

既に十時を五分回っていた。さらに五分過ぎて十分になる。志保に対して、

「あいつは必ず来る」

と宣言してでんと構えることができるほどの信頼を持てない宏人としては、本当にドタキャンする気なのではないかと心配になってきた。皆からぶつぶつと不満が出てきて、

――あいつの携帯に電話してみるか。

と宏人が自分の携帯を取り出したところで、ようやく志保が到着した。ロングスカートとTシャツ、その上にショートジャケットという格好で、アクセントになるところのない地味な服装だった。

「ごめんなさい、遅れてしまって……」

皆に向かってぶつぶつと志保は謝った。多分ほとんど聞こえなか

ったろう。数人から冷ややかな視線が送られた。
全員揃ったということで、雅紀が先導して駅の構内へと向かった。
一団から少し離れて後ろを歩く志保に、宏人は近づくと、
「来ない気かと思ったぞ」
とささやき声で言った。
「よっぽどそうしたかったんだけど、もう男のヒステリーは聞きたくないからね」
素知らぬ顔で嫌味を言った志保は、前方の集団に向かってあごをしゃくった。
「それであのケバイ連中はなに？　仮装パーティをするなんて聞いてないわよ」
「知らないのか？　あれが今どきの標準装備だ」
「じゃあ、倉木くんは？」
「オレは別に誰かを倒しにいくわけじゃない。これで十分だろ」
「何言ってるの。目的を忘れたの？」
「よくよく考えれば別にオレじゃなくてもいいだろ。二瓶とは女同士、お前が仲良くなれよ」
志保は首を横に振った。
「あなたのほうが可能性がある」
やけに確信ありげな口調は、自分でやりたくないからだろう。そう断じた宏人が視線を前に向けると、歩きながら他の男子と楽しそうに話をしている瑛子の姿が目に入った。瑛子は、中折れのハットを被った小粋な彼に気取った身振りで話しかけられていた。
「あんな帽子被ってる人に負けないでよね」
「やってはみるけど、期待はするなよ」
「結果には期待してない。でも、行動には期待してる」
まことにありがたい励ましの言葉を受けた宏人が、券売機で切符を買っていると、隣に人の気配がした。構内には休日に行楽へ出掛ける人々の姿がちらほらと見えていた。
「倉木くん。さっきのお話の続きをしてくれます？」

唐突に蒼が話しかけてきたのでびっくりした。二重まぶたが彩る綺麗な瞳でじっと見つめられどぎまぎした宏人は、切符と小銭を取りながら、彼女と何か話をしたか思い出そうとした。

「エーコが、倉木くんがわたしのこと好きだって」

平然とした声で蒼が言うので、一層心臓の鼓動が速くなった。さっさと券を買った瑛子は、一団とともに先にプラットホームに向かっている。宏人は横の券売機にいる志保が切符を買ってそそくさと離れて行くのを視界の端にとらえながら、

「い、いや、あれは違うんだよ」

慌てて弁解した。

「何が違うの？」

間近からじいっと瞳を覗き込まれて、宏人は内心悲鳴を上げた。近い。近すぎる。

「に、二瓶の冗談で」

顔をそらせながらそれだけ言うのがやっとだった。

「冗談……そーですか……」

しゅんとした振りを作った蒼と一緒にホームまで向かう宏人。一瞬、今日の目的を忘れ、蒼とちょっと言葉を交わし彼女の隣を歩けるだけで満足してしまった。今日はいい日だった。

「せっかくカレシができると思って今日は来たのに残念ですね」

いくら何でも蒼の言動を全て鵜呑みにするほど子どもではない宏人は、おどけた振りで答えた。

「坂木さんならできると思うけど」

「でも、大村くんは倍率が高そーですよ」

「え？　マサキ狙いなの？」

「というか、他の男子は怖くて。あれは何なんですか？　カッコいいと思ってるの？」

前を歩く一団は改札に到達していた。宏人は男子に同情の念を覚えたが、公平を期すために、逆に女子の格好について訊いてみた。

「あれは女の子の常套手段です。容姿や性格に自信の無い場合、そ

こから男の子の目を離すために服を煌びやかにし、化粧を厚くするわけ」

「それを男子はやっちゃいけないの？」

「もちろん」

「何で？」

「わたしが女子だからです」

なかなかの毒舌と都合のいい論理を振りかざす少女であったが、抱いていたイメージと違って、見た目ほど人を遠ざけるような風でもないようである。

「倉木くんは、今、誰かと付き合ってるんですか？」

宏人は首を横に振った。似非（えせ）カノジョはいるが、それは数に入れなくてもいいだろう。

「じゃあ、わたしにもチャンスはありますか？」

真実味のあるような声を出されて、宏人は戸惑った。瑛子と仲良くなることが第一目的であるのでその線からすれば「無し」と答えなければならないが、瑛子と付き合いたいという大それた願いまでは持っていないのである。とすると、仮に蒼が本気であれば、ＮＯと答えることは非常に勿体無いことになってしまう。

「いつまで葛藤してるんですか？」

改札をくぐりぬけたところで蒼がつれない声を出した。考えすぎてしまった宏人は、答えを出す前に呆れられたことに気がついた。

「優柔不断ですね、倉木くんは」

初対面であるにも関わらず全く容赦の無い蒼。とはいえ、からかうでも責めるでもない、むしろ親しみのわくような温かな声で言われたので、腹も立たない。プラットフォームに入ると、遠出をするのか、大きなリュックサックを背負った家族連れが近くに見えた。

「倉木先輩とは性格のタイプが違うみたいですね。顔は結構似てますけど」

続けた蒼の言葉に、宏人の胸が沈んだ。まさか、休日まで姉の話が出されるとは。

「……姉貴とはどういう？」
「ウチの部にたまに遊びにいらっしゃるんです」
「ええっと、坂木さんの部って？」
「文化研究部」
そう言えば思い当たることがあった。どうもその部には姉の仇敵がいるらしいのである。姉から親友と幼馴染みを奪った憎んでも憎み足りない男子。宏人は誰だか知らないが、彼に同情した。姉にからまれては、とても心穏やかではいられまい。
「大丈夫なのか、その先輩？　発狂寸前なんじゃないの？」
「ところが、もともとが変な人でして。倉木先輩の猛攻をひらひらとかわしてます」
賢以外に姉のマタドールになれる人間がいるとは、世界は広い。
蒼はその先輩の他に、眼鏡美人の部長や、眼鏡なし美少女二人、また先ごろ入部してきた三年生についても話をした。しばらく、文化研究部がいかにお気楽な部であるかというテーマで講義がなされるのを聞いていると、やがてホームに電車が到着したようだった。

第８１話：会場は遊園地（前書き）

前回の続きです。

第８１話：会場は遊園地

目的の駅までは三十分ほどの旅である。蒼を隣にして車両に乗った宏人だったが、彼女の近くに席は取らなかった。いくら何でもそれは気恥ずかしい、というのが一つ。蒼が向かっているのが瑛子の側で、そして瑛子の近くには過剰装飾のピカピカした一団がいて目がイタイというのが一つ。

最後の一つは――

「お前、誰とも交流を温める気は無いのか？」

囁き声で言いながら宏人が腰を下ろしたその隣には、伏し目がちな志保が身を縮ませるようにして座っていた。他のメンバーから少し離れた所に、まるでのけ者にでもされているような位置に席を取っている志保に要らぬ同情を寄せてしまった。それが最後の理由である。

「そういう倉木くんは、美人さんにモテモテですね。彼女と交流温めてどうすんのよ？」

音量を絞ったその声にはうっとうしそうな色が混ざっていたが、宏人は気にしなかった。公共交通機関の中で、かつクラスメートがそう離れていない所にいるこの状況では、宏人の方に分がある。

「まあまあ、妬（や）かない、妬かない」

「妬く？　誰が？　誰に？」

「お前がオレにだよ。カノジョのシホちゃん」

「寝言は寝てから言えば？」

「じゃあ、膝を貸してくれ」

志保はふうと息をつくと、目を宏人から離した。車窓から見えるホームの景色がゆっくりと後ろに流れ始めた。しばらく、電車の心地よい揺れに身を任せていたが、志保が車外に目を向けるのみで何も話さないので、宏人は自分から話し始めた。休みの日にどんなことをやっているのか訊いてみて、

「電車に乗ってる」
すげない答えが返って来たが、宏人はめげなかった。
「今のことじゃなくて、いつもはどうなんだよ？」
「お茶にお花、お料理にお裁縫」
このくらいの応答にはもう慣れたものである。宏人は気にせず話を続けた。
「友だちと遊びに行ったりしないのか？」
「友だちいないから」
「じゃあ、オレがキミの友だちになるよ」
「こっち見ないでね。嬉しくて涙が出そうだから」
今日の青空のように乾いた瞳で志保が言った。言葉の端に苛立ちのようなものが見えて、それが宏人に対してのものでないとしたら、
「お前、もしかして、どっか具合でも悪いのか？」
と思った宏人だったが、志保は、ほっといてくれ、と言わんばかりにどうでもいいような調子で首を横に振っただけだった。再び車窓を楽しみ出した志保の横で、宏人はシートに身を預けた。
『恥』という概念を教えてくれる教科は中学校にはない。少し離れた座席から、他の乗客の迷惑も省みず、かまびすしい笑声が上がって来た。その声に押されるようにして、小柄な影が現れる。
「いけないんだ。グループで遊びに行ってるのに、始めから二人きりになるなんて」
向かい合わせになった席に瑛子が冗談めかした声で滑り込んできた。
「いやあ、藤沢がさ、オレにどうしても隣にいてくれって言うから」
宏人も冗談を返した。志保はいかにも恥ずかしそうに顔を俯かせた。おそらく伏せた瞳には妖しい光が宿っていることだろう。あとが怖い気もするが、とはいえ、言われっぱなしでいられるほど忍耐力が無いことは実証済みであった。ちょこちょこと仕返ししてストレスを発散させておくことは、ひとり宏人のためのみならず、二人の関係を円滑に保つためでもある。

「知らなかった。二人がそういう仲だったなんて」
瑛子が宏人のフリに乗ると、
「ち、ちがいます。倉木くんの冗談ですからっ！」
慌てて志保は冗談なれしてないような真剣な声音で答えた。
「でも、二人が一緒に帰ってるのを見た人がいるんだけどなあ」
瑛子がにんまりとした顔を作った。
「あ、あれは、たまたまで……」
「藤沢がオレの想いに応えてくれないからしつこく付きまとってるんだ」
志保と宏人が同時に答えた。こういうことは否定すると本当らしく聞こえるということに、志保は気がつかないのか、それとも気がつかない風を装っているのか。
「何かアヤシイなあ」
宏人と志保の顔を交互にためつすがめつする瑛子。付き合ってるかどうか気になるということは、
――もしかして、二瓶はオレのこと……。
好きなのかも、という幸せな空想に宏人はしばし浸ってみた。そのくらいの夢想をした所で誰からも責められまい。今週もよく魔の教室に耐えた自分へのご褒美である。ふと向いた視線の先にペチコートから覗く綺麗な素足が見えて、宏人は慌てて目を逸らした。
「あんまり藤沢さんとは話したことないから、今日はよろしくね」
浮ついている宏人の前で、瑛子が明るい声を出すと、
「は、はい。こちらこそ」
と浮ついた振りをした志保が答えた。
「二瓶、オレには？」
「え、何が？」
「いや、『倉木くんもよろしくね、ニッコリ』的な」
「倉木くんには藤沢さんがいるし、それにアオイちゃんもいるから。わたしが出る幕なんかないでしょ？」
瑛子が真面目ぶった顔で答えた。宏人はがっくりと肩を落として、

瑛子の笑いを誘った。それを打ち消すようなひときわ大きなキャハハハ笑いが近くから起こって、宏人は思わず身をすくめた。もし想い人があんな笑い方をしたら、百年の恋も醒めるに違いないなどと考えていると、徐々に電車はスピードを緩め、車内アナウンスが目的の駅の名を告げてきた。

駅から園への直行バスに乗り換えて、ガタゴトと揺られること三十分。他の客とともに、園前のバス停に吐き出された宏人の周囲から歓声が上がった。仲間の喚声を聞きながら、宏人のテンションも少なからず上がる。なにせ、遊園地など来るのは小学生以来絶えて無かったことである。しかも、可愛い女の子つきなのだから、気分が高揚しない方がウソだろう。

喜び勇んで、一日フリーパスを買いに入場カウンターへと向かおうとすると、わき腹の辺りを軽く小突かれた。

「あんまりはしゃがないでよ。目的を忘れないで」

冷たい声を出す志保に、宏人は、分かってるよ、とぞんざいに答えた。小うるさいこと、この上ない。

「こっちだっていちいち言いたくない」

「じゃあ、黙っててくれればいいだろ」

「言わされてるんでしょうが」

「オレのこと信頼してるんだろ？」

「注意を素直に受けてもらえれば更に信頼が深まる」

「分かったよ、姉さん」

先にパスを買った雅紀が少し離れた所から、早くしろ、と手を振ってきた。それに答えるために志保から目を離したが、彼女の瞳がどういう色を映したかは見ずとも想像がついた。

入場手続きを済ませて、大きなアーチをくぐると、そこはもう異空間である。まっすぐに延びる広いメインストリート。その先にくねくねしたローラーコースターの艶かしい姿、目を転じれば、大観覧車の堂々とした威容、間近には童話に出てきそうな可愛らしい家の形のフードコート。

休日の園内は非常な賑わいを見せていた。家族連れや恋人同士、若い中高生の姿もかなり見えて、一様にハイテンションである。おそらく、園内の気温は彼らの浮かれ熱によって、園の外より二、三度高いに違いない。

「よーし、何から乗る？」

一団のリーダー格の雅紀が声をかけると、

「やっぱり、まずは絶叫系でしょ」

と、その化粧にこそ絶叫したくなる女子の一声で、皆でローラーコースターやフリーフォール、地上十メートルでぐるぐるぐると宙をひたすら回るよく分からないもの、などに乗ることになった。

「苦手な人は無理しなくていいよ」

という雅紀の心遣いに、あまり絶叫系が得意でない宏人は、よっぽど、

「じゃあ、お言葉に甘えて」

と待っていたかったが、鋭く自分を見る視線に射すくめられ、それは叶わなかった。志保の目がゴーサインを出している。瑛子が乗るようなので乗れ、ということなのだろう。仕方なく列に並ぼうとした宏人は、後ろから志保がついてきていないことに気がついた。視線を向けると、近くのベンチからそっと目立たないように小さく手を振ってよこした。

「何てヤツだ……」

「え？　何か言った？」

宏人の前に、蒼と一緒に並んでいた瑛子が振り向いた。宏人が慌てて何でもない旨伝えると、驚いたことに蒼が不意に列を離れ、

「やっぱりやめるわ、わたし」

起伏のない声でそう言うと、すたすたと志保のいるベンチの方に歩き出した。そうすると、宏人が前に詰めることになって、

――ええっ！

瑛子の隣に並んだ。まさに望んでいた通りの状況ではあったが、まさかしょっぱなからこの展開が待っているとは思ってもみなかっ

た。
「苦手なの？　ジェットコースター？」
ひどい顔をしていたのか、瑛子がからかうような顔で覗き込んできた。もう、それどころの話ではない。肩と肩が触れ合うくらいの至近距離に彼女がいて、髪の匂いなのか甘い香りがふわりと漂ってくる。じかに心臓を触って押さえつけてやりたいほど、動悸がしていた。
「大丈夫、大丈夫。手を握っててあげるから」
はい、とすっと差し出された手を、思わず握ってしまいそうになるところで宏人は正気に戻った。
「いや、平気だから。前、進んでるぞ」
そう言って、瑛子のほっそりとした手をそのままに、数歩前に出る宏人。自分の前にいるハデハデな少年少女の背を見ながら、冗談に乗じて本当に手を握れば良かったか、と後悔の念が胸をかすめた。いやいやいや。宏人は小さく頭を振った。好きな子と手をつなぐのであれば、正々堂々とそうしてくれるよう申し込むべきであって、何かに乗じてなどという卑怯な考えは彼女を辱めるに等しい。
「ホントに大丈夫？　倉木くん？」
男の道を半泣きで歩く宏人に、今度は心配そうな声がかけられた。絶叫ものに二つ乗ってくたくたになったあと、今度は穏やかな乗り物に乗った。
瑛子の印象は教室のときとそこまで変わっているわけではなかった。少し活動的になって、しっとりとした美しさにからっとした明るさが加わったくらいのものである。軽口は多くなったが、それによって魅力は些かも減じなかった。志保の変身に比べれば可愛いものである。
「さらなる変身があるかもしれないわ」
「ゲームの往生際の悪いラスボスみたいなこと言うなよ」
「倉木くんが勇者だったら戦う前に負けそう。顔、ゆるみっぱなし」
「もとからこんな顔だ」

「じゃあ、もう少し引き締めて」
宏人は真面目な顔を作って見せたが、それに対する答えは、どうしようもないヤツだという意が含められた志保のため息のみだった。
「そんなことより、藤沢。お前、さっきから何も乗ってないだろ。何か乗らないの？」
「酔うのよ」
「聞いたことないぞ。遊園地の乗り物酔いなんて」
「今聞いたでしょ」
「……じゃあ、何か乗り物じゃないアトラクションに入ろうぜ」
「もしわたしとデートしたかったらいつでも相手したげるから、今日はいい子にしてね」
「お前、ほんっとに可愛くないな」
「どうも。ほら、可愛いあの子が来たわよ」
固まりになって先を歩いている集団から瑛子が抜けてきて、お昼にしようということになったことを告げてきた。
「怪しい、怪しいよ。倉木くんと藤沢さん。さっきから二人で何ひそひそ話してるの？　やっぱり二人はそういう仲なんでしょう？」
悪徳政治家のスキャンダルを暴いたジャーナリストのような満足げな笑みを浮かべた瑛子が、他の女子の声に答えて歩み去ると、志保がキツイ視線を向けてきた。口は開かなかったが、
「あんたがいちいち寄ってくるから、二瓶さんが本気で疑い出したでしょ。しっかりしてよ、このヘタレ」
目で内心は十分に伝わってきた。
宏人は、園内から出るまで、もう志保には話しかけないようにすることを決めた。

第８２話：スピードデーティング（前書き）

いつも読んでくださってる方、ありがとうございます。今回も前回の続きです。

第８２話：スピードデーティング

潜水艦をモチーフにしたファストフード店で小腹を満たしたのち、ミニトレインで水上を走ったり、バルーンに乗って空中を散歩したり、トロッコで地中にもぐったりと、冒険を楽しむことはできたが、瑛子（エーコ）に話しかける機会はなかなか得られなかった。彼女はまるでサッカーのエーススストライカーででもあるかのように、常に誰かしらから厳しいマークを受けていた。

「どいてくれ、二瓶に話があるんだ」

などと言って、マーカーの一人であるカッコつけ少年の頭から中折れハットを弾き飛ばしてやる颯爽とした自分を想像してみたりしたが、空しくなっただけだった。なにせ別にカッコつけるのは罪ではないし、しかも瑛子に対して正直な気持ちで向かっている彼の方が自分よりよほど上等な気さえしてきたからである。

志保からはひっきりなしにアイコンタクトで、

「ゴー！　ヒロト、ゴー！」

というサインが出されていたが、宏人は、まだ早い、と首を横に振り続けた。振り続けた所為で若干首が痛くなってきたほどであるが、それも致し方ない。

「話しかけるだけなのに、何を怖がってるのよ、このチキン野郎っ！」

そういう目を志保はしていたが、あるいはそれは宏人自身の心の声であるのかもしれない。とはいえ、ナイーブ少年をもって自らを任じる宏人としては、どうにもしようがない所である。待てば海路の日和あり。良い日和が来なければ、次の出航の日を待つべし。そういう風に逃げの達観をしている所へ、

「お前にチャンスをやろう、ヒロト」

唐突に怪しげな少年の影が現れ、なんのこっちゃ、と宏人が思っているうちに、彼は口元にニヤリとした悪そうな笑みを作ると、パ

ーティに声をかけて彼らの足を止めた。近くに、緑の木々が涼やかな日陰を作る休憩エリアがあり、そこに一行を導くと、雅紀は腕を上げて指を一本立てた。

「注目っ！」

人の目を集めるのに慣れているような声で、皆の目を引くと、

「スピードデートターイム！　説明しよう。スピードデートタイムとは、一対一でペアになり、気になるあの子のことを根掘り葉掘り訊くことができる魅惑の時間だ。もちろん、訊いたことによって嫌われても、誰も責任は取ってくれないから気をつけてくれ。制限時間は十五分。十五分したら相手を変える。さあ、カレシやカノジョがいない負け犬君たち、十五分で勝ち組へ行けるチケットをあげたオレのことを称えてくれっ！」

真昼の太陽ともタメをはれるくらい明るい素敵なテンションで雅紀が声を上げた。近くのベンチに座っていた父子が何ごとかと不審な目を向けてきた。

「さあ、どうしたみんな。そんな目立つ格好してるくせに、今さら異性の目を意識してないなんて言わせないぞ。さ、相手を選んでくれ、速いもの勝ちだ」

言いざまに、雅紀はすたすたと歩くと、その場から少し離れた所に立っている一人の少女の元に寄った。

「藤沢さん、十五分、時間をください」

他の女子の呆気に取られる顔を、宏人は見ることができた。何でよりによって、という顔をしている。雅紀は言動ほど中身は軽薄な男ではない。宏人にはその理由が分かる気がした。

雅紀はさっさと歩き出した。志保も戸惑う振りを見せながら、その横に並ぶ。志保は去り際にこちらを見たかもしれないが、宏人は彼女の方を見なかった。姉に何度も叱られるできの悪い弟役はうんざりである。雅紀がすみやかに一団から抜けたせいでできた虚をついて、宏人は瑛子に声をかけた。

「アオイちゃんじゃなくていいの？」

からかうような笑みに、お願いします、と再度申し込んだ声は少し震えてしまった。

「喜んで」

瑛子が晴れやかな顔を向けてくれて、宏人は心底からほっとした。他の男子の、しまった、という顔を見ながら、瑛子を隣にしてその場を後にする宏人。

親友が与えてくれたビッグチャンスである。短い時間ではあるが、二人きり。さすがにもう緊張がどうとか言っていられない。訊くべきことを訊かなくては、と思ったときに、宏人は首を傾げた。何を訊けば良いのか、全く考えていなかったのである。志保の思いを酌めば、こちらのグループに入ってくれるかどうか、という質問をすべきということになるだろう。

しかし、である。

こちらのグループに入るということが、宏人や志保にだけ話しかけるようにして、今までのグループの子と話さないようにするということを意味しているのであれば、とてもそんなことは頼みようがない。宏人の苦慮を、

「どうしたの、倉木くん？　黙っちゃって」

緊張と取った瑛子が、いたずらっぽく笑いかけてきた。

「き、緊張？　まさか。そ、そんなことは無いです」

「どもってるよ。しかも、敬語」

「実は少し」

そう宏人が答えると、瑛子は傍目からは余裕たっぷりとしか見えない表情で、わたしも、とちょっと信じられないことを言った。

「何で二瓶が緊張するんだよ？」

「男の子と二人になれば緊張もするでしょ」

「『倉木くんと』って言ってくれるのを期待してたぞ」

冗談交じりに宏人が言うと、瑛子の口元から小さな嘆声が漏れるのが聞こえた。それは宏人の言葉への反応ではなかった。

「見て、倉木くん」

二人の歩いていく先に小さな池のようになっている水場があって、その周囲に、紫、薄紫、白の色の大輪の花が群生していた。瑛子は足を速めると、水場を囲う柵から身を乗り出すようにして花を見た。剣状になった葉が菖蒲に似ていることから、花菖蒲というらしい。

「きれいだね」

花を一心に見る瑛子の瞳がきらきらと輝いている。しばらく花に見惚れていた瑛子は、不意に宏人の方に顔を向けると、

「『キミのほうがキレイだよ』って言ってくれるのを期待してたんですけど」

そう言って、にこりと笑った。いくらなんでもなフリに宏人が固まっていると、自分で言って恥ずかしくなったのか、瑛子の白い頬が少し赤く染まった。その可愛らしい様子を見た宏人は、何だか自分の全てを肯定したいような気分になった。ありがとう、オレ。おめでとう、オーレ。

宏人が自身に賞賛の言葉を浴びせ、有頂天になっていると、瑛子が体を正面に向けてきた。可憐な面からいつのまにか笑みが消えて真剣な表情が乗っていた。

「折角の機会なので、聞きたいことが一つあるんですけど」

先を促した宏人に、

「倉木くんって、藤沢さんのこと好きなの？」

静かな疑問の声がかかった。

宏人は頭がくらくらするのを感じた。鈍器で殴られればそういう状態になるかもしれない。今日すでに何度か瑛子から問われた問いではあったが、それらは全て本気でなされたものではなかった。ところが、今彼女は一点の曇りなき瞳を向けてきている。志保のことは、好きか嫌いか、と問われれば、好きだと答えられそうである。確かに時々、ちょっと、いやかなりむかつくこともあるが、悪い子ではない……ハズ。しばらく思案した宏人は、

「嫌いじゃないっていう意味でなら好きだけど」

慎重な答え方をしたが、

「じゃあ、カノジョにしたいっていう意味では？」
瑛子は更に突っ込んだことを訊いてきた。
この問いに対しては首を横に振らないわけにはいかないようだった。今まで一度もカノジョがいたことのない宏人であるが、想像の内に棲むカノジョはいるわけで、そのカノジョの像はいつも笑っていて、一緒に楽しげな会話をしたり、将来の夢を語り合ったりと、心慰められまた心慰めたい、そういう存在である。志保にそれを要求するのは無理である。
「慰めが欲しかったら、ペットでも飼えば」
そのくらいのことは余裕で言いそうな子である。
「じゃあ、この前の……先々週の金曜日の件は？」
一瞬、何を言われているのか分からなかった宏人だったが、
「給食のとき、藤沢さんの味方をしたこと」
と瑛子が言葉を足したので思い出した。思い出したくもないことを。
「あれは純粋に正義の心からってこと？」
瑛子が念を押すように訊いてきた。突然どうしてこんな話をするのか宏人には分からなかったが、瑛子の問いを突っぱねるという選択肢は彼の頭にはない。宏人は、義心などという大それたものではなく、気がついたら体が動いただけの衝動的な行為に過ぎないということを答えた。
「でも、藤沢さんをかばえばどうなるかは分かっていた」
宏人はうなずいておいたが、それはやはり想像の中だけの話だった。まさか、ここまで徹底して仲間外れにされるとは思ってもいなかった。とはいえ、後悔だけはしていないようである。志保への印象が変わった今、松本と志保の関係を、加害者対被害者という単純な構図の下では捉えられなくなったが、それでも、松本といるよりは志保といた方が良いという感覚がある。
「じゃあ、これからもこの状態を続けるの？　藤沢さんと二人、クラスから無視されて一年間？」

そうならないために画策する所があるのだが、グループに入ってくれるかどうか分からない瑛子にそれを話すわけにもいかず、宏人はあいまいにうなずくしかなかった。

「一つだけ言っておきたいことがあるの、倉木くん」

瑛子がはっきりとした声で勢い込んだ。園内スピーカーが事務的な声で業務連絡を告げ終わるのを待ってから、彼女は続けた。

「松本くんがしてることは良くはない。でも、それは松本くんだけに責任があるわけじゃないと思う」

宏人は眉を寄せた。瑛子の言っていることが良く分からない。

「藤沢さんにもあるっていうことだよ」

確信めいた調子の声を出す瑛子だったが、全体、いじめられている側にどんな責任があるというのだろうか。不思議に思った宏人が催促すると、

「藤沢さんは人を嫌って避けてる。人を嫌う人は、人からも嫌われる。人を避ける人は人からも避けられる。だから、藤沢さんが嫌われて避けられるのには、藤沢さん自身にも責任があると思う」

整然と瑛子が答えた。

第８３話：夢から醒めるとき（前書き）

前回の続きです。

第８３話：夢から醒めるとき

一体、瑛子（エーコ）が何を訴えたくてこんな話をしているのか、宏人（ヒロト）にはさっぱり分からなかった。話の意図も分からないが、中身の方にも納得が行かない。確かに、今瑛子が言ったことは一応は、なるほど、とうなずける話である。志保には人を嫌ったり避けたりしている所がある。しかし、それを超えて彼女が、自分がされているように、人を傷つけたことがあっただろうか。クラスメートを侮辱するような行為をしただろうか？　単に嫌って避けることと、仲間はずれにして侮蔑することは決して同じことではない。

――藤沢と松本は違う。全然違う。

いくら気のある子の言うことであっても、それに盲目的に従うようなことをしないだけの分別が宏人には備わっているようだった。

「藤沢さんが今の状態になってるのは藤沢さん自身の責任だと思うの。倉木くんが藤沢さんをかばってるのは、間違った同情だと思う」

平明な事実を告げるような口調で瑛子が続けた。容赦なく照りつける太陽のもとで、宏人はすっと体温が下がるような心持ちがした。志保が宏人の助けなど必要としていなかったことは事実である。『間違った同情』という点は認めても良い。だが、現在の志保の状態が、彼女の責任だという論はどうしても受け入れることはできない。

「藤沢は悪くない」

その語勢の強さに自分でも驚いた宏人だったが、瑛子は平静だった。

「それは知ってるよ。今日もちょっと話してみて分かった。でも、いいか悪いかなんてことは関係ないの。大事なのは協調性じゃないかな」

「協調性？」

「藤沢さんがクラスの皆を受け入れれば、皆も藤沢さんを受け入れてくれると思うよ。そうすれば、無視されることもないわ」

瑛子の声はあくまで事務的だった。簡単な方程式を解いているような気安さが言葉の端々に漂っていた。

――藤沢が受け入れれば、だって？

思わず反論しようとして、全く慮外のことだったが、どうやら宏人は瑛子に苛立ちを感じ始めているようだった。これまで癒されることしかなかった瑛子の言葉が神経に障る。

「松本の方の責任は無いのか？　受け入れるならむしろあっちだろ」

瑛子は唇をほのかに笑みの形にしたようだった。

「松本くんにそういう期待をするのは現実的じゃないと思う」

「だからって、それを藤沢に押し付けるのか？」

「『押し付ける』だなんて。ただ、今の状態を変えるには、藤沢さん側から動かないといけないと思うだけだよ」

「仲間外れをするようなヤツラを受け入れろって？」

「こういう言い方はあんまり感じ良くないけど、そういう振りだけでもすればいいと思う」

それができないからこその志保なのだろうし、しかも仮にできたとしても、宏人はそれを志保に勧める気などには到底なれなかった。なにせ、当の宏人自身にそういう行為――嫌いなのに好きな振りをする――に対する嫌悪感がある。新しいグループを作るという志保の案の方がよほどマシである。

宏人は小さく首を横に振った。

「倉木くん、二年生はまだまだあるんだよ。考え直したほうがいいと思う」

瑛子が自分と志保のことを心配してこんなことを言ってくれているのだ、と解釈した宏人は、大して心温まるものを感じなかったにせよ、一応の感謝の意を込めて、

「藤沢には言ってみるよ」

と答えておいた。

「戻る気はないの？」

「え？」

「倉木くんは、前に戻る気はないの？　藤沢さんから離れて、松本くんのグループに」

瑛子の澄んだ瞳の中に自分が映っているのが見えた。宏人は自分を取り戻すのに数秒の時を要した。先ほどからずっと感じていたことが、ここに至ってようやく明確になった。瑛子の言葉には、血の通った温かみが全くなかった。志保の気持ちや宏人の気持ちを想像して、その立場に想いを馳せるという心配りが。ああすればこうなる的なまるで盤上の駒を動かすような冷徹な口調が宏人の癇に障っていたのである。

好きな子と二人きりでいることからくる気持ちの高揚はいつのまにか醒めていた。こちらを見据えるようにしている彼女は周囲の花に劣らないほどの美貌だが、その美しさが急に薄っぺらいものに思えてきたのだった。花と違って、人は言葉を持っているということである。

宏人は瑛子の問いには答えなかった。答える価値のない質問だと思った。

「そろそろ十五分になるな」

携帯電話で時刻を確認した宏人は、瑛子の反応を待たずに先に立って歩き始めた。

集合場所に戻るまで瑛子は何も話してこなかった。彼女と話したい気分ではなかったので、宏人にとっては丁度良いことだった。彼女の中に求めた理想が高かった分、幻滅も大きかった。

冷静に考えてみれば、瑛子のプランは現実的である。宏人が志保と離れ松本のグループに戻り、そして志保はクラスの皆に対して心を開き、話しかける。その時は、おそらく瑛子が志保を助けてくれるのだろう。瑛子の手引きによって、志保は女子のメジャーグループに編入される。そうして、めでたく二年二組に美しい秩序が完成する。

――うんざりだっ！

それは誰のための秩序なのか。宏人や志保の為のものではない。

彼らはその秩序を善しとしないからこそ、現在に至っているのである。

おそらくはそれが分かっていながらの瑛子の提案は、彼女もやはりあちら側の人間であるということを意味していた。宏人は、瑛子をこちらのグループに取り込もうという気持ちを断念し、また、彼女への、恋と呼ぶにはあまりに淡い気持ちが風に舞う塵のように吹き飛ばされるのを感じた。

「エーコに何か言われたんですか？」

スピードデートの二人目の相手に立候補した蒼に唐突にそんなことを言われた宏人は、彼女の鋭さに驚いた。

「わたしが鋭いんじゃなくて、倉木くんが顔に出やすいんじゃないですか」

近くからメリーゴーラウンドの楽しげな音楽が流れて来ていた。唇の端に笑みを煌めかせた蒼は、瑛子に何を言われたのか続けて訊いてきた。

「プライベートなことだから」

「わたしがエーコにしゃべるとでも？」

「二瓶とは友達なんだろ？」

「だから、何でも話すって？」

「違うのか？」

「いいえ、違いません。エーコとは、気になる男子の話から、好きなバンドに雑誌にドラマ、新しく出た化粧品、将来の夢に至るまでありとあらゆることを話してます。お昼休み、トイレで一緒になったとき、夜中の携帯電話、週末泊まりに来た時なんかに」

宏人は苦笑した。瑛子はともかく蒼がぺちゃくちゃと楽しげに話をしている様子が思い浮かばなかったからである。

「エーコはちょっとキツい所があるけど、言ってることは概ね間違ってません」

「じゃあ、オレが間違ってることになる」

「でも、そうは思ってない？」

思わず勢い込んだ宏人だったが、誘導尋問になっていることを感じて、口を閉じた。蒼は肩をすくめるようにした。クールな雰囲気を身にまとう彼女に良く似合うしぐさである。

「『諫言は耳に逆らう』って言いますからね」

「かんげん？」

「忠告のことです。本当にその人のことを思う言葉っていうのは、その人にとっては受け入れがたいものだという諺です。部活の先輩の受け売りですけど」

蒼の言葉は、瑛子に感じた失望を回復させるまでには至らなかったが、自分が少し一人よがりな考えをしていたのではないか、と反省する契機にはなったようだった。よくよく考えてみれば、先の瑛子の提案は彼女にとっては何ら利益の無い話である。それをしてくれたということは、瑛子の純粋な好意からだろう。本来ならありがたいと思わなければならないところなのかもしれない。

ただし、好意の押し付けとは時に煩いものである。宏人は身をもってそれを知っていた。

「エーコのこと好きなら、じっくりと付き合った方がいいですよ」

「……どういうこと？」

なぜ瑛子に好意を持っていたことが分かったのか、ということに関しては宏人はスルーしておいた。聞かなくても分かる。かなり分かりやすい態度を取っていたのだろう。そういう冷静さを持てるということが、瑛子への好意が減退したということを如実に物語っていた。

「外から見るエーコと、中にあるあの子は多分かなり違いますから。表面だけだとあの子のことは分からない」

ところが、その『中』をつい先ほど見てしまったのである。温かな雰囲気の中にある冷たいものに、宏人は触れてしまったのだった。その冷たさに、甘い夢は破れ、厳しい現実に還って来たのである。優しさとか快活さとか悪戯好きとか明るさとか、そういう可愛らしいものだけを集めて作られた女の子。そんなものは、しかし、男の

身勝手な幻想なのだった。百歩譲って、この世の果てまで探しに行けばどこかにはいるのかもしれないが、そんなことをするくらいなら現実を受け入れて生きていこうと思うくらいには、宏人は現実主義である。

「坂木さんから見た二瓶ってどんな子なの？」

本気で訊いた訳ではなく会話を続けるための質問だった。宏人はドキリとした。蒼のくっきりとした瞳に力がある。表情が真剣なものになると、また別の魅力が備わるようだった。

「まっすぐな子ですね」

「まっすぐ？」

「そう。自分が正しいと思ったことをためらいなく行動に移せる子」

そこまで言うと、蒼は微苦笑した。

「ただ、考え方がまだ幼くて……まあ、それもそれであの子らしくていいんですけどね」

蒼の瑛子評について考える時間は宏人にはなかった。そんなことより、と前置きしたあと、

「これってわたしと倉木くんのデートタイムですよね。どうしてエーコのことばかり話さなければいけないんですか」

と軽く責めるような口調で蒼が言ってきたからである。

「いや、でも、坂木さんが始めた話じゃ……」

という宏人の意見は空しくも無視されて、残り時間が少なくなって来たことからか、蒼はまるで街頭アンケートのように矢継ぎ早に質問を繰り出してきた。

第８４話：風雲のテーマパーク（前書き）

いつも読んでくださってる方、ありがとうございます。今回も前回の続きです。

第８４話：風雲のテーマパーク

蒼と話しているうちに多少気が晴れた宏人だったが、心の傷はなお深手である。瑛子に対してフェアでないことは分かっているが、彼女にはああいうことを言って欲しくなかったという気持ちがある。理想の女の子でいて欲しかったのだ。

集合場所に戻ると、宏人たちが最後の組だったようで、皆の姿がそろっているようだった。ふと瑛子が顔を向けてきて、にこりと微笑んできたが、宏人は目を逸らした。とっても微笑み返すような気力はなかった。そらした視線で何とはなしに志保を探すと、彼女は、冗談を言う雅紀の傍で控えめな笑みを見せていた。

ミッション・インコンプリートを知らせたときに、一体上官の少女がどういう反応を示すかと考えると、宏人の気持ちは暗く沈んだ。

「まあ、いいわ。わたし、マサキくんとメアド交換できたからさ」

などと上機嫌で言って許してくれるようなことがあるだろうか。志保がそういう公私の混同をするかというと、これはどうにも可能性が薄いような気がした。

――やるだけはやった。胸を張れよ、ヒロト。

宏人は自身を鼓舞して、しかし、志保から見られないように他の男子たちの影にそそくさと隠れた。

「みんな、集まったな。よーし、じゃあ次は、ドキドキお化け屋敷でどさくさ紛れでカップリング大会！」

おかしなイベントのスタートを告げる雅紀のハイテンションの声が青空に響いた。男女二人組でお化け屋敷に入り、一緒に恐怖を乗り越えることによって一体感を持った二人を、なんちゃってカップルにしようという下心満載のイベントである。

「カップルはくじで決めるけど、その前にトイレターイム」

数人が手洗いのために姿を消すと、宏人は自分の肩にがしっと腕が回されるのを感じた。

「暑苦しいから離せよ、マサキ」
抗議の声は無視されて、宏人は雅紀に肩を抱かれたまま、数歩歩かされた。すぐ隣にある顔が何かを訴えかけているようであるが、
「なんだよ?」
分からず、うさんくさそうに友人の顔を見返すと、雅紀の整った顔立ちがショックを受けて悲しげに歪んだ。
「ヒロト、オレは恩着せがましいことは言いたくない」
不審げな宏人に、雅紀はぼそりと言ったあと、自分の腕を宏人の首に回した。
「でも、オレの働きをちょっとくらい褒めてくれたっていいだろ」
軽く首を絞めるようにしてくる雅紀に、宏人はようやく用件が分かって、スピードデートの件の礼を小声で言った。
「それで? 二瓶と進展は?」
他のパーティを憚って小さく訊いてくる雅紀に、宏人は適当にうなずいた。進展はありすぎるほどあった。恋が始まり、そうして恋に付随する全ての甘やかなもの、切ないもの、ほろ苦いもの、そういうものをすっ飛ばし、恋は終わりを告げたのだった。
「協力した甲斐があったよ。良かったな、ヒロト」
自分のことのように喜んでくれる雅紀に、まさか本当のことも言えず、宏人は無理に片頬を持ち上げて笑みを見せた。
「お化け屋敷でも、お前とエーコちゃんを組にしてやるから任せろ」
インチキくじを作って友人の恋を応援しようとする雅紀の友情に、宏人は慌てた。瑛子とは気まずくなっているのである。暗闇の中、二人でなど歩けない。
「いや、でも、さすがにそれは露骨だろ」
宏人は翻意を促したが、雅紀は聞かなかった。
「言ってる場合じゃない。さっき聞こえてきたんだけど、和田がエーコちゃんに告白するらしい」
「和田?」
「趣味の悪い帽子」

すぐに分かった。ちらりと後ろを振り返ると、中折れの帽子で太陽光線をがっちりとガードしている少年が、瑛子にべったりひっついていた。雅紀は和田が、遊園地から出て解散したあとに瑛子に告白するんだと息巻いていた、という今となっては実にどうでもいい情報をさも深刻な面持ちで告げてきた。

ありのままの気持ちを雅紀に言うことができない宏人としては、

「それはヤバいな」

と焦ってみせようとしたが、いささかわざとらしくなったようだった。雅紀が眉を疑わしげに顰めるのが見えた。宏人は、くじで瑛子と一緒の組にしてもらえるよう、雅紀に頼んで疑いを払うと、一団の方に足を進めた。これ以上、雅紀と話をしているとボロを出しそうである。

――仕方ないか。

雅紀にバックアップを頼んだのは当の宏人自身なのである。無論、目的は恋の成就などではなかったわけだが、それは雅紀には関係ない。彼は、友人として誠意を尽くしてくれたわけなのだから、その誠意が実ることはないにせよ、まったく無にはできない。お化け屋敷に入って出るまでのその短時間くらい気づまりな思いをしたとしても、部活を休んでまで助力を惜しまなかった友人の気持ちを考えれば、何ほどのこともない。

心を決めた宏人が一団から少し離れて立っていると、笑声に混じって流れてくる会話が耳を捉えた。一組の男女の声である。

「藤沢って何でいんの？」

「ね、相変わらず暗いよね」

「またいじめられてんのかな」

「じゃない？　何かいかにもいじめてください的な顔してるじゃん」

「あれじゃ仕方ないよな」

声の一方はハット氏であり、もう一方は、幸運なことに瑛子ではなかった。瑛子も手洗いに立ったらしい。他の女子である。

「一年のときもあんなんだったよな」

「人って変わんないんだね」
「一生いじめられるんじゃないか？」
「かもね」
男女の一組だったのは幸いだった。もし女子同士の話だったら、こういうことはできなかっただろう。どくん、と一つ大きく心臓がなったのを合図にして、宏人は、中折れのハットをかぶった少年の方の肩をつかんでいた。ほとんど躊躇のない行動だった。突然体に触れられて、怪訝そうに振り向いた彼に、宏人は低い声で尋ねた。
「言えよ。『仕方ない』ってどういう意味だ？」
「は？」
「今言ったろ、藤沢がいじめられても仕方ないって」
和田は、宏人の気勢を受け流そうとするかのような軽い調子で、
「いや、だからさ、暗いししゃべらないし、ま、言っちゃうとブスだからさ。あれじゃ、いじめられるってことだよ」
答えた。くすくすという笑い声が和田の隣にいる少女から上がった。
宏人は、軽くハット君の体を突き飛ばした。突然殴るのはフェアじゃないような気がしたからである。ちょっとよろめいた和田は体勢を立て直すと、醜く顔を歪めた。
「お前、何すんだよっ！」
「うるせえっ！　お前ら、藤沢の気持ち考えたことあるのかよっ！　何でへらへら笑ってそんなことが言えるんだっ！」
宏人の怒鳴り声で、周囲の視線が集まった。
「おい、ヒロト、どうした？」
横から現れた雅紀の声を聞く余裕は宏人にはない。対して、ハット少年は、余裕を見せようと思っているのか、軽く両手を広げるような振りを作った。
「お前さあ、何マジになっちゃってんの？　まさか、あの藤沢のことが好きだとか言うんじゃないよな」
中折れハットが宙を舞った。帽子を弾き飛ばしてやった宏人は、

和田に先に殴らせてやった。頬に衝撃を感じた宏人だったが痛みはなかった。続けて殴ろうとしてくる拳に構わず相手の懐に入った宏人は、和田のベストに手を伸ばすとその胸元を引き絞った。額に衝撃が走る。宏人は自分の頭をハンマーにして和田の額に打ち込んでやった。痛みにうめいた和田の目を睨みつけて、

「訂正しろっ！　さっき言ったこと、訂正しろよっ！」

口から唾を飛ばす勢いで吠えた。

体が熱かった。全身が一色の感情に染め上げられているようで、相手の目に怯えた色が映るのを斟酌する余裕は、今の宏人にはなかった。

「訂正しろって言ってんだろっ！」

応えない顔に向かって振り上げた拳が目標を捉えることはなかった。自分の腕に誰かの腕が横からからまっている。邪魔をしたやつを苛立たしげに見て、

「離せ、マサキ！」

強い声で言ったが、雅紀は動じなかった。

「落ち着け、ヒロト」

その言葉に返って宏人はかっとなった。友人を侮辱されて落ち着いていられるほど人間はできていない。胸元を引き絞っている左手に力を込める。恐ろしげなものを見るような引きつった顔をしている和田をぐいっと引き寄せてもう一発頭突きを食らわせてやるつもりだったが、叶わなかった。

横からもう一人、男子が宏人の腕を取り、雅紀と彼に取り押さえられる格好になったからである。さすがに自分と同じくらいの体格の男子二人に押さえられると身動きが取れず、無理矢理に和田と距離を取らされてから、

「そこまでにしろ、ヒロト、いいな」

と雅紀の厳しい声を聞いて、深呼吸した。少し離れたところから、

「何なんだよ、あいつ。おかしいんじゃないのか」

和田の嘲るような声が上がった。宏人の目が見開かれて、その足

が一歩地を踏み出したが、横からぐっと腕を取られた。宏人は噛みしめた奥歯に怒りを集約するように努め、体から力を抜いた。雅紀は、宏人の腕を離すと、つかつかと和田のところまで歩いていった。

「それで？　和田。ヒロトに何したんだ、お前？」

雅紀の声が聞こえてきた。

「何もしてねえよ。ちょっと藤沢のことを話してたら、いきなりあいつが……」

「ちょっとのことで、ヒロトが手を出すわけねえだろっ！」

ドスの利いた雅紀の怒鳴り声はいつものにこやかな顔からは想像もつかないものだった。自分より大きな声を聞いて、返って宏人は落ち着きを取り戻した。志保が、松本のことをクズと呼んでいたが、その気持ちが分かる気がした。何を言っても無駄な人間というのがいて、和田もその類の人間なのだろう。殴ればどうにかなるようなものでもない。

園内を流れる愉快げなＢＧＭも、宏人たちのいる一角の白けた雰囲気を払うことはできなかった。今度は雅紀と和田の争いにシフトしそうな状況を皆が固唾を飲んで見守っている中で、宏人はくるりと背を向けると、休憩エリアを後にした。

「お、おい、ヒロト？」

追いかけてきた雅紀に、宏人は帰る旨を伝えた。骨折ってもらった今日の礼を言いたかったが、そんな気分ではなかった。

「わりい、マサキ」

ぼそりとそれだけ言うと、宏人は遊園地出入り口ゲートへ向かって足を進めた。歩いているうちに和田への怒りは徐々にさめて、代わりに悲しみが胸を浸した。もう少し、みんなが優しくなればいいだけの話なのに、どうしてそれができないのだろうか。何も大したことでなくても良い。ただ単に、志保がいるということを尊重して認めてやるだけで良い。協調性があろうがなかろうが人をその人として認めてやる。それはそれほど困難なことだろうか。

憂いに沈む宏人が、駆け足の音を聞いたのは、園の外に出たとこ

ろだった。がしっと腕がつかまれて、横を見ると、くせっけの頭を下げて、はあはあと息を喘がせる少女の姿があった。

第８５話：敗軍の将は兵を語らず（前書き）

今回でやっと宏人＆志保の話がいったん終わります。と言っても、すぐに再登場します。それにしても、長く書きすぎました。今回の彼らのお話は、当初は四話で終わるつもりが、終わらず、六話になってしまいました。もし楽しんで頂けていたら嬉しいです。

第８５話：敗軍の将は兵を語らず

「そっちから誘ったくせに、まさか置いてきぼりにして、自分だけ帰るとはね」

とげとげしい目を向けてきた志保に、宏人は素直に謝った。

志保は拍子抜けしたような顔をしてから、どうして突然帰ろうとしたのか訊いてきた。

「言いたくない」

「ハット君とトラブったみたいだってのは大村くんから聞いたけど、二瓶さんがらみ？」

「言いたくない」

「子どもじゃないなんだからさ。何があったのか言いなさいよ」

かたくなに首を横に振る宏人を、しばらく志保は睨むようにしていたが、やがて、どうしようもないなという振りでため息をつくと歩き出した。宏人の横を通り過ぎる彼女の行く先にバス停があって、そこに停まっているバスは最寄りの駅へと通じている。宏人は志保の背を追って、そのままバスの中に入り、彼女が座った席の隣に腰を下ろした。

「藤沢も帰るのか？」

確認のため宏人が訊くと、

「当たり前でしょ」

苛立たしい声で言って、それきり志保は無言だった。おそらく自分がトイレに行っている間にどんな喜劇が演じられていたのか、それを話すよう促す沈黙だったのだろうが、宏人は耐えた。和田との喧嘩の原因については間違っても自分の口から出したい内容ではなかった。

バスが駅に着いて、電車を待って乗り込み、ホームタウンへ戻るまでの間もなお沈黙は続いた。志保と話さない分、自身とコミュニケーションを取った宏人は、徐々に冷静さを取り戻してきた。そっ

ぽを向く志保の隣で、電車に揺られながら、先の和田への凶行は彼だけのせいではないような気がした。

先々週の金曜日に志保が虐げられる現場を見たときから、志保の味方をしてクラスに無視され始めたこと、今日の瑛子の冷徹な言葉など。溜まりに溜まったストレスが、今日のハット氏の一言をきっかけにして噴き出したのではないかと、宏人は自己分析した。でなければ、ただのキレやすい子になってしまう。ただ、無論、

――和田が言ったことは最低だ。

という思いはあり、仮に和田の一言で一気に沸騰したのだとしても、今日の行動には何らの後悔もなかった。

「それで？　そろそろ話す気になった？」

いつもの町に運んでくれた電車を降り、プラットフォームを通り、改札を抜けた辺りで、志保が不意を打ったが、宏人はすぐさま反応した。

「いや、そんな気はない」

志保は、構内から外に出た所で立ち止まると、

「今日はありがとう、倉木くん。グループデート、とっても楽しかったわ」

と声だけを明るくして、瞳に冷えたものを宿すという器用な芸当をした。

「怒ってる……よな？」

「怒ってる？　わたしが？」

志保はふん、と鼻を鳴らした。

「違うな。メチャメチャ怒ってる。あなたの携帯電話を二つにへし折ってやりたい気分だわ。わたしが裕福な家の子に見えるの？　何にも乗ってないのに、遊園地の一日フリーパスを買わされてさ。お金を浪費させられ、時間も使わされ、あげく誘ったヤツは勝手に帰ろうとするし」

「悪かったよ」

「悪かったの？」

「……いや、オレは悪くない」
「悪くないのに、事情を話したくない。矛盾してるでしょ」
宏人は志保から視線を逸らしたが、
「こっち向きなさい」
滑らかな冷たい手で両頬を挟まれて無理矢理、志保の方を向かされた。そこでようやく和田に殴られたところに痛みを覚えてうめき声で抗議した宏人だったが、
「痛くない」
というぴしゃりとした一言で片づけられた。
しばらくの間、まるで別れを惜しむ恋人同士のような風情で見つめあっている二人に、ちらちらと好奇の視線が注がれた。
「二瓶さんの件は？」
頬をロックされている宏人の声は少し不明瞭になったが、瑛子獲得の失敗は伝わったようだった。
「どうして失敗したのか、事の顛末を話して」
宏人は唇を真一文字に引き結ぶようにした。志保の瞳に怒色が現れるのが見えた。母の叱責を受ける子どものような恐れを抱いた宏人だったが、志保は怒りを抑えるようにその目を瞑ると、少しして手を離した。
「まあいいわ。勝手に想像しとくから」
そう言うと、すたすたと近くにあるバス停へと向かっていった。いくつかあるバス停には、昼の日を受けてそれぞれのバスの車体が輝いている。ここから発車されるバスに選んで乗れば、街のあらゆる場所へと行くことができる。
「どっか行くのか？」
付いて来いという意味だと解釈した宏人だったが、
「そんな殺伐とした顔で行ける所じゃないわ」
それは間違いだった。隣から声をかける宏人に、志保は一瞥もくれず、付いて来ないでね、と冷たい声だけ投げた。
彼女の怒りを甘んじて受けつつ、

「どこ行くんだよ?」
訊いてみると、
「『計画』に関係のある所」
やはり温かみのない声音。『二組支配計画』に関係があるということは、すなわち宏人にも関係があるということになる。改めてどこに行くのか訊いてみたが、言っても仕方ないでしょ、と取り付く島もない答えが返ってきた。宏人は志保の進行を遮るように彼女の前に立った。
「何で仕方ないんだよ?」
「これはわたしの仕事だから」
「お前の仕事?」
「そうよ。あなたに二瓶さんのことを頼んだのは、わたしはわたしでやることがあったから。本当は今日は朝から取りかかるつもりだったんだけど」
宏人は志保の嫌味を受け流した。意外であった。今まで志保のことは、気楽に部下に死を命じる酷薄な指揮官だと思っていたのだが、自ら戦う兵士だとは。何をやるつもりなのか興味を持った宏人だったが、
「今度ね、忙しいから。じゃ、また明日ね、倉木くん。まっすぐ帰んのよ、ちゃあんとお家に帰るまでが遠足だからね」
馬鹿にするような口調で言って、宏人の横をすり抜けようとした。
「お前、人のこと言えんのかよ?」
数歩の距離を置いて志保が歩みを止めた。
「オレには話せ話せって言っておきながら、自分は話さないって不公平だろ。それとも、オレのこと信用してないのか?」
ちょっと非難するような口調になった声を受けた志保の背が、くるりと回転した。かと思うと、一足で間を詰めた志保と宏人は向かい合っていた。すう、と息を吸い込むのが見えて、
「バカ!」
近くを歩く若者のカップルが思わずびくりと身を震わせるほど大

きな声が志保から発せられた。彼女は一目、強い目で宏人を睨むと、ロングスカートをはためかせながらバス停の一つに向かって走り出した。呆気にとられた宏人が追いかけた方がいいのかどうか考え始めたときには、既に志保を乗せたバスの扉が閉まり、ゆっくりとバスが動き始めていた。

雑踏の中、ひとり駅前広場に取り残された宏人は、カノジョを怒らせて途方に暮れる少年に向かってかけられる同情の視線の中、帰路を取り始めた。

家に辿りつくまでの間、志保のセリフの意味を考えてみたが、何を詰られたのかさっぱり分からなかった。

――だからこその、「バカ」なのか？

自宅近くの見慣れた風景を認めると、安心感からだろう、どっと疲れが襲ってきた。労多くして、得るもの少なく、いや得るものどころか、失ったものさえある日だった。瑛子への恋心、雅紀からの信頼。そういう価値のあるものを失って、クラスメートには罵倒され、まったくもって救われない一日である。誰かこの哀れな少年に慈悲を与えてくれる者はいないのだろうか。

そう考えた宏人が、自分の家の隣家に足を運んだのは実に自然なことだった。インターホンを鳴らすと、張りのある声がして玄関が開き、ジーンズ姿の細身の女性が姿を現した。

「賢兄います？」

「いるよ。上がって、ヒロトくん」

「あの、小母さん。もしかして姉貴は一緒ですか？」

賢の母は、傷心の宏人をこれ以上落胆させない答えを返してくれた。

「ヒナちゃんは来てないけど、他のお友達が来てるわ。賢を呼んでくるから、ちょっと待ってて」

「あ、ならいいです。賢兄の迷惑になるから」

全くタイミングが悪い。宏人が踵を返そうとすると、いいから待ってなさい、と温かいが有無を言わせぬ調子の声がかけられた。

「賢に相談があるんでしょ。ひどい顔してるよ、ヒロトくん」
幼馴染の母であり、宏人も小さい頃から面倒を見てもらっていて、ほとんど第二の母と言っても差支えないような人である。宏人はそれ以上抵抗しなかった。賢の母がリビングに消えて、代わりに賢が現れるまでの間に、傍の棚にあった鏡で自分の顔をチェックした。どうやら、「ひどい顔」というのは別に殴られた所が腫れて来た、ということではなかったようである。頬に異常はなかった。陰鬱な心の色が表情に出ているという意味だろう。
「よ、ヒロト」
短パンと無地のTシャツ姿の賢を見て、宏人は苦笑した。和田や他の煌びやかな一団を思いだしたのである。彼らが束になってかかっても、賢の爽やかな魅力には叶うまい。
「どうした、上がれよ」
会うだけで救われるような人である。歓迎の色しかない賢の声に、宏人は心底からほっとするものを覚えた。
「誰か来てるんだろ、賢兄？」
「ああ」
「じゃあ、邪魔になるからいいよ」
「泊まってけばいいだろ」
賢はこともなげに言った。誰が来ていたとしても夕方には帰るからその後でゆっくり話を聞く、という言外の意図を読み取った宏人は、その思いやりに危うく落涙する所だった。こういう時に賢との人としての格の違いを思い知らされる。賢が自分にしてくれるようなことを、いつか自分が人にしてやりたいというのが、宏人の密かな願いだった。
「それにさ、丁度いいから、ヒロトに紹介したいんだよ」
そう言った賢の声はいつもよりも更に明るいもので、導かれたリビングに女の子でも座っていれば秀逸な話になったが、さすがにそんなことは無かった。
「加藤怜。オレの……親友でいいよな？　レイ？」

賢の紹介の声に、ソファから、好きにしろ、と平板な声で答えた彼は、律儀に立ち上がると、名を告げてから宏人に向かって軽く頭を下げた。短めにカットしたさっぱりとした髪の少年には落ち着きがあり、うわついたものを全く感じなかった。

「こっちは日向の弟で宏人。オレにとっても弟みたいなもんだよ」

宏人も、倉木宏人です、と自己紹介したのち、ぎこちなく頭を下げた。賢の友人であれば三年生のはずであり、上級生に頭を下げさせて自分がしないなどということはできなかった。下級生だと認識すれば、もしかしたら緩みが見えるかと思ったが、加藤少年の態度は変わらなかった。さすが、賢が嬉しそうに紹介するだけのことはある。

――待てよ……加藤怜、だって？

どこかで聞いたことがある名前だった。ソファに座って、賢の母が淹れてくれた香り高いハーブティを飲みながら、宏人は思い出そうとした。思い出そうとして、今朝、蒼の話の中に出て来た人物であることに思い当たり、

「加藤先輩って、もしかして文化研究部ですか？」

一応確認してみて、肯定のうなずきを得ると、宏人は口調を申し訳なさそうなものにした。

「いつも姉がご迷惑を」

足の短いテーブルを挟んで相対する位置にいた怜は、軽く驚きの色を表して、宏人の隣を見た。宏人の隣に座っていた賢は、ヒロトはいいヤツなんだよ、と答えた。

「似てるところもあるけど、ヒナタとは大分違う」

怜は納得したように小さくうなずくと、特に迷惑をかけられたことはない、と宏人に気を遣ったあと、

「ただ、何ていうかな、ときどき、その……」

言い淀むようにしたのを、

「『イライラする』、でいいですか？　先輩？」

継いでやる宏人。怜は、わざとらしい咳払いをしてから、

「言ったのはオレじゃない。君だ」
慎重な態度で責任を負わないようにした。
「男の子三人でヒナちゃんの悪口言うなら、小母さんはヒナちゃんの味方をするわよ」
甘酸っぱい香りと共に現れた賢の母は、テーブルに置いた焼きたてのアップルパイを切り分け始めた。
「何と言っても、未来の義理の娘ですからね～」
それぞれのティカップにハーブティのお代りを注ぎながら楽しげに続ける。賢が、呆れたような声で、
「そういう冗談やめてくれよ、母さん」
抗議の声を上げたが、母からは大真面目の発言である旨、澄ました顔で返された。
「これはもう決まっていることです」
「そんなこと言ったって、日向には誰か好きなやつがいるらしいしさ」
「そんな人はいません」
「いや、いるんだって、なあ、ヒロト？」
賢の母の言う通りである。いるはずがない。姉は一目賢と目を合わせた生後三カ月のその日から――その瞬間の記憶があると姉は言い張っている――賢のことを想い続けているのである。とはいえ、姉の気持ちの代弁をすることは、人生の先輩である賢の母ならば格別、年下の宏人には憚(はばか)られ、曖昧に、さあ、と言を左右にするほか無かった。
「なあ、レイ？　前にそんなこと言ってたよな、ヒナタが」
宏人に倣うように曖昧に小首を傾げた怜は、アップルパイに舌づつみを打って、その話題を避けた。できるだけ姉の話題に関わることを避けようとする彼の態度に、宏人は深い共感を覚えた。
歓談しているうちに、宏人の冷え切った心は徐々に温まって来た。仮に学校で北風が吹いても、逃げ込める場所が宏人にはある。
――藤沢には……？

志保にはそういう所はあるのだろうか。そもそも、「逃げ込む」という考え自体が無いかも知れない。「志保の気持ちを考えろ」と言って和田に頭突きを食らわせてやった宏人だったが、よくよく考えてみれば、彼女の気持ちは宏人には分からない。

「どうした、ヒロト？」

急に押し黙ってしまった宏人の肩が軽く叩かれた。

「なあ、賢兄。相手の気持ちが分からない時って、その相手に対してどういう行動を取ればいいと思う？」

いきなりの質問だったが、賢が目を丸くしたのは一瞬だけのことだった。

「そんなの決まってるだろ」

そう答えて、しかしそれ以上は続けず、対面のソファの少年に発言を促した。つられて目を向けた宏人に、かけられた言葉は、

「誠心……つまり、真心で相手に当たる他ない」

どこまでも穏やかで心安らぐ調子だったが、抗いがたい威を感じるものだった。

第８６話：ガールズトークは深夜に（前書き）

いつもありがとうございます。
今回は、有り難くもリクエストを頂いた、環視点のお話です。お楽しみください。

第８６話：ガールズトークは深夜に

「何かあったんでしょ、タマちゃん」
すぐ隣から流れて来た声に、環は軽く目を瞑った。電気を点けるにはまだもう少し早い時刻、自宅の自室である。八畳の室内は華美や装飾とは無縁であって、机と本棚が一つずつある他は、フローリングになった床の中央に円状のラグが敷かれ、足の短い小さなテーブルが置かれてあるくらいのものだった。衣服や寝具などは全てクローゼットに収納されている。
「女の子の部屋じゃないね、ここは」
気の置けない友人からはそのような褒詞を賜るのが常だった。
目を開いた環は、軽く顔を動かした。視線の先に少女の姿。同い年のはずなのに、自分よりもずっと落ちついた雰囲気のある彼女は、穏やかな目元に悪戯っぽい光を煌めかせていた。
環は座っていたラグの上で身じろぎした。
「スズちゃん、お願いだから、『タマちゃんは悩み事があると髪をかきあげる癖があるのよ』とか何とか続けてくれないかな？」
「そんな都合のいい癖は無いみたいだよ」
「わたし、いつもと違う素振りをしてた？」
「『誰かわたしの悲しみに気がついて』的な？　タマちゃんがそんなに可愛い女の子だったら、もっともっとモテると思うな。ただ、わたしは引くけどね」
そう言って軽やかな微笑みを見せると、鈴音は、
「この頃ね、前よりもずうっと物事が良く見えるようになったの。タマちゃんのお陰だな」
と続けた。読心術を伝授した覚えなどない環は、何のことを言われているのか分からない振りを作った。鈴音はずいっと身を寄せてくると、顔を覗き込んで、何を悩んでいるのか、と改めて尋ねて来た。

どうやら悩んでいるということそれ自体は分かっても、悩みの中身までは分からないようである。ほっと息をついた環だったが、一瞬後、

「想像はつくよ」

からかいを含んだ声を聞いて、背筋が張った。環から身を放して、ラグに後ろ手をついた鈴音がにやにやしている。

「ねえ、スズちゃん。一つ諺を教えてあげる。『親しき仲にも礼儀あり』。」

淑女らしい婉曲さを見せた環だったが、どうやら遠まわしすぎて通じなかったようである。

「加藤くんのことで悩んでるんでしょ？」

まるで断定するような鈴音の口調に、環は抵抗してみせた。四六時中ボーイフレンドのことばかり考えてると思われてはたまらない。環は、悩みは色々とあって、カレシに関することはそのうちの一つに過ぎないと、答えた。

「例えば？」

「ん？」

「タマちゃんの他の悩みよ。そんなものがあればの話だけど」

鈴音の挑戦を、環は受けて立った。

「たくさんあるよ。今読んでる推理小説の犯人は誰か、とか。明日は晴れるのか、とか。いつ頃、髪を切りに行こうかなとか。ね？」

しかし、それらの深刻極まりない問題は、鈴音の気を全く引かなかったようである。それは大変だね、という一言しか彼女からは返ってこなかった。環は、友達がいのない少女に憤然とした振りを見せると、おもむろに立ち上がった。

「そろそろ下に行きましょう。お夕飯の時間だから」

部屋を出て階下に降りるように促すと、鈴音は、参考書が開かれてあるテーブルによっと手を置いて立ち上がった。ついさっきまで次の定期試験の対策をしていたのである。素直に環の指示に従った鈴音だったが、後で聞かせてよ、と念押しすることを忘れなかった。

「深夜のガールズトーク。楽しみだなあ」
上機嫌でそう言った彼女は今日、環の家に泊まっていくことになっている。小学五年生の時に友情を確認してから、お互いの家にお泊りすることが定期的にあったが、今回は久しぶりだった。不登校期間に交遊を制限していた為である。
花弁のような芸術的なハーフアップを後ろから見ながら、環は、鈴音が不登校になる前とは、ほとんど別人のようになっていることを再確認した。以前はあった繊細さがなりを潜めて、しなやかな自信に総身が満ちているような雰囲気がある。それでいて、それを誇示するようなこともなく慎ましやか。
「もしそう見えるなら、それはタマちゃんがそうしてくれたんだよ」
以前、再会を果たしたあとのことだったが、環が鈴音について感じたことを正直に話すと、にっこりと笑いながらそう返された。
「タマちゃんがわたしを信じてくれたから」
――それは違う。
環には、人ひとりを変えることができる、などというおこがましい考えは無い。環の行為によって、結果的に変わったように見えたとしても、それは鈴音にその行為を受け止めるだけの覚悟と力があったからである。
「同じことを加藤くんも言ってたわ」
これには思わず環も苦笑するしかなかった。全然共通点が無いと思っていたカレシとの間にも似ている所が少なくとも一つはあったわけだ。そう鈴音に言うと、彼女は訳知り顔で微笑んだが、何も言い返しては来なかった。
「スズちゃん、一緒にお風呂入ろーよ」
リビングに入ると、鈴音は末の妹の旭に捕まった。抱きついてくる六歳の少女の頭を撫でてうなずくと、鈴音はリビングの隅に向かって明るい声を投げた。
「マドカちゃんも一緒に入ろ」
パソコンデスクについていた円は、顔を向けてから、結構です、

と静かな声を出した。
「絶対にマドカちゃんと一緒に入る」
鈴音はきっぱりと言い切ると、旭の手を引いて、つかつかつかと円の元まで歩いていき、彼女の腕に自分のもう一方の腕をからませた。
「わ、分かりましたから。やめてください」
強引に引っ張ろうとする鈴音に、円が慌てて観念したように言った。
「どのくらい成長したか、おねーさんに見せてね？　円ちゃん？」
嫌がる素振りを見せる円だったが、それは本心からのものではなく、顔は綻んでいた。円が笑みを見せてくれたのはいつまでのことだったか、と思わず考えた環は、鈴音の方が自分よりよほど良い姉になるだろう、と仲良く浴室へ向かう三人を見ながら思った。
キッチンにいた母の隣に環は立つと、夕食の準備を手伝い始めた。
「トマト切ってくれる？」
ちょっと湾曲した形になっているトマトスライス用のナイフで、環は言われた通り、トマトの輪切りを作り始めた。
「そう言えば、こうやって環と一緒にお台所に立つのって久しぶりね」
母が温かな声を出した。この頃夕飯の準備は主に円がしており、それを母がサポートする格好になっていて、環の出る幕がないのである。
「本当にそれだけかなあ？」
含み笑いをしながら母が突っ込んできたが、環は作業に集中している振りを見せた。もくもくとトマトをスライスし続ける。大して時間がかからないうちに、輪切りトマトの山ができた。
「じゃあ、次は――」
指示を出される前に、環はスライストマトをオリーブオイルで焼き始めた。以前に作ったことがあるし、簡単な料理なので手順は覚えている。焼いたトマトを大皿に敷き詰めたあと、今度は玉ねぎの

みじん切りを始める。それを挽き肉と共に炒めている所で、
「加藤くんとの旅行の件はどうするの？」
母が唐突なことを言いだした。香ばしい匂いが漂う中で、フライパンを持つ環の手に力がこもった。環は、あちらから招待を取り下げられたのだからどうにもしようがありません、と自分に言い聞かせるような声を出した。
「本当にそれでいいの？」
「もとはと言えばわたしの責任ですから。率直にお父さんにお願いして許可を得れば良かったのに、レイくんを試すようなことをしたから罰が当たったんです」
「それだけ、彼のことを信じてたんでしょ？」
『信じる』という言葉は適切ではない。端的に、『分かっていた』だけである。父がどういう風に彼を試しても、怜は必ずそれを切り抜けるだろうということを、肌が感じていただけだ。そうして、確かにその通りになったのであるが、その先にあったものは全く想定外の事態だった。昨日のことである。
招待を取り下げる、と言われたときは一瞬耳を疑った。環の目算通り、事はうまくいった。怜は父に気に入られ……いや一目置かれたという方が正しいかもしれないが、とにもかくにも父と環との間にあった密約——父が怜の人となりを測って信頼に足るようだったら旅行を許す——は果たされることになった。その矢先のことだったのである。これで心おきなく怜と小旅行に行けると思っていた所に、まさかの招待取り下げ。全く、人生はままならない。
環はフライパンに塩、こしょう、ウスターソース、バジルを加えて更に炒め続けた。
「タマキ、もしあなたが望むならお母さんから——」
「お父さんをお呼びしてきます」
少し強い声で母の言葉を遮ると、環は火をとめた。大皿に盛っておいたスライストマトたちの上に、玉ねぎとひき肉のソースをかけて、一品完成させると、キッチンを離れた。母が何を言おうとした

か、聞かずとも想像はつく。普段通りにしていたつもりだったが、どうやら母の目はごまかせなかったようだ。怜から旅行の誘いを撤回されたことでショックを受けていることが伝わってしまったようである。母は強し。

その母が可愛い娘の為にしてくれようとすることを素直に受けるには、しかし、環は子どもではなかったと言える。何事かを母に手伝ってもらうことがあるにしろ、それは本当に自分の手に負えないことに限りたい。今回の件は自分に責任があることであって、引き起こされた結果については自身がその責めを負うべきである。

――あるいは……。

脳裏をかすめた想いによって、環は存外に自分が諦めの悪い人間だということに気がついた。新しい自分を垣間見て思わず笑みをこぼしそうなところ、料理の香りに引かれたのか、書斎を出た父がちょうど廊下を歩いてくるのが見えた。

第８６話：ガールズトークは深夜に（後書き）

次回に続きます。

第87話：リベンジの一手（前書き）

今回も環視点の話になります。
お楽しみください。

第87話：リベンジの一手

父をダイニングに誘ってから、テーブルに食器を配していると、ほどなくして、カラスの行水を済ませた旭がパジャマ姿で現れた。
「スズちゃんに頭洗ってもらったあ」
湯上りで頬を紅潮させながら嬉しそうな声を出す旭をリビングのソファに座らせると、環はタオルを使って、背の中ほどまでになって来た妹の豊かな黒髪を乾かし始めた。旭はくすぐったそうな様子で頭を振った。
「もういいよ、お姉ちゃん」
「ダメ。もう少しね」
丁寧にタオルドライしてやった後に、環はドライヤーを持ってくるように旭に告げた。
「え～、自然に乾くからいいよ」
「アサちゃん。ちゃんとドライヤーしないと、髪が傷んじゃうのよ。折角綺麗な髪なんだから」
「でも、めんどくさい～」
「……そう言えば、レイくんが言ってたなあ。アサちゃんの髪はぬばたまの髪だって」
環はカレシに感謝した。彼の名は、旭の行儀を良くするマジック・ワードになっているのである。あっさりと魔法にかけられた旭は、闇色の瞳に星を浮かべて姉を見つめると、『ぬばたま』とは一体どんな美しい形容詞なのか聞きたがった。
「あら、お母さんに習ったでしょ？」
「分かんない」
「『ぬばたま』っていうのはね、黒い真珠のことよ。黒い真珠のように綺麗な黒髪のことを、ぬばたまの髪っていうの」
ぬばたまは、他にも、烏の羽のことを指すという説もあるが、それを旭に紹介するのはやめておいた。烏には悪いが、ガーガー鳴き

ながらゴミ捨て場に餌を求める鳥に例えられて喜ぶ女の子がいるとは思えなかったからだ。

「タマキ、お前を預けてもいいとは言ったが、アサヒのことまでは許してないぞ」

浴室へ続く洗面所へダッシュしていく旭を微笑みながら見送っていると、ダイニングテーブルについていた父が冗談半分に声をかけてきた。

「長女のみならず三女も奪う気なら、もう一度挨拶に来るように彼に言いなさい」

どうやら半分は本気のようである。今度は容赦しないがな、と不気味な笑みを見せる父に、旭と怜は相思相愛だから諦めた方がよろしいですよ、と言上する環。ショックに頭を抱える父を、

「まだ円がいるじゃありませんか」

慰めようとしてみたが、一人残っていればいいという問題じゃない、と一喝されて、無思慮を詫びなければならない破目になった。

「……で、その、何だ……例の件はどうするつもりなんだ？」

こちらを見ながらも微妙に視線を逸らすようにする父に、環は小首を傾げた。何のことを言われているのか分からず粛粛と父の言葉を待っていると、彼との旅行の件だ、とちょっと曲げた口からぶっきらぼうな声が続いた。

環は唖然として言葉も無かった。母にはまだしも父にまで内心を読まれていたとは。昨日怜が帰ったときから余程ひどい顔をしていたのだろうか。悲しみに打ちひしがれ、後悔に苛まれた可憐な少女の顔……。

仮にそうだとしたら新たな自分を発見する所だったが、どうやらそういうわけではなかったらしい。というのも、

「レイくんの言う通りにするつもりです」

と驚きから醒めた環が答えると、

「タマキ。男の言葉に諾々と従うような女の子でどーする？　女は度胸だぞ」

父が意外なことを言ってきたからである。てっきり小旅行の計画が取りやめになり喜んでいるとばかり思っていた父が、まるで計画の後押しをするようなことを言いだしたのだから理屈に合わない。

つじつまを合わせる答えを探した環だったが、疑問はすぐに氷解した。ドライヤーを持って帰って来た旭を迎えながら環は、自分がいかに可愛げのない子であるかということを確認した。おそらく、母にしろ父にしろ、環に甘えてもらいたいのである。執拗に旅行の件を持ち出しているのは、普段おねだりをしない長女の希望を叶えてやることによって親であることを実感したいのではないか、と環は推測した。

旭の前で怜の話をしたくない父はそのまま口を閉ざしたが、その後を引き継いだのが鈴音だった。

「それで？　何を悩んでんの、タマちゃん？」

夕食を取り終えて、環がひとり入浴を済ませて部屋に帰ると、勝手知ったる友人の部屋に二組の布団を敷いて、その一つにごろんと横に寝転がっていた少女が、瞳を輝かせていた。

「馬鹿にしない？」

「タマちゃん。わたしたちもうかれこれ四年の付き合いよ。そんなことするわけないじゃない」

環は鈴音の隣に腰を下ろすと、彼女の力強い、いささか強すぎる調子の言葉に促されるようにして話しだした。怜から母方の実家に招待された件から、父と取引したこと、昨日のプロポーズまがいの場面まで、包み隠さず話すと、初めは神妙な面持ちを保っていた鈴音だったが、怜の『絶交宣言』に至るとふいっと顔を背け、哀れなヒロインが招待を撤回されるフィナーレになると小刻みに肩を震わせているのが見えた。

環は相談相手を誤ったことを認めた。

「ごめん、ごめん。だってさ、いかにも加藤くんらしくて。最後のくだり、もう一回話してくれない？」

「スズちゃん」

環は眉をひそめてみせて、アンコールに応える気はないことを示した。鈴音はにっこりとした綺麗な笑みを見せたままで、タマちゃんも女の子だったんだね、などと失礼なことを言いだした。
「わたしは生まれてからこのかたずっと女の子です」
「それで？」
これからどうするつもりなのか、と訊いてくる鈴音に、環は分からない顔を作った。どうにもしようがないから人は悩むのである。
「タマちゃんは女の子かもしれないけど、少なくとも可愛い女の子じゃないわ。何か策があるんでしょ？」
「人を計算高い女みたいに」
「高いでしょ。まあ、その計算が加藤くんには通じなかったわけだけど、次の一手でリベンジしましょうよ」
「男の子と付き合うのってもうちょっとロマンチックなものだと思ってたわ」
「じゃあ、計算はやめて、乙女チックに行く？」
天井にある円状の蛍光灯の光を受けて輝く鈴音の瞳に、環は胡乱な目を向けた。いや、そう疑ったものでもないだろう。何と言っても彼女とは水魚の交わり――水と魚との切り離せない関係のような非常に親密な交友――を結んだ仲なのである。きっと素晴らしいアドバイスをしてくれることだろう。そう思ってみた環だったが、今からでもカレシに旅行に連れてって欲しいと素直に言え、と言われた時には、彼女の期待は流れに浮かぶ泡沫（うたかた）となって消えた。
「それができれば苦労は無いよ、スズちゃん」
今回の件に関しては、理は怜の方にあるのである。理を情で押すのは環の流儀ではないし、それに、
「レイくんに嫌われるのが怖いの」
ということが一番重要なことだった。子どもの我がままのようなことを言ったら、怜が失望するかもしれない。それが恐ろしい。真情を吐露するような口調でそう付け足してみたが、返って来たのは切ない乙女心への同情などではなく、

「やめて、タマちゃん」
非難の声だった。
「わたしにそういうのは必要ないよ。加藤くんに嫌われるのが怖い？　違うでしょ。そうじゃなくて、加藤くんに『嫌われない』ことが怖いんでしょ？」
環は心中で鈴音を仰ぎ見た。ついこの間までは同じ位置にいたはずの彼女は、今では遥か高みにいるかのようだった。
鈴音が言ったことは的を射ていた。もし環が感情のままに行動しても、おそらく怜は受け入れてくれるだろう。連れてってくれと言えば、連れてってくれるかもしれない。感情を見せることによって、その見せた相手を疎んじたり遠ざけたりするような人ではない。しかし、だからこそ、彼と付き合うには巨大な自制の力が必要なのだった。その胸に飛び込むのは簡単だが、それをすれば、環は彼にとって何らの価値もない人間になるだろう。真に怖いのはそれだった。
「本当に加藤くんのこと好きなんだね～、タマちゃんは」
鈴音はしみじみとした声でからかってきた。
正直に言えば、怜のことを好きかどうかはよく分からなかった。ただ、彼に向けるこの想いと同種のものをかつて感じたことが無いことだけは確実に言える。
「レイくんといると爽やかな気持ちになって、まるで自分自身まで清々とした存在であるように思えるんだ」
「タマちゃんが言うと、ただののろけも詩的に聞こえるから不思議だわ」
「それはレイくんが美しいからでしょう。美しいものを醜く語ることはできないから」
鈴音は身もだえする代わりに、布団の上でその細い体を麺棒のごとくころころと回転させた。
「で？　乙女で行かないならどうするの？」
少し離れたところから気楽な声を出す友人に向かって、環はちょっと首を傾けた。

「何をすべきかは決まってるんでしょ、タマちゃんのことだからさ」
「わたしは楫をなくした船頭だよ、スズちゃん」
「楫がなくたって、どうせその船にはモーターか何かついてるんでしょ。迷ってる振りはやめて、なすべきをなし、したいことをしなさい」
鈴音の励ましに、先ほどふと思いついた曖昧模糊としたものがむくむくと形を取り始めるのを感じた。一つ手を思いついた環だったが、それをすればおそらく――
「レイくん、怒るだろうな」
ということが予想できた。最善の手は、先ほど夕食の準備をしていたときに、母が言いかけたことである。あのとき、母が何を言いかけたのかは大体想像がつく。しかし、それはいかにも野暮ったい手であって、到底採用できない。
「ああ、どうすればいいのかしら」
「そのセリフ、そんな嬉しそうな顔で言うセリフじゃないと思うけど」
内心が知らず顔に表れていたらしい。鈴音に注意されて、環は慌てた振りで綻んでいた顔を繕うようにした。
「スズちゃんはどう思う?」
「たまには怒らせてみたら?」
環は待ってましたとばかりに、親友のスズちゃんがそう言うなら、と素早く迎合すると、天を仰ぐ鈴音を尻目にして、携帯電話を手に取った。そうして、先ごろ友達になったばかりの少女にメールを一通打ち始めた。

第８８話：唐突に破られるもの

活気という言葉が最も似合わない部――

少なくとも二年間、そのような名誉な称号を戴いていたであろう我らが文化研究部だったが、ここに来てその地位を他の部活動に譲り渡すことになりそうだと、怜は悔しい気持ちでいっぱいだった。

そもそも怜が文化研究部に入ったのは他でもない。この部が、『活気』という言葉と最も無縁だったからである。入部当初は三年生の部長一人しかおらず、彼女は特に文化の研究に熱心ではなかったし、また同時期に入部した田辺杏子（アンコ）にしても、その頃は他を巻き込まない慎み深さを備えていたので、怜は心静かに、読書なぞして過ごすことができたのだった。

その後、一年経って、坂木蒼（アオイ）が入部したが、彼女は、『部活動時間は自由時間である』という良識の持ち主だったので、問題はなかった。

近頃入部した川名円（マドカ）、橋田鈴音（スズネ）の両名にしても、どうやら大和撫子（やまとなでしこ）の淑徳を持ち合わせているようで、ガンガン前に出ていくような暑苦しいことはしないだけの分別があり。

平穏であった。その平和がいつまでも続くものだと思っていた。

しかし、変化はいつでも唐突に現れるものである。

四人。

それが、校内きってのマイナー部であり、家では妹、クラスでは同級生、そうして残りの時間はカノジョに虐げられている少年の休息の泉に新たに足を浸した部員の数だった。

先週の話である。

まず、月曜日に部長の古なじみらしい少女が入部した。水野更紗。

以前、部室に何度か来ているので顔ぐらいは知っていた。

「超古代文明とか恐竜とかを研究したいと思ってますっ！」

夢見るように瞳を輝かせた彼女の見当外れの抱負に、しかし、突

っ込もうともしないのが、文化研究部のメンバーの証である。ぱちぱちぱち、と拍手が上がる中で、怜は、どうしてわざわざこんな時期に入ってくる気になったのか不思議に思った。今からでも部活動に励めば、内申書の点数でも上がるのだろうか。

――そんなことより……。

また女子であるということの方が問題だった。これで、男子が怜一人に、女子が五人。ストレスに耐えきれず、引退を待たずに自主退部する日も近いかもと危惧していたら、

「約束通り来てやったぞ」

翌日、救世主が現れた。雄々しいウルフカットの彼の名は岡本士郎（シロー）。杏子と同じクラスで、時々文化研究部に遊びに来ていたので顔なじみである。彼の言う所の約束とは一体何なのか定かではないが、ともかくも怜は歓迎の意をあらわにした。

「ちょっとしたハーレムみたいになってるな」

にやりとした岡本少年の言いたいことはすぐにピンと来た。ハーレムはハーレムでも、スラム街の方である。怜は密かな友情を彼に感じた。

「部活が終わったから、今度は彼女作りに専念する気になったんですか、岡本先輩？」

からかうような蒼の問いに、岡本はやれやれと首を振ると、

「坂木、オレの理想のカノジョはな、心のキレイな子なんだよ。この部の中にそんな子がいるか？」

実に危険な発言をした。怜は眩しげに彼を仰いだ。その勇気は称賛に値する。五人の女子から一歩も引かない堂々とした態度。これこそが日本男子のあるべき姿である。

「キレイな女の子を求める前に、自分の心を綺麗にしてくださいよ、先輩」

「アオイちゃんの言う通りよ、岡本くん」

「岡本くんって案外、少女趣味なんだね。そんな頭してさ」

「ここにはキレイな子しかいません。ね、マドカちゃん？」

「はい。曇りのある目では分からないかもしれませんが」
シンクロナイズドスイミングのチーム並みに息のそろった所を見せる五人の少女の猛攻にあえなく撃沈した岡本が助けを求めて来たが、怜は視線を逸らした。男同士の友情は早くも潰えた。
更に翌日のこと。
「前の部活終わってヒマなんで入ることにしました。原田美優でーす。ミュウって呼んでください。よろしくお願いしまーす」
鈴音に連れられて来たのが、一年の時怜と同じクラスだった（らしい）少女だった。くっきりとした目鼻立ちから自己主張が強そうに見える彼女の入部理由は、どうやら近頃仲良くなった鈴音との親交を深めたいというものらしい。彼女は、他のメンバーを打ち捨てて、もっぱら鈴音とだけ話しをしていた。
杏子は七名の部員を見ると、
「まさかこんな日が来るなんて思わなかったわ」
感動に打ち震えたような声で言った。
「ねえ、加藤くん、信じられる？　部員が七人、部長のわたしを入れて八人になったのよ。八人もいたらさ、何かできるよね？　ううん、何でもできるわ。世界を変えることだって……」
うっとりとした杏子が口走る壮大な夢。そんなものの片棒を担がせられる前に、いちはやく怜が部室を出ようとすると、確かどこかで見覚えのある少年が戸口に立っていた。
「入部希望なんだけど」
きれいな口元からその言葉を聞いたとき、怜は、杏子を見直した。かほどに一気に部員が増える幸運にあずかるとは、彼女は日ごろ相当な陰徳を積んでいるのだろう。
「ヒカルくん」
怜の後ろから、温かな声を上げたのは更紗だった。
「あ、サラサちゃん」
「わたしも杏子に勧められて入部したの。奇遇だね」
三組に来た転校生だったことを怜が思い出していると、新来の少

年は、部長に入部届けを出して彼女を感動の渦に巻き込んだ上で、
「友達作りのためっていう不純な動機ですけど、よろしくお願いします。もちろん、部活動は精一杯がんばります」
という飾り気のない非常に爽快な挨拶をした。友達作りのために、どうして部員の少ないマイナー部に入るのか納得の行かない所であるが、三人目の男子で、かつ一見した所では性情に濁ったものも見られないので、怜はほっとした。
それが先週のことだった。
四人部員が増えると、それだけ活気も出てくる。もちろん、それが部活動に関するものであれば文句のつけようもないが、現れた活気とは主に美優と更紗の話し声だった。美優は鈴音に、更紗は杏子と輝にそれぞれ話しかけていて、かつての静穏な空間にぺちゃくちゃという話し声が満ちるようになった。それだけならまだよかったが――
その無駄な活気に中てられたのか、
「文化祭で何か出し物をやりましょうっ！」
杏子が拳を斜め前方に突き出しながら宣言したのだから、いよいよ事態は思わしくない。
「これだけいたら何かできるわ」
「世界征服とかか？」
「つまんないこと言わないでよ、加藤くん」
怜はあえて反論しなかった。これまで杏子は超がつくマイナー部の部長として、大いに蔑まれて来たのである。多少、浮かれても仕方がないだろう。
「面倒くさいことやめましょうよ、部長」
蒼がいつものようにファッション雑誌を見ながら言う。怜は心中で蒼を応援したが、彼女の一言は、杏子に一蹴された。
「お黙りなさい」
どうやら部員が増えたことが、部長に自信を与えたようである。
いつもと違う杏子の威容に気圧される蒼。そのもとに、つかつか

と歩み寄った部長は、
「これは次期部長のあなたのためでもあるのよ。アオイちゃん」
がしっと蒼の肩をつかんで、文化祭で目立つことができれば更なる部員の加入が期待できるのだと、らんらんと燃える目を向けた。
「出し物見たくらいで入ってくるようなそんな軟弱な精神の持ち主は、我が栄光ある文化研究部にはふさわしくありません」
この部にどんな栄光があるのかは寡聞にして知らなかったが、蒼がそれっぽいことを言う。
杏子は首を横に振ると、
「とにかく部を拡大することよ。それが一番の大事……」
にやりとした笑みを浮かべた。『数』という民主主義社会の魔物に魅入られた部長。その腕をギュッと取って、蒼は強い声を出した。
「しっかりしてください！　アンコ先輩！」
「ふふ……わたしは正気よ、アオイちゃん」
「昔の先輩に戻ってください。間が抜けてたけど、優しかったあの頃の先輩に！」
「人は変わるのよ、アオイちゃん。あなたにもいずれ分かるわ」
「先輩……」
がっくりと頭を垂らすようにする蒼。純心な後輩が変心した先輩を心配する小芝居は、無論、室内の誰の気も引かなかった。
「それで、どんなことをするんですか？」
冷静な声は円のものである。これではどちらが上級生か分からない。
気を取り直した杏子は、
「それをみんなで考えましょー！」
と朗らかな声で言って、そのあと唐突に落涙して、皆を驚かせた。
「ど、どーしたの、アンコ？」
ギョッとした更紗が声をかけると、杏子はそば向いて顔を隠し、ハンカチを目に当て涙を拭ったのち、ちょっと思い出したことがあって、と小さく答えてその場を取り繕った。

テンションが定まらない部長にあまり触れないようにしながら、文化祭の出し物の話し合いが始まった。いくつか案は出たが、なにぶんにも急なことであるので思いつきの域を超えるものはなく各人の宿題となった。

――面倒なことになった。

と怜は思ったが、どうしようもないことだった。やる気になった部長に他の部員が引きずられる格好になっていて、怜一人、あるいは怜と蒼が二人で反対しても、衆寡敵せず、勝ち目はない。勝算の無い戦いをするよりは、生産的なことに力を注ぐべきである。できるだけ楽にできて見栄えのするものでも考えようと思いつつ、鞄を肩にかけて帰ろうと廊下を歩いていると、隣にすっと小柄な影が差した。

「ど、どうしたの？　マドカちゃん」

年に似合わぬ大人びた瞳に何だか思い詰めたような色を浮かべている少女に怜が訊くと、

「先輩、一緒に帰ってもらえませんか？」

胸を貫くような言葉が浴びせられた。

「え、オレと？」

他に『先輩』がいるのではないかと、注意深く辺りを見回したが、見えるのは校舎に差し込む夕日の淡い光のみであった。

「もしかして、姉と約束してますか？」

怜は首を横に振ると、円は、ぶしつけだと思っているのだろう、お願いできますかと続けた声を細くした。

「もちろん」

答えた声は不必要に大きくなった。怜は、恋する少年ならばかくや、と思われるほどドキドキしている自分を感じていた。これまで何度誘ってもすげなく断られていた円がどうして今日に限って、と疑う余裕までは怜にはなかった。が、それはすぐに分かることになる。

「姉の様子が変なんです」

校門を出たところで、円が言った。

第８９話：同じ神を見た二人

円の話によると、『異変』が起こったのは昨日の月曜日のことらしい。

朝起きた円が朝食の準備をしようとした。食事の準備は母か円のどちらかがやることになっている。ところがキッチンには既に朝食の香が漂っており、エプロン姿の姉が鼻歌など歌いながら見事な包丁捌きを披露していた。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

常にないことに驚いた円が訊くと、姉は満面の笑みを返してきた。

「早く起きちゃったから、たまにはわたしが用意しようかなって」

川名家の朝食はあっさりとしたものが通例であったが、姉が調理していたのは恐ろしく凝っているものだった。

「見た目はそう見えるかもしれないけど、すぐ出来るのよ。あとでマドカちゃんにも教えてあげる」

何だかどこかテンションが高い姉に、円は体温計を差し出した。

大人しく妹の言うことを聞いた姉の熱は平熱である。

「マドカちゃん。今日、一緒に登校しようね」

長ネギと春雨の入ったゴマ風味のピリ辛味噌スープを危うく噴き出しそうになる円。

「え？　どうして？」

「どうしてって、姉妹なんだからいいでしょ、たまには。それとも、お姉ちゃんのこと、恥ずかしいと思ってるの？」

円は助けを求めるように自分の隣を見た。昨夜泊まっていった姉の友人で、円にとっても気の置けない人である。彼女は、口応えするな、と言うように首を横に振った。

学校までの道すがら、いつもは寡黙な姉が饒舌そのものである。近頃疎遠にしていた妹との距離を一気に埋めようとでもするかのような話し方である。姉は、妹に阿（おもね）るような人ではない。いよいよも

って奇妙さを感じた円が、その日、部活動を終えて帰ると、玄関からやけに清々としたものを感じた。掃除はいつも行き届いているが、何だか今日はいつもに増して綺麗である。

母に素直に感動を伝えた円だったが、

「環を褒めたげて」

どうやら母の仕業ではなかったらしい。環が学校から帰りざまに、玄関・リビング・浴室の掃除をし始め、旭の宿題を見て風呂に入れたあと、夕食の準備を始めたということなのである。キッチンには朝と同じ光景が広がっていた。

「お母さん。お姉ちゃん、どうしちゃったの？」

娘のことをよく知る母でも分からないらしい。

「でも、確実に言えるのはね、このテンションが続くと、そのうちわたしは太り始めるわ。家の中で何にもすることなくなって」

難しい顔で母が言う。何か恨みでもあるのだろうか、スレンダーな母に余計な脂肪をつけようと画策している姉に不審の目を向けた円だったが、姉からは心からの笑みしか返ってこなかった。

それが今朝もう一度繰り返されたので、いよいよこれはおかしいと思い、原因を探ろうとした円が思いついたのが、姉のカレシに事情聴取を行おうということだったのである。

一部始終を聞いた怜は、神妙な面持ちを作ったが、それはカノジョの妹に対する礼儀以上のものではなかった。突然、家事に目覚めたからといって悪いことはないだろう。

隣を歩く清楚な少女にムッとした色が現れて、怜は慌てた。どうやら、環の奇行に対して心配する気持ちが薄いことが読みとられたらしい。

「先輩、姉に何かしたんですか？」

とんでもない言いがかりである。もしこれを言ったのが円でなければ、怜は相手にもしていないだろう。知り合いの年の近い女の子の中で唯一まともな円にはどうやら好感を抱いているようで、怜は態度と言葉を選んだ。環に対して特別なことをした覚えはない旨を

穏やかに抗弁したのち、
「そんなに心配なら直接会って訊いてみるよ。明日の朝にでも」
と譲歩した。
「訊かないと分からないんですか？」
不思議なことを言いだす円。それ以外の方法があるなら教えてもらいたい。
「姉と先輩は以心伝心だと思ってました」
数十年連れ添った夫婦じゃあるまいし。そう思った怜だったが、あえて口には出さなかった。恋人同士は互いの心の中を知ることができるものだ、という乙女チックな幻想を抱いたとしても、円は乙女である。その資格がある。
「もう一つお聞きしたいことがあるんですけど」
口を開こうとして、ためらってから、意を決したかのように続けられたのは、
「先輩から見て、姉ってどういう人ですか？」
以前にも聞かれたような覚えのある問いだった。
烏だろうか。バサッという羽音が夕空を打つのを聞きながら、怜は、うーん、と唸りつつ考える時間を取った。
「本当のことが知りたいんです」
社交辞令が封じられた怜は、咳払いをした。本当のことと言うならば、環のことなどさっぱり分からない、というのが正直な所である。彼女はこちらのことが分かるらしいが、こちらは彼女のことは分からない。何を考え、何を感じているのか。そんなことが分かるなら怜の方が教えてもらいたいくらいだった。
「自分のルールを持ってる人だと思う」
円を失望させたくない怜が、しばらく歩いたのち、ようやく言えたのがそんなことであった。
「それは、自分の価値観を持ってるってことですか？」
その通りではあるが、それを守ることに汲々（きゅうきゅう）ともしていない。おそらく、よりよいモノが見つかれば、今持っている価値観などあっ

さりと捨てることができるだろう。
「それは常に自分を高めようとしてるってことですか？」
「いや、そういう『自分』っていうものをタマキは持ってないんだ」
「『自分』が無い？　でも、先輩、今、姉は自分のルールを持ってるって？」
　怜はできるだけ適切な言葉を探って、分かりやすい表現を心がけた。
「つまり、何て言うかな……お姉さんが持ってる自分のルール、自分の価値観っていうのは、たまたまのものなんだ。お姉さんはたまたま今の自分だったってだけで、そのたまたま自体に意味はないんだよ。そういうことを自覚してるのがタマキだと思う」
　円はずいぶん長い間怜の言葉を胸の中で反芻していたようだが、要領を得なかったようである。おそらく円には分からないだろうことは怜には分かっていた。彼女が分かったと思ったとしたら、それは多分誤解である。しかし、分からなくていいのである。分かるというのは向こうから至るもので、こちらから近づく事態ではない。
「分かるときに分かるから、焦る必要ないよ、マドカちゃん」
「わたしは、今すぐ知りたいんですっ！」
　立ち止まった円のほっそりとした全身に張り詰めたものが宿っていた。怜は余計なひと言を言ったことを後悔した。怜にしても、円が環に向ける気持ちは分からないのである。
「なんで……何で先輩は姉のことが分かるんですか？」
　失礼を詫びてから、再び歩き出しながらぽつりと円が言う。沈んだ少女の顔を笑わせてあげたいなどと考えて、怜は新鮮な気持ちになった。世の人はこれを恋心と言うのだろう。
「同じ神を見たからだよ」
　何を言い出すんだ、という顔で円から見られた怜は、
「知ってる、マドカちゃん？　人は生まれる前にね、神様に仕えてるんだよ。そうして、自分以外にもう一人、同じ神様に仕えている人がいるんだ。同じ神に仕えることによって、彼ら二人はその神の

祝福を受ける。祝福を受けた二人は、生まれてきたあとこの地上で出会って、お互いがお互いに惹かれあう。同じ神に仕えていた二人だから気心も知れ、お互いのこともよく理解できる」

快活な声を出した。

呆れられたら明日の朝一番でカノジョに文句を言おうと思っていたところ、円はくすくすと笑いだした。話の中身はどうあれ、慰めようとしていることは伝わったようである。

「先輩がそういうロマンチックなこと言うとは思いませんでした。いつも姉にそんなことを？」

「もちろん。女の子はロマンチックなことに弱い」

円は冗談に乗るような口調で言った。

「わたしにもそういう相手が見つかるんでしょうか？」

「マドカちゃんなら、少なくともお姉さんよりは良い相手が見つかるよ」

川名家の門前で笑顔で円と別れることができて、怜はほっとした。手に汗を掻いている。気を遣うこと甚だしいが、どこかでそういう気を遣えること自体に嬉しい気持ちもあって、これが妹を持つ兄の気持ちなのだろう、と怜は思った。

妹もどきのいる家に戻ると、怜は早速環にメールをした。あんなに可愛い子を苦しめるとはしょうもないヤツである。円と約束したわけでもあるし、事情を聞かなければならない。

「ありがとう。でも、明日は一人で登校します」

翌朝迎えに行くということを送信したメールへの環からの返信がそれだった。

第９０話：お昼休みの探り合い（前書き）

前回の続きです。

第９０話：お昼休みの探り合い

朝一緒に登校しよう、という提案をまさか断られるとは思っていなかった怜だったが、あえてそれ以上の無理強いはしなかった。無理に環を押しても柳に風である。受け流されるだけならまだ良いが、最悪、加えた力が跳ね返ってくる恐れもある。

確かに円の言う通り、いつもの環らしくないような気もした。避けられる理由は特に思い当たらない。もしかしたら、とうとうカレシの本質に気がついて愛想を尽かしたのかも知れないが、それならそうとはっきり言うのが彼女の気質であろう。

とはいえ、「らしさ」などというものは、こちら側の勝手な評価にすぎない訳で、彼女自身とは何らの関係も無い。彼女の行動はすべからく、彼女「らしい」と言うべきだろう。

怜としては、環の様子がちょっと変わったとしても詮索する気になどならない。

――環はオレなんかより余程大人だ。

という確信があって、自分より精神年齢が高い子を心配しても仕方ないという気持ちがある。しかし、円に約束してしまった手前そうもいかない。他の誰からの評価を落としても構わないが、円からの評価は落としたくない。そういう気持ちが怜にはなぜだかあるのだった。それだけ、円は可愛らしい女の子だと言うことができ、裏を返せば、それだけ周囲に可愛らしい女の子がいないということでもある。

「スズ、ちょっといいか」

可愛らしくない組の一人である少女を、怜は教室から廊下へと呼び出した。クラスメートと楽しげにしていた彼女だったが、快く席を立ってくれた。怜は「可愛らしくない」などと思ったことをちょっと後悔した。せめて「普通」にしておこう。

廊下のリノリウムの床には朝の爽やかな光が当たっていた。登校

時間帯である。怜は、続々とそれぞれの教室に歩いていく同級生を避けながら、鈴音を六組から少し離れた所に誘導した。うっかり五組の環と鉢合わせする可能性を回避するためである。

「どしたの？　こそこそして」

鈴音が失礼なことを言ったのが渡り廊下である。

ここなら良いだろうと思い、一応周囲を確認したのち、怜は環のはしゃぎぶりについて、鈴音に釈明を求めた。

「一体、お母さんに何の恨みがあるんだ、タマキは？　どうして太らせようとしてる？」

鈴音は、いくら友だちだからと言っても母子の関係までは分からない、ということを実に真面目な顔で答えた。怜は無視すると、重ねて尋ねた。女の子が真面目な顔をしている時、それは大抵何かを隠しているときなのだ。そういう、さして知りたくもない真理を、怜はカノジョから嫌というほど学んでいた。

「知っていたとしても教えられないな。女の子同士の話だから」

鈴音はそうそうに伝家の宝刀を振るった。そう言われると、男子である怜にはなすすべがなくなってしまうのだが、今回は簡単に切られてやる訳にはいかなかった。なにせ、可憐な乙女の依頼を受けているのである。

「オレが頼りにならないことをもって、男子一般に対する不審の念が湧いたらどうする？　オレには真実を知る義務がある」

「そうして、知った事実を報告するっていう口実で、昨日みたいにまたマドカちゃんと一緒に帰ろうとしてるんでしょ？」

鈴音は、何もかもお見通しだ、と言わんばかりの余裕綽々とした顔を作ったが、怜はそんなことで悪びれたりなどしなかった。悪いと思う理由がない。たまに、ほんのたまに可愛い女の子と歩きたいと思ったとして、それが一体なんであろう。

「中学生男子の自然な心情の発露だ」

鈴音はやれやれ、と首を振った。黒髪でできた華がふわふわと揺れた。

「それはそれとしてもね。わたしに親友を裏切ることはできないわ」
「じゃあ、スズからタマキに言ってくれ。『家事はほどほどにしろ。妹にはこれまで通りに接しろ』って」
「自分で言えばいいじゃない」
「何だって？」
「自分でタマキに言えば」
鈴音は細い眉一つ動かさず過酷なことを言った。
これだから女子は嫌だ、と怜は思った。
「何でも単純に考えすぎる」
「それだって男子よりはマシでしょ。女の子が物事を単純に考えるとしても、男の子は考えることさえできないんだから」
全くその通り、と首肯しても何の解決にもならない。鈴音の意志は固いようで、彼女はこれ以上話す気は無いということをつんとした顔で示したのち、怜を置いて教室へと戻った。女同士の友情を見くびっていた怜は、仕方なく覚悟を決めた。
四時限分の授業を真面目に受けて知識を吸収し、給食でエネルギーを摂取したのち、怜は決然と六組を出た。カノジョに会いに行くのに、なにゆえ対決の覚悟めいたものを固めなければならないのか、理解に苦しむ所であるが、今はそんなことを考えている時間は無い。なにせ数歩の距離である。あっさりと五組につく。
「タマキを呼んでくれ」
五組の戸口から怜が声をかけたのは、七海だった。彼女はアーモンド型の瞳に笑みを浮かべながらうなずいたが、しかし、その場を動こうともせず、
「タマキ。愛しのカレシが会いに来たよ！」
教室中に美声を響かせた。怜は人選を間違えたことを認めた。
ざわざわとした空気の中をしずしずと環は進んできた。
「おいおい、昼休みにまでデートか？」
太一の声のように聞こえたが気のせいだろう。友人を疑ってしまう自分の心の醜さにホトホト嫌気が差しながらも、近くにいた顔見

知りの男子に、今からかいの声を投げたヤツを蹴り飛ばしておいてくれ、と一応頼んでおいた。

一層大きくなるざわめきの中、微笑して目前に立っている環と怜は目語すると、何も言わず歩き出した。昼休みの廊下を進んで行った先に掲示板があって、そこには、『フィクションに恋をした』と銘打たれた一枚の新聞が貼り付けられていた。恋愛小説・漫画・映画などの紹介が、紙面に所狭しと繰り広げられていた。

怜の横で環が、新聞の隅にある記事に目を留めた。

「……えーと、なになに、『ヒロインの生き方は蝶に似ている。初め、ただ漫然と人生を送っていた彼女の精神は幼虫だった。自分が死ぬということを意識したとき、生とは何か、を考え、その精神はさなぎとなる。生の意味を理解したとき、羽化して成虫へと変わった。死の間際、彼女の精神は最も美しくなったのである。死に立ち向かうことによって、人は美しくなることができる』か。さすが、レイくん。いいこと、書いてあるね」

「パクリだけどな」

「それで？」

「ん？」

「文化研究部の活動をアピールするために呼んだんじゃないんでしょ？」

環は紙面に目を向けたまま、さらりと鋭いことを言った。

回りくどいことは好きではない怜だったが、とは言え、単刀直入に、

「お前のテンションがおかしいから円ちゃんが心配してる。妹に心配をかけないようにするのは姉の務めだろう。何をやっているんだ、お前は。もしオレで良ければ相談に乗るから話してみろ」

などと切り出すことはできない。円が、環に対して何らか鬱屈した感情を持っているのであれば、それを環に知らせないようにして真相を訊き出すのが、スマートなやり方だろう。そんなことができるかどうか甚だ疑問だったが、やらねばならぬ時がある。

カノジョの方を向いた怜は、
「いったいどういうことなんだ？　今朝一緒に登校したかったのに、まさか断ってくるなんて。オレに何か怒ってることがあるんならはっきり言ってくれ。キミらしくもない」
声に非難の色を込めて言った。怜は自己満足した。なかなか良い感じ。
だがそれも長くは続かなかった。
漆黒の瞳が目前にあって、その綺麗な瞳の中に自分が映っているのを確認した怜は、心もち身を逸らすようにした。じいーっと見てくる環は、まるで人の心のうちを見透かすような目をしていた。怜は耐えた。ここで目を逸らしては負けである。
掲示板の前で見つめ合うおかしなカップルに、怪訝な視線を送りながら歩み去る制服姿の少年少女たち。
やがて環は少し身を離すと、
「お誘いを断ったら、心配して教室まで会いに来てくれるかもと思ったから……って言ったら怒る？」
いたずらっぽい笑みを浮かべながら答えた。
「嘘だろ」
怜はすかさず切り返した。ショートボブの頭を軽く傾けた少女に、
「今言ったことだよ。オレが怒るとしたら、今お前が言ったことが嘘だってことに対してだな」
続けてやると、環は軽く目を瞑ってからそのままの状態で、口を開いた。
「どうして嘘だって？」
「お前はそんな乙女チックなやつじゃない」
「ねえ、レイくん。わたしたちの間には何か決定的な誤解があるみたいよ」
「悲しいことだ」
「ええ、本当に」
環は目を開くと、そのほっそりとした指で涙を拭う振りをした。

そうして、おもむろにその場を立ち去ろうとした。怜は彼女の腕を取った。
「どこへ？」
「もうそろそろお昼休み終わりじゃないかな？」
「ところが、まだまだ残ってる」
何せ給食を食べ終わっていくらも経たない内に来たのである。
「レイくん。これは繊細微妙な女心が織りなす非常に曖昧模糊としたお話なの。このお話をするためには、丸一日必要だわ」
「カノジョの為なら、一日でも一カ月でも必要なだけ時間は割く。ただ、今は簡単に話してくれ」
環は覚悟を決めたような顔をした。
顔だけであることが怜には分かりすぎるほど分かっていた。
「怒らない？」
「オレが？」
「いくら寛大なレイくんでも、わたしの今の悩みを正直に話したら、多分怒ると思う」
「人間、怒られている内が花だっていうもっぱらの噂だ」
その言葉に、環は力を得たような振りをして、開きかけた口を、しかし閉じたのだった。
「その時になったらお話しますから、それでもいい？」
怜は首を捻った。そこまで話したくないということは、そもそも怜が触れて良いことではないのかもしれない。いくら付き合っているからといっても、
「悩みは何でも話し合おう。二人の間に隠し事は無しだぜい」
的なことを全く考えていない怜としては、それ以上は訊かず、代わりに、家事からは手を引くことを勧告した。
できるだけ何気なく言って立ち去ろうとした怜の手を、今度は環が取った。
「タイ焼きが食べたい」
「旺盛な食欲だな。今、給食を食べたばかりだろ」

「今度でいいよ。タイ焼きをご馳走してもらえれば、妹より大切にしてもらえてるっていう実感が湧くわ。もちろん、他のものでもいいけれど」

　怜は約束した。タイ焼き一つで、円の手先になったことを許してもらえるならば安いものである。そう考えて、

――待て、待て。何でオレが許しを請わなければいけないんだ？

　と、いつの間にやらカノジョとの間に発生してしまっているねじれ構造を解析しようかと思ったが、面倒な話になりそうだったのでやめた。

「このまま教室まで手を引いてくれるっていうのでもいいよ」

　まことに可愛らしい様子で目を伏せる少女の手をぱっと離すと、怜は、ご馳走するタイ焼きはクリーム鯛にする、ということを高らかに宣言した。

「黒豆鯛はダメ？」

「ダメだ」

第９０話：お昼休みの探り合い（後書き）

ようやく更新できました。
待ってくださっていた方には、「ありがとうございます」と申します。
待ちくたびれたという方には、「すみません」と謝ります。
もっとサクサク更新したい。そういう気持ちだけはあるのです。しかし、気持ちだけではどうにもならない。そういうこともあるのです。
全然関係ありませんが、ご感想頂けると嬉しいです。

第９１話：陰謀倶楽部（前書き）

今回は更紗ちゃんのお話です。

第９１話：陰謀倶楽部

目標や計画性とは無縁の人生。
例えば、もらった小遣いは貯めもせず使い尽くすが如き。
例えば、冷蔵庫に入っていたお菓子は肌荒れを気にせず食べ尽くすが如き。
例えば、夏休みは宿題を忘れ八月末日まで遊び尽くすが如き。
そういうどうしようもない生き方を更紗はしてきた。どうしようもない、ということを認めつつどうにもしようとしないところが、更にどうしようもない。
「それでも生きていけるんだもんっ！」
そんなカワイコぶった言い方で己の無計画の全てを肯定できていたのも、もはや過去の話である。
更紗は生まれ変わった。
なにゆえ？
無論、恋ゆえにである。
「花も恥じらう乙女を変えるものがその他にありましょうか、いや無い！」
更紗ははっきりと断言する。
その場にいた友人たちは、勝手にしろ、と言わんばかりの様子で、思い思いに少女コミックを読んだり、テーブルで勉強したりなどしていた。更紗の部屋である。一人っ子の彼女は、中学生にしては豪勢な十畳の部屋をあてがわれているが、さすがに更紗含め七人の女の子が集まると、ちょっとうっとうしい密度になっている。ひとりふたり出てってくれればいいのに、と言葉には出さないが皆心の中では思っていた。
「このわたし水野更紗の目標とは何か？　それはこの会の目標でもある所、ずばり、更紗に恋人を作る。その目標達成のためには綿密な計画が必要なのであります」

更紗は、ベッドの上に立ち上がって熱弁をふるったが、あいにく誰も仰ぎ見てくれる者はいなかった。

「綿密な計画！」

なかなか良いフレーズである。気に入った更紗は連呼してみた。集いし六人の勇者たちの一人、眼鏡とお団子ヘアーに至上の美を隠す、田辺杏子が皆を代表した。

「いったいどんな計画なの？」

更紗の体が宙を舞った。ベッドのスプリングがきしんだ音を立てる。一瞬後、華麗にフローリングに着地した彼女は、不敵に胸を反らした。

「よくぞ聞いてくれました。名づけて、『ヒカルくんには好きな人が既にいるらしいよ』作戦。ヒカルくんに気があるようなことを言う女子に、『ヒカルくんには心に決めた子がいるらしい』と言って、速やかに諦めさせる作戦よ」

杏子はびっくりした顔を作った。

「でもサラサ、それ嘘じゃない。いくら何でも嘘つくのは良くないでしょ」

たしなめるようなことを言う友人に、更紗は、やれやれと首を横に振った。

「あのねえ、アンコ。ちゃんと聞いてた？　わたしは、『心に決めた子がいるらしい』って言うようにって、そう言ったのよ。らしいっていうのは推測で事実じゃないわ。推測なんだから間違ってることもある。ウソとまでは言えないでしょ」

友人たちはちょっとひいたようだったが、その距離を埋めるかのごとく更紗は力強く一歩前へ踏み出た。

「いい？　これは戦いなのよ。一学年に女子は百人いる。それだけの人数が、ヒカルくんのことを好きになる可能性があるわけだから、なりふり構っていられないのよ。一対百なんだからね。策を用いても卑怯とまでは言えないでしょ」

いやむしろ当然の行為である、と更紗は力説した。絶対に負けら

れない戦いなのだ。
「絶対に負けられない戦い！」
更紗の手前勝手な戦いに巻き込まれる格好となった友人たちの中から、さっさと告白すればいいんじゃないか、という誠にもっともな意見が上がったが、更紗はもっともな意見というのが嫌いだった。
「告白すれば早いじゃない。案外うまくいくかもよ」
じろりとねめつける更紗の方を見ていない友人は、あろうことか自分の体験談を語り出した。断られるかもしれないと恐怖しつつ勇気を出して告白した結果、ＯＫをもらえた時の甘い、いささか甘ったるい経験談が話された。自分が恋をしているときに聞く他人の恋の話ほど聞くに値しないものはない。更紗は、後日談、すなわち現在のラブラブ状況まで話し続けようとしている友人を遮った。
「悪いけど、シオリのカレシとヒカルくんじゃ違いすぎて、参考にならない」
かなり直接的にカレシを馬鹿にされた少女の目がきつくなった。
ひととき、二人の少女の間に険悪な雰囲気が漂った。
「ま、まあまあ、応援してあげましょうよ。なんて言っても永遠に眠り続けるかもしれなかったサラサ姫の初恋なんだからさ」
別の友人が間に入ったが、
「ずっと夢の中にいれば良かったのよ」
ぼそりという声が漏れて、
「なにおうっ」
じゃれあいと言うにはちょっと激しい取っ組み合いが始まった。
くんずほぐれつしながら、互いのほっぺたを引っ張り合う二人。その二人から離れる他のメンバーたち。あいだに入ってくれた友人も離れた。もう止めるのが面倒くさくなったのである。
「とにかく！」
ひりひりする頬に友情を刻んだあと、更紗は改めて六人の友人の協力を取りつけた。
「わたしたちの恩師は言いました、『友だちは助け合うためにいる

んだよ』と。師とはまことに有り難いものです。ともすれば方向を見失いがちな私たちを常に導いてくれる。さあ、師の導きに従って、わたしたちも助け合いましょう」

「あんた、わたしのこと何か助けてくれたっけ？」と頬をさすりながら言う少女。

「わたしたちの関係はまだまだ続くでしょ。未来のわたしがきっと未来の皆さんを助けます。だから、現在の皆さんは現在のわたしを助けてください」

そう強引にまとめたのが、二日前のことだった。

その一週間前に、更紗は文化研究部に滑り込んでいた。いっこ前の作戦である、『同じ部に入ってヒカルくんと話すチャンスを増やそう作戦』を決行した結果だった。友だちづくりのために文化系の部活動に入りたがっている恋のターゲットを、文化研究部に誘導するのである。工作員の一人であり部長でもある杏子がこれはうまくやってくれた。しかも、更紗は、気があることを悟られないようにするために、彼よりも先に部に入っておいたのである。

「グウゼンだね、ヒカルくん。わたしも杏子に誘われたんだ」

そう声をかけたとき、微塵もこちらを疑っていない笑顔を返してくれた輝が可愛くてならない。人間、純心なのが一番である。

それからの一週間は天国であったと言えよう。放課後の一時間半の間、好きな人と一緒の空間にいられるのである。ちゃっかり近くに陣取って話す機会を多くしたりしてみた。何だか、やたら美人が多い部活でその点初めは冷や冷やしたが、ぼおっと誰かを見つめるような風も見せない輝に、更紗は勇気づけられた。

「人間は中身だわ」

そんな都合の良いことも言えるほどだった。

そうして週が明けて二日目の火曜日、現在、お昼休み時間。邪魔くさい二時限分を終えれば、また幸せな時間がやってくる。今日は何の話をしよう。輝が話すのを聞くのでも良い。とにかく近くにいて顔が見られればそれだけで満たされるのである。もちろん、恋を

成就させるためにはそんなことでお腹一杯になっていたらいけない。しかし、告白云々はとりあえず先のことにしておいて、今はまだそれだけで良い。

そろそろお昼休み時間が終わる頃になって、更紗はジャージに着替えると中庭へと足を向けた。至福の時間までの残り二時間は、委員会活動なのである。更紗は美化委員であって、美化委員の委員会活動とは校内の美化活動に他ならず、簡単に言えば、掃除である。中庭の青々としているところが今回のターゲットだった。

梅雨の空はこういう時には有り難い。灰色の雲が空を覆い中庭は涼しげである。そこにジャージ姿で三々五々に集まる我らが美化委員たち。無論やる気はかけらも無い。草取りが好きな中学生などいたら見てみたい。無論、遠目にである。

「や、サラサちゃん」

横から気安い声がかかって、何奴（なにやつ）、と思った更紗は、ムッと固めた顔をすぐに柔らかくした。いかなる運命の神の悪戯か、いやむしろ祝福か、あとニ時間は会えないはずの恋人――恋しい人の意である――がまさに更紗の眼前に立っていた。あんまり輝のことを考えすぎて幻でも見ているのかと思ったが、どうやら現実のようであった。

「どうしたの、ヒカルくん？」

美化委員になったのだと輝は答えた。

更紗は、天上にいます愛の女神に祈りを捧げた。

――サラサは今日からいい子になります。勉強します。家のお手伝いもします。給食はあんまり残さないようにします。お父さんとできるだけ話すようにします。

しょぼい善行を約束して女神を呆れさせている更紗のすぐ傍で、美化委員長が点呼を始めた。彼は総勢十一人の名を読みあげてチェックした後で、

「こういう話があります。ある日、ナポレオンが靴を磨いていない兵士に、どうして磨かないのか聞いたところ、兵士はこう答えまし

た、『今日のような雨の日に靴を磨いてもどうせ汚れるじゃないですか』と。ナポレオンは烈火のごとく怒り、『ならば、お前はもう食事をするな。人間はどうせ死ぬんだから食事を取っても同じことだろう』と答えたそうです。ボクが言いたいのはそれだけです。では、作業にかかりましょう」

更紗の読解力ではいまいちよく分からない、でも何となく有り難い感じの訓話を施した。美化委員長には見覚えがある。中背より少し小柄で、まるで女の子のように整った顔立ちの少年。五十嵐俊。人気の男子の一人である。その横にも見覚えのある男子がいて、

「あれ？　加藤くん？」

先ごろ更紗が入った同じ文化研究部の少年だった。

「加藤くんって美化委員だったの？」

「この前の委員会活動でも会っただろ」

平静に返す加藤少年。申し訳ないが、彼にはそもそも興味がない上に、しかも前回の活動時に既にカノジョ持ちだったので、よっぽど眼中に無かったのである。

「レイ、こっちでやろう」

委員長の声に応じて、加藤少年は雑草の生い茂るところへと向かった。どうやら二人は仲が良いらしい。こちらも負けていられない。仲良く輝と草をむしりまくりたいと思っていたら、意に反して、輝まで二人についていった。更紗は躊躇しなかった。危険を冒すことには人一倍敏感な更紗であったが、これは何と言っても神がくれたチャンスなのである。この機会を無駄にすれば、返って天罰が下るであろう。

更紗は何気ない風を装って、委員長のグループに混ざった。用心して、輝の傍ではなく、加藤少年の傍に腰をおろすことにする。彼の傍であれば、輝に気があることを悟られる危険を多少減らすことができる。

クールである。更紗は自分に満足した。

草を取ることがこんなに楽しい作業だとは思わなかった。仕事は

一緒にやる人間が大切なのである。二人きりならなお良いが、そこまで贅沢は言えない。

一時間があっと言う間に過ぎた。

あと一時間も草を取れる幸せに更紗が朦朧としていると、そこで一つの事件が持ち上がったのだった。

第９１話：陰謀倶楽部（後書き）

もう一話続きます。

第９２話：やらなくても分かることもある

草取りに情熱を燃やせる中学生がどのくらいいるだろうか。いや、これは中学生に限った話ではない。「草を取ってるだけで幸せ」という人がいたら、まあ、趣味は人それぞれであるとしても、生温かい目で遠巻きに見守っていた方が良い。けして近づくこと勿れ。

草の小山を脇に作りどんどんその頂きを高くしている更紗にしても、別に草取りが好きだというわけではない。単に好きな人と話しながらの作業だから、楽しく行えているだけである。彼と話しながらできるのであれば、作業は何だって良い。草取りよりもロマンチックな共同作業は世にいくらでもあるだろうし。

雑草取りは現在の仕事であり、仕事は行わなければいけないというだけのことであり、しかし、今日はそれが思いがけず楽しい作業になったという話であった。更紗にとってはそれだけ。

更紗の近くにいる、同じ部活の少年、美化委員長、そして将来の恋人候補は、それぞれ委員会活動というものを真面目に捉えているようで、時に話しながらもダレることなく集中して取り組んでいた。

しかし、である。当然、「草取りなんかヤッテランナイ」と考える同級生もいるわけで、実に十二人いる美化委員の中の半分に当たる六名は、まったく手を動かしていなかった。動かすのはもっぱら口ばかりで、草を取っている振りをして、いやロクにその振りもしないで、ぺちゃくちゃとしゃべりまくっている。それに気づいてはいたものの、更紗は特に気にしなかった。輝の近くにいられるということが更紗にとっては重要なのであって、その他のことはどーでもいい。こっちに近寄って来て、輝との団欒を壊しさえしなければ、何でもしていてくれ、という気持ちである。

「ちょっと注意した方がいいよね」

そんなことを、委員長ならば別だが、輝が言いだしたので、更紗は内心慌てふためいた。この至福の時間が台無しになるではないか

！　まさか輝に直接訴えるわけにもいかない更紗としては、彼がじいっと遊んでいる集団を見ているのを、おろおろしながら見つめるしかなかった。

「無駄だからやめた方がいいよ」

草を取る手を休めもせず、輝を穏やかに制したのは委員長である。彼は続けて、今清掃活動に勤しんでいない六人は以前の委員会活動のときも今回同様遊んでいたのであり、そのときに注意しても効果は無かった、と告げたのち、

「疲れるだけだよ」

と結論づけた。

「やってみないと分からない」

「やってみないと分からないことはあるけど、裏返し、やらなくても分かることもある。やらなくても分かることに力を注ぐのはエネルギーの無駄。そんなことするより、君には黙々と草を取ってもらった方が、君自身の精神衛生上もいいし、この中庭の為にもいい」

「責任感が無いんだな。委員長のくせに」

輝はムッとした顔を作った。彼のそんな顔を見るのは初めてだったので、更紗は驚いた。一方、委員長の方は特に感情を乱さず、挑発を受け流した。

「この立場に未練は無いよ。責任を取れっていうならいつだって辞めてやるけど」

「そういうことじゃない。委員を監督するのがキミの役割だろ。なんで役割を果たさない？」

「分からないことを言う人だな。できないことをやろうとしても無駄だって、さっき言っただろ。二度同じことを言わせるなよ」

内容は険のあるものだったが、声や表情は全く平静な委員長。しゃべりながらも彼は、せっせと草を抜いていた。とりつくしまもない。輝は苦い顔をした。外で話を聞いていた更紗は、不本意ながら、委員長の意見に賛成だった。輝の味方をしたい所であるが、委員長の意見の方が現実的である。仮に輝が注意したとしよう。しかし、

注意されて素直にそれに従う中学生がいるだろうか。そんな純真な中学生がいたとして、それなら初めから草をむしっているはずである。

「レイ、君の意見は？」

委員長にそれ以上話すことを諦めたのか、輝は矛先を変えた。我関せず、といった風で一心に草を取り続けていた加藤少年がふと顔を上げた。

「意見て、何について？」

「オレたちだけ掃除して、やらない人がいるのは公平じゃないだろ、そう思わないか？」

「世の中、公平にはできてない」

「そんな大きな話はしてない」

「小さいことならなおさらだろ。人より多く草を取ったからってそれが何なんだよ。他人の分まで掃除してやったからって、それで自分が安くなるわけでもないだろ」

からからと笑う声が委員長から上がって、「君はそういうヤツだよ、レイ」とさも楽しそうに言った。更紗には、いまいち加藤少年が言ったことが分からなかったが、ただ彼がこの件に興味がないということだけは分かった。

嫌な汗が背を伝った。一生懸命作業に向かっているがゆえの汗だと思いたかった。が、輝がこちらを見ているのに気がついて、希望は、根を切られた雑草のようにどこかに飛んでいった。輝は明らかに更紗に意見を求めていた。

輝の意見に賛同するのは簡単な話だった。「わたしもそう思う、一緒に注意しにいこう」と言えば済む話。しかし、そんなことをすればどうなるか。不毛な説得、不愉快な罵声。それに輝と一緒に耐えるというシチュエーションもそれはそれで良い。問題なのは、輝にのこのこついていって一緒に注意した一事を以って、更紗が輝のことが好きなのだという邪推をされること。また、こちらの方がより問題なのだが、輝が注意された少年少女とトラブることである。

楽しい学園生活を希望しているのに、つまらないトラブルを起こしては仕方ない。

――そういうことを阻止するのは未来の恋人であるわたしの役目だわ！

更紗は母性愛に目覚めた。純心ではあるが世知に疎い少年を助けなければならぬ。更紗には、輝の為になるのであれば、どんな愛にも目覚める覚悟がある。お兄ちゃん、と呼んで妹になることも辞さない。いや、むしろなりたい。

「サラサちゃんはどう思う？」

軽く咳払いした更紗は滔々（とうとう）と説き伏せた。曰く、そもそも委員を監督するのは委員長の役割で、委員長が黙認しているのだから仕方ない、と。曰く、別に彼らが掃除をしなくても我々に何らかのペナルティーがあるわけではない、と。曰く、掃除なんかのことでいちいち目くじらを立てることなどない、と。

更紗はできるだけ論理的にかつゆるやかに話をした。男性は論理的な話が好きだということを何かの雑誌で読んだのである。女性に上から話されるのを嫌うということも読んでいたので、おそるおそるといった調子で話しもした。自分的には完璧だった。

「サラサちゃんがそう言うなら」

という納得の吐息が落ちて、草取りという単純作業に戻り、とりとめないことを話し続ける幸せな一時間が待っているはずだった。

「それ、本気で言ってるの、サラサちゃん？」

待っていたのは、血も凍るような冷たい声だった。

「え……」

「本気なのかって訊いてるんだけど」

輝の目に軽蔑の色が浮かんでいるのが見えて、にわかに更紗の鼓動が速くなる。何をしくじったのかは分からないにせよ、失敗したという事実だけは理解できた。とはいえ、うそでーす、などと笑って前言を撤回する勇気も無いし、撤回した所で正しい回答など分からないのだ。石化した更紗の耳に、

「ペナルティがどうとかじゃなくて、やるべきことをやるかどうかだろ。サラサちゃんならオレの味方をしてくれると思ったのに」

低調な輝の声がうつろに響いた。

「そんな大した話でも無いだろ」

という委員長の突っ込みを無視するかたちで、輝は決然と立ち上がると、楽しげな声を上げて無駄話を続ける一団へと向かって行った。そのあとに起こったのは、聞くも無惨な罵り声だった。

「草取り？　やりたいやつだけやればいいんだよ」

「オレの分まで取ってくれていいよ」

「なんであんたに注意されなくちゃいけないの？」

あげくの果てに、

「顔がいいと思って調子に乗ってんじゃないの？」

ということまで言われる始末。少し離れたところからそれを窺う格好になっていた更紗は気が気でない。愛しい人がひとりで、実に六人のゴロツキを相手にしているのである。よっぽど助けに行きたかったが、輝に冷たくされたショックで足が動かない。

輝が彼らの説得を諦めて、こちらに帰ってくるのにかかる時間は長くはなかった。せいぜい五分くらいのものだろう。しかし、更紗にはほとんど永遠のように感じられた。六人のロクデナシどもは、再び内輪の話に花を咲かせ始めた。その中にたまに輝への悪口が混ざる。戻って来た輝は、腰を下ろすと、黙々と草を取り始めた。一応ほっとした更紗だったが、先の一時間と一転して、雰囲気は気まずくなった。誰も一言も話さない。なにせ前の時間に話題を提供していたのは輝だったのである。委員長と加藤少年はもくもくと草を取り続けるし、更紗は更紗で、輝に嫌われたかもしれない、という恐れに押しつぶされて口を開くことができない。結局のところ、沈黙は、委員会活動終了時まで続いた。

第９３話：土を捲き重ねて来る（前書き）

今回は宏人の話です。
第８５話の続きになります。
お楽しみください。

第９３話：土を捲き重ねて来る

遊園地という名の戦場で大敗を喫してから、二日が経っていた。ひどい戦だった。宏人の感慨は深い。敵軍の要であり心のヒロインであった二瓶瑛子の獲得には失敗し、のみならず、部活をサボってまで援軍に来てくれた友人、大村雅紀の信頼を失った。さらに、這々の体で逃げ出したところを、味方であるはずの藤沢志保に追撃される。

もうなんというか、メチャメチャである。再起を図る気力も無い。現在の状況は、おおよそ先週までのものと変わりはなかった。つまり絶望的な状況ということである。宏人は相変わらずクラス内で孤立しているし、仲間であるはずの志保は相変わらず可愛げがない。瑛子とは話さなくなった。彼女の方は、遊園地での一件を大して気にしていないのか、普通に話しかけてくるのだが、宏人の方が話したい気持ちがなくなったのである。せっかく瑛子が話しかけてきても、二言三言形だけ言葉を返すと、それで終了の笛が鳴る。およそ男らしい態度とは言えないが、彼女に対するわだかまりを消すには二日では足りないということだろう。

特筆すべきことでもないが、宏人と志保が付き合っているという噂が、どこからともなく流れてきた。出所は調べる気にもならないが、ちょっと考えれば分かる。時折、聞えよがしにささやかれるからかいの声を聞くたびに、今さらながら、

「あのアホらしい帽子をぺしゃんこに潰してやれば良かった」

後悔の念が胸をよぎる宏人。

二組支配の為にいったんは燃え上がった気持ちは、今はもう鎮まってきていた。瑛子の志保・宏人グループへの加入が絶望的になった今、これ以上あがいても無駄ではないだろうか。現実問題として、状況は全く変わっていないのである。この上は、潔く負けを認めて、一年間ひっそりと生きていくしかないような、そんな気もする宏人

だった。
――オレは頑張った。
誰も褒めてくれないので、自分で自分を褒めてやる他ない。友人の力を借りたとはいえ、自らグループデートをセッティングし、好きな女の子を誘って親交を深めようと努めた。結果は芳しくなかったとはいえ、やる気になれば結構できるもんだ、と自信がついた。この自信を糧にして、二年を乗り切り、三年生になったときに素晴らしい学生生活をエンジョイできれば良いではないか。
――よし！　来年は明るいぞ！
宏人は自身を鼓舞しつつ、教室に戻った。これから帰りのホームルームを行って、そのあとは、楽しい部活動が待っている。宏人の入っている陸上部は気の置けない仲間で構成されていてクラス内のように陰険な雰囲気はない上、なにより走っていると無心になれる。この世のうっとうしいしがらみ、つまりクラス内トラブルのことを考えずに済む貴重な時間だった。
「オレは風になる」
帰りのホームルームを終えて、意気揚々と教室を出たそんな時のことである。倉木くん、と小声のくせにやけに鋭く響く声に背中を打たれて、宏人は立ち止まった。宏人は小学生のときのことを懐かしく思い出した。あの頃は、帰りの会が終わるやいなや脱兎のごとく、教室を抜けて廊下を駆け抜けたものだった。今もそうすれば良かった！
「ちょっと今日付き合ってくれる？」
隣に立つモジャ頭の少女が、形ばかりの疑問形で言ってきた。
「よく聞けよ、藤沢。家では姉貴、学校ではクラスから虐げられてるオレが唯一自由になれる時間がこの部活の時間なんだ。それをお前は……」
「以下のウンタラカンタラを話す時間は省略して。今日部活休むこと、部長さんに報告してきてよ」
「聞けって言ってるだろ」

「校門で待ってるから、早くね」
きびきびとした口調でそれだけ言うと、志保はさっさとその場から離れた。生徒用玄関に向かっているのである。宏人はため息をつくと、彼女の小柄な背をゆっくりと追った。陸上部の部室は校舎外にある。生徒用玄関から外に出なければ辿りつけない。部活に出られないということで落ち込んだ顔で部室に行った宏人は、その消沈した様子から体調不良を疑われ、こちらから言いだす前から、
「今日は休んだ方が良さそうだな、ヒロト」
と部長に優しく諭される始末だった。
宏人はアットホームな部室に未練を残しつつ、じめっとした梅雨空の下、校門まで歩いていった。
――二日前に「バカ」呼ばわりしたくせに、よく気軽に話しかけられるよな。
外から見ている分には、路傍に咲くタンポポのように慎ましやかな様子で立っている志保に近づきながら、宏人は不思議に思った。瑛子にしてもそうだが、こちらが気まずいと思って作った心の壁を、彼女たちはやすやすと飛び越えてくる。宏人としては、その差は単純に男女の差だと思いたかった。
――精神年齢の差じゃないだろうな。
大人の志保・瑛子に対して、子どもの自分という図式を考えてしまった宏人は、何だかそれもありそうな気がして怖くなってきた。宏人の行動はすべからく子どものそれで、志保・瑛子の二人は宏人の行為に手を焼きつつも、「かわいいネ」と目を細めるのだ。宏人はぶんぶんと頭を振って正気を保とうとした。
「どうしたの？」
怪しむような目を向けてくる志保に、宏人は笑みを浮かべてみせた。
「何でもないよ、藤沢さん。さあ、今日は一体、何の用なんだい？」
「熱でもあるの？」
「いや、全然元気さ。どこにだって付き合うよ」

「その無駄に爽やかな口調、やめてくんない？　なんかムカツク」
「ハハ、女の子が『ムカツク』なんて、はしたないぞ。気にしないでくれ。ちょっとイメチェンしようと思ってるだけだからさ」
「イメチェンは失敗よ。今すぐやめて」
志保はぴしゃりと言い放つと、曇り空のため昼なお暗き中、すたすたと歩きだした。宏人は、口調を大人びたものにすることによって精神年齢を高く見せようとすることは潔く諦めて、彼女の横に並んだ。いったいこれからどこで何をする気なのか当然の疑問を投げつけてみたが、志保は答えようとしない。代わりに、
「日曜日の件、説明してくれたら教えてあげる」
しつこいことを言ってきた。
「それだけ二瓶さんの存在は大きい。二組を牛耳るためには彼女の力がどうしても要る」
宏人は口をつぐんだ。瑛子の獲得失敗の件を詳しく話せば、瑛子の志保に対する評価も同時に話すことになる。それは志保に聞かせたいことではなかった。仮に志保がそれを聞いてショックを受けたりしないとしても、それは宏人には関係ない。これは、子どもの我がままだと思われても構わない。
「頑固だなあ、まあ、いいわ。じゃあ、黙ってついてきて」
仏頂面の宏人に、志保は呆れたように言った。
団地棟の並ぶ住宅街につくまで、およそ四十分ほど歩いた。五階建てくらいの白色の団地が灰色の空を背景に十数棟林立していた。団地の間を縫ってすいすいと歩いて行く志保についていくと、少し広めの公園に出た。棟と棟の間の、主に子どもを遊ばせるためにあるような広場である。今にも降り出しそうな暗い空もなんのその、子どもたちは元気な歓声を上げていた。遊具で遊んでいる者、縄跳びをしている者、ボールを蹴って遊んでいる者、さまざまである。
志保はきょろきょろとあたりを見回すと、少し離れたところにあるブランコに近づいていった。四つあるブランコの一つで五歳くらいの男の子が勢いよく立ちこぎしていた。

「北斗（ホクト）くん」
志保が親しげに声をかけると、男の子は、完全に動きを止めていないブランコから華麗に舞い降りて、地面に着地し、駆け寄ってきた。乱暴な振る舞いをされたブランコがギコギコと抗議するような音を立てる。
「シホ姉（ねえ）。今日も来てくれたの？」
「昨日、約束したでしょ。女に二言は無い」
「じゃあ、今日も遊んでくれんの？」
「もちろん」
やったあ、と顔を輝かせて喜びの声を上げた少年は、志保の後ろに所在なげに佇んでいる宏人に目を向けた。
「シホ姉。あれ、誰？」
「誰だと思う？」
「カレシか？」
「のようなものよ。あと、ホクトくんの新しい友だちでもある」
五歳児からじろじろと値踏みされるように見られた宏人は、そろそろ事情を話してくれても良いだろう、という目を志保に向けたが、志保は、
「ホクトくん、お兄さんは？」
と知らぬ風でいった。
「瑞穂（ミズホ）と砂場でおままごとしてる。女って何であんなバカみたいな遊びが好きなんだよ？」
「そのバカに付き合える男の子がモテる」
「妹にモテたってしょうがないじゃん」
「いいこと教えてあげる、ホクトくん。女の子にモテたかったらね、まずは一番身近にいる女の子にモテるように努力することよ。身近にいる子にモテないのに、他の子にモテるわけないからね」
その理屈でいくと、宏人の場合は、姉にということになる。女の子にモテることは潔く諦めたほうが良いようである。
さっぱり要領を得ない宏人が、二人の後について公園を横切って、

砂場がある所まで行くと、下ろしていた腰を上げた男がいた。どこかで見たことがあるような顔であると思っていると、そのはずだった。クラスメートである。宏人より少し背が高い彼は、ベリーショートの髪にまっすぐに引かれた眉、少し浅黒い精悍な顔立ちをしていた。

――富永じゃないか……。

なにやら親しげな雰囲気の二人を見て、どういう知り合いなのか、宏人が疑問を持っていると、

「よお、倉木」

と富永が声をかけてきた。あまり親しく話したことがない宏人としては、どう答えてよいものか分からず、あいまいに手を挙げるに止めた。

「一哉（カズヤ）兄ちゃんっ！」

近くの砂場から少女が肩を怒らせて、富永を見ていた。四、五歳くらいの年である。

「ちゃんとやってよ！」

富永は、分かったよ、と少女をなだめたあとに、こちらをにやりとした顔で見て、

「ところで、ミズホ。お前のおままごとに参加したいって言ってるやつらが三人いるけど、どうする？」

いった。

少女の顔からビームが発せられて、その光が志保と北斗、そして宏人を打った。

第９４話：新たなる力

『オヤジはつらいよ』
第ニ幕第一場
中流家庭のリビング。夜。亭主が帰宅する。妻はソファに座って連続ドラマを見ている。
亭主「今、帰ったぞ」
妻（亭主の方を見もせず）「お帰りなさい」
亭主（ため息をつき）「一家の大黒柱が帰って来たのに、何だその対応は。メシ！」
妻（やはり亭主の方を見ずに）「あら、食べてないの？」
亭主「取引先の接待だぞ。食べた気になるわけないだろ」
妻「今いいところだから、ちょっと待って。これ終わったらね」
亭主「お前は亭主とドラマのどっちが大切なんだっ！」
妻、立ち上がると、亭主にムッとした顔を向ける。
「こっちだってね。毎朝六時に起きて、家事をしてからパートに出てくたくたになって帰って来てるのよっ。何よ、メシ、メシって！　わたしは、飯炊きババアじゃないっ！」
亭主、妻の気勢にひるむ。
「そんなに大声出すな。分かった、分かった。自分で作るよ」
妻「そうしてください。思えば、あなたも昔は自分から夕食を作ってくれたりしてましたよね。ああ、新婚の頃は良かったわ。何でも率先してやってくれて。それが今じゃ何？　縦のものを横にもしやしない。わたしへの愛情が薄れた証拠だわ。大体あなたは……」
亭主、妻の言葉を慌てて遮るように。
「子どもたちは？」
妻「部屋にいます」
亭主「そ、そうか。良し、ちょっと寝顔でも見てくるか」
中学生の娘、登場。

「お母さん。またわたしの下着、お父さんのと一緒に洗ったでしょ。この前、やめてってちゃんと言ったよね」
妻「あら、そうだったかしら。ごめんなさい、シホちゃん」
娘「もう、ほんとに気をつけてよ。あ、お父さん、帰ってたの？」
亭主「あ、ああ。シホ、最近学校はどうだ？」
娘「べっつにー、ふつう」
亭主「好きな男でもできたか？」
娘「何でそんなこと言わなきゃいけないの？　お父さん、キモいよ」
　そこで娘退場。入れ換わりに小学生の息子が現れる。
亭主「おお、ホクト。お父さんとゲームでもやるか？」
息子「お父さん。ゲームなんかやっても将来の役には立ちませんよ。勉強がありますので」
亭主「そ、そうだな。何か分からない所があったら、お父さんが教えてやるぞ」
息子「そう言ってこの前、一問考えるのに一時間かかったじゃありませんか。参考書を読めば十分で済みましたよ。時間を無駄にしたくありませんので結構です」
　息子退場。室内犬が現れる。亭主、すり寄る犬を撫でながら。
「……父親なんて寂しい存在だな。わたしの寂しさを分かってくれるのはお前だけだ」
犬「わんわん」

　富永の堅い手に頭を撫でられながら、宏人（ヒロト）は色んな意味で泣きたくなった。砂場で繰り広げられるおままごとという名の悲劇の中で、宏人に割り当てられた役は「犬」である。家族から邪険にされる父親の癒しになり、父の再生の一助となるという重要な役回りらしい。その割には、セリフが「わんわん」しかない上、登場シーンも極端に少ない。誰でもできるような役である。にも関わらず、妻役兼監督の四歳の少女は気に入らないらしく、
「もっとちゃんとやってよ、お兄ちゃんっ！　心を込めてっ！」

厳しく指導してきた。犬の気持ちなど知ったことではない宏人だったが、少女からしてみれば、そんな宏人の気持ちの方がよっぽどどうでも良いものらしく、「へたくそ！」「ちゅうがくせいなのにどうしてそんなにできないの！」「やめちまえ！」などの容赦ない罵声を彼女は浴びせてきた。

――オレは一体何をやってるんだろう……。

薄暗い空の下、肌寒い空気の中、ひんやりした砂の上で四つん這いになった格好で、幼稚園児にダメ出しされる中学二年生。目の下に感じる湿り気はきっと雨である。そうに違いない。泣いてなんかないさ。

「そろそろ、家に入るぞ、ミズホ」

宏人と対照的にからりとした声を出したのは、父親の悲哀を演じきった富永であった。宏人はほっと息をついた。このおままごとが始まってから、かれこれ一時間が経っていた。やっと犬から人間に戻ることができるのだ。裾を払って立ち上がった宏人は富永に感謝の目を向けた。

「次までにちゃんとれんしゅうしておいてね」

ちょっと納得いっていない顔ながら、瑞穂はしぶしぶうなずいた。下から厳しい目を向けてくる彼女を恐ろしげに見ながら、宏人は二度とこの辺りには近付かないことを密かに誓った。

「なかなか良かったわよ、犬役」

ぽんぽんと叩かれた肩の方を見ると、志保の薄ら笑いがある。ムッとした宏人は、なにゆえ、自分がアカデミー助演男優賞を取れるほど演技力を鍛えられなければならないのか、よっぽど問い詰めてやろうかと思ったが、遊園地での一件を話してない後ろめたさがあって強くも出られない。

「ジュースでも出すから来いよ」

そう宏人と志保を促すと、富永は幼い弟と妹の手を引き、先に立って歩き出した。志保が自分の鞄を持って当たり前のようにそれに続くので、志保と富永の不思議に親しそうな関係について奇異の念

を抱きながら、宏人も無言で従うしかなかった。
二人の親しげな様子についてもそうだが、それより富永には驚かされた。教室内での印象とはまるで違うのである。クラス内の彼は、あまりしゃべらずクールで、少し不良っぽい雰囲気を漂わせていた。宏人としては、人種が違う、という感じで、あまり接点を持ちたくないし、持つ機会もないだろうと思っていた。ところが、ここでは一転、妹のおままごとに付き合う良いお兄さんになっている。どちらが本当の彼なのか、と考えてみるまでもない。クラス内の彼は単なる宏人のイメージに過ぎず、ここクラス外の彼は紛れもない実体である。人は見かけによらないものである。
三階分のコンクリートの階段を昇り、部屋に招待してくれた富永は、よく冷えたオレンジジュースを出してくれた。そのあと、今度は家の中で、トランプやボードゲーム、テレビゲームなどが始まった。たまに、王子や姫の白馬の役目を仰せつかった宏人は、子ども特有の甲高い叫び声を聞きながら、やけ気味にこの状況を楽しんだ。その間に、するすると時は過ぎて、いつしか六時半を回っていた。
志保はリビングの絨毯から腰をあげた。
「そろそろ帰るわ」
「えー、シホ姉。もうちょっと！」
両腕を北斗と瑞穂に取られた志保は苦笑して、また来るから、となだめるように二人の頭を撫でた。
志保にならい宏人も立ち上がると、富永が二人の弟妹を引きつれて玄関まで見送りに来た。
「きっとまた来てね、シホ姉」と瑞穂。
「お前も来ていいぞ、ヒロト」と北斗。
生意気を言う弟の頭を軽くはたいた富永は、宏人と志保を外に出すと、自分もスチール製のドアから外へ出た。周囲はすでに暗くなってきており、灰色の壁にある蛍光灯が煌々と輝いている。
「藤沢、お前、また明日も来る気か？」
富永の問いに、志保はうなずいた。

「明日も明後日も明々後日も来ます」
「部活あるんだろ」
「今はこっちの方が大事だから」
富永はふう、と息をついて、ぼりぼりと頭をかいた。
「負けたよ。何かお前本当にやりそうだからな。お袋がお前のことを気に入りつつある。ここまでにしてくれ」
「じゃあ、協力してくれる？」
「面白そうだしな。具体的には何をすればいい？」
「特には何もしなくていい。わたしと倉木くんに話しかけてもらえればいい。朝来たとき、休み時間、お昼の時間、自習時間、時間がある限り」
「分かった……あと、礼を言っとく、弟と妹と遊んでもらって」
「礼は要らない。善意でやったわけじゃない」
富永は、ふ、と笑みを作ると、志保の横に立つ宏人に手を差し出してきた。何がなにやらさっぱり分からないながら、差し出された手を取らない訳にも行かず、宏人は富永と握手する他なかった。
「じゃあ、明日、学校でな」
宏人の手を放した富永は、軽く二人に向かって手を上げると、スチールドアから家の中へと消えた。
階段を下って棟の外に出て少し歩いたところで、宏人の我慢は限界に達した。自分だけ蚊帳の外に置かれた状態なのである。一体、富永とはどういう関係なのか、先ほどの会話の意味は何か、歩きながら宏人が訊くと、
「二組支配計画のその二よ」
志保は簡単に返した。その一は、瑛子をゲットする作戦のことだろう。しかし、その二があるなんてことは聞いていない。
「今メジャーに属していない人間を、わたしたちのグループに入れる。富永一哉（カズヤ）がその一人目よ」
「知り合いだったのか？」
「全然」

「でも何か親しそうだったじゃないか」
「親しくなったのよ、どうにか、この一週間でね」
一週間ほど前、先週の水曜日のことである。富永が学校を休んだ。志保は、学習委員という立場を利用してその日の授業プリントを届けるという名目で富永を見舞った。
「なんで休んだと思う？」
「……ズル休みじゃないのか？」
鋭い目つきなどのちょっと悪そうな風貌から、富永には色々と芳しくない噂が立っていた。しばしば学校をサボるというのもその一つである。
志保は、うん、とうなずいた。
「わたしもそう思ったんだけど、ところが行ってびっくり。妹さんいたでしょ。あの子が病気で寝込んでるからその看病のために学校休んだんだって。お父さんのことは聞かなかったけど一緒には暮らしてないみたいでね、お母さんはお仕事があるからって、ときどきそういうことで学校を休むらしい」
確かに先ほどまでの富永の様子から、彼が弟と妹の面倒を良く見ていることが分かった。
「それで、わたしが行ったときは、妹さんすっかり元気になってたんだけどね。ちょっと家に入れてもらって、わたしたちのグループに入ってもらうよう勧誘した。なんかどっちでもいい、みたいな感じだったんで、わたしは妹さんや弟さんと遊ぶことにした」
平然とした声を出す志保だったが、宏人には最後の所が良く分からなかった。
「将を射んとすればまず馬を射よって言うでしょ。二人に気に入られることによって、富永くんの気持ちを動かそうかなってことで」
「何で富永なんだ？」
志保はいたずらっぽくニヤッと笑った。
「カッコイイからよ」

第９５話：女の子にまつわるアレコレ（前書き）

前回の続きになります。
いつも読んでくださってる方、ありがとうございます。読んでくださってる方がいるから書き続けることができます。心からの感謝を皆様に！

第95話：女の子にまつわるアレコレ

グループにはアイドルが要る。ただモサモサしたものたちが徒党を組んで数だけ集まったとしても、グループの評価は上がらない。

「この人がいるからこのグループに入っている」と言わしめる、グループの核になる人間。そういう人間が必要なのである。

「そうなれるのが、女の子だったら二瓶さん、男の子だったら富永くんってわけ。『アイドル』がいれば、グループ全体の数が少なくても一目置かれるようになる」

男子の人気などに全く興味が無かった宏人は知らなかったが、志保によると、富永はクラスの女子に人気があるらしい。

「ちょっと悪そうに見えるところがいいのかもね。でも、外見に反して、性格良いみたいでよかったわ」

「イイ性格してるのはお前だろ」

瑛子の勧誘を宏人に任せる裏でこそこそと別の人間を勧誘していたというのだから恐れ入る。もう少しその経緯を詳しく説明するように促すと、

「別に大したことはしてないけどね。先週の水曜日から今日までずっとお家にお邪魔してただけよ。それで、ホクトくんとかミズホちゃんと遊んだり、富永くんを説得したり、お夕飯をご馳走になったりしただけ」

簡単な答えを返したのち、遊園地で無駄金を使わされた日曜日は、本当は朝から行く予定だったと嫌味っぽく付け加えた。

「誰かさんが誘ったりするから、あの日は結局午後からになっちゃったけどね。ま、いいわ、結果オーライってことで」

たそがれの中で満足げな声を出す志保のその横顔を見ながら、宏人は呆れていた。

「お前さ、富永と話したことなかったんだよな？」

「皆無よ。全くのゼロ。朝のあいさつをしたことも無い」

にもかかわらず、ひとりで会いに行って依頼を伝え、その依頼を果たしてもらうために即時行動できるとは常人の業(わざ)ではない。それはそれとして、志保がただ人に命令するだけで自分の手を汚さないような悪の黒幕然とした人間ではなかったことは分かり、その点についてはホッとした宏人だったが、

「でも、富永を誘うことについて、一言あっても良かったんじゃないのか？」

釘を刺しておきたいこともあった。

志保は不思議そうな声を出した。

「何が？」

「いや、何がって……新しくオレたちのグループに入れる人間について、前もって相談してくれたりとか、そーいうのあってもいいだろ」

志保はやれやれと首を横に振った。

「仲良しグループを作るわけじゃないのよ。わたしが必要だと判断した人間を入れる、それだけよ。相談なんか時間の無駄でしょ」

「……お前、ひょっとしてオレを苛立たせることが趣味なんじゃないだろうな？」

「まさか。趣味は編み物よ。今度マフラーでも編んであげようか？わたし、カレシとおそろいのマフラーをするのが夢なの。セーターでもいいけど。どっちがいい？」

宏人は大きく深呼吸した。まがりなりにも彼女は女の子である。女の子に対して、男にするのと同様の振る舞いをしていいのは、せいぜいが小学校の低学年までだろう。

「女の子はコワレモノなのよ。ガラス細工のように繊細なの。女の子には優しく接すること。取り扱い注意！」

小さい頃から、家族、特に姉からしつこくそう言われて育ってきた宏人には、他の同年代の男子よりは女の子に対して寛容であるという自負があった。そして、仮に本当に繊細な女の子などいたとしたら、それはもうあらゆる困難から彼女を守ってやろうという確固

とした意志もある。ほんの数日前までは、「守ってあげたい女の子候補」がいて、それが二瓶瑛子だった。ところが、彼女は繊細どころではなかった。強靭な意志を秘めた、ガラスはガラスでも特殊強化ガラスである。隣を歩く少女は、なおその上を行く鋼の魂の持ち主。

「なあ、藤沢。どっかに可憐な女の子、転がってない？」

「今度紹介するわ」

「マジで！」

「わたしが知ってる子で凄いカワイイ子がいるからさ」

「へえ、でも、女が言う『カワイイ』ってあんまり信用できない――」

ふう、という重い息が聞こえたときには、宏人は志保からニ、三歩離れていた。振り向いた宏人の目に、しゃがみ込んだ志保の姿が目に入った。驚いた宏人が近寄ると、志保はうつむかせていた顔を上げて、何でもないと言うと、どうにか立ち上がった。しかし、明らかに「何でもある」様子で、ふらふらとして頼りなげである。思わず倒れそうになったところ、とっさに伸ばした手で宏人は志保の腰を支えた。

「おい、大丈夫か？」

間近で見た志保の目は、濃い疲労の色を映した半眼だった。

「ちょっと疲れちゃったみたい」

まだ団地街を出ていない。近くにあったベンチに志保を座らせると、宏人は目に付いた自販機からペットボトルの水を買った。

「ありがとう」

志保はごくごくと喉を鳴らして水を飲んだ。

宏人は、志保の前髪を掻きあげてその額に手を当てた。

「熱は無いみたいだな」

「……セクハラ」

「可愛げも無いし」

志保は座ったまま頭を俯かせた。

「この一週間、ちょっと人にあたりすぎたわ。あんまり人と話さないからさ、少し話すと疲れるのよ。先週の木曜日に電話できなかったことあったでしょ。あなたが怒り狂った件。あのときもね、ずっと富永くんのとこいて疲れちゃって、家に帰ったら電話する気持ちだけはあったんだけど、できなかったの。ごめんね」

立ったままの宏人の目に志保の背が映っていた。やけに華奢な背だった。

「オレにも声かければ良かったんだよ。富永のところには交代交代とかで行けばよかっただろ」

志保の口元から、ふふふ、という弱い笑い声が立ち昇ってきた。

「やっぱり倉木くんはアレだね、将来の夢は騎士なんでしょ」

皮肉めいた言葉には、志保の矜持が秘められていた。自分は助けられなければ生きていけないような人間ではない、と彼女は言っているのだった。

しばらく経ち、志保が落ち着いた状態になって立ち上がったところで、宏人は彼女の前に手を差し出した。志保は怪訝な様子で宏人を見ていた。

「家まで送ってく」

「まあ、ありがとうございます。騎士さま」

宏人は冗談を聞き流すと、何かを要求するようにさらに手を突き出した。

「なに？」

「鞄をよこせ」

「自分で持てるわ」

「お前ホント可愛くないな。『ありがとう、倉木くん、ポッ』って感じで素直に渡せないのか？」

「最後の擬音を、『ペッ』に変えてくれない」

「おい、何でツバ吐く感じになってんだよ！」

「じゃあ、『チッ』」

「舌打ち！？　頼むからオレの女の子に対するイメージを下げない

でくれ、もうこれ以上」
「分かったわよ。それじゃ、ご馳走してくれたミネラルウォーターの分くらいは、『女の子』してあげるわ」
虚空を掴んでいた宏人の手が滑らかな感触をとらえた。
仲良し中学生カップルの出来上がりである。
「おーい、シホさん。何で手つないでんの？　カバンをよこせって言ったんだけど」
「わたしぃ、また気分悪くなってぇ、倒れちゃうかもしれないからぁ、倉木くんが手をつないでてくれると嬉しいんだけどぉ」
志保はもじもじしながら上目づかいで宏人をちらちら見た。
「……それが、お前の考える『女の子』か？」
「なんかこんな感じでしょ、男子受けする女の子って。いかにも守られないと生きてけないみたいな感じでさ。そんな女の子、漫画の中にしか生息してないのに。男子っておめでたいよね。女の子っていうのはね、めちゃめちゃズル賢くてタフなのよ」
「おい！　『女の子』するんじゃなかったのか？　お前、今、確実にオレの女の子に対するイメージを下げてるぞ。このまま下げてくと、男子の評価よりも下になるだろ。オレが女の子に幻滅して、その勢いで男に走ったらどうしてくれんだ！　オレのノーマルライフを返せよ」
志保は、鼻をすするような音を出した。目を伏せ気味にして、ごめんなさい、とうるんだ声を出す。
宏人は背筋にぞわぞわするものを感じた。
「分かったよ。普通にしてくれ。オレの方が倒れそうになるだろ」
宏人は志保の手を引くと薄闇の中を歩きだした。団地街を出て、車道沿いの歩道に入る。しばらく歩いたが、やはりあまり具合が良くないのか志保は何も話さなかった。こちらから話すのも気が引けた宏人は、そう言えば女の子と手をつないで歩くのはいつ以来だったろうか、などとふと自分の暗い青春を振り返って、どんよりしてしまった。

宏人の手にすっぽりと収まっている志保の手は小さくて儚げ。そのたよりなさに、

――藤沢もやっぱり女の子なんだなあ……。

そんなことを考えてしまった宏人は、何だか急にこの状態が恥ずかしくなってきた。傍から見る分には、男女手と手を取り合っていれば、これはもう恋人同士にしか映らないだろう。宏人の足取りが緊張にぎこちなくなった。

「どうかしたの？」

二人の歩が合わなくなってきたことを怪しんだ志保が訊いてきたが、まさか照れくさくなったなどということは死んでも口にできない。そんなことを知られたら最後、死ぬまでからかわれるに違いない。

「ベツニドウモシテナイサ」

「なにそのうさんくさい片言（かたこと）？　またイメチェン？」

「そ、そんなことより、お前さ、アレだよ、アレ！」

宏人は慌てて話題を探した。

「はい？　何、アレって？」

「いや、だからさ、アレ的なアレだよ。ほら、その……アレ、アレ！　そうだ！　次のターゲットは誰なんだよ、オレたちのグループに入れる」

「目星はつけてるんだけど準備が整ってない。整えてから話すわ。今度はあなたにやってもらうから」

「ホントに秘密主義だよな、お前」

「そういうわけじゃない。自分でできることは自分でやりたいだけよ。わたしたちパートナーでしょ。互いを信頼しましょうよ。わたしを信じて、ヒロト。わたしもあなたを信じるから」

擬似カップル状態に心揺らしているときだっただけに、宏人は迂闊にも胸を鳴らしてしまった。

志保はにんまりとした笑みを作った。

「今の『女の子』っぽかったでしょ？」

第９５話：女の子にまつわるアレコレ（後書き）

この小説をお気に入り登録してくれている２０名、並びに毎日読んでくださっている１００名前後のかたがたに告ぐ！　キミタチは完全に包囲されている。大人しく感想を書きなさい。郷里のお母さんは泣いているよ。

「感想を書かない読み手に育てた覚えはないわよ。早く感想を書いてあげなさい。ｃｏａｃｈさんが可哀想じゃないの」

ほら！　お母さんの声が聞こえて来たでしょう。改心しなくてはいかんよ、キミタチ。まだ間に合う。さあ、一言。

第９６話：永遠に続くもの（前書き）

今回のヒロインは、美優ちゃんです。「おい！　誰だよ、ソレ！」という方は、第９話、第４６話、第８８話を参照されたし。こんなことを書いている時点で、いかにイイカゲンな作品かということがお分かりでしょう。すみません。その点についてはもうあらかじめ陳謝しておきます。

お気持ちとお時間に余裕のある方のみお読みください。

第９６話：永遠に続くもの

人を待つことにこれほど心弾ませたのはいつ以来のことだろうか。

はっきりと覚えてなかったが、おそらくは小学校高学年のときの初デートの時、それ以来のことだろう。もう三年以上前の話である。デートと言っても、相手の男の子とは付き合っていたわけではなく、仲良し二人で子ども向けの映画に行っただけのことである。それでも男の子と二人だけで出かけるのは初めてのことで十分にドキドキした。オシャレもこれでもかというくらいがんばったりしていた。

――遠い昔の話だなあ。

美優（ミユウ）はありし日のカワユイ自分を思い出して、くすぐったい気持ちになった。そのときから今まで何人かの男の子と付き合ったが、不思議なことに胸躍らせることはなかった。

今、彼女が佇んでいるのは、広い公園の門前だった。園はこの辺りの桜の名所になっている。春になると華やかなピンクで溢れる園内も今は落ち着いた緑色に染まっていた。梅雨空は久しぶりに青く晴れ渡り、絶好の散歩日和。土曜日の園内をたくさんの人が軽やかに歩を運ぶ。

美優は携帯電話で時刻を確認した。現在、十二時四十五分。待ち人が来るまで、あと十五分ほど余裕がある。ハート型になっている手鏡を取りだすと、鏡の中で、彫りの深い目鼻立ちの女の子が歯を見せてにこやかに笑っていた。目やにになし、青海苔（あおのり）的なものなし。ノープロブレム。

――もっかい確認しとこ。

美優は今しがた閉じたばかりの手鏡のスライドを再度開いて自分の顔を確認した。万が一にも変なものがついている状態で会いたい人ではないのだ。

――あーあ、緊張するなあ。

心の中で言葉にするとますます緊張してきた美優は、鏡に向かっ

て百面相を作って顔の強張りを解そうとした。小さな鏡に、光輝く笑顔から始まり、ぷんすか怒っている顔、今にも泣き出しそうな顔、ぐっと眉に力を入れてできたどんな気持ちを示しているのか分からない顔が次々と現れては消えた。さて次はどんな顔にしようかと迷っていたとき、

「魔法の鏡に世界一の美少女でも映ってるの、ミュウちゃん？」

すぐ近くから唐突な声がかかって、びっくりした拍子に手鏡を取り落としそうになる美優。不意に清らかな香りがして、彼女の隣に一人の少女が現れた。黒を基調にしたチュニックワンピースを身にまとったすらりとした立ち姿。

美優の心臓が早鐘を打ち始めた。三年ぶりのドキドキ感を与えてくれた相手に、美優は挨拶した。

「スズちゃん」

「待たせちゃった？」

「ううん、今来たばっかり」

気が急いてしまって実は、約束していた時刻の三十分前に来ていたと言ったらどういう反応をしてくれるだろうか。一瞬そう考えた美優だったが、礼儀を守ることにした。彼女――橋田鈴音（スズネ）とは知り合ってまだ間もない。そうそう気の置けない振る舞いはできない。

フレアーになった裾をふわふわと揺らし歩き出す鈴音。その横に美優は並んだ。

「そう言えば、ミュウちゃん。ここまでなにで来たの？」

「お父さんに車で送ってもらったの。自転車で行くって言ってるのに、送ってくってきかなくて。帰りも迎えに来てくれるって」

「愛されてるね」

「ちょっとうっとうしいけどね。スズちゃんとこは？」

「うちはあんまり干渉してこない感じかな。だからこっちから接するようにしてるんだ。今度、お風呂場で背中でも流してあげようと思ってるんだけど、どう思う？」

「ええ！　わたしだったら、お小遣いを倍にするって言われても絶

対にそんなことできないよ」
　美優がびっくりした顔をすると、鈴音は目元に笑みを漂わせた。つられて微笑んだ美優の心の中にほんわかした気持ちが生まれたが、それと共にもくもくと湧き上がる一つの懸念。それは、
――もしかしてわたしは今、めくるめくガールズラブワールドの入り口に立ってるんじゃ……。
　というものだった。
　これまで同性を素直な気持ちで可愛いと思ったことがない美優が、隣を歩く少女のことは心から可愛いと認めることができる。それだけでもう異常な事態であった。鈴音とは、友人に仲介されて知り合った。一月ほど前の話である。よくよく思い出してみれば、初めて彼女を見た時から惹きつけられていた気がする。
「すぐそこだからね、ミュウちゃん」
　新たな世界のドアの前にいた美優に、鈴音が励ますような声をかけた。今日は、これから鈴音の家で、来週に予定されている定期試験の対策を一緒にすることになっている。
「あらかじめ言っとくけどね、スズちゃん。わたしバカだから、スズちゃんに迷惑かけると思う」
「大丈夫。『人に教えると理解が深まるから、積極的に人に教えなさい』ってね。コレ、わたしの家庭教師の先生の口癖」
　歓迎の笑顔で出迎えてくれる気持ちの良い玄関に二人がついたのが、それから十分後のことだった。
　鈴音に案内されてニ階の彼女の部屋に入ると、美優は開口一番言った。
「スズちゃんのお母さん、めっちゃ美人だね」
「それ、聞こえるようにもっと大きな声で言った方がいいよ。あとで持ってきてくれるおやつが豪華になるから」
　足の短いテーブルについてそれからニ時間ほどみっちりと勉強を続けた美優は、頭がくらくらしてきた。一日の勉強時間がせいぜい三十分ほどである彼女からすると、約四倍の連続勉強時間はこれは

もう奇跡に近い。奇跡は受験当日まで大事にとっておきたい美優としては、いったん休憩を求めた。トイレを借りるために階下に降りて戻ってくると、勉強道具がしまわれたテーブルの上に目にも鮮やかなスウィーツの世界が広がっていた。

「お母さん、パーティでも開くつもりだったみたい」

五六人分はある洋菓子の量に呆れ顔の鈴音に、全部食べられる旨、美優は請け合った。

「出されたものは食べないとね」

言葉通りパクパクとお菓子を平らげていくと、糖分が脳にエネルギーを供給してくれたらしく、美優は元気になってきた。そのエネルギーを勉強に使えれば良かったが、いささか吸収しすぎたようでエネルギー機関が暴走を始めた。というか単にこれ以上勉強をしたくないだけだったのかもしれない。気がつくと美優は、鈴音に、今好きな人がいるかどうか尋ねていた。

突然のガールズトークの始まりにも慌てた様子を見せない鈴音は、いるよ、と静かに答えた。

美優は身を乗り出した。現在、自分の恋愛ごとには興味は無いが、他人の、それもこれからもっと仲を深めたいと思っている子のラブ話には俄然関心がある。

「加藤怜（レイ）」

期待はしていなかったが、一応誰なのか訊いてみたところ、鈴音はあっさりと答えた。それから、誰にも言わないでね、と軽く確認するように続ける。

「からかってるのね、スズちゃん？」

「まさか。冗談で言えることじゃないよ」

「何で加藤くんなの？」

全くつり合わない。加藤少年は一年のとき同じクラスで、今は同じ部に所属している。話してみて悪い人ではないことは分かっているが、逆に言えばそれだけである。格別人目を引くような男子ではなく、どこに魅力があるのかさっぱり分からない。はっきりとそう

言うと、鈴音は微苦笑をもらした。
「人の想い人に対して手厳しいね、ミュウちゃんは」
怒らせてしまったかと思ってひとこと謝った美優だったが、鈴音は気にしていないようだった。
「告白しないの？」
「できるものならとっくにしてます」
「スズちゃんなら大丈夫だと思うけど」
美優は確信のある口調で言った。同性の美優をさえ魅了するのであるから、まして異性であればなおさらだろう。鈴音はほっそりとした首を静かに横に振った。あきらめたような顔をしている鈴音に対して美優は、もっと自分に自信を持つようにと激励の言葉をかけた。鈴音は、片想いで満足なの、と弱々しいことを言った。
美優はテーブルに軽く平手を打ちつけた。おそらく恋愛遍歴は鈴音より勝っている彼女は、ニ時間の学習指導の礼に、恋愛指導を始めることにした。およそ男子などというものは誰でも彼でもカノジョを欲しがっており、しかもカノジョを作る際に外面しか見ないのだから、鈴音くらい綺麗なら断られることは万に一つもない。言葉を尽くした美優だったが、鈴音の顔は希望に明るくなったりはしなかった。
鈴音は指を一本上げると、一つ忘れてることがあるよ、とおもむろに言った。
「川名環（タマキ）」
美優はアッと声を上げたあと、
「そう言えばそうだったね。加藤くん、川名さんと付き合ってるんだった」
悔しそうな声を落としたが、すぐに気を取り直した。確かに、川名女史は強敵である。おそらく学校一男子に人気があるだろう。しかし、鈴音だって負けてはいまい。いや鈴音の方が上だとさえ美優は思っている。チャンスはあるよ、と強く言うと、鈴音は肩に流した黒髪をふるふると揺らした。

「タマちゃんの方が先に加藤くんと出会った。運命だよ。それが全て」

美優は納得が行かない。先とか後とかいうことがどうしてそんなに重大なのだろうか。好きなら奪えば良いだけの話ではないか。現に美優はカノジョ付きの男子と何度か付き合ったことがある。その所為で「カップルブレイカー」などという子ども向けヒーローアニメの必殺技みたいなあだ名をつけられてしまっているのだが。とにかく永久に今の気持ちが変わらないなどということは全く信じられないことであって、とすれば当然加藤少年も変心する可能性があり、鈴音にも機会はあることになる。

「ところがね、この世には永遠に続くものがあるんだよ、ミュウちゃん」

鈴音の声は優しい響きを持っていた。美優の胸の奥に震えが走った。どうしてそんなことが言いきれるのか分からなかったが、問題はそこではない。もしこの世に永遠のものがあったとしたら、それは確かに美しいことかもしれないが、鈴音にとっては悲しいことにならないだろうか。それなのに、彼女の声は全く穏やかだった。

「わたしは加藤くんと同じくらい、ううん、それ以上にタマちゃんのこと好きなんだな」

「……恋より友情を取るってこと？」

「違うよ。もしそういう風に天秤にかけられるようなものならね、わたしはそんな恋と友情なんてどちらも要らないな。天秤にかけられないものこそ本当に大切なものなんだと思う」

美優は小首を傾げた。

「分かんないなあ……それに、『運命』だなんてさ、そんなので納得行くの、スズちゃんは？」

「逆だよ、ミュウちゃん。『運命』だからこそ納得がいくんだよ。だって、その『運命』を選んだのはわたしだから」

自分のことでもないのに、何だか諦めきれない美優。しかも鈴音の言っていることがよく分からないので尚更である。運命を選ぶ、

とはいかなる意味か？　うーん、と唸っている美優を置いて、鈴音はパーティの後始末を始めた。テーブルの上を片づけると、皿や包みを大振りの盆に載せて部屋を出る。

帰って来た鈴音が勉強の再開を呼び掛けて、しぶしぶながらそれに従った美優が脳を沸騰させることニ十分ほどして、室内に呼び鈴の音が聞こえてきた。少しして階段を上る足音がして、戸から鈴音の母が顔を覗かせた。

第９６話：永遠に続くもの（後書き）

読んでくださってありがとうございます。
次回に続きます。

第97話：失くした分だけ

「タマキちゃんがいらしてるわよ」
鈴音の母は遠慮がちな声を出した。先客である美優（ミユウ）を憚ったのである。鈴音（スズネ）はオッと軽く驚いた顔をしてから、噂をすればだね、と言って美優に微笑を向けた。
「どうする、ミュウちゃん？」
どうすると言われても、まさか自分がいるから帰ってもらってくれなどと頼むわけにもいかない。もしも鈴音がカレシだったら、そんな我がままを言って困らせて楽しんだかもしれないが。
――逆にいい機会かもしれないな。
鈴音と二人きりの時間が終わってしまうのは残念だったが、別の美少女と知り合えることにも惹かれるものがある。気を取り直した美優は答えを待つ鈴音に、三人で勉強することを提案した。
鈴音に連れられて部屋に入ってきた川名環（タマキ）。彼女を一目見た美優の胸がザワザワと騒ぎ始めた。あおやかな髪をショートボブにした彼女には、良く磨かれた刃のような趣があった。鈍い輝きを放ち見る者を魅了するが、そのうちに危うさを秘める妖しい美である。
「ちょうど今ね、タマちゃんの話をしてたとこだったんだよ」
丸テーブルの一角に環が静かに座を占めるのに合わせて、鈴音が言った。ね、と美優にウインクしてみせる。美優はぎこちなくうなずいた。どうにも息が苦しい。うまく呼吸ができていないような気がする。そういえば呼吸ってどうやるんだっけ？
鈴音が紹介してくれるのに合わせて、美優は名を告げて自己紹介した。環も名を返すと、二人の邪魔をしたことを詫びてきた。
「い、いいえ。わ、わたしの方こそスミマセン」
何を謝ってるのか自分でもさっぱり分からない。美優はしどろもどろであった。
――これは強敵だわ。

その圧倒的な存在感。鈴音が諦めムードなのも分かる気がした。
美優の男友達の一人（付き合ったことはなし）が、環のことを、「どこかが人じゃない。なんか怖い」と評していたことを思い出した。そのときは、何言ってんのアンタ、と分からないことを言う彼の頭を叩いたものだった。怖かったらあんなに男子に人気あるわけない。ていうか、怖いって何よ？　そう言って、何の脈絡も無くジュースを奢らせたりしたものだった。しかし、実際に相対してみると彼の言っていたことが肌で理解できた。
――ごめん、タイチ。今度、抹茶オレおごる。
「タマちゃんと加藤くん、いつ別れるのかなあって話してたのよ」
鈴音がにこにこしながらそんなことを言い出したので、美優は内心悲鳴を上げた。先ほど鈴音が話していたことは乙女心の奥底にある秘事ではなかったのか？　なにゆえ、そんなにさらりと言ってしまうことができるのか。二人が気の置けない仲だとしても、それにだって限度があるだろう。まさか、これは鈴音からの宣戦布告なのだろうか。女の戦いのはじまりはじまり？　それとも、そもそも加藤少年のことが好きだということ自体が冗談なのか？
混乱する美優に、
「ね、ミュウちゃん？」
と鈴音が話を振ってきた。つられて川名女史がこちらに顔を向けてきたが、とても目を合わせられない美優。鈴音は何か自分に恨みでもあるのだろうか。環の美優への第一印象を、「陰でこそこそ噂話をする女」というロクでもないものに固定しようとしている鈴音に、美優は引きつった笑みを向けた。
「レイくんがわたしのことを理解して、つまらない人間だってことに気がついたときかな。それが別れの時ですね」
と環が軽やかな声を出した。初対面の美優がいても、自分のカレシの話をするのに特に抵抗はないらしい。
「タマちゃんが加藤くんに飽きるってこともあるかもよ」
「わたしが？　うーん、逆はあっても逆は無いな」

単純な事実を話すような口調で言う環の言葉を聞きながら、美優はこれから、もうちょっと良く、よくよく加藤少年を観察してみることに決めた。二人の美少女から――鈴音の方は多少冗談ぽいが――好意を持たれているのだから、彼にはよっぽど何かしら隠された魅力があるに違いない。

それからさらに二時間ほど勉強を進めたが、その間ほとんど無駄話は無く、試験対策はおそろしく捗った。鈴音の温かなほんわかした雰囲気を環の冷たいピリッとした雰囲気が相殺（そうさい）していて、そのおかげで集中力が途切れずに済んだのである。友だちの家にお呼ばれして、ここまで充実した時間を過ごしたのは初めてのことだった。

「あの、わたし、そろそろ……」

充実しすぎてへろへろになってきた所で、美優が暇乞いをした。過保護な父親と約束した時間が迫っていた。玄関で鈴音の母にもてなしの礼を述べると、またいつでもいらしてね、とねんごろな言葉をかけられた。

六月下旬の空はまだ明るかった。時を同じくして環も鈴音の家を辞した。鈴音と美優に別れの言葉を告げて一足先に環が帰路を取ると、美優は思わずほっと息をついた。

「大丈夫、ミュウちゃん？」

声音は心配そうだったが、そう言った鈴音の目は笑っていた。

美優が緊張したことを正直に伝えると、

「タマちゃんは色々作ってるからね」と鈴音。

「作る？」

「外見を繕ってるってことだよ。中身は外と違ってなかなか情熱的な子だよ」

とてもそんな風には思えない。外見があのクールさで、しかし中身はカッとしやすかったりしたら詐欺である。

「スズちゃんは？」

「うん？」

「スズちゃんも作ったりしてるの？　外見はそんなにほわほわして

るのに、中身はすっごく冷たい子だったりさ」
何気なくした問いだったのだが、鈴音はしばらく考え込んでいた。
「わたしは、そうだな……以前は作ってたと思う。でも今は作ってないよ。これがわたしの今の全部です」
そう言って笑う鈴音を見て、何て綺麗に笑う人なんだろうか、と美優は思った。
鈴音は先に立って歩き出した。どうやら公園まで送ってくれるらしい。
「今日はありがとね、ミュウちゃん」
「え、何が？」
美優がしたことと言えば、甘味を楽しんだこととガールズトークに巻き込んだこと、勉強で分からない所を尋ねて鈴音の時間を奪ったことくらいである。格別礼を言われるほどのことはしていない。鈴音は、家に遊びに来てくれたことだけで有り難いのだと言葉を継いだ。
「そんなことで良ければ毎週でもするけど。ううん、毎日だって」
美優の冗談に、鈴音は笑わなかった。
「わたし二年生の頃からついこの間まで不登校だったから、お母さんがわたしが学校でちゃんとやれてるのか心配してるのよ。だからこうして家に呼ぶお友達がいるってことを見せて安心してもらいたかったんだ」
鈴音が不登校だったことは知っていた。どうして彼女のような明るく社交的な人が学校に来られなくなったのかということまでは分からなかったが、何らか辛い出来事があったのだろう。その傷はちゃんと癒えたのだろうか。まさかそんなことまでは聞けない美優だったが、図らずもそれを知ることになった。
時間より少し早く公園に着いてしまった二人が正門前で美優の父の車を待っていた時のことである。
「それにしてもひどいよ、スズちゃん。川名さんの前で加藤くんの話、出すんだもんな。しかもわたしに話振ってサ。絶対、噂好きの

子だと思われたじゃん」
「大丈夫、大丈夫。タマちゃん、そんなこと気にしないから」
「わたしが気にするのよ。そのせいで、メアド聞きそびれちゃったし」
諸事情あってできるだけ多くの可愛い女の子と仲良くなりたい美優が大仰なため息をつくと、少し離れたところでこちらを窺いながらもじもじしている少女が二人、目に入った。美優たちと同じくらいの年である。二人は近づいてくると、戸惑う美優を素通りして、鈴音の前に立った。
「スズちゃん！」
鈴音は一瞬驚いた顔を作ったが、すぐに微笑んで二人を迎えた。
「久しぶりだね。ランちゃん、モエちゃん」
二人の少女は切羽詰まった顔をすると、おもむろに、
「スズちゃん。本当にごめんなさい」
と言って頭を下げた。鈴音はゆるやかに首を振ると、気にしてないよ、と柔らかな声を出した。頭を上げた二人はほっとしたような顔をしたあと、一人は晴れ晴れとした表情を作り、もう一人はさめざめと泣き始めた。鈴音は泣いている子の肩に手を置くと、また仲良くしようね、と優しく言った。
一人蚊帳（かや）の外に立たされた美優に鈴音の顔が向けられたのは五分ほどしてからのことだった。何度か振り返りつつ立ち去る二人の少女に手を振ったあと、
「あの二人ね、二年生のとき同じクラスで仲良かった子たちなの。でも、わたし、あることでクラスのリーダー的な女の子に目をつけられて、そのときからわたしのこと無視し始めたんだ。で、それっきりだったのよ。ほとんど一年ぶりくらいに話したわ」
鈴音が言った。それが不登校の原因だったということを彼女は付け加えた。
何と答えて良いのか美優はとっさに言葉が出なかった。言葉にはならなかったのだが、ふつふつと胸に湧く感情がある。それは怒り

だった。鈴音の話を素直に解釈すれば、先の彼女たちは友人を捨ててクラスの大勢に従った恥ずべき裏切り者たちである。もしも美優が鈴音の立場だったら、彼女たちの頬を張って存分に罵っていたことだろう。

「二度とわたしに話しかけないで！」

どれほど自制の力を働かせてもそのくらいのことは言ってやったに違いない。なのに、鈴音ときたら彼女たちを許し、それだけではなく返って思いやりの言葉までかけてやるのだから、どこまで寛大な人間なのだろうか。これが人としての品位の違いというものだろう。

「スズちゃんは凄いね」

美優はハッとした。

先ほどまで落ち着いた色を映していた鈴音の目に今は濃い憂いの色が漂っている。

「どうしたの、スズちゃん？」

「ごめんね。ちょっと悲しくなっちゃって」

細い声を出す鈴音。

「さっきの二人、ランちゃんとモエちゃんとは凄く仲良くて、ずっと友だちでいられるんじゃないかって思ってたんだ。でも……」

美優は唾を飲んだ。

「あの二人とはもう分かり合えない」

鈴音の声は冷酷なものではなかった。先の二人を責めているようなものではない。何かを悼んでいるような調子だった。美優の胸がせつなさに軋んだ。不登校の経験を通して確かに鈴音は何かを失ったのだ。そしてその何かはまだ癒されてなどいないのである。それが何なのか、学校でこれまで大きなトラブル無く平穏に過ごしてきた美優には見当もつかなかった。

父の乗用車が近くの車道脇に停車した。

見送ってくれる鈴音に、車の窓から顔を出した美優は手を振って別れを惜しんだ。

なにか話しかけてくる父に適当に相槌を打ちながら、美優は鈴音のことを考えた。

――なくしたものの分だけスズちゃんは綺麗になったのかな。

ふとそんなことを思った。

第９８話：妹という名の災厄

加藤都（ミヤコ）とは何者か。

怜（レイ）はときどき考えるのである。さして答えが知りたいわけではないが、考えざるを得ない時があるのだ。例えば、定期試験前の日曜日、その午後のこと。午前中に塾に行って学習トレーナーにみっちりしぼられ、出された課題の半端ない量にちょっとげんなりし、それでも家に帰って昼食を取ったあと、「よし、やるか！」と勉強を再開しようと心を決めたちょうどその時に、「お兄ちゃん、ちょっと分からないところあるから教えて」と彼女が部屋に乱入してきて、その「ちょっと」にニ時間かけさせられたあげく、満足した彼女がおもむろにごろんとベッドに横になって少女コミックを読みながら、バリバリとせんべいを食べているその姿を見たようなとき。怜は思う。

「なんなんだ、コイツは？」と。

「訊きたいことがある、ミヤコ」

貴重な時間を一分使って考えてみたが答えが出なかったので、怜が早々に諦めると、

「後にして、今忙しいから」

都は真剣な目を漫画に注いで、兄の問いに答える気は無いということを答えた。

バリバリバリ。少女の可憐な口元からせんべいの微細なクズが、昼下がりの日の下をキラキラと散っていった。散り行く先は、気になるあの子の家の庭などではない。怜のベッドの上である。

怜は腹式呼吸をしてみた。塾の講師から教わった呼吸法である。勉強する前にしておくとリラックスしてことにあたれるという。妹と向き合わなければいけないときにも使えるだろうか。

効果は無かった。せんべいを包む袋が、無造作にポイっとベッドに捨てられたとき、怜は心の奥底に冷えた固いものが形作られるの

を覚えた。床に座っていた怜は立ち上がると、不法投棄された包みを取ってゴミ箱に捨てた上、すぐにここから出て行くように妹に告げた。

「お兄ちゃんってちょっと潔癖症なんじゃないの。嫌われるよ」

「誰にだよ？　お前にか？」

それならこれほど都合が良いことは無い。部屋が綺麗になり、妹は遠ざかる。良いことづくめではないか。怜は、部屋の隅に置いてあった小型の掃除機を手にして妹を威嚇した。

「分かんないかなあ、お兄ちゃん、わたしの気持ちが？」

脅しにもまるで動じずベッドの上に胡坐をかくと、

「兄を慕う妹のこの愛らしい気持ちが分からないなんて、お兄ちゃんも相当鈍感だよね」

都は平然とした声を出した。

「慕ってるのはオレじゃなくて、オレの部屋だろ。自分の部屋を片付けろ、そうすれば自分の部屋を好きになれるさ。ついでに自分自身のことも好きになる」

「部屋は片づけてあるわよ。めっちゃ綺麗」

「じゃあ、何でこっちに来るんだ？」

「だーかーらー、さっきから言ってんじゃん、兄を慕って……」

そこで妹の顔がしかめられた。こみあげるものを押さえようとするかのように胸に手を当てると、

「うー、言ってて気持ち悪くなってきた。冗談でも二度は言えないみたい」

心底から具合の悪そうな表情で告げる。

具合が悪いのは怜も同じだった。都と違ってそれを顔に出さないようにしているのは、彼女より一歳年上だという意地からである。

「汚したくないんだよね、掃除したばっかりですっごく綺麗だからさ。だから、お兄ちゃんの部屋に来てるわけ」

「今すぐ出てけ。オレには勉強がある。せめて成績だけでもそれなりなら、お前も兄を多少は誇りに思えるだろ」

「成績なんてどーでもいいわ。妹に好かれる方法教えてあげようか、お兄ちゃん？」

「悪いが今は興味がない。妹とは十年前に生き別れてそれっきりなんだ。もし再会する機会があったら、そのとき聞かせてもらう」

十年前くらいまでは妹がいたのである。妹、すなわち、兄を頼るはかなくたよりなく愛くるしい存在が。今頃彼女はどうしているだろうか。あのまま素直に成長すれば可憐な乙女に成長していることだろう。もしどこかで道を間違えれば――

「ケーキを奢ってくれたり、服を買ってくれたりすれば、妹に好かれること間違いなし」

兄の話を無視して自己の主張を声高に聞かせる我がままな暴君に育っていることも十分に考えられる。

「友だちのお兄ちゃんなんかサ、友だちにそんなことしてくれるらしいよ。お兄ちゃんも見習ってみたら？」

「妹に服を買う兄だって？」

この話に関しては三つの可能性がある。その一、その妹が非常に可愛いという可能性。思わず服を買ってやりたくなるほどの愛らしさ。そのニ、その兄が非常に寛大な人間であるという可能性。妹のおねだりを鷹揚に許せる好人物。そして、その三。この話がまるまる都の作り話であるという可能性。怜は、第三の可能性がもっとも高いだろうと思った。作り話を作ってまでたかろうとは、見上げた根性と言わねばなるまい。そうして、その根性は他の所で発揮しろ、とも言ってやりたい。

怜が再度、自分の部屋かもしくはリビングにでも行くように、今度はもう少し強い声で告げると、都はしぶしぶベッドを下りた。ドアが開き脅威は去って、やれやれようやく勉強に取り掛かれると思ったのもつかの間、別れを惜しむ暇も無く都はすぐに戻って来た。

「おい、いい加減に――」

「そうだ、頼みがあるんだった」

叱声をものともせず、都は怜の前に正座すると、その卵型の顔に

載る大きめの瞳に真面目な色を映した。はっきりさせておくべき時である、と怜は思った。いくら頼まれても服を買う金など無いし、仮にあったとしてもそんな気はない。断固とした口調で怜が告げると、

「そのことじゃない」

都は首を横に振った。彼女は、来週の日曜日に一緒に隣の市にあるアウトレットモールに来てほしいと言ってきた。

「お前、自分が三秒前に言ったこと覚えてないのか？　『そのことじゃない』って確かに言ったぞ」

「誰がお兄ちゃんに買ってもらうって言ったのよ。お父さんとお母さんに連れてってもらうから、お兄ちゃんにも来て欲しいだけよ」

都の言いたいことが怜にはようやく理解できた。たまに父母は子どもの服を買ってやるために、隣市にあるアウトレットモールに連れていってくれるのである。ただし、それには条件があって家族全員がそろっていないといけないというものであった。都などはこれをロコツに嫌がって、お金だけくれれば友だちと行く、と再三言っているのだが、父はこれを頑として聞き入れなかった。

「高校生になったらいいが、中学生のうちはダメだ」

都に甘い父だったがこれだけは譲る気はないようだった。父は、家族はできるだけ全員で行動しなければいけない、という考え方を持っており、その考え方を子どもが高校生になるまでは押し通すつもりでいた。大切なことは一緒の場所にいることではなく、どこにいるかに関わらず相手を尊重し敬意を払うことなのではないか、と怜などは思うのだが、表立って反対したことはなかった。たまに父母の供をして、ジェネレーションギャップからちょっと微妙な服を選ばれたりしたとしても何ほどのことがあろう。

「それで？」

怜は先を促した。家族揃ってアウトレットに行くのは父の命である。とすれば、都が怜にわざわざ頼む必要はない。にもかかわらず、正座して居ずまいを正したということは、他に頼みたいことがある

からに相違ない。都はニヤリとした。案の定であった。
「川名先輩を誘ってもらいたいの」
「……タマキを？」
自分に似合う服を選んで欲しいのだ、と都は続けた。
「先輩、センスあるからね。前にウチに来た時に着てた服、可愛かったし」
大事なのは服ではなくそれを身につける人間なのではないだろうか、と怜は思ったが、口に出すのは控えておいた。言わぬが花である。
「昨日友だちがすっごい可愛い服着ててね、それさ、お姉ちゃんに見立ててもらったって言うのよ。わたしもお姉ちゃんにコーディネートしてもらいたい」
「いつからタマキがお前の姉になったんだよ」
「だってこの前のプロポーズ、成功したんでしょ。だったら未来の姉じゃん」
怜はこの先本当に誰かに結婚申し込みをすることがあったとしても、そのときに妹のことを了承してもらわなければならないということに思い至り、暗い気持ちになった。こういう妹がいますと正直に伝えてなお一緒になってくれる人がいるのか、いやむしろ、愛する女性に、こういう妹の姉になってくれなどと言うことができるのかと考えるとはなはだしく疑問であった。
兄の苦悩など知らぬげに、都は、早速環（タマキ）に電話するようにと言ってきた。環を連れて行くことに関しては、先ほど怜の部屋を出て行ったわずかな間に、父と母に既に了承を得ているらしい。こういうことだけは仕事が速い。
「善は急げって言うでしょ」
疲れて来たので怜はもう突っ込まなかった。
環の携帯に電話をすると、彼女はすぐに出た。怜は遠慮がちに用件を伝えた。そうして少しでも彼女が躊躇したらすぐにこの件は引っ込めるつもりだった。都の為に受験生の貴重な日曜日を潰させる

など申し訳ないにもほどがある。
「お招きありがたくお受けします」
「……いいのか？　日曜が無駄になるぞ」
「日曜日に勉強する分は、これから一週間がんばって埋めることにするから平気です」
怜は近くで会話を窺うようにしていた妹にうなずいてみせた。
やったあ、と歓声が室内に大きく響くのを聞いていると、
「レイくん、今からちょっと会えないかな？」
耳元でひそやかな声がした。
「今から？　何か用なのか？」
「ううん、ただ声を聞いてたらちょっと顔が見たくなっただけ」
環の声は恥じらいを含んでいるようだった。
怜は迷わなかった。
「分かったよ、すぐ行く」
「本当？」
喜びの声を上げた環に彼女のいる場所を訊いたあと、
「アサちゃんによろしく伝えてくれ」
怜が言うと、
「あら、バレた？」
という全く悪びれない少女の声と、そのあと、「レイ、早く来てね～」という無邪気な幼い声が、携帯電話を通して聞こえてきた。

第９９話：梅雨の晴れ間のランデブー

存在意義。

自分が一体何のためにこの世に生まれたのか。そんなことを考えてみることが怜（レイ）にはたまにある。そうしてつらつら考えていくと、答えはいつも、「何のためでもなく何となく」というところに落ち着くのだった。それは悲しむべきことではなく、むしろ喜ぶべきことだ。怜は思う。何のためでもなくただ存在するということのその不思議、その神秘性は測りがたいものがある。

とはいえ、自分という存在が誰かのためになっているという感覚もまた素直に嬉しいものがある。

視線の少し先、小じんまりとした公園の出入り口で、こちらに向かってめいっぱい力いっぱい手を振ってくれている小さな女の子の姿を認めると、怜はほのぼのと心温まるものを覚えた。少なくとも、今この瞬間、この世界に自分を必要としてくれている人が一人はいるわけである。本来ならそういう想いを抱かせるのは家族の役割であるはずだが、まあ、世の中には残念な家族もあるということである。

怜は、小さく歓声を上げて抱きついてくる少女を受け止めると、膝を折って視線の高さを合わせた。彼女の笑顔は地上の太陽といった趣で、その輝きは怜の顔を明るく照らした。こんな子が妹であれば、ケーキも買ってあげたくなるし服も買ってあげたくなる。

少女はいつものように小さな両手を上げてきた。

「はい、姫」

怜がうやうやしく背中を向けると、首のあたりに滑らかな腕が巻きついてくるのが分かって、ついで温かな重みを感じた。怜がそのままよっと立ち上がると、

「くるしゅーない」

満足そうな声が上がった。

クスクスと笑う声が近くから聞こえてきた。
「タマキ、アサちゃんに変な言葉教えるなよ」
怜は、小さな妹によからぬことを吹き込んだ犯人に、注意の声を投げた。昼下がりの柔らかな光の中に、薄手のコットンブラウスとジーンズのパンツを身につけた少女が立っている。ふわりとしたショートの緑髪が初夏の微風にそよそよと鳴っていた。
買い物帰りに偶然会った主婦（夫）よろしく路上で話し込むようなことは避け、旭（アサヒ）を背負ったまま怜が歩き出すと、隣に環（タマキ）が並んだ。出入り口付近に乱雑に停められてある自転車を避け園内に入ると、数人の小学生たちがひたむきにサッカーボールを追いかけていた。
「レイ、このまま公園を一周して」
「仰せのままに」
園をぐるりと取り囲むようにウォーキング用の道が敷設されている。道の両側には丈の高い木々が植えられており枝を伸ばしている。枝から生い茂った青葉が、三人の頭上に網目の粗い天然の笠を作っていた。軽く日が遮られた遊歩道は少しひんやりとして、歩くのにちょうどよい。ふと吹く風に合わせ枝が揺れるたびに木漏れ日が散った。
「なつののの、しげみにさける、ひめゆりの、しらえぬこいは、くるしきものぞ」
背から和歌を詠ずる可愛らしい声がした。
「これはね、好きなんだけど好きって言う気持ちを言えない女の子の歌なんだよ。知ってた、レイ？」
得意げな声に、怜は思わず頬を緩めた。アサちゃんに教えてもらって今初めて知ったよ、と怜が返すと、旭は、やったねと高い声を出した。
「姫百合はアサちゃんにぴったりの花だね」
「え？　どうして」
怜が軽く息を吸い込んだところで、
「姫百合はね、『変わらぬ愛らしさ』を表す花なのよ。レイくんは、

アサちゃんがずっと今みたいに可愛いままだって言いたいのよ」
横から、言いたかったことを全てさらわれた。続いて上がる旭の感心したような声を聞きながら、怜は環に軽く恨みを含んだ目を向けた。普段感嘆されたりすることなどない少年がせっかく得た好機であったのに、まさかそれを奪うとは。きっとカレシに対して何かしら恋心以外の気持ちを秘めているに違いない。疑う怜の目に、腹中に隠し持つものがあるにしてはむやみに綺麗な笑みを浮かべる少女の姿が映った。
「おもしろいことがあったんだよ、レイ。この前、学校でね、セイジくんがイブちゃんに告白したの」
旭が楽しそうな声を出した。
「セイジくん、ずうっとイブちゃんのこと、『ブス』って言ったり、髪引っ張ったりしてたのに、好きだったんだって。お父さんが、男の子って好きな女の子のことといじめるって言ってたけど、本当だったんだ。レイはタマキお姉ちゃんのことといじめたことある？」
逆はあってもその逆は無い。今の一事を含め、よっぽど彼女の姉がどんなに酷薄な人間であるか訴えてやろうかと思ったが、慕っている姉の悪口を言われれば誰しも穏やかな気持ちではいられまい。この世の中で唯一、愛情を持って接してくれる少女の愛を失いたくない怜としては、端的に、いじめたことなんかないよ、とだけ答えるにとどめた。
「どうして？　好きなんでしょ、タマキお姉ちゃんのこと？」
怜は隣を見ないように努めた。しかし、残念なことに、怜の視界の端には、こちらから顔を背けている少女の姿がしっかりと映っていた。怜は、あとでお姉ちゃんに訊いてごらん、と旭の追及をかわした。
「お姉ちゃんは何でも知ってるから」
えー、と一瞬だけ不満げな声を上げた旭だったが、彼女の思考には一か所に留まるような粘性がなく、それ以上問い詰めることはしないで、すぐに話の続きに戻った。

「それでね、イブちゃん、セイジくんの告白ことわったんだよ。ほかのクラスに好きな男の子がいるんだって。そしたら、セイジくん泣き出しちゃったんだ。それでね、そばにいたケンタくんがそれをからかったら、今度はセイジくん怒り出しちゃって。ケンタくんとけんかになったの。せんせいがとめにくるまでずうっとけんかしてたんだよ」

旭の話から判断すると、セイジくんは教室で皆の前で告白したことになる。想いは届かなかったものの、なかなかに男らしい行動ではないか。見も知らぬ少年の男気に怜が感心していると、

「レイは一年生のときにだれか好きな人いた？」と旭。

小学一年生のときの記憶はもうほとんど無かった。なにせ、八年も前の話である。とはいえ、人に好意を抱けばさすがにそのくらいのことは覚えているだろう。いや、覚えていたいと思った怜は、そんな人はいなかったということにしておいた。

「じゃあ、タマキお姉ちゃんのことは？」

「お姉ちゃんとは六年生のときに初めて会ったから」

一度立ち止まって、下がっていた旭の体の位置を戻そうとしたところで、環と目が合った。彼女は意味ありげに目を細めていた。怜はつきそうになったため息を、どうにか抑えた。背にいる少女に心配されたくない。どうやら環とは小学六年生になる前に会っているらしい。少なくとも、環はそう主張している。

「どうしたの、レイ？」

いつまでも走り出さないカボチャの馬車を小姫はいぶかしんだ。鞭を入れられた怜は、自分の記憶力の無さにがっかりして重たくなった足を、どうにか動かし始めた。

優しい緑のトンネルの下を再び怜は歩きだした。ちょっと速足で歩いて何だったらカノジョと少し距離を取りたいくらいなのだが、足は重くなっているし、そもそも小学一年生を背に負った状態では、かけっこをしても勝ち目はない。ぴったりと隣につく少女の腕が清々とした光の中で白く揺れていた。

「あらあ、お兄ちゃんにおんぶしてもらってるの？　いいわねえ」
杖をついた老婦人が前からゆっくりと歩いてきて、怜の背を見ながら愛想の良い声を出した。怜と環は頭を下げ、環は怜の後ろについて、婦人に道を譲った。
怜の肩に旭の小さな顎が乗った。お兄ちゃんだって、と旭は嬉しそうな声で言うと、
「アサヒのお兄ちゃんになってくれる、レイ？」
甘えるような調子で続けた。そのあまりの愛らしさに、迂闊にも、オレで良ければ、とうなずいてしまった怜に、
「じゃあ、やっぱりタマキお姉ちゃんとけっこんするんだね、レイは」
末恐ろしさを感じさせる言葉が返ってきた。怜はぞっとするものを覚えた。無論、無意識に違いないが、それにしても小学一年生でこのキレ味だとすると、将来どうなってしまうのだろうか。思うままカレシを翻弄する豊かな黒髪の乙女が怜の頭に浮かんだ。怜は慌てて自分の予想を打ち消した。想像の旭の姿は、隣を歩くカノジョに恐ろしいほど似通っていた。
「もしタマキお姉ちゃんとも、あとマドカお姉ちゃんともけっこんしなかったら、わたしがけっこんしてあげるからねっ！」
旭が純真な声を出す。
五分前の怜だったら、喜んで彼女の条件付きプロポーズを受けていただろうが、大器の片鱗を見せられた今となってはちょっと尻込みする話だった。
「……レイ、わたしとけっこんしたくないの？」
寂しげな声が耳元に落ちるのを聞いた怜は急いで、
「そんなことないよ」
旭の疑いを大きめの声で打ち消した。
「でも、すぐに答えてくれなかったじゃん」
「いや、それは、その……そう、妹のことを考えてたんだよ」
「いもうと？」

「うん。オレには都（ミヤコ）っていう妹がいるんだけど、オレと結婚すると、そいつがアサちゃんのお姉ちゃんになる。タマキお姉ちゃんとか、マドカお姉ちゃんとかとは全然違って、もう全く優しくないヤツだからね。それでもアサちゃんは平気かなって思ってたんだ」

　怜は誤魔化した。そうして、六歳児相手に言い訳じみたことを言わなければいけない自分がちょっと情けなくなった。隣から視線を感じたが、怜は断固として前を向いていた。人は前だけ見て生きていけばよいのである。

　一応納得したのか、旭はふーん、と何かを考えるような声を出した。

「……かわいいの？」

「ん？」

「レイの妹のひと、かわいい？」

　世の中あいまいでペンディングで灰色なことが多い中、この問いには明確な答えを返すことができる。怜は確信を持って、かわいくない、と答えた。

「そしたらさ、わたしとどっちがかわいい？」

「アサちゃんの方が一億万倍かわいいよ」

　旭の機嫌はすっかり直ったようだった。そのまま、公園を一周したところで、旭は何かに気がついたような声をあげて、怜に自分を下ろすように言った。どうやら友だちを見つけたようだった。地に降りた旭がタッタッと駆けていった先、公園の出入り口付近に、彼女と同じくらいの少女たちの姿があった。

「レイ、タマキおねえちゃーん、みんなと遊んでるねー！」

　離れたところから声を上げる旭。

　怜が小さく手を振って、旭と彼女の友だちが園内に入るのを見送っていると、

「ご苦労様でした」

　いたわるような、いや多分にからかいの色を含んだ声が、隣からふとかけられた。

第１００話：この世界に君がいるということ

怜（レイ）は環（タマキ）を誘った。木陰になったところにベンチが一基佇んでいて、若い恋人同士を待っていた。怜は、ポケットから出したティッシュでざっと座面の汚れを取って環を先に座らせ、礼儀を通した。環の隣に腰を下ろすと、旭（アサヒ）が友だち二人と園内を縦横無尽に走り回っている姿がよく見えた。先ほどサッカーをしていた子たちは遊び場所を変えたようである。

怜は背もたれに背を預けると、そのまま上を向いた。キラキラという煌めきが目を柔らかく刺した。重なり合った青葉の隙間で光が踊っているようだった。

「アサヒがねだらなくても来てくれました？」

環はいきなりそんなことを言った。

「タマキひとりだったら、来いなんて言わないだろ」

目を閉じた怜の耳を、

「レイくんは乙女心を分かってない」

軽い批難の声が打ったが、怜は気にしなかった。

「乙女心も分からないし、乙女じゃないヤツの心も分からない。世の中、分からないことだらけだ」

眠気を誘うような昼下がりだった。あくびをかみ殺す怜に、

「膝枕でもしますか？」と環。

目を開いた怜は、一瞬だけ、挑戦を受けてやろうかという気になったが、ぎりぎりで自分を保った。じゃあ頼むよ、と返した瞬間に、平然とジーンズの膝を揃えて差し出されそうな気がして怖い。君子危うきに近寄らず。とはいえ、既に手遅れのような気も若干している。

「定期試験対策の方はどうですか？」

「どうもこうもない。できることしかできないわけだから、やるだけやってあとは天命を待つさ。タマキは？」

「レイくんとおんなじです。人事は尽くしました」
「おなじじゃないだろ。お前には余裕がある。アサちゃんを遊びに連れだしてやってるくらいなんだから」
「だったら、レイくんは？」
「オレはただ優先順位の高いものを優先しただけだよ。妹の言葉は全てに優先する」
「ミヤコちゃんは幸せですね」
「あれは妹じゃなくて、妹になりそこねた者だ。まあ、あっちから言わせれば、オレは残念な兄ってことになって、つまりはどうしようもない兄妹ってことだな」
「それはわたしも同じかな。アサヒはレイくんを、マドカはスズちゃんを慕ってて、どちらからも慕われない姉ですから」
「どっちもタマキを慕ってるよ。ただ、前と同じようではいられないだけだろ」
「レイくんもそういうことあるの？」
「十年前までは都のことを可愛いと思ってたっていう恥ずかしい事実を言わせるつもりだろ。存分に笑ってくれ」
　環は笑わなかった。しばらく落ちた沈黙を訝しんだ怜が目を向けると、軽く口を結ぶようにした白い横顔に葉の影が差している。
「……ねえ、レイくん。変わらないものってあると思う？」
「変わらないもの？」
「そう、ずっとずうっと続くものよ。この世の終わりまで」
「この世の終わりまで生きたことないからなあ」
　こちらに顔を向けた環の目から鋭い視線を感じて、怜は態度を改めた。
「万物は流転するって言ったヤツもいる」
「ヘラクレイトスでしたっけ？」
「行く川の流れは――」
「絶えずしてしかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて久しくとどまることなし……もっと暗唱してみ

せましょうか？」
「タマキ、『慎み』って知ってるか？　それを持っていると多くの人に愛されるらしい」
「知りません。それにわたしはそんなに欲張りじゃありません。ただ一人に想ってもらえればそれで十分です」
「お前にそんな風に思わせる子がいるのか？」
「レイくんがよくご存知の人です」
「名前は言わなくていい。顔を会わせるたび同情の目で見そうだから」
　少女の体が少し怜の方に寄せられた。ベンチは三人がけくらいの長さで、それ以上近づかれると逃げ場がない。怜は慌てて付け足した。
「もちろん、同情の気持ちの倍くらいは羨ましいけどな」
「倍……ですか？」
　怜が十倍に水増しすると、環は不承不承納得したような顔を作って話を元に戻した。
「昔の人が言ったことを知りたいなら自分で調べます。わたしが知りたいのはレイくんの考え」
　駆けまわる幼子たちのキャッキャッという楽しげな声が風に乗って響いてきた。
　怜は、念を入れてベンチから立ち上がると、環の方を見ずに言った。
「まだ見つけたことがないけど、でも、もしあればそれは美しいものに違いないだろうな」
　目前に広がるこじんまりとしたグラウンドの先に家並みが見えて、その上には青空が広がっていた。ところどころに浮いた白雲がふわふわと気ままに流れている。
「わたしは見つけました」
　軽やかな声が背にかかって、興味を持った怜が振り向くと、同じように環も立ち上がっていた。木陰から少し出る位置に立った少女

の黒髪は、柔らかな日の光に濡れてしっとりと輝いていた。
「この世界を見つけた。この世界はこの世の終わりまでずっと続くと思う。そうして、わたしの今のこの世界はね、レイくんと出会って始まったんだよ。それは確かに美しくて、優しくて、とっても清らかだった」
思わず見惚れてしまうほど綺麗な微笑みを見せられた怜だったが、早まる動悸は美少女から愛の告白めいたことを言われたからではなかった。
「いつだったのか教えてくれ」
怜は喉から言葉を押し出した。
「何のこと？」
「いつタマキの世界は始まったんだ？」
初めて会ったのはいつだったのか、と怜は尋ねた。
「六年生より以前に同じクラスになったことは無かったよな？」
「それはその通りですけれど、でも同じ学校に通ってたんだから、他にも会う機会はあったんじゃないかな。たっくさん」
その口ぶりからすると、小六になる前に複数回会っていることになる。全く覚えがなかった。一学年三クラスしかない小学校だったので、もちろん川名環という少女がいることは知っていた。委員会か何かで一緒になったこともあるかもしれない。が、親しく話したりはしなかったはずである。自信は無いが。
「じゃあ、一つだけ。五年生のとき、バレンタインデーにチョコをあげたわ」
「待て待て！」
バレンタインデーに女の子がチョコをあげるという行為が何を表しているのか。恋愛に疎い怜でもさすがにそのくらいは知っていた。そんな行為を受けて、忘れているなどということは、いくらなんでもそれは無い。無いと思いたい。
「告白はしてません。チョコはその時の五年生の男子全員にあげたから」

怜は慄然とした。そんなことをして無駄に男心を惑わして何を得るつもりだったのか。
「ホワイトデーのお返しです。スズちゃんとどっちが多くもらえるか勝負してたの。ちゃんと、レイくんもお返しくれたわ。クッキーの」
はにかんだような笑みを見せる環には悪いが、全く覚えが無かった。
「そのクッキー、今でもあるとか言わないよな」
「おいしくいただきました」
「じゃあ、証拠は残って無いわけだ」
「心の法廷に証拠なんか要りません」
そこでは、裁判官と検事役を環が務めるのである。裁判内容は近代以前の非合理なもの。弁護をしてくれる者もおらず、被告人すなわち怜は常に有罪とならざるを得ない。
「ジュースでもおごるよ」
粛粛と罪を認めた怜は、自らに罰を科した。いんちきバレンタインの他に話をした機会について尋ねた怜だったが、環は答えなかった。どうやらサービスタイムは終了したようである。再びベンチに腰を下ろした環は自分の隣を手の平で指した。そこに座れという合図である。少し強い風がザワザワと葉ずれの音を奏でた。環は乱れる髪を気にもせず、怜を見ていた。
「どうしたの？」
いつまでも立ち尽くすカレシを怪しむ環。怜はできるだけ素知らぬ顔で、何でもない、と彼女から少し離れて座ったが、環はそれほど甘い子ではなかった。開いた手に滑らかな手がすべり込んできてしっかりとロックされた。すぐそばから花のような香りを感じた。
「タマキ、知ってるか。恋人同士っていうのはお互いの思ってることが分かるらしい」
心の中にあるものを話したくなくて、怜はあがいてみたが、
「じゃあ、今、わたしが思ってることも分かるはずでしょ。話して

ください」
と切り返されて、完全に捕まった。諦めた怜は、環と初めてあったときのことをなぜ覚えていないのか分かったかもしれない、と正直に告げた。
「それで？」
少女の目はその長い睫毛を数えられそうなほど近くにあって、微笑を宿した瞳は星の瞬く暗黒だった。
「この世界にタマキがいるってこと、ずっと前から知ってた気がしたっていうそれだけだよ。ずっと前から知ってる気がするから、返っていつ会ったか、はっきりと思い出せないんじゃないかってさ」
「ずっと前って？」
「ずっとはずっとだよ」
「いつですか？」
どこまでも容赦の無い子である。怜は憮然とした顔を作ってみせた。
「そんな顔してもダメです。さ、言ってください」
「……分かったよ。生まれる前からだ。満足か？」
怜の手は無事に解放された。環は不意に立ち上がると、飲み物はわたしが買ってきます、と言って公園の出入り口へと足を向けた。その足取りはいつもと変わらず静かなものだった。ゆっくりと遠ざかる華奢な背を見送っていると、怜の耳に元気の良い足音が近づいてくるのが聞こえてきた。

第１０１話：仲直りの使者

努力しなければ良い結果は現れないが、努力すれば必ず良い結果が現れるかと言えば、そういうわけでは決してない。

たった今、一学期末定期試験の最後の科目を終えた怜（レイ）は、世の無情についてしみじみと考えていた。昼下がりの教室である。怜の薄暗い気分を盛り上げてくれるためか梅雨時のためかは定かではないが、昼だというのに外は暗く、教室の中はなお暗かった。試験の為、怠らず勉強を続けてきたつもりだったが、どの科目もピンとこない手ごたえ。十全に解けた気がしない。中には全く手も足も出ない問題もあった。まだ本格的に勉強を始めて二カ月という短期間なのだから劇的な結果が出ないとしても当然。そう言って自分を慰めることはできるが、しかし怜には自分を甘やかすような趣味などないのだった。

「悔しい気持ちが持てるなら、それは本気で取り組んでいる証拠です。悔しさというのは、事に本気で向かっている人だけが感じられる特権なんですよ」

通っている塾の講師である山内女史の言葉が耳に響いた。いつか言われた言葉である。その言葉には励ましの色などは全く無かった。それだからこそ返って怜の心に届くのだということが分かっているのだとしたら、大した人だと言わざるを得ない。亀の甲より年の功。

「努力を結果につなげるのはわたしの仕事です。あなたは努力だけしてくれればいい」

矜持（きょうじ）を秘めたそんな言葉を返されそうな気がして、怜は次の塾の授業のときに、努力と結果の相関関係についての見解を師に述べることは差し控えることにした。

幾分心穏やかになって、たまにはこちらから環（タマキ）を誘って一緒に帰ろうかなどと気まぐれを起こしつつ、帰りの支度をしているときのことだった。クラスメートが三々五々帰り始め空いてきた教室内に、

新たに足を踏み入れた三人の少女がいた。怜は後悔した。己の力不足を嘆くなら誰もいない所ですれば良かった。男が泣くのは人目につかない所と相場は決まっているのに、

「加藤くん、ちょっと時間もらえる？」

さっさと家に帰らずにぐずぐず浸っていたりするから珍客の訪問を受けることになるのである。

怜は椅子に座ったままの体勢で、極力嫌な顔をしないように努めて、礼儀を守った。見慣れたお団子ヘアの少女が、眼鏡越しに真剣な目を向けてきている。大抵の場合、女の子が真剣な顔をしているときというのはロクでもないことを考えているときなのであるが、彼女はちょっと特別であった。田辺杏子（アンコ）とは二年余りの間部活動を共にした仲であるが、君子の交わりは淡きこと水の如しのたとえ通り、これまでのところ馴れ合うことなくやってきたのだった。彼女の場合、真剣な顔をしていても怜に害意は無いはずである。しかし、この事実は怜を全く安心させなかった。ロクでもないことでないとすればそれは大事なこととということになって、無論そちらの方がずっと厄介だからである。

怜は杏子の隣に目を向けた。神経質そうな顔で控えていたのが、やはり同じ文化研究部の水野更紗（サラサ）である。どこか悄然としたたたずまいで元気が無い。そして、もう一人杏子のやや後方からこちらを鋭く見ていたのが、昨年同じクラスだった佐伯澄（スミ）だった。親類縁者の女の子を除くと、最も苦手としている女の子である。

怜はかばんを肩にかけると大人しく連行されることにした。この包囲網を突破するのは不可能だった。一対一でも男子は不利なのに、まして一対三ではひとかけらの希望も無い。

導かれるままに校庭の一角に連れて行かれる怜。試験が終わったばかりであるにも関わらず、サッカー部は早々に練習を始めていた。

「折り入ってお願いしたいことがあるの」

威勢の良い掛け声が聞こえてくる中、話の口火を切ったのは杏子だった。

「サラサの話なんだけどね」
　怜がちらりと目を向けた先に、視線を宙に漂わせながら居心地悪げにしている更紗がいる。人づてでないと話せないということは、よほど込み入った話に違いない。怜は話を聞く前から軽くげんなりするものを覚えた。しかし、話は全く複雑なものではなかった。それどころか恐ろしく単純なものだった。
　怜と杏子、更紗が所属する文化研究部に塩崎輝（ヒカル）という男の子がいる。先ごろ転校してきたばかりの子である。彼と更紗がちょっとした誤解から仲違いをしたので、その仲を取り持ってもらいたいということだった。なるほどシンプルである。定期試験で疲労した頭でも問題なく理解できた。ただ一点を除けば。
「何でオレが？」
「加藤くんは塩崎くんと仲いいでしょ」
　予想済みの質問だったのか、滑らかに答える杏子に、輝とは特別なつながりなどないと怜ははっきり告げた。転校してきたばかりなのである。仲を深める時間など。
「でも、わたしたちよりは仲いいだろうし、何と言っても男の子同士だからね」
　女の子同士には何らかの連帯感があるのかもしれないが、男の子同士にはそんなものは無い。少なくとも怜は、単に性別が同じだからという理由で友情を感じるような経験は今までに無かった。
「つべこべとさあ！　男らしく『はい』か『いいえ』で答えたら！」
　業を煮やしたように脇から声を上げたのは澄だった。彼女は、ずいっと前に出て至近距離から男子をにらみつけるという、淑徳のかけらも感じられない非常に女の子らしい詰め寄り方をしてきた。半歩あとずさらざるを得なくなった怜の頭に、いったい澄がどのようにこの件にからんでいるのかという問いが浮かんだ。杏子は分かる。更紗とは小学校来の友人関係にあると前聞いたような気がする。しかし、澄は？　ちょっと考えてみただけで全く聞く気などなかったのだが、澄は自分から話し始めた。

何でも初め更紗と杏子は、澄の所に来たということなのである。それは澄に仲直りの仲介を頼みたいということではなかった。澄のカレシに五十嵐俊（シュン）という少年がおり、これは怜の友人でもあるのだが、彼に依頼をしたかったから、その前段階としてカノジョである澄に会いに来たということだった。

「話を割るようだけど、その筋で行くともしかして……」

「取ったよ、タマキの許可」

澄が当たり前のように言った。怜はあとで、自分のマネージャーを気取る少女に抗議のメールを送ることに決めた。

さて、依頼を受けた俊は即座に断ったらしい。事情を聞いて侠気を感じた澄がわざわざ更紗と杏子に同行して、澄自身から頼んだにも関わらずである。まことに男らしい行動。そうして自分の代わりにと言って推薦したのが怜ということだった。

「ボクがやっても多分うまくできない。でも、レイならできる」

そんなことを力強くのたまったそうだ。抗議メールを送る人間がもう一人増えた。

「……シュンがあんなに素っ気ないなんて思わなかったな」

怜から目を逸らして誰に聞かせるという風でも無くぼそりとこぼす澄。自分が間に入った願いなら聞き届けてくれるはずという期待があったのだろう。細い肩を落とす澄に、

「信じてないのか？」

注意深く力みを消した声で怜が言った。

「信じる？」

澄の目を軽く見返しながら、

「シュンのことだよ。あいつがそう言ったのは、そう思ったからそう言ったってだけで、他に意味は無い」と怜。

俊はそういう子なのである。けして自分でするのが面倒であるとか、心根が冷たいとか、そういう類の話ではない。

澄はムッとしたようだった。女の子というのはカレシのことは世界で一番自分が知っていると思いこんでいる節がある。自分以外の

人間に知った風な口を叩かれてイラッとしたのだろう。余計なことを言ってしまったのは試験疲れであると思いたい。怜は、友人の期待に応えたいのはやまやまであるが、仲直りの使者など柄では無い旨伝えて、断ろうとしたが、

「女の子三人に頭を下げさせて断るなんて、加藤くんはそんな人だったの。男の風上にもおけない！」

澄の憤然とした声に遮られた。

怜はよくよく三人の少女を見てみたが、三人が三人ともその愛らしい顔をまっすぐ前に向けていた。その先に見ているのはどんな未来なのだろうか。願わくは、その未来予想図の中に自分を組み込まないようにしてもらいたいものだと思った怜だったが、

「この次にオレ以外に当てはあるのか？」

と訊いて、

「そんな気持ちで頼むような半端なものじゃない！」

という答えを得たとき、全てを諦めた。だとすると是が非でも怜に依頼する気だということになる。そんな覚悟を持たれた女の子相手に抵抗するだけの気力は今の怜にはなかった。今後持てるようになるかというとそれも怪しい。期待はしないようにとだけ念を押した怜は、かばんの中から携帯を取り出して、向こうの都合が良ければ今から会いに行ってくる、と告げた。

「え、これから？」

驚いたような声を出す澄に、怜は軽くうなずいた。問題を先延ばしにしたくない。番号を呼び出すと何度目かのコールで輝が電話に出た。話がある旨を伝えると、ちょっと戸惑いながらも快く承諾してくれた。既に学校を出て家に帰っている途中だということだが、戻ってくれるらしい。輝が戻ってくる道の途上にあるボウリング場前で待ち合わせることにした。

「じゃあ、あとで田辺の携帯に電話することにするから」

この中では彼女の番号しか知らないのである。女の子軍団からようやく解放されると思ってホッとした怜が歩き出そうとすると、ち

ょっと待って、と呼びとめる声がする。まだ何かあるのか、と警戒した怜に、お団子眼鏡の少女が、まだ更紗と輝の仲違いの顛末を話してないと言う。

「ちょ、ちょっと。アンコ」

慌てて友人の腕を取る更紗に、

「頼みごとをするんだから事情を話すのが礼儀でしょ」

杏子がなだめるような声を出した。

更紗の事情になど全く興味が無い。さすがにそうは言えない怜は、話したくないことを無理に話す必要はないと丁寧な言い方をしたのだが、杏子は頑として受け付けなかった。良識があるのも時に困りものである。怜は全然関心の無い話を真面目に聞く振りを演じなければならなかった。

話によると、先週の委員会活動のとき、更紗が輝に対して不適切な発言をしてそれ以来、輝が更紗に冷たいというのである。聞く所によると、怜もその更紗と輝の仲に亀裂が入った決定的瞬間に居合わせたそうなのであるが、全く覚えがなかった。とはいえ、その場にいたと言われたら覚えてないとも言えず、思い出した振りをしておいた。振りに振りを重ねてそのうち本当の自分が分からなくなるのではなかろうか。一部始終を聞き終わった怜は、

「それなら自分で謝りに行けばよほど早い」

とは言わなかった。さすがにそのくらいのことは分かった上で頼みに来たのだろう。

「わたし自身はね、別にサラサは悪くないと思うんだけど、ただわたしがどう思うかは大事じゃないからね。大事なのは、サラサが塩崎くんと仲直りしたいってことだから」

杏子は行き届いたことを言った。自分のことでないとはいえ、我意を抑えることができるとは珍しい女の子である。一方、澄は納得の行かない顔をしていた。そんなに下手に出ることはないんじゃないかという色がありありと見える。

「よ、よろしくお願いします」

軽く頭を下げてきた更紗に、怜はやるだけはやってみるよと言ってから、薄暗い曇り空のもとを校門に向かって歩き出した。

第１０１話：仲直りの使者（後書き）

ようやく更新できました。
もし待ってくださってた方がいたら嬉しいなあ。
次話に続きます。

第１０２話：『イーストボウル』の攻防（前書き）

前回からの続きになります。
輝ｖｓ怜。
お楽しみください。

第１０２話：『イーストボウル』の攻防

待ち合わせ場所に指定したボーリング場。その駐車場入り口で輝（ヒカル）を見たのは校門を出てから十分ほどしたころのことである。天高くそびえるポールにつけられた「イーストボウル」という看板の下、輝は柔和な笑みを湛えていた。

「告白するにしてはあんまり色気の無い場所だけど、ここでいいのか、レイ？」

表情から窺える通り機嫌は良さそうである。怜（レイ）は駐車場入り口から少し離れたところに誘いつつ、自分には既に運命の人がいる旨、輝に伝えた。

「ああ、川名さんだろ。可愛いけどなんか独特の雰囲気がある子だよな」

「逆だろ」

「ん？」

「独特の雰囲気があるけど可愛いんだよ」

輝はちょっと驚いた顔をした。

「レイってそういうヤツだったのか。新しい発見だなあ」

「オレがそう言ってたってこと、タマキに会ったらそれとなく言っておいてくれ」

「え、オレが？」

「点数を稼ぎたい」

「何だ、そういうことか」

「それ以外にあるか？」

歩道を少しあるいたところで怜は立ち止まった。天下の往来であるが、そう時間をかけるつもりではない。歩道の幅も広いし大した通行の邪魔にはならないだろう。おもむろに怜が本題に入ると、にこやかに微笑んでいた少年の顔はみるみるうちに能面に変わっていった。

「呆れたな……」
　怜が用件を伝え終わると随分長い間沈黙があって、やがてぽつりと聞こえてきた言葉がそれだった。
「もう少しマシな人だと思ってたよ」
　輝のまっすぐな瞳に軽蔑の色が濃く漂っていた。怜は、少しでもマシな人間になれるように日々努力はしているのだが、それがなかなか実らないのだ、と答えた。
「十年計画だな」
　輝は顔を横に振った。繊細な黒髪がさらさらと揺れる。
「違う」
「十年じゃ足りないって？」
「いや、そうじゃない。レイのことを言ったんじゃなくて、オレが言ったのはサラサちゃんのことだよ」
　怜は先手を打つことにした。確かに、自分で行動する前から第三者に仲裁を頼むのはまっとうな行為とは言えないかもしれない。しかし、それも理由による。更紗が自分で輝に会いに行かなかったのは臆病だったからではなく、単に可能性の問題である。自分で会いに行くよりも第三者を介した方が成功する見込みが高いと踏んだだけの話。
「つまりはそれだけお前との仲を大切なものだと考えてるってことだよ」
　怜の熱弁は聞き手を感動させたりはしなかった。千の涙の代わりに得たものは、一つのため息のみである。気持ちを落ち着かせる時間を取るかのように俯く輝を見て、怜はどうやら旗色が悪いということに気がついた。短い付き合いではあるが、怜なりに輝の人となりを見たところ、彼の一番の特徴は、
「嫌いなんだよ。こそこそする人ってさ」
　潔癖であるということだった。
「言いたいことがあるなら自分で来ればいい。仲を大切にしてるって？　仲ってどんな仲だよ？　必死になって繕わなければいけない

仲なんかいっそ破れた方がいいよ。くだらない」

困ったことに、これには怜も全く同意であった。気を遣わないと維持できない関係など、およそ友人関係とは言えない。もちろん、親しき中にも礼儀があり、友人関係にも最低限のわきまえは必要であるが、それ以上に注意を払う必要があるとしたら、それは友人ではなく、単なる隣人である。たまたま社会生活上近しい位置にいたという人であって、円滑な社会生活を送るためにある程度の社交性が必要とされるに過ぎない。

「隣人としての敬意は払ってるつもりだよ。それ以上のことをしてくれって言われても困る」

輝ははっきりと言った。言外にあるメッセージに怜は気がつかない振りをした。怜には関係の無い話である。

それはそれ。理は彼にある。理で押せないのならば、情で引くほかないのだが、情に訴えるのは怜の得意とするところではなかった。とはいえ、手が残されていないなら苦手でもやるほかない。そもそもなぜ自分がこんな目に遭っているのか。怜は極力考えないようにした。とかく世は渡りづらい。そういうことである。

「一回の失言くらい許してやれよ」

「一事が万事だよ、レイ。サラサちゃんのことはもう良く分かった」

「人は変わることもある」

「それを認めるとしても、変化を待たなきゃいけない義理はないだろ」

取りつくしまもない。怜はだんだん面倒になってきたが、そんな自分を必死で鼓舞した。依頼者連には期待はしないように言っておいたが、とはいえ、単に「説得してみたけど無理でした」ではお話にならない。眉を吊り上げる澄（スミ）の顔とがっくりと肩を落とす更紗（サラサ）の様子が頭に浮かんだ。やれることは全てやっておかなければならない。怜は、今回の不仲のきっかけを作った更紗の発言について言及した。彼女はそれほど大したことを言ったわけでもないのだから気にする必要もないだろ、と。

「レイは聞いてなかったからそんなことが言えるんだよ」
確かに聞いてなかった。ただし、更紗の発言の要旨は先ほど聞いて知っていた。委員会活動のとき、仕事をサボっている委員を注意しようとした輝に、「自分に関係のないことをするな」と言ったそうなのである。今の自分にこそかけてもらいたい言葉だと怜は思った。
「言ってる内容もだけど、言い方もイライラした。あの口調！　母親は一人で十分だと思わないか、レイ？」
一人でもひとり多すぎるくらいである。
「だろ。いかにも『あなたのことを考えてます』みたいな言い方でさ。二人目の母親は要らないよ。何かの面倒をみたいなら、ペットでも飼えばいい」
女の子の言動に耐えることによって、男の子の格というのは上がっていくのである。
喉元まで出かかった言葉を怜はどうにか抑え込んだ。自分ができないことを他人に要求するのは傲慢というものである。沈黙が落ちた。
どうやら怜にできることはもう無いようだった。理では勝てないし、情に訴えてもダメだった。できることはやり尽くした。このままきびすを返しても誰にも責められまい。勝敗は兵家（へいか）の常である。
しかし――
この期に及んでもなぜか怜の足は帰路を取ろうとはしなかった。もうやり残したことは無いというのに。弓折れ矢尽きてもなお前に進もうとするのはなぜか。そのとき怜の頭に、一人の少年と少女の姿がほわほわと浮かび上がってきた。怜を特使に推薦してくれた二人である。全くいまいましいことだ。怜は二人の友人の価値を再確認すると、頭を少し前に倒した。
「レイ、聞きたいことがあるんだけど」
「何だよ？」
怜の目は輝の足元を見ていた。

「サラサちゃんのこと好きなのか？」
「……まあ、嫌いじゃないっていう意味ではそう言ってもいいけど」
「大して好きってわけでもない？」
「ヒカル、一つ諺を教えてやろうか。『壁に耳あり』」
「じゃあ、何でサラサちゃんのために頭まで下げるんだよ。理屈に合わないだろ」
「こっちにも色々事情がある」
とはいえ、これ以上のことは本当にもうできなかった。ここから先、更紗のために何かをすればそれはウソになる。怜ができる限界がここまでだった。
地から乾いた音がニ、三度上がった。輝の足が軽くアスファルトを叩いていた。
「分かったよ。分かったから、頭を上げてくれ。負けたよ、レイには」
顔を上げた怜の目に、整った顔立ちがしかめられるのが映った。輝は、大きく深呼吸すると、地面に下ろしていた鞄から携帯電話を取り出して、咳払いをした。怜は自分の役割が終わったことを知った。どうやら成功したようだ。輝が電話に向かって詫びている言葉が怜の耳に聞こえてきた。
「レイは優しいな」
しばらくして携帯を切ると、輝は微笑んだ。
「そう思ってくれる人は本当に少ない」
「その優しさにオレも甘えてもいいか？　是非聞いてもらいたいことがあるんだけど」
「確認させてくれ、それは今回の件と関係あることか？」
「あるよ」
「じゃ、ダメだ」
「ええっ！」
驚きの声を上げる輝に、怜はもうこの件に関わるつもりはないことを厳かに告げた。

輝は食い下がった。
「一言で済むんだ、聞いてくれてもいいだろ」
「言えばお前は楽になるかもしれないけど、オレの身にもなれよ」
「なんだかサラサちゃんとオレへの対応が違うような気がするんだけど気のせいか？」
「気のせいだ」
「だと思ったよ」
輝は大げさに長いため息をつくと、鞄を肩にかけて、歩き出した。これから更紗に会って直接話をするらしい。怜は輝の後ろ姿を見送ったあと、疲労している自分に気がついた。恋の仲立ちなど、柄ではない役回りを演じた代償である。怜は、ヒロインを想う誠実な友人という実にインチキくさい役に自分をスターリングしてくれた二人の監督へ抗議のメールを打ち始めた。

第１０３話：暮らすということ

暮らすということは片づけるということである。

部屋の整理を考えてみよう。

部屋は日々乱雑になる。新しく持ち込まれた物が整然とした空間を侵食していくのである。新来の客に居場所を与えてやらずおろそかにしておくとどうなるか。その辺にはしたなく散乱することになる。テーブルの上、ベッドの下、壁のそばなどに散らばって、部屋はとっても使用に耐えられなくなってしまう。

人生もこれと同じだと、環（タマキ）は思う。日々、自分という部屋にさまざまな問題が持ち込まれてくる。それをその都度ちゃんと解決しなければ、問題はうず高く積み上げられ、風通しが悪くなり、結果、心が淀むことになる。問題は、即、片づけなければならない。

「怒ってるよな、タマキ？」

隣からかけられた声はおそるおそるといった風だった。環が、いいえ、と静かに答えると、何を感じ取ったのかは知らないが、相手はちょっと身を引くようにした。そんな失礼な彼の名は、瀬良太一（タイチ）。クラスメートである。すっと高い背に整った顔立ち、他人を笑わせることがうまい社交的な性格でもって人気の男子だった。

二人がいるのは、学校の近くにある公園である。日没にはまだまだ時間があるが曇天のため既に辺りにある光は弱々しかった。園内では元気よく走りまわっている子どもたちがいて、彼らの大音声が陰鬱な空気を力強く打っていた。

しょんぼりと肩を落とす振りをする太一に、環は別に怒ってなどいないことを伝えた。問題にしたいことがあるとすれば時間である。できれば早く終わらせたい。今日はこれから塾があるので、あまり割ける時間が無いのである。

うなずいた太一は携帯電話を取り出すと気忙しげに電話をかけ始めた。抑えてはいるがちょっと強めの声を電話に向かって出すと、

もう来るから、と環に向かってバツの悪い笑みを見せた。うなずく環の脳裏をふっとよぎる顔があって、彼女はつい自分の律儀さに思わず笑みをこぼした。

「どうしたの、タイチくん？」

自分の頬をつねるという奇矯な行為をしている少年に環は怪訝な目を向けた。

「いや、いい顔で笑うなあ、と思って」

「ありがとう」

「レイのこと考えてただろ？」

「いいえ」

「ウソつけ。タマキが怖くなくなるのは、レイがらみのときだけだからな」

「怖い？」

環は白い首を少し傾げるようにした。女の子に対する形容としてはなかなか秀逸である。タイチくんは何か勘違いをしてるんじゃない、とだけ言って環は口を閉じた。どうやら待ち人が来たようだ。

人を待たせておいてなかなかふてぶてしい態度でのっそりと歩いてきた少年は、同級生だった。クラスは違うが何度か顔を合わせたことがあり、言葉を交わしてもいる。太一と同じくらいの背をちょっと猫背気味にして歩いてきた彼は、環と太一の前で立ち止まった。アシンメトリーにカットした髪からのぞく左耳、そこにピアスが見えた。

少年はじっと太一に目を向けたが、太一がその場からちょっと離れただけでそれ以上動こうとしないので軽くにらむようにした。太一は視線を受け流すような振りで、

「頼んできたのはそっちだろ。オレには見届ける義務があり、そして権利もある」

軽やかな声を出した。

あまりに明るくからっとした声だったので、少年は怒る気力が失せたような顔をして、環の方を向いた。しかし、目は合わさずに、

「タイチに聞いたと思うけど……」
慎重な出だしから、
「俺さ、川名のこと好きなんだ」
一気に結論に持っていった。
環は神妙な面持ちで小さくうなずいた。
確かに聞いていた。放課後、下校しようとしたところで太一に呼び止められた環が、用件を聞いたところ、友人が話をしたがっているので時間をもらいたいと言う。何の話か聞くと、いつも陽気な太一が珍しく歯切れが悪い。強張る舌を無理に動かすようにして彼が言ったのが、つまりはそういうことだった。
「わたしに付き合っている人がいるってこと知らないの？」
などとは問わなかった。さすがにその辺りの事情は太一が斟酌してくれているはずである。それにも関わらず、あえて告白しようとする彼と、仲介の労を取る太一に対して、不快でなかったといえば嘘になる。とはいえ、不快なことが起こるのが人生なのである。それに対応するしかないのが人間である。
告白を受けてから環は少し時間を取った。いきなりのゴメンナサイでは、彼の立つ背がないし、また他にも言いたいことがあるなら言わせなければならない。
「一年のときからずっと好きだったんだ。加藤と付き合ってるのは分かってるけど、どうしても自分の気持ちを伝えたくて……」
それきり彼は黙ってしまった。
人から好意を伝えられて素直に嬉しいという気持ちはある。しかし、もし彼が伝えなかったら、その想いをずっと秘めたままだったら、彼にもっと好意を抱いただろう。カレシを持つ女の子に対して、彼女の気持ちを考えもせず、ただ自分の思いを押しつけようとしてくる行為には美が欠けている。それだけせっぱつまっていたと言えばそうだろうし、そういう焦心を笑うような不遜さを環は持っていないが、それを差し引いても、彼の行為は粗雑である。
――レイくんならそんなことはしない。

これは環の本意ではないが、非常に簡単に言うとそういうことでもあるのだった。

環は、好意は有り難いが付き合っている人がいてその人のことがとても好きなので告白の言葉だけしかいただけない、ということをはっきりと告げた。

相変わらずわんぱくな少年少女たちのにぎやかな声が響く中、小さな舌打ちの音が聞こえた。

「あのさ、聞いていい？」

ぶっきらぼうな声である。どうやらそれが彼の心内にある景色だったらしい。荒涼としている、と環は思った。

「加藤なんかのどこがいいの？　百歩譲って、瀬良なら分かるけどさ。加藤なんかより絶対俺の方がいいって」

馬脚を現すというのはこういうことを言うのだろう。かすかにあった彼への憐れみの気持ちはこの瞬間にきれいさっぱり霧消した。環は指先を手の平に食い込ませるようにした。自分のことはどう言われても痛痒は無いが、レイのことを悪く言われていつまで黙っていられるか、そんな自信は毛の先ほども無かった。それでもどうにか平静を保つことができたのは、こういう男に法を説いても仕方がないという深い諦めからである。

「加藤なんて全然パッとしないだろ。あっ、もしかして、そういう趣味の人なの、川名って？」

心の奥に凶暴な欲求が津波のようにうねりを上げるのを環は感じた。

言ってやろうか。

怜（レイ）くんが花なら、あなたは雑草だと。

怜くんが詩なら、あなたは落書きだと

怜くんが月なら、あなたは電灯だと。

そんな雅趣のあることを言っても通じるかどうか分からない。もっと直截（ちょくせつ）な言葉の方がいいかと思って、唇を開こうとしたところで、

「そこまでにしとけよ、武田」

傍観者が割って入ってきた。
「オレはお前に殴られたくない」
「は？　何で俺がお前を殴るんだよ？」
「親友の悪口をこれ以上言われてみろ、どうしたってまずオレがお前を殴らなきゃならない。当然、お前は殴り返してくるってわけだ。あ、そうだ、顔はやめてくれよ」
太一の冗談めかした声がその場の緊迫したムードを一気に白々しくした。武田少年は一度土を蹴って苛立ちを示すと、それで格好がついたと思ったのか、来た時と違って肩をそびやかすようにして去って行った。
環は握りしめていた手を開いた。爪の食い込んだ手の平がじんじんと痛みを伝えてくる。爪の痕がついた。
「タマキって結構簡単にキレるよな」
「わたしが？」
ちょっと離れたところから話しかけてくる太一に、環は平然とした声を出すと、キレそうだったのはタイチくんの方じゃないかな、と言って彼の顔を渋くさせた。悪かったよ、と謝る太一の言葉を背に受ける格好で、環は公園を後にした。努めて気持ちを落ちつけようと静かな足取りで歩道を歩いていると、一定の距離を置いて太一がついてくる。彼なりの罪滅ぼしのつもりなのだろう。一度断ったが聞き入れないので、好きにさせておいた。
環には今回の件に関する太一の真情が分かる気がした。彼は一見軽薄に見えるが、それだけではなく純粋な面を多分に持っている。おそらく今回仲介役を買って出たのも武田少年に同情したのだろう。もしかしたら彼に自分を重ねていっそう憐憫の情が湧いたのか、というところまで考えを進めてしまった環は、自分が少々意地悪いことを考えているのを感じた。気持ちがとげとげしている。
そんなとき、ふと着信を告げた携帯にメールを見せられてしまったのが、運のツキだった。メールは怜からである。友人同士の仲違いの仲裁役に彼を推薦してくれたことに対して、丁重な批難の文が

書かれてあった。それに思わず、
「ごめんなさい」
と返信してしまった環はハッとして、しまったとほぞを噛んだが、むろん後の祭りだった。
自分は自意識過剰なのだ、そうに違いないと思いたかった環だったが、家の玄関に入ったときに男物の靴があるのを見て、幼い妹がきゃっきゃっと嬉しそうな笑い声を上げているのを聞いて、全てを諦めた。諦めて覚悟を据えた。今日は支払い日に違いない。日頃の不徳のつけを払う。
リビングで小学一年生の妹に抱きつかれていた怜は、環が入ってくるのを見ると軽く手を挙げた。それに応えられたのだから自分をちょっと褒めてやりたい。
「じゃあ、またね、アサちゃん」
立ち上がった怜に、妹は甘えるように抱きついた。
「えー、もう?」
「うん。今日はタマキお姉ちゃんに借りてた教科書を返しに来ただけだから」
「次はいつ来てくれるの?」
ぶうぶう言う少女の頭に怜は手をおいた。
旭はえへへと笑って、くすぐったそうに身をよじった。
玄関から門まで見送って行く格好で環が怜を先導すると、後ろから一度だけ怜の声がかかった。
環は答えなかった。それを答えと受け取ってもらいたいという意である。
そのまま通用口から外へと出ると、門の外で環は怜と向かい合った。
怜は立ち去らない。
じっとこちらを見てくる怜の正視に耐えきれず少し目を下げたところ、環は髪を撫でられるのを感じた。優しい手だった。びっくりしてそれでも少しそのままでいたあと、そろそろと目を上げると、

環の目にあさっての方を向く怜の顔が映った。今日は夕日は沈まない。してみると、少し彼の横顔に赤みがかかっているのが、何を意味しているのか。それを考えたときに、環の鬱屈した感情は綺麗に晴れた。

怜の手が環の髪から離れた。代わりに目を環に合わせて、

「ま、アレだよ。タマキにもたまには頭を撫でられたくなるときだってあるだろ？」

確認するように言ってから、

「いや、頼むからあるって言ってくれ」

懇願口調にした。

「……あるって言ったら、もう一回してくれる？」

怜は少し笑ったようだった。

「もう必要ないみたいだな」

「ゴメンネ、レイくん。わたしってダメな子だな」

「だったら今からしっかりしてくれ。カップルがどっちもダメだったら目も当てられない」

怜は背中を向けた。その背に声をかけようとして、しかし環は思いとどまった。その資格はまだ今の自分には無い。いつか得られるようになるのかと言えば、それも非常に心もとない。ため息しか出てこないのだが、彼のためにため息をつける自分であることに喜びを覚えているのも事実である。

環はしばらく門前に佇んでいた。

地に広がりつつある薄闇の中で、遠ざかる怜の背だけが鮮やかな白だった。

第１０４話：東から吹く風

風が弱くなった。

吹きつけるような風が少しやわらいだようである。

宏人（ヒロト）は、ほっとした。

風は北から吹いている。

北風を恐れるとは情けない。そういう声もあろう。宏人としても、北から吹く寒風に敢然と立ち向かうことができる己でありたいと、そう願わないこともないが、実行に移すことは少ない。風にさらして赤くなった頬を見せて、「男らしい！」とか「か～わいい！」とか女子にきゃぴきゃぴ言われるならやってもいいが、当節ではめっきり赤丸ほっぺの需要は少なくなった。北風に立ち向かっても、一人波止場に佇むトレンチコートのダンディのごとく、何となく絵になるだけで実益が無い。

文より質、というモットーを持つ宏人は、北風吹くときは、家の中でおコタに入ってやり過ごしみかんを食べながら気を練り上げればよい、という考えの持ち主だった。行動するのは春になってから。地中の虫と一緒にもそもそと動き始めれば良いのである。

宏人にとっての春とはすなわち三年生時のことだった。現在の二年のクラスは、ちょっとしたトラブルがあって、一寸先は闇、宏人にとって極寒の地と化した。魂さえ凍てつきそうな寒さである。これを耐え、耐え抜いて、三年時という春を待つ。三年になればクラスが変わる。新しいクラスでのデビュー。忍耐の時期を一年持った宏人には、おのずと威厳のようなものが備わっていることだろう。

「ヒロトくんって他の男の子とちょっと雰囲気違うね」「うん、大人だよね」的な感じで、一躍女子の注目の的となり、あまつさえ春風のように優しく繊細な少女との出会いなんかもあることだろう。

それまでの我慢である。

そんなことを思っていたわけだが、どうやら冬は九ヶ月後の三年

時を待たずして早々に終わりそうだった。
「飲むか？」
給食後のお昼休み。教室である。ぺちゃくちゃとかまびすしい話し声の合間に時折おたけびのようなものが上がる。後ろで数人の男子が教室をプロレスのリングに見立ててじゃれあっているのだった。
差し出されたカップを宏人は受けた。カップといっても、水筒についているキャップである。宏人は中身を飲み干すと前の席に座った少年にカップを返した。まっすぐな眉と浅黒い肌に強靭なものを感じさせる少年である。彼はカップを手にすると、水筒から自分の為にアイスティを注いだ。富永一哉（カズヤ）。それが彼の名であり、春の使いの名であった。
一哉を仲間に入れてから四日が経っている。
「富永くんをわたしたちのグループに入れれば、クラスから一目置かれるようになる」
という志保（シホ）の言葉通りのことが起きつつあった。現に今も、遠巻きに視線を感じる。一哉の存在が女子の目を集めているのだ。これまで男子のルックスなど特別意識したこともなかった宏人だったが、よくよく間近で見てみると確かに人目を引く華やかさが彼にはあった。
「今日帰りにうち寄ってけよ、ヒロト」
「オレはもう犬にはならないって妹ちゃんに伝えてくれ。自分の演技力の無さに絶望したってさ」
「その絶望から救いたいんだよ。なんかお前のこと気に入ってるらしいんだよ、ミズホ」
「……兄の目から見てどう？　将来、美人になりそう？」
「さーな。あ、でも、アレだ。あいつがでっかくなったバージョンならこの学校にいるぞ」
「え？　もう一人妹さんいんの？　一年生か。かわいい？」
「気持ち悪いこと言うな。妹がかわいい訳ないだろ」
「客観的にだよ」

「なおさら気色悪いだろ。何だよ。妹を客観的に見るって」
「写真とか持ってないの？」
「おい！」
優れているのは外見だけではない。ちょっと荒々しい所作があって人に誤解を与えるところがあるが、そして実際、宏人も付き合うまでは「怖いヤツに違いない」と思っていたのだが、予想に反し一哉はいいヤツだった。冬空のようにからりとした性質で率直、嫌味がない。小気味良い付き合いができそうな子である。
「あの、富永くん、倉木くん。わたしたちも混ざっていい？」
「混ざって何を話すんだよ？　昨日のバラエティ番組の話か？　そんな話されて貴重な昼休み時間潰されたくないから、ダメだ」
宏人はショックを受けた二人の女子の顔を見た。勇気を出して話しかけたのにすげなく断られてすごすご引き返す二人。
このように率直が過ぎる所もあるが、本人に言わせれば、建前で人と付き合っても時間の無駄で得るものはないということだ。
「だから二年になってからクラスのやつとは誰ともつるんでなかったんだ。クソみたいなのしかいないからな、あのクラスには」
とは、初めて親しく話したときの一哉の言葉である。
「今んとこは、お前だけだ。ロクなヤツは」
「なんでオレ？」
「藤沢に聞いた。お前、あいつのこと助けたんだろ。ちょっとその時のシーン覚えてないんだけど」
あれで助けたといえるかどうかは分からない。今思えば激情に任せて給食のスープを周囲にひっかけてやるくらいのことはしても良かったのかもしれない。
「何の関係もない女をお前は助けたって聞いて。ああ、そういうヤツなのかって。お前らのグループに入ろうって思ったのは、それが半分。あとの半分は、藤沢の押しの強さだけどな」
「どういう勧誘の仕方をしたんだ？」
「勧誘って言うか、ほぼ脅迫だけどな。まず弟を手なずけて――何

でも年の離れた弟がいるからお手のものらしい――次は妹だ。あいつ自分はあの髪なのに、髪の結び方とか知ってるみたいで、妹の髪を結んだりリボンをあげたりしてな。つれないヤツラだよ。これまで世話してやった恩を忘れて、たった三日で藤沢にべったりになりやがった。で、今度はお袋だ。仕事から帰ってきたお袋が夕飯を誘ったら、さっさと横に立って準備を手伝って、お袋にも気に入られた。それで、オレがグループに入るまで毎日来ると言う。毎日来られてみろ。兄の威厳は損なわれ、母親はついにカノジョができた息子を生暖かい目で見ることになる。お前なら耐えられるか？」

宏人は自分に置きかえて想像してみて、ぶるっと体を震わせた。

「だろ？　だからこの前の日曜日に来た時に観念したんだよ。まあ、これはこれで楽しくていいけどな。クラスで誰か話すヤツがいた方がヒマつぶせるし、藤沢は面白そうなこと考えてるんだろうし」

志保が何を考えているにせよ、おそらく「面白い」ことではないだろう、と宏人は思った。それは既に骨身に沁みて分かっている。

「倉木くん、富永くん……あの、ちょっといいかな？」

幼い弟妹の世話という所帯じみた話で談笑していた二人のところへ志保が現れた。

ぼそぼそっとした声は対クラス用のカモフラージュである。

宏人と一哉は促されるまま席を立った。導かれた先は生徒用玄関である。何人かの男子が、まだ小学生時代をひきずっているかのように玄関前の廊下で鬼ゴッコに興じていた。下靴をつっかけてちょっと外に出たところで、志保はきょろきょろと辺りを確認してから、二人にまむかった。

「パンダ」

一言いって志保は口を閉じた。宏人は一哉と顔を見合わせた。

「富永くんのことよ」

二人の「こいつ何言ってんだ」的な視線に、志保は答えた。

「客を引き付ける客寄せパンダが富永くんの役割でしょ。さっきの何？　折角お客さんが来てくれたのにどうして威嚇したりすんのよ

？」

そう言って志保は、先ほど女子が話しかけてきたときに追い返した件について、一哉を批難した。

「もっと客に媚を売ってよね。今日の夕飯抜かれたいの？」

一哉はつくづく感心したような顔で、志保ではなく宏人を見た。

「おい、ヒロト。お前、よくこいつと付き合えるなあ」

「慣れだよ、慣れ。それにお前にはオレがついてるから大丈夫だ、がんばろうぜ」

「二人ともやめてくんない、うっとうしいから。とにかく富永くんはもっと女の子に愛想良くして」

「ニヤニヤしてればいいのか？」

「にやけなくていいから。今みたいでいいじゃん。こんな感じで他の子とも話してよ」

「何か女子って苦手なんだよなあ。あの間延びした話し方聞いてると、『起きろ！』って肩を揺さぶりたくなる。今みたいにって言うけど、藤沢は例外だよ。お前、ホントに女子か？」

「……倉木くん、お願い、その辺から鈍器的なもの拾ってきて」

宏人は、残念ながら玄関前の清掃は行き届いている旨、答えた。

「仕方ないなあ。じゃあ、わたしの友だちで女の子っぽい子を紹介するから、その子で女の子とのおしゃべりの練習をしてもらうことにするわ」

「めんどくせーな」

「面倒くさいのよ。でも、やってもらう。放課後、時間空けてね。もちろん、倉木くんも」

それだけ言うと、志保は踵を返した。放課後は部活があるからと宏人が断る前に、彼女はさっさと下靴を上靴に履き替えていた。すがすがしいほど傲岸不遜である。

「ヒロト、お前、藤沢と付き合ってんだろ？」

心から同情するような一哉の声を聞いた宏人は、志保が自分史上二人目の「チョーイライラさせられる人間」だと言うことを以って

答えとしておいた。

第１０５話：策謀の季節

その日の放課後のことである。
幼稚園児が目いっぱい水色の絵の具で塗りたくったような気持ちの良い空の下――
グラウンド近くの一角を占める陸上部の部室。
今しがたその戸を閉めて部室に背を向けた宏人（ヒロト）は胸を押さえた。
「この頃休みがちだけど具合でも悪いのか、ヒロト？　無理しなくていいからな」
思いやりの込められた言葉が耳に残っている。
ついさっき部活を休むことを告げたときの部長の返事である。
近頃ちょこちょことズル休みしている宏人に対して部長は優しかった。彼が優しいのはその性格にもよるのだが、宏人への信頼もある。これまで一年余の間せっせと部活動に励んだ宏人のことを信じているのだ。ズル休みなどするはずがない、と。
その信頼がいつまで続くかと考えるとうすら寒いものを覚える宏人である。頻繁に休めば、さすが温厚な部長であってもいつかは疑いの目で宏人を見るようになるだろう。それだけではなく、「お前の陸上への情熱はウソだったのかっ！」と怒りの形相で胸倉を引き絞られたり、
「やる気が無いならやめっちまえ！」
もしかしたら殴られたりもするかもしれない。温厚な人ほどいざキレると恐いのである。
もわもわと修羅場を想像した宏人が身を震わせながら歩いていると、
「あれ、倉木くん。今日も帰っちゃうの？」
体育着の少女に呼び止められた。
宏人は、体調が悪いからと言って顔を横にした。
「へー、でも、その割には顔色良さそうだなあ」

少女は同じ陸上部である。結構仲が良い。というか、陸上部は男女問わず和気あいあいとしているのだった。

わざわざ回り込んで来てまでこちらをじろじろ見てくる彼女の前で、宏人はごほごほと咳をしてみせた。

「あんまり近づかない方がいいよ、篠田。なんかしらの病気がうつるかもしれない」

「なんかしらってなーに？」

「なんかあるだろ、いろいろと。インフルエンザ的な」

少女はますます怪しむような顔を作ったが、それ以上は追及しなかった。その代わりに、倉木くんがいないとつまんないなあ、と言いながら後ろ手に手を組んで少し歩き、石など蹴っ飛ばしてみせた。短めに揃えた黒髪が彩る顔には一転、寂しそうな影が見えた。

宏人は今すぐ部室に戻って、やっぱ今日部活出ます、と言いたくなる衝動をどうにかこうにか抑えつけた。そうして、抑えつけなければいけない自分の境遇が何とも哀れに思えてきた。宏人は首を横に振った。自分を哀れんでも仕方がない。また明日、と言って少女に一声かけたのち、宏人は哀愁を払うように決然と足を進めた。

運動着を身につけてグラウンドに向かう一団をやり過ごしつつ、制服姿の帰宅組の後を追う宏人。気のせいか。どうも志保（シホ）と付き合うようになってから失ったものが多いような気がする。クラスでの平穏、マドンナへの恋心、親友からの信頼などなど。これに加えて、部内での信用が失われる日も近い。いろんなものを失ってみて初めて宏人は自分が結構な物持ちだということに気がついた。それも価値あるものである。当たり前に思えていたものが実は当たり前のものなんかじゃなくて、大切なものだったのだ。

――それに気がつくことが人生で最も大事なことだったんだ！

宏人は真実に目覚めた。

そうしてしみじみ思った。

この世には知らなくても良い真実がある、と。

悟りを開いた少年が俗人どもに混じって歩いていった先に校門が

あって、少し出たところで一人の少女が佇んでいた。人待ち顔の女の子が待つのは当の自分。男子中学生なら誰もが憧れるシチュエーションだとちょっと前までは思っていたのだが、何事にも例外はある。宏人は全く心躍るものを覚えなかった。

――ヒロトくん、遅いよ。

――ごめん、ごめん。委員会が長引いちゃってさ。

――謝るだけじゃダ～メ。コンビニでアイスだからね。

――えー、マジで？

　という感じのニュアンスで、怒るフリをする可愛いカノジョをこちらも宥めるフリをする。周囲のイライラ度が上がるのにも構わずにいちゃいちゃしながら帰る二人。ああ、青春。

　しかし――

「遅いよ、倉木くん」

「別に遅くないだろ。授業終わってから速攻で部室行ってそれからすぐに来たんだぞ」

「女の子を一秒でも待たせれば遅いってことになる」

「忘れたのか。お前には男疑惑があるんだぞ」

「その疑惑には根も葉もない」

「どーだか」

「じゃ、確かめてみる」

「え？」

「二人きりのとき裸にでもなろうか？」

「バ……何言ってんだよ！」

　現実はこんなもんである。

　勝利のニヤニヤ笑いを浮かべる志保。その近くにもう一人少女の姿があって、少し顔を伏せるようにしていた。志保が名前を呼ぶと、少女は顔を上げた。頬を覆うほどの短めの髪の彼女は、柔らかな目元に微笑をきらめかせていた。

「友だちの晴山岬（ミサキ）ちゃん。こっちがクラスメートの倉木宏人くん」

「何だよ。カレシって紹介しろよ。照れてんのか？」

志保が軽く睨むようにしてきたが、宏人は無視した。コホン、とわざとらしい咳をした志保は、カレシの倉木宏人くんです、といささか白々しい声ではあったが言い直した。えっ、と驚いたような顔をする岬に見られて渋い顔をする志保。宏人は満足した。一週間レンタルのビデオではないのだ。借りは即時返却が基本である。

志保の紹介に合わせて二人が少し話をしていると、やがて一哉（カズヤ）が現れて、宏人からすれば理不尽極まりないことに、遅く来たことを全く叱られもせず、志保から指示を受けると、そのままおとなしやかな少女と連れ立って歩き出した。これから一哉が彼女を家まで送っていく過程で、女の子との話し方を岬がレクチャーしてくれるということになってるそうだ。宏人は志保の手まわしの良さに呆れ顔を作ったが、

「別に今日の今日で頼んだわけじゃないって。富永くんがグループに入ることをOKしてくれた日の夜に、もしかしたらと思って前もって頼んでおいたんだ」

と聞いて尚更呆れた。

「ミサキちゃんは女の子っぽいから適役」

「ぽい」という所がちょっと気になったが、そこは突っ込まないことにした。なにせ志保の友だちである。突っ込んだところから何が現れるか分かったものではない。触らぬ神に祟りなし。

何も言わず歩き出す志保の隣に宏人は並んだ。「女子の気持ちをわしづかみトーク」を習わなければならない一哉は分かるとしても自分がどうして呼ばれたのか。聞きたい気持ちはやまやまであるが、大して聞きたくない気持ちも同じくらいある。彼女の口から出る魔法の言葉は、きっと新たな世界に宏人を導くことだろう。その世界をワクワクして待つような、少年冒険漫画の主人公のような無鉄砲さは宏人には無い。

学校から離れ、いつぞや盟約を交わした誓いの喫茶店「シルビア」の横を通り過ぎる頃、周囲から制服姿がはけてくると、志保は用件を話し始めた。当然、「二組支配計画」の件である。彼女は一哉に

続いて、二人目の仲間を入れると告げてきた。
「浅井信吾（シンゴ）」
宏人は名前と顔を一致させるのに数秒の時を要した。三十数名しかいないクラスメートの中で思い出すのが難しい。そういう存在感の男子であった。
「金城明菜（アキナ）が、浅井クンのことを好きらしい」
新たな仲間の選別理由である。それで説明は済んだとでも言わんばかりの顔で志保は口を閉じた。そうして大体、彼女の意図するところが分かってしまう自分が宏人はあんまり好きではない。金城明菜は女子のメジャーグループのトップ付近にいる。リーダーの吉田と昵懇（じっこん）の仲である。
「浅井クンを仲間にしてうまく金城サンを引き寄せれば、女子グループの仲間割れを誘えるかもしれない」
恋を囮に友情を壊す。
つまりはそういうことであった。
「お前よくそういうこと考えられるよなあ」
「お褒めにあずかりました。でも、成功するかどうかは倉木くん次第」
「なにすればいいんだよ」
「まずは浅井クンと仲良くなってもらいたい」
「またデートしろとかいうのはやめろよな」
と言ってしまってから宏人は後悔したが、志保は、それも面白いかもね、と言って小さく笑っただけだった。てっきりまた瑛子との件を追及されるかと思っていたのだが、宏人の口が堅いので、さすがに諦めたのだろうか。
同じような形をした一戸建てが立ち並ぶ住宅街に入って、いったいどこに向かっているのかいい加減訊くか、と宏人が思い始めた頃、志保は一件の家の前で足を止めた。表札には「藤沢」とある。こじんまりとした門を片手で開いて、敷地内に入った志保は、宏人に入るよう促してきた。色とりどりの花で彩られた小道をちょっと上る

とすぐに玄関である。
「ちょ、ちょっとタイム、シホちゃん」
振り返った志保は澄ました顔をしている。
宏人は手を差し出した。
「鏡持ってないか？」
志保は肩かけ鞄の中をごそごそした。宏人は、志保から受け取った手鏡で自分の顔をしげしげと検分した。毎日見慣れた、男の子にしてはちょっと細くて柔らかい線を持つ顔が映っている。特別変なところが無いことを確認し終えると、宏人は手鏡を返した。
「気が済んだ？」
「ああ……いや、ちょっと待て！」
「今度は何？」
「手土産！　手土産が無い！」
「要るわけないでしょ」
「これだから女はいやなんだ」
宏人は大きく両手を広げた。
志保は小さく首を横に振ると、戦々恐々とする宏人に背を向けて、玄関のドアノブへと手を伸ばした。

第１０６話：友だちを作る賢者の書

ドアを開けて志保（シホ）が「ただいま」と言うと、その声に応じるかのようにトコトコと駆けよる影があった。小学校の低学年くらいの男の子である。男の子は、靴を脱いで玄関を上がる志保に満面の笑みを向けて、「お帰り、お姉ちゃん」と高い声を上げると、それからふと気がついたかのように姉の隣にいる見知らぬ男に目を向けた。

「お姉ちゃんのお友達よ。ご挨拶して、理央（リオ）」

男の子は、小さな体をくの字にして一礼すると、自分の名前を元気よく告げた。

宏人（ヒロト）も小さく礼をして姓名を名乗ったところで、今度は志保の母親らしき人が現れたので大いに慌てた。にこやかな笑みを湛えた柔和な物腰の人で、宏人のどもりながらの自己紹介を受けると、「後でお茶を持ってくわね」と志保に声をかけた。

近くにある階段を上り始める志保。宏人がその後についていくと、後ろから足音がして、理央少年が追ってくる。どうやら宏人のことを新しい遊び友達だと思っているらしい。志保の部屋らしきところに導かれて、初めて女の子の部屋に入った緊張を感じる間もなく、少年はどこからか持ってきたロボットを宏人に見せると、得意になって説明を始めた。

動物をモチーフにしたロボットに関して新たな知識を獲得したり、ロボット同士の模擬戦の相手をしていると、しばらくしてドアにノックの音がして、おやつの盆を持った志保の母親が現れた。

「あれ、お母さん、ボクの分は？」

姉とその友人にだけ給仕する母に不思議そうな声を上げた理央は、階下に戻るように言われて、「え～」と不満の声を上げた。しかし、良くしつけが行き届いているのか、見苦しい抵抗はせず、大人しく母に手を引かれていった。

宏人は改めて志保の部屋を見回した。

彼女の実務的な性格とは正反対の、なかなか可愛らしい部屋である。全体がピンクで統一されていて、調度類も装飾的である。窓にはレースのカーテンがかかって、また所々にクマやウサギのぬいぐるみが座っていた。アロマ的なものでも焚くのか、それとも志保のものなのか、室内には甘い香りが漂っていた。

「母の趣味だからね」

キョロキョロとぶしつけな視線を投げる宏人に、志保は釘を刺した。志保の新たな一面を見たと思っていた宏人はがっかりした。せっかく一つからかうネタができたと思ったところだったのに。

「それにしても、倉木くん、小さな子の相手がうまいね」

「簡単だよ。昔、姉貴にやられたことの逆をやってやればいいんだから」

志保の勧めに応じて、宏人は小さなテーブルの上に置かれた盆からグラスを手に取って口元に持っていった。オレンジジュースで喉をうるおしてから、ブッセをはむはむしていると、

「この前のこと覚えてる？　倉木くんがわたしの手を引いて家まで送ってきてくれたときのこと」

志保が唐突なことを言い出した。

宏人はムセた。志保の手を握ったときの気恥ずかしい感覚がにわかによみがえってきた。

――今度は何の嫌がらせだ？

警戒した宏人だったが、

「その時にさ、『可愛い子を紹介する』って言ったでしょ」

志保は、その件自体に深入りしたかったわけではないらしい。

「そう言えばそんなこと言ってたような気がするな」

宏人が思い出していると、

「今日、ご紹介しましょう」

志保が言う。

宏人はブッセを持っていない方の手の平を彼女に向けてその先を押しとどめた。読めた。どうせ幼稚園児の妹とかが出てくるに違い

ない。そうして、また演技力を鍛えられる破目になるわけだ。今度は犬よりは良い役をもらいたいものである。そんなことを思っていたのだが、しかし、事の顛末は宏人が思っていたものよりシュールだった。

腰まで届く濡れ羽色の黒髪を背にした、年の頃なら高校生くらいの少女が宏人に笑いかけていた。二重の愛くるしい瞳。肌は抜けるように白い。美少女と言っても良い。

「それで、オレにどうしろって？」

「彼女のことを良く知ってもらいたいの」

志保と知り合い、瑛子（エイコ）と話してから、宏人には女の子と仲良くなりたいという気持ちは薄れて来ていた。そして、それが生身でないとしたらなおさらであった。

宏人は、色鮮やかなカバーがかかったコミックを手に取って、描かれた美少女と見つめ合った。

「カレシが他の女の子を見るのを許すなんてことホントはしたくないんだけど、今回は仕方ないわ」

「できればもう少し説明をしてくれるとありがたいね」

宏人はパラパラとコミックスをめくった。

「何で今日ここに呼んだと思ってるの？」

「あれだろ。家族にカレシの初披露。今夜はお赤飯だな」

「バカ。浅井信吾の件でしょ」

クラスメートをグループに引き入れるのに、どうして美少女が出てくるコミックを押しつけられるのか、さっぱり意味が分からない。しかも、どうやら十五巻ほど数があるらしい。テーブルに積み上げられた本の山に志保の手が置かれた。

「これ買ったせいで一月分のお小遣いが飛んだわ。ほとんどは古本だけど、新しいのはちゃんと本屋で買ったからね」

「で？」

「人と仲良くなるのってどういう時だと思う？」

「さあ、話が合う時とかじゃないのか。だからオレたちは仲が悪い」

宏人の言葉のうち、皮肉の部分は無視された。
「浅井クンが好きなマンガらしいわ。まあ、好きなのはこのマンガだけじゃないけど、さすがに他のマンガは買えなかった。頼める？」
「冗談言うな」
「それは冗談よ。でも、こっちは冗談じゃない。これを三回は読んで詳しくなって欲しい。そして、色々と女の子のキャラが出てくるから、そのうちの一人について熱く語れるようになること」
つまりは浅井氏の趣味を理解して共感を示すことで、好意を引き出そうということである。その上で、グループに引き入れる。志保にしてはなかなかまともなことを考える、と感心した宏人だったが、その場で一巻読んでみると、考えはすぐに改まった。
世界の命運を偶然握らされた主人公の高校生が、彼を狙うどう見ても人にしか見えない人ならざるもの（みな決まって美少女）と争う。何の力も持たない平凡な主人公が、敵味方の美少女になぜかモテまくる、というバカみたいな話である。
漫画は嫌いではない宏人だったが、こういう完全に男に都合のいい漫画というのは嫌いだった。ただし、宏人の好悪に関わりなく商業的には好調のようで、志保によると、アニメ化、ノベライズ、ドラマＣＤ化もされており、キャラクターのフィギュアもあるという。
「売れる漫画っていうのはそういうもんよ。少女マンガだっておんなじようなもんだからね。何の取り柄もないフツーのヒロインがなぜか美少年にモテまくる。それにみんな夢中になる。別に浅井クンが特別なわけじゃない」
「お前、コレ読んだのか？」
「もちろん。わたしは、ヒロインのライバルのアリエルが好きだな。言動が凛々しいし、なにより銀髪がステキ」
「何回読めって？」
「三回は読んで。生半可な知識じゃ興味無いことがバレる」
「一巻目を読んだだけでこの後の展開が読めるんだけど」
「十巻までは我慢して。十巻で劇的な展開があるから」

宏人はくらくらしてきた。面白くない漫画を最低でも十巻分読まなくてはいけないというのは、苦行に等しい。宏人はオレンジジュースを啜って気を落ち着けようとした。その間に、志保は布の手下げ袋に漫画を詰め始めた。

ずっしりとした布袋を持たされた宏人の気分もまた重い。何日貸してくれるのか尋ねると、今日を含めて二日だと言う。二日で十五巻分を三回、つまり四十五巻分を読まなければならないのである。楽しい二日間になりそうだ。

「とりあえず、それだけ。読み終わったら教えてね」

次の指示はその後出すと言う。

ミーティングが終わり、立ち上がった宏人の目に一枚の写真が見えた。籐製の棚の上に写真立てがあって、何人かの女の子が楽しそうに笑っている姿が映っていた。小学校の高学年くらいの年である。

「どうせ紹介するならさ、こういう子にしてくんない」

眩しいくらいの笑顔をしている一人の少女に指を差す宏人。心の内は分からないが、少なくとも外見は照り輝いている。志保は写真立てを倒した。

「残念ね」

「何だよ。昔の友だちかなんかなんだろ？　けちけちすんなよ」

「そうじゃないわ」

「何が？」

「それ、昔のわたしよ。もう知りあってるわけだから、改めては知り合えない」

宏人は思わず倒れそうになったところ、足に力を入れて踏ん張って必死の思いでしのいだ。

色々マズいことを言ってしまった宏人がフォローとして言えたのは、

「お前、昔は可愛かったんだな」

取ってつけたようなセリフであった。

志保は部屋の戸を開けた。

「ありがとう。でも、この程度の可愛さなんて意味無いわ。倉木先輩くらいじゃないとね」
「意味って？」
「人を惹くためにってことよ」
十分に人を引き付ける。そう宏人は思った。現に引きつけられたことであるし。
宏人は、廊下に出てこちらが出るのを待っている志保をじっと見つめた。
もじゃもじゃの髪に半ば隠れるようになっている瞳が綺麗な光を宿すのを一度だけ見たことがあった。
「何してんの？」
宏人はいや、とあいまいに首を振った。
ちょっと思いついただけのことを頼むのは気が引けた。何より仮に宏人の思った通りだったとしても、だからどうだということになる。
部屋を出て階下に降りると、志保の母と弟から、またいつでも遊びに来るようにと優しい言葉をかけられた。二人の暖かな雰囲気から、家族が十分に志保の避難所になっているだろうことが感じられて、宏人はほっとした。そうして、そんなことを考えてしまう自分に思わず苦笑したのだった。

第１０６話：友だちを作る賢者の書（後書き）

実に二カ月ぶりの更新になりました。
この二カ月、待ってくださっていた方、読んでくださっていた方、
本当にありがとうございます。

第１０７話：恋とはどんなものかしら

男の子はどうだか知らないが、女の子はお母さんのお腹からオギャアと生まれ落ちてカッと目を見開いたその瞬間から、生涯の伴侶を探し始める。新生児室に、今はまだ人よりも多分に猿に近いけれど、将来カッコよくなりそうな人がいたら目をつける。もちろん、この時点では声をかけることなどできない。しかし、間違ってはいけない。これは言語能力が発達していないがゆえではなく、慎みの気持ちがそれを許さないのである。簡単に言えば、「恥ずかちい」のだ。そのような異性に対する慎みの気持ちはゼロ歳時をマックスにして徐々に消えていき、幼稚園（あるいは保育園）の年長さんくらいになるときれいさっぱりあとかたもなく無くなってしまう。

慎みの気持ちをなくした者たちで満ちた幼稚園は、もっとも低劣な戦場である。ここでは、カッコイイ男の子をめぐってよだれでよだれを洗う熾烈な争いが繰り広げられる。気になるカレを、おままごとという蜘蛛の巣に呼びこんで無理矢理ダーリン役をやらせるため、お昼寝の時間に自分の隣で寝かせるため、シーソーギッコンバッタンデートに誘うため、そこここでライバルの髪を引っ張り合い頬をつねり合ったりする。時には泥団子をぶつけ合うことだって辞さない。

小学校に入学すると、そういった力ずくというような下等なことはしなくなる。戦場には雅味が加わる。暴力の代わりに女の子の魅力で勝負するようになるのである。身なりに気をつけたり、笑顔を向けたり、ノリを良くしたり、口調をちょっと甘えたものにしてみたりする。気をつけなければならないのはやり過ぎは禁物だということだ。やり過ぎると同性を敵に回す。幼稚園時代と違い、小学生時代には「同性に嫌われていない」ということもステータスになるのだ。同性に嫌われて一人ぼっちでいる女の子を哀れむ美少年、などというのは恋愛コミックの中にしか存在しない図式である。

中学生になると、さらに戦い方が変わり、男子に媚びるというようなことをしなくなる。女の子は、己の性別の優位性というものを正しく認識し、男子は女子に仕えるものだという意識を持つようになる。召し使いごときに色目を使うなどプライドが許さない。「好きになってもらう」という意識は消え、「好きにならせる」という意識が現れる。小細工はいらない。正々堂々と自分というものを見せつければ、男の子から告白してくることになっているのだ。男子は惚れろ。

「そういうことなのよ、杏子（アンコ）。このように、戦いは既に十四年前から始まっている。それなのに、あんたと来たらさ。お姉ちゃんは情けないわ、ホント」

昼休みの教室である。

杏子は読んでいる詩集から目を上げもせず、続きを読み続けた。

そこにはイギリスの田園風景が広がっていた。

詩は素晴らしい。日常のあれやこれや、すなわち学校の勉強とか、部活動とか、友だち付き合いのこととかを忘れさせてくれる。言葉のかけらに詩人の想いが乱反射して、この世界に新しい世界を現出させてくれるのだ。さながらイリュージョンのごとし。いながらにして別世界である。想像の翼を駆って行こう、新世界へ！

「行くな！」

読んでいた詩集が取り上げられて、杏子は恨めしげに目を向けた。

瞳に凛とした光がある気の強そうなショートカットの少女である。

「返してよ、結子（ユイコ）」

杏子が手を差し出すと、

「『ワーズワース詩集』？　よくこんなの読む気になるなあ」

ぺらぺらとページをめくりながら彼女は小さくうめき声を上げた。

その手から、杏子は革のカバー付きの文庫本を取り戻した。そうして続きを読もうとページをめくろうとしたところ、再び文庫本がするりと手から抜けた。

「ユイコも本でも読めば？　何か貸す？」

「友だちがわざわざお昼休みに訪ねてきたのに、そーいう態度ってある？」

友だちだからこそである。

彼女とは二年のときに同じクラスで親しくなり、その性格は良く分かっている。悪い子では全然無いが、間違っても昼休みに友だちを慰めにくるような細やかな性質の持ち主ではない。

「本田くんとケンカでもしたの？」

パッと思いついたことをそのまま言うと、結子は急にのどの調子でも悪くなったようにゴホゴホと咳払いした。どうやらビンゴであった。カレシと喧嘩をした腹いせに友人をからかいに来たというわけだ。しょうもない。

「いいわ、認める。わたしは潔いからね。でも、あんたのことを心配してるのは本当よ、アンコ。カレシがいないのはまだいいわ。わたしだってつい数か月前までいなかったんだから。でも、あんたは、カレシを作ろうともしてないじゃない。戦う前に諦めてるのよ。諦めたらそこで終わりよ」

人生の落伍者の烙印を押された杏子だったが、とはいえ、現に好きな子がいないのだから仕方ない。諦めるも何もないのである。杏子はこれまで恋というものをしたことが無かった。もちろん、カッコいいと思う男の子はいたし、現に今もいる。しかし、その気持ちを恋と呼べるのだろうか。本などを読んでいると、恋とはもっと狂気じみたもののようである。それがうまくいかないばっかりに、友人の昼休みの安らぎを破壊しようという悪行を行おうという気持ちになるくらいには。

「好きとか嫌いとかはとりあえず置いておこうよ」

一番大事なところである。

何とも無茶苦茶なことを言うと、結子は近くにいた男子に声をかけた。

「岡本くん」

近くの机で課題プリントらしきものをカリカリやっていた少年は、

大儀そうに顔をむけた。
「何だよ」
「アンコと付き合わない？」
「付き合わない」
再びプリントへと戻る岡本少年。杏子はムッとした目を結子に向けた。別に彼に言下に断られたことに対してショックがあるわけではないが、さすがにそうはっきりと、しかも周囲にクラスメートがいるところで言われると女の子としてのプライドが傷つくというものである。
「ちょっと、何てこと言うのよ、アンコが可哀想だと思わないの？」
結子は自分に向けられた批難の視線を無視した。
「何でオレなんだよ？」
「何でってことないでしょ。岡本くん、アンコのこと嫌いじゃないでしょ」
岡本少年は机の上にあった消しゴムを手に取ると、
「この消しゴムが嫌いじゃないっていうのと同じ意味でなら、確かに田辺のことは嫌いじゃない」
落ち着いた声で言って、杏子の心をかき乱した。
――消しゴムと同じ扱いされたよ！
杏子は結子の手から詩集をひったくると、ワーズワースの書いたイギリスの湖水地方へと心を飛び立たせようとした。
「岡本くんだってカノジョいないんでしょ。いい機会じゃん」
「何だよ。いい機会って？　オレは別にカノジョ募集なんかしてねえ」
「クールぶっちゃてさ。そういうのうけると思ってるの？」
「うけ狙いじゃない。オレは元からクールなんだよ」
「クールな人は自分からそういうこと言わないって。とにかくさあ、アンコにしなよ。まあ、あんまり可愛くないけど、そこまでひどくないし。ていうか、顔で女の子を判断する男ってサイテー」
「誰が顔で判断してるって？　オレは清らかな心の子が好きなんだ

よ」

「アンコの心は、漂白したシーツみたいにキレイよ」

「その子がどういう子なのかはな、付き合ってる友だちを見れば分かるんだよ」

「それどーいう意味？」

「言葉通りだね」

英国の田園地帯で啼くカッコウの代わりに、ガアガアという烏が二羽かまびすしく鳴いて、飛び立った杏子の心は日本の田舎にしか着地できなかった。さようなら、ワーズワース。こんにちは、島崎藤村。

――でも、藤村も好き。

なおも他人のことで盛り上がる二人を背にして、藤村詩集でも借りに図書館へ行こうかと教室を出たところ、見知った顔を見た。教室の戸口から中をちらちらと窺っている女の子。

「こんなとこで、何してるの、更紗（サラサ）？」

と一応訊いてみたが、それは訊くだけ野暮な話だった。杏子と違って、通常の乙女の行動というのは全てすべからく一から十まで恋という一事に向かっているわけであるから、その点から解釈すれば、彼女が何をしているのかなど簡単に推測できる。

「入ったら」

「どっか行くの、アンコ？」

「図書室」

「そ、そお？　ちょっとあんたに用があって来たんだけど、ま、いっか。放課後も部活で会うし。じゃあね」

そう言って、杏子が何か言う前に、さっさと自分の教室の方へ帰ってしまった。見え透いたことを、と杏子は苦笑した。長い付き合い。自分にまで言い訳することなんかないのにと思ったが、親しいからこそ礼儀が必要な場合もある。

杏子は教室の中を振りかえった。威勢良く口論している先の二人から少し離れた窓際に、すらっと綺麗に背が伸びた少年がいて、昼

下がりの光を後ろにしていた。器量良し。性格も悪くない。同年代の男子と比べると落ち着いた雰囲気もある。しかし、だからと言って、そういうプラス要素が合わされば「好き」という意識が生まれるわけではない。恋をしたことがない杏子にも、恋愛というものが、階段を一歩一歩のぼっていったその先に至るようなものではないという予感はある。それはおそらく全的に与えられるものなのだ。いつのまにかそこにいて、そうしてそこからでしかそこに至る階段が見下ろせないような、そういう経験であるに違いない。ワーズワースや藤村の詩句にあったときに、どこがどう良いとは言えず一息に魅了されたように。

第１０８話：昔の話をするとき人は年をとる

時には昔の話をしましょう。

むかしむかしあるところに、それはそれは可愛らしい……いえ、そんなに可愛くもない、可もなく不可もないくらいの女の子がいました。女の子は普通の家庭に生まれ、普通に優しい父と普通に厳しい母に育てられ、幼年期をそれなりに問題はあったものの深刻な事態に見舞われることなく普通に過ごしました。そうして、普通に成長し中学生になりました。

中学生になった彼女の頭に一つの疑念が生まれました。

――わたしは一生こんな風に普通な感じで生きていくのだろうか。

来し方を振りかえった彼女は、行く末に同じものを予感してぞっとしました。このまま普通に生きて、普通に友だちを作り、普通に恋をして、普通に結婚する。普通に子どもを産み、その子にも普通の人生を生きさせる。どこまでも続く普通の無限連鎖！　入学式の校門前、春の温かな光の下で、彼女は身震いしました。

――変わらなければ！

普通の人生に見切りをつけるべく、彼女は中学デビューを決意しました。中学デビューと言っても、髪を金髪に染め上げるわけでもなければ、中学を仕切る女番長的な人にタイマンを売りつけにいくわけでもなく、さりとて生徒会長に立候補したわけでもありません。彼女の普通の頭では、そんな突飛な発想は浮かびませんでした。

――部活動をがんばろう！

部活でヒーロー、いやもといヒロインとなり、部活メンバーからは信頼され、クラスメイトからは称賛を受け、あわよくば男の子のハートもがっちりキャッチ。そんな人気者になろう、と彼女は決意しました。何とも普通の発想ですが、しかし、その発想をすみやかに行動に移したことは評価に値するでしょう。

彼女はがんばりました。一生懸命にやりました。中学校生活を豊

かにするべく、自分の運命を変えるべく、努めたのです。しかし、嗚呼（ああ）、何という悲運、何という悲劇。時は彼女に味方せず、普通を脱却すべく身を削るようにした彼女に対して、信頼も称賛も男子からのラブアピールも何一つ降り注がず、空しく二年が経ちました。

三年生になったとき、彼女は思いました。考えたくはなかったことだったのですが、どうやらそういう風に考えざるを得ないのです。なぜ清らかな乙女の努力が実を結ばないのか。もしかしたら、努力するところを間違っているのではないか。土の無いところに種をまいても芽は出ない。実など結ぶはずもない。自分は壮大に無駄な努力をしてきたのではなかろうか。

彼女がそう考えたのも無理からぬところです。というのも、彼女の所属する部活、いつの間にか部長を務めるようになったその部活は、部長含めて部員三人の超マイナー部だったからです。しかも、活動内容はいまいちはっきりしないし、二人の部員はやる気ゼロ。そんなところでいくらがんばっても、いやがんばればがんばるほど、「あんなつまらない部活動に気炎を上げている変な子」というレッテルが貼られるようになってしまったのです。

しかし、彼女は諦めませんでした。

「これは、絶望的な状況に屈せず、校内一のマイナー部をメジャー部に昇格させ、そうしてついには伝説の部長とまで言われるようになった一人の少女の物語である！」

にやにやが止まらない。ニヤケ面は女の子としてどうだろうか、という注意の視線を周囲から受けながらも、杏子（アンコ）はあえてやめようとは思わなかった。嬉しい時にはほほえみ、チョー嬉しい時にはニヤつくのが、人としての正しい在り方である。別に気になる男子がいるわけでないので、誰に遠慮する必要もない。

「ノリノリだね、アンコ」

隣を歩くのは、平井七海（ナナミ）。小学校来の友人である。二人は今、部活動を終えて、通学路を逆に辿っている。学校から家に帰っているところだった。一年でもっとも日が長い時期であるので、まだまだ

周囲は明るい。明るいというか、美しい。世界は光に満ちている。輝いているのだ。

「まるでわたしを祝福してくれているみたい……て、そんなこと言ったら笑う？」

ほっそりとした首を横に振る友人。

杏子は自分の幸運を噛みしめた。オー、マイフレンド！

「あのくらいの人数になると、部活って感じになるね」

七海の言葉に、杏子はうんうんと満足げにうなずいた。

杏子がリーダーを務める部、文化研究部の部員は部長を含めて九人となり、以前とは比べ物にならないほどの活況を呈していた。以前は、まるで「沈黙は金」という語を部員のそれぞれが座右の銘にしているかのように、みな何もしゃべらなかった。死のような静けさで部室は満ちていた。しかも部員がやっていることといったら、部活動などではなく、本や雑誌を読んだり宿題をしたりといったレジャー活動だったのである。ところが、今や、みな競って発言するし、その発言は部活動の内容に関係のあることなのだ。

部員が侃侃諤諤（かんかんがくがく）やっている様を見るのは格別だった。部員が議論をしているのを悠揚に見おろす所作、それはいかにも部長っぽかった。杏子は実に二年のときから部長をやっていたわけだが、三年の夏になってようやく部長の醍醐味を味わうことができるようになった。部長、サイコー。

「よかったね、アンコ。『天網恢恢疎（てんもうかいかい）にして漏らさず』っていうけど本当だね。神さまは見てくれてるのよ」

「……あのさ、ナナミ。言いたいことは分かるんだけど。その諺は悪事は必ず露見するっていう意味だよ」

「細かいことは気にしない」

杏子は咳払いをして、何気ない口調で切り出した。

「それで、ナナミ。決心した？」

七海は首を傾げた。

「何のこと？」

「またまた」
「いや、ホントに。なに？」
「ナナミらしくないなあ。入るんでしょ、文化研究部に？」
「全然そんな気ない」
「やっぱりね、もちろん歓迎するからね……って、ん？　今、何て？」
「いや、入る気ないよ。やっとこの前、部活動終わって落ち着いたばかりなのに、何でまた新しく入んなきゃいけないの？」
「えっ？　じゃあ、何で今日、部に来たの？」
　今日の部活動時間に、七海がふらりと部室にやって来て、部活動に参加したのである。杏子に会いに来たというわけでもなく、冷やかしという風情でもなく、真面目に議題――文化祭の出し物をどうするか――の討議に加わっていたりしたので、その様子を見ていた杏子はてっきり七海のことを入部希望だと考えていたのだった。
　七海は、たまには杏子と帰りたかったから、とだけ言うと口を閉ざした。杏子はしばらく七海の横顔を見つめていた。横からでも白い頬があらわに見えるほどのショートカットだが、愛くるしい目元と艶のある口元で十分に女の子としての魅力がある。
「ナナミ、髪伸ばしてみたら？」
　杏子は誠心からアドバイスした。杏子には友人の美を羨む気持ちはあっても、妬む気持ちは無い。七海の髪が長くなればよりガーリーな魅力が増してこれまで以上に人目を引くことだろう。
　七海は考える振りをした。
「アンコが、眼鏡からコンタクトにして、そのお団子やめるならやってもいいよ」
「まあた、そういうこと言う。不公平でしょ。ナナミは髪伸ばしたら可愛くなるけど、わたしはコンタクトにしたりお団子やめたら今よりブスくなるじゃん」
　つと立ち止まった七海に、どうしたの、と訊く暇も無く、杏子は自分の顔に七海の手が伸びてきて、一瞬後、目のあたりがすっとし

た。眼鏡を外されたのだ。
「ちょっと、ナナミ」
ぼんやりとした視界の中央から、少女の笑い声が聞こえた。やみくもに差しだした手になめらかな手が触れて、ついで金属の固さを感じた。杏子が眼鏡をかけると、クリアになった視界に七海の微笑が見えた。
「アンコの素顔を初めて見る幸運な男子は誰だろうね」
「不運の間違いでしょ」
「友だちを信じないの？」
「ただの友だちなら信じる。でも親友はしばしばウソをつく」
現に今も彼女はウソをついているのである。それを責めようとは思わない。ウソをつくには、それなりの理由があって、その理由を尊重したいくらいには七海のことが好きである。またウソも付き合えない関係などいかにも窮屈である。
歩き出す七海の隣に杏子は並んだ。
とはいえ、黙ってウソを見過ごしてあげるほど成熟した関係ではないし、そんな成熟は嫌だと杏子は思っていた。なので、黙って考えた。別れ道までの間、五分ほどずっと考えていた。部に興味が無く、杏子に会いに来たわけでもないとしたら、何をしに来たのか。杏子以外の誰かに会いに来たのだろうか。でも、誰に？　部員一人一人の顔を思い出してみたところ、有力候補が上がるのに時間はかからなかった。
「塩崎くんを見に来たのね」
杏子の断定口調に七海は答えなかった。
しかし、答えないというそのことが雄弁に真実を物語っていた。

第１０９話：美しいものを美しい人へ（前書き）

怜と環のお話です。

第１０９話：美しいものを美しい人へ

かつて怜（レイ）は友人から訊かれたことがある。

「川名と一緒に帰るとき、何の話してんの？」

川名とは付き合っているカノジョの姓である。怜は答えに窮した。なにせ、大した話をしているわけでもなく、その時思い浮かんだとりとめない話をしているだけであるし、その上、そもそも話さないことの方が多いからだ。さらに言えば、毎日一緒に帰っているわけでもない。一緒に帰るのは約束したときだけである。

「信じらんない！　カノジョの家まで送ってくのはカレシの義務でしょうが！」

これはそのとき友人の隣にいた女の子の言葉である。

怜は自分のおしゃべりを恥じたのち、カノジョからそのような要求を受けていないという事実を以って一応の抗弁を試みたが、

「バカじゃないの！　そういうのは女の子が言い出すのを待つんじゃなくて、男の子の方から誘うもんでしょ！」

一蹴された挙げ句、そのあとたっぷり三十分の間、いかに自分がカレシとしての義務を怠っているかについて延々と注意を受けた。恋愛に疎い怜はそれまで、カレシという役回りにロマンティックなものを期待していたのだが、彼女から五十に渡る「カレシ心得」を伝授されたのちは、考えを改めざるを得なかった。カレシにはロマンはなく、あるのはこなすべき数々の義務だけである。

「たまにはカノジョの教室前で待ってあげること。教室まで迎えに来て待っててくれたっていうのは、女の子のプライドを満たすんだからね」

カレシ心得その十一。

待ち合わせは校門前で。ただし、たまには教室前へ迎えに行こう！

「そういうの恥ずかしくないのか、女子って。クラスのやつらにからかわれるだろ」

友人の言葉に、全くその通りではないか、と同意する怜。
少女は、やれやれと首を横に振った。
「恥ずかしがる振りはするけど、本気じゃないから大丈夫。心の中では、カレシいない子とか、いても迎えに来てくれない子に対して優越感でいっぱいなの。騒がれて注目されるのも嬉しいもの」
遅ればせながら、どうもこの世には知らない方がいいことがあるらしい、と気がついたのはその時のことだった。
それから二月が経っている。
怜はその日、六時限分の授業を終えて、掃除を済ませ、ホームルームを聞き流したあと、自分のクラスを出てから隣の五組へと向かった。五組の前の廊下の壁際に身を寄せて、同じように自分のクラスから出てきたクラスメートたちをやり過ごす。頃は六月下旬の蒸し蒸し期である。五組の廊下側の窓は全開に開け放たれており、木枠の窓を通して中のホームルーム風景が見えた。
やがて、五組担任のまだ年若い男性教諭が、「試験の後だからといって羽目をはずしてオレに迷惑をかけるなよ」というまことに率直な訓戒を施すと、五組は一日の業から解き放たれた。歓声を上げながら教室から出てくる五組生を避けながら、顔見知りに会釈したりなどしていると、そのうちにお目当ての人が現れた。
環（タマキ）は軽く驚いた顔をした。軽くで済ませた上に、すぐに目元に微笑をきらめかせられるところが、彼女の心力のしなやかさを表していた。環は、廊下の壁際で人待ち顔をしているカレシの傍に寄った。衆目の前でちょっと寄り過ぎじゃないかと思うほど寄ってきたが、そんなことを言ったら、
「じゃあ、誰も見てないところならいいの？」
とか何とか言い返されそうなので、怜は男らしく耐えた。
「太一（タイチ）くんに用？」
彼女の組にいる悪友の名を出された怜は、今のところ彼には何の用も無いし、これから用ができるとしてもきっと来世紀あたりだろうと答えた。そのあと、一緒に帰らないか、とここで突っ立ってい

た理由を告げた。
「そのためにわざわざ来てくれたの？」
「わざわざって距離でもないよ。六組からここまで十歩もあれば着く」
「でもこれまでしてくれたことなかったでしょ」
その通りだった。
怜は誰からのものであれ受けたアドバイスは尊重するが、しかしその通り行うかどうかは自分が決定するものだと思っていた。「たまには教室前で待つが吉」という忠告は、ちょっと行いづらいものフォルダに収納されて、ここ二カ月のあいだ日の目を見なかった。そのフォルダをほんの気まぐれからごそごそしてみたのだと、怜は言い訳した。
じっとこちらの目を見つめてくる環。
怜は彼女の瞳の中にいる自分にエールを送ると、できるだけ平板な声を出した。
「それで？　一緒に帰るのか、帰らないのか？」
「わたしでいいの？」
環は口元を笑みの形にした。
「他に誰が」
「ここ五組はカワイイ子ばかりですから」
「オレがカワイイ子に相手にされる訳が無い。だからタマキを誘ってる」
「とっても斬新なお誘いだわ。でも、わたし以外には言わない方がいいみたい。誤解されるからね」
怜は神妙にうなずいた。
環は、後ろから声をかけてきたクラスメートに別れの挨拶を返してから、
「ちょっと待ってね。今日のこれからのスケジュールを確認するから」
そう言って、しかし手帳的なものを肩かけ鞄から出すでもなく、

ただ中空に視線を向けた。そのまま、しばし考える振りなどしているカノジョの前で、怜は礼儀正しく直立していた。
「いいよ。大した用じゃないから、レイくんの方を優先します」
それがどんな用であったのか、怜は訊かなかった。
生徒用玄関から外に出ると、空が低かった。うす曇りの空の下、校門をくぐり抜けると怜はいつもと違う帰路を取った。環は何も言わない。ちょっと遠回りになるけど、とだけ怜が断ると、環はうなずいた。
「部活はよかったの？」
「今は前と違って大所帯だからな。オレ一人来なくても何の問題も無い。というか、オレがいなくても気づかれない可能性さえある」
「円（マドカ）はどうですか？」
「部内でもっとも優秀で、やる気もあり、しかも可愛い。闇夜の月のように、部の中でひとり皓々（こうこう）と輝いてるよ」
「妹を褒められるのは嬉しいけど、その褒め言葉のあまりの素晴らしさに嫉妬しそう」
「これでも控えめに言ってるんだけど」
「カノジョのことも何かにたとえてみてくれません？」
怜は腕組みした。
「じゃあ、星にたとえよう」
「素敵」
「月明らかに星稀なり」
怜はこの前覚えたばかりの詩句をそらんじてみせた。漢詩好きの環はしかし、感心したりしなかった。月光はその強さによって周囲の星の光を隠してしまう。カノジョ以外の女の子を月に、カノジョを星に例えたあとに引用してよい詩句ではない。
「そこまでうまくは行かない。覚えたてだから」
怜は言い訳したが、環からは疑わしげな視線を受けた。信用が無いというのは辛いものである。
歩道を歩いていくと国道が前を横切っていて、車の往来が激しか

った。怜は横断歩道を避けると、近くにある歩道橋へと向かった。
階段を上るときに隣に手を差し出すと、すぐにほっそりとした滑らかな手が重ねられた。怜は、環の手をしっかりと握ると、階段をゆっくり上り始めた。やがて、上りきって眼下に道路を見たところで、
「一つ訊いてもいい？　レイくん」
と環。前から歩いてきた大学生くらいのカップルとすれ違ったあと、怜は促した。
握られている手がぶらぶらと揺れた。
「こういうことはどこで習ったの？　お父様？　それともお母様？」
怜が父から習ったことといえば男は耐え忍ぶ生き物だということであり、母から習ったことといえば母の口撃に耐えられれば大抵のことには耐えられるということである。それらは確かに重要なことではあるが、人生にはもっとこまごましたこともあり、そういうテクニカルなことはもっぱら祖父母に教えられた。
「祖母に習ったんだ」
「おばあ様？」
「そう。『歩道橋を渡るとき小さな子がいたら手を引いてあげなさい』」
「訂正して」
「歩道橋を渡るとき可憐な女の子がいたら手を引いてあげなさい」
「前よりは良くなった。まだ、完全じゃないけど」
階段をくだり切ったので、手を放そうとした怜だったが、ぎゅっと掴まれたまま放してもらえなかった。周囲に人影はまばらであるものの、怜は一応批難の視線を送ったが、環は前を向いたまま知らぬ風である。
「前から気になってたの」
「何が？」
「ベンチを拭いてくれたりするのは誰の教えかなって」
「訊けば良かったのに」
「あんまり訊くと想像する楽しみがなくなるでしょ」

「オレはそういう楽しみを与えられるような人間じゃない。そこの水たまりくらい底の浅い男だから」
環は足を止めると、アスファルトにできた水たまりの中を覗き込むようにした。
「小さいね」
「その通り」
「誰かひとりを映すくらいで精一杯だね」
水たまりの中にどんな顔が映っているのか、怜の位置からでは見えなかった。
「ところで、そのおばあ様の教えを実践するのはわたしで何人目ですか？」
「いや、妹以外では環が初めてだよ」
「そう言うのもおばあ様の教えですか？」
怜は首を傾げた。環の言っている意味が分からなかったのである。
環は嬉しそうな顔をした。
大通りから外れて少し歩いたところで川に出た。この辺りを流れている大河の支流である。川を見下ろしながら川辺の土手の上にある細い車道を歩いて行くと、環が小さく息をのむのが聞こえた。
怜は目的地へついたことを知らせた。
「美しいものを美しい人に」
向けた片手の先に、清爽な青色の花が群生していた。
環は紫陽花に身を寄せた。
彼女に握られていた怜のもう一つの手は珍しく実に平和的に解放されたのだった。

第１０９話：美しいものを美しい人へ（後書き）

次回に続きます。

第１１０話：『お似合いの二人』（前書き）

前回の続きです。

第１１０話：『お似合いの二人』

自分で自分の気持ちがはっきりと分かる人間はどのくらいいるのだろう。

少数派であって欲しいものだ、と怜（レイ）は思う。

怜には自分で自分の気持ちが分からなくなるときがある。自分の行動の意味が。その目的が。その目的を持つに至った動機が。よくよく考えてみると分からない。そういうことはこれまで、中三になるまでは無かった。ただ、それはこれまでは自分の行動の意味をはっきりと言葉で説明できた、ということではなく、そもそも自分の行動の意味などに疑問を持たなかったということである。

それがこの頃変わってきた。「何でこんなことしてるんだっけ、オレ？」と考えることが多くなってきた。それだけ、以前の自分と比べると突飛な行動を取るようになってきたということだろうか。あるいは、中三になってようやく自意識というものが芽生えてきたということなのか。どちらにしても、あまり歓迎された話ではない。

紫陽花を見にカノジョを連れていくというのもそういうよく分からない行動の一つである。怜は、純粋に環（タマキ）と一緒にただ花を見たかったわけではない。数日前、環の様子がちょっとおかしかったことがあり、その時家まで押しかけたわけだが、その後彼女の具合がどうなったのか知りたかったのである。それを探るために帰り道デートに誘ったというわけだった。そんな遠まわりをしなくても、「何かあったのか？」と直接訊けば話は早いかもしれないが、手軽な方法が正しいとは限らない。

あるいは、環の様子が分からなかったとしても、彼女の気晴らしになればそれでいい、とそんなことを思ったりもしたのだった。自分と一緒にいることが環の気晴らしになるかどうか、怜にはイマイチ自信が無いのだが、もし嫌だったらはっきり断るだろうから問題なしとしておいた。約束しないと一緒に帰らないカレシが、いきな

り教室前で待ち受けていたのだから、それはいかにもわざとらしい話であり、環は何かを勘づいているに違いない。何かどころか全てを見透かされている気さえする。それは怜にも分かっていたのだが、それでもしたかったのだから仕方がない。

こういう気の回し方をするようになったということが不思議だった。これまで怜は人に対して積極的に関わりを持とうとしたことは無かった。他人に対してあまり興味が無かったのである。ところが、近頃になってそれが変わってきた。なぜ変わったのか。何によって変えられたのか。瞳を閉じて心の奥を覗けばそこに一人の少女の姿が鮮やかに現れる。それは、無念なことに、ただ今目の前にいる少女の姿と同じだった。

じっと紫陽花に見入っている環を少し離れたところから見ていると、どちらが花か見間違えるほどである。花の精というものがもしいたらそれは彼女のような姿をしているのかもしれない。そんなことをつい考えてしまった怜は、注意深く環から目を逸らした。彼女は目から心を読みとる術に長けている。こんな気持ちを読みとられたら、あとあと面倒なことになる。

「どうかした？」

環は花から人へと目を向けた。

「……何が？」

怜は今ちょうど環に視線を向けたばかりのような振りをした。

「変な顔でこっち見てるから、どうしたのかなって」

目ざとい子だなあ、と怜は内心ため息をついた。どうしたのか、と問われても、「君にみとれてた」というわけにもいかない。怖いもの見たさでちょっと言ってみたい気もするが、今日は自分のことは後回しである。結局、

「食べるなよ」

と一言。

環は目をパチクリさせた。

「物欲しそうに見てるからさ。紫陽花には毒性があるぞ。食べたら

大変なことになる」
環は花のそばを離れ、つと近寄ってきた。
瞳に冷ややかな色がある。
怜は、手を差し出すと環の肩かけ鞄を受け取って自分の肩にかけた。肩がずっしりと重くなった。これが言葉の責任の重みというものだろうかと、怜は自分の軽はずみを後悔した。
身軽になった環は再び紫陽花の元に寄ると、清らかな青色に染められた。
怜もちょっとよたよたしてみせながら、カノジョの花見に加わった。
紫陽花は道路沿いに植えられており、どれも見事に咲きほこり、まるで一本の青色の帯のようになっている。薄暗い空の下で返って花の青紫が濃く映り、下葉の緑さえ美しく見えた。
「紫陽花の花言葉って、知ってる？　レイくん」
怜は嫌な予感がした。というのも、環がニコニコしているからである。何かを思いついた顔。怜は、ちょっと考えてみてから、環の意図に思い当たるものがあり、自分の無駄な博識ぶりが嫌になった。
「さあ、知らないな」
怜は視線を逸らした。
どんなに絶望的な状況でもベストを尽くせ、という父のありがたい教えが胸をよぎった。直接口に出して言われたわけではないが、父親というものは背中で息子に語るものである。怜は父の無言の教えを忠実に守り、とぼけようとしたが、
「こっちを見なさい」
びしゃりとした声が耳を打つ。
怜はそれでも抵抗してみせた。
「確か、『高慢』だったんじゃないか？」
今ここにいる誰かさんのように――。とそこまで言う勇気は無かったが、同じことである。
環は整った眉を片方だけ器用に上げてみせた。

「時々、レイくんがすごく意地悪い人のように思えるんですけど、わたしの気のせいですよね？」
「時々ならいいだろ。あとの大部分の時間、九割九分くらいの時間は優しく誠実で紳士的なわけだ」
「十割にしてくれませんか」
「訊きたいことがあるんだけど」
「何なりと」
「『わがまま』っていう花言葉を持つ花は？」
「それを聞いてどうするんですか？」
「知り合いの女の子に贈ろうと思って」
「知り合い？」
「お前のことを言ってるんじゃない、誤解するなよ」
「……」
これは勝ったかと思った怜だったが、
「あら、カノジョよりも先に花を贈られる羨ましい方はどこのどなた？」
もちろんそんなわけがなかった。怜は、己のさかしらによって、一度も恋人に花を贈っていないことをやんわりと責められる破目になった。貝のように口をつぐむしかなくなった怜の前で、環は話を元に戻した。
「『高慢』も確かに紫陽花の花言葉の一つだけど、一番有名なのは、レイくんも知ってる通り、『移り気』よ」
紫陽花は開花からの日数によって花の色が変化する。それを人の気持ちが変わることになぞらえたのである。
「今日ここに来たのは、なんらか、わたしへの批難ですね？」
環は容赦という言葉を知らない。こんなに物知りな彼女が知らないとは信じられないことである。
「変な誤解をするなよ。単に、カノジョと綺麗なものを見たいっていうただそれだけのことだろ。どこをどうしたらそんなひねくれた解釈になるんだ」

「わたし、もともとひねくれているんです。だから、今日ここに連れて来てくれたことの裏に何があるのかなって、さっきから考えてました」

環は試すような目で怜を見た。

怜は、恋人と花を見ているだけなのにどうしてこれほど緊張感を持たなければいけないのか、さっぱり分からなかった。

やがて怜は心を決めた。

「分かったよ。本心を言う」

「どうぞ」

面白そうな顔をしている環に向かって、怜は軽く咳払いした。

「この紫陽花を二人の戒めにしようと思って、ここに連れて来たんだ」

環は、繊細な顎先に指をつけて目をつぶり、うーん、と唸ったあと、

「六十点かな」

そう言って、目を開いた。

即興で答えたにしてはなかなか良い得点だった怜は、ひとまず安心した。一応、後学(こうがく)のため、模範解答を訊くと、環は首を横に振った。

「そんなもの、ありません」

「だと思った」

「人生に模範なんかないからね」

カレシが唐突にデートに誘ったことに対して環はもう訊かなかった。訊いても無駄だと思ったのか。それとも、訊く必要など初めから無かったのか。おそらくは後者である。

「今年ももう半年が終わるね」

あと数日で七月だった。

「ねえ、レイくん。どうして過ぎ去ったものを愛しく感じるの？」

紫陽花の花が静かに揺れた。

怜は、額を合わせられそうなほど近づいてきた環から身を離そう

とせず、
「過ぎ去ったものを愛しく感じてるんじゃないよ。過ぎ去らざるを得なかったってこと、その他の選択肢が無かったってこと、それを愛しく感じるんだろ」
答えた。
「それはあるものがそのものであったっていうそのこと？」
怜はうなずいた。
「それはレイくんがレイくんで、わたしがわたしで、そうしてわたしがレイくん――」
そこで環は言葉を飲み込むようにした。
怜は首を傾げた。
「何だよ？」
「何でもありません」
「何か言いかけたろ。オレがどうかした？」
「何でもないです」
「でも、言いかけた」
「言いかけましたけど、言わないことにしました。だから訊かないでください」
「タマキはオレに何でも言わせようとするのに、公平じゃないぞ」
「女の子と男の子の間が公平だなんて誰が決めたの？」
「……誰も」
環は、そうでしょ、と得意満面に言うと、怜に手を差し出した。
怜はその手を握った。
「鞄です」
「何だ。仲直りの握手かと思った」
怜は環の鞄を彼女に返した。
環は、自分の鞄を斜めにさげると、
「ありがとう、レイくん」
と言って改めて手を差し出してきた。怜はその手は取ったが、彼女が何に対して感謝したのかということは訊かなかった。環の声は

どこまでも透明で、訊くことによって、その透明で純粋なものに何かしらの色をつけてしまうのではないか。それを恐れたのである。

紫陽花に背を向けて二人は歩き出した。

少し歩いたあと、環は、

「デンファレ」

と不思議なつぶやきを漏らした。

何のことを言っているのか、怜が訊くと、

「花の名前です。『わがまま』を花言葉に持つ花」

環は微笑んだ。

「その知り合いの方に贈ったあと、わたしにもください」

「驚いたな。自分が『わがまま』だって自覚があるのか？」

「いいえ、そんな自覚はありません。あじさいと同じようにデンファレにも複数の花言葉があるの。その知り合いの方には『わがまま』と共に贈ってあげてください。わたしには、デンファレの別の花言葉とともに贈ってください」

「別の花言葉って？」

「教えません」

「『秘密主義』とか、なんかそんなのか？」

「さあ。どうでしょう」

環は答えなかった。

「贈ってくれますよね？」

怜は不承不承うなずいたが、のちほど後悔した。値段が結構するということと、何より花言葉が恥ずかしかったからだ。プレゼントしたとき環は白い頬を染めて喜びを露わにしたあと、ちょっといたずらっぽい目をして花言葉を調べたか、怜に訊いてきた。怜はもちろん首を横にした。環は口元に微笑を灯すとそれ以上は何も言わず、赤い可憐な花を楽しげに見つめていた。

第１１１話：告白にはタイミングが重要（前書き）

今回は宏人の話です。

第１１１話：告白にはタイミングが重要

ある映画に、主人公の少年が古本屋で運命の本と出会うという一幕がある。少年はその本によって人生を変えることになるわけだが、このように、出会いというものは人に限った話ではない。カビ臭い匂いのする書店で何ということもなしにふと手にした一冊の本との出会いによって、新しい自分を発見するときもあるのだ。本とは何と偉大なものであろう。

宏人（ヒロト）は、もしかしたら今からそんな出会いが自分にも訪れるかもしれないぞ、と思って自身を鼓舞していた。彼の前に書棚がある。前だけではない。両横にもある。後ろにもある。四方を書棚に囲まれて、しかも彼がいるのは六畳の部屋であってさして広い空間であるわけでもないので、非常な圧迫感を感じていた。室内を満たす昼下がりの光も、書棚のプレッシャーを軽減する役には立っていない。

宏人は一冊の本に向かって手を伸ばした。なぜその本を選んだのか。そんなことはどうでもいいことである。たまたま取りやすい位置にあった。それだけのことだ。しかし、そもそもどうしてその本は宏人の取りやすい位置にあったのか。これはなかなか面白い問題ではないか。哲学的な香りがする。なぜその本はその位置にあったか？　宏人は本をパラパラとめくった。宏人は哲学に興味はなかった。

何となく今イチな気がして、宏人は本を元の位置に戻した。そうして次の本を手に取った。本の中には色鮮やかな世界が広がっている。現代の女子高生がサムライソードを手に悪霊を斬りまくる、という内容の本で、バトルはもちろん、恋あり、友情あり、たまにコミカルであり、しかも世相について考えさせまでするという、もはや色々詰め込みすぎて何が何やら分からないごった煮状態が売りらしかった。また別の本を手に取れば、こちらは異世界が舞台である。異世界に迷い込んだ男子高校生が、心根が素直だということ以外に

何の取り柄もないのに、ひょんなことからある国の王女の求婚を受けたり、他の女の子にも異常なほどモテまくるという百パーセント男の都合の為に作られた物語であって、これを書いた人間は絶対に昔モテなかった男か、あるいはモテない男の心理を隅々まで知り尽くしてそれを商売に応用している賢い大人の男に違いないと宏人は思ったわけだが、どうやら著者は女性のようであった。

戸の開く音がした。

「倉木。何か気に入った本、あったか？」

宏人は手にしていた本を書棚に戻した。そうして、どれもこれも面白すぎて中々選べない、と適当な事を答えた。

「ゆっくり選べよ。この部屋にあるものだったらどれを選んでもいいからさ」

そう言って、スナック菓子とジュースを載せた盆を無造作に床に置いた少年が、この部屋の主、浅井信吾（シンゴ）である。宏人と同じくらいの中背、前髪をかなり短くして露わにした額が昼の光を受けてテカテカしている。宏人は勧められるままに、座って炭酸ジュースを飲んだ。

「それにしても、倉木がラノベに興味があるとは思わなかったなあ」

信吾は、スナック菓子をつまみながら言った。

「『ラノベ』って？」

「ライトノベルのことに決まってるだろ。お前が今読んでたようなやつ」

なるほど、「軽い小説」とは言い得て妙である。確かに、内容はともかくとしても、文章は非常に読みやすくて、普段小説などほとんど読まない宏人でもすいすいと読んでいくことができた。活字離れが叫ばれている昨今このような小説は中高生が活字に触れる一助となるかも。そんなインチキ評論家然としたことを口にした宏人に、信吾は首を傾げた。

「倉木って面白いな」

「そう？」

「ていうか、変」
――お前に言われたくない！
部屋の四方を重厚な造りの本棚で囲み、中身に彼の言うライトノベルと、それから漫画をぎっしりと詰め込んで、少し強い地震が起きたらいつでもそれらの本に埋もれて死ねそうな部屋に起居し無駄なスリルを楽しんでいる男から「変」などと言われるような筋合いはない。
宏人はもう一口ジュースを飲んだ。炭酸がしゅわしゅわ、喉を柔らかく刺した。
今日は土曜日である。学校は無い。折角の休日の昼日中に、居心地の悪い部屋の中、大して仲が良いわけでもない少年（知り合ってまだ三日）とジュースで乾杯しているのには、無論のこと訳がある。
浅井信吾は現在、宏人以下二名が進めている極秘プロジェクト、「二年二組支配計画」のターゲットである。なにゆえ彼が計画の標的となったのかというと、概要はこうだ。
「女子メジャーグループを切り崩すために、グループの中から主だった子を勧誘する。その勧誘材料として浅井クンが必要なの。情報によると、浅井クンのことを金城サンが好きらしい」
金城女史とは女子メジャーの副リーダー的立場にいる子である。
「浅井クンがこっちのグループに加わってくれれば、金城サンもこっちに入る。もし入ってくれなかったとしても、わたしたちのことあんまり邪険にできなくなるわ。それだけでも十分。男の子の方はどうか知らないけど、女同士の友情なんてもろいからね。ちょっとしたことですぐに壊れる。……え？　浅井クンの気持ち？　そんなの知ったこっちゃないわ。別にいいじゃん。ただ、浅井クンのことを好きな子を、浅井クンに近づけてあげるだけなんだから。浅井クンからは感謝されるんじゃない」
以上は、プロジェクトリーダーである藤沢志保（シホ）の言葉である。これを聞いたとき、宏人はよくもそんなことを考えられるものだと、半ば以上呆れた。いや、もしかしたら考える者はいるかもしれない

が、それを実際の行動に移す者はほとんどいないに違いない。いないと思いたい。

リーダーの指示に従ってまず宏人がしたことが、浅井氏がはまっている漫画を読むことである。ただ読むだけではない。一コマ一コマ集中して熟読玩味する。そうして漫画の特長をつかんだあとは、キャラクターの一人について、熱く、暑苦しく語れるようにする。この作業に費やした時間が二日。漫画は現在十五巻まで出版されており、これを二日でしっかり読み込むのはなかなかキツイ作業だった。しかも大して面白くもないので尚更である。

「なんで漫画を読んで疲れないといけないんだ」

と宏人は思った。

二日分のプライベート時間を全てツマラン漫画に使って青春を惜しげなく浪費した宏人が次にしたことが、浅井氏との接触だった。キャラについて語れるようにしたのはこのときのためである。接触の仕方は簡単。浅井氏は文房具をその漫画のグッズで固めている筋金入りのファンであり、それにちょっと言及すれば良い。浅井氏の机のそばを通り過ぎざまに、

「あれ、その筆箱、『テンス・ゲート』じゃん。どこで売ってんの？」

などと言って、話しかければ良いだけである。「テンス・ゲート」とはその漫画のタイトル。宏人はそれほど社交的な方ではないが、ちょっと男子に一声かけるくらいは何ともない。それを聞いた浅井氏はキロリと試すような目をすると、宏人に、「テンス・ゲート」のことを知っているのか、訊いてきた。宏人は、ここぞとばかりに、この二日間で新たに手に入れた知識を吐き出した。

「知ってるかって？　オレが一番好きなマンガだよ。全巻持ってる。オレのお気に入りキャラはドーニィだね。なんて言っても全女の子キャラの中で一番女の子っぽいからさあ。健気で一途でちっちゃくて、しかも能力に制限がついてるってとこが萌えるね。制限が無かったら最強でしょ。五巻のさ、カイルのために自分の命を捨てよう

とするところがホント泣けるね。いや、実際、泣いたよオレ。もう号泣ですよ」

浅井氏の細い目がじろじろと向けられるのを感じながら、宏人は少しわざとらしかったかと反省した。まるで一夜漬けで覚え込んだことを、忘れないうちにすばやく試験用紙に書いてしまおうとする、定期試験開始直後のような格好になってしまったのは、事実、宏人の中に、まだまだ「テンス・ゲート」に関する教養が定着していないからである。

浅井氏は生真面目な顔をしている。ちょっと怒っているようにさえ見える顔である。宏人は、己のエセファンぶりを感じて癪に障ったのだろうかと戦々恐々としていたが、しばらくすると、急に浅井氏は顔を崩して、にへらっと笑った。「浅井信吾、グループ勧誘作戦」の第一関門を突破した瞬間だった。

その後、浅井氏の家に招かれる運びとなるまでとんとん拍子に話は進んだ。浅井氏は、クラスの中で漫画の話をする友を探していたところであり、宏人はうってつけの存在だったそうだ。浅井氏は宏人のことを真に語るに足る心の友と認め、是非二人きりでゆっくりと話がしたいと申し出て、宏人を大いに気持ち悪がらせた。同時に、宏人は志保の眼力の確かさに感心した。志保の言う通りにやることで、浅井氏と仲良くなることができた。今度から仲良くなりたい女の子がいたら志保に相談しようと、宏人は心に決めた。そうしてただ今に至るのであった。

「漫画もそうだけど、クラスの中にラノベに興味のあるヤツもいないからさあ。いや、良かったよ。倉木がいてくれて」

信吾は満面の笑みである。

宏人としては、ラノベに興味があるなどということは一言たりとも言った覚えはないのだが、いつの間にかそのような名誉なレッテルを貼り付けられていた。会話の中で誤解させたのかもしれない。とはいえ、ともかくもあちらは上機嫌であるので、話を合わせておくが吉である。

――さてと、どうすっかな。

志保の指示は信吾と仲良くしろというところまでしか出ていない。いつグループに誘うかということは宏人に一任されている。折角の邪魔が入らない状況なので、これを機に思い切って言ってしまった方がいいか。それとも、今日は大人しくしておいて、もう少し時間を取ったほうがいいか。宏人は、意中の女の子に告白するタイミングを計るならまだしも、何で男相手にこんなことを考えなければいけないんだ、と軽くげんなりした。そうして、宏人がテンションを下げていると、

「そうだ、倉木に見せたいものがあるんだよ」

と言って、信吾は座を立った。

彼が向かった先に机の引き出しがある。

第１１１話：告白にはタイミングが重要（後書き）

次回に続きます。やっと更新できました。

第１１２話：強いられた取引

一体どんなお宝を見せてくれるのだろうかと期待せず待っていた宏人の前で、信吾は何かを引き出しから取り出すと、背を震わせ始めた。ついで、ククククという不気味なしのび笑いをもらした。

――大丈夫か、コイツ？

いや、大丈夫じゃないと宏人の危機センサーが告げている。眉をひそめた宏人が今日はもう、グループに参加してもらうことを頼むのは諦めて、というか永遠に諦めて、早々にこの部屋を出た方が良さそうだと足に力を入れて立ち上がろうとしたちょうどその時、クルリと振り向いた信吾が瞳に、ねめつけるような傲然とした色を浮かべて宏人を見た。宏人は膝を立てた状態で、立ち上がるのをやめた。信吾の手がすっと宏人に伸びて、その手の中にある拳銃のような物が宏人に狙いを定めていた。

「フ、引き出しからエロいフィギュアが出てくるとでも思ったか？」

信吾は嘲るような口ぶりで言った。

「いや、思ってない」

「黙れ！」

「おい、一体何のつもり――」

「黙れと言っているんだ！」

隣室に響きそうなほど大きな声で信吾は叫んだ。それを聞きつけた誰かが隣の部屋から助けに来てくれないもんか、と宏人は思った。拳銃は当然モデルガンである。しかし、何やら造りが重厚であって、人を殺すことはできないにしても、怪我をさせる力はありそうだった。銃口はぴたりと宏人の眉間に向けられている。

「質問するのはこっちだ、ミスター・倉木。いったいなぜわたしに近づいてきた？」

信吾が言う。

いよいよもってヤバいヤツだと、宏人は焦りを覚えた。ＶＩＰ気

取りの浅井氏に、宏人はかける言葉が思いつかない。ていうか、なんなんだよ、「ミスター」って？

「お前がラノベ好きだと？　バカも休み休み言え」

――いや、もとから言ってないんだよ、そんなこと。

「おれに近づいてきたのには何かわけがあるんだろう。吐いた方が身のためだぞ」

「おい、浅井――」

「黙れ！　質問に答えるんだ！　わたしに接触してきた理由を言えい！」

そう言って、恍惚とした光を瞳に宿す信吾の様子を見て、ようやく宏人は合点がいった。どうやら信吾は何かの役に入り込んでいるようである。敵性戦闘員が潜入捜査官に銃を向けるというシーンはドラマや映画で見たことがあるし、そう言えば同じようなシーンが、浅井氏のフェイバリットコミック「テンス・ゲート」にもあった気がする。それを真似て楽しんでいるのだろう。

だとすれば、宏人のなすべきことはただ一つである。信吾の演技世界に入り込んで、期待された役を演じれば良い。そうすれば信吾は満足し、事なきを得るだろう。しかし、である。良くも悪くも宏人はノーマルな男の子。アホくさい芝居にノリ良く付き合えるような器用さは持ち合わせていない。

「あのさ、浅井――」

「質問するのはこっちだ！　お前はただわたしの質問にバカみたいに答えていればいいんだ！」

何度目かの怒号。

こんなとき志保がいてくれたらこの場をうまく納めてくれるのに、とつい思ってしまった自分に嫌気が差す宏人である。女の子に頼ろうとするなど、男として情けない。とはいえ、芝居に付き合うことができないとすると、いったいどう対処して良いのか分からない。浅井信吾は完全に向こうの世界にイッちゃってしまっている。

「どうした？　答えろ。答えるんだっ！」

とうとう銃口は宏人の額を小突いた。冗談とはいえ、額をコツコツされて宏人はムッとした。こうなったら一発なぐってしまおうかと短気を起こしかけた。殴れば正気に戻るに違いない。しかし、確実に信吾との仲にはひびが入ってしまう。ひびどころか木っ端みじんに砕け散ってしまえ、と思わないでもない宏人だったが、そうすると作戦指揮官である志保に申し訳が立たない。八方塞がりである。

「ミスター・倉木！」

唾が顔に飛んだ。

テロリストゴッコをしたいクラスメートに付き合わされなければならないこの理不尽。なぜ自分がこんな目に遭わなければいけないのかという嘆きは、いい加減繰り返しすぎて擦り切れている。今が決断のときなのだろうか。演技の世界に飛び込む。古い自分を脱ぎ捨てて新しい自分になる時である。未来へ向かう跳躍。大いなる一歩。力強く踏み出した足が道を作る。……そうは言っても、なかなか思いきれないものがある。せめてアブノーマルな世界へ導いてくれるのが、信吾ではなく、可憐な少女とかであれば、まだ決心もできようというものだが。

グズグズと迷っている間に、信吾の興が醒めるのではないかという一抹の期待をした宏人だったが、

「どうしても言わない気か。さすがだな、タフガイ」

ますます乗ってくる様子を見せつけられて、ついに観念した。もうヤケである。彼の人生にいかなる力学が働いているのか、この頃ヤケになることがやけに多いような気がする宏人であった。

宏人は息をついた。それから、「わ、分かった。全部話す」と声を震わせた。この声の震え自体は演技ではない。茶番に付き合わなくてはいけないという絶望からくる震えである。

信吾は偉そうにアゴをしゃくった。堂に入ったものである。彼が中々の演技派であるということは認めざるを得ない。

宏人は、銃をつきつけられたまま、自分のいるグループに入るよう勧誘するために近づいたのだ、と正直に告白した。

「お前のいるグループ？」
「オレと藤沢と富永だよ」
「なるほど」
ようやく銃口が床に向いた。信吾は、下を向いて何かを考えている様子である。その真剣な様子に、どうやらドラマは終わったのだと思って宏人はホッとした。散々迷った割には呆気ない終焉であった。しかし、それが少しの時間であったとしても、おかしな人間に付き合って茶番を演じたという事実は消えない。これは自分史に燦然と輝く汚点になるだろう、と宏人は顔を暗くした。
「別にいいけどさあ、一つ頼みたいことあるんだけど」
宏人の気も知らぬげに、そうして事実知らないのだろうが、信吾が明るい声を出した。
宏人は王女に忠誠を誓う騎士のような膝立ち状態を直し、立ち上がった。
信吾はモデルガンを机の上に置くと、へへへへ、と照れたような笑いを見せた。まことに気色悪い。宏人が、頼みとやらを言うように促すと、ボソボソとした声で「好きな女の子がいるから協力してもらいたい」などという予想だにしていなかった話をし出した。
「で、オレにどうしろって？」
自慢じゃないが宏人は、これまで女の子とのお付き合い経験が無い。恋のキューピーちゃん役を命じられてもうまくできる自信など無い。
「別にそんなことはしてくれなくてもいいんだよ。ただ、紹介してくれればさ」
「紹介？」
これも自慢にならないが、宏人には親しい女の子の友だちもいない。紹介しろと言われても困る。と、そこで、宏人の脳裏をキューピーンと駆け抜けるひらめきがあった。ま、まさか、こいつ……。
――藤沢のことが好きなのか？
宏人が現在まともに話をしている女の子は志保しかいない。志保

を紹介するなら話は簡単である。これは見物かもしれないませんなあ、と宏人はわくわくした。浅井信吾がグループに入るために出した交換条件が自分と仲良くしたいことだと知った志保はどういう顔をするだろうか。苦り切った顔をするに違いない。その顔を思い浮かべて楽しんでいた宏人だったが、

――何だ……？

不意に胸が重くなって、楽しい気分が沈んだ。思わず胸を押さえた宏人だったが、この苦しさの原因はあんまり追求しない方が良いような気がして、信吾に対し彼の要求通り、志保を紹介することを約束した。

「は？　藤沢？　お前、何言ってんの？」

信吾はきょとんとした顔である。

「は？」はこちらである。志保のことが気になってるんじゃないのかと確かめると、信吾は露骨に嫌な顔をした。

「そんなわけないだろ。なんで藤沢なんか。あんなブス」

宏人の腕は信吾の胸元に伸びた。ハッと気がついたときはもう遅かった。それはほとんど反射的な行動だったのである。宏人の手は、信吾の胸倉をつかんで吊るし上げるような格好になった。

「倉木？」

苦しいというよりは、何が起こっているのか分からないような様子で信吾が口を開いた。宏人にしてもそんなことをした理由が分からないので、どうしようもない。かと言って何も言わずに手を放すわけにはいかず、数秒気まずい沈黙を流した上で、

「おい、ダチの悪口を言うんじゃねえよ！　次言ったら、殺すぞ」

と芝居がかったドスを効かせた口調で言った。

信吾の目に納得したような色が映った。さっきの三文芝居の類だと思ったのである。「に、二度と言いません、倉木さん」と、下っ端の不良のような声を出した信吾に、「気をつけろ」と一言言って、宏人は手を放した。

「結構ノリいいなあ、倉木も」

信吾は満足そうに言った。どうやら誤魔化せたようで宏人は胸をなで下ろした。しかし、果たして誤魔化す必要があったのかどうか、と言えば評価が分かれるところであるが、感情に任せて行動したことで一度失敗したことがある宏人にとっては、誤魔化しは適切な行動であるように思われた。

宏人は、志保でなければ誰を紹介すれば良いのか尋ねた。そうして、クラスメートの中にも部活の仲間の中にも紹介するほど仲良い女の子はいないことを断っておいた。

「倉木先輩だよ」

「姉貴？」

盲点である。姉のことは女の子の中に入れていなかった。

「おれ、倉木先輩のことが好きなんだよなあ」

体をくねくねさせながら、信吾は宣言した。

「チョー美人だし、優しいしさあ」

姉の評価についてはともかくとして、信吾には一ミリの可能性も無いことはハッキリと言わなければならない。

「何でだよ。先輩、付き合ってるヤツいないんだろ？」

「付き合ってる人はいないけど、好きな人はいるんだよ」

「ああ、それ、あれだろ。西村先輩。でも、正式に付き合ってるわけじゃないんだろ。おれ、そういうの気にしないからさ」

――お前が気にしなくても、こっちが気にするんだよ！

そう宏人は言いたかった。姉が隣家の賢少年の事を慕っている…というより、確実に将来の結婚予定相手としていることは、公然の秘密である。それにも関わらず、他の男を紹介するなどという無神経をしたら、姉の逆鱗に触れてしまうことは確実である。

「諦めろ、浅井。姉貴は何があっても賢兄以外の人に興味を持つことはない」

「紹介だけしてくれればいいんだよ。そうしてくれれば、お前たちのグループに入ってもいい」

じゃあ別に入らなくてもいいよ！　と宏人は癇癪を起こしそうに

なった。先ほどの志保への侮辱の件といい、どうにも好きになれそうにない男である。嫌いな人間を入れるのでは新しいグループを作った意味が無い。しかし――

「分かった。ただし、期待はするなよ」

宏人は請け合った。よっぽど断りたかったのだが、子どもの使いをやる気はなかった。志保が信吾を必要としているのなら、その必要性を満たすのが今の宏人の務めである。宏人は、もはやラノベ趣味を偽装する必要も無くなったので、急用を思い出したと言って信吾の部屋を後にした。

第１１３話：加藤家の恒例行事

「お兄ちゃん、起きて。お兄ちゃん！」

何かしら悪い夢を見た気がして、呼び声に応じて目覚めてみたら、そこもまた悪夢の内であった。

怜（レイ）は、ぼんやりとした朝の光の中で自分を覗き込む少女の顔を見た。そのつるりとした卵型の顔は、優美さや淑やかさとは無縁の造形であって、いたずらが三度の飯より好きであるような小生意気な微笑で満たされていた。妹の都（ミヤコ）である。

怜は二三度目をぱちぱちさせて眠気を払おうとすると、ベッドの上に体を起して時計を見た。午前六時である。アラームは七時半にセットしてある。いつもは六時にセットしてあるのだが、今日は休日、少しゆっくりと寝るために一時間半余計にベッドの中に潜り込んでいられるように細工しておいたのだ。にもかかわらず、平日と同じように起きられる不思議。たまの休日にちょっと大目に寝ることさえかなわない我が身を、怜は憐れまないようにした。そうして、最愛の妹に――というのも、妹は一人しかいないので、「最も」という形容をつけても論理的に間違ってはいないハズ――どうして頼んでもいないモーニングコール役を自らイソイソ行ってくれたのか、尋ねた。

「今日はアウトレットモールに行く日でしょ」

「答えになってない」

「早く準備しようと思って早く起きたの」

「頼む、もっと分かりやすく言ってくれ。お前が自分の準備をするために早く起きたってことは分かったけど、だからって何でオレまで起こすんだ？」

「ヒマだったから」

怜は妹の意図を完全に理解した。そうして、そもそも理解する必要などなかったのだということに気がついた。なにせ妹は兄に対す

る思いやりという気持ちを全く持たない子であり、彼女の兄に対する行為はすべからく兄を害せんとする悪意に満ち満ちている。それが悪意であるということだけ分かれば、十分。その中身まで聞く必要は特に無い。

「幸せだねえ、お兄ちゃんは」

今まさに幸せを壊されているところなのに何を、と思う怜に、

「だって、身支度をしっかりと整えられるように早めに起こしてくれる心優しい妹がいるんだもんね」

今さっき「暇だったから」と言ったばかりの口でしゃあしゃあと言ってのける都。前言を華麗に翻して恥じない妹を恥ずかしく思った怜は、彼女から離れるためベッドから下りると、机の上に用意されている英語の問題集を手に取って部屋を出た。後ろから妹が追ってくる。

「お兄ちゃん」

「何だよ」

「お腹空いた」

「冷蔵庫が暗号付きでロックでもされてるのか？」

「何言ってるの？　寝ぼけてるの？」

怜は婉曲な表現を改め、もっと直截（ちょくさい）に言うことに決めた。自分で冷蔵庫を自由に開けて中に入っているものを何でも食べろ、と言ってやる。すると妹は階段を降り切るまで無言になった。分かってくれたか、などと胸を撫でおろすようなことを、怜はしない。彼女とは長い付き合いなのである。それが証拠に、ダイニングに入ってテーブルに参考書を置いたところで、

「お兄ちゃん。今日はわたしのご機嫌を取った方がいいと思うよ」

妹の静かに脅迫するような声が、怜の背を打った。

怜は冷蔵庫を開けて水の入った容器を取り出しグラスに注ぐと、ごくごくと喉を潤した。それから、トーストでいいのか、と妹に尋ねた。

「ちょっと固めに焼いてね。二枚。塗るのはバターとオレンジマー

マレード。バターは薄めに、でもトースト全体に隅々まで塗って。マーマレードの方はたっぷりね。それから、ハムエッグとサラダも作って。飲み物はアップルジュース。食後に、バナナとミルクティね。ミルクティは砂糖あり。でも、甘すぎないようにして」

こういう要求に毎日ハイハイと答えているのだから、母とは偉大である。世の中で最も偉大な存在ではなかろうか。母親であることができたら世の中の大抵のことには耐えられるに違いない。特に、都のような子の。

朝の清々とした光が室内を白く染めている。

しばらくして妹の分まで朝食を用意した健気な兄に、

「うんうん、そうして素直にしておいた方が身のためだよ」

かけられたのはお礼の言葉ではない。怜は妹を無視して、英語のテキストに向かった。朝食を作ってやったのはけして妹の脅しめいた言葉に屈したわけではない。単に面倒になったのである。妹とあれ以上言い争う時間と労力があるのなら、それを料理の方に使ったほうが有効、と考えを改めたのだ。

「何で身のためなのか、聞きたい？」

「興味ない」

怜はトーストを食べながら、英語の長文の復習をしていた。昨夜読んだ文章をもう一度読み直しているのである。食べながら物を読むのは行儀の良い所作ではないが、礼儀作法を守るだけでは高校には入れない。読んでいるうちに疑問点が出てきて、テーブルの上にあったペン立てからペンを取るとノートにメモを書き込んだ。

先ごろ行われた一学期末の試験の得点は芳しいものではなかった。順位など詳しいところはまだ出ていないが、点数さえ分かれば十分である。勉強はかなりしたはずなのにそれが数字になって現れない。努力したものが成果にならないときの悔しさというものを怜は初めて味わっていた。苦い味がした。

「まったく勉強しなかったお兄ちゃんが、今じゃ、可愛い妹との会話よりも参考書と会話するようになるんだもんね。三年生って大変

だなあ。わたしは今から勉強するようにしようっと」

是非そうして欲しいものだ。妹が来年受験生になったとき、受験のストレスからティッシュ箱を投げつけられたり、金切り声で叫ばれたり、壁を蹴られたりしたらたまらない。

朝食を食べ終わった怜は、妹にバナナとミルクティを給仕してやった。「お兄ちゃん、砂糖入れ過ぎ！」というお褒めの言葉をたまわったのち、怜はシャワーを浴びにバスルームへ入った。今日はこれから両親と妹と一緒に隣市のアウトレットモールに行って、服を買うことになっている。これは、加藤家恒例の行事である。

それに怜のカノジョも同行することになっているのは、妹のわがままの所為だった。妹は、もう両親と一緒に行動するような子どもではないので「お金だけくれればいい」と主張したが全く両親から認められないので、せめて同行者をつけて道中を華やかにしようと企んだのだった。怜としては、妹に付き合わせることなど罪悪であるとさえ思っているのだが、環（タマキ）は快くＯＫしてくれた。頭の下がる思いである。いずれ何かお返しする必要を怜は感じた。

シャワーを浴びて服を着替え、リビングでコーヒーを飲んでいると、両親が起きてきた。現在、七時半前。本来ならこの時間まで優雅に寝ていて、母が用意しくれた朝食をふわふわと食べ、それから加藤家の小旅行に備える、というスケジューリングであったのに人生はなかなか予定通りにはいかないものである。

「せっかく川名先輩が来てくれるのにどうしてそんな格好なの、お兄ちゃん？」

テレビの朝のニュースに飽きた妹が、ヒマつぶしの材料を兄の服装に求めた。怜の服装は、ポロシャツにタイを合わせ、下はデニムのジーンズという、確かに街頭でオシャレ雑誌の読者モデルに誘われることは無いだろうが、道行く人々からヒソヒソと後ろ指を指されるような格好でも無いと思われた。

「川名先輩、可哀想。いっつもそんな格好してる人と歩かなきゃいけないなんて」

しかし、妹の評価は違うらしい。
　怜は妹の評価など気にしなかった。
「じゃあ、今日はオレの服をタマキに選んでもらうことにするよ」
　軽く返すと、
「お兄ちゃんって将来奥さん無しじゃ何にもできなくなるタイプだね。『おい、オレのハンカチはどこにやった、靴下は？』みたいな」
　ああ言えば、こう言う妹である。ひとりケタケタと笑う彼女のそばで、
――そんなタイプがあってたまるか。
　怜はコーヒーをすすった。タイプというのは人間の類型という意味だろう。そんなピンポイントな類型があるわけないと思っていた怜の耳に、コホコホとむせるような音が聞こえてきた。ダイニングテーブルの方からである。そこには父と母しかいない。怜は音の方に目を向けるような無作法をしなかった。
　環は約束の時間より五分前に現れた。それを一番に出迎えた都は、「川名先輩、今日はありがとうございます！」と意中の男性のハートを撃ち落とさんとするかのようなとびきり愛想の良い声を上げた。そんな声が彼女のどこで製造されるのか不思議である。少しはそういう声を兄に向けてみろ、とは怜は思わなかった。普段の妹を知っている分、そのギャップに気持ちが悪くなるだけである。
　妹の後ろから近づいていった怜の目に、環の姿が映った。怜は、おや、と思った。環は大分地味な服装をしていた。梅雨空のような色をしたグレーのワンピースを身につけて、黒髪にちょうちょ型の青いリボンを留めてワンポイントとしている他には装飾が無い。何だか華やかさに欠けるような気がするのは気のせいか。
――ミヤコのためか。
　環は都に気を遣ったのだろうと怜は思った。自分の影に、今日の主役である都を隠さないようにしようという心づかいである。怜は心の中で環に頭を下げたが、よくよく考えてみれば妹のために感謝の意を表すこともないのであった。それにそもそも、妹を主役扱い

してやる必要も特に感じなかった。
　環は、玄関先で父と母に挨拶をすると、手に下げていた紙袋を、
「母に言付かりました。頂き物ですが皆さんで召し上がってくださいとのことです」と穏やかに言って、大いに父母を恐縮させ、それからようやく怜に目を向けた。
「おはよう、レイくん」
　その声は夏の朝の光のように軽さと明るさを合わせもっており、怜の心をふわりとさせた。面倒であるとまでは思わないがあまり面白くもない行事に色がついた瞬間だった。怜は妹のためではなく自分のために環に感謝した。

第１１４話：アウトレットモールまでの一幕

先に車に乗っているように言われた怜（レイ）は車の鍵を受け取ると、妹とカノジョを連れて玄関から外に出た。空にはところどころ雲が浮かんでいるものの、よく晴れていて行楽日和と言える。車は、父によって既にガレージから路上に出されている。入念に洗車されているようで、そのシルバーの車体は朝日を受けてピカピカ輝いていた。キーを使ってそのドアを開け、それから、中に入ろうとしたところで、怜は、

「お兄ちゃん！」

背後から可愛らしい妹の怒鳴り声を聞いた。

ステップに足をかけたところで怜が振り向くと、

「『レディファースト』って言葉、知らないの？」

妹は腰に手を当てて不満げである。そのあと、

「どうせお兄ちゃんはわたしのことを女の子だとは思ってないんでしょ。『どこにレディがいるんだ？』なんていうつまんないセリフ、言いたいなら言ってもいいよ。でも、川名先輩はどうなるの？　まさか、先輩まで女の子じゃないなんて言うつもりはないでしょうね」

勝ち誇ったかのように批難を続ける妹を無視して、怜は車内に入ると周囲をざっと改めた。外と同様、中も綺麗になっていてチリひとつ落ちていない。まして危険物は見えない。怜は車から出ると、

「どうぞ」と言って、二人のレディを車内へ誘った。妹は小首を傾げるようにしたが、怜には妹に自分の行動の意味を知って欲しいとは全く思っていない。ちなみに、カノジョに対してもそう思っているのだが、残念なことに環（タマキ）の口元は少し綻んでいるようだった。

「川名先輩、一番後ろに乗りましょ。二人だけでお話できるから」

気を取り直したように言う妹を怜は止めて、真ん中の列に乗るように言った。

「何でよ？」

「レディファーストが聞いて呆れるな。オレが後ろに乗るから、真ん中に乗れ」

滅多に妹に対して強要しない兄が珍しく真剣な声を出すものだから、都（ミヤコ）は鼻白んだ様子で言われたままにした。

「お兄さんは追突事故のことを心配してるのよ。最後尾よりは真ん中の列の方が安全でしょ」

なおもぶつぶつ言う妹に対して、隣から環がそっと声をかけた。妹は納得したようにうなずくと、「たまにはお兄ちゃんも気が利くじゃん」とぞんざいな褒め言葉を投げてきた。繰り返すことになるが、怜は自分の行動の意義を妹に知ってほしいとはカケラも思っていない。怜は「いちいち説明しないように」という意を込めて、環に視線を送ったが、彼女は澄ました顔である。意図が通じなかったか、通じたけれど聞き入れる気は無いのか。明らかに後者であると怜は思った。

すぐに父と母が現れて、それぞれ運転席と助手席が占められた。

「みんな、シートベルトを締めるようにな」

それがスタートの合図である。ワゴンが走り出した。開け放された窓から、夏の風が吹いた。

「タマキ、寒くなったら膝に当てろ」

怜は、妹と話している環の横顔に向かって声をかけると、タオルケットを差し出した。

すかさず、都が言う。

「バカじゃないの、お兄ちゃん。今何月か分かってるの？」

「七月だろ。お前に教えてもらう必要はないよ」

「じゃあ、そんなのただ暑苦しくて邪魔になるだけだってこと、どうして分からないの？　それとも今日これから雨でも降って寒くなるの？」

「雨が降ろうが、降るまいが関係ないよ」

麗しい兄妹の言い合いを縫って、環はタオルケットを受け取った。

「ありがとう、レイくん」

「ほら、母さんにも渡してくれ」
そう言って、怜は折りたたまれたタオルケットを妹に差し出した。
妹は不承不承、それを受け取ると助手席の母に手渡した。
「急に息子が気が利くようになったのはどうしてかしら？」
と母がからかうように言うと、
「もちろん、タマキさんのおかげだろう」
父は真面目に返し、開け放していた全ての窓を運転席のスイッチで閉めて、クーラーをつけ始めた。
妹は自分の分のタオルケットを受け取りながら、「コレ、どうしたの？」と唐突に曖昧な質問をした。
「どうしたって、何が？」
「見ない柄だけど、ウチにあったヤツ？」
「いい加減にしろ、ミヤコ」
昨日のうちに近所の衣料品店で買っておいたのだ。家にあるものの中に新しく下ろすものがあるかどうか分からないし、第一それを知りたければ母に言わなければならなくなる。そんなことをするくらいなら、大した値段ではない、小遣いを叩いて用意した方がマシだった。
「お兄ちゃんっていつからそんなマメな人になったの？」
「多分、お前が生まれてからだ」
「どういうこと？」
「妹の世話をしていれば、いやでもマメにならざるを得ない」
「わたしの世話ですって？」
都は、バカも休み休み言え、と言わんばかりの口ぶりである。こういう妹だからこそ世話がかかるわけなのだが、それを言っても詮無きこと。怜は口をつぐんでおいた。
環がクスクスと忍び笑いを漏らしていた。それから、
「お兄さんと仲いいんですね」
と都に向かって言う。
「ええっ！　そんな風に見えますか？」

「ハイ」と環はうなずいた。
「じゃあ、改めないと。人前ではあんまりしゃべらないようにします」
　これまで見たこともないほど真面目な横顔で都は言うと、怜に向かって、「お兄ちゃんもわたしに話しかけないでね」と言った。怜は重々しくうなずいた。願ったりかなったりである。というか、そもそも妹にこちらから話しかけることなどほとんど無いのだ。あちらから話しかけてくることがほとんどである。
　都が兄をうちやって環だけを相手にし始めると、怜はシートに背を預けた。
　目的のアウトレットモールまでは、一時間ほどの道のりである。国道を使って大路を行くこともできるが、父は毎回裏道を使っていた。国道は一本道なので運転するには簡単なのであるが、景色が良くない。その点、裏道は山の中を抜けるので、今の時期であれば緑も綺麗である。以前に一度環を車に乗せたことがある父は、彼女が車酔いしないということも分かっていたので、その点も心配していないのだろう。
　怜はあくびをかみ殺した。車内の温度は丁度良くて、今日誰かさんのおかげで早めに起こされたことも手伝って、車に揺られていると眠たくなってきた。これが二人きりのデート中であれば顰蹙（ひんしゅく）ものだろうが、今日はデートではない。しかも、カノジョの相手は妹がほぼ独占して、まったく兄に話を振る気もないようなので、怜は安心して瞼を閉じた。暗くなった視界に、遠くの方から二人の少女の会話が聞こえてくる。
　妹のどうでもいいような話。テレビのアイドルグループやドラマ、流行の歌、駅前にできた新しい店などの話を、環は時に質問を交えたり相槌を打ったりしながら聴いていた。人に気持ち良く話をさせるすべを心得ているのである。さすがにソツがない。
「――先輩の妹さんも可愛いですよねー」
「ありがとう。でも、この頃、あんまり話してくれないの。年の近

い姉ってうっとうしいのかな」
「えーっ、勿体ない。わたしだったら、先輩みたいに綺麗で優しいお姉ちゃんがいたら、何でも相談するけどなあ……あーあ、先輩ほどじゃなくても、わたしもお姉ちゃんが欲しかったなあ。お母さん！　何でお兄ちゃんなんか産んだの？」
　妹はとんでもないことを言い出した。それに対する母の答えは、
「仕方ないでしょう。生まれてきたんだから」
　というこれまたとんでもない答えである。この娘にしてこの母あり、というところであろう。いくら慎み深い怜でも、そんなことを思わずにはいられない。
「仕方ないことないでしょ。がんばればどうにかなったんじゃないの？」と妹。
「なりません。こればかりは」
　こういうときに助けに入ってくれるのが父の役目ではなかろうか、と怜は思ったが、父は息子のフォローをしてはくれなかった。運転に夢中になっているのだろうか。それとも、女性同士の会話に入っていく間が分からないのだろうか。いずれにせよ、父が息子のバックアップをしてくれないのは、日頃のコミュニケーションの無さが災いしているのではないかと怜は思った。今度、父の背中でも流してやったほうがいいのかもしれない。そんなことを考えていたとき、
「わたしはレイくんが生まれてきてくれて良かったです」
　と、まるで分厚く暗い雲を割って射し込む光のような救われる声を出してくれたのは、もちろん、この場で唯一怜の味方である少女だった。
　車中は一瞬、しん、と静まりかえった。
「川名先輩」
「はい？」
「ホントーにお兄ちゃん『で』いいんですか？」
「ミヤコ」と昼日中から艶のある話を始めようとしている娘に、母がたしなめるような声を出したが、妹は気にしなかった。実際の

ところ、妹が気にすることなどほとんどない。彼女が気にするのは自分の体重くらいのものである。

「お兄さん『が』いいんです」

先の「生まれてきてくれてありがとう」発言といい、妹に対してだけならまだしも、近くに母と父がいるこの場で、よくもそういうことが口に出せるなあ、と怜は感じ入った。気恥ずかしい思いよりも感心の方が勝った。自分にはとてもできそうにない。それが環との人品の差なのだろうかと、怜は今後の一層の精進を胸に誓った。

「お兄ちゃんが先輩に好かれるなんて、エビでタイを釣るっていうのはこういうことを言うんですね」

と都が微妙極まる諺を引用した。どこまでも失礼な子である。

「でも、お兄さんは学校でとても人気があるんですよ」

「えー？　ホントですか？」

「はい。だから大変です」

「信じられない」

不本意ながらそれは妹と同じ意見だった。ごくたまに意見が合うと思えば、自分に対する否定的評価なのだから、しょうもない。環はなおもカレシのアピールを続けてくれたが、それが彼女の誠心から来るのか、それとも遊び心から来るのか、怜はあえて考えないようにした。

第115話：プレゼント選びは慎重に

二人の女の子の話し声を子守唄代わりにして、というよりも、その話し声から逃れたくてと言うべきか、どうやら眠ってしまったようである。軽く揺すぶられるようにして目覚めた怜（レイ）の前に、少女の花顔が微笑みを開いていた。

「着きましたよ」

「……環（タマキ）か？」

怜は寝ぼけまなこをこすりながら尋ねた。

「はい」と環。

「どうりで都（ミヤコ）にしては綺麗すぎると思った」

怜は手であくびを押さえるようにすると、「丸聞こえなんですけど」という妹の言葉を無視した。妹と環が車を降りるのに続いて、怜も降りてからドアを閉めた。

「先輩と二人でいるときは、いつも先輩のことを『綺麗』とか『可愛い』とかそんなことばっかり言ってるんだとしたら、お兄ちゃんを見損なってたってことになりますけど」

妹がしかめっつらで言った。

「今の今まで兄を見損なってる自覚が無かったのか。恐ろしいな、その無神経」

今度は怜の言葉が無視された。仲良きことは美しきかな。

「先輩と二人きりのときは歯の浮くようなこと言ってるんですか、ウチのお兄ちゃんは？」と都。

環はほっそりとした首を静かに振って、「いいえ、そんなこと全然言われたことありません」と都にはっきりと答えてから、ちらりとカレシに意味ありげな目を向けた。それを聞いた妹は、兄に対するマイナスイメージを崩さずに済んでほっとした顔を見せたが、一方、怜はカノジョの視線に不穏なものを感じ取って軽くげんなりした。面倒な宿題を押しつけられた気分だった。

二人の少女は昼の明るい光の下、駐車場の中をモールの建物入り口へと向かって歩き出した。その後に、母と父が優しげな顔で続く。まるで家族のような趣である。ひとりあとからついていく怜は、何だか自分だけ除け者にされているような気がして、非常に清々とした気分になった。今日はこのまま自分のことはさっぱりと放念してもらいたい。環なら十二分に自分の代わりを務めてくれるだろう。初めて彼女を家族に紹介したときは、多少はフォローする気もあったが、今ではそんな気は全くなくなっていた。おどろくほど家族に馴染んでいて、そうしてそれを大して驚いていない自分に怜はもう慣れてきていた。

アウトレットモールの中にはたくさんの人だかり、怜たちのような家族連れや、カップル、友だち同士などでひしめき合っていた。そのゴミゴミ感と熱気に、入った瞬間に出たくなった怜だったが、そういうわけにもいかない。都のことは環に任せるとして、自分の服は母に任せるとして——ちなみに自分の服を、中学三年生にもなって母親に選ばせて特に気にしないような男を環はどう思うだろうか、と怜は思わないでもなかったが、いちいち何着も選ぶのは面倒な上、これも親孝行の一環であろうという思いもあり、更には「環の前で見栄を張っても仕方がない」というなぜか敗北感にも似た諦観があって、買う服は母に一任することにしたのだった——ところで、怜にもやらなければいけないことがある。

「ミヤコに付き合ってくださるお礼に、タマキさんに何かプレゼントでも買って差し上げなさい」

昨夜の母の言葉である。

言葉とともに、ちゃんとお金も渡してくれた。

母は本当は環に服をプレゼントしてあげたかったようだが、アウトレット店で選ばせるのも気が引けるし、何より、カレシの親から何か貰うよりもカレシ自身からプレゼントしてもらった方が、それは嬉しいに決まっているという判断をしたということだった。さすが年の功だと怜は思った。もちろん心の中で思っただけで、口には

出していない。

　というわけで、別行動である。連絡は携帯メールで取り合うことにした。既に、都は環を引っ張るようにして、離れていった。お気に入りの衣料品店にでも行くのだろう。母と父もその場を離れた。適当に店を見て回り、テキトーに怜の服や小物を選んでくるという。怜は、建物入り口付近にある店内全体の見取り図と睨み合いながら、自分の目指すべき店を見定めた。出発。

　それから数分後、人波を泳ぎながらたどり着いたのは小物やアクセサリーの店だった。一面に小さく可愛らしくほわほわっとしたものたちがぎっしりと並んでおり、その威容は怜の足を止めた。店内にいるのが、実際に夢を見ているかはともかくとしても、「夢見る」という形容をつけられるにふさわしい年代の少女達であるというのも、怜に二の足を踏ませた。男の子もいることはいるのだが、何だか居心地が悪そうで、まるで人見知りの子どものようにもじもじしている。しかも、彼らはカノジョの付き添いで来ているだけのようであって、男ひとりでいるのはどうやら怜だけのようだった。

　入口でためらっていると、後ろから新たなカップルが現れたので、怜は意を決して中へと進んだ。広めにとられた通路を進み、様々なカワユイものたちを物色する。しかし、一体何を選べばいいのか分からない。カノジョの好み一つ分からないその無神経さに、怜は、自分自身に対して腹を立てた。しかし、好みどころか、そう言えば、もう付き合って半年になるというのに環のことはほとんど分からないのだった。そもそもどうして彼女が自分を選んだのか、そこからして分からないのだから、まして他のことは知る由もないのである。分からなくて当然！

　そういう自棄（やけ）気味の開き直りは、現状を全く改善しなかった。ゆうに三十分ほど店内を見て回ったが、まったく決まらない。選択肢が多すぎる上に、決める基準がないのだから、ただ時間だけが過ぎていくという展開になるのは当たり前である。頼りになるのは自分のセンスのみであるが、当てにできるようなものは持ち合わせてい

ない。ほとほと困り切った怜は、いっそ環をここに呼び出して自分で決めてもらおうかとも思ったが、思いとどまった。このプレゼントは、今日のお礼であるとともに、環への最初のプレゼントでもある。

最初のプレゼントを自分で選ばず、選んでもらったりなどしたら、この先――もちろん「この先」がいつまであるか分からないにせよ――ずっと批難されそうな気がする。むろんのこと環は慎みを知る女の子であるので、自分でプレゼント一つ選べないような男の子に対しても、はっきりと口に出して批判するようなはしたないマネはしないだろう。しかし、その態度のはしばしで語るに違いない。怜にできるのは、その無言の声が聞こえない振りをすることだけになってしまう。それは、今の状況以上に面倒そうだった。

ということで、再び色んな小物に手を伸ばし始めた怜だったが、空しくもう三十分を費やすことになった。決まらない。これほど何かが決まらなかったことは絶えて無い。いっそのこと、「キミにはどんなものでも似合うよ」的なことを言うことを条件に、いい加減な物を選ぼうかとも思ったが、そんな誤魔化しが通用する相手かどうか考えれば、答えは明確にノーである。あーでもない、こーでもない、と手に取りながら見比べる怜。こういう苦行を女性は嬉々としてやれるのだから、どうかしてる。怜などは端的に時間の無駄なのではないかと思うのだが、母にしろ妹にしろカノジョにしろ、迷っている時間が楽しいようにさえ見えるのだから、根本的に女性というのは男とは別の価値観で生きているのだと言わざるを得ない。

「何かお探しですか？」

隣からかけられた声は女性店員のものだった。男ひとりで一時間も店内をさまよっている姿を哀れに思ったのか、はたまた怪しく思ったのかは定かではないが、これぞ天の采配である。店員にアドバイスをもらうくらいなら、責められることもないだろう。怜は率直に、女の子にプレゼントするものを探している旨を明らかにした。

店員の女性は心得顔を作ると、店の人気商品であるバッグやブレ

スレット、マグカップ、携帯のストラップ、ぬいぐるみなどを見せてくれた。どれもこれも売れ筋であるというので、怜はようやく人心地ついた気持ちだった。どれを選んでも大丈夫というお墨付きを得たようなものであるので安心である。

ほっとした怜の目がふと、シルバーの輝きをとらえた。ガラスケースの上に、鳥をかたどったような小さなアクセサリーが並んでいる。ペンダントトップの見本であると、女性は教えてくれた。怜はこの店に来て初めて興味を引かれた思いだった。形は極度にデフォルメされたりしておらず、繊細で優美である。

「チェーンは別売りになります」

女性のニコニコした笑顔が高いものを売りつけられる嬉しさからのものでないことは、値段を聞いて理解できた。母からの小遣いで買える範囲である。怜は、鳥の中から一羽選ぶと、シルバーチェーンと一緒に買って、店を出た。散々悩んで店員を巻き込んだ挙げ句が一瞬の選択なのだから、何だかそれはそれでいいような悪いような微妙な心持ちだった。売れ筋として紹介されたものをやめた自分の判断を信用して良いものかどうかは分からなかったが、その評価は環に任せるほかない。しかし、その前に一つやることがあった。

怜は、母にメールを打って居場所を訊くと、男子用衣料品店に合流してから、事の上首尾を伝えた上で、今回の件の小遣いとして貰ったお金を返した。母はキツネにつままれたような顔をして、それから、

「ちゃんとしたものを買えるようにあげたお金だったのよ」

と、息子が、自腹を切る気になる程度の安い買い物をしたのだと決めつけて難色を示した。母は、無駄遣いにはうるさいが、お金というものは必要なときには必要な分だけ思いきり使わなければならない、という考えの持ち主である。

怜は、最初のプレゼントなので、毎月貰っているお小遣いで溜まっている分から出したいのだということをいちいち言わなければならない自分を哀れんだ。母からのカンパを素直に受けたのは、もし

ものときのことを考えたからである。それを聞いた母は、へえ、と感心したような声を出してから、ショッピングカートに入っていたTシャツを息子に当てて、うんうんと満足げにうなずいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3309f/

プラトニクス

2011年1月1日19時25分発行